

栃木県埋蔵文化財調査報告第337集

東谷・中島地区遺跡群11

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡

(1区・2区・3区) (1区・2区・3区)

2011.3

栃木県教育委員会
財)とちぎ生涯学習文化財団

とうや なかじま
東谷・中島地区遺跡群11

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

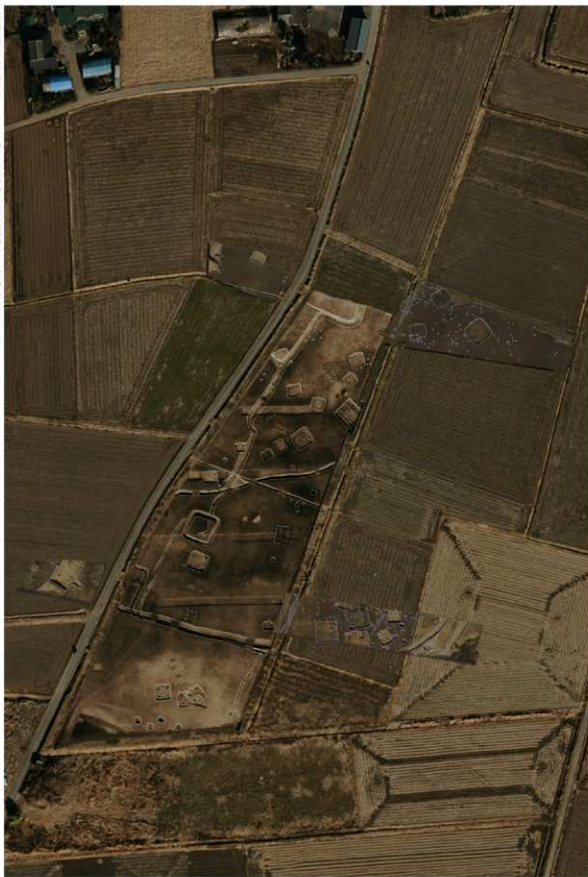
すなたうばぬま すなたたき
砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡
(1区・2区・3区) (1区・2区・3区)

2011.3

栃 木 県 教 育 委 員 会
(財)とちぎ生涯学習文化財団



砂田姥沼遺跡 1区・2区・3区調査範囲合成写真 (調査区上空より)



砂田姥沼遺跡 1区・2区・3区全景合成写真 (調査区上空より)

序

東谷・中島地区遺跡群は、栃木県域の中央部である宇都宮市南部から上三川町北部に位置します。この地域は、なだらかに広がる低台地と肥沃な沖積地に恵まれているため、権現山遺跡、杉村遺跡、磯岡北遺跡、西刑部西原遺跡などの原始・古代の集落跡と、中島笹塚古墳群や磯岡北古墳群をはじめとする多くの古墳群が所在します。

このたび、都市再生機構による土地区画整備事業に先立ち、事業地区内に所在する 12 遺跡の取り扱いについて、関係機関との協議の上、記録保存を目的とした発掘調査を行いました。

本報告書は、平成 10 年から平成 19 年にかけて調査を実施した砂田姥沼遺跡、砂田瀧遺跡にかかわる調査成果をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広く御活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書作成に至るまで、多大なるご協力をいただきました都市再生機構、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会をはじめとする関係機関、並びに関係各位 に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 23 年 3 月

栃木県教育委員会
教育長 須藤 稔

例 言

1. 本書は、独立行政法人都市再生機構による東谷・中島土地地区画整理事業に伴い発掘調査が実施された東谷・中島地区遺跡群の内、宇都宮市砂田町字姥沼・字瀧・字滝に所在する埋蔵文化財砂田姥沼遺跡（1区・2区・3区）及び砂田瀧遺跡（1区・2区・3区）の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は栃木県教育委員会事務局文化財課の指導のもと、財団法人とちぎ生涯学習文化財団が独立行政法人都市再生機構と受託契約を締結し、埋蔵文化財センターが実施している。区画整理事業地内の各遺跡の発掘調査は平成6（1994）年度から平成19（2007）年度まで実施した。本報告書の遺跡は平成7（1995）年度、12（2000）年度に試掘調査を、平成10（1998）年度に砂田姥沼遺跡（1区）、平成17（2005）年度に砂田姥沼遺跡（2区・3区）を、平成12（2000）年度に砂田瀧遺跡（1区）、平成16（2004）年度に砂田瀧遺跡（2区）、平成19（2007）年度に砂田瀧遺跡（3区）の調査を実施した。また、平成22（2010）年度にこれらの遺跡の整理作業、報告書作成作業を実施した。

3. 東谷・中島遺跡群の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成6年度 菅谷 豊、塚本師也、塚原孝一

平成7年度 中山 晋、稲木 実、関口正明、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、安永真一、藤田直也

平成8年度 中山 晋、稲木 実、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、藤田直也

平成9年度 初山孝行、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、塚原孝一、石川幸弘、高野瑞枝、藤田直也

平成10年度 初山孝行、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、増山孝之、山本訓志、中村享史、

塚原孝一、内山敏行、石川幸弘、高野瑞枝、柿沼利幸、藤田直也、大島美智子、田中裕子

平成11年度 田代 隆、松本 敏、名越侍郎、岡部正晴、小島昭寿、後藤信祐、中村享史、塚原孝一、

内山敏行、和久井宏行、高野瑞枝、柿沼利幸、上原康子、藤田直也、大島美智子、田中裕子、

（発掘補助員）佐藤 齊

平成12年度 田代 隆、名越侍郎、江頭 進、中村享史、内山敏行、上原康子、藤田直也、矢野里織、

（発掘補助員）佐藤 齊、田崎真理

平成13年度 田代 隆、江頭 進、中村享史、内山敏行、江原 英、谷中 隆、藤田直也、矢野里織、

（発掘補助員）田崎真理

平成14年度 田代 隆、江頭 進、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、藤田直也、矢野里織、

（発掘補助員）田崎真理

平成15年度 田代 隆、小出功一、馬場秀典、中村享史、内山敏行、谷中 隆、藤田直也、塚田浩久、

（発掘補助員）岡田 圭、田崎真理

平成16年度 田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、

（発掘補助員）田崎真理

平成17年度 田代 隆、津野 仁、小出功一、馬場秀典、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、

（発掘補助員）田村雅樹

平成18年度 田代 隆、津野 仁、篠原浩恵、内山敏行、谷中 隆、中山真理、

（発掘補助員）津野田陽介

平成19年度 後藤信祐、大瀧貴史、石田善成、内山敏行、谷中 隆、今平昌子、宮田宜浩、峰崎武昭、

田村雅樹、（発掘補助員）津野田陽介

平成20年度 後藤信祐、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成21年度 塚原孝一、内山敏行、今平昌子、亀田幸久

平成22年度 内山敏行、今平昌子、亀田幸久、藤田直也

4. 砂田姥沼遺跡、砂田瀧遺跡の発掘調査は以下の担当者により実施した。

平成7年度（砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡試掘） 稲木 実・増山孝之

平成10年度（砂田姥沼遺跡1区本調査） 石川幸弘・柿沼利幸

平成12年度（砂田瀧遺跡1区本調査） 中村享史・名越侍郎

平成12年度（砂田瀧遺跡試掘） 中村享史・名越侍郎（発掘補助員）田崎真理

- 平成 16 年度 (砂田瀧遺跡 2 区本調査) 小出功一・今平昌子・(発掘補助員) 田崎真理
 平成 17 年度 (砂田姥沼遺跡 2 区・3 区本調査) 小出功一・馬場秀典
 平成 19 年度 (砂田瀧遺跡 3 区本調査) 後藤信祐・大瀧貴史
 平成 22 年度 (整理・報告書作成作業) 藤田直也
 5. 本書の作成・執筆・編集は(財)とちぎ生涯学習文化財団 藤田直也が行った。

第 1 章第 1・2 節と第 2 章第 1 節は、既刊の報告書 10 冊(『東谷・中島地区遺跡群』1～10)の記述をもとに、砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡にかかわる部分等を加除修正した。これ以外の執筆分担は、第Ⅶ章第 3 節の砂田姥沼遺跡 2 区の炭化材の樹種同定結果をバリノ・サーヴェイ株式会社、第Ⅶ章第 4 節 1 の砂田姥沼遺跡 2 区・3 区の火山灰分析結果を株式会社古環境研究所、同第 4 節 2 の砂田姥沼遺跡 3 区の榎実同定はバリノ・サーヴェイ株式会社による。

6. 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の発掘調査にあたり、以下の委託事業を実施した。

表土除去：(株)野澤實業、(株)黒後建設、(株)小川組、(株)クロゴ工業、基準点測量及び杭打ち・航空写真撮影・航空写真撮影図化・航空写真合成：中央航業株式会社、自然科学分析：(株)古環境研究所、バリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

7. 遺構写真は各調査担当者が、遺物写真撮影は藤田が撮影した。遺物の X 線撮影は車塚哲久、航空写真は中央航業株式会社が撮影した。

8. 発掘調査の実施並びに報告書の作成にあたっては栃木県教育委員会文化財課の指導を受けると共に、次の方々の御指導、御協力を賜った。

都市再生機構栃木開発事務所、宇都宮市教育委員会、上三川町教育委員会
 秋元陽光、塙 静夫、深谷 昇、梁木 誠、今平利幸(敬称略)

9. 本遺跡は、既に栃木県教育委員会『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』22 平成 10 年度(1998)、『同年報』24 平成 12 年度(2000)、『同年報』28 平成 16 年度(2004)、『同年報』29 平成 17 年度(2005)、『同年報』31 平成 19 年度(2007)、『埋蔵文化財センター年報』第 9 号(平成 11 年度)、第 11 号(平成 13 年度)、第 15 号(平成 17 年度)、第 16 号(平成 18 年度)、第 18 号(平成 20 年度)、宇都宮市教育委員会文化課『宇都宮市文化財年報』第 15 号〔平成 10 年度〕、第 17 号〔平成 12 年度〕、第 21 号〔平成 16 年度〕、第 12 号〔平成 17 年度〕、第 24 号〔平成 19 年度〕で一部概要が公表されているが、本書をもって正式報告とする。

10. 本報告書名は遺跡名ではなく、業務名である。

11. 本遺跡に係わる出土遺物・実測図・写真等の資料は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

12. 発掘調査協力者は次のとおりである。(順不同・敬称略)

会沢嘉明、青木良人、青柳 茂、阿久津友恵、阿久津正代子、阿久津フミ、阿久津容子、朝倉榮子、阿部利三郎、船澤賢三、荒井光美、新井みや子、飯田国松、石井けい子、石川晶子、石川てる子、石川東司、石川良子、石崎幸子、石崎富美子、石塚洋太郎、石原昌子、石原明子、石浜ふみ子、岩本文子、石渡ヨシイ、磯崎恵子、伊東祐子、稲垣 節、稲川洋子、稲葉るみ子、今井光子、入江キイ、入江セツ、入江タカ子、入江つや子、入江徹、入江文子、入江通子、入江晴江、岩井タイ、猪瀬岩夫、岩本文子、上野久子、上野え子、白井ツヤ、植松雄介、榎本健夫、大垣一子、大谷三恵子、大田勝雄、大田りえ子、大垣カツ、大塚アエ、大塚サダ、大塚スガ、大塚 清、大塚タマ子、大塚三代子、岡田イセ、岡田紀子、岡田 満、尾島サキ、小椋朋子、小澤一雄、小貫邦生、柿沼 武、片山重子、加藤明美、加藤家康、加藤盛枝、加藤マツエ、川島利子、川島 昭、川畑忠久、河村祐治、木村昭裕、木村孝子、北村 順、工藤英子、栗原 徹、黒須エイ、黒須多喜子、黒川テル子、黒川法子、黒田 史、熊木秀男、毛塚雪子、小高真理子、小島清子、小林ミツエ、小林マス、小松寅雄、郷間和子、近能のぞみ、斎藤幸子、斎藤近由、斎藤みつ、坂井原弓子、坂入厚子、坂入廣子、坂田実徳、坂本キミ子、櫻井洋之、桜井靖久、笹崎剛夫、佐藤武尚、佐藤ツヤ子、佐藤ミサ子、佐藤ヨシ、佐藤芳夫、

椎貝フヂエ、椎貝祥子、篠崎一美、篠原サク、篠原信子、清水タネ、清水裕子、柴タミ子、下谷文男、白井チセ子、杉山 巧、鈴木恒正、鈴木ヨシ子、須長剛生、田崎信夫、田崎真理、高木ハマ、高田滋子、高嶋一平、高島勝征、高嶋絹子、高嶋キヨノ、高島典子、高島秀子、高嶋ミヨ子、高瀬智代子、高野ヨシ子、高橋朝美、高橋政昌、高橋晴子、高橋洋子、高橋平次、高橋松男、高秀ハツエ、高松道子、高松美和子、高松米子、高山シズ江、田崎照明、田中コト、田中静男、田中征子、田中ヤス、津野田陽介、鶴見世及、対馬順子、圓谷由貴子、手塚智彦、寺内キエ、寺内きぬ、寺内 尉、寺内ミツエ、寺内千代子、寺内千代子、豊田孝子、仲沢 集、直井清之、直井房一、中山伸子、新村義一、根本有理子、野口コウ、野口忠士郎、野崎久美子、野沢伸喜、野沢トシ、野沢トミ、野澤 守、野沢 充、畠山 弘、橋本フジ、林 孝行、馬場キウ、伴三千代、平井克美、平井待子、平石キヨノ、福富 準、広田愛子、深澤光一、深沢勝和、福田純子、福田安家、福田ツヤ、福田林蔵、藤原美枝、古谷安司、堀中國代、星野高雄、細野重信、本田 衛、本牧キン、増山晃広、増淵キミ、増淵京子、増淵フミ、増淵三枝子、増淵正弘、増淵三男、増淵皓三、松沼 朗、松本かおる、真分フキ、三上あけみ、美野輪説二、宮本スミエ、宮本恒雄、宮本俊明、室井ケン、毛利沙和子、茂垣 栄、李保美枝、望月シズエ、百瀬洋子、森田幸江、安井嘉津子、谷田部キヨ子、矢田部敏雄、柳田加子、柳田悦子、築嶋ヨシ、山崎千代子、山崎洋子、吉沢明世、吉沢良助、吉沢千代、吉田みつえ、渡辺昭二郎、渡辺洋子、渡辺四郎、渡辺フミ

13. 整理作業・報告書作成作業の参加者は次のとおりである。(順不同・敬称略)

砂子坂紀余子、篠原彩子、村上啓子、小倉孝子、津野田智美、渡辺 都

14. 遺跡・遺構・遺物の記載方法は下記のとおりである。

(遺跡)

遺跡の略号 略号は調査区周辺を代表する小字名に対応してU-T-S-U(宇都宮市一砂田姥沼)及びU-T-S-T(宇都宮市一砂田瀧)である。各地区はU-T-S-U-I(砂田姥沼遺跡1区)、U-T-S-U-2(同2区)、U-T-S-U-3(同3区)、U-T-S-T-I(砂田瀧遺跡1区)、U-T-S-T-2(同2区)、U-T-S-T-3(同3区)と表記する。また、東谷・中島地区の確認調査を実施した部分の略号はU-T-T-N(宇都宮市一東谷・中島地区)で、遺物にはU-T-T-N-トレンチNa(宇都宮市一東谷・中島地区トレンチNa)と注記された場合もある。

発掘調査時には、地区名を砂田姥沼遺跡と砂田瀧遺跡の1区がローマ数字、砂田姥沼遺跡と砂田瀧遺跡の2区・3区がアラビア数字を用いて表記していた。本報告では全てアラビア数字(1区～3区)に統一した。

公共座標 各調査区の全体図には国土調査法による平面直角座標第Ⅸ系の座標値を記入した。各遺構の配置については、国家座標第Ⅸ系に基づく東谷・中島地区遺跡群全体を覆うグリッドにより表記した。また、挿入図中の方向については、座標北(平面直角座標第Ⅸ系のX軸方向)である。なお、本書の座標値は平成14年(2002年)4月から施行されている世界測地系に基づく座標値は使用していないが、緯度・経度の表示は世界測地系による。

(遺構)

遺跡名 遺構略号は、竪穴住居跡(竪穴建物跡):SI、土坑:SK、柵列:SA、掘立柱建物跡:SB、溝状遺構:SD、井戸状遺構:SE、方形区画溝・通路状遺構・性格不明遺構: SXの略号で表し、基本的に種別によらず確認された遺構順に1, 2, 3, ...と番号を発番した。本報告掲載にあたっては、調査時に付された遺構番号を踏襲した。

また、調査時に番号の重複した遺構及び番号を付さなかった遺構については、本報告掲載時に修正、発番を行った。調査時に発番したひとつの番号で重複が明らかとなった遺構については新しい時期の遺構からA・B・Cのアルファベットを付して区別した。

なお、砂田瀧遺跡3区に限っては、調査時に遺構略号は種別によって1, 2, 3, ...と番号を発番していることから、本報告掲載にあたっては、調査時に付された遺構番号を踏襲した。

縮尺 遺構実測図は原則として、竪穴建物跡・掘立柱建物跡：縮尺 1/80、土坑・井戸・小穴・焼土遺構：縮尺 1/60 で掲載した。炉・カマドについては共に縮尺 1/40 に拡大して掲載した。また、方形区画溝は縮尺 1/100、溝状遺構は縮尺 1/60・1/80・1/100・1/200・1/400、通路状遺構は縮尺：1/60 とし必要に応じて縮尺を変更している。

方位 図示した方位は、小縮尺の地形図（第1図）が真北、他の図中では座標北（平面直角座標第Ⅱ系のX軸方向）である。遺構の主軸方向は座標北に対する振れを示す。竪穴建物跡の主軸方向は、縦横2軸のうち、入口関連施設を通る方向の軸で示し、入口が不明の場合は長軸方向で示した。

標高 断面図基準線の値は海拔標高で、水系記号または土層注記の下段に記載した。

（遺物）

掲載方法 遺構の掲載は、遺跡・地区ごとに古い方から時代毎に行っている。本報告の遺跡掲載は砂田姥沼遺跡1区・2区・3区、砂田瀧遺跡1区・2区・3区という掲載順になる。竪穴遺構の種別により竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、その他の順に、遺構番号順に行った。遺物番号の発番は、出土遺構単位に1, 2, 3, 4, ……とした。出土遺構単位の発番は原則として、土器（須恵器、土師器。埴、坏、高坏、鉢、甕、甌等）、鉄製品（鉄器等）の順で行った。この番号は、本文、遺物出土位置、遺物実測図、遺物観察表、写真図版等に共通する。

計測値 遺構計測表における「口」「頸」「底」はそれぞれの径、計測値は、数値のみ：計測値、（ ）：推定値、[]：残存値を示す。

縮尺 遺物実測図は原則として、縄文土器：1/3、縄文時代石器（石鏃）：2/3、縄文時代石器（打製石斧・磨製石斧・礫器等）：1/3・1/4、土師器・須恵器・石器（編物石等）：1/4、砥石等：1/2、ミニチュア土器：1/4、鉄製品：1/2、石製模造品：1/2の縮尺で掲載した。これらは原則で例外もある。

なお、遺物写真図版の縮尺は不統一である。

破片の拓影図 縄文・弥生土器では、外面―断面、若しくは外面―断面―内面とし、古墳時代以降は内面―断面―外面の順で配置した。

器質 須恵器は断面を黒塗り、金属製品は斜線、その他の遺物は白抜きにして示している。内面黒色処理・赤彩・漆に関しては観察表中に表記しておく。

器面調整と施釉 古墳時代以降の土器では、ナデの範囲を破線で、ケズリの範囲を実線で、ケズリの方向を矢印で示した。

色調 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監査の『新版 標準土色帖 1996 年度版』に従った。土器・土製品は焼成当時の色調に近い箇所を観察し、黒斑や二次的な煤・コゲ・被熱変色・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土 混和材の多少を基準に「粗い/やや粗い/やや縮密/縮密」とする。混和材が鉱物・岩石の場合：長径 0.5 mm未満は「細砂」、0.5 mm～2.0 mmは「砂」、2.0 mm以上は「礫」とする。混和材が鉱物・岩石以外の場合、長径 0.5 mm未満は「細粒」、0.5 mm～2.0 mmは「粒」、2.0 mm以上は「粗粒」とする。混和材の色は「灰・白・黒・赤・透明」とする。半透明のものは「透明」に含める。

焼成 「良好/やや不良/不良」とする。

遺物の出土状態 竪穴建物跡の壁・主柱穴・カマドの配置により、東・西・南・北壁際、東・西・南・北部、中央部、カマドの計 10 箇所の区分けを行い、これに付属施設を加え、覆土中、床直（底面直上）、開口部等の高さを考慮した上で位置の記述を行った。付属施設の整っていない遺構についてはその都度考慮した。

目 次

序

例言

遺構一覧・検索表

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	3
(1) 確認調査	
(2) 本調査	
第3節 調査の概要と経過	5
(1) 確認調査	
(2) 本調査	
(3) 砂田姥沼遺跡	
(4) 砂田瀧遺跡	
(5) 整理・報告書作成	

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	12

第Ⅲ章 調査区の配置と標準土層

第1節 砂田姥沼遺跡における調査区の配置と概要	26
第2節 砂田瀧遺跡における調査区の配置と概要	28
第3節 砂田姥沼遺跡と砂田瀧遺跡の土層	30

第Ⅳ章 砂田姥沼遺跡各地区の縄文・弥生時代の遺物

第1節 縄文時代の遺物出土状況	31
第2節 砂田姥沼遺跡各地区の縄文土器	31
第3節 砂田姥沼遺跡各地区の縄文時代石器	35
第4節 弥生時代の遺物出土状況	36
第5節 砂田姥沼遺跡各地区の弥生土器	36

第Ⅴ章 砂田姥沼遺跡Ⅰ区の調査

第1節 古墳時代の遺構と遺物	38
1. 竪穴建物跡 2. 掘立柱建物跡 3. 方形区画遺構	
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物	101
1. 竪穴建物跡	
第3節 近世以降の遺構と遺物	104
1. 溝状遺構	

第4節 時期不明の遺構	108
1. 掘立柱建物跡 2. 井戸 3. 溝状遺構 4. 土坑 5. 小穴	
第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査	
第1節 古墳時代の遺構と遺物	122
1. 竪穴建物跡 2. 掘立柱建物跡 3. 溝状遺構 4. 通路状遺構	
第2節 時期不明の遺構	152
1. 掘立柱建物跡 2. 溝状遺構 3. 土坑 4. 小穴	
第3節 砂田姥沼遺跡2区の自然科学分析	163
第VII章 砂田姥沼遺跡3区の調査	
第1節 古墳時代の遺構と遺物	165
1. 竪穴建物跡 2. 掘立柱建物跡 3. 溝状遺構	
第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物	204
1. 竪穴建物跡 2. 通路状遺構	
第3節 時期不明の遺構	212
1. 掘立柱建物跡 2. 溝状遺構 3. 土坑 4. 小穴	
第4節 砂田姥沼遺跡2区・3区の自然科学分析	228
1. 砂田姥沼遺跡2区・3区の火山灰分析	
2. 砂田姥沼遺跡3区の種実同定報告	
第VIII章 砂田瀧遺跡各地区の縄文・弥生時代の遺物	
第1節 縄文時代の遺物出土状況	235
第2節 砂田瀧遺跡各地区の縄文土器	235
第3節 弥生時代の遺物出土状況	235
第4節 砂田瀧遺跡各地区の弥生土器	235
第IX章 砂田瀧遺跡1区の調査	
第1節 中世以降の遺構	236
1. 井戸 2. 土坑 3. 溝状遺構	
第2節 時期不明の遺構	240
1. 溝状遺構 2. 土坑	
第X章 砂田瀧遺跡2区の調査	
第1節 時期不明の遺構	245
1. 井戸 2. 溝状遺構 3. 土坑 4. 小穴	
第XI章 砂田瀧遺跡3区の調査	
第1節 A区の時期不明の遺構	267
1. 溝状遺構 2. 土坑 3. 小穴	
第2節 B区の時期不明の遺構	270
1. 焼土遺構 2. 小穴	

第3節 C区の時期不明の遺構	272
----------------	-----

1. 溝状遺構

第Ⅱ章 まとめ

第1節 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の縄文・弥生時代の遺物	273
-----------------------------	-----

1. 縄文時代 2. 弥生時代

第2節 砂田姥沼遺跡の古墳時代～古代の遺構と遺物	274
--------------------------	-----

1. 土器の変遷について 2. 集落の時期区分

第3節 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の中・近世の遺構と遺物	280
-----------------------------	-----

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第53図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16 実測図(1)	84
第2図 東谷・中島地区道路跡道路配置図	4	第54図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16 実測図(2)	85
第3図 遺跡位置図	8	第55図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16 出土遺物(1)	86
第4図 地形図(S=1/600,000)	9	第56図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16 出土遺物(2)	87
第5図 周辺の地形図(S=1/100,000)	10	第57図 砂田姥沼遺跡1区 S1-17 実測図(1)	91
第6図 周辺の道路分布図	14	第58図 砂田姥沼遺跡1区 S1-17 実測図(2)	92
第7図 東谷・中島地区道路跡と 砂田姥沼・砂田瀧遺跡(S=1/10,000)	19	第59図 砂田姥沼遺跡1区 S1-18 実測図(1)	93
第8図 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡及び周辺道路	27	第60図 砂田姥沼遺跡1区 S1-18 実測図(2)	94
第9図 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の標準土層	29	第61図 砂田姥沼遺跡1区 S1-18 出土遺物	94
第10図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の縄文土器	32	第62図 砂田姥沼遺跡1区 S1-34 実測図	96
第11図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の石器(1)	34	第63図 砂田姥沼遺跡1区 S1-83 実測図	97
第12図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の石器(2)	35	第64図 砂田姥沼遺跡1区 S1-83 出土遺物	98
第13図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の弥生土器	36	第65図 砂田姥沼遺跡1区 S1-28 実測図	99
第14図 砂田姥沼遺跡1区 全体図(S=1/800)	39	第66図 砂田姥沼遺跡1区 S1-28 出土遺物	100
第15図 砂田姥沼遺跡1区 S1-1 実測図	40	第67図 砂田姥沼遺跡1区 S1-13 実測図	102
第16図 砂田姥沼遺跡1区 S1-1 出土遺物	41	第68図 砂田姥沼遺跡1区 S1-13 出土遺物	102
第17図 砂田姥沼遺跡1区 S1-2 実測図(1)	42	第69図 砂田姥沼遺跡1区 S1-26・27・29・81・85 実測図(1)	104
第18図 砂田姥沼遺跡1区 S1-2 実測図(2)	42	第70図 砂田姥沼遺跡1区 S1-26・27・81・85 実測図(2)	105
第19図 砂田姥沼遺跡1区 S1-2 出土遺物	43	第71図 砂田姥沼遺跡1区 S1-26・27・81・85 実測図(3)	106
第20図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A 実測図(1)	44	第72図 砂田姥沼遺跡1区 S1-26・27 出土遺物	106
第21図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A 実測図(2)	45	第73図 砂田姥沼遺跡1区 S1-31 実測図	108
第22図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A 出土遺物	45	第74図 砂田姥沼遺跡1区 S1-32 実測図	109
第23図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3B 実測図	47	第75図 砂田姥沼遺跡1区 S1-33 実測図	110
第24図 砂田姥沼遺跡1区 S1-4 実測図	48	第76図 砂田姥沼遺跡1区 S1-40 実測図	110
第25図 砂田姥沼遺跡1区 S1-4 出土遺物	49	第77図 砂田姥沼遺跡1区 S1-19～21 実測図(1)	111
第26図 砂田姥沼遺跡1区 S1-5 実測図	50	第78図 砂田姥沼遺跡1区 S1-19～21 実測図(2)	112
第27図 砂田姥沼遺跡1区 S1-5 出土遺物	51	第79図 砂田姥沼遺跡1区 S1-22・23 実測図(1)	113
第28図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6 実測図(1)	52	第80図 砂田姥沼遺跡1区 S1-22・23 実測図(2)	114
第29図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6 実測図(2)	53	第81図 砂田姥沼遺跡1区 S1-22 出土遺物	115
第30図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6 実測図(3)	54	第82図 砂田姥沼遺跡1区 S1-23 出土遺物	116
第31図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6 出土遺物(1)	55	第83図 砂田姥沼遺跡1区 S1-24・25・35・36～39・ 41～44 実測図	117
第32図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6 出土遺物(2)	56	第84図 砂田姥沼遺跡1区 S1-45・46・47～50 実測図	118
第33図 砂田姥沼遺跡1区 S1-7 実測図(1)	59	第85図 砂田姥沼遺跡1区 S1-51・80・82・84 実測図	119
第34図 砂田姥沼遺跡1区 S1-7 実測図(2)	60	第86図 砂田姥沼遺跡1区 土坑内出土遺物	119
第35図 砂田姥沼遺跡1区 S1-7 出土遺物	61	第87図 砂田姥沼遺跡1区 小穴実測図(1)	120
第36図 砂田姥沼遺跡1区 S1-8 実測図	63	第88図 砂田姥沼遺跡1区 小穴実測図(2)	121
第37図 砂田姥沼遺跡1区 S1-8 出土遺物	63	第89図 砂田姥沼遺跡2区 全体図(S=1/800・1/400)	123
第38図 砂田姥沼遺跡1区 S1-9 実測図(1)	64	第90図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1 実測図(1)	124
第39図 砂田姥沼遺跡1区 S1-9 実測図(2)	65	第91図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1 実測図(2)	125
第40図 砂田姥沼遺跡1区 S1-9 出土遺物	65	第92図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1 実測図(3)	126
第41図 砂田姥沼遺跡1区 S1-10 実測図	67	第93図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1 出土遺物(1)	127
第42図 砂田姥沼遺跡1区 S1-10 出土遺物	68	第94図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1 出土遺物(2)	128
第43図 砂田姥沼遺跡1区 S1-11 実測図	71	第95図 砂田姥沼遺跡2区 S1-2 実測図	132
第44図 砂田姥沼遺跡1区 S1-11 出土遺物	72	第96図 砂田姥沼遺跡2区 S1-2 出土遺物	133
第45図 砂田姥沼遺跡1区 S1-12 実測図(1)	73	第97図 砂田姥沼遺跡2区 S1-3A 実測図	136
第46図 砂田姥沼遺跡1区 S1-12 実測図(2)	74	第98図 砂田姥沼遺跡2区 S1-3A・3B 実測図(1)	137
第47図 砂田姥沼遺跡1区 S1-12 出土遺物	75	第99図 砂田姥沼遺跡2区 S1-3A・3B 実測図(2)	138
第48図 砂田姥沼遺跡1区 S1-14 実測図(1)	77	第100図 砂田姥沼遺跡2区 S1-3A・3B 出土遺物	139
第49図 砂田姥沼遺跡1区 S1-14 実測図(2)	78		
第50図 砂田姥沼遺跡1区 S1-14 出土遺物	79		
第51図 砂田姥沼遺跡1区 S1-15 実測図	82		
第52図 砂田姥沼遺跡1区 S1-15 出土遺物	83		

第 101 図	砂田堤活道路 2 区	S 1-4 実測図 (1)	140	第 169 図	砂田堤活道路 3 区	S D-13~19・25 実測図 (2)	218
第 102 図	砂田堤活道路 2 区	S 1-4 実測図 (2)	141	第 170 図	砂田堤活道路 3 区	S D-11・12・13・14 出土遺物	219
第 103 図	砂田堤活道路 2 区	S 1-4 出土遺物	141	第 171 図	砂田堤活道路 3 区	S K-29・33・37・38・41 ・43・44 出土遺物	220
第 104 図	砂田堤活道路 2 区	S 1-5 実測図	142	第 172 図	砂田堤活道路 3 区	S K-26・27・28・29・32 ・34・36・37 実測図 (1)	221
第 105 図	砂田堤活道路 2 区	S 1-5 出土遺物	143	第 173 図	砂田堤活道路 3 区	S K-33・35・38・39・40 ・41・42・43・44 実測図 (2)	222
第 106 図	砂田堤活道路 2 区	S B-22 実測図	144	第 174 図	砂田堤活道路 3 区	小穴実測図 (1)	223
第 107 図	砂田堤活道路 2 区	S D-12 実測図	145	第 175 図	砂田堤活道路 3 区	小穴実測図 (2)	225
第 108 図	砂田堤活道路 2 区	S D-12 出土遺物	146	第 176 図	砂田堤活道路 3 区	小穴実測図 (3)	226
第 109 図	砂田堤活道路 2 区	S X-19 実測図	147	第 177 図	砂田堤活道路 3 区	小穴実測図 (4)	227
第 110 図	砂田堤活道路 2 区	S X-19・20・21 実測図	148	第 178 図	砂田堤活道路 3 区	P-10・13・34・58 出土遺物	228
第 111 図	砂田堤活道路 2 区	S X-20 出土遺物	150	第 179 図	2 区	S X-19 A A セクションにおける 試料の層位 (●)	229
第 112 図	砂田堤活道路 2 区	S X-20・21 実測図	151	第 180 図	2 区	S X-19 B B セクションにおける 試料の層位 (●)	229
第 113 図	砂田堤活道路 2 区	S B-15 実測図	152	第 181 図	2 区	S I-1 サンプル A における 試料の層位 (●)	229
第 114 図	砂田堤活道路 2 区	S D-6・7 実測図	153	第 182 図	2 区	S I-1 サンプル B における 試料の層位 (●)	229
第 115 図	砂田堤活道路 2 区	S D-8 実測図	154	第 183 図	3 区西における土層柱状図	●	229
第 116 図	砂田堤活道路 2 区	S D-8 出土遺物	155	第 184 図	3 区 E E セクションにおける試料の層位 (●)	●	229
第 117 図	砂田堤活道路 2 区	S D-9 実測図 (1)	155	第 185 図	3 区 S I-5 における試料の層位 (●)	●	229
第 118 図	砂田堤活道路 2 区	S D-9 実測図 (2)	155	第 186 図	砂田堤活道路 3 区	横実切定銅板写真	234
第 119 図	砂田堤活道路 2 区	S K-10・11・13・14・16・17 ・18 実測図	156	第 187 図	砂田堤活道路 3 区	遺構外出土の縄文土器・石器	235
第 120 図	砂田堤活道路 2 区	S K-23・24 実測図	157	第 188 図	砂田堤活道路 3 区	遺構外出土の弥生土器	235
第 121 図	砂田堤活道路 2 区	小穴実測図 (1)	158	第 189 図	砂田堤活道路 1 区	全体図 (S=1/1,200・1/600)	236
第 122 図	砂田堤活道路 2 区	小穴実測図 (2)	159	第 190 図	砂田堤活道路 1 区	S E-1・2 実測図	237
第 123 図	砂田堤活道路 2 区	小穴実測図 (3)	160	第 191 図	砂田堤活道路 1 区	S E-1 出土遺物	237
第 124 図	砂田堤活道路 2 区	小穴実測図 (4)	161	第 192 図	砂田堤活道路 1 区	S K-4 実測図	238
第 125 図	砂田堤活道路 2 区	小穴実測図 (5)	162	第 193 図	砂田堤活道路 1 区	S K-4 出土遺物	238
第 126 図	砂田堤活道路 2 区	炭化材顕微鏡写真	164	第 194 図	砂田堤活道路 1 区	S D-18 実測図 (1)	239
第 127 図	砂田堤活道路 2 区	全体図 (S=1/1,000・1/400)	165	第 195 図	砂田堤活道路 1 区	S D-18 実測図 (2)	239
第 128 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 実測図 (1)	166	第 196 図	砂田堤活道路 1 区	S D-3 実測図 (1)	240
第 129 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 実測図 (2)	167	第 197 図	砂田堤活道路 1 区	S D-3 実測図 (2)	241
第 130 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 実測図 (3)	168	第 198 図	砂田堤活道路 1 区	S D-15・16・17・20 実測図 (1)	241
第 131 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 実測図 (4)	169	第 199 図	砂田堤活道路 1 区	S D-15・16・17・20 実測図 (2)	242
第 132 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 出土遺物 (1)	169	第 200 図	砂田堤活道路 2 区	全体図 (S=1/1,000)	244
第 133 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 出土遺物 (2)	170	第 201 図	砂田堤活道路 2 区	S E-26・33・50 実測図	246
第 134 図	砂田堤活道路 3 区	S I-1 出土遺物 (3)	171	第 202 図	砂田堤活道路 2 区	S D-1 実測図	246
第 135 図	砂田堤活道路 3 区	S I-2 A 実測図 (1)	175	第 203 図	砂田堤活道路 2 区	S D-2・3 実測図	247
第 136 図	砂田堤活道路 3 区	S I-2 A・B・C 実測図 (2)	177	第 204 図	砂田堤活道路 2 区	S D-3・35・36 実測図	248
第 137 図	砂田堤活道路 3 区	S I-2 A 実測図 (3)	178	第 205 図	砂田堤活道路 2 区	S D-35 出土遺物	248
第 138 図	砂田堤活道路 3 区	S I-2 出土遺物	179	第 206 図	砂田堤活道路 2 区	S D-3・35・36・51・52 ・73 実測図	249
第 139 図	砂田堤活道路 3 区	S I-3 A 実測図 (1)	183	第 207 図	砂田堤活道路 2 区	S D-3・35・36・51・52 実測図	250
第 140 図	砂田堤活道路 3 区	S I-3 A 実測図 (2)	184	第 208 図	砂田堤活道路 2 区	S D-52 出土遺物	251
第 141 図	砂田堤活道路 3 区	S I-3 A・3 B・3 C 実測図	185	第 209 図	砂田堤活道路 2 区	S D-3・52 実測図 ・61・68 実測図	252
第 142 図	砂田堤活道路 3 区	S I-3 出土遺物	186	第 210 図	砂田堤活道路 2 区	S D-35・52・55・57 実測図	253
第 143 図	砂田堤活道路 3 区	S I-4 A 実測図	188	第 211 図	砂田堤活道路 2 区	S D-58・59・68 実測図	254
第 144 図	砂田堤活道路 3 区	S I-4 A・4 B 実測図	189	第 212 図	砂田堤活道路 2 区	S D-5・59・65・66 ・69・70・71 実測図	255
第 145 図	砂田堤活道路 3 区	S I-4 出土遺物	190	第 213 図	砂田堤活道路 2 区	S D-5・59・65・66 ・69・70・71・74 実測図	258
第 146 図	砂田堤活道路 3 区	S I-5 実測図	194	第 214 図	砂田堤活道路 2 区	S D-34・35 実測図	259
第 147 図	砂田堤活道路 3 区	S I-5 出土遺物	195	第 215 図	砂田堤活道路 2 区	S K-4・6・7・8・9・10 ・11・12・14・15・16・19・44 実測図	261
第 148 図	砂田堤活道路 3 区	S B-45 実測図	197	第 216 図	砂田堤活道路 2 区	S K-21・22・23・24・25・27 ・28・29・30・31・40・43 実測図	262
第 149 図	砂田堤活道路 3 区	S B-48 実測図	198	第 217 図	砂田堤活道路 2 区	S K-32・37・38・39・42・53 ・63・64・72 実測図	263
第 150 図	砂田堤活道路 3 区	S B-50 実測図	199				
第 151 図	砂田堤活道路 3 区	S A-46 実測図	199				
第 152 図	砂田堤活道路 3 区	S B-50 ・S A-46 出土遺物	200				
第 153 図	砂田堤活道路 3 区	S D-20 実測図 (1)	201				
第 154 図	砂田堤活道路 3 区	S D-20 実測図 (2)	202				
第 155 図	砂田堤活道路 3 区	S D-20 出土遺物	202				
第 156 図	砂田堤活道路 3 区	S I-6 出土遺物	203				
第 157 図	砂田堤活道路 3 区	S I-6 実測図 (1)	204				
第 158 図	砂田堤活道路 3 区	S I-6 実測図 (2)	205				
第 159 図	砂田堤活道路 3 区	S I-7 実測図	207				
第 160 図	砂田堤活道路 3 区	S I-7 出土遺物	208				
第 161 図	砂田堤活道路 3 区	S X-22・23 実測図 (1)	209				
第 162 図	砂田堤活道路 3 区	S X-22・23 実測図 (2)	210				
第 163 図	砂田堤活道路 3 区	S X-22・23 出土遺物	212				
第 164 図	砂田堤活道路 3 区	S B-47 実測図	213				
第 165 図	砂田堤活道路 3 区	S B-49 実測図	213				
第 166 図	砂田堤活道路 3 区	S D-10・11 実測図	214				
第 167 図	砂田堤活道路 3 区	S D-12 実測図	215				
第 168 図	砂田堤活道路 3 区	S D-13・19・25 実測図 (1)	217				

第 220 図	砂田龍道跡 2 区	SK-13・17・18・41・73・20 ・45・49・62 実測図	264
第 221 図	砂田龍道跡 2 区	P-1・2・3・4・5・6・7・8 ・9・10・11・12 実測図	266
第 222 図	砂田龍道跡 3 区	全体図 (S=1/600)	267
第 223 図	砂田龍道跡 3 区	SD-1・2・3・4 実測図	268

第 224 図	砂田龍道跡 3 区	A 区 SK-1 実測図	270
第 225 図	砂田龍道跡 3 区	A 区 P-1 実測図	270
第 226 図	砂田龍道跡 3 区	B 区 S-1・2 実測図	271
第 227 図	砂田龍道跡 3 区	B 区 P-2・3 実測図	271
第 228 図	砂田龍道跡 3 区	C 区 SD-2・3 実測図	272
第 229 図	砂田龍道跡出土土器の変遷 (1)		276
第 230 図	砂田龍道跡出土土器の変遷 (2)		277
第 231 図	砂田龍道跡における集落の変遷 (1)		278
第 232 図	砂田龍道跡における集落の変遷 (2)		279

表 目 次

第 1 表	東谷・中島地区道跡一覧表	5
第 2 表	東谷・中島地区周辺の道跡	15
第 3 表	砂田龍道跡 遺構外出土石製観察表	35
第 4 表	砂田龍道跡 1 区 S1-1 出土土物	41
第 5 表	砂田龍道跡 1 区 S1-2 出土土物	43
第 6 表	砂田龍道跡 1 区 S1-3A 出土土物	46
第 7 表	砂田龍道跡 1 区 S1-4 出土土物	49
第 8 表	砂田龍道跡 1 区 S1-5 出土土物	51
第 9 表	砂田龍道跡 1 区 S1-6 出土土物	56
第 10 表	砂田龍道跡 1 区 S1-7 出土土物	61
第 11 表	砂田龍道跡 1 区 S1-8 出土土物	63
第 12 表	砂田龍道跡 1 区 S1-9 出土土物	66
第 13 表	砂田龍道跡 1 区 S1-10 出土土物	69
第 14 表	砂田龍道跡 1 区 S1-11 出土土物	72
第 15 表	砂田龍道跡 1 区 S1-12 出土土物	75
第 16 表	砂田龍道跡 1 区 S1-14 出土土物	80
第 17 表	砂田龍道跡 1 区 S1-15 出土土物	83
第 18 表	砂田龍道跡 1 区 S1-16 出土土物	88
第 19 表	砂田龍道跡 1 区 S1-18 出土土物	95
第 20 表	砂田龍道跡 1 区 SB-83 出土土物	98
第 21 表	砂田龍道跡 1 区 SX-28 出土土物	101
第 22 表	砂田龍道跡 1 区 S1-13 出土土物	103
第 23 表	砂田龍道跡 1 区 SD-26・27 出土土物	107
第 24 表	砂田龍道跡 1 区 SD-22 出土土物	115
第 25 表	砂田龍道跡 1 区 SD-23 出土土物	116
第 26 表	砂田龍道跡 1 区 土坑一覧表	116
第 27 表	砂田龍道跡 1 区 土坑内 (SK-24・25・35・44) 出土土物	119
第 28 表	砂田龍道跡 1 区 土坑一覧表	120
第 29 表	砂田龍道跡 2 区 S1-1 出土土物	129
第 30 表	砂田龍道跡 2 区 S1-2 出土土物	134
第 31 表	砂田龍道跡 2 区 S1-3A・3B 出土土物	139
第 32 表	砂田龍道跡 2 区 S1-4 出土土物	141
第 33 表	砂田龍道跡 2 区 S1-5 出土土物	143
第 34 表	砂田龍道跡 2 区 SD-12 出土土物	146
第 35 表	砂田龍道跡 2 区 SX-20 出土土物	150

第 36 表	砂田龍道跡 2 区 SD-8 出土土物	154
第 37 表	砂田龍道跡 2 区 土坑一覧表	156
第 38 表	砂田龍道跡 2 区 土坑一覧表	157
第 39 表	樹種判定結果	163
第 40 表	砂田龍道跡 3 区 S1-1 出土土物	172
第 41 表	砂田龍道跡 3 区 S1-2 出土土物	180
第 42 表	砂田龍道跡 3 区 S1-3 出土土物	186
第 43 表	砂田龍道跡 3 区 S1-4 出土土物	191
第 44 表	砂田龍道跡 3 区 S1-5 出土土物	195
第 45 表	砂田龍道跡 3 区 SB-50・SA-46 出土土物	200
第 46 表	砂田龍道跡 3 区 SD-20 出土土物	203
第 47 表	砂田龍道跡 3 区 S1-6 出土土物	206
第 48 表	砂田龍道跡 3 区 S1-7 出土土物	208
第 49 表	砂田龍道跡 3 区 SX-22・23 出土土物	212
第 50 表	砂田龍道跡 3 区 SD-11・12・13・14 出土土物	220
第 51 表	砂田龍道跡 3 区 土坑一覧表	220・221・223
第 52 表	砂田龍道跡 3 区 SK-29・33・37・38・41 ・43・44 出土土物	223
第 53 表	砂田龍道跡 3 区 土坑一覧表	227
第 54 表	砂田龍道跡 3 区 P-10・13・34・58 出土土物	228
第 55 表	テフラ検出分析結果 (1)	230
第 56 表	テフラ検出分析結果 (2)	231
第 57 表	屈折率測定結果	231
第 58 表	砂田龍道跡 1 区 SE-1 出土土物	238
第 59 表	砂田龍道跡 1 区 SK-4 出土土物	238
第 60 表	砂田龍道跡 1 区 SD-18 出土土物	240
第 61 表	砂田龍道跡 1 区 土坑一覧表	243・244
第 62 表	砂田龍道跡 2 区 SD-35 出土土物	248
第 63 表	砂田龍道跡 2 区 SD-52 出土土物	251
第 64 表	砂田龍道跡 2 区 土坑一覧表	260・261
第 65 表	砂田龍道跡 2 区 土坑一覧表	265
第 66 表	砂田龍道跡における古墳時代～古代遺構の時期	274

図版目次

巻頭図版一 砂田龍道跡 航空写真
砂田龍道跡範囲及び、1 区～3 区調査範囲合成写真
(調査区上空から)

巻頭図版二 砂田龍道跡 航空写真
砂田龍道跡 1 区～3 区 全景合成写真 (調査区上空から)

図版一 砂田龍道跡 1 区 古墳時代 (遺構)
S1-1 完備状況 (南から)
S1-1 土層堆積状況 (南西から)
S1-1 カマド完備状況 (南から)
S1-1 カマド土層堆積状況 (東から)
S1-1 P5 完備状況 (南から)
S1-1 P5 土層堆積状況 (南から)
S1-1 遺物出土状況 (南から)
S1-1 遺物出土状況 (南から)

図版二 砂田龍道跡 1 区 古墳時代 (遺構)
S1-2 完備状況 (南から)
S1-2 土層堆積状況 (南西から)
S1-2 カマド完備状況 (南から)
S1-2 カマド土層堆積状況 (東から)
S1-2 P1 完備状況 (東から)
S1-2 P1 土層堆積状況 (東から)
S1-3 完備状況 (南から)
S1-3 土層堆積状況 (南東から)

図版三 砂田龍道跡 1 区 古墳時代 (遺構)
S1-3 カマド完備状況 (南から)
S1-3 カマド土層堆積状況 (東から)
S1-3 P5 完備状況 (南から)
S1-3 P5 土層堆積状況 (南から)
S1-3 遺物出土状況 (北東から)
S1-3 遺物出土状況近景 (西から)

- S 1-4 完備状況(南から)
- S 1-4 土層堆積状況(東から)

図版四 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-4 砂田姥沼遺跡(西から)
- S 1-4 砂田姥沼遺跡(東から)
- S 1-4 P 3 遺物出土状況(北から)
- S 1-4 P 3 完備状況(北から)
- S 1-5 完備状況(南から)
- S 1-5 土層堆積状況(南東から)
- S 1-5 カマド完備状況(南から)
- S 1-5 カマド土層堆積状況(東から)

図版五 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-6 完備状況(北東から)
- S 1-6 土層堆積状況(南東から)
- S 1-6 砂田姥沼遺跡(東から)
- S 1-6 砂田姥沼遺跡(北から)
- S 1-6 遺物出土状況(西から)
- S 1-6 遺物出土状況近景(北東から)
- S 1-7 完備状況(南から)
- S 1-7 土層堆積状況(南西から)

図版六 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-7 砂田姥沼遺跡(南から)
- S 1-7 砂田姥沼遺跡(東から)
- S 1-7 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-7 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-8 完備状況(南から)
- S 1-8 掘方状況(南から)
- S 1-8 砂田姥沼遺跡(北東から)
- S 1-8 遺物出土状況(南から)

図版七 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-9 完備状況(南東から)
- S 1-9 土層堆積状況(南西から)
- S 1-9 カマド完備状況(南から)
- S 1-9 カマド土層堆積状況(南から)
- S 1-9 遺物出土状況(南西から)
- S 1-9 P 3 完備状況(南から)
- S 1-9 遺物出土状況(南から)
- S 1-9 遺物出土状況(南から)

図版八 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-10 完備状況(南から)
- S 1-10 土層堆積状況(南から)
- S 1-10 砂田姥沼遺跡(東から)
- S 1-10 砂田姥沼遺跡(北から)
- S 1-10 P 1 完備状況(東から)
- S 1-10 P 1 完備状況(東から)
- S 1-10 遺物出土状況(南から)
- S 1-10 遺物出土状況近景(東から)

図版九 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-11 遺物出土及び完備状況(南から)
- S 1-11 土層堆積状況(南から)
- S 1-11 カマド完備状況(南から)
- S 1-11 カマド土層堆積状況(東から)
- S 1-11 P 1 完備状況(南から)
- S 1-11 P 1 土層堆積状況(南から)
- S 1-12 完備状況(南から)
- S 1-12 掘方状況(東から)

図版一〇 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-12 土層堆積状況(東から)
- S 1-12 砂田姥沼遺跡(東から)
- S 1-12 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-12 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-14 完備状況(南から)
- S 1-14 遺物出土状況(南から)
- S 1-14 土層堆積状況(東から)
- S 1-14 土層堆積状況(南から)

図版一一 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-14 カマド完備状況(南から)
- S 1-14 カマド土層堆積状況(東から)
- S 1-14 P 5 完備状況(南から)
- S 1-14 P 5 土層堆積状況(南から)

- S 1-14 遺物出土状況近景(北西から)
- S 1-14 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-15 完備状況(南から)
- S 1-15 土層堆積状況(南西から)

図版一二 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-15 カマド完備状況(南から)
- S 1-15 カマド土層堆積状況(南から)
- S 1-15 カマド土層堆積状況(東から)
- S 1-15 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-16 完備状況(南から)
- S 1-16 土層堆積状況(南から)
- S 1-16 カマド完備状況(南から)
- S 1-16 カマド土層堆積状況(東から)

図版一三 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-16 P 5 完備状況(北から)
- S 1-16 P 5 土層堆積状況(南から)
- S 1-16 P 5 遺物出土状況(南から)
- S 1-16 遺物出土状況(北東から)
- S 1-16 遺物出土状況(東から)
- S 1-16 遺物出土状況近景(南から)
- S 1-17 完備状況(南から)
- S 1-17 土層堆積状況(南東から)

図版一四 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-17 カマド完備状況(南から)
- S 1-17 カマド土層堆積状況(東から)
- S 1-17 P 5 完備状況(北から)
- S 1-17 P 5 土層堆積状況(南から)
- S 1-18 遺物出土及び完備状況(南東から)
- S 1-18 土層堆積状況(南東から)
- S 1-18 カマド完備状況(南から)
- S 1-18 カマド土層堆積状況(東から)

図版一五 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S 1-18 P 5 遺物出土状況(南から)
- S 1-18 P 5 土層堆積状況(南から)
- S B-34 柱礎確認状況(西から)
- S B-83 完備状況(東から)
- S X-28 完備状況(南から)
- S X-28 北辺溝完備状況(西から)
- S X-28 東辺溝完備状況(北から)
- S X-28 南辺溝完備状況(東から)

図版一六 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代(遺構)

- S X-28 西辺溝完備状況(北から)
- S X-28 Aライン土層堆積状況(南から)
- S X-28 Aライン南 土層堆積状況(南から)
- S X-28 Bライン北 土層堆積状況(東から)
- S X-28 Bライン南 土層堆積状況(東から)
- S X-28 Cライン 土層堆積状況(東から)
- S X-28 Dライン 土層堆積状況(東から)
- S X-28 Fライン 土層堆積状況(南から)

図版一七 砂田姥沼遺跡1区 古墳時代・古代・近世(遺構)

- S X-28 北辺溝底面完備状況(北から)
- S X-28 東辺溝底面完備状況(北から)
- S 1-13 完備状況(南から)
- S 1-13 P 2 土層堆積状況(東から)
- S 1-13 P 1 土層堆積状況(東から)
- S 1-13 砂田姥沼遺跡(南東から)
- S D-26・27 完備状況(東から)
- S D-26 Jライン土層堆積状況(西から)

図版一八 砂田姥沼遺跡1区 近世・時期不明(遺構)

- S D-27 完備状況(南から)
- S D-27 土層堆積状況(南から)
- S D-81 Oライン土層堆積状況(南から)
- S D-83 完備状況(南から)
- S B-31 完備状況(南東から)
- S B-32 柱礎確認状況(東から)
- S B-33 完備状況(東から)
- S E-40 遺構プラン確認状況(北西から)

図版一九 砂田姥沼遺跡1区 時期不明(遺構)

- S E-40 土層堆積状況(南から)
- S D-19・20・21 完備状況(西から)

- S D-19・20 Aライン土層堆積状況(南から)
- S D-19・20 クラック手前土層堆積状況(東から)
- S D-19 Bライン土層堆積状況(東から)
- S D-21 完掘状況(北西から)
- S D-21 Eライン土層堆積状況(南から)
- S D-21 S1-10南 土層堆積状況(南から)

図版二〇 砂田姥沼遺跡1区 時期不明(遺構)

- S D-22 完掘状況(東から)
- S D-22 土層堆積状況(東から)
- S D-22 土層堆積状況(東から)
- S D-23 完掘状況(東から)
- S D-23 Hライン土層堆積状況(西から)
- S D-29 完掘状況(北東から)
- S D-29 Jライン土層堆積状況近景(西から)
- S K-24 完掘状況(東から)

図版二一 砂田姥沼遺跡1区 時期不明(遺構)

- S K-36 完掘状況(南から)
- S K-37 完掘状況(南から)
- S K-38 完掘状況(南東から)
- S K-39 完掘状況(東から)
- S K-42 完掘状況(南東から)
- S K-43 完掘状況(南東から)
- S K-44 完掘状況(東から)
- S K-45 完掘状況(南から)

図版二二 砂田姥沼遺跡1区 時期不明(遺構)

- S K-46 完掘状況(東から)
- S K-47 完掘状況(南から)
- S K-48 完掘状況(南から)
- S K-49 完掘状況(南から)
- S K-50 完掘状況(東から)
- S K-51 完掘状況(北から)
- S K-80 完掘状況(東から)
- S K-82 完掘状況(東から)

図版二三 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-1 完掘状況(南西から)
- S I-1 土層堆積状況(南東から)
- S I-1 如完掘状況(南西から)
- S I-1 如土層堆積状況(南東から)
- S I-1 P5完掘状況(南東から)
- S I-1 P5土層堆積状況(南西から)
- S I-1 D2完掘状況(南東から)
- S I-1 D2土層堆積状況(南東から)

図版二四 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-1 遺物出土状況(南から)
- S I-1 遺物出土状況近景(北から)
- S I-1 遺物出土状況近景(北から)
- S I-1 遺物出土状況近景(東から)
- S I-1 勾玉出土状況近景(西から)
- S I-1 掘方状況(南西から)
- S I-2 完掘状況(東から)
- S I-2 土層堆積状況(南から)

図版二五 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-2 土層堆積状況(東から)
- S I-2 P2土層堆積状況(南から)
- S I-2 遺物出土状況(東から)
- S I-2 紡錘車出土状況近景(東から)
- S I-3A 完掘状況(南東から)
- S I-3A 土層堆積状況(南から)
- S I-3A カマド完掘状況(南東から)
- S I-3A カマド土層堆積状況(東から)

図版二六 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-3A P5完掘状況(南東から)
- S I-3A P5土層堆積状況(南東から)
- S I-3A 遺物出土状況(南西から)
- S I-3A 遺物出土状況近景(東から)
- S I-3B 完掘状況(南東から)
- S I-3B 掘方完掘状況(南東から)
- S I-3B カマド完掘状況(南東から)
- S I-3B カマド完掘状況(南西から)

図版二七 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-4 完掘状況(南から)
- S I-4 土層堆積状況(南から)
- S I-4 カマド完掘状況(南から)
- S I-4 カマドAライン土層堆積状況(南から)
- S I-4 カマドBライン土層堆積状況(東から)
- S I-4 遺物出土状況(南から)
- S I-5 完掘状況(南から)
- S I-5 土層堆積状況(東から)

図版二八 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代(遺構)

- S I-5 カマド完掘状況(南から)
- S I-5 カマド土層堆積状況(南から)
- S I-5 P1完掘状況(南から)
- S I-5 遺物出土状況(南から)
- S B-22 完掘状況(西から)
- S D-12、S X-19・20・21 完掘状況(南から)
- S D-12 Gライン土層堆積状況(南から)
- S D-12 Hライン土層堆積状況(東から)

図版二九 砂田姥沼遺跡2区 古墳時代・時期不明(遺構)

- S D-12 Gライン土層堆積状況近景(南から)
- S X-19 完掘状況(西から)
- S X-19 Aライン土層堆積状況(南東から)
- S X-20 完掘状況(西から)
- S X-20 Cライン土層堆積状況(南から)
- S X-20 Cライン土層堆積状況近景(南から)
- S X-21 Eライン土層堆積状況(南から)
- S B-15 完掘状況(南東から)

図版三〇 砂田姥沼遺跡2区 時期不明(遺構)

- S D-6 土層堆積状況(東から)
- S D-7 土層堆積状況(南から)
- S D-8 土層堆積状況(北東から)
- S D-9 完掘状況(東から)
- S D-9 土層堆積状況(西から)
- S K-10 完掘状況(南西から)
- S K-11 完掘状況(南西から)
- S K-13 完掘状況(東から)

図版三一 砂田姥沼遺跡2区 時期不明(遺構)

- S K-14 完掘状況(東から)
- S K-16 完掘状況(東から)
- S K-17 完掘状況(東から)
- S K-18 完掘状況(南東から)
- S K-23・P-126 完掘状況(南から)
- S K-24 完掘状況(東から)
- 東区 ビット群全景(西から)
- 東区 ビット群全景(東から)

図版三二 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代(遺構)

- S I-1 完掘状況(東から)
- S I-1 土層堆積状況(南から)
- S I-1 カマド完掘状況(南から)
- S I-1 カマド土層堆積状況(東から)
- S I-1 P5完掘状況(南から)
- S I-1 P5土層堆積状況(南から)
- S I-1 遺物出土状況(南から)
- S I-1 遺物出土状況近景(南から)

図版三三 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代(遺構)

- S I-2 完掘状況(西から)
- S I-2 土層堆積状況(東から)
- S I-2 カマド完掘状況(南から)
- S I-2 カマド土層堆積状況(東から)
- S I-2 P3完掘状況(南から)
- S I-2 D3土層堆積状況(南から)
- S I-2 D4完掘状況(西から)
- S I-2 遺物出土状況(南から)

図版三四 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代(遺構)

- S I-2 遺物出土状況近景(南から)
- S I-2 遺物出土状況近景(南から)
- S I-2 完掘状況(東から)
- S I-3 土層堆積状況(南から)
- S I-3 P5土層堆積状況(南から)
- S I-3 P5土層堆積状況(東から)
- S I-3 D7完掘状況(南から)

- S1-3 D7 土層堆積状況 (南から)
- 図版三五 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代 (遺構)
- S1-3 D2 完備状況 (南から)
- S1-3 D2 土層堆積状況 (南から)
- S1-3 D3 完備状況 (南から)
- S1-3 D3 土層堆積状況 (南から)
- S1-3 D4 完備状況 (南から)
- S1-3 D4 土層堆積状況 (南から)
- S1-3 D5 完備状況 (南から)
- S1-3 D5 土層堆積状況 (南から)
- 図版三六 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代 (遺構)
- S1-3 D6 完備状況 (南から)
- S1-3 D6 土層堆積状況 (南から)
- S1-3 遺物出土状況 (東から)
- S1-3 遺物出土状況近景 (南から)
- S1-4 完備状況 (南から)
- S1-4 土層堆積状況 (東から)
- S1-4 遺物出土状況 (西から)
- S1-4 石製模造品玉出土状況 (東から)
- 図版三七 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代 (遺構)
- S1-5 完備状況 (南西から)
- S1-5 土層堆積状況 (南東から)
- S1-5 土層堆積状況 (南西から)
- S1-5 土層堆積状況近景 (南西から)
- S1-5 炉完備状況 (東から)
- S1-5 炉土層堆積状況 (南西から)
- S1-5 遺物出土状況 (南西から)
- S1-5 太頭遺物出土状況近景 (南東から)
- 図版三八 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代 (遺構)
- S1-5 完備状況 (南から)
- S1-5 土層堆積状況 (南西から)
- S1-5 完備状況 (東から)
- S1-5 完備状況 (西から)
- S1-5 完備状況 (南から)
- S1-5 Aライン土層堆積状況 (南から)
- S1-5 Bライン土層堆積状況 (南から)
- S1-5 Cライン土層堆積状況 (南から)
- 図版三九 砂田姥沼遺跡3区 古墳時代・古代 (遺構)
- S1-6 Dライン土層堆積状況 (北から)
- S1-6 完備状況 (南から)
- S1-6 土層堆積状況 (東から)
- S1-6 カマド完備状況 (南から)
- S1-6 カマド土層堆積状況 (東から)
- S1-6 遺物出土状況 (南から)
- S1-6 遺物出土状況 (北から)
- S1-7 掘方状況 (西から)
- 図版四〇 砂田姥沼遺跡3区 古代・時期不明 (遺構)
- S1-7 土層堆積状況 (南から)
- S1-7 完備状況 (東から)
- S1-7 Aライン土層堆積状況 (南から)
- S1-7 Bライン土層堆積状況 (東から)
- S1-7 完備状況 (東から)
- S1-7 土層堆積状況 (南から)
- S1-7 完備状況 (西から)
- S1-7 完備状況 (東から)
- 図版四一 砂田姥沼遺跡3区 時期不明 (遺構)
- S1-9 完備状況 (北から)
- S1-9 土層堆積状況 (北から)
- S1-10・11 完備状況 (南から)
- S1-12 完備状況 (南から)
- S1-12 完備状況 (西から)
- S1-12 土層堆積状況 (北から)
- S1-13 完備状況 (南から)
- S1-13 土層堆積状況 (南から)
- 図版四二 砂田姥沼遺跡3区 時期不明 (遺構)
- S1-14 完備状況 (南西から)
- S1-14 Bライン土層堆積状況 (南から)
- S1-15 完備状況 (南西から)
- S1-16 完備状況 (南西から)
- S1-17 完備状況 (南西から)
- SD-17 H・SD-18A Jライン土層堆積状況 (東から)
- SD-18A 完備状況 (南から)
- SD-18A Fライン土層堆積状況 (南西から)
- 図版四三 砂田姥沼遺跡3区 時期不明 (遺構)
- SD-18A Gライン土層堆積状況 (南西から)
- SD-18B 完備状況 (北東から)
- SD-18A・B Jライン土層堆積状況 (北から)
- SD-18A・B 土層堆積状況 (北から)
- SD-19 完備状況 (北東から)
- SD-25 完備状況 (北から)
- SD-25 Kライン土層堆積状況 (北から)
- SK-26 完備状況 (西から)
- 図版四四 砂田姥沼遺跡3区 時期不明 (遺構)
- SK-27 完備状況 (南から)
- SK-28・SB-48 P5 完備状況 (北から)
- SK-29 完備状況 (南から)
- SK-31 完備状況 (南から)
- SK-32 完備状況 (南から)
- SK-33 完備状況 (東から)
- SK-34 完備状況 (南から)
- SK-35 完備状況 (東から)
- 図版四五 砂田姥沼遺跡3区 時期不明 (遺構)
- SK-28・36 完備状況 (北西から)
- SK-38 完備状況 (東から)
- SK-39 完備状況 (南から)
- SK-40 完備状況 (南から)
- SK-41 完備状況 (南から)
- SK-42・P-39・30 完備状況 (南から)
- SK-44 完備状況 (南から)
- 東区 ビット群全景 (西から)
- 図版四六 砂田姥沼遺跡1区 中世以降 (遺構)
- SE-1 完備状況 (南から)
- SE-1 土層堆積状況 (南から)
- SE-1 底部完備状況 (南から)
- SE-1 土層堆積状況下部 (南から)
- SE-2 完備状況 (南から)
- SE-2 土層堆積状況近景 (南から)
- SK-4 完備状況 (南から)
- SK-4 遺物出土状況 (南から)
- 図版四七 砂田姥沼遺跡1区 中世以降・時期不明 (遺構)
- SD-18 完備状況 (南から)
- SD-18 Aライン土層堆積状況 (南から)
- SD-3 完備状況 (南から)
- SD-3 Cライン土層堆積状況 (南から)
- SD-15・16・17 完備状況 (南から)
- SD-15・16・17 Aライン土層堆積状況 (南から)
- SD-15 杭柱出土状況 (南から)
- SD-16 土層堆積状況 (南から)
- 図版四八 砂田姥沼遺跡1区 時期不明 (遺構)
- SK-5 完備状況 (北から)
- SK-6 完備状況 (南から)
- SK-8 完備状況 (南から)
- SK-9・10 完備状況 (南西から)
- SK-11 完備状況 (南西から)
- SK-12 完備状況 (南西から)
- SK-13 完備状況 (南西から)
- SK-14 完備状況 (南西から)
- 図版四九 砂田姥沼遺跡2区 時期不明 (遺構)
- SE-26 完備状況 (南東から)
- SE-26 土層堆積状況 (南から)
- SE-33 完備状況 (南東から)
- SE-33 土層堆積状況 (南から)
- SE-50 完備状況 (南から)
- SE-50 土層堆積状況 (南から)
- SK-4 完備状況 (東から)
- SK-6 完備状況 (東から)
- 図版五〇 砂田姥沼遺跡2区 時期不明 (遺構)
- SK-7 完備状況 (東から)
- SK-8 完備状況 (東から)
- SK-9 完備状況 (南から)

- SK-10 完掘状況 (東から)
- SK-11・12 完掘状況 (東から)
- SK-13 完掘状況 (東から)
- SK-14・15・16 完掘状況 (東から)
- SK-17 完掘状況 (東から)

図版五一 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SK-18 完掘状況 (東から)
- SK-19・44 完掘状況 (東から)
- SK-20 完掘状況 (東から)
- SK-21 完掘状況 (東から)
- SK-22 完掘状況 (南から)
- SK-23 完掘状況 (南から)
- SK-24 完掘状況 (東から)
- SK-25 完掘状況 (南から)

図版五二 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SK-27 完掘状況 (南から)
- SK-28 完掘状況 (南から)
- SK-29 完掘状況 (南東から)
- SK-30 完掘状況 (南から)
- SK-31 完掘状況 (南から)
- SK-32 完掘状況 (南から)
- SK-37 完掘状況 (東から)
- SK-38 完掘状況 (東から)

図版五三 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SK-39 完掘状況 (南から)
- SK-40 完掘状況 (南から)
- SK-41 完掘状況 (東から)
- SK-42 完掘状況 (東から)
- SK-48 完掘状況 (南から)
- SK-53 完掘状況 (南から)
- SK-62 完掘状況 (東から)
- SK-64 完掘状況 (南東から)

図版五四 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SD-1 完掘状況 (西から)
- SD-1 土層堆積状況 (東から)
- SD-2 完掘状況 (西から)
- SD-2 土層堆積状況 (東から)
- SD-3・52・55・57 完掘状況 (北西から)
- SD-3 完掘 (南から)
- SD-3 土層堆積状況 (南から)
- SD-3・35 Eライン土層堆積状況 (東から)

図版五五 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SD-5 完掘状況 (南から)
- SD-5 土層堆積状況 (南から)
- SD-52 完掘状況 (南から)
- SD-52 調査区南壁面 土層堆積状況 (北から)
- SD-35・52 Lライン土層堆積状況 (東から)
- SD-52・57 Hライン土層堆積状況 (西から)
- SD-58・59・65・66
・69・71 完掘状況 (南西から)
- SD-58・59 完掘状況 (南から)

図版五六 砂田瀧遺跡2区 時期不明 (遺構)

- SD-59・SE-50 完掘状況 (南東から)
- SD-58・59 完掘状況 (南から)
- SD-59 Tライン土層堆積状況 (東から)
- SD-59・SK-63 土層堆積状況 (南から)
- SD-58・59 土層堆積状況 (南から)
- SD-69 Rライン土層堆積状況 (東から)
- SD-68 調査区西壁面 土層堆積状況 (東から)
- SD-71・SK-72 土層堆積状況 (西から)

図版五七 砂田瀧遺跡3区 時期不明 (遺構)

- A区 全景 (北から)
- A区 全景 (北から)
- A区 P-1 完掘状況 (東から)
- A区 SD-1 土層堆積状況 (西から)
- A区 SD-1・2 Bライン土層堆積状況 (南から)
- A区 北側拡張状況 (東から)
- A区 北側拡張 SK-1 完掘状況 (南東から)
- A区 SK-1 土層堆積状況 (南から)

図版五八 砂田瀧遺跡3区 時期不明 (遺構)

- B区 全景 (南西から)
- B区 S-1 坡上遺構 完掘状況 (南から)
- B区 S-1 坡上遺構 土層堆積状況 (南西から)
- B区 S-1 坡上遺構 土層堆積状況 (南から)
- B区 S-2 坡上遺構 完掘状況 (南から)
- B区 S-2 坡上遺構 土層堆積状況 (南東から)
- C区 SD-2・3 完掘状況 (南から)
- C区 SD-2・3 Aライン土層堆積状況 (南から)

図版五九 砂田姥遺跡・砂田瀧遺跡 縄文時代 (遺物)

遺構外出土器

図版六〇 砂田姥遺跡・砂田瀧遺跡 縄文・弥生時代 (遺物)

遺構外出土器
遺構外出土器

図版六一 砂田姥遺跡1区 古墳時代 (遺物)

- 1-S1-1 出土土器
- 1-S1-2 出土土器
- 1-S1-3 出土土器
- 1-S1-4 出土土器
- 1-S1-6 出土土器
- 1-S1-7 出土土器
- 1-S1-8 出土土器
- 1-S1-9 出土土器

図版六二 砂田姥遺跡1区 古墳時代 (遺物)

- 1-S1-9 出土土器
- 1-S1-10 出土土器
- 1-S1-11 出土土器
- 1-S1-12 出土土器

図版六三 砂田姥遺跡1区 古墳時代 (遺物)

- 1-S1-12 出土土器
- 1-S1-14 出土土器
- 1-S1-15 出土土器
- 1-S1-16 出土土器

図版六四 砂田姥遺跡1区 古墳・奈良・平安時代・
時期不明、姫道2区 古墳時代 (遺物)

- 1-S1-13 出土土器
- 1-S1-16 出土土器
- 1-S1-18 出土土器
- 1-S1-22 出土土器
- 1-S1-26・27 出土土器
- 2-S1-1 出土土器

図版六五 砂田姥遺跡2・3区 古墳時代 (遺物)

- 2-S1-1 出土土器
- 2-S1-2 出土土器
- 2-S1-5 出土土器
- 3-S1-1 出土土器
- 3-S1-2 出土土器

図版六六 砂田姥遺跡3区 古墳時代 (遺物)

- 3-S1-2 出土土器
- 3-S1-3 出土土器
- 3-S1-4 出土土器

図版六七 砂田姥遺跡3区 古墳・奈良・平安時代、
砂田瀧遺跡1・2区 中・近世 (遺物)

- 3-S1-4 出土土器
- 3-S1-5 出土土器
- 3-S1-6 出土土器
- 遺1-S-E-1 出土土器
- 遺1-S-K-4 出土土器
- 遺1-S-D-18 出土土器
- 遺2-S-D-35 出土土器
- 遺2-S-D-52 出土土器

図版六八 砂田姥遺跡出土金属製品

- 2-S1-1 出土鉄製品 (鉄鏃)
- 3-S1-1 出土鉄製品 (鉄鏃)・銅製品 (耳環)
- 3-S1-4 出土鉄製品 (刀子)

砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡 遺構一覧・検索表

砂田姥沼遺跡 1 区

古墳時代の埴穴建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	掘削ページ	
SI - 1	103 - 38		隅丸方形	N - 22°	→ W	4.42	4.20	0.20	4	カマド 1	1	有	38・40・41
SI - 2	103 - 38		隅丸方形	N - 31°	→ W	3.55	3.47	0.13	4	カマド 1	1	有	41 ~ 43
SI - 3 A	103 - 37 104 - 37	SD - 19・21	隅丸長方形	N - 22°	→ W	5.48	5.04	0.19	4	カマド 1	1	有	43 ~ 46
SI - 3 B	103 - 37 104 - 37	SD - 19・21		N - 0°					4				46・47
SI - 4	103 - 37		隅丸長方形	N - 13°	→ W	4.14	3.69	0.19	2	炉 1	1		47 - 49
SI - 5	103 - 38		隅丸長方形	N - 18°	→ E	3.88	3.30	0.09	4	カマド 1	1		50・51
SI - 6	102 - 38 103 - 38		隅丸長方形	N - 44°	→ W	7.04	6.82	0.52	8	炉 1	1	有	51 ~ 58
SI - 7	102 - 37 102 - 38		隅丸長方形	N - 30°	→ W	5.68	5.54	0.20	4	炉 1	1		58 ~ 62
SI - 8	102 - 37		隅丸長方形	N - 34°	→ W	3.82	3.10	0.12		炉 1			62 ~ 64
SI - 9	102 - 37		隅丸長方形	N - 29°	→ W	3.40	2.42	0.20	2	カマド 1			64 ~ 66
SI - 10	102 - 36 102 - 37		隅丸長方形	N - 7°	→ W	3.30	2.74	0.37		炉 1	1		66 ~ 70
SI - 11	101 - 36 102 - 36		隅丸長方形	N - 1°	→ E	4.48	3.66	0.35	4	カマド 1	1	有	70 ~ 72
SI - 12	101 - 36・37 102 - 36・37		隅丸方形	N - 40°	→ W	4.89	4.82	0.18	4	炉 1	1		73 ~ 76
SI - 14	100 - 36		隅丸方形	N - 22°	→ E	5.91	5.64	0.39	4	カマド 1	1	有	76 ~ 81
SI - 15	99 - 37		隅丸長方形	N - 6°	→ E	3.43	2.37	0.30		カマド 1			81 ~ 83
SI - 16	98 - 35		隅丸方形	N - 4°	→ W	4.66	4.62	0.23	4	カマド 1	1	有	83 ~ 90
SI - 17	98 - 35 98 - 36	SI - 18	隅丸長方形	N - 4°	→ W	4.72	4.52	0.14	4	カマド 1	1	有	90 ~ 92
SI - 18	98 - 36	SI - 17	隅丸長方形	N - 42°	→ W	5.05	4.58	0.17	4	カマド 1	1	有	92 ~ 96

古墳時代の竪立柱建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	掘削ページ
SB-34	99-37	SD-29	長方形	N-20°	→ W	桁行 2 間	× 梁間 2 間	3.47 × 2.75				96・97
SB-83	100-36・37		長方形	N-10°	→ E	桁行 2 間	× 梁間 2 間	4.39 × 3.74				97・98

古墳時代の方形区画遺構

遺構番号	グリッド	重層関係	形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	掘削ページ
SX-28	100-36 101-36	SD-21・81	隅丸方形	N-24°	→ E	長軸 10.3 × 短軸 10.1	遊台形 1.91 ～ 0.79	土 師 系 403 片 (円・部・ 黄・小形車) 直造器製部 片 1	98・101

奈良・平安時代の埴穴建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	掘削ページ
SI-13	100-37 101-37		隅丸長方形	N-15° → E	5.20	3.68	0.15		炉 1			101 ~ 103

近世以降の溝跡遺構

遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	掘削ページ
SD-26	99-34・35・36・37 100-35	SD-27・81			2.46	0.69	0.63 ~ 0.41		104・107
SD-27	99-35・36・37, 100-35	SD-26・81			2.15 ~ 1.05	0.55	0.54 ~ 0.40		104・107
SD-81	99-35・36・37, 100-35, 101-36	SD-26・27			1.08 ~ 0.75	0.53	0.10 ~ 0.02		104・107
SD-85	99-35, 100-35	SD-26			1.46 ~ 1.08	0.58	0.43 ~ 0.24		104・108

時期不明の竪立柱建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	掘削ページ
SB-31	103-38		長方形	N-33°	→ W	桁行 2 間	× 梁間 1 間	2.16 × 1.79				108
SB-32	102-37		長方形	N-28°	→ W	桁行 1 間	× 梁間 2 間	2.32 × 2.36				109
SB-33	103-37 99-36		正方形	N-17°	→ E	桁行 2 間	× 梁間 2 間	2.70 × 2.67				109・110

時期不明の井戸

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	掲載ページ
SE-40	101-38		楕円形	N-29°-W	1.71	1.31	1.51	5 (壁)	110・111

時期不明の溝跡遺構							() : 推定値	[] : 残存値
遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	距離ページ
SD - 19	103 - 37, 104 - 37・38	SD - 20・21	船底状	2.11 ~ 0.96	0.34 ~ 0.24	0.52 ~ 0.31		111・112
SD - 20	104 - 38	SD - 19	船底状	1.38 ~ 0.48	0.31 ~ 0.17	0.27 ~ 0.13		111・112
SD - 21	101 - 36, 102 - 36, 103 - 37	SD - 19・22・23, 9 - 3・10・12	船底状	2.52 ~ 0.98	0.84	0.60 ~ 0.12		111・112・114
SD - 22	101 - 35・36・37, 102 - 37・38	SD - 21・23, SI - 12	船底状	1.44 ~ 0.80	0.95	0.79 ~ 0.08		113 ~ 115
SD - 23	101 - 37・38, 102 - 36・37	SD - 21・22, SI - 12, SK - 24・25	船底状	0.98 ~ 0.46	0.61	0.42 ~ 0.04		113 ~ 116
SD - 29	99 - 36・37	SD - 26・27・81		0.77 ~ 0.38	0.41 ~ 0.07	0.18 ~ 0.05		104・116

時期不明の土坑は20基 (SK 24・25・SK 35 ~ 39, SK 41 ~ 51, SK 80・82・84) は第26表 (p116・118) を参照。

時期不明の小穴28基 (P 52 ~ P 79) は第28表 (p120) を参照。

砂田姥沼遺跡 2区

古墳時代の竪穴建物跡

古墳時代の竪穴建物跡										() : 推定値		[] : 残存値	
遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	土軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	距離ページ	
SI - 1	104 - 49		隅丸方形	N - 39°	← W	6.52	6.65	0.47	4	葬1	1	有	122・124 ~ 131
SI - 2	104 - 40		不明	N - 8°	← W	7.18	[4.04]	0.37	2			有	131 ~ 135
SI - 3 A	104 - 40		隅丸長方形	N - 32°	← W	5.80	4.92	0.24	4	カマド1	1		135 ~ 139
SI - 3 B	104 - 40		隅丸長方形	N - 34°	← W	5.50	3.28	0.19	2	カマド1		有	137 ~ 139
SI - 4	104 - 39	SK - 13	隅丸長方形	N - 11°	← W	5.14	4.08	0.15	4	カマド1			139 ~ 141
SI - 5	105 - 37		隅丸長方形	N - 30°	← E	4.23	2.98	0.35		カマド1			142 ~ 144

古墳時代の竪立柱建物跡

古墳時代の竪立柱建物跡										() : 推定値	[] : 残存値
遺構番号	グリッド	重層関係	形状	土軸	前行	後行	壁行	距離 (m)	距離ページ		
SB - 22	104 - 40		長方形	N - 8°	← W	前行 1 間	≡ 壁間 1 間	1.88 × 1.54	144		

古墳時代の溝跡遺構

古墳時代の溝跡遺構										() : 推定値	[] : 残存値
遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	距離ページ			
SD - 12	105 - 36	SD - 8, SK - 19・20・21		[4.5]	[1.10 ~ 0.95]	0.99 ~ 0.89	罌	145・146			

古墳時代の道路状遺構

遺構番号	グリッド	重層関係	形状	土軸	短軸 (m)	短軸深さ (m)	遺物	距離ページ
SX - 19 A	105 - 36	SD - 8, SX - 19B・20	N - 90°	← W	長軸 [3.1] × 短軸 0.5	0.50 ~ 0.11		147 ~ 149・
SX - 19 B	105 - 36	SD - 8, SX - 19A	N - 72°	← W	長軸 [2.5] × 短軸 0.6	0.52 ~ 0.10		147 ~ 149
SX - 20	105 - 36	SD - 8, SX - 19・21	N - 34°	← W	長軸 [5.0] × 短軸 1.2	0.49 ~ 0.11		148 ~ 151
SX - 21	105 - 36	SD - 8, SX - 20	N - 63°	← W	長軸 [4.4] × 短軸 1.5	0.58 ~ 0.12		148・150 ~ 152

時期不明の竪立柱建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	形状	土軸	前行	後行	壁行	間幅 (m)	距離ページ
SB-15	104-39	SD-6・7	長方形	N-12°	←W	前行 2 間	≡ 壁間 2 間	4.82 × 3.01	152・153

時期不明の溝跡遺構

遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	距離ページ
SD - 6	104 - 39	SB - 15	舟底状	0.55 ~ 0.28	0.35 ~ 0.14	0.09 ~	1 (輪物石)	153
SD - 7	104 - 39	SB - 15	舟底状	0.53 ~ 0.37	0.35 ~ 0.12	0.13 ~		153・154
SD - 8	105 - 36	SD - 12, SX - 19・20・21	舟底状	1.22 ~ 1.06	0.32	0.91 ~ 0.75	罌	154・155
SD - 9	104 - 37, 105 - 36・37		舟底状	0.72 ~ 0.61	0.27 ~ 0.19	0.40 ~ 0.16	罌	155

時期不明の土坑は9基 (SK 10・11・13・14・17・18・23・24) は第37表 (p156) を参照。

時期不明の小穴125基 (P1 ~ P37, P39 ~ P61, P63 ~ P66, P68 ~ P129) は第38表 (p157・158) を参照。

砂田姥沼遺跡 3区

古墳時代の竪穴建物跡

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	土軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	壁溝	距離ページ	
SI - 1	99 - 38	SB - 49 P - 68 SD - 12	隅丸方形	N - 2°	← W	6.68	6.62	0.36	4	カマド1	1	有	166 ~ 175
SI - 2 A	99 - 38	SK - 44 SB - 49	(隅丸方形)	N - 2°	← W	7.72	[3.35]	0.37	2	カマド1	1	有	175 ~ 181

SI - 2 B 99 - 38	SD - 12 SK - 44 SB - 49 SD - 12	(隅丸方形)	N - 6°	→ W	6.92	[4.62]		2	カマド 1	1	有	177・181
SI - 2 C 99 - 38	SK - 44 SB - 49 SI - 4	(隅丸方形)	N - 1°	→ E	6.08	[3.20]		2	カマド 1	1	有	177・181・182
SI - 3 A 99 - 38	SK - 38・38・ SB - 47・ SA - 46 SI - 4, SK -	(隅丸方形)	N - 7°	→ W	7.01	6.96	0.30	4		1	有	182 - 187
SI - 3 B 99 - 38	38, SB - 47, (隅丸方形) SA - 46 SI - 4, SK -							4		1		185・187・188
SI - 3 C 99 - 38	38, SB - 47, (隅丸方形) SA - 46							4		1		185・189
SI - 4 A 99 - 38 100 - 38	SI - 3, SA - 46		N - 14°	→ E	6.73	[2.58]	0.26	2				188 - 192
SI - 4 B	SI - 3, SA - 46							2				189・192・193
SI - 5 99 - 39	SK - 32・35, SB - 48, P - 29・32・35	隅丸長方形	N - 33°	→ W	4.57	4.04	0.31	4	炉 1			193 - 196

古墳時代の竪立柱建物跡・櫓州

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	東面関係	形状	主軸	前行	後行	埋没 (m)	距離 (m)	距離 (m)
SB-45	99-37・38	SD-10・11 SI-5・SK-28・36	長方形	N- 2°	→E	櫓行 3 間 × 梁間 2 間	6.17 × 4.46	196・197	
SB-48	99-39		長方形	N- 20°	→W	櫓行 2 間 × 梁間 2 間	4.37 × 3.42	197・198	
SB-50	99-38 100-38		長方形か	N- 10°	→W	櫓行 [4] 間 × 梁間 3 間	[5.72] × 5.37	198・200	
SA-46	99-39 100-38	SI-3・4		N- 74°	→W	櫓行 4 間	10.50	198・200	

古墳時代の溝跡遺構

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	東面関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	距離 (m)
SD-20A			浅い凹状	4.95 ~ 3.75	1.90 ~ 1.45	0.36		
SD-20B			舟底状	5.10 ~ 2.24	1.38 ~ 0.55	0.62 ~ 0.47		
SD-20C			逆台形	—	—	—		
SD-20D	100-33・34	SK-22・23	逆台形	—	—	—	179 (埴・埴・高坪)	200 ~ 203
SD-20E			逆台形	—	—	—		
SD-20F			逆台形	—	—	—		
SD-20G			逆台形	—	—	—		
SD-20H			舟底状	—	—	—		

奈良・平安時代の形穴建物跡

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	東面関係	平面形状	主軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	柱穴	火竈	貯蔵穴	埋没	距離 (m)
SI-6 99-39		SI-7, SD-12, SK-41, P-21・22・36 SI-6, SD-12, SK-37・40・41・42	隅丸長方形	N- 1°	→W	4.18	3.61	0.46	1	カマド1	有	203・207
SI-7 99-39				N- 15°	→E	[6.10]	[12.0]	0.15	1			207・208

奈良・平安時代の道路遺構

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	重なり関係	主軸	最大径 (m)	最小径 (m)	深さ (m)	遺物	掲載ページ
SX-22	100-34・35	SD-20	N-75° →W	3.49	[0.35]	0.35	土師器 16 片 (杯・甕)	208 ~ 211
SX-23	100-34	SD-20	N-43° →W	6.11	1.79	0.08	-	209 ~ 212

時期不明の竪立柱建物跡

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	東面関係	形状	主軸	前行	後行	埋没 (m)	距離 (m)
SB-47 99-38		SI-3 SK-38	長方形	N- 15°	→E	櫓行 2 間 × 梁間 2 間	3.96 × 3.19	212・213
SB-49 99-38		SI-1・2	長方形	N- 1°	→E	櫓行 1 間 × 梁間 1 間	2.45 × 2.26	213・214

時期不明の溝跡遺構

() : 推定値 () : 残存値

遺構番号	グリッド	東面関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	距離 (m)
SD-10 99-37, 100-37		SB-45	逆台形	0.42 ~ 0.22	0.24 ~ 0.04	0.09 ~ 0.01	—	214
SD-11 99-37, 100-37		SB-45	逆台形	0.48 ~ 0.20	0.10 ~ 0.04	0.09 ~ 0.01	4 (砂)	214・219・220

SD - 12 99 - 38・39	SI - 2・6・7, SK - 39・44, SD - 13, P - 56	逆台形	0.68 ~ 0.26 0.24 ~ 0.08 0.28 ~ 0.01	30 (雲・灰・磁器)	214・215・219・220
SD - 13 99 - 39	SD - 12・14・15	要訳状	1.01 ~ 0.76 0.20 ~ 0.12 0.64 ~ 0.32	65 (雲・灰・磁器・瓦)	216 ~ 220
SD - 14 99 - 39・40	SD - 13・15	舟底状	1.72 ~ 1.44 0.44 ~ 0.28 0.46 ~ 0.20	90 (雲・灰・磁器・瓦)	216 ~ 220
SD - 15 99 - 39・40	SD - 14	逆台形	0.28 ~ 0.14 0.12 ~ 0.04 0.03 ~ 0.02	4 (灰)	216 ~ 218
SD - 16 99 - 39		逆台形	0.62 ~ 0.36 0.44 ~ 0.32 0.07 ~ 0.01	3 (雲・灰)	216 ~ 218
SD - 17 99 - 39・40	SD - 18B・25	逆台形	1.16 ~ 0.58 0.68 ~ 0.30 0.28 ~ 0.05	14 (雲・灰・磁・粘土)	216 ~ 218
SD - 18A 99 - 40	SD - 18B・25	舟底状	2.92 ~ 2.22 1.02 ~ 0.32 0.68 ~ 0.01	39 (雲・灰・磁器・瓦)	217 ~ 219
SD - 18B 99 - 39・40	SD - 17・18A・25	舟底状	1.00 0.36 ~ 0.28 0.32 ~ 0.07		217 ~ 219
SD - 19 99 - 40		逆台形	0.60 ~ 0.38 0.30 ~ 0.14 0.19 ~ 0.09		217 ~ 219
SD - 25 99 - 40	SD - 17・18A・18B	不整形	0.92 ~ 0.62 0.38 ~ 0.26 0.20 ~ 0.02	3 (雲・灰)	217 ~ 220

時期不明の土坑は 19 基 (SK 26 ~ SK 44) は第 51 表 (p220・221・223) を参照。

時期不明の小穴 60 基 (P2・4 ~ 9, P 11 ~ 51, P 53・54, P 56 ~ 61, P 67・69・70) は第 53 表 (p227) を参照。

砂田遺跡跡 1 区

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	土軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SK - 1	115 - 25		楕円形	N - 87°	→ E	1.03	0.84	1.76	黒石 1
SK - 2	115 - 23		円形			1.63	1.55	1.92	237・238

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	土軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SK - 4	115 - 22		円形			1.17	1.15	0.46	須磨製銅片

遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SD - 18	115 - 19, 116 - 19	SD - 19		1.34 ~ 0.96	0.24 ~ 0.08	0.54 ~ 0.33	腐り鉄片・矢羽鉋底部 片など。	239・240

遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SD - 3	115 - 21, 116 - 21			2.71 ~ 1.18	0.82 ~ 0.58	0.41 ~ 0.08		240・241
SD - 15	115 - 19, 116 - 19	SD - 16		0.72 ~ 0.23	0.53 ~ 0.05	0.17 ~ 0.05		240 ~ 242
SD - 16	115 - 19, 116 - 19	SD - 15		0.32	0.04	0.21		241・242
SD - 17	115 - 19, 116 - 19			1.08 ~ 0.37	0.26 ~ 0.06	0.26 ~ 0.14		241・242
SD - 20	116 - 20			0.44 ~ 0.32	0.05 ~ 0.04	0.06		241・242

時期不明の土坑は 8 基 (SK 6・8 ~ 14) は第 61 表 (p243・244) を参照。

砂田遺跡跡 2 区

遺構番号	グリッド	重層関係	平面形状	土軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SE - 26	116 - 24		円形		1.29	1.20	1.33	須磨製銅片	245・246
SE - 33	117 - 23		不整形円形	N - 73°	→ W	1.87	1.76	1.45	木片
SE - 50	116 - 21		不整形円形		0.96	0.91	0.83	—	245・246

遺構番号	グリッド	重層関係	断面形状	土軸 (m)	土軸 (m)	深さ (m)	遺物	断面ページ
SD - 1	120 - 25・26	逆台形		0.62 ~ 0.39	0.39 ~ 0.17	0.11 ~		246・247
SD - 2	120 - 24・25	逆台形		0.50 ~ 0.12	0.23 ~ 0.06	0.24 ~		247
SD - 3	118 - 20 ~ 24, 120 - 24	SD - 35・36・59	逆台形	1.24 ~ 0.34	0.70 ~ 0.45	0.16 ~ 0.05		247 ~ 250・252
SD - 5	120 - 21	舟底状		0.66 ~ 0.38	0.27 ~ 0.14	0.17 ~ 0.09		255・256・258
SD - 34	116 - 24・25, 117 - 24, 118 - 24	SK - 41		1.26 ~ 0.64	0.76 ~ 0.51	0.20 ~ 0.03		259・260
SD - 35	117 - 21, 118 - 21 ~ 25	SD - 3・52	丸底	0.72 ~ 0.18	0.42 ~ 0.15	0.95 ~ 0.70		248 ~ 250・253・259
SD - 36	118 - 22・23・24	SD - 3	丸底	0.36 ~ 0.20	0.25	0.80 ~ 0.60		248 ~ 250
SD - 51	116 - 21, 117 - 21・22	SD - 52	不明	0.51 ~ 0.20	0.20 ~ 0.10	0.78 ~ 0.50		249・250
SD - 52	116 - 21, 117 - 20・21, 118 - 20・21	SD - 35・51・55・56・57・59	丸底 or 舟底	1.80 ~ 0.88	0.55 ~ 0.50	0.33 ~ 0.23		249 ~ 253
SD - 54	116 - 20, 117 - 20	SD - 55	不明	0.46 ~ 0.22	—	—		251 ~ 253
SD - 55	117 - 20, 118 - 20	SD - 52・54	不明	0.45 ~ 0.18	—	0.08 ~ 0.05		252・253
SD - 56	117 - 20, 118 - 20	SD - 52	不明	0.40 ~ 0.19	—	0.10 ~ 0.07		252・253
SD - 57	117 - 20, 118 - 20	SD - 52	不明	0.29 ~ 0.21	—	0.04		252・253
SD - 58	116 - 20, 117 - 20	SD - 61		2.15 ~ 0.18	1.34 ~ 0.12	0.20 ~ 0.18		252 ~ 254

SD-59	116-19・20, 117-20, 118-19・20, 119-20, 120-20・21	SD-3・52・58・61・65・66・68・69・70・74, SK-63	逆台形	1.55-0.76	1.05-0.38	0.51-0.12	252・254・255・258
SD-60	116-20	SD-61	不明	0.30-0.24	0.08-0.06	0.11-0.06	252・254
SD-61	117-20	SD-58・59・60	逆台形	0.68-0.20	0.44-0.18	0.22-0.01	256
SD-65	118-20, 119-20	SD-59	舟底状	0.96-0.25	0.34	0.13-0.08	255・256・258
SD-66	119-20	SD-59・69	逆台形	1.77-0.56	0.2	0.28-0.26	255・256・258
SD-68	117-19・20	SD-59	不明	0.57-0.15	—	0.10-0.06	255・254・256
SD-69	119-20	SD-66	逆台形	1.33-0.15	0.79	0.55-0.50	255・257・258
SD-70	120-20・21	SD-59・71	逆台形	1.76-1.28	1.05-0.80	0.11-0.05	255・257・258
SD-71	120-20	SD-70, SK-72	逆台形	1.70-1.42	0.44	0.39-0.03	252・257・258
SD-73	116・117-21	不明	不明	—	—	—	249・251
SD-74	120-20	SD-59	逆台形	—	—	0.23	257・258

時期不明の土坑は 46 基 (SK 4・6-25・27-32・37-49・53・62-64・72) は第 64 点 (p260・265) を参照。

時期不明の小穴 12 基 (P1-12) は第 65 点 (p265) を参照。

砂田灣遺跡 3 区

A 区の時期不明の溝跡遺構

遺構番号	グリッド	東西関係	断面形状	上軸 (m)	下軸 (m)	深さ (m)	() : 推定値	[] : 残存値
SD-1	121-24	SD-2・3・4, SK-1		1.64-1.18	0.82-0.32	0.36-0.02	遺物	拒載ページ
SD-2	120-24, 121-24	SD-1・3		1.56-0.70	0.50-0.28	0.31-0.05		268・269
SD-3	120-24, 121-24	SD-1・2, SK-1		0.68-0.28	0.24-0.11	0.13-0.01		268・269
SD-4	121-24	SD-1		2.06-2.24	1.16	0.63-0.42		268・269

A 区の時期不明の土坑・小穴

遺構番号	グリッド	東西関係	平面形状	上軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	() : 推定値	[] : 残存値
SK-1	121-24	SD-1・3	角円形	N-37°-E	1.02	0.88	0.36	—	270
P-1	121-24				58.0	36.5	56.6		270

B 区の時期不明の埴土遺構

遺構番号	グリッド	東西関係	平面形状	上軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	() : 推定値	[] : 残存値
S-1	119-21		角円形	N-40°-W	2.25	1.62	0.16	遺物	拒載ページ
S-2	119-21		不整形	N-30°-E	1.46	1.43	0.13	—	270・271

B 区の時期不明の小穴

遺構番号	グリッド	東西関係	平面形状	上軸	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	() : 推定値	[] : 残存値
P-2	119-21				72.0	45.0	46.8	—	271
P-3	119-21				32.5	24.0	12.3		271

C 区の時期不明の溝跡遺構

遺構番号	グリッド	東西関係	断面形状	上軸 (m)	下軸 (m)	深さ (m)	() : 推定値	[] : 残存値
SD-2	118-24, 119-24, 120-24	SD-3	不整形	0.68-0.27	0.37-0.15	0.26-0.09	遺物	拒載ページ
SD-3	118-24, 119-24, 120-24	SD-2	舟底状	1.05-0.43	0.82-0.20	0.26		272

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

宇都宮テクノポリス計画は、「高度な技術を持つ産業の集積、産・学・官の共同研究と技術交流による頭脳ネットワークの形成、そして自然と都市機能が調和した快適な生活環境づくり」を目標に栃木県が昭和58年7月新栃木時代創造計画で開発計画を策定し、翌年5月に高度技術工業集積地域開発促進法（テクノポリス法）に基づき 商産業省の開発計画の承認を受けた。

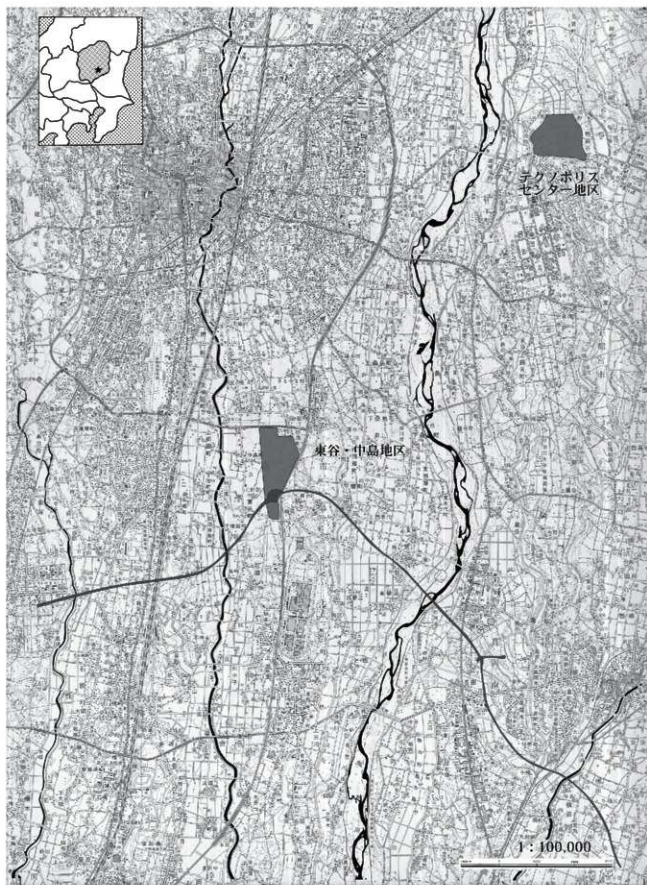
この開発計画を受け、昭和60年度より県企画部と県教育委員会が開発区域内遺跡の取り扱いについて協議が開始された。また、平成元年度には栃木県と宇都宮市が住宅・都市整備公団（以下「公団」という）に開発の要請を行った。公団はこれを了承し、平成2年度より開発区域の用地取得に入った。

公団が事業主体となるテクノポリス計画は、宇都宮テクノポリスセンター土地画整理事業と東谷・中島土地画整理事業の2地区である。前者事業区域は、宇都宮市野高野町・刈沼町・板戸町にまたがる地区（以下「センター地区」という）の177.2haに及び、「住宅」を核に県工業技術センター、産業支援施設、商業施設、民間研究施設、小・中学校などを整備したニュータウン計画で、テクノポリスが目指す「産・学・住・遊」の拠点整備を担う。後者事業区域は、宇都宮市東谷町・中島町・砂田町・平塚町・屋敷町・上横田町・西荊町と上三川町磯岡・西汗にまたがる地区（以下「東谷・中島地区」という）の137.5haに及び、北関東自動車道路や新4号国道などの広域交通網と結び付いた利便性を生かし流通業務施設や先端技術、高度技術産業の研究・工場などの整備を図ることにある。

平成2年7月には公団から県教育委員会へ事業区域内の埋蔵文化財の有無について照会がなされた。県教育委員会からの回答は、東谷・中島地区については「周知されている遺跡6か所と遺跡の可能性のある区域を含め、約90haの確認調査が必要」であった。その後、開発事業と埋蔵文化財調査のスケジュールを調整するため協議が継続された。

平成6年8月埋蔵文化財の保護と開発事業の円滑な推進を図るため、県教育委員会・宇都宮市・公団・埋蔵文化財センターの四者による事業区域内の分布調査が実施された。その結果、センター地区については「周知されている遺跡8か所・面積267,000㎡、試掘が必要な地点7か所・面積95,500㎡」、東谷・中島地区については「周知されている遺跡12か所・面積490,400㎡、試掘が必要な地点8か所・面積340,600㎡」であった。この結果を基に発掘調査を開始するための協議が行われ、同年9月1日付けで県教育委員会の調整のもと、公団と（財）栃木県文化振興事業団は「東谷・中島土地画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査を開始し、平成7年4月からは、周知されている遺跡の本調査と確認調査が継続して実施されている。センター地区については、平成7年9月1日付けで公団と（財）栃木県文化振興事業団が「宇都宮テクノポリスセンター地区埋蔵文化財発掘調査」の受託契約を締結し、確認調査が開始された。平成8年からは、調査規模の拡大に伴い宇都宮市が同地区の発掘調査を担当することになった。

なお、平成8年12月には東谷・中島地区、平成9年4月にはセンター地区の区画整理事業が各々建設大臣の事業認可を受け、開発事業が事実上開始された。このため、公団・県文化財課・宇都宮市・埋蔵文化財センターは、年数回の綿密な協議を重ねつつ開発事業計画に沿った発掘調査を行っている。なお、開発事業は平成11年から都市基盤整備公団、平成16年から都市再生機構に継承された。（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターは外郭団体の統廃合により平成12年度から（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターとして業務を継承している。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の方法

独立行政法人都市再生機構（旧住宅・都市整備公団および都市基盤整備公団）による東谷・中島土地両整理事業の事業区域は、東西約1.0 km、南北約2.5 kmの137.5haに及ぶ。

調査対象地区は、周知の遺跡範囲及び平成6年8月に県文化課により実施された事業予定地区内の遺跡踏査した成果に基づいて決定された。この結果、東谷・中島地区遺跡群の10地区12遺跡、調査対象面積831,000㎡が把握された。対象面積が膨大であることにより、これらの遺跡範囲の確定及び調査事業量の把握が急務とされた。よって、住宅・都市整備公団による用地取得の完了した部分より確認調査を実施し、その結果に基づき概ね公団の示す調査優先地区について順次本調査を行った。確認調査の結果によつては遺構外とされる地区もあり、随時本調査地区より除外した。また、平成9年には発掘調査の進展に伴い調査対象地区の見直しを行った。この結果、調査対象地区は確認調査により遺跡外とした地区も含め10地区12遺跡、896,800㎡となった。さらに、2006（平成18）年度に面積の見直しがなされ、総面積887,600㎡となった。

確認調査

本調査に先行する確認調査は、遺跡範囲の確定及び遺構全体量の把握等が目的とされる。調査にあたっては調査対象範囲内にトレンチを設け、概ねローム層上面まで掘削することにより遺構・遺物の有無、また、その遺存状況の把握に努めた。調査対象面積に対するトレンチ総面積は5～10%を目安とした。

グリッド設定 調査対象地区南西外を原点（ $X=0$ 、 $Y=0$ ）とする局座標を定めた。原点は日本測地系による平面直角座標第Ⅸ系 $X=+52,800$ 、 $Y=+6,400$ （世界測地系では $X=53154.1623$ 、 $Y=6107.0425$ ）の位置である。この座標軸は調査対象地区全体を覆い、20 m単位に南から北へ $X=0\sim130$ 、西から東へ $Y=0\sim60$ と展開する。また、20 m×20 mの一グリッドの名称は南西隅の座標値で呼ぶ。一グリッド内の細分は小数点以下の座標値を用い、同様の方法で行う。以上のグリッドは本調査時においても踏襲した。

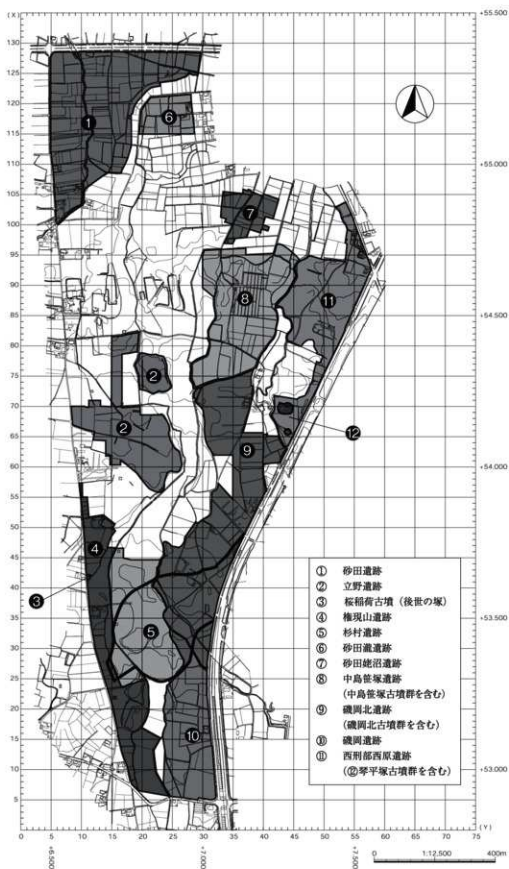
トレンチの設定 トレンチは幅約2 m、グリッドラインの北側に沿って20ないし40 mに一本の割合で東西方向に設けることを基本とした。これは、地形が概ね南北に伸びる低地部とその東西の低台地部により形成されていることによる。記号“TX”にX軸の座標値を添えてトレンチの名称とし、必要に応じてY軸の座標値（ $Y=0\sim60$ ）を添える。なお、対象地区の微地形の相違等状況の変化によっては柔軟に対応した。

トレンチの発掘 重機を用い、精査の後、図面と写真による記録を行い、遺物を取り上げた。また、必要に応じ、一部遺構の精査、自然科学分析を実施した地区もある。

本調査

公団の示す地区とその優先順位に従って実施した。これは公団の用地取得状況と工事展開に従ったものである。よって、調査時にはこれを10地区12遺跡における調査地区とし、遺跡名に算用数字を付して調査地区名とした。2000（平成12）年度までは算用数字ではなくローマ数字（Ⅰ区、Ⅱ区、Ⅲ区・・・）を使用していたが、この報告ではすべて算用数字を用いる。遺構の管理は各調査区で行い、種別によらず通し番号とした。遺物は出土遺構単位で管理し、種別によらず通し番号とした。

現地調査は、重機による表土除去、基準杭設定、遺構確認、各遺構精査、航空写真撮影・測量図化、遺物洗浄、必要に応じ自然科学分析等の手順で概ね実施した。調査方法は担当者間で統一を図り、図面・写真等の等質な記録作成に努めた。なお、表土除去、基準点測量、航空写真撮影・測量図化、自然科学分析等は委託業務とし、作業の効率化を図った。



第2図 東谷・中島地区遺跡群遺跡配置図

第1表 東谷・中島地区遺跡群一覧表

No.	遺跡名	略号	所在地	面積 (㎡)	時代・種別	調査前の状況
1	砂田遺跡	UT-SN	宇都宮市砂田町字籾、同市 板町字赤沢・字赤沢向、同市 中島町字十里木	145,200	旧石器剥片、縄文時代陥穴、古 墳～平安集落、方形周溝、近世墓、 近世以降の炭窯	田畑等
2	立野遺跡	UT-TT	宇都宮市東谷町字立野、同市 中島町字小谷田	122,800	縄文・古墳時代と中世の集落、 弥生時代土坑、終末期方墳、奈良 時代整穴建物、近世の溝	田畑・林
4	権現山遺跡 (3枚稲荷古墳を含む)	UT-GN UT-SG	宇都宮市東谷町字立野・字杉 村・字下原、同市砂田町字吉原・ 字原田、上三川町磯岡字西谷	92,000	古墳時代集落・豪族居館、縄文・ 平安時代整穴建物、奈良・平安 時代の推定東山道	畑地等
5	杉村遺跡	UT-SG	宇都宮市砂田町字原田他、上 三川町磯岡字コムナセゴ	22,000	縄文・古墳・奈良時代集落、奈良・ 平安時代の推定東山道	田畑・林等
6	砂田籾遺跡	UT-ST	宇都宮市砂田町字籾	60,000	古墳・奈良時代の遺物散布地	田畑等
7	砂田姥沼遺跡	UT-SU	宇都宮市砂田町字姥沼	16,400	古墳～平安時代の集落	田等
8	中島塚遺跡 (中島塚古墳群を含む)	UT-NK	宇都宮市砂田町字籾塚・吉原・ 姥沼	91,100	旧石器剥片、縄文土坑、弥生土器、 古墳群 16基と土壇墓、古墳～ 奈良時代と中世の集落	畑・林
9	磯岡北遺跡 (磯岡北古墳群を含む)	UT-SG	宇都宮市砂田町字籾塚、上三 川町磯岡字籾塚、同町磯岡字 コムナセゴ	128,100	縄文・奈良時代・中世集落、古 墳群 10基と土壇墓等、奈良・ 平安時代の推定東山道	田等
10	磯岡遺跡	KM-IS	上三川町磯岡字中原・同町磯 岡字原敷西浦	72,000	縄文・古墳～平安時代集落、弥 生時代土坑	田畑等
11	西刑部西原遺跡 (12号平塚古墳群を含む)	UT-NS	宇都宮市平塚町西原、同市西 刑部町西原、上三川町西洋字 西赤堀	138,000	縄文時代陥穴、旧石器・古墳～ 平安時代集落、古墳群 14基、 奈良・平安時代の推定東山道	田畑等

・4・9・10の各遺跡とは別遺跡だが、現地調査時に「杉村遺跡」(UT-SG)の名称や略号を用いた部分がある。
・確認調査の略号はUT-TNとし、本遺跡群内における位置はトレンチ及びグリッド番号で示した。

第3節 調査の経過

【確認調査】平成7・12・19年度(1995・2000・2007年度)

関係各機関との協議、事務処理、調査方針の策定を経て、本書で報告する砂田姥沼遺跡と砂田籾遺跡の確認調査を平成7・12年度に実施した。作業の手順は前節の通りである。基本的には重機によるトレンチ発掘を先行させ、トレンチ内精査、次いで遺構確認状況等の写真撮影、実測等記録の順序で行った。

1995(平成7)年11月には砂田姥沼遺跡1区の範囲と2000(平成12)年10月に砂田籾遺跡1区の北部の確認調査を行った。砂田姥沼遺跡1区に試掘トレンチTX98～TX105、砂田籾遺跡1区北部に試掘トレンチTX116.5～TX121.5を設定して遺構の有無や密度を確認した。また、砂田籾遺跡3区の範囲では2007(平成19)年5月に平成12年度に設定した試掘トレンチTX118.5～TX120・TX122・TX122.5の間と前回試掘トレンチを設定できなかった範囲について、試掘トレンチ9本を補足設定して遺構の有無や密度の再確認を行った。

【本調査】平成10～19年度(1998～2007年度)

砂田姥沼遺跡は、1区・2区・3区の3地区に分けて合計8,600㎡の調査を実施した。また、砂田籾遺跡は1区・2区・3区の3地区に分けて合計21,357㎡の調査を実施した。砂田姥沼遺跡と砂田籾遺跡の各調査区の調査実施経過を以下に示す。

【砂田姥沼遺跡】

砂田姥沼遺跡1区 宇都宮市砂田町字姥沼 127・128・150・151・155-1番地、7,000㎡ 整穴住居跡18軒、掘立柱建物跡5棟、方形周溝遺構1基、井戸1基、土坑20基、溝10条、小穴28基

平成8年度(1998年8月3日～1999年2月10日)

調査担当者：石川幸弘・柿沼利幸

本調査区は東谷・中島地区の北東部に位置し、北東南西へと続く低地を臨む低台地に立地する。本調査区の南には低地を挟んで中島塚遺跡2区・7区がある。東側には低地を挟んで西刑部西原遺跡9区・13区

がある。区画整理後は店舗駐車場として利用されている。

8月3日～8月20日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は9月2日から10月上旬にかけて行った。また、それぞれグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、各遺構の発掘に備えた。遺構発掘は10月6日から2月10日までの約5ヶ月間行った。その期間中に調査計画に従い10月24日には立野遺跡4区と同時に航空写真を撮影した。2月10日には調査自体は終了し、公団に引き渡した。

砂田姥遺跡2区 宇都宮市砂田町字姥沼 147・179 番地、1,200 m² 竪穴住居跡5軒、掘立柱建物跡2棟、土坑9基、溝5条、通路状遺構3基、小穴125基

平成17年度（2005年10月6日～2005年12月7日）

調査担当者：小出功一・馬場秀典・（発掘補助員）田村雅樹

本調査区は、小河川の開析による低地に囲まれており低台地の東端部に位置する。平成10年度に調査した砂田姥沼1区の北辺部に位置している。街区道路建設に伴って設定されたため東西方向に延びており、調査区は1区を挟んで東西2地区に分かれている。

10月6日～10月11日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は10月11日・12日にかけて行った。また、それぞれグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、各遺構の発掘に備えた。遺構発掘は10月12日から12月6日までの約2ヶ月間行った。その期間中に調査計画に従い11月9日には砂田姥沼遺跡3区と同時に航空写真を撮影した。12月6日には調査自体は終了し、機構に引き渡した。

砂田姥遺跡3区 宇都宮市砂田町字姥沼 148・149・175～177 番地、400 m² 竪穴住居跡7軒、掘立柱建物跡5棟、柵列1棟、土坑19基、溝13条、通路状遺構2基、小穴60基

平成17年度（2005年5月17日～2005年12月15日）

調査担当者：小出功一・馬場秀典・（発掘補助員）田村雅樹

本調査区は、砂田姥沼2区と同時に並行に調査を実施。砂田姥沼2区の南方100mに位置する。調査区は2区と同様に街区道路建設に伴って設定されたため東西方向に延びている。調査区も1区を挟んで東西2地区に分かれている。

5月17日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は5月26日に行った。また、それぞれグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、各遺構の発掘に備えた。遺構発掘は6月1日～6月14日、8月23日～10月20日、11月2日～12月15日にかけて断続的に約4ヶ月間行った。その期間中に調査計画に従い11月9日には砂田姥沼遺跡2区と同時に航空写真を撮影した。12月15日には調査自体は終了し、機構に引き渡した。

【砂田瀬遺跡】

砂田瀬遺跡1区 宇都宮市砂田町字瀬 225、砂田町字瀬 192・193 番地、3,000 m² 井戸2基、土坑8基、溝7条

平成12年度（2000年12月11日～2001年2月15日）

調査担当者：中村享史・名越侍郎・（発掘補助員）田崎真理

本調査区は、田川東岸の低台地を開析する谷へ傾斜する台地の北端と西端に位置する。砂田遺跡とは谷を隔てた北側に位置する。1区は遺跡の南端にあたる。確認調査区より西側の傾斜の度合いが強く、西端では表土直下に粘土層が露出している。

12月11日～12月18日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は12月19日・20日に行った。また、それぞれグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、各遺構の発掘に備えた。遺構発掘は12月21日

から2月6日までの約1ヶ月間行った。また、調査計画に従い2月15日には中島笹塚遺跡1区・2区・5区、杉村遺跡12区と同時に航空写真を撮影した。撮影終了を受けて、公団に引き渡した。

砂田瀧遺跡2区 宇都宮市砂田町字瀧 211・212・215・217・221・225、砂田町字瀧 193・195 番地、11,086 m² 井戸3基、土坑42基、溝20条、小穴11基

平成16年度(2005年2月21日～2005年3月24日)

調査担当者：小出功一・今平昌子・(発掘補助員)田崎真理

本調査区は、田川東岸の低台地を開析する「中島谷田」に残る低地に囲まれた台地上に位置する。調査区は、遺跡の西側に流れる小河川に隣接する。砂田遺跡25区はこの小河川を隔てた北西に位置する。

2月21日～2月23日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は2月22日・23日に行った。また、それぞれグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、各遺構の発掘に備えた。遺構発掘は2月23日から3月16日までの約1ヶ月間行った。また、調査計画に従い3月16日には航空写真を撮影した。3月22日には調査自体は終了し、機構に引き渡した。

砂田瀧遺跡3区 宇都宮市砂田町字瀧 211・212・215、砂田町字瀧 193・195 番地、7,271 m² 焼土遺構2基、土坑1基、溝6条、小穴3基

平成19年度(2007年10月15日～2007年10月30日、11月19日・11月20日、12月19日)

調査担当者：後藤信祐・大瀧貴史

本調査区は、田川東岸の田原・願成寺台地上に立地する。南側には砂田瀧遺跡2区が隣接し、埋没谷を挟んで北西には砂田遺跡が展開している。

10月15日～10月18日に重機で表土を除去した。遺構確認作業は10月22日に行った。併せてグリッド杭建植と遺構配置図作成を並行して行い、遺構発掘は10月23日から10月30日、11月19日・11月20日、12月19日と断続的に約2週間行った。また、調査計画に従い11月22日には西荆部西原遺跡13区・砂田遺跡37区・40区と同時に航空写真を撮影した。12月19日には調査自体は終了し、機構に引き渡した。

砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡とも遺構発掘の期間に雨天等状況により現場作業が不可能な場合は、図面・写真等記録類の整理を随時行った。

【整理・報告書作成】 平成22(2010)年度 4月から砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の出土遺物の接合・実測作業を行った。出土遺物関連の作業は、砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の各区とも注記・接合・選別・復元を遺構単位で行った。中心は古墳時代中期から奈良・平安時代の竪穴建物跡出土土器であり、他時期の土器やそれ以外の遺物を含めて6月上旬には終了した。採拓を含め遺物実測は6月中旬より開始して10月末まで継続し、11月上旬よりトレース・図版作成を行った。遺構図面の整理・修正・見直しを4月から10月中旬まで行った。中心は古墳時代中期～奈良・平安時代の竪穴建物跡で整理・修正作業の大半を費やした。作業内容は図面記載内容の確認とトレース原図の作成である。合わせて遺構挿図の仮レイアウトを行い、遺構図版のコンピュータートレース作業を行った。遺物の版組終了後に遺物出土状況図・遺物の観察表等を作成し、原稿を執筆した。事実記載に係わる原稿作成は5月から開始し12月にはほぼ終了した。写真図版の作成は12月に遺物の撮影を行い、遺構・遺物の図版を1月上旬に作成した。また、並行して事実記載以外の部分の作成を行い1月中旬には全体割付を行い、原稿や図版を整え、業者と印刷・製本業務の契約を締結した。その後1月下旬から3月まで校正を行い、3月下旬に本報告書「東谷・中島地区遺跡群 11 砂田姥沼遺跡(1区・2区・3区)・砂田瀧遺跡(1区・2区・3区)」の刊行の運びとなった。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

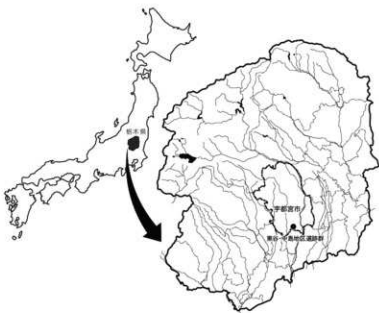
位置 東谷・中島地区遺跡群は栃木県域の南東部、宇都宮市と河内郡上三川町に跨り、宇都宮市街地から南南東へ約7km、上三川町の中心地から北へ約5kmに位置する。東へ約5kmに鬼怒川、西へ約1.5kmに田川がそれぞれ南流する。周辺は起伏の少ない田圃地帯が広がっており、各遺跡の発掘調査前の状況は水田、畑地、平地林が主で、一部に宅地が見られた。一方、本遺跡群は、東側が国道4号バイパス（新4号国道）、西側は旧上三川街道、南側は県道雀宮・真岡線、北側は宇都宮環状線に接する。また、地区内に北関東自動車道路の宇都宮・上三川インターチェンジが位置し、交通の要衝としてその重要度を高めていく。こうした利便性と相まって、近年、本地域は流通業務施設や商業施設等の進出と市街地化が進行している。砂田姥沼遺跡と砂田瀧遺跡は、東谷・中島土地区画整理地区（完成後の名称は「インターパーク宇都宮南」）の北部に位置する。

現況 砂田姥沼遺跡は宇都宮市砂田町に所在する。ほぼ遺跡の中央部に相当する1区で代表させると北緯36度39分19秒・東経140度6分44秒に所在する（世界測地系）。遺跡の東側と南側に小河川による開析谷が巡る標高86.2～86.6mの微高地上に立地する。砂田姥沼遺跡の東側は南流する「無名瀬川」（*2）の開析谷に面し、遺跡の南側には「中島谷田」（*1）に連続する開析谷に面している。

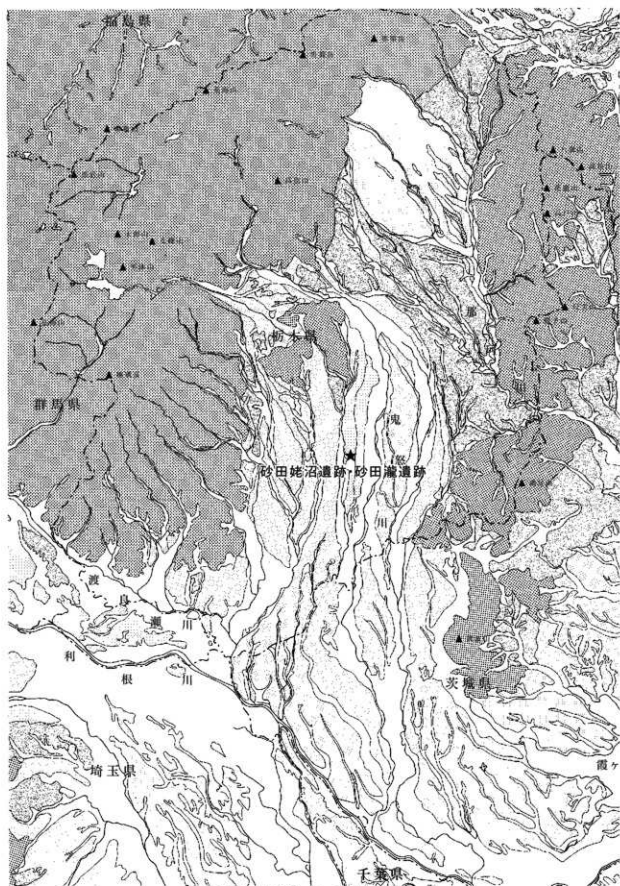
今回報告する1区は砂田姥沼遺跡の中央部にあたる。遺跡北部（砂田姥沼遺跡2区）は北緯36度29分53秒・東経139度54分36秒にある。遺跡南部（砂田姥沼遺跡3区）は北緯36度29分49秒・東経139度54分36秒にある。砂田姥沼遺跡の総面積は16,400㎡で、今回報告する1区は7,000㎡、2区は1,200㎡、3区は400㎡の発掘調査を実施した。調査前の状況は主に水田であった。

砂田瀧遺跡は宇都宮市砂田町に所在し、ほぼ中央部に相当する2区で代表させると、世界測地系で北緯36度30分01秒・東経139度54分25秒に所在する。遺跡の西側及び南側には「西谷田」（*1）と呼ばれる小川の開析谷に面し、その東側の標高86.96～87.1mの微高地上に立地する。遺跡南部（砂田瀧遺跡1区）は北緯36度29分59秒・東経139度54分24秒にある。遺跡北部（砂田瀧遺跡3区）は北緯36度30分3秒・東経139度54分25秒にある。

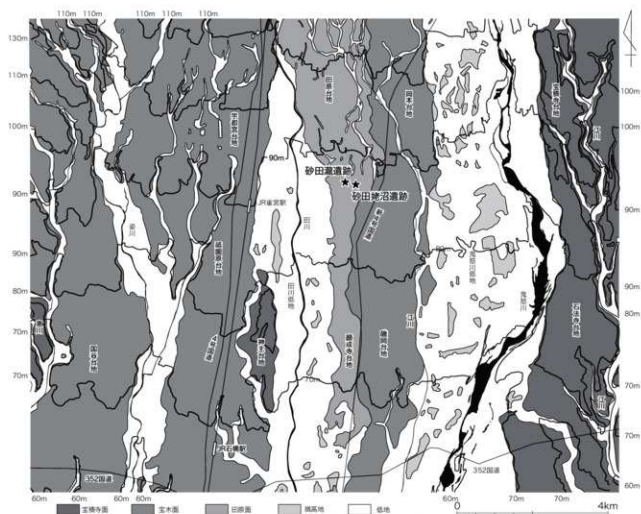
砂田瀧遺跡の総面積は60,000㎡で、1区は3,000㎡、2区は11,086㎡、3区は7,271㎡の発掘調査を実施した。調査前の状況は主に畑地と水田であった。



第3図 遺跡位置図



第4図 地形図 (S = 1/600,000)



第5図 周辺の地形図 (S=1/100,000)

地形の分類 栃木県は関東地方の北部に位置し、東と南を茨城県、西を群馬県、北を福島県と境を接している。栃木県域の地形は、大きく見ると、東部山地、中央部平地、西部山地に分けられる。東部山地は八溝、鷲子、鶏足などの山塊からなる八溝山地、西部山地は那須、高原、日光、足尾などの山塊からなる下野山地と足尾山地である。東西の山地は南北に連っており、両者に挟まれるように中央部平地が広がる(阿久津1981)。本遺跡は中央部平地に位置する。中央部平地は関東平野の北縁をなし、山地から南北に延びる丘陵とそれに平行するように延びる台地と低地・河川からなる。これらの台地と低地・河川は、東から鬼怒川低地(鬼怒川)、岡本・磯岡台地(宝木段丘面＝中位段丘面)、田原・願成寺台地(田原段丘面＝下位段丘面)、田川低地(田川)、神主台地(宝積寺段丘面＝上位段丘面)、宇都宮・祇園原台地(宝木段丘面＝中位段丘面)と分類されている。

田原・願成寺台地 砂田姥沼・砂田灘両遺跡を含む東谷・中島地区遺跡群の大半の遺跡(砂田・立野・磯岡・磯岡北・中島笹塚・権現山・杉村)と、その周辺の関連遺跡群(東谷古墳群の東半部や上石田遺跡・砂田東遺跡)は、田原・願成寺台地の上に立地する(第5～7図)。この台地は、中央部低地の中央に南北に連なり、鬼怒川低地(鬼怒川)と田川低地(田川)に挟まれている。宇都宮市北部の今里町～北東部の上田原町～宇都宮市市街地東部の砂田町・東谷町～河内郡上三川町願成寺・上蒲生周辺にかけての台地であり、全長は約33km、東西の幅は2.0～2.5km、標高は170m～68mである。台地の北から南への傾斜は平均すると4.2/1000m

であり、田川低地との比高は1～2mほどである。台地内部には、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。東側にある一段高い岡本・磯岡台地とは約2mの比高があるが、両地形面の差は南に行くほど不明瞭となる。

田原・願成寺台地の台地表層部は、田原段丘礫層を最も新しい田原ロームが0.5～2mの厚さで覆っており、南に行くほど薄くなっている。田原ロームの鍵層である七本桜軽石層(Nt-S)と今市軽石層(Nt-I)は日光の男体山から噴出した火山灰(ともに1.4～1.5万年cal BP)で、栃木県域北部に分布する。宇都宮市街地北方付近ではやや薄くなり、これ以南では本遺跡群のようにローム層中に軽石が点在する程度となる。田原ロームの下には、砂質土・砂層の厚い堆積が認められる。

田川低地 東谷・中島地区遺跡群の西方には田川低地が広がり、その微高地上には東谷古墳群の西半部や百目鬼遺跡・東谷北浦遺跡が位置している(第7図)。田原・願成寺台地と田川低地との境には、南流する赤沢川(井川)がある。田川低地は、宇都宮市域の北から宇都宮市街地を通過して南へ延び、田原・願成寺台地の西側に幅1.5～2kmにわたって分布する。この低地は、現在水田となっている田川の旧河道とされる部分と、それより1.0～1.5mほど上位で現在は集落が分布する自然堤防などの微高地とに識別することが可能である。低地や微高地の形成時期などを決める資料は得られていないが、およそ2万年前以降に田川の営力によりできたものと推定されている。

岡本・磯岡台地 田原・願成寺台地の東側には岡本・磯岡台地が広がり、東谷・中島地区遺跡群の東端部にある西刑部西原遺跡および琴平塚古墳群や、東側にある西赤堀遺跡などが所在する。田原・願成寺台地と岡本・磯岡台地との境には、南流する無名瀬川(*2)がある。岡本・磯岡台地は、宇都宮市白沢・岡本～宇都宮市平出・猿山～上三川町磯岡・日産自動車用地～下野市三王山周辺の南北に長い台地である。全長約35km、東西幅1.5～2.5km、標高162.5～54mである。台地の北から南への傾斜は4.5/1000～1/1000で南ほど緩傾斜となる。鬼怒川低地との比高は、白沢付近で約15mあり明瞭だが、南へ行くほど緩斜面状を呈する。台地表層部は宝木段丘礫層を田原ロームと宝木ロームが厚さ5～10m程で覆っている。厚さは南に行くほど薄くなる。台地内部は、小河川によって形成された細かな開析低地が発達している。

*1 「にしやだ」および「なかじまやだ」の通称は、宇都宮市砂田町在住の福田林蔵氏(1930年生)からの御教示による。漢字表記は推定である。

*2 「むなせがわ」の漢字表記は、開発前の10,000分の1地形図による(上三川町役場1981年作成)。「武名瀬川」や「田川用水」とも表記・呼称されている。

参考文献

- 栃木県企画部土地対策課1984『土地分類基本調査 壬生』
 経済企画庁総合開発局国土調査課1960『土地分類基本調査 地形・表層地質・土壤調査 宇都宮』
 上三川町史編さん委員会1979『上三川町史』資料編 原始・古代・中世 上三川町
 宇都宮市史編さん委員会1979『宇都宮市史』第一巻 原始・古代編 宇都宮市
 阿久津純1981「自然と環境」栃木県史編さん委員会編『栃木県史』通史編1 原始・古代一 栃木県 pp.11-36.

第2節 歴史的環境

砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡は田原・順成寺台地上に立地し、巨視的には田川水系の範疇となる。周辺には概ね、南北に展開する田原・順成寺台地や岡本・磯岡台地に沿って、各時代の多数の遺跡が存在している。特に東谷・中島地区遺跡群は古墳時代以降古代にかけて、下野国の中心地域の一つであることが確認されている。ここでは砂田姥沼・砂田瀧両遺跡に係わる古墳・奈良・平安時代の主な遺跡を中心に概観する。

なお、東谷・中島地区周辺の遺跡は塚原(1999)の第II章第2節が網羅し、各時代・各遺跡の評価は塚原(1999)と中村(2004)、古墳については秋元(2003)が詳しい。これらを参考に資料を追補し、本遺跡で遺構遺物が出土した時期の歴史環境を述べる。砂田姥沼・砂田瀧両遺跡(105・106)周辺の遺跡分布を第6・7図に示す。

旧石器時代 本遺跡では確認されていないが、権現山遺跡SG1区(110:内山2009,p.68)で水晶製尖頭器が古墳時代整穴に重複する溝内に混入していた。本来の出土層は不明であるが、Nt-S(七本桜軽石)とNt-I(今市軽石)の示す1.4～1.5万年cal BP頃から、As-YP(浅間板鼻黄色軽石)の示す1.5～1.65万年cal BP頃に相当する可能性がある。権現山遺跡西半の北関東自動車道調査A区でAs-YP層相当の遺物集中地点が2ヶ所ある(谷中他2001)。東谷・中島地区付近は、宝木段丘面に立地する西荆部西原遺跡(146)を除くと、最上位の田原ローム層だけが載る低段丘に相当するため、旧石器時代後半の遺跡が若干見られる程度である。

東谷・中島地区では、磯岡北遺跡の宇都宮市調査B区で安山岩の剥片4点(153:勝見2005,p.37)、磯岡遺跡の2.3.6区で尖頭器(164:津野2005,p.24)、砂田遺跡5区(103:津野・篠原・今平2007,p.22)で尖頭器と黒曜石剥片1点、中島笹塚遺跡3区・7区(150:内山2008,p.95)で黒色安山岩剥片がある。西荆部西原遺跡3区(146)では遺物集中地点3箇所と礫群があり、黒曜石・珪質頁岩の尖頭器・削器・彫器などが多数出土し(とちぎ埋文2001,p.39)、同遺跡2区にも黒色安山岩の剥片が1点ある(中村2004,p.169)。東側の西赤堀遺跡(161)では尖頭器と搔器を主体とする遺物集中地点がNt-I直下に6ヶ所と(安藤編1996)、出土層不明の珪質頁岩の縦長剥片が1点ある(亀田2007)。

縄文時代草創期～早期 草創期の遺構・遺物は宇都宮市調査C区(白崎・岩崎2008)には遺構外遺物として草創期の有舌尖頭器が1点ある。東谷・中島地区の南東部に所在する磯岡遺跡3区に爪形文土器(津野2005)、地区中央部の立野遺跡A区に多縄文土器(亀田2008)がある。1.4～1.5万年cal BPに降下した今市・七本桜軽石を混入する陥穴状土坑や土坑が、中島笹塚遺跡3・5・7区(150:内山2008)、磯岡北遺跡SG16区SK-20(153:内山2006)・西荆部西原遺跡6・7区(146:とちぎ埋文2002,pp.40-41)・砂田遺跡3区(103:藤田・田代2002,p.205)・立野遺跡5・8区(108:内山2005,pp.66,710)にある。田川西岸では殿山遺跡(85:大川他1995)に溝型土坑を含む時期不詳の陥穴状土坑が3基ある。

縄文時代早期 早期の遺物としては燃糸文系土器(井草式土器)が確認されているが、遺構はなく土器片が採集されたのみである。

東谷・中島地区では、燃糸文期の遺物が目立つ。南側にある立野遺跡5区(108)に燃糸文系土器・黒曜石製円形搔器・石鏃未成品を含む遺物集中地点があり、燃糸文系・条痕文系土器の包含層や、燃糸文系土器片を出土した陥穴状土坑もみられる(内山2005,pp.33-53,63,67)。西方の砂田遺跡(103)では、1区で鶴ガ島台式、2区で燃糸文系(夏島式)・沈線文系・条痕文系土器(藤田・田代2002,pp.20,165-169)、4区から6区にかけて燃糸文系土器1片と礫器少量(津野・篠原・今平2007,p.22)がある。磯岡遺跡(164)の1区で井草式以降の燃糸文系土器と野島式土器が少量(塚原1999,p.41)、同遺跡5区に夏島式土器が1片ある(津野2005,p.22)。磯岡北遺跡(153)のSG17区(内山2006)や磯岡北遺跡の宇都宮市調査B区

(勝見 2005, pp.19,38) に燃糸文系土器(井草式)・スタンプ形石器・礫器が若干まとまって見られる。中島笹塚遺跡(150)では燃糸文系(井草式・大丸式・天矢場式)がやや目立ち、沈線文系(三戸式・田戸下層式)・条痕文系(鶴ヶ島台式を含む)土器と、田戸下層式期の土坑1基がある。杉村遺跡(111)ではGN1区で条痕文系土器が少量だけ確認されている(内山 2009, p.33)。北関東自動車道路調査区で稲荷原式土器・スタンプ形石器と住居又は土坑1基、沈線文(主に田戸下層式)・条痕文系土器がある(藤田・安藤 2000, pp.31-34,38)。権現山遺跡(110)では燃糸文系土器(井草・大丸・夏島式土器と擦痕文系土器)が目立ち、沈線文系(三戸式・田戸下層式・田戸上層式・出流原式)・条痕文系土器や早期末の縄文条痕土器も出土した(内山 2009, pp.68-76)。西刑部西原遺跡(146)の多くは未報告だが、宇都宮市調査地点で燃糸文系土器が1片ある(土生・宮田他 2007b, p.31)。

田川の東岸地域では、瑞穂野団地遺跡南調査区(135: 岩上他 1978, p.58)と仏沼遺跡(173: 倉田編 1971, pp.88-91)に燃糸文系土器が見られる。西赤堀遺跡(161)には夏島式土器が少量あり、時期不明だが埋土のしまりが強い陥穴状土坑が1基調査されている(亀田 2007, pp.21-23)。

田川の西岸地域では、西下谷田遺跡(50: 板橋編 2003, p.388)・薄市遺跡(86: 秋元 1988, p.32)に井草式土器、宮の内遺跡(14: 田代 1996, p.180)のB遺跡で燃糸文系土器・スタンプ形石器および鶴ヶ島台式土器、茂原向原遺跡(80: 安永 2001, p.347)と神主古墳群の後志部古墳(82: 石部他 1998, p.74)で条痕文系土器、殿山遺跡(85: 大川他 1995, p.20)で燃糸文・条痕文系土器がある。文珠山遺跡(53のすぐ南西: 今平 1999, p.107)と上神主・茂原遺跡(79: 安永 2001, p.76)の両遺跡で燃糸文・沈線文・条痕文系土器が少量出土している。上神主・茂原遺跡の燃糸文系土器は浅間神社古墳(82)の調査でも出土した(石部他 1994)。このほか、木田遺跡(68: 前澤 1979)にも早期の遺物があるという。

縄文時代前期 砂田姥沼遺跡では遺構外に遺物として黒浜式土器がある。東谷・中島地区周辺では、縄文前期の遺跡は少ない。間析谷の対岸にある磯岡遺跡では諸磯a～c・浮島式と前期末～中期初頭の土器(津野 2005, pp.23,289)、中島笹塚遺跡には羽状縄文系・浮島式・諸磯b式と前期末～中期初頭の土器がある(内山 2008, p.422)。浮島式(?)が砂田遺跡6区に1片(津野・篠原・今平 2007, p.22)、諸磯式が西刑部西原遺跡に1片ある(土生・宮田他 2007b, p.31)。権現山遺跡では黒浜式期の土坑がSG1区に1基あり、遺構外に黒浜、諸磯a・b、浮島・興津式と前期末の土器がある(内山 2009, pp.69,74,76-80)。

田川の東岸域では、仏沼遺跡(173: 倉田編 1971, pp.88-91)に羽状縄文系土器がごく少量ある。

田川の西岸では、殿山遺跡(85: 大川他 1995, pp.19-20)に羽状縄文系・諸磯a・b・浮島・興津式が見られる。神主古墳群(82)の後志部古墳(石部他 1998, p.74)で興津式、天狗原遺跡に諸磯a式が少量ある(36: 津野 1994, pp.51,55)。

縄文時代中期 砂田姥沼遺跡では阿玉台Ⅱ～Ⅳ式、加曾利式土器が出土した。

東谷・中島地区は大半が低台地上なので、中期の資料は少ない。間析谷を挟んだ東側の磯岡遺跡(164)では1区(塚原 1999, p.37)に阿玉台式期の竪穴1棟、2～7区(津野 2005, pp.24,289)に阿玉台1b～加曾利E1式土器がある。北側の立野遺跡(108)では5区に加曾利E1式期の土坑が2基ある(内山 2005, pp.62-63)。磯岡北遺跡(153)では、北部のSG17区に阿玉台式期の竪穴1棟と遺物集中地点1箇所、SG12・SG17区に前期末～中期初頭と加曾利E1式土器が極少量あり(内山 2006, p.39)、同遺跡南部のSG13区でも阿玉台～加曾利E1式土器が少量ある(藤田 2003, p.152)。中島笹塚遺跡で加曾利E1式期の竪穴1棟と前期末～中期初頭・阿玉台・加曾利E1・EII～称名寺式が少量ある(内山 2008, p.422)。権現山遺跡では五領ヶ台式、阿玉台Ⅰ～Ⅳ式、加曾利E1～EII式土器が出土した(内山 2009, p.77,80-83)。無名瀬川東岸の琴平塚古墳群(154)でも加曾利EII式が少量見られる(中村 2004, p.171)。



第6図 周辺の遺跡分布図

第2表 東谷・中島地区周辺の遺跡

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	本村遺跡	66	堀内内遺跡	129	堀山東遺跡
2	関南1丁目遺跡	67	大田遺跡	130	榎木取遺跡・榎木取古墳群
3	かんセンター東遺跡	68	本田遺跡	131	東原古墳群
4	西原遺跡	69	多田遺跡	132	西原中田
5	森田遺跡	70	上大田内行内遺跡	133	さるやま城遺跡・さるやま城古墳群
6	南堀山遺跡	71	長持塚古墳	134	堀山遺跡
7	江崎島北原遺跡	72	堀山北遺跡	135	森崎野田遺跡
8	明道遺跡	73	受子塚東遺跡	136	根本内行古墳群
9	江崎島北原南遺跡	74	茂原古墳群	137	桑田古墳群
10	おしめ々遺跡	74	茂原堀山古墳	138	飯塚古墳
11	大田林遺跡	75	茂原大田古墳	139	藤原遺跡
12	城南3丁目遺跡	76	茂原受子塚古墳	140	南原古墳
13	城南3丁目南遺跡	77	小籠遺跡	141	1堀山A遺跡
14	宮の内遺跡	78	江田遺跡	142	成瀬寺遺跡
15	堀山北遺跡	79	上神上・茂原遺跡	143	大間台遺跡（小堀原遺跡）
16	北若松原遺跡	79	茂原城址	144	成瀬寺遺跡
17	堀山古墳群	80	茂原原遺跡	145	西原古屋原遺跡・西原部古屋原古墳群
	堀山古墳（1号墳）	81	後土部遺跡	146	西原部西原遺跡
	堀山古墳（2号墳）	82	神土古墳群	147	大間高塚群
	堀山古墳（3号墳）		上神上茂原神社古墳（神土1号墳）	148	中道遺跡
18	一向寺中院付近遺跡		上神上孤塚古墳（神土5号墳）	149	横戸遺跡
19	西松原遺跡		後土部古墳（神土7号墳）	150	中道世塚遺跡（中道世塚古墳群を含む）
20	二軒屋遺跡（中原遺跡）		下原古墳（神土20号墳）	151	後西塚遺跡
21	旭ヶ丘団地遺跡	83	向原遺跡	152	古堀原古墳群
22	西原北遺跡	84	向原南遺跡	153	磯間北遺跡（磯間北古墳群を含む）
23	留西遺跡	85	堀山遺跡	154	野平塚古墳群
24	十里木遺跡	86	薄田遺跡	155	西沢遺跡
25	留西南遺跡	87	台内手遺跡	156	平塚原相平遺跡
26	若松原南遺跡	88	大田神社古墳	157	不動堂遺跡
27	娘女塚古墳	89	芋山遺跡	158	内野遺跡
28	家宮東遺跡	90	上石田遺跡	159	下堀原遺跡
29	車の宮4丁目遺跡	91	石田遺跡	160	東谷北遺跡
30	家宮東遺跡	92	上藤生の古墳群	161	西水堀遺跡・西水堀古墳群
31	大谷田遺跡		十三塚古墳（上藤生1号墳）	162	南道遺跡
32	牛塚遺跡	93	後土部東遺跡	163	高島原遺跡・高島原古墳群
33	新宮平塚古墳	94	船内遺跡	164	磯間遺跡
34	二子塚北遺跡	95	家塚遺跡	165	磯間・西沢の古墳群
35	針ヶ丘二子塚古墳	96	大塚神社古墳群		高島原南谷原古墳群（磯間・西沢3号墳）
36	大野塚遺跡	97	下家元化塚遺跡	166	西水堀東遺跡
37	島の前遺跡	98	下家大塚古墳	167	磯間北遺跡
38	宇都宮機務南遺跡	99	東川田城	168	西水堀孤塚古墳（磯間・西沢2号墳）
39	赤土山遺跡	100	菅谷遺跡	169	西水堀南遺跡
40	多功神塚古墳群	101	赤沢遺跡	170	西田遺跡
41	富士見川河原北遺跡	102	下桑島西原古墳群	171	西林ノ内遺跡
42	岡田山遺跡	103	砂田遺跡	172	1堀山の古墳群
43	茂原北原遺跡	104	砂田東遺跡		受子神社古墳（上堀1号古墳）
44	石川坪遺跡	105	砂田東遺跡		界塚古墳（上堀2号墳）
45	富士見川山遺跡	106	砂田東遺跡		上堀孤塚古墳（上堀3号墳）
46	明ノ内遺跡	107	赤沢高塚群		長塚古墳（上堀D3号墳）
47	西の前遺跡	108	立野遺跡		しらみ塚古墳（上堀4号墳）
48	上原遺跡	109	稲荷塚古墳（古墳ではなく後世の塚）		上堀26・27号墳
49	前原遺跡	110	堀山遺跡	173	仏沼遺跡
50	西下谷田遺跡（北原東遺跡）	111	杉村遺跡	174	堀成寺遺跡
51	下古山北原古墳	112	東谷古墳群	175	上藤生遺跡
52	北原遺跡	112	堀山遺跡B区（原古墳群）	176	大野遺跡
53	大木遺跡	113	車塚古墳群	177	西原遺跡
54	一本松遺跡	114	堀山古墳群	178	島田遺跡
55	若林北遺跡	115	松の塚古墳	179	上三川地区の古墳群
56	上ノ原遺跡	116	二子塚古墳		八龍塚古墳（上三川1号墳）
57	若林南遺跡	117	界塚古墳	180	上三川城跡
58	大田遺跡	118	稲荷塚古墳	181	大野遺跡
59	谷塚北遺跡	119	新谷台遺跡	182	石井城跡
60	舟塚遺跡	120	三日月神社古墳	183	高尾神社古墳
61	東原遺跡	121	三日月神社古墳群	184	桑島城跡
62	大田古墳群	122	1ヶ屋遺跡	185	根本遺跡
	五社神社古墳（大田1号墳）	123	久保坂南遺跡	186	高島神社古墳（西木代1号墳）
	大田原塚古墳（大田9号墳）	124	久保坂北遺跡	187	五丁免遺跡
	新田古墳（大田13号墳）	125	久保坂南遺跡（1号墳）	188	中堀遺跡
	長塚古墳（大田D20号墳）	126	追分遺跡	189	上堀遺跡
63	新田遺跡	126	石井久保田古墳群	190	五塚遺跡
64	稲荷塚遺跡	127	大久保田山遺跡	191	白田免遺跡
65	橋塚遺跡	128	大田山遺跡		

田川の東岸域では、上三川町の市街地付近に中期遺跡群が見られる。島田遺跡で阿玉台 1b ～加曾利 E II 式期の竪穴建物 28 棟と袋状土坑を含む土坑 277 基が調査された（178：江原他 2004・2006）。島田遺跡の一部かと思われる東館遺跡や、その北方の大野遺跡（176）でも中期後半の遺物が知られる（倉田編 1971, pp.116,118）。上三川城跡（180）でも加曾利 E I 式期の土坑が 10 数基確認されている（江原他 2006, p.157）。宇都宮市域では柿木坂遺跡（130：大関 1992）で加曾利 E2 式期の遺物が報告・検討されている。

田川西岸では、西川田川の谷周辺に遺跡群がある（名取他 1996）。石川坪遺跡（44：宇都宮市 2003, p.20; 同 2004, p.13）で阿玉台式期中心の竪穴と袋状土坑群、二軒屋遺跡（20：五十嵐 1981; 名取他 1994）で加曾利 E II 式期の竪穴と袋状土坑がある。旭ヶ丘団地（21：名取他 1998, pp.94-102）・兵庫塚 A 地点（山崎 1970）・二軒屋西（田代 1968, pp.11,24）は同一遺跡と思われ、阿玉台～加曾利 E 式土器や 10 基の袋状土坑が知られる。その南の台地や、赤土山（39）・富士見団地北（41）遺跡にも遺物がある（名取他 1996, pp.38-42,52-56）。

縄文時代後期 砂田姥沼・砂田瀧両遺跡ともに遺構・遺物は確認されなかった。東谷・中島地区においても後期の遺跡は少なく、北側にある立野遺跡（108）の 4・5 区で堀之内 1 式期の土坑各 1 基と後期土器片が少量ある（内山 2005, p.733）。開析谷の東側では、磯岡遺跡で後期初頭～堀之内 1 式の土器がある（津野 2005, p.24）。磯岡北遺跡（153）では、宇都宮市調査 B 区で堀之内式（勝見 2005, p.38）、SG17 区で称名寺・堀之内・加曾利 B 式（内山 2006, p.39）が出土し、SG13 区に堀之内～加曾利 B 式期の土坑と遺物集中区がある（藤田 2003, pp.144-156）。中島塚遺跡（150）には加曾利 E III ～称名寺式が少量ある（内山 2008, p.422）。権現山遺跡では堀之内 1・2 式、加曾利 B 式、曾谷式、後期安行式土器が出土した（内山 2009, pp.83-87）。杉村遺跡では安行 2 式が少量あるのみである（内山 2009, p.33）。

田川東岸では、西赤堀遺跡（161）で称名寺式期の竪穴住居跡が 1 棟調査されている（亀田 2007, pp.20-21）。仏沼遺跡（173：倉田編 1971, pp.88-92）に綱取系および堀之内 1 式土器が見られる。また、粕内遺跡（94：前澤 1979）にも後期の遺物があるという。

田川西岸では、天狗原遺跡に堀之内 2 式が少量あり（36：神野 1994, pp.51,55）、兵庫塚 3 丁目（名取他 1996, pp.40-47）・石川坪（44：渡辺他 1993・下野考研 1993）・殿山（85：大川他 1995）の各遺跡に後～晩期の遺物がある。

縄文時代晩期 砂田姥沼・砂田瀧両遺跡ともに遺構・遺物は確認されなかった。東谷・中島地区では、北方の立野遺跡（108）に晩期土器が少量ある（内山 2005, pp.57-58）。開析谷の東側では磯岡 3・6 区に晩期前～中葉の大洞系土器（津野 2005, p.24）、磯岡北遺跡 SG17 区に大洞 C2 式と晩期安行式（153：内山 2006）、中島塚遺跡に晩期中葉の大洞 C2 式など（内山 2008, p.422）がそれぞれ少量ある。権現山遺跡では、未報告の南半部分に大洞 C2 式期の竪穴が 1 棟あり（SG10 区 SI-63）、遺構外遺物に大洞 B-C・C2・A 式土器が少量ある（内山 2009, p.16）。

田川東岸域では大野遺跡に大洞 C1 式があるが、資料は少ない（176：倉田編 1971, p.116）。田川西岸では著名な石川坪遺跡（44：渡辺他 1993・下野考研 1993）の他、薄市遺跡（86：秋元 1988）や神主古墳群（82）の後志部古墳に大洞 A 式（石部他 1998, p.74）、北側の後志部遺跡（81：鈴木 1991）に大洞 A' 式がある。

弥生時代中期 権現山遺跡では弥生前期後葉～中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形器が目立つ。中期中葉の主流原型～中期後葉の土器もあり、在来の重四角文・貼付口縁・撫糸文の土器の他に、中部高地型櫛形文や東北南部系平行沈線文の土器も少量ある。

東谷・中島地区周辺で弥生中期の遺構・遺物は希薄である。北方の立野遺跡（108）では 4 区と 1 区に中期後半およびその可能性のある土坑があり、他区でも少量の遺物が出土した。開析谷の東対岸にある磯岡遺

跡5区(津野 2005, pp.26,289)に中期後半の土坑2基と土器、磯岡北遺跡の北関東自動車道路調査区に中期後半の竪穴建物1棟と土坑2基がある。中島笹塚遺跡では条痕・燃系・縄文や充填縄文の破片が少量ある。燃系文の土器は、立野4区(内山 2005, pp.631-637)、磯岡I区SK-96(164:塚原編 1999)、磯岡北遺跡北関東自動車道路調査区3号土坑(153:藤田・安藤編 2000, pp.325-338)、仏沼遺跡の土坑2基(173:倉田編 1971, pp.94-95)にある。権現山遺跡では弥生前期後葉~中期前葉の大洞系土器と条痕文系深鉢形甕が目立つ。中期中葉の出流原型~中期後葉の土器もあり、在来の重四角文・貼付口縁・燃系文の土器の他に、中部高地型櫛描文や東北部系平行沈線文の土器も少量ある(内山 2009, pp.88-95)。

田川の西岸では、弥生中期前半の土坑が戦山遺跡(85:大川他 1995)、中期後半の住居と土坑各1基が西下谷田遺跡(50:今平 2006)、上神主・茂原遺跡に中期後半の土坑1基と中期後半および後期の土器片がある(79:安永 2001, p.81)。薄市遺跡(86:秋元 1988, p.35)と本村遺跡(1:富川 2004, pp.50-54)で多く出土した弥生土器にも中期の資料を含む。権現山北遺跡(72:大島編 1979, pp.152,156)に燃系文を用いる土器がある。愛宕塚東遺跡にも中期後半の土器があるという(73:今平 2008)。

弥生時代後期 砂田姥沼遺跡3区で、古墳前期の竪穴建物で二軒屋式・十王台式期の太頭形の壺形土器が出土した。この他に遺構外遺物として附加条1種で施文する破片・附加条2種で施文する土器破片が確認されている。杉村遺跡では弥生後期二軒屋式期の土坑が1基ある(内山 2009, pp.36-37)。権現山遺跡では弥生後期の二軒屋式少量と樽式1片の他、アメリカ式石鏝もあるが中期か後期か決めることは難しい(内山 2009, pp.96-99)。磯岡北遺跡SG17区で出土したような幅広有茎鏝(153:内山 2006, p.45)を、弥生後期と考える意見がある(海老原 2004, p.14)。

後期には、田川流域全体で遺跡数がやや増加する。田川東岸にある東谷・中島地区では、中島笹塚遺跡(150:内山 2008, pp.106,310)や、権現山遺跡の西に隣接する百目鬼遺跡(191:谷中・大島編 2001)と東谷北浦遺跡(篠原・亀田 2009)では、遺構が未確認だが後期土器が一定数あり、集落を形成していたと考えられる。上記の遺跡以外では弥生後期の資料は希薄である。間析谷の対岸にある磯岡遺跡5区に附加条1種で施文する破片が少量ある(津野 2005, p.26)。北方の立野遺跡(108:内山 2005)は約61,000㎡を調査したが、弥生後期土器は立野5区の1片だけであった。砂田遺跡(103)も、既報告地区の合計6万㎡には弥生土器が皆無である。

遺跡は田川西岸地域で目立つ。西川田川と兵庫川の谷周辺にある二軒屋遺跡(20:寺内他 1939a)や天狗原遺跡(36:神野 1994)が代表的である。「東河田遺跡」(名取他 1998, pp.78-79)として戦前から知られる本村遺跡(1:富川 2004 および水野・柏崎他 2007)の竪穴19棟と、殿山遺跡(85:大川他 1995)を中心とする上ノ原遺跡から向原南遺跡の範囲(56・84:大川他 1992)の竪穴21棟が、比較的大きな集落群である。また、古墳前期の項で触れる西下谷田遺跡の竪穴建物中9棟から樽式・十王台式・吉ヶ谷式など、大日塚古墳墳丘下竪穴建物や愛宕塚古墳下層で樽式系などの弥生後期土器も出土した。

古墳時代前期 田川東岸の東谷・中島地区周辺では、本格的な古墳時代集落は中期前葉に現れる。それまでは小規模な集落が点在する程度である。東谷・中島地区内では砂田姥沼遺跡2区SI-1と3区SI-5が前期の竪穴建物である。この他に西側部古屋原遺跡SI-02(145:清水 2002)、砂田東遺跡B区SI-12・13(104:中山 1996)がある。田川東岸の低台地では、粕内遺跡に前期の遺物がある(94:前沢 1979)。

前期末~中期初めの建物は、杉村遺跡北関東自動車道路調査区の60・69・70号住居跡(藤田・安藤 2000, p.410)、その北側の立野遺跡5区SI-14(108:内山 2005, pp.122-123,739)、西方の東谷北浦遺跡SI-139(160:篠原・亀田 2009)がある。

前期古墳と同じく前期の集落も田川西岸の茂原地域に多い。大日塚・愛宕塚古墳下層(75・76:久保編

1990)・愛宕塚東(73:名取他1998, pp.87-89)・西下谷田(50:今平2006)の各遺跡に前期前半の集落が見られる。権現山北遺跡で前期後葉の竪穴1棟(72:大島編1979)、上ノ原遺跡で竪穴6棟(56:大川他1992)、殿山遺跡で1棟(85:大川他1995, p.230)が報告されている。田川西岸に面する台地では、木田遺跡(68:栃木県教委1988, p.77)に前期の竪穴建物がある。やや西方にある西川田川の開析谷では、天狗原遺跡(36:神野1994)に竪穴3棟、留西遺跡(23:宇都宮市1983, p.317)と留西南遺跡(25:名取他1996, p.31)に前期の遺物がある。

前期～中期初頭の古墳 田川東岸では、前期古墳が小規模で数も少ない。最初に現れるのは小形方墳で、西荆部古原東2・4号墳(145:辺長10～14m、清水2002)や上郷26・27号墳(172の西部:辺長11～14m、秋元2000)である。中島塚7・8号墳も中期初頭の小型方墳と思われる(150:辺長7.1～12.6m、内山2008)。この他、権現山遺跡B区(112)の土壇墓2基が前期末～中期初頭である(谷中他2001, III-p.284)。

東谷・中島地区から田川をはさんだ対岸(西岸)では、有力な首長墳が築かれる。前方後方墳3基を含む茂原古墳群がよく知られている(久保編1990)。大日塚古墳(75:墳長35.8m・箱式木棺・素文鏡1面)・愛宕塚古墳(76:墳長50m・舟形木棺・S字文または重圓文鏡)・権現山古墳(74:墳長63m)の3基で、大形化している権現山古墳が最後に築かれたと推定されている。小形墳としては、牛塚東遺跡で辺長11mと6mの方墳(32:今平1993)、北原東遺跡に辺長13.0×11.8mの方墳(50の南端部:安永2001)、殿山遺跡に「方形周溝墓」2基(85:大川他1995, p.7)がある。上神主浅間神社古墳(82の北端)は墳径53～54mで、茂原古墳群に続いて方墳から円墳に転換した中期初頭の首長墳である(石部・秋元編1994)。茂原周辺地域以外では、城南3丁目遺跡2号墳が方墳の可能性もある(12:今平1996)。

古墳時代中期の集落 古墳中期集落は周辺に数多い。田川東側地域では、上述した前期末～中期初頭の集落(立野5区SI-14、杉村遺跡60・69・70号住居、東谷北浦遺跡SI-139)の次段階から、東谷・中島地区周辺に多数の中期集落が見れる。東谷北浦遺跡(160)のSD-77・87が中期初頭の溝で、東谷古墳群の初期首長墳と推定される笹塚古墳(117)のすぐ東北にある。東谷古墳群と周辺遺跡群の形成が中期初頭に東谷北浦遺跡から始まってきたことを示すものかもしれない。その中核である権現山遺跡は、豪族居館(首長居宅)と考えられる施設をSG1区とSG5区に含み、周辺の竪穴建物も高密度で(4区・SG5区・SG10区・北関東自動車道A区)、遺物の質・量も豊富である。

周辺の中期集落群は中核である権現山遺跡と同時に、または少し遅れて現れる。その例は、砂田姥沼遺跡の1区と宇都宮市調査区D区(水野・柏崎2008)や砂田4・6区(津野他2007)、立野5・6区周辺(後述)、西荆部西原3区(とちぎ埋文2001, pp.39-40)、杉村(藤田他2000)、磯岡(塚原1999・藤田他2000・高野他2004・津野2005・栗田2005)の諸遺跡がある(103, 108, 146, 160, 164)。北東方の砂田東遺跡(104:中山1996)やその東方の成願寺遺跡(144:篠原編2000)も、東谷・中島地区の諸遺跡と時期をそろえるように形成される。

開析谷を挟んで西側集落の立野遺跡と、東側墓域の中期群集墳が対応して営まれる。立野遺跡(108)の5区・6区・宇都宮市調査A地区周辺で調査した91棟の古墳時代竪穴建物は、約半数の44棟が中期で、磯岡北古墳群(153)と中島塚古墳群(150)に先行する中期中葉に13棟、中島塚古墳群の前半期および磯岡北古墳群に対応する中期後葉に9棟が確認されている。磯岡北古墳群の造営停止後、中島塚古墳群の後半期に対応する中期末は立野5・6区周辺の竪穴建物が最も多い時期で、3区の単独建物を含めて21棟ある(内山2005, pp.735-742; 水野他2005, p.35)。このうち2棟はそれぞれ辺長14.5mと12mで(宇都宮市調査A地区SI-2・3)、古墳時代を通じて最大級の竪穴建物である。

間析谷の東側でも、少数の集落が形成される。磯岡北遺跡（153）では、磯岡北古墳群の造営前・造営後の竪穴建物6棟がSG17区（内山2006）・SG11区（藤田2003）と宇都宮市調査A・B区（勝見2005）にある。中島笹塚遺跡（150）でも5区に中期（中葉？）の竪穴建物1棟と円筒形土坑3基がある。

田川西岸では、塚山古墳群（17）を中心とする兵庫川・西川田川の谷に大集落が現れる。北若松原遺跡は塚山古墳群とほぼ同じころの集落で、竪穴24棟が調査された（16：宇都宮市1992, p.38; 1994, p.30）。中原（二軒屋）遺跡も同様と思われる（20：寺内他1939b）、若松原（19）・西原北（22：名取他1996, p.36）の両遺跡と一連の大集落であろう。若松原遺跡周辺と北若松原遺跡では石製模造品が豊富で、白玉生産を示す未成品も多数採集され（名取他1998, pp.108-133）、塚山古墳群と対応する拠点集落の手工業生産地区と見てよい。北方の雷電山遺跡にはTK-23～47型式期の特異な長方形竪穴建物群がある（6：今平1994）。

また、田川西岸で前期の中核地域だった神主台地の茂原周辺にも大集落がある。殿山遺跡（85：大川他1995）では、首長居宅と見られる辺長50mの方形区画の周囲で調査した447棟の竪穴建物の大半が中～後期で、陶質土器（定森1999）・初期須恵器・鍛冶遺構や、凝灰岩切石の竈焚口枠（水野他2005, p.36）などを伴う。権現山北遺跡（72）では中期前～中葉の竪穴8棟と中期末葉の1棟を調査した。ここでは権現山4区・立野5区等と同様の円筒形土坑群が、遺物からみて中期の集落に伴う（大島編1979, pp.132-145）。

中期古墳 田川東岸では、栃木県域中央部を代表する中期古墳群の東谷古墳群が、東谷・中島地区のすぐ西側に造られる（橋本・谷中2001）。双子塚（墳長73m）・笹塚（100m：小森1979, 秋元・今平1998）の前方後円墳2基と、鶴舞塚（径53m：梁木1984）・松の塚（48m：谷中他2001）・権現塚（30m）・車塚（35m）の大形円墳が北西から南東へ順に立地し、おおよその順序で築かれた可能性がある（112-118）。東谷地域における中期後半の首長墳は埴輪のない大形円墳になる。田川東岸で埴輪を持つ中期後半の前方後円墳は墳長40mの八龍塚古墳がある（179：秋元1989）。中期群集墳としては東谷古墳群の東半部に含まれる円墳群（112：谷中他2001）と、磯岡北古墳群（153：内山2006）・中島笹塚古墳群（150）・西側部古屋原1,3,5,6,7号墳（145：墳径14～28m：清水2002）がある。磯岡北と中島笹塚の古墳群は、立野遺跡5・6区周辺の集落に対応する墓域と推定される（第7図）。中島笹塚2・10号墳と磯岡北3号墳でそれぞれ円墳から小形後鏡を1面ずつ出土している点（とちぎ埋文2005b）、次に述べる田川西岸の状況と同様である。

田川西岸では、東岸の東谷笹塚古墳に続いて塚山古墳群が現れる（17：宇都宮大1995・2003）。また、雀宮牛塚古墳が豊富な副葬品を持つ（33：大和久1969）。塚山（墳長98.3m）→塚山西（63.1m）→雀宮牛塚（56.7m）・塚山南古墳（58.0m）の順で、TK-216～23型式期に築かれた可能性が高い。塚山西・南古墳並行期に、本村遺跡（1：富川2004）の2号墳（径24m・乳文鏡1面・銀舌葉文線刻埴輪他）、城南3丁目遺跡（12：今平1996）の1号墳（径12.9m・木棺2基・乳文鏡1面）など、副葬品がやや豊富な中小古墳がつくられる。

古墳時代後期・終末期の集落 古墳時代終末期後半（7世紀後半）には、古墳中～後期以来の中心的な集落遺跡が衰退する。砂田姥沼遺跡の他、権現山遺跡、立野遺跡5・6区周辺（108：内山2005, p.742）の古墳時代集落は終末期前半（8段階＝7世紀前半）、砂田姥沼遺跡や杉村遺跡も終末期後半（9段階＝7世紀後半）までには衰退する。中期集落の項で述べた周辺各遺跡も、多くが同様な状況を示す。

それに代わって、砂田遺跡（103：藤田他2002・中山他2005・津野他2007）と、東側の岡本台地上にある西側部西原（146）・西赤堀（161：安藤1996）・瑞穂野田地（135：岩上他1978）・大岡台（143：杉浦2001）の各遺跡が中心的な集落になってゆく。砂田姥沼遺跡は1区～3区に27棟の竪穴があるが、部分的な調査になるが宇都宮市調査区（大塚他2007）3棟・B区（小林・大橋2007）1棟・C区（白崎・岩崎2008）3棟・D区（水野・柏崎2008）9棟・E区（佐々木他2008）1棟の竪穴が確認され、併せて44棟

にも及ぶ後～終末期の集落がある。2区には宇都宮市調査C区や3区へと続く大溝、その大溝に降りる通路状遺構が3基あり、後～終末期にかけて使用された可能性がある。

また、後期から出現する集落も見られる。中期群集墳が形成された中島笹塚・磯岡北遺跡では、墓域が消滅する後期以降に集落が現れる(150・153)。中島笹塚遺跡では、部分的な調査で後～終末期集落が知られ、一部は奈良時代へ続く可能性がある。磯岡北遺跡は、宇都宮市調査B区(勝見2005)とSG3区・SG11区(藤田2003)に終末期の建物が知られる。

田川の西岸地域でも同様な状況がある。神主台地の中核的集落として中期から続く殿山遺跡(85)は、後期には向原遺跡(83:大川・三輪2000)や向原南遺跡(84:大川・吉岡他1992)も加わり、終末期前半まで継続する。権現山北遺跡(72)も後期後半までは集落がみられる。殿山遺跡KT-100などを最後として、終末期後半にはこれらの集落群が消滅し、南側の薄市遺跡(86:秋元編1988)と北側の西下谷田遺跡(50:板橋編2003,2006;今平2008)に中心が移る。西下谷田遺跡は竪穴建物86棟と掘立柱建物45棟の他に門を持つ150×108mの板橋区画施設を含み、河内評家かと考えられている(板橋2007)。

中期後半における田川西岸地域の中心であった塚山古墳群周辺の集落は、後期以後の状況が不明確である。弥生後期・古墳前期の項でも触れた天狗原遺跡(36)では、古墳後期の竪穴建物や、立野5区と同様の円筒形土坑・円形溝遺構がある。間道遺跡(8:赤石澤1988)は古墳後期～奈良時代まで続くようである。

後期・終末期古墳 田川東岸の後期前半では、琴平塚1号墳が最大の古墳である(154:長52m・二重周溝、中村2004)。ただし中期末の可能性もある。笹塚古墳以降の東谷・中島地区周辺でしばらく途絶えていた前方後円墳と埴輪樹立がここで再開する。他に、墳長31mのしらみ塚古墳がある(172の西部:秋元2000)。

田川西岸の後期前半では、墳長48.8mの上神主孤塚古墳が最大である(82の北西部:石部・秋元編1995)。琴平塚1号・上神主孤塚・しらみ塚は、いずれも前方部が短い帆立貝形前方後円墳である。琴平塚1号墳を中心として後期前半から群集墳が形成される(中村2004)。下桑島西原古墳群(102:今平他2002)では後期前半の円墳2基と後期後半の墳長35mの前方後円墳1基(140:南原古墳)が知られ、周溝内の木棺直葬・竪穴式小石室や、古墳外の土壌墓も見られる点が琴平塚古墳群と同様な時期・群構成である。

後期後半に古墳が増えて群集墳が盛行し、その中に前方後円墳が所在する(中村2004, p.190)。田川東岸では墳長68mの上郷瓢箪塚古墳が最大である(172の東端:前澤1979, p.414)。東谷・中島地区では琴平塚3・5号墳(長25.0mと23.7m)がある。周辺に長50.5mの久部愛宕塚(124:柴木他1995)、32～38mの根本西台1・2・5号墳(136:水野他2008b・c)、38.5mの飯塚古墳(138:斎藤他2003)、30～40mの西割部古屋原8号墳(152:清水2002)、42mの西赤堀1号墳と27mの同2号墳(161:安藤編1996)、39mの西赤堀孤塚(168:大川・水野他1987/中山・井他2005)、36mの高尾神社古墳(183:内山1998,2000)などがある。墳長36mの屋敷東浦愛宕塚古墳(165:前澤1979, p.398)も後期後半と推定される。径43.5mの下栗大塚古墳は終末期大形円墳と想定される(98:宇都宮市1996, pp.2-3)。後～終末期群集墳は成願寺(144:篠原編2000)・西赤堀(161:安藤1996)両遺跡、単独所在の小形方墳が立野遺跡5区にある(108:内山2005)。

田川西岸では、推定長45m以上の本村3号(1の北部:水野他2007)、40～50mの綾女塚(27:秋元・飯田他1998)、30～40m前後の針ヶ谷二子塚(35:宇都宮市1990)、43mの大山瓢箪塚(62の南端:前澤1979)、47.4mの後志部(82の中央:石部他1998)が後期後半の前方後円墳である。墳形不明の十里木古墳(24:宇都宮市1998, p.16)は切石石室で7世紀初葉とされる(秋元・飯田他1998, pp.114,128)。市街地化していない地域では、これら首長墳の周囲に群集墳を確認できる(1本村古墳群・62大山古墳群・82神主古墳群)。また、円墳だけの古墳群もみられる(50西下谷田古墳群:今平2008)。

奈良・平安時代 砂田姥沼遺跡では奈良時代以降の建物は少なく、3区に9世紀代の2棟があり、大溝とその溝に降る通路状遺構(10段階・11段階=8世紀前半)の2基がある。杉村遺跡ではGN1区に1棟と北関東自動車道調査区(藤田・安藤 2000)に2棟の奈良時代前葉の竪穴建物があり、未報告書であるが権現山SG10区(旧称は杉村X区:とちぎ埋文 2000, p.32)で9世紀代の1棟がある。また、古代の溝が権現山SG1区に1条ある。権現山・杉村遺跡・磯岡北・杉村北・西荆部西原遺跡に続く古代道路遺構は東山道と推定されている(藤田 2003・亀田 1999)。上記の遺跡にはこの道路遺構以外は古代の遺構・遺物が少ない。立野遺跡(108)でも古代の遺構が希薄で、5区に奈良時代末頃の単独建物がある。立野遺跡では4・7・8区の大溝と、その溝に降る2区の通路状遺構が注意される(内山 2005, pp.748-749)。東に隣接する磯岡北SG3・SG4区でもそれぞれ単独の竪穴建物がある(藤田 2003, pp.167-172, 177-179)。磯岡北遺跡の各古墳や中世溝にも7世紀末～奈良時代の須恵器が少量混入していた(153:内山 2006)。中島塚遺跡では古墳終末期～奈良時代の集落と、奈良時代の溝を通過する道路状遺構(8区)を調査した。東側の磯岡遺跡(164)でも8～9世紀代の竪穴・掘立柱建物が少数あり、漆文書書の貝注(塚原編 1999, pp.442-445)と円面硯・散開・鉄鉢形土器(津野 2005, p.103, 112, 117, 294)が見られる。

東側の高位台地上に大規模な古代の集落・猿山(134:川原他 1981; 常川他 1978)・瑞穂野団地(135:岩上他 1978; 水野他 2008b)・大岡台(143:杉浦 2001)・西荆部西原3区(146:とちぎ埋文 2001)・西赤堀(161:前澤 1976・安藤 1996・亀田 2007)がある。遺跡の立地が総じて東へ進むことが指摘されている(橋本 2002, p.13)。

東谷・中島地区遺跡群の多くが立地する田原低台地では、砂田遺跡が最も大規模である(103:芹澤 1993/藤田・田代 2002/中山・青木他 2005/津野・篠原・今平 2007)。8世紀代に掘立柱建物跡の比率が高い集落である。砂田3区SI-97に「中嶋」の墨書土器があり、『倭名抄』の郷名に見られない「中島」の地名が9世紀から現代まで続くことを示した(藤田他前掲)。同遺跡5区の墨書土器から9世紀中～後葉に「大麻」部集団等が居住したと解釈されている(津野他前掲, p.687)。県調査分の砂田24区(津野他前掲)や宇都宮市調査分のA地区(中山・青木他 2005)では、旧河道に降りてゆく古墳後期と平安時代の水場遺構がある。

田川西岸台地にある上神主・茂原遺跡(79:秋元・保坂 1999; 深谷他 2003)は、西下谷田遺跡を引き継いで7世紀後葉に成立する。推定東山道に取り付く位置にあり、奈良時代の河内郡家行政と人名瓦を伴う瓦葺倉を含む正倉群と考えられている。また、多功遺跡(69:秋元他 1997)も河内郡衛と推定されている。

中世 中世の遺構・遺物は砂田瀧遺跡で、土坑1・井戸が1がある。砂田姥沼遺跡では宇都宮市調査B区(小林・大橋 2007)で土坑1・溝1、C区(白崎・岩崎 2008)には土坑3・溝2、D区(水野・柏崎 2008)に土坑3・溝1・井戸1がある。遺物には陶器片・土師質土器片・砥石が認められている。権現山遺跡SG1区では不整形の区画溝内に13世紀後半～14世紀前半を中心とする竪穴遺構2・土坑2・井戸1が認められた。方形区画溝は未報告であるが権現山SG10区にもあり、区画内外に柱穴群や井戸を伴う(とちぎ埋文 2000, p.32)。すぐ北側の立野遺跡(108)では、5区に方形区画溝・8区に方形竪穴遺構1基(内山 2005)、宇都宮市調査A地区に方形竪穴遺構群(水野他 2005)がある。

台地の東端から西端まで、古墳群の周溝をも連結・利用しながら伸びる13世紀ころの長い溝が、磯岡北古墳群の北端部に認められる(磯岡北遺跡SG12・SG16～17区)。常滑産陶器・青磁碗・かわらけが見られ、磯岡北古墳群周辺を中世に利用していたようである。集落に関わる遺構としては方形竪穴があり、磯岡北遺跡SG3区で1基(153:藤田 2003, p.173)と、同じく磯岡北遺跡の一部に含まれる「杉村北遺跡」(亀田 1999)で2基が確認され、後者では井戸が隣接している。

東谷・中島地区の周辺は、鎌倉・室町時代において宇都宮氏および芳賀氏の支配下にあったことが知られ

ている。小規模な城館として刑部城（186の北東1km）・桑島城（184）・高島館（163）がある。また北方には石井城（182）・さるやま城（133：宇都宮市2005b, p.12）があり、これらの分布から、中世から鬼怒川低地の開発が本格的に行われたものと考えられている（橋本2002, p.19）。大関台遺跡（143）では長辺80mの方形区画溝を戦時の臨時拠点と考える意見がある（杉浦2001, p.386）。立野遺跡5区や権現山遺跡SG1区・SG10区の方形区画溝はより小規模で溝も浅く、大関台遺跡と同様な性格を考えてよいかどうかは不詳である。

（第2章第2節 参考文献）

- 赤石澤亮 1988 『関道遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第25集 宇都宮市教育委員会
- 秋元陽光編 1989 『薄市遺跡・大山遺跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告第7集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光編 1989 『八龍塚古墳』 上三川町埋蔵文化財調査報告第8集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光編 2000 『上三川町の古墳』 I 上三川町埋蔵文化財調査報告第21集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光 2003 『上三川町にける古墳の素顔 - 古墳から見た古墳時代集団の抽出 -』 『栃木99考古学』 葛静夫先生古稀記念論文集「栃木の考古学」刊行会（宇都宮） pp.225-238.
- 秋元陽光・飯田光史・篠原良理 1998 『綾女塚古墳の課題』 『栃木県考古学会誌』 第19集 栃木県考古学会 宇都宮 pp.109-133.
- 秋元陽光・大橋泰夫 1988 『栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向』 『栃木県考古学会誌』 第9集 栃木県考古学会 宇都宮 pp.7-40.
- 秋元陽光・君島利行・諏訪潤伸・藤田典夫・植木茂雄 1985 『大町遺跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告第5集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光・今平利幸 1998 『宇都宮市東谷塚古墳出土の遺物』 『峰考古』 第13号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.41-64.
- 秋元陽光・保坂知子・及川真紀 1997 『多功遺跡』 III 上三川町埋蔵文化財調査報告第16集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 秋元陽光・保坂知子 1999 『上神上・茂原遺跡』 I 上三川町埋蔵文化財調査報告第19集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 安藤保美編 1996 『西奈塚遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第178集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 五十嵐利勝 1979 『権現山北道跡採集の石器について』 『権現山北道跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会 pp.17-182.
- 五十嵐利勝 1981 『宇都宮市二軒屋遺跡発掘調査報告』 『下野考古学』 2 下野考古学研究会 宇都宮 pp.1-140.
- 石部正志・秋元陽光編 1994 『上三川町関神社古墳・多功大塚古墳』 上三川町埋蔵文化財調査報告第12集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 石部正志・秋元陽光編 1995 『上神上塚古墳』 上三川町埋蔵文化財調査報告第13集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 石部正志・秋元陽光・飯田光史編 1998 『後志部古墳』 上三川町埋蔵文化財調査報告第17集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 板橋正幸編 2003 『西下谷田遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第273集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 板橋正幸編 2006 『西下谷田遺跡 II』 栃木県埋蔵文化財調査報告第297集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 板橋正幸 2007 『県内の郡内複数古墳について - 古代下野国河内郡を中心として -』 『上神上・茂原古墳道跡の諸問題』 栃木県考古学会 宇都宮 pp.51-64.
- 岩上照順・石橋知明編 1978 『宇都宮市瑞穂野田遺跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第4集 宇都宮市教育委員会
- 内山敏行 1998 『宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（1）』 『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』 20 平成8年度（1996） 栃木県埋蔵文化財調査報告第217集 栃木県教育委員会 pp.117-137.
- 内山敏行 2000 『宇都宮市上桑島町 高尾神社古墳発掘調査報告（2）』 『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』 22 平成10年度（1998） 栃木県埋蔵文化財調査報告第233集 栃木県教育委員会 pp.97-121.
- 内山敏行 2005 『東谷・中島地区道跡群5 立野遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第290集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2006 『東谷・中島地区道跡群7 磯野北古墳群』 栃木県埋蔵文化財調査報告第299集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2008 『東谷・中島地区道跡群9 中島塚古墳群・中島塚遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第311集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2010 『東谷・中島地区道跡群10 権現山道跡北部・杉村道跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第331集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 宇都宮市教育委員会社会教育課 1983 『宇都宮の道跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第10集
- 宇都宮市教育委員会文化課 1990～2009 『宇都宮市文化財年報』 第6号（平成元年度）～第25号（平成20年度）
- 宇都宮大学考古学研究会 1995 『塚山古墳外形確認調査報告』 『峰考古』 第9号
- 宇都宮大学考古学研究会 2003 『塚山古墳』 塚山南古墳：宇都宮市埋蔵文化財調査報告第48集 宇都宮市教育委員会
- 江原美奈子・深谷昇 2004 『島田遺跡』 III 縄文時代編1 上三川町埋蔵文化財調査報告第28集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 江原美奈子・深谷昇 2005 『島田遺跡』 IV 縄文時代編2 上三川町埋蔵文化財調査報告第31集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 江原美奈子・深谷昇 2006 『島田遺跡』 V 縄文時代編3 上三川町埋蔵文化財調査報告第33集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 海老原信雄 2004 『アメリカ式石蔵とその周辺』 『唐澤考古』 第23号 唐澤考古会 佐野 pp.1-16.
- 大川清・水野雅敏・矢野淳一 1987 『栃木県上三川町 西赤塚塚古墳』 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 大川清・三輪孝幸 2000 『向原遺跡』 上三川町埋蔵文化財調査報告第22集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 大川清・三輪孝幸・三輪孝幸・中島雄一 1992 『栃木県上三川町 上ノ原・向原遺跡』 日本家業史研究所報告第43冊 馬頭（栃木県那須郡）
- 大川清・吉岡秀敏・三輪孝幸・中島雄一 1995 『栃木県上三川町 殿山道跡1』 日本家業史研究所報告第46冊 馬頭（栃木県那須郡）
- 大島和子編 1979 『権現山北道跡』 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第5集 宇都宮市教育委員会
- 大関利之 1992 『宇都宮市柿木坂遺跡の加賀利式土器』 『栃木県考古学会誌』 14 宇都宮 pp.93-100.

- 大和久潤平 1969『宿宮牛塚古墳』宇都宮市教育委員会（1984年『牛塚古墳』として再版）
- 小野麻人（東京職業研究所編）2007『砂田道跡』B区宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第64集 宇都宮市教育委員会
- 勝見一晶（埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編）2005『磯岡北道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第53集 宇都宮市教育委員会
- 亀田幸久 1999『杉村北道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第221集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 亀田幸久 2007『西馬道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第304集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 亀田幸久 2008『宇都宮市立野跡の縄文草創期土器について』『古澤考古』27 古澤考古会 佐野 pp.29-32.
- 川原山典一・中山浩 1981『脇山道跡 付久部台古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第38集 栃木県教育委員会
- 神野安伸 1994『天狗原道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第34集 宇都宮市教育委員会
- 久保三編 1990『茂原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第28集 宇都宮市教育委員会
- 倉田万郎編 1971『栃木日産道跡』先史7 駒沢大学考古学研究会 東京
- 栗田敏行 2005『磯岡道跡第2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第32集 上三川町教育委員会（栃木県河内郡）
- 小森哲也 1979『宇都宮市宮原古墳出土の円筒埴輪の年代的位置づけ』『考古』第2号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.60-83.
- 今平利幸 1993『牛塚東道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第32集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 1994『雷地山道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第34集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 1996『城南3丁目道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第39集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 2006『西下谷田道跡一帯・古墳時代前期編一』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第56集 宇都宮市教育委員会
- 今平利幸 2008『西下谷田道跡一帯編二』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第65集 宇都宮市教育委員会
- 今平昌子 1999『一本松道跡・文庫山道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第230集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 今平利幸・栗本誠 2002『下巻西原古墳群』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第30集 宇都宮市教育委員会
- 斎藤恒夫・鈴木宣孝・栃本さや・大塚幹子 2003『宇都宮市飯塚古墳調査報告書』『考古』第14号 宇都宮大学考古学研究会 宇都宮 pp.1-10.
- 定森秀夫 1999『陶瓦上から見た東日本と朝鮮』『青丘学術論集』第15集 韓国文化研究振興財団 東京 pp.5-93.
- 篠原忠志編 2000『成瀬寺道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第239集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 篠原哲・亀田幸久 2009『糠地山道跡・東谷北道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第318集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 清水正幸 2002『西側部古屋原道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第46集 宇都宮市教育委員会
- 下野考古学研究会 1993『石川井道跡』『下野考古』19 宇都宮
- 白崎智雄（埋蔵文化財発掘調査支援協同組合編）2008『砂田道跡（C区）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第62集 埋蔵文化財発掘調査支援協同組合・宇都宮市教育委員会
- 杉浦明博編 2001『大間台道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第251集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 鈴木正博 1991『栃木「先史遺跡」研究の課題』『古代』第91号 早稲田大学考古学会 東京 pp.133-171.
- 芹澤博久 1993『砂田A道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第132集 栃木県教育委員会
- 芹澤博久 2003『大間台道跡出土土器の再評価』『栃木県考古学会誌』24 栃木県考古学会 宇都宮 pp.5-20.
- 高野浩之・戸部孝一・深谷昇・平岡和夫 2004『磯岡道跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第29集 都市基盤整備公団・上三川町教育委員会・山武考古学研究所
- 田代 寛 1968『鉢木道跡の状況上』塩谷郷土史研究報告第2集 氏家（栃木県塩谷郡）
- 田代佳佳 1996『宮内A道跡・宮内B道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第175集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 塚原孝一編 1999『東谷・中島地区道跡群 No.1 磯岡道跡（I区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第229集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 常川秀夫・山野井清人 1978『脇山A道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第24集（原本では第20集と記載） 栃木県教育委員会
- 津野 仁 2005『東谷・中島地区道跡群 No.6 磯岡道跡（2～7区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第292集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁・篠原忠志・今平昌子 2007『東谷・中島地区道跡群 No.8 砂田道跡（4～6・18・19・23・24区）』栃木県埋蔵文化財調査報告第305集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 寺内武夫・篠崎善之助 1939a『下野中原道跡調査概報一第一回一』『考古』10-10 東京考古学会 pp.514-527.
- 寺内武夫・篠崎善之助 1939b『下野中原道跡調査概報一第二回一』『考古』10-11 東京考古学会 pp.537-555.
- 栃木県教育委員会事務局文化課 1988『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和62年度）』栃木県埋蔵文化財調査報告第99集
- 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997『埋蔵文化財センター年報』第7号（平成9年度）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 1999『埋蔵文化財センター年報』第9号（平成11年度）
- 栃木県立なす川上町の丘資料館 1999『栃木の道跡』第7回企画展図録 小川（栃木県那須郡）p.45
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2000『埋蔵文化財センター年報』第10号（平成12年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2001『埋蔵文化財センター年報』第11号（平成13年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2002『埋蔵文化財センター年報』第12号（平成14年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2003『埋蔵文化財センター年報』第13号（平成15年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2004『埋蔵文化財センター年報』第14号（平成16年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005a『埋蔵文化財センター年報』第15号（平成17年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2005b『中島道跡群と磯岡北道跡』『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』No.39 栃木県教育委員会 p.5.
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006a『埋蔵文化財センター年報』第16号（平成18年度版）
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2006b『砂田道跡群3区』『栃木県埋蔵文化財センターだより やまかいどう』No.41 栃木県教育委員会 p.5.
- とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007『埋蔵文化財センター年報』第17号（平成19年度版）
- 富田 秀 2004『本村道跡（赤生・古墳群）』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第49集 宇都宮市教育委員会
- 中村亨史 2004『東谷・中島地区道跡群 No.4 砂田古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団

- 中山 晋 1996『砂田東道跡・上横山A道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第176集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
 中山哲也・井 博幸・三輪孝幸(日本家業史研究所編) 2005『西赤堀孤塚古墳第2次調査報告』上三川町埋蔵文化財調査報告第30集 上三川町教育委員会
 中山哲也・青木健二・倉田有子(日本家業史研究所編) 2005『砂田道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第54集 宇都宮市教育委員会
 名取昭明・武藤健三・五十嵐利勝 1994『宇都宮市二軒屋道跡第二次調査報告』『下野考古学』21 下野考古学研究会 宇都宮 pp.1-146.
 名取昭明・武藤健三・五十嵐利勝 1996『赤宮周辺の分布調査 6』『下野考古学』24 下野考古学研究会 宇都宮 pp.1-60.
 名取昭明・武藤健三・五十嵐利勝 1998『赤宮周辺の分布調査 補足編』『下野考古学』26 宇都宮
 橋本浩朗・谷中隆 2001『東谷古墳群』と権現山道跡・百目鬼道跡『権現山道跡・百目鬼道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・(財) ちぎ生生涯学習文化財団
 橋本浩朗 2002『大谷磨崖仏造像の歴史的背景について』『研究紀要』10 (財) ちぎ生生涯学習文化財団埋蔵文化財センター pp.1-20.
 上生朗治・越智徹・富田努 2008『中島塚道跡(A区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第63集 山武考古学研究所・宇都宮市教育委員会
 上生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007a『西羽部西原道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第59集 宇都宮市教育委員会
 上生朗治・宮田和男・越智徹・大塚雅之(山武考古学研究所編) 2007b『砂田姥道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第60集 宇都宮市教育委員会
 深谷昇・梁木誠・田熊清彦 2003『上神土・茂原官衛道跡』上三川町埋蔵文化財調査報告第27集 宇都宮市埋蔵文化財調査報告第47集 上三川町教育委員会・宇都宮市教育委員会
 藤田直也 2003『東谷・中島地区道跡群3 推定東山道間連地区』栃木県埋蔵文化財調査報告第274集 栃木県教育委員会・(財) ちぎ生生涯学習文化財団
 藤田直也・田代隆 2002『東谷・中島地区道跡群2 砂田道跡(1区・2区・3区)』栃木県埋蔵文化財調査報告第265集 栃木県教育委員会・(財) ちぎ生生涯学習文化財団
 藤田典夫・安藤美保編 2000『杉村・磯岡』栃木県埋蔵文化財調査報告第241集 栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団
 前澤輝政 1976『西赤堀道跡』上三川町教育委員会
 前澤輝政 1979『原始・古代編』上三川町史編さん委員会編『上三川町史』資料編 原始・古代・中世 上三川町
 増岡純子・築島佐知子 1985『宇都宮市茂原町愛宕塚東道跡採集の発生土器』『考古学』第5号 宇都宮大学考古学研究会 pp.15-21.
 水野順敏・河野一也・栗田敬行(日本家業史研究所編) 2005『立野道跡(A地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第55集 宇都宮市教育委員会
 水野順敏・柏崎広伸・井 博幸・三辻利一・三輪孝幸(日本家業史研究所編) 2007『本村古墳群・本村道跡』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第58集 宇都宮市教育委員会
 水野順敏・柏崎広伸(日本家業史研究所編) 2008a『砂田姥道跡(D区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第67集 宇都宮市教育委員会
 水野順敏・柏崎広伸 2008b『みずほの台道跡群(根本西台古墳群第2次・瑞穂野団地道跡東地区)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第68集 宇都宮市教育委員会
 水野順敏・柏崎広伸 2008c『みずほの台道跡群Ⅱ(根本西台古墳群第3次・西羽部上原道跡)』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第69集 宇都宮市教育委員会
 森嶋秀一 2004『204.上三川町・宇都宮市上神土・茂原官衛道跡出土の大型尖頭器』『Aesculus』No.22 Aesculus 同人(栃木県石器時代研究会) 宇都宮 pp.1-3.
 安永貞一 2001『上神土・茂原 茂原向原 北原東』栃木県埋蔵文化財調査報告第256集 栃木県教育委員会・(財) ちぎ生生涯学習文化財団
 谷中隆・大島美智子編 2001『権現山道跡・百目鬼道跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第257集 栃木県教育委員会・(財) ちぎ生生涯学習文化財団
 梁木誠 1984『鶴舞塚古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第13集 宇都宮市教育委員会
 梁木誠・今平利幸 1995『久部愛宕塚古墳・谷口山古墳・御嶺山古墳』宇都宮市埋蔵文化財調査報告第37集 宇都宮市教育委員会
 山崎芳家 1970『宇都宮市兵庫塚A地点・B地点および針ヶ谷道跡について』『足跡』2 宇都宮学園高等学校地理・歴史研究会 宇都宮 pp.22-26.
 渡辺邦夫・上野修一 1993『宇都宮市石川坪道跡出土の石製品』『Aesculus』19 Aesculus 同人 宇都宮 pp.15-16.

第Ⅲ章 調査区の配置と標準土層

第Ⅰ節 砂田姥沼遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 砂田姥沼遺跡は東谷・中島土地区画整理事業用地内の北東に所在する。田川東岸の低台地を南北方向に開析する「中島谷田」と「無名瀬川」の谷に面した微高地上で、標高約 85.9 ～ 86.2 m、南側の低地との比高は約 1 m 前後である。今回報告する 1 区・2 区・3 区は遺跡の中央～西部にあたる。(第 8 図)

砂田姥沼遺跡の各調査区 区画整理に伴って、敷地造成工事と道路建設が計画された。造成工事予定地を対象に 1 区の発掘調査を平成 10 (1998) 年度に実施した。

2 区・3 区は、区画整理の計画変更で造成地の北側・南側に道路設置が計画された。それに伴い、道路建設予定地を対象として 2 区・3 区の発掘調査を平成 17 (2005) 年度に実施した。砂田姥沼遺跡 1 ～ 3 区の調査で認められた遺構の種類と数は次のとおりである。

砂田姥沼 1 区…古墳時代の竪穴建物跡 17 棟・掘立柱建物 2 棟・方形区画溝 1 基／

奈良時代の竪穴建物跡 1 棟／近世以降の溝跡 4 条／

時期不明の掘立柱建物 3 棟・井戸 1 基・溝跡 6 条・土坑 20 基・小穴 28 基

砂田姥沼 2 区…古墳時代の竪穴建物跡 5 棟・掘立柱建物跡 1 棟・旧河道跡 1 条・通路状遺構 3 基／

時期不明の掘立柱建物跡 1 棟・溝跡 4 条・土坑 9 基・小穴 125 基

砂田姥沼 3 区…古墳時代の竪穴建物跡 5 棟・掘立柱建物跡 3 棟・柵列跡 1 列・旧河道跡 1 条／

奈良時代の通路状遺構 2 基／平安時代の竪穴建物跡 2 棟／

時期不明の掘立柱建物跡 2 棟・溝跡 12 条・土坑 19 基・小穴 60 基

以上の 3 地区の遺構を、時代ごとに集計すると次のようになる。

古墳時代：竪穴建物跡 27 棟・方形区画溝 1 基・掘立柱建物跡 6 棟・柵列 1 列

古墳時代終末期から奈良時代：旧河道跡 2 条・通路状遺構 5 基

奈良時代：竪穴建物跡 1 棟

平安時代：竪穴建物跡 2 棟

近世以降：溝跡 4 条

時期不明：掘立柱建物跡 6 棟・土坑 48 基・溝跡 22 条・小穴 213 基

本遺跡の 1 ～ 3 区以外の未調査部分については、区画整理後の敷地内に施設などの建設計画が具体化した段階で、各工事に伴って宇都宮市教育委員会が発掘調査を実施している（大塚他 2007・小野 2007・白崎 2008・水野 2008・小野 2008）。

これまでに宇都宮市調査 A ～ E 区の 5 地点の報告が刊行されており、A 区・B 区・D 区・E 区が今回報告部分の東側に、C 区が西側に位置している（第 8 図）。宇都宮市教育委員会調査の調査で認められた移行の種類と数は次のとおりである。

A 区…古墳時代後期 3 棟の竪穴建物跡／時期不明の土坑 1 基・溝 1 基が調査された（大塚他 2007）。

B 区…古墳時代終末期 1 棟の竪穴建物跡・溝 2 条・土坑 1 基・ピット群／中～近世以降の溝 1 条・土坑 1 基・ピット群（小野 2007）。

C 区…縄文時代草創期有舌尖頭器 1 基／古墳時代後期 3 棟の竪穴建物跡・土坑 2 基・溝跡 1 条・旧河川跡 1 条／



第8図 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡及び周辺遺跡

中～近世以降と時期不明の土坑3・溝2・ピット111が調査された（白崎2008）。

D区…古墳時代中～後期10棟の竪穴建物跡・4棟の掘立柱建物跡・土坑9・小穴85／中～近世以降と時期不明の土坑3・溝1・井戸1が調査された（水野2008）。

E区…古墳時代中～後期1軒の竪穴建物跡・7棟の掘立柱建物跡・土坑7／奈良時代の土坑3／近世以降と時期不明の溝2・ピット41が調査された（小野2008）。

以上の宇都宮市調査分の5地区の遺構を、時代ごとに集計すると次のようになる。

古墳時代：竪穴建物跡17棟・掘立柱建物11棟・土坑18基・小穴85基・旧河道跡1

奈良・平安時代：土坑3基

中近世・時期不明：井戸1本・土坑6基・溝跡7条・小穴152基

隣接する調査区 砂田姥沼遺跡の南側には「無名瀬川」と「中島谷田」をつなぐ浅い開析谷があり、その谷を挟んで中島笹塚遺跡が立地している。2004年度までに1～8区（県調査分）と市調査分が調査され、縄文時代の竪穴建物跡1棟、土坑2基、陥穴状土坑5基、遺物出土地点1箇所、柱穴1基、古墳時代中期～奈良時代の竪穴建物跡30棟、円形周溝遺構3基、円筒形土坑3基、土坑9基、柱穴10基、溝跡10条、埋没谷1箇所、掘立柱建物跡10棟、柵列1列、通路状遺構2基、井戸跡1基などの集落跡と遺跡内には古墳時代中期の中島笹塚古墳群もあり、円墳14基、方墳2基、土壇墓1基が調査されている（内山2008・土生2007a・2008）。

また、砂田姥沼遺跡の東縁部では「無名瀬川」が画くしており、この小河川のすぐ東側の一段高い台地上に西荆部西原遺跡が立地している。2007年度までに1～14区（県調査分）と市調査分の2地区が調査され、旧石器時代の遺物集中地点3箇所、古墳時代後期と奈良および平安時代の竪穴建物跡149棟、掘立柱建物跡25棟、円形周溝遺構計15基、円形有段遺構計2基などを含む集落跡（とちぎ生涯学習文化財団2001～2007・土生他2007a・2008）と東山道と推定される古代道路遺構（藤田2003）が認められた。西荆部西原遺跡内には古墳時代後期の琴平塚古墳群もあり、前方後円墳3基と円墳11基が調査されている（中村2004）。

第2節 砂田瀧遺跡における調査区の配置と概要

調査区と遺構 砂田瀧遺跡は、区画整理事業用地内の北西部に所在する。田川東岸の低台地を南北方向に開析する「西谷田」と「中島谷田」の谷に面した微高地上で、標高約87.0～87.4m、西～南側の低地との比高は約1m前後である。遺跡の北～西側にかけては、「中島谷田」・「西谷田」に続く浅い谷があり、視野的にも地形的にも画している。今回報告する1区・2区・3区ではほぼ遺跡全体にあたる（第8図）。

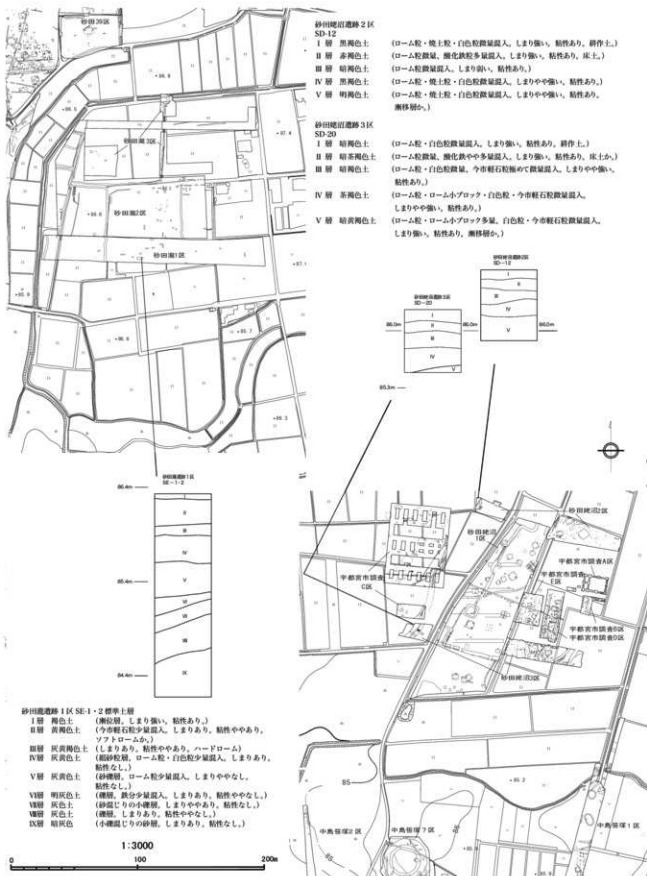
砂田瀧遺跡の各調査区 区画整理に伴って敷地造成工事が計画された。造成工事予定地を対象に、先ず用地取得がなされた1区の発掘調査を平成12（2000）年度に実施した。2区は平成16（2005）年度に3区は平成19（2007）年度に実施した。

砂田瀧遺跡1～3区の調査で認められた遺構の種類と数は次のとおりである。

砂田瀧1区…中世の土坑1基、井戸2基／時期不明の土坑7基・溝跡7条

砂田瀧2区…時期不明の井戸跡3基・土坑42基・溝跡20条・小穴11基

砂田瀧3区…時期不明の焼土遺構2基・土坑1基・溝跡6条・小穴3基



以上の3地区の遺構を、時代ごとに集計すると次のようになる。

中世：土坑1基、井戸2基

時期不明：焼土遺構2基・井戸3基・土坑50基・溝跡33条・小穴14基

隣接する調査区 砂田瀧遺跡の西側には「中島谷田」に連続している浅い開析谷を挟んで砂田遺跡がある。砂田遺跡は2008（平成20）年度までに1～42区（県調査分）が調査され、これまでに1区～6区・18区・19区・23区・24区が刊行報告されている（藤田2002・津野他2007）。縄文時代の陥伏状土坑1基、古墳時代後期～平安時代前期の竪穴建物跡202棟、掘立柱建物跡136棟、土坑776基、溝跡50条、井戸跡5本、周溝遺構2基、道路遺構1基、性格不明遺構9基、ピット324基などを含む集落跡が調査されている。また、砂田瀧遺跡の南東側約200mには砂田姥沼遺跡が所在する。

第3節 砂田姥沼遺跡と砂田瀧遺跡の土層

砂田姥沼遺跡の南側には「無名瀬川」と「中島谷田」をつなぐ浅い開析谷があり、遺跡が立地する台地は南と東側に向かって緩やかに傾斜している緩斜面になる。今回の調査ではいずれの調査区においても台地の最深部までの所見は得られなかったため、2区西端部の旧河道跡のSD-12付近と3区西端部の旧河道跡であるSD-20付近にて作成したものを標準土層とし第9図に示す。

また、砂田瀧遺跡が立地している微高地は、東側の低地に向かって傾斜している。標準土層は1区の中央東寄りに位置するSE-1・2付近で作成したものを第9図に示す。

これらの標準土層とテフラや遺構・遺物との関係を次に説明する。

砂田姥沼遺跡の土層 砂田姥沼遺跡の2区・3区の旧河道跡の調査にて把握できた標準土層は統一した標準土層名を用いることができなかった。表土層～ローム漸移層までを標準土層として、それぞれⅠ層～Ⅴ層まで区分する。

Ⅱ層（床土）は酸化鉄を多量に含む層であり、耕作に伴う床土であろう。Ⅲ層は2区では床土下の整地層として、3区では腐植土として堆積している。Ⅳ層は2・3区とも腐植層、Ⅴ層はローム漸移層となる。3区のⅢ～Ⅴ層中の堆積土には今市軽石（Nt-I）が粒状で認められる。東谷・中島地区では、七本桜軽石（Nt-S）と今市軽石（Nt-I）が、黒色腐植土～ハードローム層の最上部までに散在して認められる傾向にあるが、今回の堆積土中には七本桜軽石層（Nt-S）が認められなかった。これは人為的な土地の利用も含め、腐食土層の形成、土壌化の進行状況によって差異が生じたと推定される。

砂田瀧遺跡の土層 砂田瀧遺跡の1区の井戸跡の調査にて把握できた。ローム漸移層～砂層までを標準土層として、Ⅰ層～Ⅳ層まで区分する。

Ⅳ～Ⅳ層までは砂礫・礫層で明瞭な水成堆積層である。Ⅴ層（礫層）は鉄分が付着した砂粒・小礫が多く認められることから、この層において、ある程度の期間、水が堆積していた可能性が推定される。

Ⅲ層（ハードローム）には水成堆積の痕跡は認められないことから、水の影響を受けずに田原ローム（更新統）が堆積したことが判る。

遺構との関係 砂田姥沼遺跡の台地上ではⅤ層（ローム漸移層）で、古墳時代以降の遺構を確認できた。砂田瀧遺跡においてもⅠ層（ローム漸移層）において中世以降の遺構の掘り込みが確認できた。

第4章 砂田姥沼遺跡各地区の縄文・弥生時代遺物

第1節 縄文時代の遺物出土状況

砂田姥沼遺跡の縄文時代のものと認定できた遺構はない。遺構以外で出土した遺物の状況を地区ごとに触れる。なお、砂田姥沼遺跡2区においては遺物は確認されていない。

【砂田姥沼遺跡1区】縄文時代の遺物は土器片77点、石器8点である。ほとんどが、調査区一括や古墳時代・古代の遺構や近世以降の溝跡等から出土している。早期では前葉の燃系文土器の井草式期の土器片の7点が、SD-27や調査区一括から出土している。燃系文系の胴部破片は、102-36・37 グリッド (SI-10) や調査区一括から出土し、40点が確認されている。早期の遺物の出土状況は、1区調査区の中央部に比較的多く分布している。前期では中葉の羽状縄文系のうち黒浜式のもの12点出土している。103.5-37.5 グリッド (SI-3)、102-102.5-36.5 グリッド、102.5-37 グリッド (SI-10)、99.5-37 グリッド (SI-15)、98.5-36 グリッド (SI-18)、SD-26・27の覆土や床下から出土している。中期では阿玉台式期の18点が103.5-37.5 グリッド (SI-3)、103-38 グリッド (SI-5)、102-102.5-36.5、102.5-37 グリッド (SI-10)、98.5-36 グリッド (SI-18)、98.5-36 グリッド (SB-83)、98-35.5 グリッド (SK-47)、101-37.5、101.5-37.5 グリッド・調査区一括から出土している。なお、石器は調査区一括として礫器3点、打製石斧、磨製石斧、台石、剥片2点が出土している。

【砂田姥沼遺跡3区】縄文時代の遺物は土器片9点、石器1点と少量である。西側調査区で出土した礫器以外の土器片は、すべて東側調査区で確認されている。調査区一括や古墳時代の遺構、溝跡から出土しているが、いずれも混入したものである。早期では前葉の燃系文土器の井草式が99・99.5-38.5 グリッド (SI-2 貼床) から1点が出土している。前期では羽状縄文系土器3点が99-38 グリッド (SI-1)、99-99.5-39 グリッド (SI-5)、99-39.5、99.5-40 グリッド (SD-14) から出土しており、中期では阿玉台式期5点が99.5-39 グリッド (SI-6)、99.5-39.5 グリッド (SD-13)、調査区一括から出土している。なお、石器は礫器1点が西側調査区の100・100.5-33.5、100・100.5-34 グリッド (SD-20A区) から出土している。

第2節 砂田姥沼遺跡各地区の縄文土器

本節では、遺構以外から出土した縄文時代の遺物は、1区・3区と地区ごとに分けず、各地区で出土したものをまとめて分類し、本節で報告する。

【第1群 燃系文系土器】(第10図1～21、写真図版五九)

1類 口唇部が肥厚するもの(1～8)

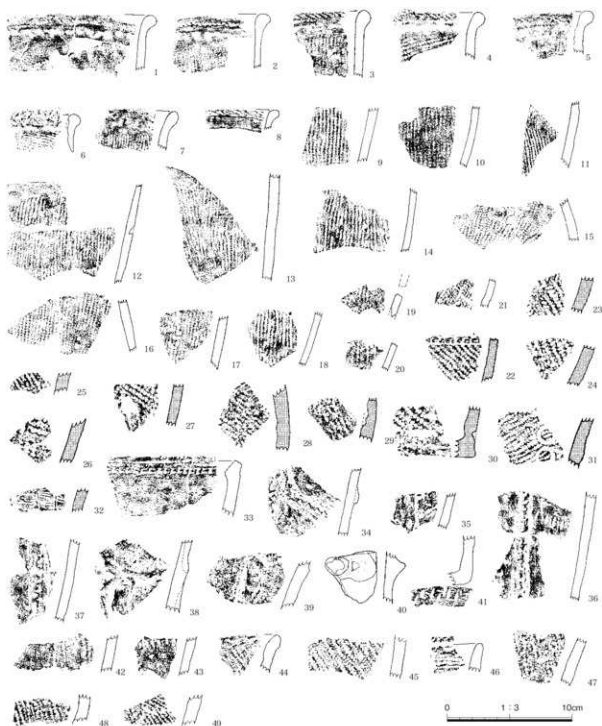
肥厚する口縁部の側面に斜走縄文、胴部には縦走縄文を施す。1～8の頸部には文様帯に縄文が無く、井草Ⅱ式及び大丸式が想定される。胎土は比較的綿密で、白・黒・透明ないし半透明の砂粒、白細砂が混入している。焼成は比較的硬質。色調はにぶい黄橙、にぶい黄褐が主体である。

[1種] 肥厚する口縁部側面に縄文、頸部は指頭痕、胴部に縄文を施すもの(1・2・4・6)

1・2・4・6は頸部文様帯に頸部に指頭痕が明瞭に残る。胴部の縄文は1・2が縦走、4・6が斜走していることが判る。1は口縁部側面にRLの縄文面の押圧、胴部には縦方向の燃系文が見られるが、施文が浅いため不明瞭。2は口縁部側面にLRの縄文面を押圧、胴部には縦方向の燃系文、1同様に施文が浅いため不明瞭である(おそらくLRの斜回転)。4は口縁部側面にRLの横回転、胴部にはLRの横回転が施される。6は口縁部側面にRLの横回転が施される。胴部にはRLの横回転が施されている。1・6は1区表面採集、2はSX-28表土、4は3区SI-2貼床出土。

[2種] 口縁部側面に縄文、頸部にナデ調整、胴部に縄文を施すもの(3・5・7・8)

胴部の縄文はいずれも縦走している。3は口縁部側面にRLの横回転、胴部には縦方向の燃系文が見られるが施文が浅いため不明瞭(LRの斜回転)。5は口縁部側面にRLの横回転が施され、胴部は縦方向の燃系文が見られるが施文が浅く不明瞭(LRの斜回転)。7は口縁部側面にRLの横回転が施され、胴部には縦方向



第10図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の縄文土器

の撫糸文が見られる。おそらくはRの斜回転か。8はLRの横回転か。頸部は横方向のナデ調整が施されている。3・7・8は1区表面採集、5は1区SD-27出土。

2類 縄文のみが施されている胴部から底部の破片（9～21）

11～13は頸部付近、19は同下部の破片と考えられる。9・10は2段RLの斜回転。11は破片上部に横方向の指ナデ、胴部が1段Lの斜回転が施されている。12は破片上部が横方向の指ナデ、胴部が1段Lの斜回転。13は破片上部に横方向の指ナデ、胴部が1段Rの斜回転。14は胴部破片で1段Lの斜回転。15～20は胴部破片で2段RLの斜回転。21は1段Rの斜回転。9・12・13・15・16・17・18・19は1区表面

採集、10は1区SI-10、11は3区SI-2、14は1区SX-28、20は3区SI-5、21は1区SI-18から出土。

【第2群 前期の羽状縄文系土器】(第10図22～32、写真図版五九)

1類 黒浜式土器(22～32)

22～24・27は2段RLの横回転で羽状に構成。22の破片上部に半截竹管状工具による横位の連続押し引き文を施す。25・26・28・29は2段RLの横回転。30は胴部下端～底部の破片で、胴部下端外面に2段RLの横回転が施されている。底部はナデ調整。31は2段LRの横回転で施文しており、半截竹管状の工具を回転させて円形に施文している。32は多截竹管状工具により縦方向に押し引いた後に横方向に施文して肋骨文を構成。1類はいずれの土器にも横縞と白細砂が多く、透明細砂の混入もある。26には黒砂粒が混入している。明暗の差はあるが、橙、にぶい橙、にぶい黄橙、にぶい黄褐、にぶい褐、31は暗灰黄である。焼成はいずれも比較的硬質である。22は1区SI-15、23・24は1区SI-18、25は3区SI-1、26は3区SD-14、27は1区SD-26・27、28・29は1区SK-49、30は1区SI-15床下、31は3区SI-13A、32は1区SI-10出土。

【第3群 中期の土器】(第10図33～49、写真図版五九)

1類 角押文を持つもの(33～35)

[1種] 口縁部に角押文が施されているもの(33)

33は平縁の口縁部破片で、口唇部には沈線が、口縁部側面には横位の単列の角押文が認められる。角押文は連続して押し引きされる。口縁部内面には屈曲部があり平坦面を形成する。胎土は綿密で白・黒・半透明の砂粒と金色雲母片を含む。にぶい褐。焼成は比較的硬質である。1区101-37.5グリッド出土。

[2種] 隆帯の際に施されているもの(34・35)

34は隆帯による区画帯の両側に多截竹管状工具の背による単列の押し引き文を形成。隆帯の上面に5mm間隔の押圧が認められる。35は断面三角形の隆帯の右側に半截竹管状工具の背で連続押し引きによる沈線が施されている。また、斜方向に細い半截竹管状工具の背で連続押し引きによる沈線が2列平行している。34は白・黒の細砂と金色雲母片を含む。にぶい黄橙色、35は白細砂と金色雲母片を含むにぶい褐色で、焼成は比較的硬質である。34は1区101-37.5グリッド、35は3区SI-3出土。

2類 隆帯があるもの(36～40)

[1種] 隆帯の幅が細いもの(36・37)

36は幅の細い隆帯の両側に多截竹管状工具による沈線が配される。隆帯の断面は三角形であるが、左側はなだらか、右側は急な傾斜となっている。その両側に数条の幅の細い沈線が引かれる。隆帯の上面には押圧があり、上半は2～3mm間隔、下半が5～6mm間隔で配されている。また、破片の上部と下部にそれぞれ斜方向に続く8～9mm間隔の押圧が並ぶ。37は隆帯の両側に多截竹管状工具による縦方向の沈線がある。隆帯の断面形は三角形で、36同様に左側がなだらか、右側が急な傾斜である。隆帯右側の際には縦位の3条の幅の細い沈線が引かれている。隆帯の上面には5mm間隔の押圧が縦方向に並んでいる。36は白・黒の砂粒と白細砂に金色雲母片を含む。37は白・黒・半透明の砂粒、白細砂に金色雲母片を含む。ともに色調はにぶい橙、焼成は比較的硬質である。36は1区表面採集、37は1区101.5-37.5グリッド出土。

[2種] 隆帯の幅が広いもの(38～40)

38は口縁部付近の破片で、低い隆帯で横位の隆帯を軸に上下で楕円形の区画を隆帯で形成。低い隆帯で形成した区画内に、隆帯に沿って多截竹管文(?)による押し引き沈線。39は胴部破片。幅の広い隆帯の左側に端部を斜めにカットした多截竹管状工具の背で沈線を引いている。40は口縁部付近の破片で渦巻状の区画隆帯の端部。38は白・黒・半透明の砂粒に金色雲母片を含む。39は白・黒・透明の砂粒に金色雲母片を含む。40は白・黒・透明の砂粒に白細砂と金色雲母片を含む。38と40はにぶい褐。39はにぶい橙。焼成は硬質である。38は3区SD-13付近採集、39は1区表面採集、40は1区SI-10出土。

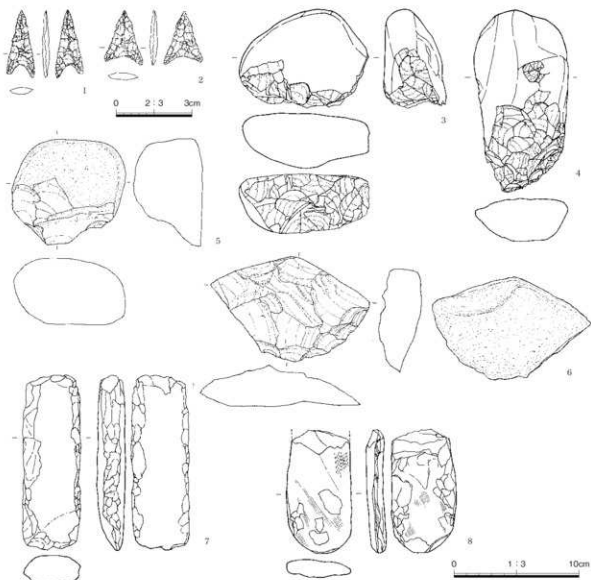
3類 胴部から底部の破片(41～43)

41は胴部下端～底部の破片で器面はナデ調整である。底部には網代痕。42は胴部破片で縦位のナデ成形。

43は胴部破片で破片上縁に3mm間隔の押圧。41は白・黒・半透明の砂粒に白細砂と金色雲母片を含む。42は白細砂に半透明の砂粒・金色雲母片を含む。43は白・半透明の砂粒に金色雲母片を含む。色調は41と43はにぶい黄橙、42はにぶい橙。焼成は硬質である。41・43は1区表採、42は1区101.5-37.5グリッド

4類 縄文を施すもの (44～49)

44は平縁の口縁部破片で頸部以下には2段RLの横回転。45は胴部破片で2段RLの横回転。胎土に金色雲母を含まないことから前期末の可能性。46は中期中頭頂の複合口縁の口縁部破片で1段Lの斜回転。口唇部は摩耗のため不明瞭であるが縄文を施文か。47は胴部破片で2段RLの横回転。破片中央部に縦方向に無文。48は口縁部付近の破片。2段RLの横回転。49は胴部破片で2段RLの横回転。44は白・半透明の砂粒と金色雲母片を含む。45は白・透明・半透明の砂粒。46は白・黒・半透明の砂粒。47は白・半透明・の砂粒に白細砂と金色雲母片を含む。48は白・半透明の砂粒に白細砂、白雲母片を含む。49は白細砂と白砂粒を含む。色調は44・48がにぶい黄橙(10YR6/4)。45と47がにぶい橙(7.5YR6/4)。46が橙(5YR6/6)。49が明赤褐(2.5YR5/6)。焼成はすべて比較的硬質である。44・48は1区SI-5、45は1区SB-83P9、46は3区SK-26、47は1区SI-5床下、49は1区SI-18から出土。



第11図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の石器(1)

第3節 砂田姥沼遺跡各地区の縄文時代石器

砂田姥沼遺跡の遺構外から出土した石器は全地区まとめて分類し、本節で報告する。

石鏃（第11図1・2、第3表、写真図版六〇）

総数2点で3区からの出土である。形態は2つとも無茎鏃で、凹基に区分される。1は細く大きく湾曲する。2はやや湾曲して脚部を作り出している。平面形は1・2とも二等辺三角形形状である。石材はチャート製。

礫器（第11図3～6、第3表、写真図版六〇）

礫器は自然礫を加工し、刃部を作り出すものを一括。遺構外から4点の出土がある。素材は礫塊を使用し、刃部については一側縁に刃部調整を施す片刃のもの、扁平な礫の両側辺と表面に加工を施し刃部を作出したもの、二辺に片側から加工を施し刃部を作出したもの。石材は砂岩、泥岩、泥岩質ホルンフェルスである。

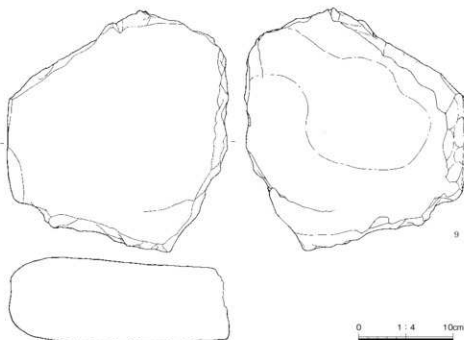
打製石斧・磨製石斧（第11図7・8、第3表、写真図版六〇）

石斧類は打製石斧と磨製石斧各1点、計2点が出土した。7は完存の短冊形の打製石斧。表裏面は研磨。両側面に剝離調整、刃部は図面下側になり片刃。石質は多孔質安山岩。浅黄色。

8は1/2残存の磨製石斧。研磨面は3面残存し、側面には面取りが認められる。表裏は斜方向の、側面は縦方向と斜方向の研磨が顕著である。なお、表裏には剝離が認められるが刃部を形成していないことから磨製石斧の素材の可能性もある。石質は泥岩で頁岩より硬い素材。灰オリーブ色。

石皿（第12図9、第3表、写真図版六〇）

石皿とした石器は遺構外から1点のみ出土。三辺欠損しており、表面が平坦、裏面はやや丸味を帯びることから石皿の可能性が高い。2～3mmの石英斑品と有色鉱物を含む、硬質緻密な安山岩。にぶい黄色。



第12図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の石器（2）

第3表 砂田姥沼遺跡 遺構外出土石器観察表

（ ）：推定値 []：残存値

番号	器種	出土位置	石質	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	排阻	図版	備考
1	石鏃	3区 SK-27	チャート	[2.95]	1.1	0.3	0.58	11	六〇	凹基無茎鏃 小形で鋭い調整
2	石鏃	3区 SI-4 西風樹木根	チャート	2.15	1.6	0.3	0.56	11	六〇	凹基無茎鏃
3	礫器	1区調査区一拵	砂岩	7.8	10.4	5.0	490.0	11	六〇	二辺に加工を施し、刃部を作出
4	礫器	1区調査区一拵	粘板岩	14.4	7.5	3.5	450.92	11	六〇	両側辺と表面加工、刃部を作出
5	礫器	1区調査区一拵	泥岩質ホルンフェルス	8.3	9.2	5.6	526.50	11	六〇	刃部は片刃
6	礫器	3区 SD-20 一拵	砂岩	8.5	12.8	3.2	325.20	11	六〇	両側辺と表面加工、刃部を作出
7	打製石斧	1区調査区一拵	多孔質安山岩	13.6	4.5	2.3	210.29	11	六〇	刃部は片刃
8	磨製石斧	1区 98-34.5	泥岩質	[8.7]	5.1	1.4	111.91	11	六〇	研磨は3面 側面に面取り
9	石皿か	1区調査区一拵	安山岩	[24.8]	[23.3]	9.1	9,100	12	六〇	三辺欠損。表面平坦、裏面

第4節 弥生時代の遺物出土状況

砂田姥沼遺跡の弥生時代の遺物は確認されていない。遺構以外で出土した遺物の状況を地区ごとに触れる。なお、砂田姥沼遺跡2区において、弥生時代の遺物は確認されていない。

【砂田姥沼遺跡1区】 弥生時代後期の附加条縄文1種の土器片1点、櫛描文が1点と非常に少ない。98・98.5-35.5・36グリッド(SI-17)から出土している。器面には羽状縄文が施されている。

【砂田姥沼遺跡3区】 弥生時代の遺物は土器片27点、いずれも後期の土器である。すべて東側調査区で確認されている。調査区一括や古墳時代の遺構から出土しているが、混入したものである。

後期の附加条縄文1種の土器片が99・99.5-38.5グリッド(SI-2)から7点、99.5-38.5グリッド(SI-3)から7点がそれぞれ出土している。この他に99-38グリッド(SI-1)、99.5-38.5-100-38.5グリッド(SI-4)、99・99.5-39グリッド(SI-5)、99.5-39(SK-26)、99-39(SK-33)からそれぞれ1点ずつ出土している。櫛描文が施されている土器片は、99・99.5-38.5グリッド(SI-2)から1点、99・99.5-39グリッド(SI-5)から3点が出土している。SI-5から出土した破片には、附加条縄文2種のものが混入している。99.5-39グリッド(SI-6)から複合口縁が1点、同グリッド(SK-26)から棒状浮文が貼り付いた複合口縁が1点出土している。

第5節 砂田姥沼遺跡各地区の弥生土器

本節では、弥生時代の遺物は地区区分せず、出土したものをまとめて分類したものを報告する。

【第1群 弥生時代後期の土器】(第13図1～28、写真図版六〇)

1類 縄文を施すもの(1～20)

[1種] 素口縁若しくは頸部外面に縄文が施されるもの(1～4)

1～4は附加条縄文1種で、1・2は素口縁の口縁部破片、3・4は複合口縁の破片である。1は縦位の羽状縄文が施文され、左右とも2本のRの縄を附加した原体を横位に回転施文。軸縄は左半が不明瞭(おそらくLR)、右半はRLである。2は縦位の羽状縄文。左右とも2本のRで附加され、原体を横方向に回転施文。軸縄は2本とも不明。1・2とも口唇部に縄文の側面押圧。3は2本のRを附加した原体を横位に回転施文。頸部にはRLの横回転施文後に横位の沈線が施す。4は2本のRを附加した原体を横回転。軸縄は不明瞭であるがLRである。頸部には横位の沈線。胎土は1～3は白・黒・半透明の砂粒、4は白・半透明の砂粒。焼成はすべて比較的硬質。色調は1はにぶい黄橙、2・3はにぶい褐、4は灰黄褐。1は3区SI-2カマド、2・3は3区SI-3南西、4は3区SI-3P5から出土。

[2種] 胴部外面に羽状縄文が施されているもの(5～8)

5～8は胴部破片で、いずれも附加条縄文1種で施文されている。5・6の羽状縄文は上半が2本のLで附加された原体を横回転、下半は2本のRで附加された原体を横回転施文している。軸縄は上半がRL、下半がLRになる。7・8の羽状縄文は上半が2本のLを附加した原体を横回転、下半は2本のRを附加した原体を横回転施文をしている。軸縄は上半がRL、下半がLRになる。胎土は5が白・半透明の砂粒に白細砂、6は白。黒・透明の砂粒。7は黒・半透明の砂粒に白細砂を含む。8は半透明の砂粒が多い。焼成は比較的硬質であるが、8は脆い。色調は5・6・7がにぶい黄橙、8がにぶい黄。5は3区SI-2カマド、6は1区SK-50、7は3区SI-2カマド、8は3区SI-3北西から出土している。

[3種] 胴部外面に縄文が施されているもの(9～20)

いずれも附加条縄文1種で、9～11・13～17は胴部破片、18・19は胴部下端と底部片、12・20が口縁部破片である。9～11・13・16・17は2本のRを附加した原体を横回転施文をしたもので、軸縄はLRである。12は複合口縁の破片で、2本のRを附加した原体を横回転している。軸縄はLRになる。破片の下縁にはキザミの痕跡がある。14は2本のRを附加した原体を斜回転施文しており、軸縄は不明瞭である(おそらくLR)。15は2本のRを附加した原体を斜回転施文している。軸縄は不明。胎土は9・10・12・14・15は白・半透明の砂粒、11・16・17は白・黒・半透明の砂粒、13は白・黒の砂粒、20は白細砂。焼成はや



第13図 砂田姥沼遺跡 遺構外出土の弥生土器

や硬質であるが15が軟質。9・10・18は3区SI-3南西、11は3区SK-26、12・15～17は3区SI-2、13は3区SK-33、14は3区SI-4、19 3区SI-1、20は3区SI-5から出土。

2類 櫛描文もしくは櫛描文と縄文を施すもの(21～25)

[1種] 頸部外面に縦区画や波状文を施すもの(21～23)

21は横位の波状文を施した後に、縦位の区画(2条)のスリット。いずれも5本櫛歯。波状文は破片上端から3・6段目の波状が緩やかな施文をした後に、上下の波状文が施している。破片下端は被熱赤化及び剥離。22は5本櫛歯の縦位区画(2条)のスリット→横位の波状文を3段配する。23は頸部片で横位の5本櫛歯の波状文が2段配されている。胎土は21が白砂粒に黒細砂。22が黒・半透明の砂粒。23が白・黒・半透明の砂粒。焼成はいずれも硬質。色調は21・22はにぶい黄橙、23は灰黄。21は3区SI-2 No. 127、22は3区SI-5、23は1区SI-17から出土。

[2種] 胴部外面に附加条縄文2種と下向き連弧文を施すもの(24・25)

24は2本のRを附加した原体を横回転施文。軸縄はLRである。縄文施文より上位に横位の櫛描文→縦区画(2条)のスリット→下向き連弧文となる。櫛描文は5本櫛歯。器面に煤付着と一部被熱赤化。25は2本のLを附加した原体を横回転。軸縄は不明であるが1段Lか2段LRが想定でき、附加条縄文の2種と判断した。縄文施文より上位に横位の櫛描文→縦区画(1条)のスリット→横位の波状文は3段あり、2段目が先行し上下に波状文→下向き連弧文。胎土に金色雲母が含まれ、久慈川流域の可能性。24には白砂粒・黒細砂・白色針状物質。25は白・半透明砂粒、金色雲母片。焼成は硬質。色調は24がにぶい黄橙、25はにぶい黄褐。24・25は3区SI-5から出土。

3類 頸部外面の段に棒状浮文や刺突を施すもの(26～28)

26は複合口縁の端部を指頭で押し上げている。口縁部端部にはへら状工具による斜方向の押圧。頸部にはへら状工具による斜方向の模様。27は複合口縁部の破片。2本のRを附加した原体を横回転施文。軸縄は不明。施文後、破片下部の器面にキザミを施してから、棒状浮文を貼付ける。28は羽状縄文で左半が2本のRを附加した原体を横回転。軸縄は不明。右半が2本のLを附加した原体を横回転。軸縄はLRである。縄文原体の縄先端で段の下端に刺突を行う。胎土は26～28が白・半透明の砂粒。焼成は硬質。色調は26がにぶい橙(7.5YR6/4)、27がにぶい黄橙、28が褐灰。26は3区SI-6、27は3区SK-26、28は3区SI-2から出土。

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査

砂田姥沼遺跡1区は、宇都宮市砂田町字姥沼 127・128・150・151・155-1番地に所在し、「無名瀬川」の低地を東側に臨む低台地の東端に位置する。発掘調査前の標高は北部 86.63 m、中央部 86.44 m、南部 86.20 m、低地との比高は北部 1.53 m、中央部 1.34 m、南部 1.1 m 程である。1区の範囲は南北 151.2 m × 東西 44.8 m。古墳時代の遺構はほぼ全面に確認されている。比較的遺構が集中する中央部の位置は北緯 36 度 29 分 51 秒、東経 139 度 54 分 36 秒である（世界測地系）。

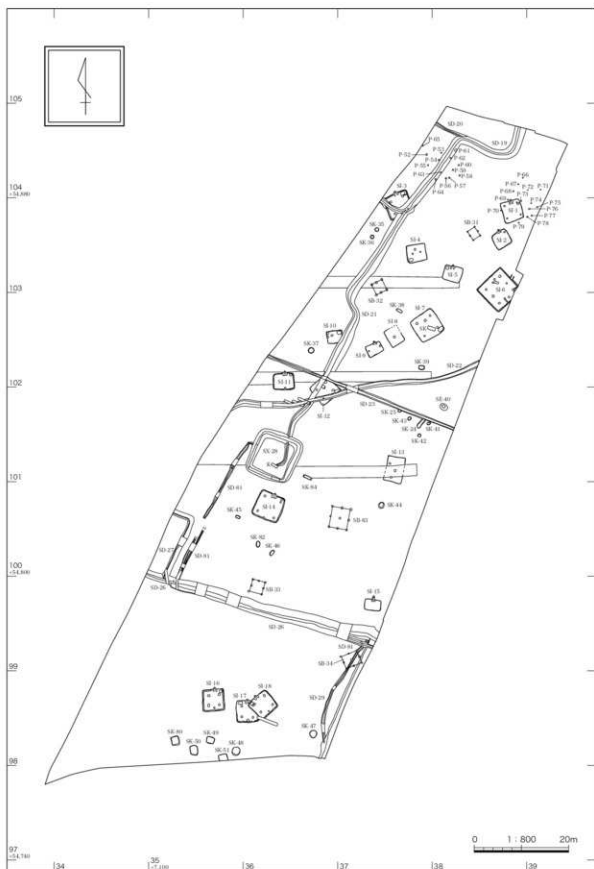
第1節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴建物跡

S1-1（第15・16図、第4表 図版一・六一）

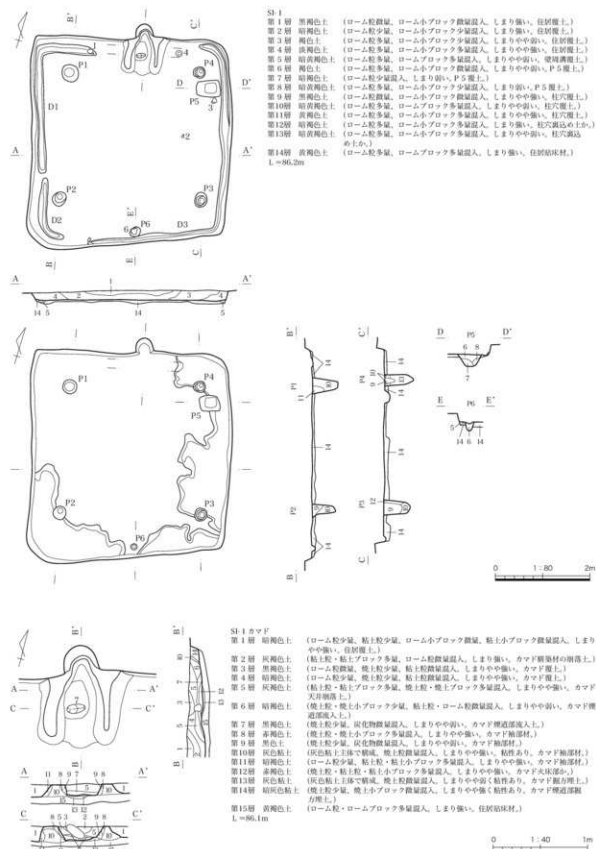
概要 本遺構は1区の北部で確認された隅丸方形の竪穴建物跡である。確認面からの掘り込みは 13.3 cm ～ 19.8 cm とやや浅い。 **位置** 104 - 38 グリッドに位置する。確認面標高は 86.005 m ～ 86.048 m である。

平面形・規模 南北 4.42 m × 東西 4.20 m の隅丸方形の竪穴住居である。南壁に直交する軸線は N-22° W である。 **覆土** 堆積状況は東西方向のセクションで観察された。竪穴住居の覆土はレンズ状の堆積をしており、第1～第4層の自然堆積である。第5層は壁周溝（D1・D3）の堆積土である。 **壁** 床面からの壁高は 13.3 ～ 19.8 cm で床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。 **床** 第14層は S1-1 の住居貼床を形成しており、床面は概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り方面には、緩やかな凹凸がみられ全体的にほぼ均一に掘り込まれている。 **柱穴** 4本の主柱穴（P1・P2・P3・P4）を確認した。いずれも柱痕は確認されなかった。第12・13層は裏込め土である。P1 は径 38 × 34 × 深さ 57.7 cm、P2 は径 32 × 28 × 深さ 49.6 cm、P3 は径 30 × 26 × 深さ 56.7 cm、P4 は径 26 × 22 × 深さ 56.0 cm。柱間寸法は柱痕間隔で P1-P2 間が 2.64 m、P2-P3 間が 2.94 m、P3-P4 間が 2.72 m、P1-P4 間が 2.74 m を測る。4本の柱穴は南側が広がる台形に配されている。 **貯蔵穴** 貯蔵穴とした P5 は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸 50 cm × 短軸 34 cm の隅丸長方形で、床面から底面まで 25.9 cm と掘り込まれている。その底面は平坦である。 **覆土** は第6層～第8層であり自然堆積をしている。 **入口関連施設** 南壁際中央部に位置する P6 としてのピットは、長軸 24 cm、短軸 22、深さが 17.4 cm の不整形な楕円形をし、覆土は第6層の自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。 **壁周溝** D1～D3は壁周溝であり、北壁～東壁際に配されてるものを D1、南西隅の壁際に巡っているものを D2、北東隅壁際～南壁に巡っているものを D3 とした。規模は D1 短軸 12 × 22 × 深さ 5.5 ～ 8.3 cm、D2 短軸 18 × 深さ 6.7 cm、D3 短軸 10 × 22 × 深さ 1.9 ～ 3.4 cm である。 **カマド** カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは 32 cm と浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は 1.07 m × 東西 1.02 m である。カマドの構造は住居貼床である第15層の敷設後、カマド掘り方形成し、第12層で火床面を形成している。煙道部は鋭角に直線的に外傾して立ち上がる。第9層は第10層が被熱を受け赤色化した範囲である。カマドの第7層内から支脚（Na7）が出土している。支脚は横位で火床面からやや浮いている状況で出土した。第7層は煙道部流入土でその下層には火床面がある。火床面に支脚が立っていた痕跡は認められなかったが、上位から中位にかけて煤が付着しており、下半は全体的に鉄分が付着していることから埋設されていたと推察できることから、本カマドに伴う支脚と考えている。 **出土遺物** 出土遺物は7点出土



第14図 砂田姥沼遺跡1区 全体図 (S=1/800)

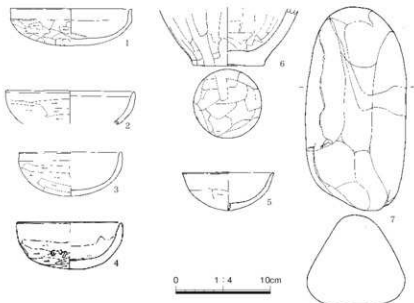
第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査



第15図 砂田姥沼遺跡1区 S1-1実測図

している。No.1・2・4は床面直上からの出土である。No.6は入口関連施設からの出土である。

北壁際の床面直上から出土した模倣環の蓋模倣形（No.1）は、体部の扁平化で口径はやや大きく、内面調整はナデのみである。口縁部内面にのみ漆仕上げが施されている。7世紀前葉の環か。丸底の模倣環（No.2・3・4）は丸味のある体部から内彎して口縁部に至る。口縁部が内屈しない内彎、もしくは直立気味にやや外反する形状。口縁部と体部の境に外稜を持たない形状である。7世紀中葉から出現する器形である。これらの環から本住居は7世紀前葉～中葉の竪穴建物であろう。



第16図 砂田姥沼遺跡1区 S1-1出土遺物

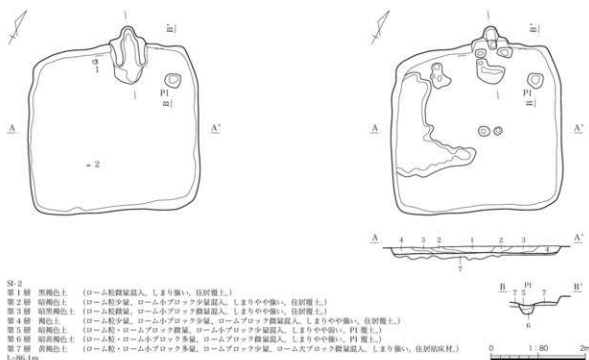
第4表 砂田姥沼遺跡1区 S1-1出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 土師器 環	口 [13.0] 高 [3.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ。底部外面一定方向のヘラケズリ。体部～底部内面ナデ。口縁部内面漆仕上げ	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部 1/3 残存 No.1
2 土師器 環	口 [13.8] 高 [3.5]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ	(外) にぶい褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒微量、赤色粒少量 焼成：良好	床面 口縁部～体部 1/4 残存 No.4・覆土
3 土師器 環 (陶)	口 11.1 高 4.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ	褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部 1/4 残存 No.3・覆土
4 土師器 環	口 11.4 高 5.0	口縁部内外面ヨコナデ (内面は磨風が著しい)、体部～底部外面横方向のヘラケズリ。体部内面ヘラケナデ。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ	褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部の一部欠損 No.2
5 土師器 環	口 [9.8] 高 [4.0]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ。内面ナデ。体部内外面赤彩。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ。体部内外面直状割創	(外) にぶい小褐色 (内) 黒褐色 小砂粒微量 焼成：良好	一括 口縁部～体部 1/4 残存
6 土師器 甕	底 7.3 高 [6.3] 最大径 (15.0)	胴部下平外面縦方向→縦方向→縦方向のヘラケズリ。下端にはナデ。胴部内面縦方向のヘラケナデから横方向のヘラケナデ、底部外面は不定方向のヘラケズリ	(外) 明褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・小礫多量、雲母片・赤色粒少量 焼成：良好	床面 胴部下平 1/2 残存、底部完存 No.5
7 石 尖脚	最大長 21.6 最大幅 11.6 cm 最大厚 9.6 cm 重量：3119.58 g	中位～上位にかけて稜が付着。下下には数分付着している。	明赤褐色	大床面 完存 No.7・カマド一括

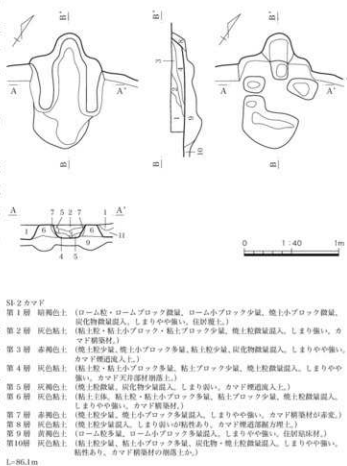
S1-2 (第17～19図、第5表、図版二・六一)

概要 本住居は1区の北部、S1-1の南部で確認された隅丸方形の竪穴建物跡である。遺物の出土量は少ない。また壁周溝や柱などの付属施設がなく、北東隅の貯蔵穴としたP1のみである。位置 103～38グリッドに位置する。確認面標高は 86.046 m～85.865 mである。平面形・規模 南北 3.47 m×東西 3.55 mの



第17図 砂田姥沼遺跡1区 SI-2実測図(1)

の隅丸方形の堅穴住居である。南壁に直交する軸線はN-31°-Wである。覆土 堆積状況は東西方向のセクションのAラインで確認でき、本住居の覆土は第1～第4層でレンズ状の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は13～27cmで床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 第7層はSI-2の住居貼床を形成しており、床面は概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り方底面は多少の凹凸はあるが第7層をほぼ均一に充填しているのがわかる。柱穴・入口関連施設 本住居では柱穴・入口関連施設を確認することができなかった。貯蔵穴 貯蔵穴としたP1は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸34cm×短軸28cmの不整な隅丸長方形で、床面から底面まで23cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。覆土は第5層・第6層であり自然堆積をしている。カマド カマドは北壁の中央やや東寄りに位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは36cmとやや浅く穿っている。本カマドの遺



第18図 砂田姥沼遺跡1区 SI-2実測図(2)

存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.50 m×東西0.77 mである。

カマドの構造は住居貼床である第9層の敷



第19図 砂田姥沼遺跡1区 S1-2出土遺物

設後、カマド基部を形成し、第9層そのものを火床面としている。煙道部は第8層で裏込めし、火床面から鋭角に直線的に外傾して立ち上がる。第7層は第6層が被熱赤化した範囲である。天井部材などは第2・4層でカマド内に崩落部材が確認されている。出土遺物 出土遺物は一括遺物を含めても17点出土している。そのうち、図示し得たものは2点のみである。坏(№1)は住居北壁際、手捏土器(№2)は住居中央やや南寄りからの出土で、共に床面直上からの出土である。北壁際の床面直上から出土した模倣杯の蓋模倣形(№1)の口径は10 cm前後と小型化している。口縁部の厚さは薄く、端部は摘み上げの形状に近い。内面はナデのみで調整は施されていない。口縁部の外面には外縁を簡素化した沈線が巡らされている。底部外面に一定方向のヘラケズリを施してから周囲を手持ちのヘラナデをしている。屈曲部から口縁部までは横ナデがなされている。また、内面及び口縁部外面には漆仕上げがなされているのが僅かに観察できる。№2は手捏土器の破片である。坏形であろうか。成形は厚身で、体部も口縁部も同じ厚みである。体部外面はナデから斜方向のヘラナデ。内面は斜方向のヘラナデが施されているのが観察されるが、磨滅のため調整の痕跡は僅かである。本住居の相伴遺物は少ない。一括遺物として、甕の口縁部編3点、胴部片8点、坏の口縁部の破片が出土している。坏の破片は明瞭な屈曲をもつ模倣杯でない後出する段階のものである。これからの形状、特徴や一括遺物の傾向から、本住居は7世紀中葉以降の竪穴建物であろう。

第5表 砂田姥沼遺跡1区 S1-2出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

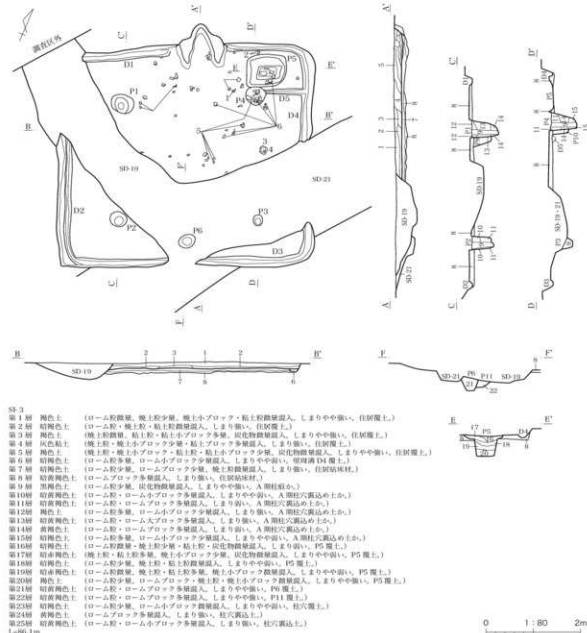
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口10.0 高3.5	口縁部外面ヘラナデ後ナデ。口縁部・体部内面ナデ。底部外面ヘラケズリ後ヘラナデ。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ	(外) に近い黄褐色 (内) 明黄褐色 小砂粒、赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～底部の1/3 残存 №1
2 手捏土器 杯	口(6.4) 高11.1	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向のヘラケ 口縁部～体部外面ナデ後、斜方向のヘラナデ。内面は斜方向のヘラナデ	にに近い黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部の1/4 残存 №2

S1-3A (第20～22図、第6表、図版二・三・六一)

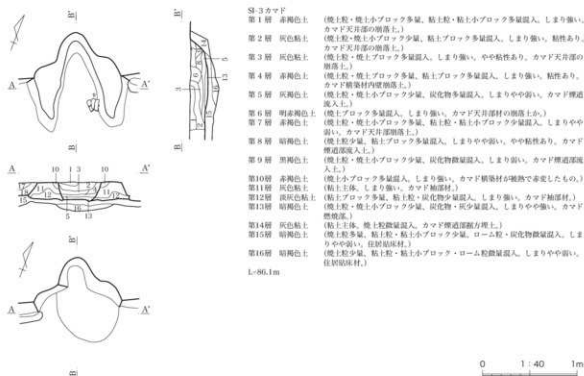
概要 本住居跡は拡張住居であり、2時期の変遷が認められる。時期ごとに各遺構をA・Bとした。本期は最も新しい段階のA期となり、平面形がやや東西に長い隅丸長方形の竪穴建物である。竪穴建物の南東隅から南壁にかけては南東方向に延びるSD-21、南東隅から北西隅にかけては北西方向に延びるSD-19に重複され、床面～掘方まで大きく削平されている。位置 103・104-37グリッドに位置する。確認面標高は86.005 m～85.887 mである。平面形・規模 南北5.04 m×東西5.48 mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-22°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションではレンズ状の堆積をしており、第1～第5層までの自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は19.2 cm～35 cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方土は第7・8層となり第7層の上面が床面である。断面観察から掘り方は多少の凹凸がみられるが、全体的にほぼ均一に掘り込まれている。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した平面形は概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。すべての柱穴で第9層とした柱痕が確認されている。第10～第15層は柱の裏込め土である。P1は径48×40×深さ58.9 cm、P2は径36×34×深さ50.6 cm、P3は径24×18×深さ[22.2] cm、P4は

径42×28×深さ37.9cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.64m、P2-P3間が2.94m、P3-P4間が2.78m、P1-P4間が2.88mを測る。4本の柱穴はほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸84cm×短軸74cmの隅丸長方形で、床面から底面まで52.5cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。覆土は第16層～第20層であり自然堆積をしている。

入口関連施設 南壁際中央部に位置するP6としたピットは、長軸38×短軸30×深さ[27.5]cmの楕円形で、覆土は第21層のみの自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 SD-19・21によって



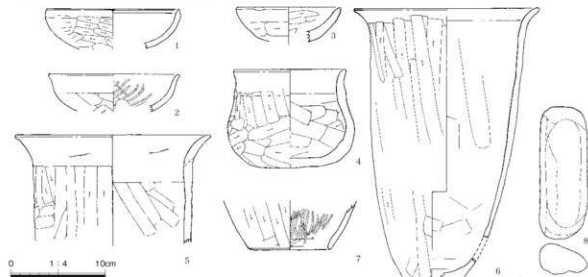
第20図 砂田姥沼遺跡1区 SI-3A実測図(1)



第21図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A実測図(2)

削平されているためD1～D4と区別したが、同一の壁周溝であろう。北壁際に配されているものをD1、西壁際～南壁際に巡っているものをD2、南東隅の壁際に巡っているものをD3、東壁～北壁際に巡るものをD4とした。規模はD1短軸18×深さ7.5cm、D2短軸14×16×深さ7.3cm、D3短軸18×深さ6.9cm、D4短軸14×深さ3.5cmである。覆土が確認できるのはBラインのみで第6層が相当する。間仕切溝・主柱穴(P4)に対して壁周溝から東西方向に連結するD5が確認された。規模は長軸78cm×短軸12×深さ5.1cmである。

カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは46cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.04m×東西1.09mである。カマドの構造は住居貼床である第15・16層の敷設後、カマドの基部を形成しそのまま火床面としている。煙道部は第14層で



第22図 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A出土遺物

裏込めしてあり、火床面から鋭角に直線的に外傾して立ち上がる。第10層は第11層が被熱を受け赤色化した範囲である。カマドからは一括遺物として、甕の強く外反する口縁部片や胴部片、模倣杯の破片が少量出土している。この他に第5層とした煙道流入土には図示し得なかったが甕の胴部破片が4点出土しているのみである。これらの遺物は流入したものであろう。出土遺物 本住居の遺物の出土状況は取り上げ遺物としては61点あるが、この他、覆土中も模倣杯や甕の破片など多数出土している。甕の胴部片にはヘラケズリ調整のものもみられる。遺物の出土状況はカマドの前面～貯蔵穴(P5)周辺に集中している。模倣杯(№1)は口径は14cmであるが器高が低い。内面にはミガキ調整が認められない。模倣杯(№2)は口縁が外反する模倣杯である。口径は14cmで内面には斜方向のミガキ調整が若干残る。鉢(№4)で底部形状平底化を意識してヘラケズリ調整をしている。6世紀中葉以降であろうか。長胴甕(№5・6)は胴部最大径が口縁部に移行しており7世紀代とみられる。甕(№7)の破片は内面にミガキが確認される。6世紀代か。この遺物は破片のみで住居に流入したものと考えられる。この堅穴建物の出土遺物は、模倣杯の形状から7世紀前葉に位置付けられる。

第6表 砂田姥沼遺跡1区 S1-3A 出土遺物

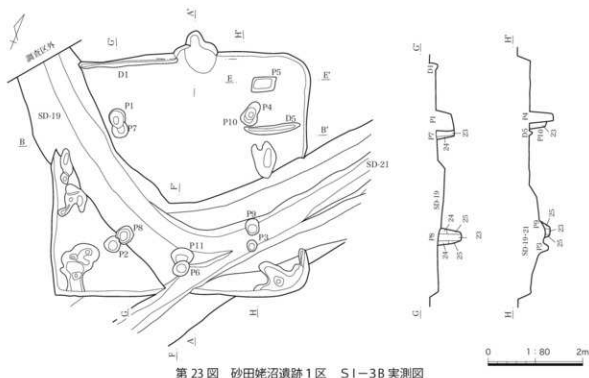
() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯(碗)	口径4.0 高[4.2]	口縁部～体部内面ナデ、口縁部外面ナデ、体部外面は底部から口縁部に順に横方向のヘラケズリ、口縁部から体部内外面直上げ	にぶい黄褐色 小砂粒・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 №30
2 土師器 杯	口径4.0 高[3.9]	口縁部内外面ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ、体部内面に付着物、直上げナデ	にぶい黄褐色 小砂粒・小礫・石英微量、白色粒少量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部の1/4残存 №36
3 土師器 碗(杯)	口径1.0 高[3.6]	口縁部外面ナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラケズリ	にぶい褐色 小砂粒多量、赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部の1/4残存 №49
4 土師器 鉢	口径1.8 高10.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面は頸部から胴部上半まで縦方向のヘラケズリ、胴部中部～底部まで斜方向のヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ、底部外面は不定方向のヘラケズリ。頸部外面に接合痕を1段残す	灰黄褐色 上平まで縦方向のヘラケズリ、胴部中部～底部まで斜方向のヘラケズリ、胴部内面ヘラケズリ、底部外面は不定方向のヘラケズリ。頸部外面に接合痕を1段残す 小砂粒多量、赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～胴部1/2残存、底部完存 №49
5 土師器 甕	口径20.9 高[11.5]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ	にぶい黄褐色 小砂粒・小礫・石英少量、黒雲母片・白色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～胴部1/4残存 №17・21・22・26・43・44
6 土師器 甕	口径19.6 高29.0 底径6.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ、底部外面不定方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、口縁部のヨコナデ後には胴部外面のヘラケズリ	褐色 小砂粒多量、石英少量、黒雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～胴部上半完存、胴部下半・底部とも一部のみの残存 №14・23・27・28・38・40・42・45～48
7 土師器 甕	高[5.1] 底径8.2	胴部外面縦方向のヘラケズリ、内面縦方向のヘラミガキ、底部内外面は横方向のヘラケズリ、内面は斜方向のヘラミガキ。無底式	にぶい黄褐色 小砂粒・小礫微量 焼成：良好	覆土 胴部下半～底部一部残存 №37
8 石製品 磨物石	最大径13.9 最大幅5.0 最大厚3.15 重量：309.78	1面が磨滅しており、広範囲に擦痕が認められる。磨物石からの転用か	灰色	床面 完存 №48

S1-3B (第23図)

概要 本遺構は拡張住居のB(旧)期のものである。A期の掘り方で4本の主柱穴と入口ピットのみ確認できた。壁などが確認できなかった。付属施設はP7からP11までが本期に伴うものである。また、主柱穴の位置が若干内側に触れていることから、A期よりも一回り小規模な形状が考えられる。なお、図示し得た遺物は皆無であった。位置 103・104-37グリッドに位置する。確認目標高はA期と同じ86.005m～85.887mである。覆土 B期の堆積状況はA期が本期の拡張になるため住居覆土はない。柱穴 4本の主柱穴(P

7・P8・P9・P10)を確認した。掘り方は大きく掘り方から深い。すべての柱穴で第23層とした柱痕は確認されている。第24・25層は柱の裏込め土である。P7は径33×[32]×深さ[36.3]cm、P8は径40×34×深さ[46.0]cm、P9は径[34]×[26]×深さ[12.0]cm、P10は径38×[24]×深さ[37.4]cm。柱間寸法は柱痕間隔でP7-P8間が2.20m、P8-P9間が2.72m、P9-P10間が2.30m、P10-P7間が2.70mを測る。4本の柱穴はほぼ方形に配されている。入口関連施設 南壁際中央部に位置するP11としたピットは、長軸48×短軸[32]×深さ[20.0]cmの楕円形で、覆土は第22層のみの自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。出土遺物 本期に伴う遺物はA期の掘り方により皆無に近い。A期の掘り方一括として、喪胴部破片が6点出土しているが、B期を特定する遺物は見られないため時期は不明であるが、拡張していることからA期よりも古い段階の7世紀初頭が想定される。



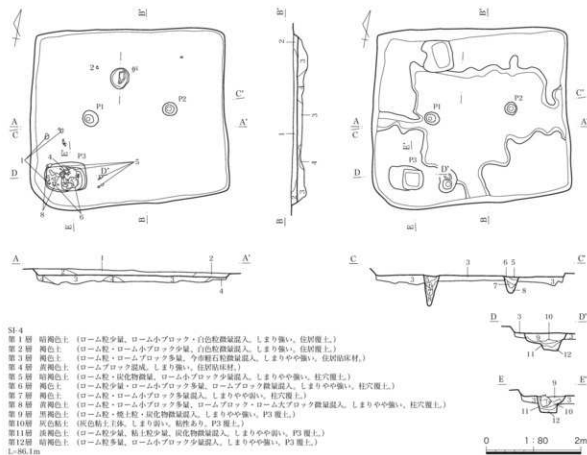
第23図 砂田苑沼遺跡1区 S1-3B実測図

S1-4 (第24・25図、第7表、図版三・四・六一)

概要 本住居は1区の北部で確認された竪穴建物跡で、S1-3の南東に位置しており、確認面からの掘り込みは浅い。位置 103-37グリッドに位置する。確認面標高は85.871～86.008mである。平面形・規模 南北3.69m×東西4.14mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-13°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションでレンズ状の堆積をしており、第1・2層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は5.5～19.2cmと浅く、床面より直線的に外傾して立ち上がる。床 住居の掘り方は多少の凹凸が見られ、壁際よりも中央部が一段窪む掘り方である。掘り方は第4層を埋め戻した後に、第3層を埋め戻している。この第3・4層の上面がほぼ平坦となる床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。柱穴 2本の主柱穴(P1・P2)を確認した。いずれも柱痕は確認されなかった。P1は径34×30×深さ57.56cm、P2は径30×28×深さ31.8cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が1.72mを測る。2本の柱穴は建物の中央寄りに配されている。貯蔵穴 P3は住居南西隅に設けられており、平

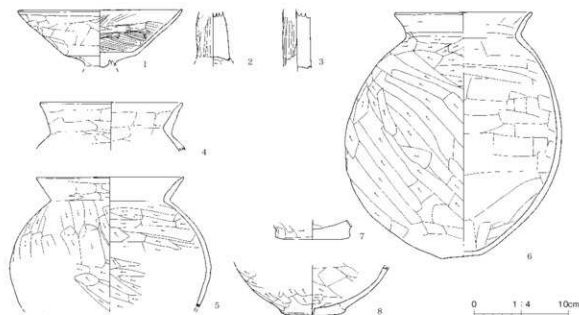
面形は長軸 88 cm×短軸 60 cmの隅丸長方形で、床面から底面まで 38.4 cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。覆土は第9層～第12層であり自然堆積をしている。東側には床面から 22 cmほど掘り込まれた一段平坦なテラス状の掘り込みがある。炉 炉跡は中央やや北寄りに位置しており、主柱穴の主軸よりも北側にあり火床面も確認できる。長軸 0.94 m、短軸 0.82 m、深さ 2.8 cmになる。火床面はよく焼けしまる。炉跡からの出土遺物はない。出土遺物 本住居の覆土中の遺物は約 90 点に及ぶ。その大半が甕の胴部破片であり、次いで環が混入してくる。出土遺物は住居の南西隅、貯蔵穴 (P3) 内及び周辺に集中している。

西壁際の覆土から出土した高環の環部 (No. 1) は脚部は欠損。環部下端に稜をもつ形状である。環部は「ハ」字状に直線的に開く。環部の内面は浅いハケメで調整が施されている。口縁部内外面には黒褐色の付着物が認められる。漆かは不明。高環棒状脚部 (No. 2) は竪穴建築物の北寄りの床面直上で、高環棒状脚部 (No. 3) は覆土から出土している。この高環環部 (No. 1) と高環棒状脚部 (No. 2・3) は同一個体ではないが、遺物の時期は古墳時代中期前半に位置付けられる。また貯蔵穴 (P3) から出土した平底の単口縁甕 (No. 6) は、胴部は球胴径系のやや面長タイプである。器面調整は全面に斜方向のヘラケズリが施されている。出土状況は貯蔵



第24図 砂田姥沼遺跡1区 S1-4実測図

穴で廃棄時に流入したものである。遺物の時期は高坏 (No 1～3) とほぼ同じである。これらの出土遺物は古墳時代中期前半期の5世紀初頭に位置付けられる。



第25図 砂田姥沼遺跡1区 SI-4出土遺物

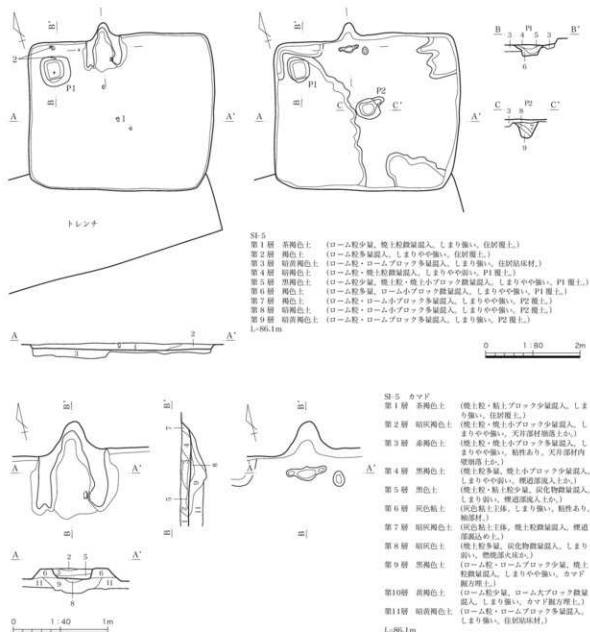
第7表 砂田姥沼遺跡1区 SI-4出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	口 [17.2] 高 [6.0]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面～体底部光沢のあるヘラナデ、体部～体底部内面ナデ後浅い刷毛目調整、不定方向の細かいミガキ。口縁部外面に黒褐色の付着物あり。体底部にホゾ	にぶい黄褐色 小砂粒多量、石英・金雲母片 ・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 坏部 1/4 残存、体底部完存 No 3・5・23・一括
2 土師器 高坏胴部	高 [5.4] 最大幅 3.6	棒状胴部外面縦方向のヘラミガキ後につよいヘラナデか。胴部内面ヘラケズリ	黒褐色 小砂粒多量、赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 棒状胴部胴部欠損 No 2
3 土師器 高坏胴部	高 [6.8] 最大幅 3.4	棒状胴部外面縦方向のヘラミガキ、胴部表面磨滅のため不明	淡黄色 小砂粒多量、小礫・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 棒状胴部胴部欠損 貯蔵穴一括
4 土師器 甕	口 [15.0] 高 [15.0]	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外面縦方向のヘラナデ、胴部外面斜方向のヘラケズリ後胴部に横方向のヘラケズリ。胴部外面に覆付着	にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英・雲母片微量 焼成：良好	貯蔵穴 口縁部と胴部の 1/4 残存 No 15
5 土師器 甕	口 [15.8] 高 [14.2]	口縁部外面縦方向ヘラナデ後ヨコナデ、胴部外面横～縦方向のヘラケズリ、胴部外面斜方向のヘラケズリ。口縁部内面ヨコナデ、胴部内面縦方向のヘラケズリ。口縁部～胴部にかけて一部に胴部着。胴部外面に黒褐色あり	(外) 褐色 (内) 灰褐色 小砂粒多量、赤色粒少量、小礫微量 焼成：良好	貯蔵穴 口縁部から胴部部の 1/2 残存 No 5・7・8・10・12・13・17・18・26・27・一括
6 土師器 甕	口 [14.6] 高 25.8 最大径 21.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部～胴部外面横～斜方向のヘラケズリ、胴部～胴部下面斜方向ヘラケズリ、口辺部内面縦方向のヘラナデ、胴部上平内面縦方向のヘラナデ、胴部下平内面斜方向のヘラナデ。胴部下平～底部外面磨滅。口縁部の一部と胴部部～中位にかけて覆付着	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒多量、小礫・赤色粒少量、雲母片微量 焼成：良好	貯蔵穴 口縁部～胴部 1/3 を欠損する以外 は完存 No 23・24・27・一括
7 土師器 甕	高 [2.1] 底 [8.0]	胴部上端外面横方向のヘラケズリ後一部縦方向のヘラケズリ。底部外面不定方向のケズリ、内面ケズリ	にぶい黄褐色 小砂粒多量、小礫・石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	貯蔵穴 口縁部 1/4 残存 一括
8 土師器 甕	高 [5.4] 底 6.6 最大径 [16.2]	胴部下平外面斜方向のヘラケズリ、胴部下平内面縦方向のヘラケズリ後斜方向のヘラケズリ、底部外面一定方向のヘラケズリ	(外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・小礫多量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	床面 胴部下平 1/2 欠損、底部 1/3 欠損 No 7・16・24・貯蔵穴・一括

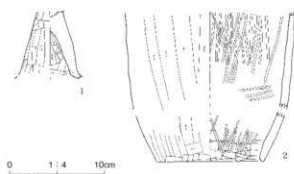
S1-5 (第26・27図、第8表、図版四)

概要 本遺構は1区の北部で確認された竪穴建物跡で、S1-4の東に位置しており、確認面からの掘り込みは浅い。主柱穴・入口ピット・壁周溝は確認されていない。**位置** 103-38グリッドに位置する。確認面標高は85.908～86.030 mである。**平面形・規模** 南北3.30 m×東西3.88 mの東西方向に若干長い隅丸長方形の竪穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-18°-Eである。**覆土** 堆積状況は東西方向のセクションでは第1・2層の自然堆積をしており、第2層から埋没している。**壁** 床面からの残存壁高は4.1～9.1 cmと浅く、床面より直線的に外傾して立ち上がる。**床** 建物跡の掘り方には多少の凹凸が見られ、西壁際～中央部が大きく一段窪む掘り方である。掘り方は第3層を埋め戻している。この第3層の上面がほぼ平坦となる床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。**貯蔵穴** P1は建物の北西隅に設けられており、平面形は長軸64 cm×短軸62 cmの隅丸方形で、床面から底面まで22.9 cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。



第26図 砂田姥沼遺跡1区 S1-5実測図

覆土は第4層～第6層で自然堆積である。貯蔵穴からは甕の胴部片3点が出土している。カマドカマドは北壁の中央やや西寄りに位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは35cmとやや浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は0.94m×東西1.04mである。カマドの構造は住居貼床である第11層の敷設後、カマド掘方を形成し、第8・9層を充填してその上面を火床面としている。煙道部は第7



第27図 砂田姥沼遺跡1区 S1-5出土遺物

層で裏込めし、火床面から鋭角に直線的に外傾して立ち上がる。天井部材などは第2・3層が相当カマド内に崩落している。カマド一括として甕の口縁部片と甕の胴部片が出土している。出土遺物 竪穴建物の覆土の遺物は13点にのみである。いずれも小片ばかりで、大半が甕の胴部破片である。取り上げ遺物は8点で、そのうち図示得たものは2点のみである。

建物の中央部で出土した高環脚部(Na1)は環部と裾部が欠損しているが、棒状脚の形状から5世紀中葉に位置付けられるか。貯蔵穴(P1)の覆土中と北側の接合遺物である甕(Na2)の破片は無底式である。覆土中にも破片がみられず流入したと想定される。出土遺物が少ないが本建物跡はカマドを伴うものであること、高環脚部の形状や甕片があることから、大形甕が出現する前後の5世紀中葉に位置付けられる。

第8表 砂田姥沼遺跡1区 S1-5出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

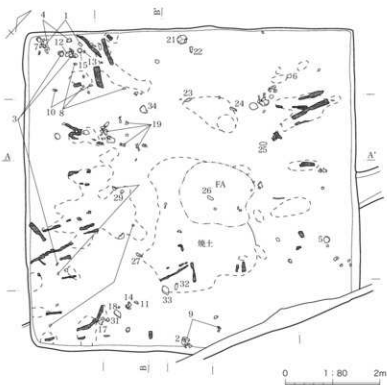
番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 高環	高17[8] 最大径7.4	脚部外面縦方向のヘラケズリ後一部縦方向のヘラケズリ、脚部内面縦方向のヘラケズリ、脚部内面縦方向のヘラケズリ、脚部内面縦方向のヘラケズリ、脚部内面縦方向のヘラケズリ	(外) にぶい・褐色 (内) にぶい・黄褐色 小砂粒少量、小礫・赤色粒微量 焼成：良好	床面 脚部のみ、環部・裾部は欠損 No.6
2 土師器 甕	高116[5] 底112.0 最大径18.2	胴部外面縦方向のヘラケズリ、胴部内面縦方向のヘラミガキ、胴部下端内面縦方向の下手ケズリ後縦方向のミガキ、無底式	(外) にぶい・黄褐色 (内) 褐色 小砂粒少量、赤色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部下下の1/4と胴部下端1/4残存 No.8

S1-6 (第28～32図、第9表、図版五・六一)

概要 本遺構は1区の北部で確認された隅丸方形の竪穴建物跡である。南東隅が調査区外となるが1区で最も規模の大きい建物跡になる。確認面からの掘り込みは22cm～52.2cmとやや深い。本建物跡は焼失家屋で焼上及び炭化材が床面に直上の第3層中に含まれていることから、廃棄後そんなに時間が経過しない段階で焼失したものである。なお、焼土範囲の一部に榛名山二ツ岳火山灰(Hr-FA)層が視認されている。位置

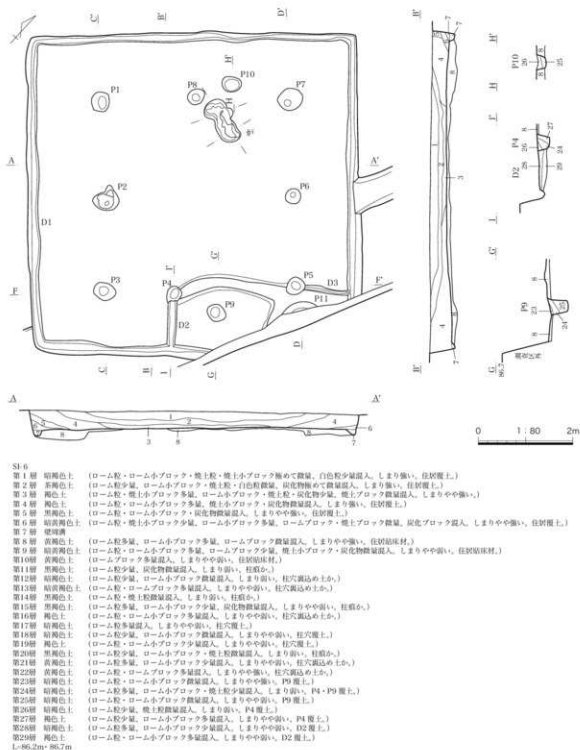
102・103-38グリッドに位置する。確認面標高は86.072m～85.910mである。平面形・規模 南北6.82m×東西7.04mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-44°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第6層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は22cm～52.2cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第8層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は中央部が浅く、四方の壁際が大きく掘り込まれている。およそ、主柱穴8本に囲まれた範囲は浅く掘り込まれており、主柱穴の外側では一段深く掘り込まれている。柱穴 8本の主柱穴(P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8)を確認した。平面形は不整形なP2を除けば、概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。すべ

ての柱穴で第11・14・15・20層とした柱痕が確認されている。第12・13・16・21・22層は柱の裏込め土である。P1は径40×36×深さ61.6cm、P2は径56×54×深さ50.4cm、P3は径44×37×深さ55.6cm、P4は径38×30×深さ27.0cm、P5は径40×32×深さ69.7cm、P6は径34×30×深さ61.6cm、P7は径52×44×深さ67.2cm、P8は径40×30×深さ33.8cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.18m、P2-P3間が1.96m、P3-P4間が1.50m、P4-P5間が2.54m、P5-P6間が1.96m、P6-P7間が1.98m、P7-P8間が1.94m、P8-P



第28図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6実測図(1)

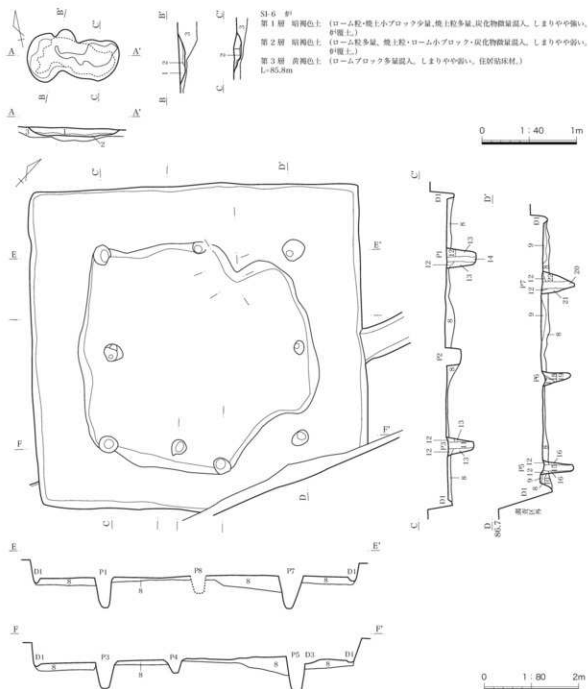
P1間が2.04mを測る。8本の主柱穴はP1-P3間が4.14m、P3-P5間が4.04m、P5-P7間が3.94m、P7-P1間が3.98mのほぼ方形に配されている。盛土遺構 南東隅で確認された不整形な長方形の範囲をしている。盛土部は床面成形時に、第8層を周囲の床面から8cm厚に硬く締めて構築されている。上面は平坦であり盛土遺構内には貯蔵穴が伴う。盛土範囲のP5周辺の北東隅部分が、幅26cmの盛土が弧状に延びておりP4と連結している。貯蔵穴 貯蔵穴としたP11は、住居南東隅に位置しているがその大半は調査区外になる。平面形は長軸[74]cm×短軸[18]cmの隅丸長方形で、床面から底面まで24.7cmと掘り込まれている。僅かに確認できたその底面は平坦である。入口関連施設 南壁際中央部にあるP9としたピットは、盛土遺構の間仕切り溝(D2)によって仕切られた南北1.28×東西1.88mの区画のほぼ中央部に位置している。長軸40×短軸38×深さ42.8cmの楕円形で、覆土は第23～25層の自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。ピット P10は建物に伴うものか、覆土中の掘り込みが判断できないピットである。P10は建物の北壁寄りの中央に位置しているピットで長軸40×短軸32cmの楕円形をしている。床面からの掘り込みは20.1cmと主柱穴と比べると浅い。入口ピットとしたP11に対応する逆位置にあることになり、支柱穴などの可能性も考えられる。壁周溝 D1とした壁周溝の幅は20～28cm、深さ17.4cmで南東隅が調査区外になるが全周するものとする。壁周溝の覆土はA・Bラインの第7層が相当する。間仕切り溝 間仕切り溝はD2・D3の2条が確認されている。D2は主柱穴(P4)に対して壁周溝から北方向に連結している。規模は長軸100cm×短軸18×深さ16.5cmである。入口関連施設を仕切るものか。D3は壁周溝からP5に対して西方向に連結する。規模は長軸96cm×短軸8～12×深さ18.5cmである。盛土遺構の北辺部を画するための仕切り溝か。炉 炉跡は中央北寄りのP8際に位置しており、主柱穴の主軸よりも南側にある。長軸0.97×短軸0.50m、深さ7.1cmになる。火床面についての観察がみられないため、焼しまりの状況については不明である。炉跡からの出土遺物はない。出土遺物 本建物の遺物出土量は多い。取り上げ遺物としては87点ある。この



第29図 砂田姥沼遺跡1区 SI-6実測図(2)

他に覆土から約370点と多数出土し、裏の胴部破片が176点と最も多量に、次いで環の体部片が105点と出土している。僅かではあるが埴の口縁部や胴部片も混入している状況である。

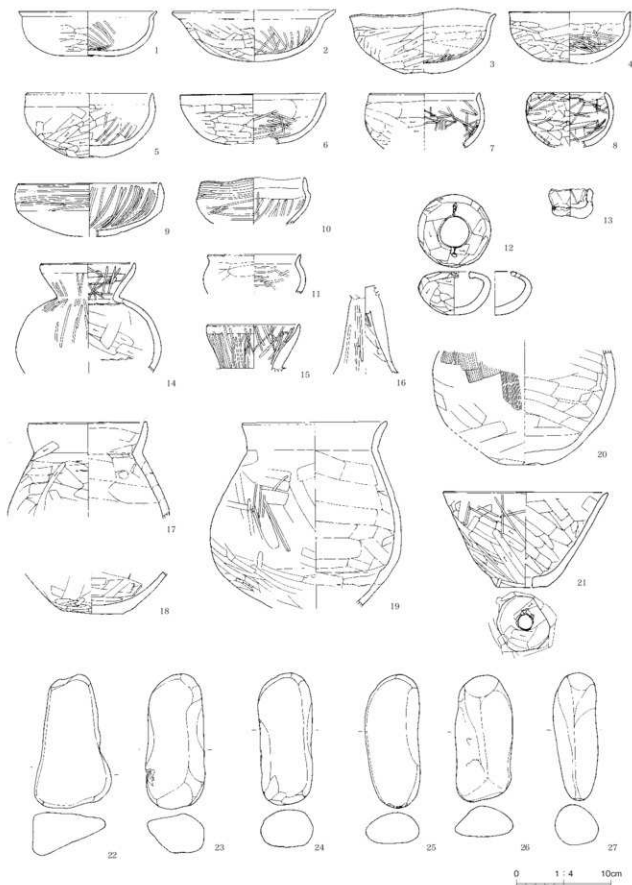
出土状況は建物跡の床全面で遺物は確認されているが、焼土の下位で観察すると、建物の中央部よりも北西隅と南西隅に集中箇所が片寄る傾向が見られる。これらの遺物のうち、床面直上若しくは床面から出土



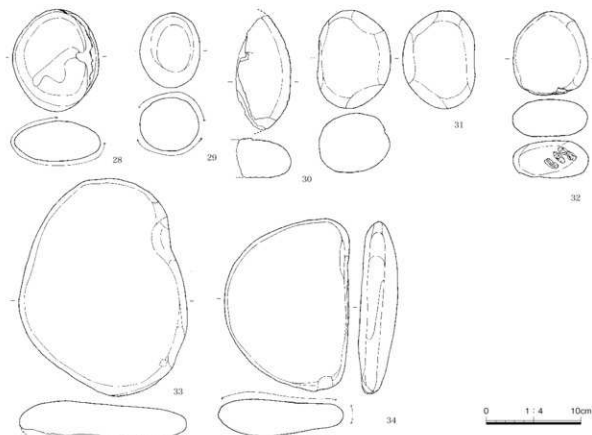
第30図 砂田姥沼遺跡1区 SI-6実測図(3)

したものは、埴形環 (No.1・3・4・7・8)、小形壺 (No.12)、手捏土器 (No.13)、埴 (No.15・20)、甗 (No.21)、編物石 (No.22)、磨石 (No.28・29)、台石 (No.34) の15点である。模倣埴 (No.9・10)、編物石の大半などは覆土からの出土である。遺物の遺存状態は悪く、完形品の場合は埴形環 (No.2) だけでなく他は欠損品になる。

埴形環 (No.1～8) はほとんどが内斜口縁であり、(No.8)のみ半球形である。(No.3)に限っては破片が広範囲に散っており、建物廃絶後に遺棄されたものと考えられる。模倣埴は蓋模倣形 (No.9)、身模倣形 (No.10) が覆土から出土しており、それぞれ内面に放射状のミガキ調整が施されている。器高も深く古相を示す。



第31図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6出土遺物(1)



第32図 砂田姥沼遺跡1区 S1-6出土遺物(2)

小壺(№12)には屈曲して立ち上がる頸部がない形状をしている。外面はヘラケズリで成形されており、上部は平坦に仕上げられている。口縁部には捺痕は認められないが、口縁部には外面から穿孔しており直径2mmの孔が2箇所確認できる。この2孔は口縁部に向かって筋状の痕跡が内面まで続いている。また実測図の手前の孔から続く筋には剝離した箇所も認められる。剝離箇所の観察では、筋状の痕跡が深く遺されているのが断面観察できることから、焼成前に糸若しくはヘラ状工具で筋が付けられたものと判断する。

この2孔は、固い材質の蓋を糸などで固定するか、若しくは軟らかい素材のもので口縁を覆い、孔に細い棒状のものを挿して固定するという2つが想定できる。口縁部にあたる部分には捺痕は観察されなかったことから後者の可能性が指摘できようか。内容物については視認のみであるが、黒色の付着物が内面全体に付着しており、漆などを入れた可能性も指摘しておきたい。高坏脚部(№16)は流入であるが、外反する裾部をもつ外反脚である。甕(№18・20)の底部が平底であり、20は球胴形の胴部である。甕(№21)は単孔式で、ケズリ調整が施されている坏坑(№7)の破片は内面にミガキが確認される。出土遺物の形状や、覆土の遺物の状況などから、本壱穴建物跡の時期は、古墳時代の中期(5世紀後葉)の碗形坏と模倣坏が共存してくる段階に位置付けられる。

第9表 砂田姥沼遺跡1区 S1-6出土遺物

(): 推定値 []: 残存値

番号 種類 距離	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 JF(堀)	口(14.7) 高4.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部～底部外面ヘラケズリ、体部内面ミガキ。碗形坏内側口縁	明赤褐色 小砂粒・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～底部1/4残存 №1・7

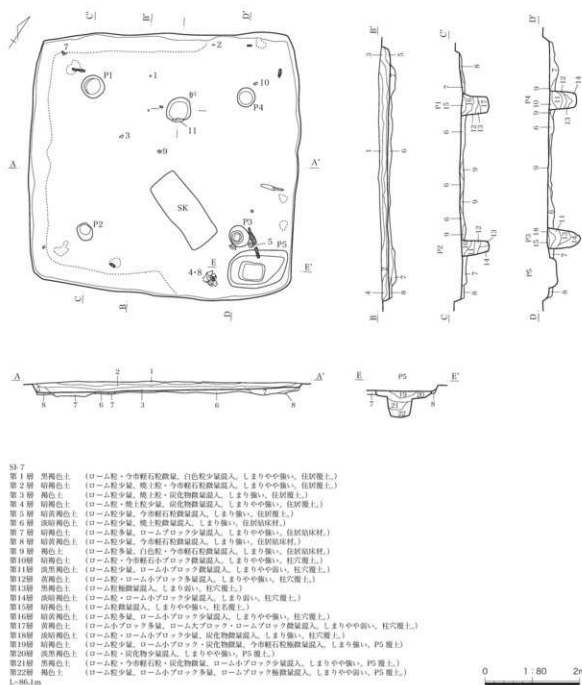
2 土師器 片(陶)	口17.4 高5.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部～底部外面ヘラケズリ、内面ミガキ 備考:口縁部外面に輪轡みぞ1段、埴形内斜口縁	明赤褐色 小砂粒・小礫・白色粒・赤色粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部と体部の一部欠損するがほぼ完存 No.72
3 土師器 片(陶)	口15.5 高6.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、体部内面ナデ後ミガキ、体部外面に縦位のヒビ割れ、底部付近に黒斑、埴形内斜口縁	明赤褐色 小砂粒少量 焼成:良好	床面 口縁部～体部の1/3残存 No.3・4・59・一括
4 土師器 片(陶)	口12.8 高5.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面横方向のヘラケズリ後に縦方向から横方向へのミガキ、底部外面一定方向のヘラケズリ後に外周部をヘラケズリ、埴形内斜口縁、口縁部～体部外面と口縁部内面に黒斑あり	褐色 小砂粒少量、雲母片・白色粒微量 焼成:良好	床面 口縁部の1/4、体部の1/2残存 No.1・6
5 土師器 片(陶)	口(13.4) 高6.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、体部内面斜方向のヘラケズリ後縦方向のヘラミガキ、底部外面一定方向のヘラケズリ、埴形内斜口縁、底部は平直、体部外面に黒斑あり	褐色 小砂粒・小礫・赤色粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部1/4残存、体部下端～底部完存 No.91
6 土師器 片(陶)	口(15.0) 高15.31	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ、体部内面横方向のヘラナデ後縦方向のヘラミガキ、横方向のヘラミガキ、埴形内斜口縁	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量、小礫・白色粒・赤色粒・石英微量 焼成:良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 No.42
7 土師器 片(陶)	口(11.6) 高15.81	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ後ヘラケズリ、内面ヘラミガキ、埴形内斜口縁	(外) 黒褐色 (内) 明赤褐色 小砂粒・白色粒微量 焼成:良好	床面 口縁部～体部の1/4残存 No.1～一括
8 土師器 片(陶)	口(7.6) 高15.81	口縁部～体部内外面横もしくは斜方向のヘラケズリ後にヘラミガキ、埴形内平球形	(外) 褐色 (内) 明赤褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成:良好	床面 口縁部～体部の1/4残存 No.10・15・30・一括
9 土師器 片	口(15.0) 高5.6	口縁部外面ナデ後縦方向のヘラミガキ、口縁部～体部内面ナデ後縦方向のヘラミガキ、体部外面及び体部内面顔面部は現状剥離が著しく調整不明瞭、蓋縁部欠損	(外) にぶい赤褐色 (内) 赤褐色 小砂粒・小礫微量 焼成:良好	床面 口縁部～体部の1/4残存 No.72・73・一括
10 土師器 片	口11.0 高15.11	口縁部内外面ヨコナデ後外面ミガキ、体部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ミガキ、口縁部～体部外面部往上げ 身縁部欠損	(外) 褐色 (内) 明赤褐色 小砂粒・小礫・石英・雲母片微量 焼成:良好	覆土 口縁部2/3、体部の1/3残存 一括
11 土師器 片	口(9.0) 高14.21	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ	褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 No.68
12 土師器 小壺	口3.3 高4.6	口縁部外面ヘラナデ、口縁部～体部外面ヘラケズリ、体部外面斜方向のヘラケズリ、底部外面一定方向のヘラケズリ、体部内面ナデ、体部内面に輪轡みぞ1段あり、内面に付着物あり	(外) 暗灰黄色 (内) 灰オリーブ色 小砂粒・石英少量、小礫・雲母片微量 焼成:良好	床面 完存 No.2
13 手捏土器 壺	口4.1 高3.1	口縁部～底部外面ヘラケズリ、体部内面に輪轡みぞ1段、体部外面に黒斑	(外) 黄灰色 (内) 灰色 小砂粒・小礫少量、石英・雲母片微量 焼成:良好	床面直上 完存 No.9
14 土師器 壺	口(10.0) 高11.61	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部～体部外面ナデ後縦方向のヘラミガキ、体部内面斜方向のヘラケズリ、頸部内面に輪轡みぞ1段あり、体部外面に縦付着	褐色 小砂粒・小礫微量 焼成:良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 No.67
15 土師器 壺	口9.8 高14.81	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部～頸部外面縦方向のヘラミガキ、口縁部及び口辺部の内外面に縦付着	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒微量 焼成:良好	床面直上 口縁部～頸部のみ残存 No.8
16 土師器 高杯	高10.31 最大径7.1	頸柱部外面縦方向のヘラミガキ、頸柱部内面ヘラケズリ、外面赤彩、底部内面に一部付着、底部内面に輪轡みぞ1段及び縦位のヒビ割れ	(外) 赤褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英・雲母片微量 焼成:良好	頸柱部のみ残存 一括
17 土師器 壺	口(12.4) 高10.31	口縁部内外面ナデ、頸部外面ヘラケズリ、内面横方向のヘラナデ、口縁部外面取ナデ成形、頸部外面輪轡みぞ4段、No.18と同一個体か	にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・白色粒・赤色粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部～頸部上1/4残存 No.63・一括
18 土師器 壺	高14.51	頸部下端外面斜方向のヘラケズリ、底部外面不定方向のヘラケズリ、底部内面一定方向のヘラケズリ、頸部内面に多量の縦付着、No.17と同一個体か	(外) 暗灰色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英微量 焼成:良好	頸部下端1/4、底部1/2残存 No.65
19 土師器 壺	口(15.5) 高19.71	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面上下部ケズリ、頸部下半斜方向のヘラケズリ、頸部内面横方向のヘラナデ、口縁部～頸部上半外面に縦付着、頸部内面に輪轡みぞ1段	黄灰色 小砂粒少量、小礫・石英・白色粒・赤色粒微量 焼成:良好	床面 口縁部1/4、頸部1/2のみ残存、底部は欠損 No.20・21・22・23・28・一括

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査

20 土師器 甕	高12.1 胴部最大径19.2	胴部下端は厚底のため不明瞭。胴部外面ヘラケズリ、胴部～底部外面不定方向のヘラケズリ後外周を一定方向のヘラケズリ。胴部内面ヘラケズリ、底部内面一定方向のヘラケズリ。胴部中に縦付筋、胴部内面に黒痕	褐色 小砂粒・小礫少量。石英・雲母片微量 焼成：良好	床面 胴部下平 3/4、底部残存 №43
21 土師器 甕	口17.4 高10.1	口縁部内外面ヨコナデ、胴部～底部外面斜方向のヘラケズリ、底部外面不定方向のヘラケズリ、口縁部～胴部内面斜方向のヘラケズリ。単孔、口縁部～胴部内面に縦付筋、胴部外面に黒痕	明赤褐色 小砂粒少量、白色粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～底部 2/3 残存 №34
22 石製品 編物石	最大長14.1 最大幅7.7 最大厚4.6 重量：562.82	棒状の自然石	灰色	床面直上 完存 №35
23 石製品 編物石	最大長14.1 最大幅6.1 最大厚4.1 重量：546.26	棒状の自然石	浅黄色	覆土 完存 №37
24 石製品 編物石	最大長13.9 最大幅5.5 最大厚4.0 重量：556.75	棒状の自然石	にぶい黄色	覆土 完存 №39
25 石製品 編物石 (煎石)	最大長14.1 最大幅5.6 最大厚3.2 重量：436.62	棒状・やや扁平の自然石、先端部に鋭き稜あり	灰黄色	覆土 完存 №45
26 石製品 編物石	最大長13.1 最大幅6.1 最大厚3.3 重量：387.36	棒状・断面三角形の自然石	灰白色	覆土 完存 №53
27 石製品 編物石	最大長13.5 最大幅4.5 最大厚4.3 重量：415.77	棒状の自然石	灰白色	覆土 完存 №58
28 石製品 磨石	最大長10.8 最大幅9.1 最大厚4.3 重量：518.01	2面が磨滅しており、磨痕が認められる。	灰白色	床面直上 完存 №18
29 石製品 磨石	最大長7.9 最大幅6.4 最大厚5.7 重量：382.88	2面が磨滅しており、広範囲に磨痕が認められる。	灰黄色	床面直上 完存 №25
30 石製品 磨石 (臼石)	最大長111.9 最大幅5.8 最大厚14.1 重量：265.41	多孔貫安山岩	黄褐色	覆土 外縁部の一部が残存 №70
31 石製品 磨石	最大長10.4 最大幅7.6 最大厚6.3 重量：683.16		灰白色	覆土 完存 №64
32 石製品 煎石	最大長8.7 最大幅7.9 最大厚3.9 重量：354.33	下端に鋭角あり、楕円形の自然石	明赤灰色	床面 完存 №66
33 石製品 臼石	最大長23.1 最大幅17.7 最大厚4.1 重量：2313.25	表面とも広範囲に磨痕が認められる。裏面は平坦だが平分が鋭角	灰白色	床面直上 完存 №69
34 石製品 臼石	最大長18.2 最大幅13.2 最大厚3.9 重量：1322.51	表面に広範囲に磨痕が認められる。側面1面に一部に磨痕あり	灰白色	床面直上 完存 №29

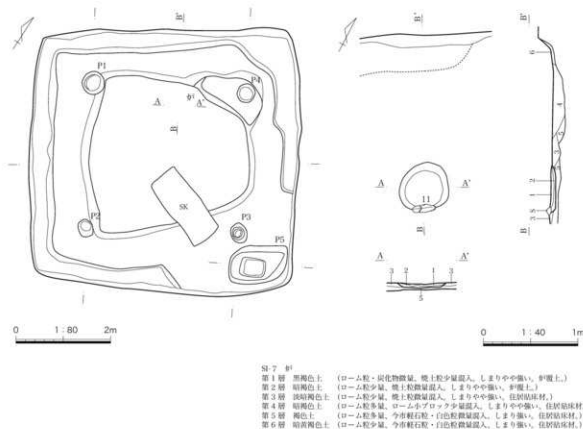
S1-7 (第33～35図、第10表、図版五・六・六一)

概要 本遺構は1区の中央部やや北側、S1-5の南に位置している竪穴建物跡である。確認面からの掘り込みは20cmとやや浅い。位置 102-37・38グリッドに位置する。確認面標高は86.030m～85.933mで



第33図 砂田姥沼遺跡1区 SI-7実測図(1)

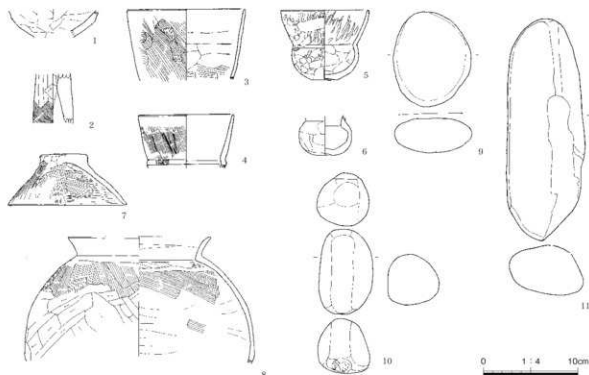
ある。平面形・規模 南北5.54m×東西5.68mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-30°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第5層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は2.2cm～19.2cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第6～9層で充填されており、第6～8層の上面が床面である。断面観察から掘り方は主柱穴4本に囲まれた範囲は浅く掘り込まれており、主柱穴の外側では一段深く掘り込まれ、更に四方の壁際が深く掘り込まれている。図中の点線は掘り方埋土の第7層と第8層の境で床面において明瞭に区分できた。第8層を壁際に充填させた後に第7層を中央部に入れて床面を形成している。柱穴



第34図 砂田姥沼遺跡1区 SI-7実測図(2)

4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。なお柱痕は確認されなかった。P1は径50×48×深さ59.0cm、P2は径38×30×深さ57.5cm、P3は径48×387×深さ66.6cm、P4は径40×36×深さ56.9cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が3.00m、P2-P3間が3.20m、P3-P4間が2.90m、P4-P1間が3.24mを測る。4本の主柱穴は建物の軸にあわせるように東西方向にやや長い長方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、建物南東隅に位置している。平面形は長軸118cm×短軸80cmのやや不整形な隅丸長方形で、床面から底面まで56.3cmと掘り込まれている。底面は平坦である。炉 炉跡は中央北寄りに位置しており、主柱穴(P1・P4)の軸よりも若干南側にある。長軸0.60×短軸0.54m、深さ6.5cmになる。火床面についての観察がみられないため、焼しまりの状況については不明である。炉跡の平面は南辺がやや直線的な不整楕円形をしており、その南辺には長さ23.8cmの枕石が据えられていた。枕石は上面以外の埋設面には鉄分が付着している。出土遺物 本建物の取り上げ遺物としては14点になる。この他に覆土から約140点が出土し、甕の胴部破片が70点と最も多量に、次いで埴の体部片が42点と出土している。僅かではあるが高坏の坏部片や脚部片も混入している状況である。出土状況は建物跡の床全面で遺物は確認されているが、南東隅の貯蔵穴周辺に集中する。これらの遺物のうち、床面直上若しくは床面から出土したものは、高坏(No.1・2)、埴(No.3・5)の4点のみである。蓋(No.7)、単口緑甕(No.8)などは覆土からの出土である。遺物の遺存状態は悪く、埴(No.5)以外の完形品はない。

住居床面から出土した復元径から器台器受部(No.1)としたが、高坏坏部下端の可能性もある。北西隅から出土した高坏脚部片(No.2)は中空柱状脚。埴の口縁部破片(No.3・4)は2つとも口辺部にはハケメ調整



第35図 砂田姥沼遺跡1区 SI-7出土遺物

がなされている。埴 (No. 5) はほぼ完形品である。内罫気味に立ち上がる口縁部。頸部は内外に明瞭な稜を持つ。調整は口縁部～頸部、体部上部まで縦方向のヘラミガキが丁寧に施され、体部はヘラケズリ後丁寧にヘラナデが施されている。口辺部にもヘラナデがみられる。頸部にはヘラ状工具によるミガキが一周されている。底部は凹み底である。器面には斑状剥離が確認される。埴の形状としては、やや古相を示す。埴 (No. 6) は頸部より上が欠損するやや小振りの埴。底部がやや凹み底になっている。器面はヘラケズリかヘラナデであろうか、磨滅が著しく明瞭ではない。頸部外面は明瞭な屈曲が確認できる。内面はNo. 5 に比べると丸味を帯びながら屈曲するか。単口縁甕 (No. 8) は口縁部から胴部上半までの遺存になる。肩の張らない最大径が胴部中位に位置する形状になると推察できる。頸部から胴肩部にかけて斜方向の刷毛目調整が、胴部中位付近から斜方向のヘラケズリが施される。頸部は横方向に小口状工具で刷毛目調整が巡らされている。本遺構の時期は、杵を備える竪穴建物であることや、埴 (No. 5) の形状、高坏 (No. 2) や器台 (No. 1) などの出土や流入した単口縁甕 (No. 8) の形状から、古墳時代中期前半期の5世紀初頭に位置付けられる。

第10表 砂田姥沼遺跡1区 SI-7出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

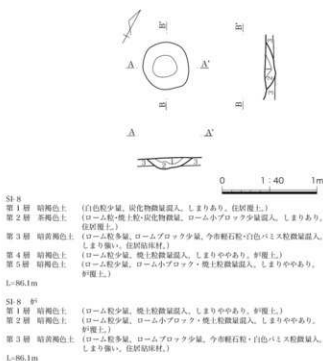
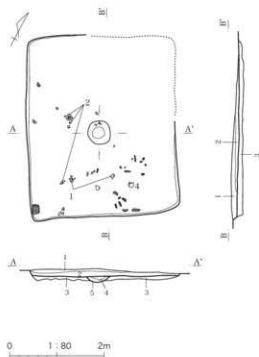
番号 種類 部種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏 (高坏)	高12.0 残存最大径19.5	器受部外面瓦尻のあるナデ。器受部外面下部は縦方向のヘラケズリ。内面ヘラナデ	褐色 砂粒少量、小礫・石英微量 焼成：良好	床面 器受部(下部下部)一部残存 No. 3
2 土師器 高坏	高15.4 最大径4.3	頸柱部外面縦方向のヘラケズリ後下部部に斜方向のハケメ調整。頸柱部内面ヘラナデ。器面及び断面は磨滅している。	黄褐色 小砂粒多量、赤色粒少量・小礫微量 焼成：良好	床面 頸柱部のみ残存 No. 8・一括
3 土師器 埴	口12.6 高7.5	口縁部内外面ヨコナデ。口辺部外面斜方向の刷毛目。口辺部内面ヘラナデ後刷毛目。口縁部外面に黒褐色の付着物あり	(外) 明黄褐色 (内) に近い黄褐色 砂粒多量、小礫少量、赤色粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面 口縁部の1/4残存 No. 5・一括

4 土師器 埴	口10.2 高15.0	口縁部外面強いヨコナデ。口辺部外面斜方向の刷毛目調整後、上部にヨコナデ、内面ナデ	にぶい黄褐色 小砂粒多量、石英少量、小礫・赤色粒微量 構成：良好	覆土 口縁部の1/3、体部一部残存 No.13・覆土
5 土師器 埴	口10.4 高7.4 底径2.4	口縁部内外面ヨコナデ 外面はヨコナデ後に縦方向のヘラミガキ。一部ヘラナデ 体部外面ヘラケズリ後ヘラミガキ、光沢のあるヘラナデ、体部内面ヘラナデ 底部外面ナデ。口縁部～体部取面に黒面。口縁部に接合部。口縁部～体部外面に凹凸部	にぶい黄褐色 小砂粒多量、赤色粒少量、小礫・雲母片微量 構成：良好	床面直上 ほぼ正形、口縁部の2/3欠損 No.11
6 土師器 埴	高14.3 最大径5.6	内外面厚装のため、成形不可解 体部外面～底部ヘラケズリ後ヘラナデか。体部～底部内面ナデ	浅黄褐色 小砂粒多量、赤色粒少量、小礫・石英微量 構成：良好	覆土 口縁部の欠損、体部2/3残存
7 土師器 蓋	径12.6 高5.5 損高1.0 損5.0	底部外面は不定方向の土部光沢のあるヘラナデ、体部内外面ナデ後刷毛目調整、底部内外面ヨコナデ 備考：体部内面は底部内面から底部部にかけて渦巻状に刷毛目調整、底部外面及び内面に凹部あり	棕色 小砂粒多量、小礫・白色粒少量、石英微量 構成：良好	覆土 底部、体部の2/3残存 No.2
8 土師器 甕	口15.2 高13.7 最大径24.4	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外面ヘラナデ、体部外面ナデ後刷毛目調整、体部外面斜方向の刷毛目調整後、体部中央に斜方向のヘラケズリ、底部外面には刷毛目調整、体部内面刷毛目調整、ヘラナデ。口縁部～体部外面にかけて一部に凹凸部	(外)黄褐色 (内)にぶい黄褐色 小砂粒・小礫多量、赤色粒少量、石英・雲母片微量 構成：良好	覆土 口縁部一部欠損、胴部下平欠損 No.18
9 石製品 磨石	最大長10.1 最大幅8.3 最大厚3.6 重量：374.48	磨り面は一面のみ。多孔質灰山岩の自然石	黄灰色	覆土 完存 No.7
10 石製品 磨石	最大長9.0 最大幅5.8 最大厚5.5 重量：400.25	両端に鋭角あり、上端の鋭角は磨り面もある。楕円形の自然石	灰黄色	覆土 完存 No.9
11 石製品 硯石	最大長23.8 最大幅7.8 最大厚5.4 重量：1530.85	上面以外の面に鉄分の付着を確認。上面には縦方向の割線	灰白色	床面直上 完存 No.21

S1-8 (第36・37図、第11表、図版六・六一)

概要 本遺構は1区の中央部やや北側、S1-7の西に位置している竪穴建物跡である。確認面からの掘り込みは11.8cmと浅く、北東隅は削平されている。建物跡には柱穴・貯蔵穴・壁周溝などの付属施設が確認されていない。 **位置** 102-37グリッドに位置する。確認面標高は86.042m～85.899mである。 **平面・規模** 南北3.10m×東西3.82mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-34°-Wである。 **覆土** 堆積状況は東西・南北方向のセクションで観察でき、第1・2層の自然堆積である。 **壁** 床面からの残存壁高は0.7cm～11.8cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。 **床** 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り方面は多少の凹凸はあるが第3層をほぼ均一に充填しており、この層の上面が床面である。 **炉** 炉跡は建物の中央に位置している。長軸0.48×短軸0.46m、深さ10.3cmになる。火床面についての観察がみられないため、焼しまりの状況については不明である。炉跡からの出土遺物はない。炉の掘方は建物の掘り方面よりも深く掘り込まれている。覆土に焼土粒含むことから炉跡としたが、浅い柱穴になる可能性もある。 **出土遺物** 本建物の遺物出土量は少なく、ほとんどが覆土中の遺物である。取り上げ遺物としては18点で、うち、図示したものは5点である。その他に覆土から約73点が出土し、甕の胴部破片が47点、次いで坏の体部破片が14点と出している。僅かではあるが埴の口縁部や壺の折り返し口縁も混入している。

出土状況は建物跡の北東部は床面近くまで削平が及んでいるために出土遺物はみられない。建物の中央部より～南壁にかけてみられる。これらの遺物は覆土からの出土である。遺物の遺存状態は悪く何れも流入で



第36図 砂田姥沼遺跡1区 SI-8実測図

ある。埴形杯 (No. 1・2) は内斜口縁の破片である。2点とも覆土中からの出土であり、流入したものと判断する。小形甕 (No. 4・5) は胴部下端～底部の破片である。No. 5は平底、No. 4は凹み底である。単口縁甕 (No. 3) はやや肥厚な器壁をしている甕である。覆土中からの出土であり本遺構に伴うものではない。器面にはヘラミガキが施されている。甕単体では、5世紀末～6世紀初頭のものであろうか。

本遺構は²を備える竪穴建物であり、覆土中の遺物を精査しても模倣杯は確認されなかった。そのような状況から古墳時代中期 (5世紀後半) に位置付けられる。

第11表 砂田姥沼遺跡1区 SI-8出土遺物

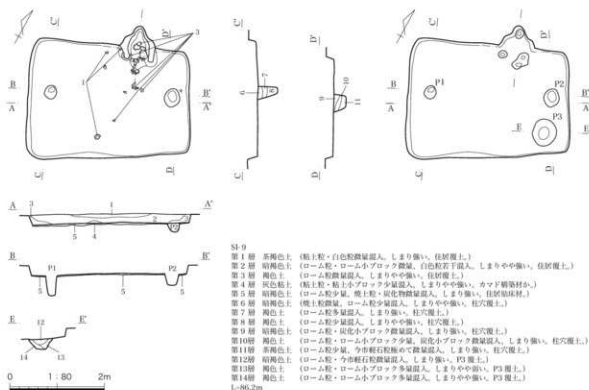
番号 種類 図様	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯 (埴)	口径13.0 高15.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、体部内面横方向のヘラナデ。埴形杯内新口縁	褐色 小砂粒少量、小礫・赤色粒・白色粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 No. 2・7
2 土師器 杯 (埴)	口径14.0 高15.3	内外面摩耗のため、成形不明瞭。口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ。埴形杯内新口縁	浅黄褐色 赤色粒少量、小砂粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/2残存、底部欠損 No. 13・15・16・一括

() : 推定値 [] : 残存値

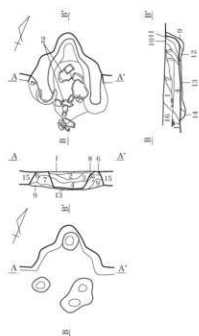
3 土師器 甕	口14.0 高119.3 最大径18.4	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部内外面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面ヨコ方向のヘラナデ後タテ方向のヘラナデ、胴部内面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面ヘラナデ後ヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ・胴部白色以下は黒面磨耗	褐色 小砂粒少量、小礫・石英・赤色粒 白色粒微量 焼成：良好	表層 口縁部3/4、胴部2/3残存、底部欠損
4 土師器 小形甕	高12.3 底3.0	胴部部下端外面斜方向のヘラナデ後ヘラミガキ、胴部内面磨耗のため調整不明、凹み底	褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	甕土 胴部下端～底部のみ残存
5 土師器 小形甕	高11.2 底3.2	体部下端外面斜方向のヘラナデ、体部内面ヘラナデ、底部内外面ナデか、平底	黄灰色 小砂粒少量、小礫・石英微量 焼成：良好	甕土 体部下端～底部のみ残存

S1-9 (第38～40図、第12表、図版七・六一)

概要 本道構は1区の中央部やや北側、S1-8の南西に位置している竪穴建物跡である。確認面からの掘り込みは15～18cmとやや深い。位置 102・37グリッドに位置する。確認面標高は86.090m～86.062mである。平面形・規模 南北2.42m×東西3.40mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-29°-Wである。覆土 堆積状況は東西方向のセクションで観察でき、第1～第3層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は15.4cm～19.8cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方土は第5層が充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は多少の凹凸はあるが第5層をほぼ均一に充填している。柱穴 2本の主柱穴(P1・P2)を確認した。平面形は概ね楕円形である。掘り方はP2が大きく、P1は床面からの掘り込みが深い。柱穴には柱痕は確認されていない。P1は径30×26×深さ41.2cm、P2は径38×34×深さ22.6cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.58mを測る。主柱穴は建物の東西方向軸の中心に配されている。ビット 貼床材(第5層)除去後に、建物の南東隅にP3とした長軸58cm×短軸50cmの隅丸長方形の掘り込みが確認された。掘方面から底面まで2.51



第38図 砂田姥沼遺跡1区 S1-9実測図(1)



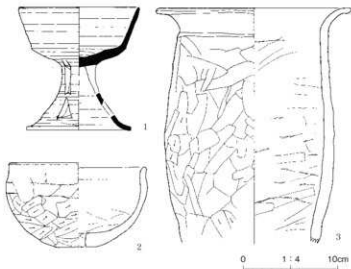
第39図 砂田姥沼遺跡1区 SI-9実測図(2)

cmと掘り込まれており底面は平坦である。覆土は第12～15層で自然堆積である。床面で確認できなかった貯蔵穴の可能性がある。カマド カマドは北壁の中央東壁よりに位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは47cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は0.94m×東西0.85mである。カマドの構造はカマド掘り方形成し、第13層で火床面を形成している。煙道部は第9層を裏込め土としており、火床から鋭角に直線的に外傾して立ち上がる。第8層は第6・7層が被熱を受け赤色化した範囲である。カマドの袖部は第9層を基底部としており、第6・7層で袖部を形成している。第1～3層は天井材の崩落土である。住居中央部でもカマドの部材が検出されていることから人為的に破壊した可能性がある。出土遺物 本建物の遺物出土量はやや多いが、取り上げ遺物としては15点のみである。この他に覆土から128点が出土し、そのうち甕の胴部破片が93点。次いで坏の体部片が17点と、圧倒的に甕の胴部破片の割合が高い。僅かではあるが高坏の脚部片も混入している。

出土状況は建物跡のカマド前面で遺物は確認されている。これらの遺物のうち、床面直上若しくは床面から出土したものは、須恵器高坏(Ⅱa 1)のみで、甕(Ⅱa 2)はカマド火床面直上、甕(Ⅱa 3)はカマドの火床面～覆土にかけて出土している。

須恵器高坏(Ⅱa 1)の出土状況は住居内に散在していた。坏部・脚の半分が欠損している。TK209～TK217の範疇か。生産地は在地系であろうか。古墳時代末(7世紀前葉～中葉：陶邑Ⅱ-5・6～Ⅲ-1段階か)Ⅱ-5段階では、透かしの方向が2方向になる形状が認められ、蓋坏と同じ

- SI-9 カマド
- 第1層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまり強い、天井部材崩落土上。)
 - 第2層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、天井部材崩落土上。)
 - 第3層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、天井部材崩落土上。)
 - 第4層 暗褐色土 (粘土・粘土・炭化物微量混入。しまりやや強い、煙道部混入土上。)
 - 第5層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、煙道部混入土上。)
 - 第6層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、カマド袖部材。)
 - 第7層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、カマド袖部材。)
 - 第8層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、カマド袖部材。)
 - 第9層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、袖部材。)
 - 第10層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、袖部材。)
 - 第11層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、袖部材。)
 - 第12層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、袖部材。)
 - 第13層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、カマド火床土上。)
 - 第14層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、カマド火床土上。)
 - 第15層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、カマド火床土上。)
 - 第16層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、カマド火床土上。)
 - 第17層 暗褐色土 (粘土・粘土小ブロック少量混入。しまりやや強い、カマド火床土上。)
- L=86.2m



第40図 砂田姥沼遺跡1区 SI-9出土遺物

形状を伴う。本製品と同様の形状である。単孔式の鉢形の甕（№2）はカマドから出土している。長胴甕（№3）は口縁部が大きく開き、頸部以下の胴部には膨らみがなく直線的な形状をしている。本遺構の時期は、長胴甕の形状や須恵器高環の年代から古墳時代終末期の7世紀前半～中葉の範疇である。

第12表 砂田姥沼遺跡1区 SI-9出土遺物

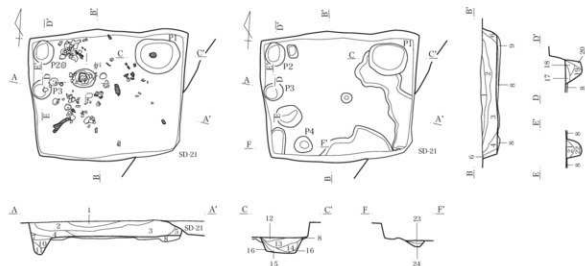
（ ）：推定値 []：残存

番号 種類 品名	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土位置 残存状態 注記
1 須恵器 高環	口12.9 高13.0 胴10.2	外部内外面口コナデ、底部回転ヘラナデ、胴部外面回転ヘラナデ、内面口コナデ、胴部内面ヨコナデ、胴部外部外面ヘラナデ。2段透かし（上段：長方形、下段：三角形）2方向	(外) 灰白色 (内) 灰色 小砂粒少量、小礫微量 焼成：良好	床面直上 環部 1/2、胴部 1/2 残存、胴部 3/4 欠損 №1・6・7・8・一括
2 土師器 甕	口14.3 高8.9 口径2.8	口縁部内外面ヨコナデ、胴部～底部外面ヘラナデ、内面ナデ 備考：鉢形、単孔式 外面に縦溝、穿孔は内面から外面、斜方向のヘラナデ。胴部内面に輪組み痕2段。	(外) 明黄褐色 (内) 褐色 砂粒少量、小礫・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部 1/2、胴部 2/3 残存 №11・13
3 土師器 甕	口21.2 高(26.2)	口縁部内外面ヨコナデ、胴部ヘラナデ後ヘラナデ、内面ヨコ方向のヘラナデ 備考：胴部外面のヘラナデは光沢があるナデ。胴部内面には輪組み痕8段、胴部外面は磨耗が著しい。	(外) 黄褐色 (内) 浅黄褐色 小砂粒・小礫少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	床面 口縁部 3/4、胴部 2/3 残存、底部 欠損 №4・5・9・10・12・14・144

SI-10 (第41・42図、第13表、図版八・六一)

概要 本遺構は1区の中央部やや北側、SI-9の南西に位置している柱穴を備えていない堅穴建物跡である。南東隅の上部をSD-21に重複されている。位置 102-36・37グリッドに位置する。確認面標高は86.042m～85.981mである。平面形・規模 南北2.74m×東西3.30mの東西方向に長い隅丸長方形の堅穴建物である。南壁に直交する軸線はN-7-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第6層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は22.7cm～36.7cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第8・9層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は多少の凹凸はあり、東壁際は・南壁際は大きく掘り込まれている。貯蔵穴 P1は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸92cm×短軸71cmの不整形な隅丸長方形で、床面から底面まで31.5cmと掘り込まれ、底面はほぼ平坦である。ピット 床面には2基のピットが確認されている。P2は建物の北西隅に位置しているピットで長軸50×短軸41cmの楕円形をしている。床面からの掘り込みは33.2cmと貯蔵穴としたP1よりも深い。P3は建物の北西隅のP2の南にある西壁際のピットで長軸40×短軸39cmの楕円形をしている。床面からの掘り込みは35.2cmである。またP4は建物の南東隅の床下で確認されたピットで長軸37×短軸33cmの楕円形をしている。掘り込みは14.0cmである。これら3つのピットは用途等不明であり、P2・P3に限っては本遺構に伴うものかどうか判断し兼ねる。炉 炉跡は中央北寄りに位置している。長軸0.49×短軸0.39m、深さ4.7cmの東西方向に長い隅丸長方形をしている。火床面は第3層で焼締まっている。出土遺物 本建物の遺物出土量は多い。取り上げ遺物としては50点で、図示得たものは19点になる。この他に覆土から306点と多数出土し、甕の胴部破片が172点と最も多量に、次いで環の体部片が67点と出土している。僅かではあるが模倣環の口縁部も混入している。

出土状況は建物跡の中央部から北西隅にかけての範囲に集中している。模倣環（№2）は内面に放射状のミガキの痕跡が僅かに残る蓋模倣形の環である。環（№3）は在地産で、体部から「く」の字に強く屈曲する口縁を持つ。模倣環（№4）は外傾形と想定している破片である。出土状況は覆土、貯蔵穴覆土、床下からの接合遺物であるが、堆積過程で流れ込んだものであろう。形状的に後出するものと捉えている。6世紀中葉～後葉のものであろうか。埴形環は内斜口縁形（№5・6・7）が確認されている。№7は口径が14.3cmと

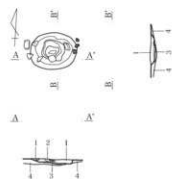


SI-10

- 第1層 赤褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック・焼土小ブロック微量混入。しまり強い、住居層上。)
- 第2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土小ブロック・白色粒少量混入。しまり強い、住居層上。)
- 第3層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土小ブロック多量。白色粒・炭化物少量混入。しまり強い、住居層上。)
- 第4層 赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い、住居層上。)
- 第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒・焼土小ブロック・炭化物少量混入。しまりやや強い、住居層上。)
- 第6層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い、住居層上。)
- 第7層 暗褐色土 (ローム粒多量。ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、住居層上。)
- 第8層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、住居層上。)
- 第9層 暗褐色土 (ローム粒多量。ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、住居層上。)
- 第10層 明赤褐色土 (ローム粒・焼土粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い、P3層上。)
- 第11層 淡褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、P3層上。)
- 第12層 赤褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量混入。P1層上。)
- 第13層 淡褐色土 (ローム粒・焼土小ブロック少量。ローム小ブロック多量。炭化物微量混入。しまり強い、P1層上。)
- 第14層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。炭化物微量混入。焼土粒微量混入。しまりやや強い、P1層上。)
- 第15層 赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物少量混入。しまりやや強い、P1層上。)
- 第16層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、P1層上。)
- 第17層 赤褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック・焼土小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、P2層上。)
- 第18層 暗褐色土 (ローム小ブロック少量。ローム粒・焼土小ブロック微量混入。しまりやや強い、P2層上。)
- 第19層 赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。炭化物微量混入。しまりやや強い、P2層上。)
- 第20層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック多量。ローム小ブロック・炭化物微量混入。P2層上。)
- 第21層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、P3層上。)
- 第22層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、P3層上。)
- 第23層 暗褐色土 (ローム粒少量。焼土粒・ローム小ブロック微量混入。断面P4層上。)
- 第24層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い。断面P4層上。)

L=86.2m

0 1:80 2m



SI-10 8F

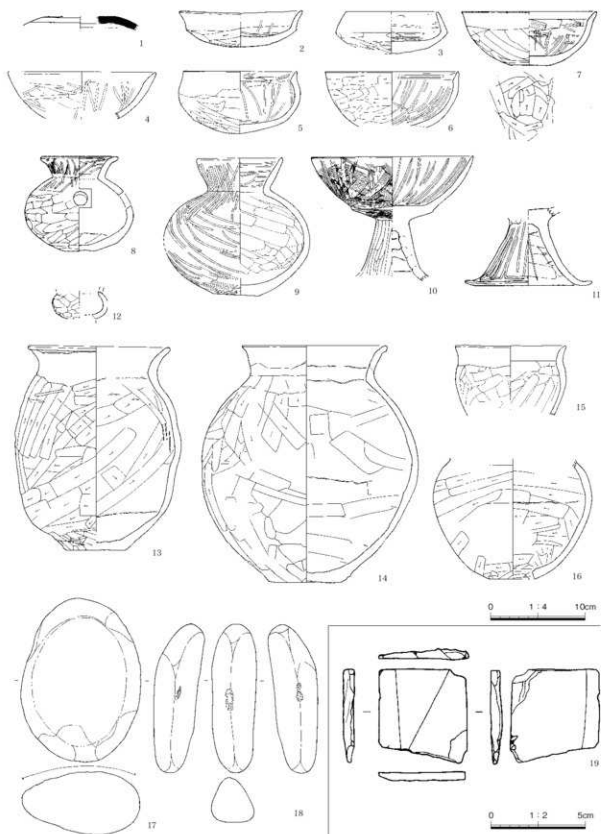
- 第1層 赤褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。炭化物少量混入。しまりやや強い、8F層上。)
- 第2層 暗褐色土 (焼土粒多量。ローム粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、8F層上。)
- 第3層 赤褐色土 (焼土小ブロック多量混入。8F層上。)
- 第4層 褐色土 (ローム粒・焼土粒少量。焼土小ブロック微量混入。しまりやや強い、住居層上。)

L=86.1m

0 1:40 1m

第41図 砂田姥沼遺跡1区 SI-10実測図

大きく底部は平底でヘラケズリによる成形である。№5は床面直上からの出土であり、本住居の廃棄時期に近い出土状況を示す。床面直上からの出土した甕(№8)は、口辺部外面が剥離するがほぼ完形である。口縁部には波状のヘラミガキが巡らされている。胴部の形状はやや扁平化する球状で、頸部が直立気味に立ち上がり外反する。胴部下半はヘラケズリによる調整がなされているが、上部にはヘラミガキも確認できる。中形の甕(№9)は甕(№8)同様に胴部がやや扁平化している。口縁部から胴部外面には光沢のあるミガキが



第42図 砂田姥沼遺跡1区 SI-10出土遺物

施されている。裾部が欠損する高環 (No 10) は坏部下端に突帯が付く系統になるか。古墳時代中葉～後葉段階に収まるか。高環 (No 11) は坏部が欠損し、脚部のみ出土である。外反脚で中空になっている。脚柱内面にヘラナデ調整後、臍部から裾部に至る焼成前線刻が観察できた。床面直上から出土した甕 (No 13) は、やや長胴形の臍部を持つ平底の甕である。特徴は臍部中位～下位にかけて横方向の強いヘラケズリが施されていることである。底部付近は縦方向ないし横方向のヘラケズリによって調整されている。の甕 (No 14) は球形で底部が突出している。器面にはヘラケズリが施されている。床面直上で確認した球形の臍部を持つ無底式の甕 (No 16) は底部の側面は横方向のヘラケズリで調整がなされている。

この他に石製品が混入している。磨石 (No 17) は一面のみに磨り痕が確認された。この磨り面側が爆けており被熱が認められる。被熱は全面でないが側面まで及んでおり、使用後の被熱と推察する。石質は多孔質安山岩系である。編物石 (No 18) の石質は砂質ホルンフェルスである。3つの稜の中央部に僅かな最痕が認められた。砥石 (No 19) は、砥石が横方向に剥離した破片である。石質はにぶい橙色をした粘板岩で、3面の研面が確認できることから砥石の端の一部であろうか。砥面には使用痕を僅かに確認することができる。図示した遺物のうち、須恵器蓋 (No 1)、模倣坏 (No 2)、埴形坏 (No 5)、ミニチュア土器 (No 12)、小形甕 (No 15)、磨石 (No 17)、砥石 (No 19) は覆土中の遺物で、建物の廃絶後に流入したものである。

それ以外は床面直上からの遺物がほとんどである。甕 (No 13)・甕 (No 16) に関しては床面直上に破片が散乱している状況であった。建物の廃絶直後に破砕された可能性がある。出土した遺物の個々の時期や、覆土に模倣坏が確認されることから古墳時代中期後葉 (5世紀後半) に位置付けられる。

第13表 砂田姥沼遺跡1区 S1-10 出土遺物

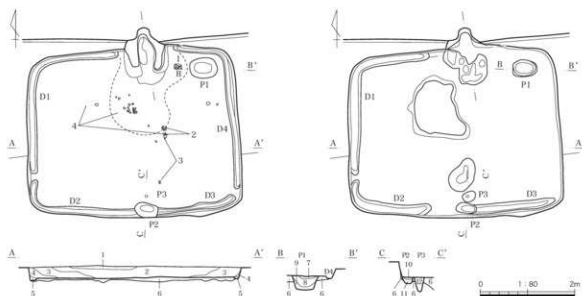
() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏蓋	高 11.4	大片部外面回転ヘラケズリ、内面クロコナデ	灰色 小砂粒・白色粒微量 焼成：良好	一括 大片部 1/4 残存
2 土器 坏	口 13.1 高 3.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部～底部外面ヘラケズリ、内面ナデ後ヘラミガキ。模倣坏の蓋模倣形	浅黄褐色 小砂粒・赤色粒・雲母片微量 焼成：良好	一括 口縁部～底部 2/3 残存
3 土器 坏	口 9.8 高 4.5 最大幅 11.8	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後横方向のヘラミガキ、体部外面ナデ後斜方向のヘラケズリ、内面ヘラミガキ。口縁部～体部上面外にかけて部仕上げ	褐色 小砂粒・赤色粒・石英微量 焼成：良好	覆土 口縁部～底部 2/3 残存 15・17・表土・一括
4 土器 坏	口 15.6 高 14.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ後ヘラミガキ、内面ナデ後ヘラミガキ。模倣坏外縁小	明赤褐色 小砂粒少量、白色粒・赤色粒・石英微量 焼成：良好	一括 口縁部～体部 1/4 残存 P5・床下・表土
5 土器 坏 (陶)	口 12.1 高 6.7 最大径 13.0	口縁部内外面ヨコ方向のヘラケズリ後ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ後ヘラミガキ。埴形坏内口口縁	明赤褐色 小砂粒少量、小礫・石英・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部 3/4 残存 2・6・24・40・野・表土・床面
6 土器 坏 (陶)	口 14.2 高 15.9	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコナデ後ヨコ方向のヘラミガキ、体部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ後ヘラミガキ。埴形坏内口口縁	(外) 明赤褐色 (内) 褐色 小砂粒少量、石英・白色粒・赤色粒・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 底部欠損 4・5・一括
7 土器 坏 (陶)	口 14.3 高 5.7 底 3.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面横方向の小口状工具によるヘラナデとヘラミガキ。底部は一定方向のヘラケズリ。埴形坏内口口縁 体部外面に広範囲の覆付痕	明赤褐色 小砂粒少量、小礫・白色粒・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 ほぼ完形 16・表土・一括
8 土器 甕 (有孔)	口 8.2 高 10.0 底 3.2 孔径 1.5	口縁部内外面ナデ後ヘラミガキ、体部外面ヘラミガキ後横方向のヘラケズリ、体下部～底部内面ヘラナデ、体上部内面ナデ、底部外面はヘラケズリ。孔は焼成前の穿孔、外面の下半部が納純する。側部下平に接合痕 1 段。	褐色 白色細砂粒少量、赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 ほぼ完形 No 4

9 土師器 壺(中形)	口9.0 高14.7 底4.7 最大径15.4	口縁部外面ナデ後縦方向のヘラミガキ、内面ヨコ方向のツラナテ後ヨコ方向のヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後にヘラミガキ、内面上部はヘラナデ、底部下部はヘラケズリ、底部外面不定方向のヘラケズリ、胴部下半に接合痕1段、口縁部へ胴部上半にかけて屈付着。	(外) 明赤褐色(内) 褐色 白色細砂粒・小礫・石英・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 ほぼ定形 №3・20・29・34・35・46・47 ・貯・床下・表土
10 土師器 高杯	口17.3 高13.2	口縁部外面ヨコナデ、外面外面ヘラケズリ後斜方向の刷毛目調整、下縁は横方向の刷毛目調整、内面ナデ後縦方向のヘラミガキ、胴部外面ヘラケズリ後縦方向のミガキ、内面胴柱部ナデ、胴部接合痕3段、底部下縁に外縁	褐色 小砂粒・石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部残存、底部が欠損 №10・11
11 土師器 高杯	高18.1 底13.5	胴部外面ヘラケズリ後ミガキ、内面ヘラナデ、胴部外面ヨコナデ後ヨコ方向のヘラミガキ、内面ヨコナデ、胴部内面に焼成前縁刻あり。	明赤褐色 小砂粒・小礫・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部のみ、底部の一部欠損 №7
12 土師器 ミニチュア 土器	高13.0 最大径5.9	胴部外面ヘラケズリ、内面ナデ。 付付費形	(外) に近い黄褐色(内) 明褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部残存、胴部及び口縁部は欠損 №18
13 土師器 甕	口14.9 高21.8 底6.2	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面斜方向のヘラケズリ、胴部外面下端縦方向のヘラケズリ、内面ナデ、底部外面不定方向のヘラケズリ、胴部内面に輪積み痕3段、口縁部へ底部に黒斑。口縁部へ胴部中位外面に屈付着。	(外) 褐色(内) に近い黄褐色 小砂粒・小礫・石英・赤色粒・白色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部へ胴部の3/4、底部残存 №3・9・12・14・22・37・38 ・46・貯・床下
14 土師器 甕	口15.0 高25.2 底8.0	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ、底部外面不定方向のヘラケズリ、器面は摩滅している。底部へ胴部内面に接合痕3段、胴部外面に1段、胴部中位へト位外面に屈付着。	(外) 褐色(内) に近い褐色 小砂粒・小礫・石英・赤色粒 焼成：良好	床面直上 口縁部1/4、胴部の3/4、底部残存 №8・21・22・30・39・42・43・44・45・49・50・床土・床直一括・P5
15 土師器 甕	口11.7 高7.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部内外面ヘラケズリ、口縁部へ胴部外面の一部に屈付着	(外) 褐色(内) 明赤褐色 小砂粒少量、小礫・石英・雲母片・赤色粒 白色粒微量 焼成：良好	P5 口縁部へ胴部1/2残存 P5一括
16 土師器 甕	高12.7 底(4.6) 最大径(16.8)	胴部外面ヨコナデ、胴部へ底部内外面ヘラケズリ、外面に屈付着。穿孔は内面から外面、ヨコ方向のヘラケズリ、鉢形、無孔式	(外) 明赤褐色(内) 明黄褐色 砂粒・小礫・赤色粒・白色粒微量 焼成：良好	床面直上 胴部1/3残存 №22・28・33・48・P5一括
17 石製品 磨石	最大長17.3 最大幅12.5 最大厚6.7 重量：1710.12	磨り面は一面のみ、磨り面及び側面に至る範囲に焼熱痕あり。多孔質安山岩の自然石。	灰色	床面直上 完存 №19
18 石製品 編物石	最大長15.7 最大幅4.6 最大厚4.7 重量：525.73	棒状の自然石	灰オリーブ色	覆土 完存 一括
19 石製品 砥石	最大長(4.9) 最大幅4.6 最大厚0.45 重量：16.34	側面は3面残存し、縦方向と斜方向が1面、残りの2面は斜方向の研磨である。砥石が横方向に割割したものであろうか。石質は粘板岩で頁岩よりは軟らかい素材。	にに近い褐色	覆土 一部 一括

S1-11 (第43・44図、第14表、図版九・六十一・六十二)

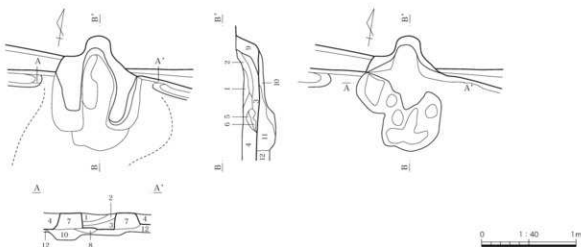
概要 本遺構は1区の中央部、S1-10の南西に位置している柱穴を備えていない堅穴建物跡である。確認調査時に設定したトレンチ(TX102)によって南壁以外は上部が削平されている。位置 101・102～36グリッドに位置する。確認目標高は86.020m～85.818mである。平面形・規模 南北3.66m×東西4.48mの東西方向に長い隅丸長方形の堅穴建物である。南壁に直交する軸線はN-1°-Eである。覆土 東西方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第4層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は4.8cm～34.8cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるが平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第6層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は多少の凹凸はあるが均一的に掘り込まれている。貯蔵穴 P1は、北東隅に位置している。平面形は長軸56cm×短軸43cmの楕円形で底面は平坦である。床面から



S1-11

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い、住居敷上。)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒・ローム小ブロック少量。ロームブロック微量混入。しまり強い、住居敷上。)
 第3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。粘土ブロック少量。焼土粒・ロームブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、住居敷上。)
 第4層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。焼土粒微量混入。しまりやや強い、住居敷上。)
 第5層 硬質土 (D1・D4)
 第6層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。ロームブロック・ローム大ブロック・焼土小ブロック少量混入。しまりやや強い、住居敷床材。)
 第7層 茶褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。炭化物微量混入。しまりやや強い、P1 覆土。)
 第8層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・炭化物・焼土小ブロック少量混入。しまりやや強い、P1 覆土。)
 第9層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。ロームブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、P1 覆土。)
 第10層 暗褐色土 (ローム粒少量。炭化物微量混入。しまり弱い、P2 覆土。)
 第11層 褐色土 (ローム粒多量。ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、P2 覆土。)
 第12層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、P3 覆土。)

L=86.1m

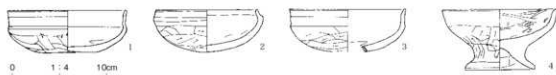


S1-11 カマダ

- 第1層 灰色粘土 (粘土粒・粘土小ブロック多量。焼土粒・炭化物微量混入。しまり強い、天井部材敷上。)
 第2層 赤褐色土 (焼土粒・粘土小ブロック多量。炭化物微量混入。しまりやや強い、焼土部内埋戻土上。)
 第3層 暗褐色土 (焼土粒・粘土小ブロック少量。炭化物微量混入。しまりやや強い、御道敷上。)
 第4層 暗褐色土 (粘土粒・粘土小ブロック少量。焼土粒・粘土小ブロック・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、住居敷上。)
 第5層 灰色粘土 (粘土粒・粘土小ブロック多量。焼土粒・粘土小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、天井部材敷上。)
 第6層 赤褐色土 (焼土粒・粘土小ブロック多量。しまりやや強い、焼土部内埋戻土上。)
 第7層 灰色粘土 (粘土小ブロック多量。焼土粒少量混入。しまり強い、カマダ敷床材。)
 第8層 灰色粘土 (粘土小ブロック多量混入。しまりやや強い、カマダ敷方層上。)
 第9層 灰色粘土 (粘土土体。焼土粒微量混入。しまりやや強い、御道部露出の上。)
 第10層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。ロームブロック多量混入。しまりやや強い、カマダ敷方層上。)
 第11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。ロームブロック少量混入。しまりやや強い、カマダ敷方層上。)
 第12層 灰色粘土 (粘土粒多量混入。しまりやや強い、カマダ敷方層上。)

L=86.1m

第43図 砂田姥沼遺跡1区 S1-11実測図



第44図 砂田姥沼遺跡1区 S1-11出土遺物

底面まで29.2 cmと掘り込まれている。入口関連施設 南壁際中央部にあるP2・P3としたピットは、配置から2つとも入口に関連するピットと考えられる。P2は南壁際に接しており、長軸48×短軸19×深さ14.8 cmの東西方向に長い楕円形で、覆土は第10・11層の自然堆積である。P3はP2の北に連なっており長軸28×短軸21 cm×深さ30.0 cmの楕円形をしている。壁周溝 北壁際～西壁際に巡るものをD1、南西隅～南壁西の壁際に巡るものをD2、南壁中央～南東隅の壁際に巡るものをD3、東壁～北壁の壁際に巡るものをD4とした。D1とした壁周溝の幅は12～21 cm、深さ10.6 cm、壁周溝の覆土はAラインの第5層が相当する。D2の幅は13～19 cm、深さ10.5 cm、D3の幅は13～14 cm、深さ11.1 cm、D4の幅は13～16 cm、深さ11.4 cmを測る。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは50 cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.20 m×東西0.95 mである。カマドの構造は住居貼床である第12層の敷設後、カマド掘方を形成し、第8・10層を充填してその上面を火床面としている。煙道部は第9層で裏込めし、火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。天井部材などは第1・2・5・6層が相当しカマド内に崩落している。出土遺物 本建物の遺物出土量は少ない。取り上げ遺物は11点しかない。この他に覆土から36点が出土している。そのうち、ハケメ調整が施された甕の胴部破片を含む28点が出土している。僅かではあるが高坏の脚部片も混入している。出土状況は建物跡の中央部に主に遺物は確認されている。遺物のほとんどが床面直上若しくは床面から出土したものである。図示し得たものは模倣坏(Na1・2・3)、短脚高坏(Na4)の4点である。模倣坏、編物石の大半は覆土からの出土である。遺物の遺存状態は悪く、完形品のものはない。模倣坏の蓋模倣形(Na1・3)のうち、Na1の底部はヘラケズリが施され、Na3はやや扁平な形状をしている。Na1・3とも平底化している。模倣坏身模倣形(Na2)の体部から底部にかけてはNa1よりも球状に調整されている。内外面とも漆仕上げである。低位脚の高坏(Na4)は、口径が12.2 cmになり小型化が進んでいる。内面にミガキが施されている。本遺構の時期は、坏類は7世紀代の内面調整が減少してくる段階に位置付けられる。坏類の内面調整にミガキがみられていないことや、短脚高坏の口径が小型化していることから、古墳時代後期(7世紀初頭)に位置付けられる。

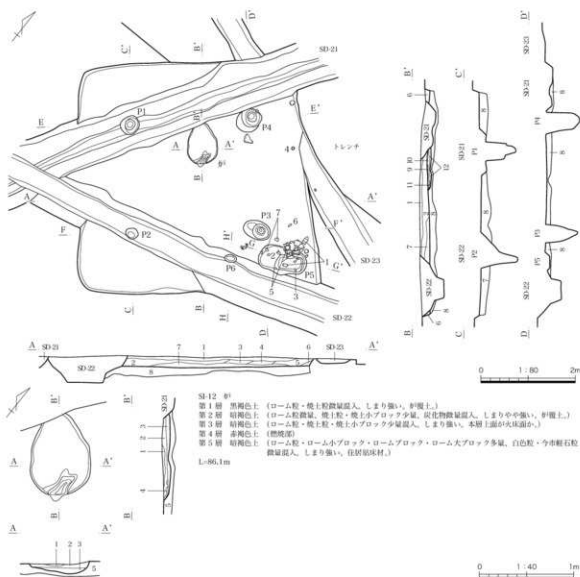
第14表 砂田姥沼遺跡1区 S1-11出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

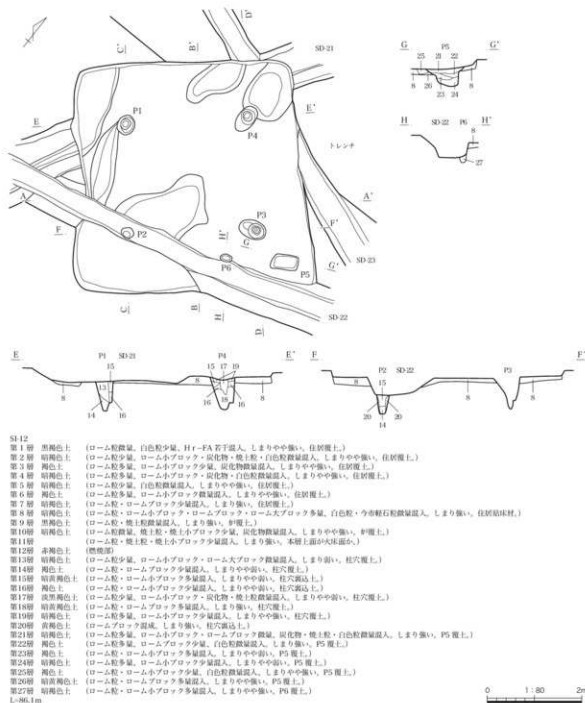
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土器 坏	口12.6 高4.5	口縁部内外面ナデ後、横方向のヘラケズリ。体部～底部外面ヘラケズリ、内面摩耗(ナデ)。模倣坏の蓋模倣形。口縁部内面塗上げ。体部外面に褐色のヒビ割れ	褐色 小砂粒・小礫・赤色粒・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部1/3、体部1/3残存 No.1
2 土器 坏	口10.8 高4.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面不定方向のヘラケズリ、内面ナデ。模倣坏の身模倣形。口縁部～底部外面、口縁部～体部内面塗上げ	褐色 小砂粒・赤色粒少量 焼成：良好	床面直上 口縁部2/3、体部3/4残存 No.2
3 土器 坏	口12.4 高4.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横なし斜方向のヘラケズリ、内面ナデ。模倣坏の蓋模倣形。口縁部～体上部外面・口縁部～体部内面にかけて漆仕上げ。手持ちヘラケズリ	(外)にふい・褐色(内)褐色 赤色粒少量、小砂粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部1/4、体部1/4残存 No.3
4 土器 高坏	口12.2 高6.4 新径(7.2)	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向のヘラケズリ後縦方向のヘラケズリ、内面ヘラミガキ。脚部外面縦方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。底部内面ヨコナデ。短脚高坏、口縁部～体上部外面、口縁部～体部内面にかけて漆仕上げ	褐色 小砂粒少量、小礫・赤色粒・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 体部3/4、脚部3/4、断面一部残存 No.4・9・11

SI-12 (第45～47図、第15表、図版九・一〇・六二・六三)

概要 本遺構は1区の中央部、SI-10の南、SI-11の東に位置している竪穴建物跡である。建物の北東隅—西壁中央、南東隅—西壁中央にかけてSD-21・22・23によって掘方面まで重複されている。時期は本遺構が最も古い段階である。 **位置** 101・102—37グリッドに位置する。確認面標高は85.922 m～85.884 mである。 **平面形・規模** 南北(北東辺)4.82 m×東西(北西辺)4.89 mの隅丸方形の竪穴建物である。南壁(南東辺)に直交する軸線はN-40°-Wである。 **覆土** 堆積状況は東西・南北方向のセクションによると概ねレンズ状の堆積をしており、第1～第6層の自然堆積である。 **壁** 床面からの残存壁高は8.7 cm～18 cmで、床面よりやや弧状に外傾して立ち上がる。 **床** 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方理土は第8層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方面にはP3周辺、北西隅、北東壁に多少の凹凸が確認されている。 **柱穴** 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。柱痕は確認されていない。なお、P1・P2はSD-21・22によって削平されている。P1は径42×40×深さ[63.5]



第45図 砂田姥沼遺跡1区 SI-12実測図(1)



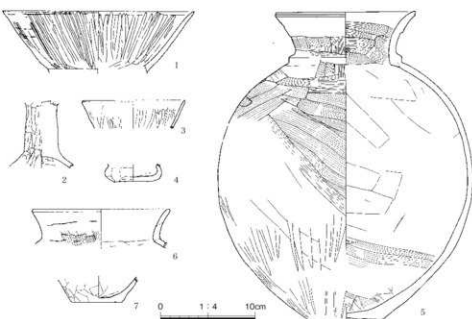
第46図 砂田姥沼遺跡1区 S1-12実測図(2)

cm, P2は径26×22×深さ[36.9]cm, P3は径58×38×深さ65.2cm, P4は径54×48×深さ66.1cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.32m, P2-P3間が2.72m, P3-P4間が2.38m, P4-P1間が2.58m測る。4本の主柱穴東西方向に長い長方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居南東隅に位置している。平面形は長軸102cm×短軸59cmの不整な隅丸長方形で、床面から底面まで44.7cmと深く掘り込まれている。底面は平坦である。入口関連施設 南壁寄りの東部、P3・P5近辺にあるP6としたピットは、長軸25×短軸15×深さ[18.4]cmの楕円形で、SD-22によって削平されている。そのため確認できた覆土は第27層だけである。配置的に入口ピットと考えている。炉 跡跡は中央部の北寄りに位置しており、

主柱穴(P1-P4)

の主軸よりも南側にある。長軸0.86×短軸0.63m、深さ7.7cmになる。火床面については第3層が掘方埋土で、この層の上面が火床面となる。南側には焼土ブロックが火床面上に認められる。

出土遺物 本建物の遺物出土量はSDに重複されている



第47図 砂田姥沼遺跡1区 S1-12 出土遺物

ためが少ない。取り上げ遺物として23点。この他に覆土から27点が出土し、坏・高坏の体部破片・甕の胴部破片が出土している。これらのうち、図示し得たものは7点である。出土状況は建物跡の南東隅に集中している。これらの遺物のうち、床面直上若しくは床面から出土したものは、高坏脚部(Na 2)、埴(Na 4)、甕(Na 5・6・7)である。高坏坏部(Na 1)埴の口縁部(Na 3)は覆土からの出土である。遺物の遺存状態は悪く欠損品のみになる。埴の口縁部破片(Na 3)で、貯蔵穴の覆土中からの出土である。復元口径が11cmの小形になる。高坏の柱状脚(Na 2)で坏部と裾部が欠損する。脚柱部は中実で、屈曲して裾部に至ることから中期的な様相が見て取れる。調整は脚柱部は逆位にして裾部屈曲部から坏部接合部へヘラケズリ。裾部は正位にして屈曲部から裾端部方向へヘラケズリを施す。裾部内面は逆位にして右方向の螺旋状にヘラナデが施されている。高坏の坏部(Na 1)は坏部下端以下が欠損している。内外面とも細かい丁寧なヘラミガキが施されている。破片に僅か外稜の痕跡が残る。中空になるのが古墳時代中期中葉であることから、それ以前の古墳時代中期前半が該当するか。埴の体部(Na 4)は体部の形状はかなり扁平しており算盤玉形である。体部の最大径は5.9cmで小振りになる。頸部内外面には屈曲がみられることから口縁部は、体部最大径よりも大きく開くと推察できる。古墳時代の前期末から中期初頭が想定できるか。単口縁の甕の口縁部～頸部の破片(Na 6)である。口縁端部はつまみ上げ、頸部はくの字に屈曲する。頸部外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。甕の胴部下端～底部の破片(Na 7)は床面からの出土であるが破片のみの接合遺物である。底部は不定方向のヘラナデであろうか。単位の判別が不明瞭で平坦になっている。本建物から出土した遺物には古墳時代前期末葉～中期初頭の時期が想定できる。

第15表 砂田姥沼遺跡1区 S1-12 出土遺物

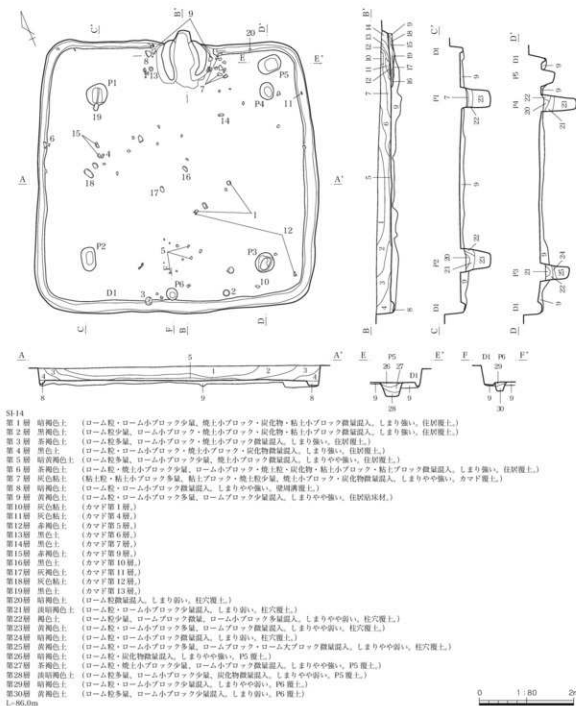
() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 高坏	口径20.4 高16.5	口唇部内外面ヨコナデ、口縁部～体底部内外面光沢のあるヘラミガキ。口縁部～体部外面に接合痕4段あり	淡黄色 小砂粒・小塵・黒雲母片・赤色鉄微量 焼成：良好	覆土 坏部1/4残存 No.6・21・野
2 土師器 高坏	高17.2 最大径4.3	脚柱部外面タテ方向のヘラケズリ、外面下端刷毛目調整、脚柱部内面ヘラナデ、坏部内面不定方向のヘラケズリ	(外)にふい黄褐色(内)黒褐色 小砂粒・小塵少量、石英・黒雲母片微量 焼成：良好	床面 脚柱部のみ残存 No.12

3 土師器 埴	口11.0 高13.0	口縁部内外面ヨコナデ後タテ方向のヘラミガキ。 口縁部内外面に黒痕あり。口胴部一部剥離	にぶい黄褐色 砂粒・小礫少量、石英・雲母片微量 構成：良好	覆土 口縁部の1/4残存 №22・貯
4 土師器 埴	高12.0 最大径5.9	口体部外面ヨコ方向のヘラケズリ。体部内面ヨコナデ。底部部外周光沢のあるヘラナデ。底部内面ヘラナデ。平底。底部外面に黒痕あり。体部外面に黒位のヒビ割れあり。	にぶい黄褐色 小砂粒・小礫少量、石英・赤色粒微量 構成：良好	床面直上 体部～底部残存 №2
5 土師器 甕	口14.8 高13.2 最大径27.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ナデ後刷毛目。胴部上半部外面刷毛目後ミガキ。胴部外面中央部～下半部ケズリ後光沢のあるミガキ。口辺部～胴部内面刷毛目。胴部内面上部ナデ・ヘラナデ。中央部ヨコ方向のヘラケズリ。下半部～底部刷毛目。胴部中央部～底部に黒痕	明褐色 小砂粒多量、小礫・赤色粒・白色粒少量 雲母片微量 構成：良好	床面 口縁部3/4、胴部1/3、底部1/2 残存 №7・9・10・11・18・19・21
6 土師器 甕	口14.0 高14.1 最大径21.0	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜方向の刷毛目。調整。胴部内面ヨコ方向のヘラケズリ。口縁部外面に輪轡みね2段	にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英・黒雲母片微量 構成：良好	床面 口縁部と胴部の1/4残存 №5
7 土師器 甕	高12.7 底5.3	胴部下縁外面斜方向のヘラケズリ。胴部内面放射状のヘラナデ。底部外面不定方向のヘラナデ。底部は平底である。胴部外面に黒痕	(外) にぶい黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・石英少量、小礫・黒雲母片・赤色粒・白色粒微量 構成：良好	覆土 胴部下端の一部、底部残存 №14・19

S1-14 (第48～50図、第16表、図版—○・—・六三)

概要 本遺構は1区の中央部のやや南、SX-28の南に位置する竪穴建物跡である。位置 100-36グリッドに位置する。確認面標高は85.918m～85.775mである。平面形・規模 南北5.64m×東西5.91mの東西方向にやや長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-22°-Eである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第6層の自然堆積である。第10～14層はカマドの覆土に対応する。壁 床面からの残存壁高は17.6cm～39cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方土上は第9層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方面には多少の凹凸があるが均一的に掘り込まれている。また東壁際は大きく掘り込まれ一段低くなっている。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形はP2の不整形な隅丸長方形を除けば、概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。柱痕はすべての柱穴で確認できなかった。P1は径49×33×深さ61.9cm、P2は径49×29×深さ63.0cm、P3は径47×38×深さ60.8cm、P4は径37×30×深さ74.2cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が3.42m、P2-P3間が3.72m、P3-P4間が3.56m、P4-P1間が3.62mを測る。4本の主柱穴は東西方向に長い長方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸50cm×短軸34cmの隅丸長方形で、床面から底面まで29.0cm。底面は平坦に掘り込まれている。入口関連施設 南壁際中央部にあるP6としたピットは長軸24×短軸22×深さ18.5cmの円形で、覆土は第29・30層である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 D1とした壁周溝の幅は12～29cm、深さ12.4cmのカマドを除く壁際に全周する。壁周溝の覆土はA・Bラインの第8層が相当する。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは28cmと浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.23m×東西1.25mである。カマドの構造は住居貼床である第16・17層の敷設後、カマド掘方を形成し、第14・15層で袖の基底とし、第9～13・17層で掘方を充填している。第9層の上面を火床面としている。煙道部は火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。袖部は基底とした第14・15層の上に第8層で形成している。天井部材などは第3～5層が相当しカマド内に崩落している。出土遺物 本建物の遺物出土量は多く、取り上げ遺物は75点に及ぶ。この他に覆土から228点と多数出土し、そのうち、甕の胴部破片が138点と最も多量に、次いで環の口縁部や体部片が72点と多く出土している。僅かではあるが高環脚部片や甕の底部片も混入している状況である。

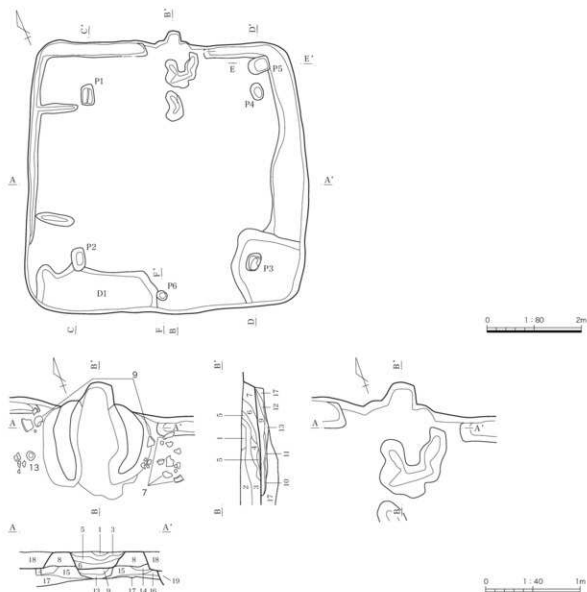


第48図 砂田姥沼遺跡1区 SI-14実測図(1)

出土状況は建物の全面で確認されているが、主としてカマド前面及び周辺部に集中箇所が片寄る。これらの遺物のうち、床面直上若しくは床面から出土したものは、須恵器の坏 (No. 1)、模倣坏 (No. 2・4・5)、甕 (No. 8・9)、甕 (No. 12)、手捏土器 (No. 13)、編物石 (No. 14・15)、敲石 (No. 16)、磨石 (No. 17・18)、台石 (No. 19・20) の15点である。短脚高坏 (No. 6) は覆土からの出土である。

床面直上で出土した須恵器の坏 (No. 1) はロクロナデ調整されており、天井部は丸味を帯び不定方向のヘラケズリが施されている。坏身とも考えられる。在地の須恵器か。模倣坏 (No. 2～5) のうち、半球形 (No. 2・3・4) になる。No. 2・3 は完形で、体部内面の斑状剥離が著しいが、体部内面及び口縁部内外面に僅かに漆が付

着している。No.4は破片であるが内外面は黒色処理が施され、内面には丁寧なヘラナデが施されている。外傾形(No.5)は口縁部～体部の破片である。内面に漆仕上げの痕跡がある。覆土からの出土であるが短脚高環(No



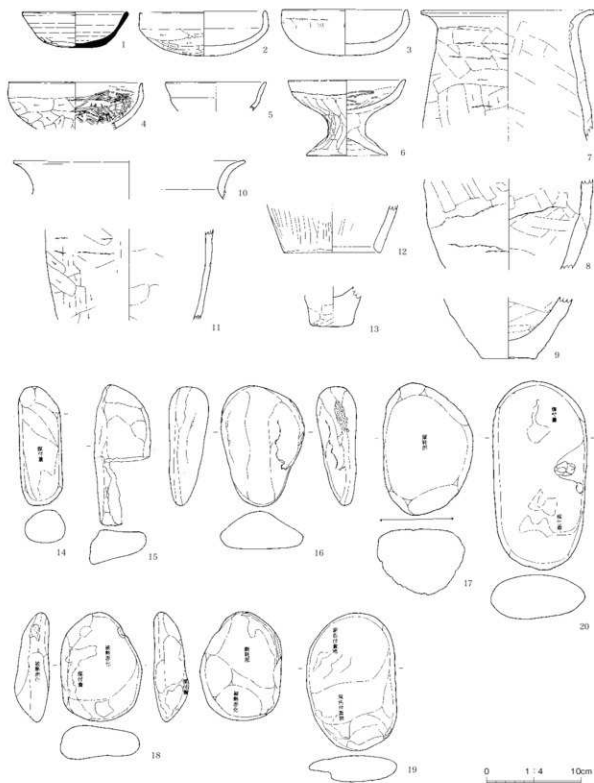
S1-14 カマド

- 第1層 灰色粘土 (粘土粒多量、粘土小ブロック・焼土小ブロック少量、ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、カマド腹上。)
- 第2層 赤褐色土 (ローム粒・焼土小ブロック少量、ローム小ブロック・焼土粒・炭化物・粘土小ブロック・粘土小ブロック微量混入。しまり強い、カマド腹上。)
- 第3層 灰色粘土 (粘土粒・粘土小ブロック多量、粘土小ブロック・焼土粒少量、粘土小ブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、天井部材増着上か。)
- 第4層 灰色粘土 (粘土粒多量、粘土小ブロック少量、焼土小ブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、天井部材増着上か。)
- 第5層 赤褐色土 (粘土粒・粘土粒少量、粘土小ブロック多量、粘土小ブロック微量混入。しまりやや強い、煙突部内壁増着上か。)
- 第6層 黒色土 (炭化物多量、焼土粒・粘土小ブロック微量混入。しまり強い、煙突部内壁上。)
- 第7層 黒色土 (炭化物多量、焼土粒・粘土小ブロック少量混入。しまり強い、煙突部内壁上。)
- 第8層 灰色粘土 (粘土粒・粘土小ブロック多量、粘土小ブロック少量、炭化物微量混入。しまり強い、カマド袖部材。)
- 第9層 赤褐色土 (粘土粒・粘土小ブロック多量、炭化物微量混入。しまりやや強い、煙突部上。)
- 第10層 黒色土 (炭化物多量、粘土小ブロック微量混入。しまり強い、煙突部上。)
- 第11層 灰色粘土 (粘土小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、煙突部上。)
- 第12層 灰色粘土 (炭化物多量、焼土粒・粘土小ブロック微量混入。しまり強い、煙突部上。)
- 第13層 黒色土 (炭化物多量、焼土粒・粘土小ブロック微量混入。しまり強い、煙突部上。)
- 第14層 灰色粘土 (粘土粒・粘土小ブロック少量、粘土小ブロック・焼土粒・炭化物微量混入。しまり強い、カマド袖基底部材か。)
- 第15層 灰色粘土 (粘土粒多量、粘土小ブロック少量、粘土小ブロック・ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、カマド袖基底部材か。)
- 第16層 暗褐色土 (粘土小ブロック少量、ローム粒・粘土粒微量混入。しまりやや強い、左側壁床材か。)
- 第17層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、左側壁床材。)
- 第18層 黒褐色土 (ローム粒・粘土粒微量混入。しまり強い、カマド腹上。)
- 第19層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、壁間溝腹上。)

L=86.0m

第49図 砂田姥沼遺跡1区 S1-14実測図(2)

6) の破片があり、流入したものと考えられる。坏部の形状は模倣坏の半球形に近似する。脚柱部は中実で裾部はハの字状に開く。古墳時代中期後葉か。手握土器の坏形 (№ 13) は口縁部分が欠損している。内面に漆が付着している。長胴甕 (№ 7) は口縁部～胴部上半部の破片接合遺物である。床面及び覆土中からの出土で、



第50図 砂田姥沼遺跡1区 SI-14出土遺物

流入の可能性がある。胴部外面の一部に被熱による赤変部分が認められる。光沢のあるヘラナデで調整されている。長胴甕（No 8・9）とは同一の個体と考えられる。器形はやや下膨れ形の長胴形状が想定できる。底部（No 9）は底面から胴部下端まで被熱による赤変が破片全体にみられる。胴部片（No 8）にも被熱の範囲が確認でき、胴部の中位程度まで被熱されたと考えられる。煤は胴部の中位より上位で確認された。帯状に確認されることから喫水面上の煤である可能性もある。甕の胴部破片（No 11）は器壁の厚みがやや薄く胴部内外面には帯状の煤が付着している。破片下部には被熱による赤変した箇所が見られることから胴部中位より下の破片である可能性がある。喫水面より下の煤であろうか。甕（No 12）は底部片のみである。胴部の内外面とも斑状剥離が著しい。器形はやや下膨れの形状が想定できる。No 14～19は安山岩の石製品である。敲石（No 16）は側面に敲打痕が確認できる。

遺物の共存関係や須恵器の蓋環が多く残存する時期であることから、本遺構の時期は古墳時代後期（6世紀中頃）と考えている。

第16表 砂田姥沼遺跡1区 S1-14出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

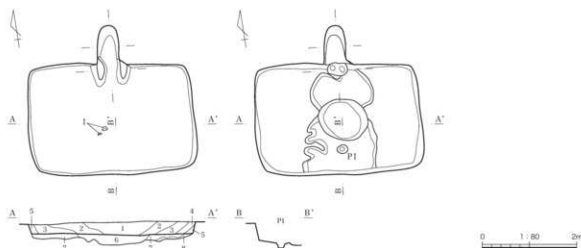
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 目録
1 須恵器 環	口 [11.0] 高 3.7	口縁部外面ヨコナデ、体部口クロナデ、底部不定方向のヘラケズリ。体部～底部内面口クロナデ、 環身	灰色 白色細砂粒・小礫少量、石英・黒雲母片・ 白色粘微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部の1/4、体底部残存 No 22・25
2 土師器 環	口 [13.4] 高 4.7	体部内面の斑状剥離が著しい。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリ。 横断面の半球形 口縁部外面及び口縁部内面・体底部内面に塗仕上げ。	浅黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粒・白色粒少量、石英微量 焼成：良好	床面 完形 No 4
3 土師器 環	口 [13.3] 高 4.9	体部内面の斑状剥離が著しい。厚縁のため体部外面の調整が不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ、底部外面不定方向のヘラケズリか。横断面の半球形 口縁部外面及び口縁部内面に塗仕上げ。	明黄褐色 小砂粒・小礫少量、赤色粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 ほぼ完形 No 18
4 土師器 土師器	口 [14.2] 高 [4.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ。横断面の半球形 口縁部～体部内外面にかけて黒色処理。接合痕口縁部外面に1段。	(外) 灰色 (内) 黒色 小砂粒・小礫少量、石英微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4残存 No 54
5 土師器 環	口 [10.6] 高 [3.1]	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面調整不明瞭。横断面の半球形 口縁部～体部内面に塗仕上げ。	(外) 浅い黄褐色 (内) 浅黄褐色 小砂粒少量、赤色粒・石英微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部一部残存 No 11
6 土師器 高杯	口 [12.4] 高 8.0 底部径 (8.6)	口縁部内外面ヨコナデ、杯部～胴部外面縦方向のヘラケズリ、杯部内面ヘラミガキ、底部内面光沢のあるヘラナデ、底部外面ヨコ方向のヘラナデ。口縁部内外面及び杯部内面・胴部外面に塗仕上げ。底部内面黒色処理。体底部にホゾ。胴部にキリが確認できる。	(外) 明黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・小礫微量 焼成：良好	覆土 杯部1/2残存、胴部1/3残存 No 57
7 土師器 甕	口 [18.4] 高 [13.7]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面光沢のあるヘラナデ。下平ヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ。 胴部内面の一部に覆付着。胴部外面の一部(下平)に被熱による赤変あり。No 8・9と同一個体か	(外) 灰色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・黒雲母片少量、小礫 ・白色粘微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～胴部上平の1/4残存 No 33・36・37・41
8 土師器 甕	高 [9.7]	胴部外面は被熱による赤変。磨滅のため調整不明瞭。胴部外面斜方向のヘラケズリか。胴部内面ヨコ方向のヘラナデNo 7・9と同一個体か	(外) 浅黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒・黒雲母片多量、小礫少量、石英微量 焼成：良好	床面 胴部一部残存 No 62
9 土師器 甕	高 [6.6] 底 5.7	胴部外面は被熱による赤変。磨滅のため調整不明瞭。胴部～底部内面斜方向のヘラナデ、底部外面不定方向のヘラナデNo 7・8と同一個体か	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粒・白色粒多量、黒雲母片・金雲母片少量 焼成：良好	床面直上 胴部下平～底部残存 No 42・61
10 土師器 甕	口 [24.6] 高 [4.1]	口縁部内外面ヨコナデ。 口縁部の内外面に覆付着。	黄褐色 小砂粒・黒雲母片少量、赤色粘微量 焼成：良好	覆土 口縁部の一部残存 No 3

11	土師器 甕	高 19.6 胴径 (17.8)	器面磨耗のため調整不明瞭。胴部外面タテ方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ。胴部外面及び内面に埋付着。褐色層下の埋付。	(外) 浅黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒多量、小礫・赤色粒・白色粒少量 石莖・黒雲母片微量 焼成：良好	覆土 胴部の一部残存 № 28・一括
12	土師器 甕	高 15.1 口径 (10.3)	器面磨耗・現状割離のため調整不明瞭。胴部外面タテ方向のヘラミガキ、内面ヘラナデ。 無底式	浅黄褐色 小礫多量、小砂粒・赤色粒少量 焼成：良好	覆土 残存率：底部の一部残存 № 1・21
13	土師器 手取土器	高 14.3 底 4.5 胴径 6.0	外面ナデ、内面 (指) ナデ、底部外面一定方向のヘラナデ。 円形か	(外) 灰白色 (内) 浅黄褐色 小砂粒少量、小礫型母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部欠損 № 60
14	石製品 編物石	最大長 12.6 最大幅 4.4 最大厚 3.5 重量：355.35	棒状・断面楕円形の自然石。表面に1面に黒色の付着物。有色鉱物を若干含む。やや軟質緻密な安山岩。	灰色	床面 完存 № 72
15	石製品 編物石	最大長 14.8 最大幅 5.9 最大厚 5.5 重量：369.66	棒状・断面三角形の自然石。全面焼熟赤化。2～3mmの石英異品を含む。硬質緻密な安山岩。	灰色	床面 2/3 残存 № 66・67
16	石製品 磨石	最大長 12.7 最大幅 8.8 最大厚 4.2 重量：587.15	2～3mmの石英異品が多い。硬質緻密な安山岩。側面に最長あり。	灰色	床面 完存 № 71
17	石製品 磨石	最大長 13.9 最大幅 9.5 最大厚 7.0 重量：1136.51	平面楕円形で断面は丸味を帯びた三角形。磨り面は一面のみ。多孔質安山岩。	灰色	床面直上 完存 № 71
18	石製品 磨石	最大長 11.4 最大幅 8.6 最大厚 4.0 重量：477.32	磨り面は一面のみ。ほぼ全面に焼熟痕あり。磨り面及び左側面。表面に埋付着が確認される。磨面の縁辺部に明瞭に付着している。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	黄灰色	床面 完存 № 68
19	石製品 台石	最大長 14.7 最大幅 9.4 最大厚 2.8 重量：583.97	平面楕円形の自然石。表面に黒色物の付着。2～3mmの石英異品が多い。硬質緻密な安山岩。	灰白色	覆土 完存 № 65
20	石製品 台石	最大長 19.9 最大幅 10.0 最大厚 4.8 重量：1483.27	楕円形状の自然石。表面に埋付着。2～3mmの石英異品が多い。硬質緻密な安山岩。	灰白色	覆土 完存 № 75

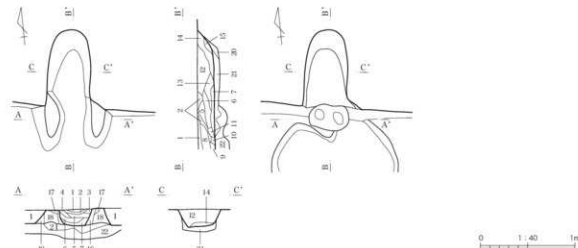
S1ー15 (第51・52図、第17表、図版一一・一二・六三)

概要 本遺構は1区の南部の東壁際に位置する竪穴建物跡で、柱穴や貯蔵穴などの付属施設は確認できない。**位置** 99ー37グリッドに位置する。確認面標高は86.033m～85.930mである。**平面形・規模** 南北2.37m×東西3.43mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-6°-Eである。**覆土** 堆積状況は東西方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第5層の自然堆積である。**壁** 床面からの残存壁高は13.4cm～30.1cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。**床** 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第6～8層で充填されており、これらの層の上面が床面になる。断面観察から掘り方面は中央部が一段凹むように掘り込まれている。**入口関連施設** 南壁寄りの中央部にあるP1としたビットは、掘り方面で確認されたもので長軸22×短軸19×深さ11.1cmの円形である。床面で観察できなかったが、配置的に入口ビットの可能性もある。**カマド** カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは82cmと深く穿っている。カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.30m×東西0.83mである。カマドの構造は住居貼床である第22層の敷設後、カマド掘方を形成し、第20・21層で掘方を充填している。その上面をローム主体の袖部材(第16～19層)で構築している。第21層の上面を火床面としている。煙道部は火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。**出土遺物** 本建物の遺物出土量は少ない。取り上げ遺物は2点のみである。この他に覆土から76点が出土しており、このうち甕の胴部破片が46点、次いで

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査



- S1-15
- 第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・焼土小ブロック・焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第2層 褐色土 (ローム小ブロック多量、ローム粒少量、焼土小ブロック・白色粒・炭化物微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第3層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、ロームブロック少量、炭化物微量混入。焼土粒微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第5層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第6層 褐色土 (ローム小ブロック・ロームブロック多量、ローム粒少量、今市観石粒微量混入。しまり強い、住居層上。)
 - 第7層 暗褐色土 (ローム大ブロック多量、ローム粒少量混入。しまり強い、住居層床材。)
 - 第8層 黄褐色土 (ローム主体、しまり強い、住居層床材か。)
- L=86.1m



- S1-15 カマド
- 第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまり強い、カマド層上。)
 - 第2層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・ローム大ブロック少量混入。しまりやや強い、カマド層上。)
 - 第3層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、カマド薪炭部材の脱落土か。)
 - 第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、カマド薪炭部材の脱落土か。)
 - 第5層 黄褐色土 (焼土粒多量、焼土小ブロック少量、ローム粒・炭化物・炭化粘土粒微量混入。しまりやや強い、天井部材脱落土。)
 - 第6層 赤褐色土 (焼土小ブロック多量、焼土粒・炭化粘土粒少量、炭化物微量混入。しまり強い、天井部材内硬結層土か。)
 - 第7層 黄褐色土 (ローム粒微量、焼土粒多量、炭化物・灰少量混入。しまりやや強い、煙道部混入土。)
 - 第8層 赤褐色土 (ローム粒少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、カマド層上。)
 - 第9層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・粘土粒微量混入。しまりやや強い、煙道混入土。)
 - 第10層 灰褐色土 (灰化粘土小ブロック含む。しまりやや強い、薪炭部材脱落土。)
 - 第11層 赤褐色土 (焼土小ブロック多量、灰少量混入。しまりやや強い、天井部材内硬結層土。)
 - 第12層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、天井部材脱落土か。)
 - 第13層 暗褐色土 (焼土粒多量、焼土小ブロック少量、ローム粒微量混入。しまりやや強い、煙道部混入土。)
 - 第14層 黄褐色土 (ローム粒・焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、煙道混入土。)
 - 第15層 赤褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、煙道混入土。)
 - 第16層 暗褐色土 (ローム粒少量、焼土粒・焼土小ブロック多量、炭化物微量混入。しまりやや強い、地盤内硬の被熱腐層。)
 - 第17層 暗褐色土 (ローム粒多量混入。しまりやや強い、カマド薪炭部材。)
 - 第18層 黄褐色土 (焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘り、薪炭部材。)
 - 第19層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、薪炭部材。)
 - 第20層 明赤褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、カマド薪炭部材。)
 - 第21層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、カマド薪炭部材。)
 - 第22層 褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量混入。しまり強い、住居層床材。)
- L=96.1m

第51図 砂田姥沼遺跡1区 S1-15実測図



第52図 砂田姥沼遺跡1区 SI-15出土遺物

環の口縁部や体部片が26点と出土している。出土状況は建物跡の中央部で遺物は確認されているが、覆土からの出土である。図示し得た遺物は模倣環(№1～3)のみで、模倣環(№1)以外は覆土に2点あるのみである。模倣環(№1)は内轡環である。口縁部外面及び口縁部～体底部の内面にかけて漆仕上げがなされている。底部はヘタレがみられ、内面に凹んでいる。底部は不明瞭な平底化している。内轡環自体の出現時期は7世紀初頭～前葉にかけて出現する。中葉以降主体的な出土量を占める傾向にあるが、本遺構出土の№1は径が小型化し、底面も平底化していることから7世紀末～8世紀初頭が位置付けられるか。蓋模倣形(№2)は内面に黒色処理がなされている。外反形(№3)は内面にミガキ調整がなく、口縁部外面及び口縁部～体部内面に黒色処理がなされている。本遺構の時期は概ね7世紀代、出土遺物の傾向から古墳時代後期の7世紀の後葉に位置付けられる。

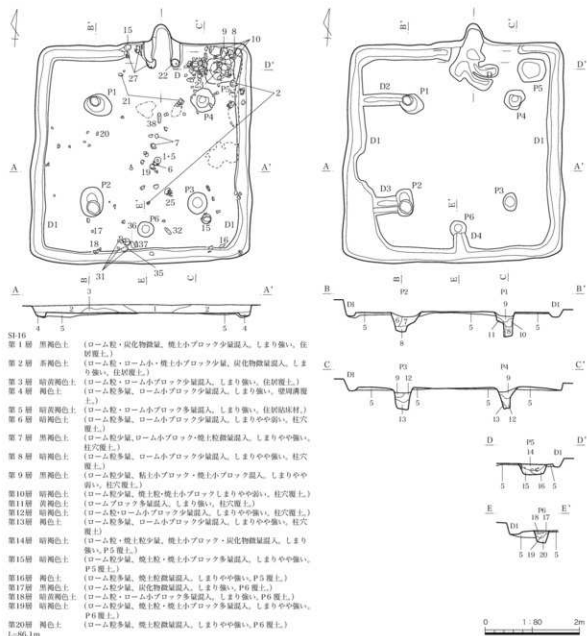
第17表 砂田姥沼遺跡1区 SI-15出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	口10.1 高3.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリ、内面ナデ。内轡環。口縁部外面及び口縁部内面・体底部内面に漆仕上げ。	(外) 灰白色 (内) 浅黄褐色 小砂粒・石英微量 焼成：良好	覆土 完形 №1・2
2 土師器 環	口12.0 高13.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の蓋模倣形、口縁部内面に黒色処理。	浅黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4残存 一括
3 土師器 環	口11.2 高13.5	摩耗のため外面不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の外反形。口縁部と体部との境を明確にするために沈線が施されている。	(外) にぶい・褐色 (内) 黒色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部から体部1/4残存 一括

SI-16 (第53～56図、第18表、図版一二・一三・六三・六四)

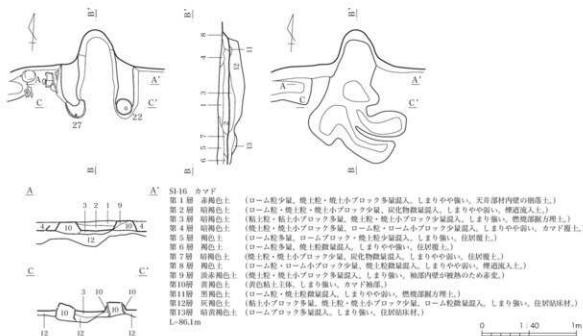
概要 本遺構は1区の南部の南壁寄りに位置する竪穴建物跡である。SI-17・18の西側に隣接する。位置 99-35グリッドに位置する。確認面標高は85.908m～85.748mである。平面形・規模 南北4.66m×東西4.62mの隅丸方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-4°-Wである。覆土 堆積状況は東西方向のセクションによるとほぼレンズ状の堆積をしており、第1・第2層の自然堆積である。壁床面からの残存壁高は0.7cm～22.4cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第5層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は中央部が浅く、壁周溝の掘方が大きく掘り込まれている。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね円形ないし楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。なお、柱痕は確認されていない。P1は径57×46×深さ51.6cm、P2は径62×48×深さ42.9cm、P3は径46×40×深さ46.2cm、P4は径50×50×深さ46.2cm。柱間寸法は柱間隔でP1-P2間が2.24m、P2-P3間が2.20m、P3-P4間が2.20m、P4-P1間が2.26mを測る。4本の主柱穴はほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸59cm×短軸53cmの隅丸長方形で、床面から底面まで21.6cmと掘り込まれた底面は平坦である。入口関連施設 南壁際中央部にあるP6としたピットは、長軸33×短軸33×深さ26.8cmの円形で、覆土は第17～20層の自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 D1とした壁周溝の幅は24～30cm、深さ12.9cmで全周する。壁周溝の覆土はAラインの第4層が相当する。カマド



第53図 砂田姥沼遺跡1区 SI-16実測図(1)

カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは37cmと浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は0.95m×東西0.87mである。カマドの構造は掘方を形成し、袖部芯材の裏を逆位に据えてから住居の掘方埋土である第12層を充填しており、その上層に第3層とした燃焼部の掘方埋土を充填している。この第3層の上面を火床面としている。煙道部は火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。袖部は裏を芯材として据えた後に黄色粘土(第10層)で形成している。出土遺物 本建物の遺物出土量は多い。取り上げ遺物は127点に及ぶ。この他に覆土から380点が出土している。覆土一括遺物には裏の胴部破片が210点と最も多く、次いで環の口縁部片が62点、体部片が49点と出土している。僅かではあるが鉢の口縁部片も混入している。出土状況は建物跡の貯蔵穴周辺、中央部～南東隅の範囲に集中している。このうち、図示し得たものは39点になる。

出土遺物には模倣環の出土量が多く図示し得たものだけでも15点に及ぶ。模倣環の形態も身模倣形(No.1

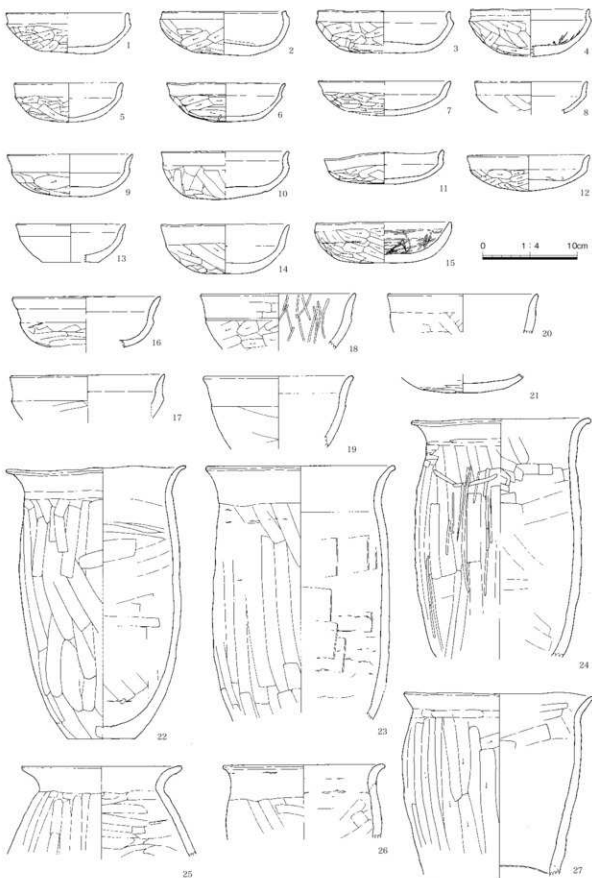


第54図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16実測図(2)

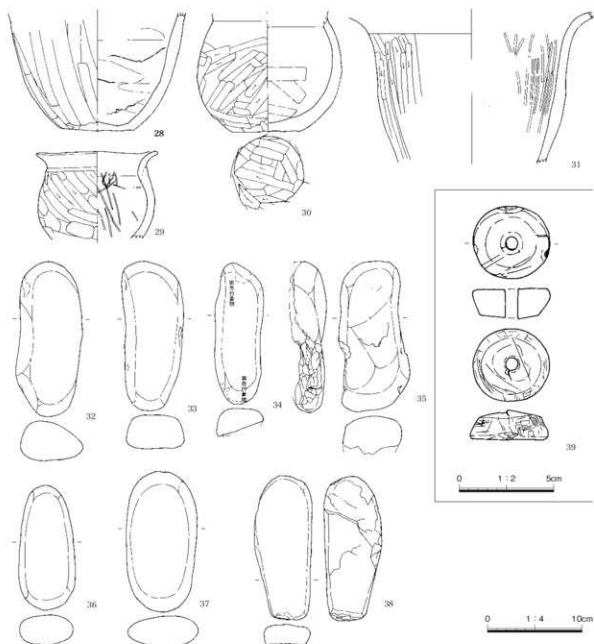
～4)・蓋模倣形 (No. 5～14)・半球形 (No. 15) となる。身模倣形 (No. 1・No. 2) は出土状況から流入遺物と考えている。No. 3 は床面からの出土である。体底部が平坦化し扁平化が進む。No. 4 の口縁部内外面及び体部内面に黒色処理が施されている。蓋模倣形 (No. 5・No. 6・No. 7) も最終堆積土中の出土である。No. 8 は北壁際の床面から出土している。No. 9 は体部内面が黒色処理されている。器面内外とも斑状剥離が著しい。No. 10 も口縁部及び体部の内外に漆仕上げの痕跡が残る。やや体高がある。No. 11 は扁平化し、内面はナデ調整のみである。No. 12 も体高が 3.8 cm とやや扁平化している。体底部内面にはヘラナデが施されている。No. 13 も口径が 11.8 cm と小型化し、体高は 4.1 cm である。特徴的なのは底部が平坦化している。No. 14 は北壁際の床面からの出土であり、本建物に伴うものと考えている。体高は 5.1 cm と高く、体部も丸味を帯びている。内面はナデ調整である。模倣杯の半球形 (No. 15) は床面から出土で、本遺構に伴うものと考えられる。やや扁平化するが、内面に横方向のミガキ痕が確認できる。体底部外面に「+」の線刻あり。鉢 (No. 16～21) の6点ともに流入遺物である。

長胴甕 (No. 22～28) については7点を図示した。No. 22 はカマドの右袖の芯材として使用していた甕である。住居の廃絶後に貯蔵穴側へ破砕されたものが流れ込んでいたものである。甕は逆位でカマドに据えられ口縁部～胴部中位まで被熱赤化している。No. 27 も No. 22 と同様にカマドの左袖の芯材である。胴部下半から底部は欠損している。カマドの廃棄に伴って、破片が貯蔵穴に流入する。口縁部から胴部にかけて被熱赤化している。No. 23 は口縁部の外反は大きくないが胴部最大径よりは口径の方が大きい。底部が欠損している。貯蔵穴付近の覆土から出土している。No. 24 は底部欠損であるが胴部下半は被熱赤化及び磨耗が認められる。出土状況は北壁際から貯蔵穴にかけて破片が接合しており、廃棄時期後に流れ込んだものであろう。No. 26 は口縁部から胴部中位の破片遺物である。貯蔵穴～北壁際の範囲の床面から出土している接合遺物である。胎土は砂粒を多く含んでいる。No. 28 は胴部下半～底部の接合遺物である。いずれも床面からの出土である。長胴甕の胴部下半であろうか。No. 25 と胎土が類似することから、同一個体の可能性がある。

小形甕 (No. 29・30) は2点。No. 29 は口縁部～胴部中位までの破片で底部は欠損している。カマド前から



第55図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16出土遺物(1)



第56図 砂田姥沼遺跡1区 S1-16出土遺物(2)

の出土で接合遺物の出土状況からして流入した可能性が高い。口縁部～胴部の内面は黒色処理、胴部の外面に大きな黒斑が確認できる。胴部最大径よりも口縁部が若干大きい甕である。(No.29)は6段階であろうか。(No.30)は甕の口縁部が欠損している。北壁の床面からの出土で、南壁寄りの破片と接合している。

甕 (No.31) は頸部～胴部の破片である。底部欠損だが形態的に無底式であろう。接合関係が北壁際と南壁際と離れていることから住居廃絶時期に廃棄されたものか。

編物石 (No.34・35) はそれぞれ 1/2 程剥離しているが剥離面は磨滅している。この状態で使用されたものと考えられる。滑石製の紡錘車 (No.39) は貯蔵穴の覆土から出土した。全体的に滑らかに研磨されている。側面は横方向に研磨している。上面及び下面はそれぞれ一定方向の研磨であるため、平坦面が形成されず、凹凸が見られる。上面は研磨方向に対して縁側が高く残されており、下面は穿孔部が残されている。

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査

本住居の時期は、模倣杯の内面の調整が減少することや、(No 1・5・6・7)の4点はいずれも最終堆積土中からの出土で、胎土も類似しており体部内面の調整は認められないこと。横方向のミガキが施されている模倣杯 (No 15) が床面に伴うことから、遺物の時期も古墳時代末期 (7世紀後葉) であろう。

第18表 砂田姥沼遺跡1区 S1-16 出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口13.0 高4.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体底部内面に漆仕上げ。	(外) にぶい褐色 (内) 褐色 小砂粒微量 焼成：良好	覆土 完形 No 34
2 土師器 杯	口13.0 高4.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ヨコ方向のヘラナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体底部内面に漆仕上げ。	(外) 灰褐色 (内) 黒褐色 小砂粒・小礫・石英・金雲母片・赤色粒 微量 焼成：良好	床面直上 3/4 残存 No 27・78
3 土師器 杯	口14.0 高4.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部内面に漆仕上げ。	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量、石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面 3/4 残存 No 113・115・122
4 土師器 杯	口112.0 高15.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ後ヘラミガキ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部内面黒色処理。体部外面焼熟劣化。	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒少量、石英微量 焼成：良好	覆土 1/4 残存 No 86
5 土師器 杯	口11.6 高4.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体底部内面に漆仕上げ。一部体部外面にも漆が付着している。口縁部にややよみあり	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 完形 No 63
6 土師器 杯	口12.0 高4.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面の一部に漆付着。漆仕上げ。口縁部にややよみあり	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 完形 No 35・62
7 土師器 杯	口14.0 高3.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内面及び体底部内面に漆仕上げ。	褐色 小砂粒少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 1/2 残存 No 33・34
8 土師器 杯	口12.0 高4.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部内面に漆仕上げ。	(外) 灰黄色 (内) 黄灰色 小砂粒・石英少量 焼成：良好	床面 1/4 残存 No 87
9 土師器 杯	口13.4 高4.5	体部内外面割離が著しく調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面は黒色処理。	(外) 灰黄色 (内) 灰黄褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面 1/2 残存 No 88
10 土師器 杯	口13.6 高5.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部内面に漆仕上げ。	灰褐色 小砂粒少量、石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面 3/4 残存 No 88・89・120・122・125
11 土師器 杯	口12.8 高3.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部外面に漆仕上げ。	褐色 小砂粒少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	床面 1/2 残存 No 122・124
12 土師器 杯	口13.0 高3.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ヨコナデ、体底部ヘラナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面及び体部外面に漆仕上げ。	にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	床面 1/4 残存 No 108
13 土師器 杯	口11.8 高4.1	体部外面は磨耗のため調整不明瞭 口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内外面に漆仕上げ。	灰褐色 小砂粒・小礫・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	床面 3/4 残存 No 104
14 土師器 杯	口13.6 高5.2	体部外面の一部割離あり 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、体底部内面ナデ。模倣杯の蓋模倣形 口縁部内面及び体部内面に漆仕上げ。口縁部外面に僅かに漆仕上げの痕跡あり。体部外面に縦位のひび割れあり	褐色 小砂粒少量、石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面 一部欠損 No 66

15	土師器 環	口14.2 高4.3	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜方向のヘラケズリ、内面タテ方向のヘラミガキ後ヨコ方向のヘラミガキ。模倣杯の半球形 口縁部内外面に漆仕上げ。体部外面に輪模倣1段あり。体部外面に黒斑。体部外面に「ニ」の模刻。	(外) にぶい・褐色 (内) にぶい・褐色 小砂粒・石莖・赤色粘土微量 焼成：良好	床面 3/4 残存 No. 68
16	土師器 鉢	口15.0 高15.3	体部外面は焼熱劣化及び腐蝕剥離が多い。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面、口縁部内外面及び体部内面に漆仕上げ。	にぶい・黄褐色 小砂粒少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 1/4 残存、底部欠損 No. 65
17	土師器 鉢	口16.4 高14.6	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。器面に現状剥離が確認でき、口縁部内面は顕著。	(外) にぶい・黄褐色 (内) にぶい・褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片微量 焼成：良好	覆土 1/4 残存、底部欠損 No. 12
18	土師器 鉢	口16.4 高15.9	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面ヘラナデ。体部外面ヘラケズリ。体部内面ナデ後ヘラミガキ。口縁部内外面に漆仕上げ。	黄灰色 小砂粒少量、小礫・石莖・雲母片・赤色粘土微量 焼成：良好	床面 1/4 残存、底部欠損 No. 13
19	土師器 鉢	口16.0 高17.7	口縁部外面ヘラナデ後ヨコナデ。体部外面斜方向のヘラケズリ。口縁部内面～体部内面ヨコナデ。口縁部～体部外面に髹付着。	にぶい・黄褐色 小砂粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 1/4 残存、底部欠損 No. 36
20	土師器 鉢	口16.0 高14.2	口縁部内外面つよいヨコナデ。体部外面斜方向のヘラナデ。体部内面ヨコナデ。口縁部～体部内面に髹付着。	黄灰色 小砂粒微量 焼成：良好	覆土 1/4 残存、底部欠損 No. 7
21	土師器 鉢	高11.9 底9.0	底部外面ヨコ方向のヘラケズリ。底部内面ナデ。底部外面の一部に髹付着。	(外) 灰黄褐色 (内) 黄灰色 小砂粒・赤色粘土微量 焼成：良好	床面 底部3/4 残存、体部欠損 No. 74
22	土師器 甕	口19.0 高29.0 最大径17.0	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ後に横方向のヘラナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。胴部上半内面ヘラナデ。胴部下半内面ヘラケズリ。口縁部～胴部外面に髹付着。口縁部～胴部中位まで焼熱劣化。	にぶい・黄褐色 小砂粒・雲母片少量、小礫・石莖・白色粘土微量 焼成：良好	床面 カマド下敷芯材 ほぼ完全 No. 16・57・103・106・127・115
23	土師器 甕	口20.0 高17.1 最大径18.7	甕底のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。胴部内面ヨコ方向のヘラナデ。口縁部～胴部外面に黒斑。胴部に粘着痕あり(外面3段、内面5段)。	にぶい・黄褐色 小砂粒・石莖・白色粘土微量 焼成：良好	覆土 口縁部～胴部中位残存。胴部下半～底部欠損 No. 101A・101B
24	土師器 甕	口19.0 高125.5 最大径17.6	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ後に横方向のヘラミガキ。胴部タテ方向のヘラケズリ後ヘラミガキ。胴部内面ヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。胴部内外面及び口縁部内面に髹付着。	褐色 小砂粒少量、石莖少量、小礫・雲母片・白色粘土微量 焼成：良好	床面 口縁部3/4、胴部1/2 残存、底部欠損 No. 90・91・92・119・123
25	土師器 甕	口17.0 高10.6 最大径17.6	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面タテ方向の光沢のあるナデ。胴部内面ヨコ方向のヘラナデ。口縁部～胴部外面に黒斑あり。	(外) にぶい・褐色 (内) 褐色 小砂粒・石莖・雲母片・赤色粘土・白色粘土微量 焼成：良好	覆土 口縁部1/2、胴部1/4 残存、胴部～底部欠損 No. 40
26	土師器 甕	口17.2 高17.8	器面甕底のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜め方向のヘラケズリ。胴部内面ナデ後ヘラナデ。	明赤褐色 小砂粒少量、小礫・石莖・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～胴部中位残存。胴部下半～底部欠損 No. 94・114・117・118・120
27	土師器 甕	口20.0 高19.5 最大径18.2	甕底のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面ヨコナデ後に横方向のヘラナデ。胴部タテ方向のヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。口縁部外面に髹付着。胴部外面に黒斑。器面焼熱劣化。	(外) 褐色 (内) にぶい・黄褐色 小礫多量、小砂粒少量 焼成：良好	床面直上 カマド下敷芯材 口縁部～胴部中位残存。胴部下半～底部欠損 No. 60・61・120・126・一括
28	土師器 甕	口12.5 高19.2 底7.6	胴部外面タテ方向のヘラケズリ。胴部内面ヨコ方向のヘラナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。胴部外面に黒斑あり。	褐色 小砂粒・小礫少量、石莖・雲母片・赤色粘土微量 焼成：良好	床面 胴部下半～底部残存。口縁部～胴部上半欠損 No. 83・112・一括
29	土師器 甕	口12.8 高19.2 最大径12.4	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面斜め方向のヘラケズリ。胴部内面ナデ後ヘラミガキ。口縁部～胴部内面黒斑。胴部外面に黒斑あり。	黄褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粘土微量 焼成：良好	床面 口縁部～胴部1/2 残存、底部欠損 No. 48・59
30	土師器 甕	口16.4 高17.4 最大径15.2	胴部外面斜め方向のヘラケズリ。胴部下縁はヨコ方向のヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。底部内面ナデ。胴部外面中位に黒斑あり。	(外) にぶい・黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・小礫少量、雲母片微量 焼成：良好	床面 胴部～底部残存。口縁部欠損 No. 17・24・102
31	土師器 甕	高15.9	頸部ヨコナデ。胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ナデ後ヘラミガキ。形状から無底式か。胴部外面に黒斑あり。	褐色 小砂粒少量、小礫・石莖・雲母片微量 焼成：良好	床面 胴部1/4 残存。口縁部～底部欠損 No. 14・18・19・61・一括
32	石製品 陶器石	最大長16.3 最大幅6.5 最大厚4.2 重量：814.57	棒状・断面三角形の自然石。表面に黒色の付着物あり。有色粘物を多く含む。破損跡的な山岩	灰黄色	床面 完全 No. 38

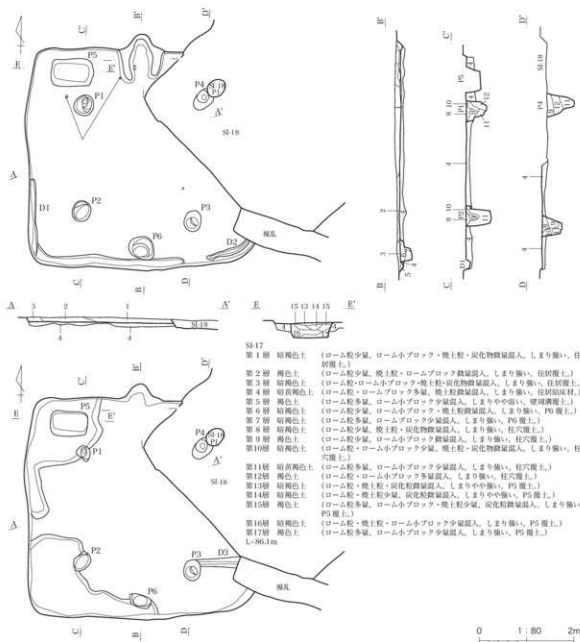
33 石製品 編物石	最大長 15.7 最大幅 6.7 最大厚 3.6 重量: 577.01	棒状・断面四角形の自然石。有色鉱物を含む。硬い。黄褐色 質緻密な安山岩	灰白色	床面 完存 No. 116
34 石製品 編物石	最大長 14.9 最大幅 5.1 最大厚 2.9 重量: 787.99	棒状・断面三角形の自然石。表面に黒色の付着物あり。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩	灰白色	覆土 完存 一括
35 石製品 編物石	最大長 15.6 最大幅 6.2 最大厚 4.0 重量: 564.52	棒状・断面四角形の自然石。石の両側の中央に斜溝調整痕が認められる。全体に黄褐色が認められる。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩	灰黄色	床面 完存 No. 20
36 石製品 編物石	最大長 13.2 最大幅 5.6 最大厚 3.1 重量: 374.05	棒状・断面楕円形の自然石。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩	灰白色	覆土 完存 No. 21
37 石製品 編物石	最大長 14.3 最大幅 7.5 最大厚 3.2 重量: 589.77	棒状・表面に黒色の付着物あり。断面楕円形の自然石。有色鉱物多くを含む。硬質緻密な安山岩	灰白色	床面 完存 No. 22
38 石製品 編物石か	最大長 15.2 最大幅 6.1 最大厚 2.2 重量: 292.69	棒状・断面四角形の自然石。1～2mmの石英斑を微量。硬質緻密な安山岩	灰白色	床面 3/4 残存 No. 43
39 石製品 結縛車	上径 4.0 下径 3.0 厚 1.6 孔径 0.68 重量: 38.08	磨石製 断面台形		床面 完存 No. 111

S1-17 (第57・58図、図版一三・一四)

概要 本遺構は1区の南部の南壁寄りに位置する竪穴建物跡S1-16の東側に隣接しているS1-18によって建物跡の北東隅～東壁にかけて重複されている。なお、重複関係から本遺構の方が古い。位置 95-35・36グリッドに位置する。確認目標高は85.905m～85.816mである。平面形・規模 南北4.52m×東西4.72mの東西方向にやや長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-4°-Wである。

覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第3層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は0.6cm～14.1cmで南東方向の壁高が低くなる。壁は床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第4層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は多少の凹凸はあるが、均一的に掘られている。北西隅と南西隅が一段大きく掘り込まれている。

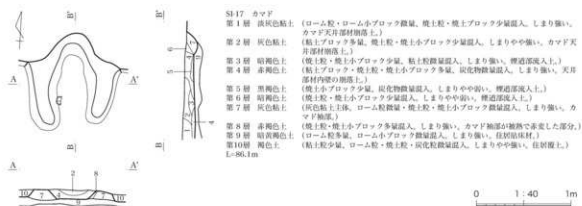
柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は円形ないし楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。いずれからも柱痕は確認できなかった。なお、P4の上部はS1-18によって削平されている。P1は径44×40×深さ40.8cm、P2は径47×40×深さ51.8cm、P3は径44×36×深さ42.1cm、P4は径39×33×深さ54.7cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.30m、P2-P3間が2.40m、P3-P4間が2.58m、P4-P1間が2.52mを測る。4本の主柱穴はP1-P3間が4.14m、P3-P5間が4.04m、P5-P7間が3.94m、P7-P1間が3.98mのほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北西隅に位置している。平面形は長軸90cm×短軸57cmの隅丸長方形で、床面から底面まで30.6cmと掘り込まれた底面は平坦である。覆土は第13～17層が相当し自然堆積である。入口関連施設 南壁際中央部にあるP6としたピットは、長軸57×短軸46×深さ20.8cmの楕円形で、覆土は第6・7層の自然堆積である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 壁周溝には西壁～南壁の壁際に配されているD1と、南東隅の壁際に配されたD2がある。D1の幅は14～26cm、深さ9.1cm。D2の幅は13cm、深さ5.2cm。D1



第57図 砂田姥沼遺跡1区 S1-17実測図(1)

の覆土はBラインの第5層が相当する。間仕切溝 建物の掘方面からD3が確認されている。D3は壁周溝からP3に対して西方向に連結する。規模は長軸[96]cm×短軸17×深さ6.6cmである。覆土は未観察であるが床面から掘り込まれていた可能性もある。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは35cmと浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.04m×東西1.00mである。カマドの構造は住居の貼床材(第9層)敷設した後、第7層からなる袖部材で構築している。床面をそのまま火床面としている。煙道部は火床面から緩やかに外傾して立ち上がる。出土遺物 本建物の遺物出土量は非常に少ない。取り上げ遺物としては4点ある。この他に覆土から12点が出土している。甕の胴部・環の体部が見受けられるが、何れも小片ばかりで図示するに至らなかった。また、縄文・弥生土器の混入がみられる。

本遺構からは時期を示せる遺物は確認できなかったが、建物の形状やカマドの構造から古墳時代の中～後期の範疇であると考えられる。



第58図 砂田姥沼遺跡1区 S1-17実測図(2)

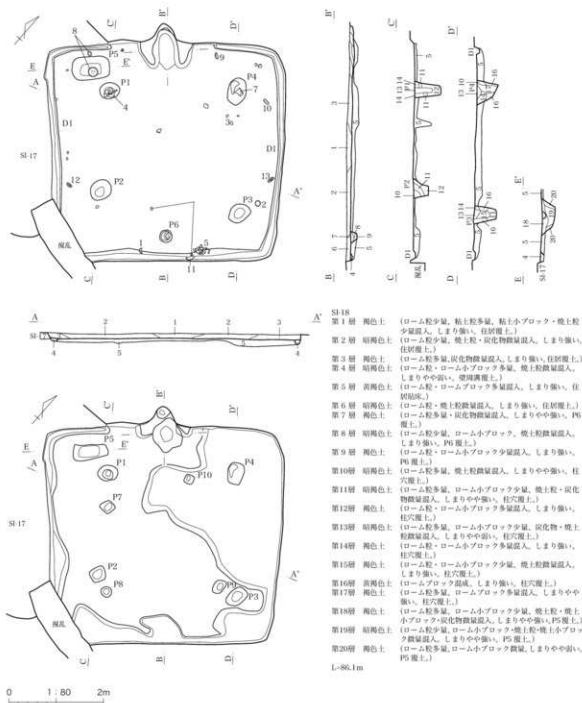
S1-18 (第59～61図、第19表、図版一四・一五・六四)

概要 本遺構は1区の南部の南壁寄りに位置する竪穴建物跡である。S1-17の北東隅～東壁を重複している。重複関係は本遺構の方が新しい。確認面からの掘り込みは浅い。なお、南西隅は掘乱されている。位置 98-36グリッドに位置する。確認面標高は85.843m～85.764mである。平面形・規模 南北4.58m×東西5.05mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-42°-Wである。

覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションによるとレンズ状の堆積をしており、第1～第3・6・7層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は1.8cm～17.1cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第5層で充填されており、この層の上面が床面である。断面観察から掘り方は中央より西側はやや凹凸があるものの均一的に掘り込まれており、中央よりも東側は一段深く掘り込まれている。柱穴

4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。掘り方は共に大きく床面からも深い。P1・P3・P4に第13・15・17層とした柱痕が確認されている。第11・12・14・16層は柱の裏込め土である。P1は径44×32×深さ53.4cm、P2は径47×41×深さ32.8cm、P3は径48×36×深さ48.4cm、P4は径59×37×深さ44.3cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.20m、P2-P3間が2.98m、P3-P4間が2.70m、P4-P1間が2.68mを測る。P1-P2間が狭いため、東側に間く台形状に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北西隅に位置している。平面形は長軸80cm×短軸47cmの隅丸長方形で、床面から底面まで26.6cm。掘り込まれた底面はやや丸味を帯びるが平坦である。覆土は第18～20層。第18層に土器が混入している。入口関連施設 南壁際中央部にあるP6としたピットは長軸27×短軸25×深さ14.0cmの円形で、覆土は第7・8層の堆積である。配置的に入口ピットと考えている。ピット P7～P9は掘り方で確認できたピットである。建物に伴うものかそれ以前のものか判断しかねる。P7はP1-P2間に位置するピットで長軸25×短軸24cmの平面形は隅丸方形で掘り込みは32.0cm。P8はP2の南側に位置するピットで長軸23×短軸22cmの円形。掘り込みは15.9cm。P9はP3の西側に位置するピットで長軸32×短軸21cmの楕円形をしている。掘り込みは17.1cm。P10はP4-P1間に位置するピットで長軸19×短軸18cmの隅丸方形。掘り込みは22.6cmを測る。

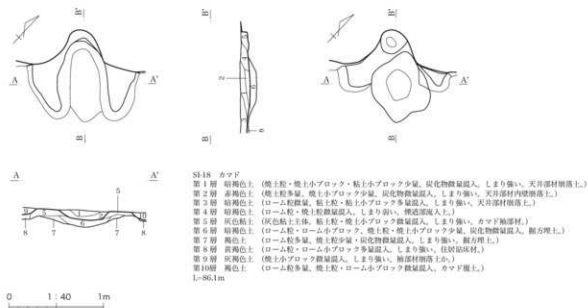
壁周溝 D1とした壁周溝の幅は12～27cm、深さ14.9cmで南西隅が掘乱されるが全周するものとする。



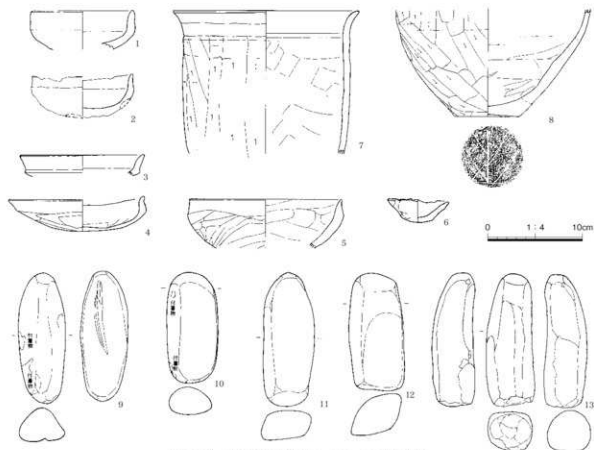
第59図 砂田姥沼遺跡1区 SI-18実測図(1)

壁周溝の覆土はA・Bラインの第4層が相当する。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは39cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.19m×東西0.97mである。カマドの構造は、楕円形の掘方に掘方埋土の第7・8層を充填して形成している。その上面に灰色粘土(第5層)からなる袖部材を構築している。なお、第6層上面が火床面となる。煙道部は火床面からほぼ直角的に若干傾して立ち上がる。出土遺物 本建物の遺物出土量は多い。取り上げ遺物としては27点ある。この他に覆土から82点が出土している。そのうち甕の胴部破片が46点、次

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査



第60図 砂田姥沼遺跡1区 SI-18実測図(2)



第61図 砂田姥沼遺跡1区 SI-18出土遺物

いで環の体部片が13点となる。覆土には甗の胴部破片も混入していた。出土状況は建物の中央部よりも壁際に片寄る傾向が見られる。図示し得た遺物は床面から出土している。

南壁際から出土した模倣環の蓋模倣形(Na1)の器面は全体的に被熱剥離している。口縁端部も磨耗・剥

離している。口縁部内外面に漆仕上げの痕跡がある。口縁部長は体部とほぼ同じくらいであること、体部内面がナデ調整であることから古墳時代後期（6世紀後半）に位置付けられるか。模倣半球形（№2）の外表面は被熱のための剥離が体部全面に及んでいる。内面は斑状剥離が確認される。模倣外傾形（№3）は小破片のため調整等は不明であるが、外面には僅かに赤彩の痕跡が確認できる。模倣半球形（№4）は図面右側の口縁～体部には歪みを確認される。口縁部内外面及び体部の内面には黒色処理が施され、体部も扁平化している。小型の鉢（№5）は残存する口縁部外表面はヨコナデであるが、ヨコナデ後にヘラナデされている。口縁部がやや外傾し内面にはヘラナデが残る。手捏土器（№6）は、環形で1/2ほどの残存である。北壁際の床面で出土している。長胴甕（№7）はP4の覆土で出土したもので、外面にはケズリ調整が施されている。甕（№8）は胴部下半～底部で、貯蔵穴の縁辺に底部が、貯蔵穴の覆土中に胴部下半がそれぞれ出土している。出土状況から流入した可能性も考えられる。甕の内面には斑状剥離が確認できるが煤等は付着していない。外表面は被熱による赤化が確認できる。底部には木葉痕が確認できる。

編物石（№9～12）のうち、№9の裏面に研磨痕が残る。3mmほど研磨されており、編物石から砥石としての転用されたものか。砥石（№13）の下端部に敷き痕が確認できる。

本住居の時期は、模倣杯の形状や長胴甕の口縁部径が胴部径よりも上回っており、胴部下半へ至る形状は緩やかに丸味を帯びる状況であることから、古墳時代後期（6世紀後半）に相当する。

第19表 砂田姥沼遺跡1区 S1-18 出土遺物

〔 〕：推定値 〔 〕：残存値

番号 種類 部類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土器器 杯	口 [10.8] 高 [4.1]	体部器面の剥離が著しいため調整不明。内面斑状剥離あり。口縁部内外面ヨコナデ。模倣杯の蓋模倣。口縁部内外面に漆仕上げ。器面剥離が著しい。内面斑状剥離あり。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。模倣杯半球形口縁部内外面に漆仕上げ。	浅黄色 小砂粒・赤色粘微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部 1/3 残存 № 11
2 土器器 杯	口 10.8 高 4.6	器面剥離が著しい。内面斑状剥離あり。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。模倣杯半球形口縁部内外面に漆仕上げ。	浅黄色 小砂粒・黒炭母片少量・赤色粘微量 焼成：良好	床面 ほぼ完形 № 13
3 土器器 杯	口 [13.2] 高 [2.1]	厚尺のため外表面不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外表面ヘラナデ。内面ナデ。模倣杯の外反形。口縁部と体部との境を明瞭にするために沈線が施されている。	(外) 褐色 (内) にふい・黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粘微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部一部残存 № 16
4 土器器 杯	口 14.1 高 3.8	厚尺のため外表面不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外表面ヘラナデ。内面ナデ。模倣杯の外反形。口縁部と体部との境を明瞭にするために沈線が施されている。	(外) 褐色 (内) にふい・黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粘微量 焼成：良好	覆土 口縁部 1/3 欠損 № 1・5・P2
5 土器器 鉢	口 [16.2] 高 [6.1]	口縁部外表面ヨコナデ。内面ヨコナデ後丸沢のあるヘラナデ。体部内外面ヘラナデ。口縁部内外面に覆付着。	褐色 小砂粒・白色粘微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部 1/2 残存、底部欠損 № 12
6 土器器 手捏土器	口 6.5 高 2.6 底 3.3	内外面とも (指) ナデ。口縁部に覆付着か。	(外) にふい・黄褐色 (内) 灰黄褐色 小砂粒・石英・白色粘微量 焼成：良好	床面 1/2 残存 № 6
7 土器器 甕	口 [19.8] 高 [20.2] 最大径 [19.1]	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外表面ヨコナデ。内面ヨコナデ。頸部内面ヨコナデ後丸沢のあるヘラナデ。胴部外表面タテ方向のヘラナデ。内面ヨコないし斜方向のヘラナデ。胴部外表面に覆付着。胴部外表面に接合痕3段あり。	(外) にふい・黄褐色 (内) 明黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粘・白色粘・石英少量 黒炭母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～胴部上 1/4 残存 № 19・一括
8 土器器 甕	高 [12.5] 底 6.5 最大径 20.8	胴部外表面タテ方向のヘラナデ。胴部内面ナデ・ヘラナデ。底部内表面斜方向のナデ。底部外表面木葉痕。	(外) 明黄褐色 (内) 褐色 小砂粒多量、小礫・石英・白色粘少量 焼成：良好	貯・覆土 胴部下半・底部残存 № 1・4
9 石製品 編物石	最大長 13.7 最大幅 5.0 最大厚 4.8 重量：309.39	棒状・断面三角形の自然石。裏面に研磨痕が確認される。表面に黒色の付着物あり。有色物質を含む。縦向き断面安山岩。	明黄褐色	床面 完存 № 22

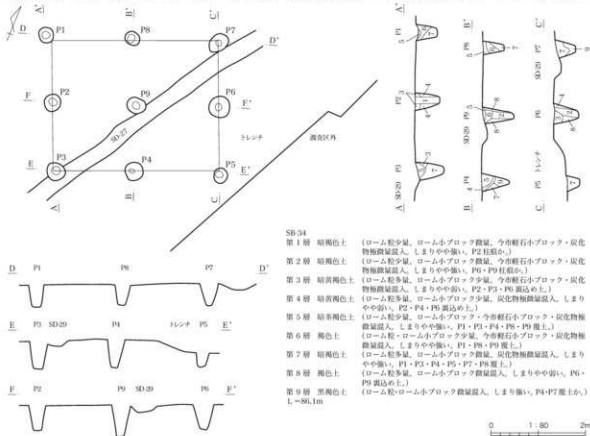
10 石製品 編物石	最大長 11.7 最大幅 4.7 最大厚 3.0 重量: 292.60	棒状・断面楕円形の自然石。表面及び下端面に黒色の付着物あり。2～3mmの石英珪品を含む。硬質緻密な安山岩。	青灰色	床面 完存 No. 23
11 石製品 編物石	最大長 14.1 最大幅 5.3 最大厚 3.2 重量: 373.43	棒状・断面四角形の自然石。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	明緑灰色	床面 完存 No. 25
12 石製品 編物石	最大長 12.3 最大幅 5.3 最大厚 4.4 重量: 476.39	棒状・断面菱形の自然石。有色鉱物を多く含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 No. 26
13 石製品 編物石	最大長 14.1 最大幅 4.7 最大厚 4.3 重量: 443.71	棒状・断面楕円形の自然石。下端面に磨打痕あり。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 No. 24

2. 掘立柱建物跡

砂田姥沼遺跡1区では5棟の掘立柱建物跡が確認されているが、遺物の出土状況から古墳時代に位置付けられた掘立柱建物跡は2棟（SB-34・SB-83）が確認されている。

SB-34（第62図、図版一五）

概要 桁行2間×梁行2間の総柱式の東西棟建物である。重複するSD-29よりは古い建物である。南北の方位はN-20°-Wである。位置 調査区の南部、東壁際の99-37グリッドに位置する。確認目標高は85.896m～85.642mである。規模・柱間 桁行総長は3.47mで、柱間寸法は南側柱列（P3-P5間）が西からP3-P4が1.64m。P4-P5が1.84mで、北側柱列（P1-P7間）が西からP1-P8が1.72m。P



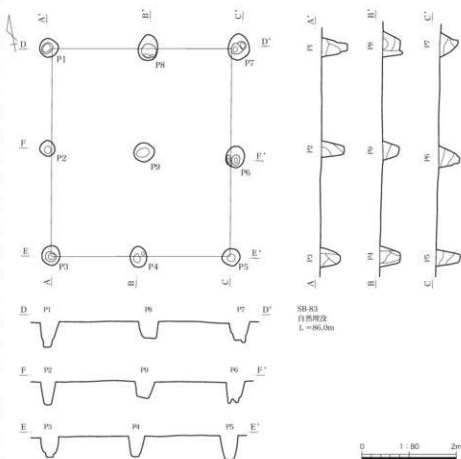
第62図 砂田姥沼遺跡1区 SB-34 実測図

8-P7が1.70 mである。梁行総長は2.75 mで、西妻柱列（P1-P3間）が南からP3-P2が1.36 m。P2-P1が1.38 mで、東妻柱列（P5-P7間）が南からP5-P6が1.34 m。P6-P7が1.42 mである。面積は9.54 m²である。掘り方 平面形は短径0.28 m～0.46 m、長径0.32 m～0.46 mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは0.31 m～0.67 m（底面標高85.300 m～85.218 m）である。なお、棟持柱列（P2・P9・P6）には第1・2層とした柱痕跡が確認できた。柱の直径は14 cmである。出土遺物 柱痕跡や掘り方埋土から環の口縁部や体部片、甕の胴部片、鉢の頸部片など9点が出土している。ほとんどが小片で図示し得なかった。古墳時代後期～末期のものが混在している。遺物は一括取り上げのため詳細な出土位置が不明であるため、本遺構は古墳時代後期以降の範疇としておく。

SB-83（第63・64図、第20表、図版一五）

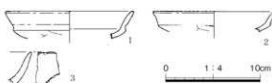
概要 桁行2間×梁行2間の総柱式の南北棟建物である。南北の方位はN-11°-Eである。位置 調査区の中央部、SI-13とSI-14の間の遺構の空白地にあたる、100-36・37グリッドに位置する。確認面標高は85.939 m～85.842 mである。規模・柱間 桁行総長は4.40 mで、柱間寸法は西側柱列（P1-P3間）が南からP2-P3が2.20 m。P1-P2が2.20 mで、東側柱列（P5-P7間）が南からP5-P6が2.20 m。P6-P7が2.20 mである。梁行総長は3.74～3.76 mで、南妻柱列（P3-P5間）が西からP3-P4が1.88 m。P4-P5が1.86 mで、北妻柱列（P1-P7間）が西からP1-P8が1.88 m。P7-P8が1.87 mである。面積は16.5 m²である。掘り方 平面形は短径0.32 m～0.44 m、長径0.35 m～0.55 mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは

0.36 m～0.54 m（底面標高85.568 m～85.325 m）である。なお、土層観察によると柱の痕跡は確認されていない。出土遺物 柱痕跡や掘り方埋土から環の口縁部や体部片、甕の胴部片など13点が出土している。ほとんどが小片で図示し得たものは3点のみである。図化したものはいずれも模倣環で、外反形（No 1）、外傾形（No 2）、半球形（No 3）である。これらは一括取り上



第63図 砂田姥沼遺跡1区 SB-83実測図

げのため詳細な出土位置が不明であるが、これらの坏の特徴は器高が低く扁平化していること、内面のミガキ調整痕がみられないことから古墳時代後期～末期のものと考えられる。本遺構はこれらの遺物の状況を踏まえ、古墳時代後期～奈良時代にかかる可能性を指摘しておく。



第64図 砂田姥沼遺跡1区 SB-83 出土遺物

第20表 砂田姥沼遺跡1区 SB-83 出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

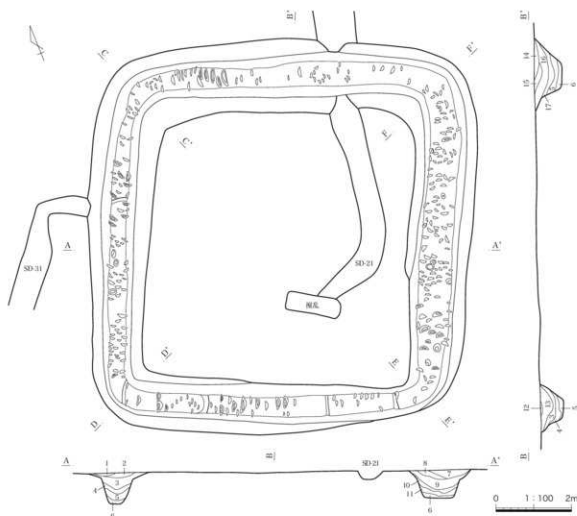
番号 種類 図解	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坏	口 [13.4] 高 [2.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。 模範外反形	棕色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	P8 覆土 口縁部～体部一部残存 P8
2 土師器 坏	口 [13.0] 高 [2.1]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。模範外反形 口縁部内外面及び口縁部～体部内面にかけて連上げ	浅黄棕色 小砂粒微量 焼成：良好	P7 覆土 口縁部～体部一部残存 P7
3 土師器 坏	高 [3.1]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ。模範外半球形	棕色 小砂粒・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	P4 覆土 口縁部～体部一部残存 P4

3. 方形区画遺構

砂田姥沼遺跡1区では調査区の中央部に、一辺が10m四方の方形に廻らされた溝跡が確認されている。方形に廻らされた溝によって区画された内区では、遺構の痕跡が確認されなかった。後世の耕作等の擾乱で遺構の掘方到達面を削平されている可能性がある。ここでは方形に空間を区画した「方形区画溝」として捉えて報告する。

SX-28 (第65・66図、第21表、図版一五～一七)

概要 本遺構は低地を臨む台地の緩斜面で確認した方形に区画をした溝跡である。本遺構と重複する遺構は北から南へと延びているSD-21が北辺の区画から内区にかけて確認できる。SD-21自体、本遺構内で終息してしまう。北辺での重複関係から区画溝の方が古い。また、区画の西辺はSD-81と重複している。遺構範囲の確認時には区画溝との重複が確認されている。位置 100・101-36グリッドに位置する。確認面標高は86.000m～85.730mである。覆土 堆積はA・Bラインで第1層から第17層のレンズ状の自然堆積をしている。区画溝の四隅に設定したC～Fラインでは第18層～第31層までのレンズ状の自然堆積をしている。各ラインとも底面付近の最下層(第5・6・25)では、ローム小ブロックやロームブロックが多く観察できる。規模 長軸の方向はN-24°-Eである。区画の溝北辺と南辺の南北方向軸の内側間は7.1mを測る。東西方向軸は、6.7mを計測した。南北方向にやや長い区画になる。確認面での幅は1.5m～1.9mである。一辺約10mの方形区画溝になる。西辺や南西隅は確認面からの掘り込みが深く、底面の標高値も85.180mmと低くなっている。断面形 区画溝の断面はコーナーまでしっかりと角を保ち掘り込まれている。区画溝の北辺は確認面からの掘り込みは0.74～0.77mと深い。南辺は確認面からの掘り込みは0.46～0.72m、東辺は確認面からは0.29～0.72m、西辺は確認面から0.69～0.80m掘り込まれている。区画溝の断面形は逆台形である。北辺・西辺・東辺については断面の両端部が外に開く断面形状をしている。なお、最も浅い箇所は南東隅である。確認面からの掘り込みが0.29mと極めて浅い。底面・工具痕 区画溝は南辺及び西辺の底面に段差が認められ、南辺の南西隅付近が最も深く、土坑状の掘り込みがある。長軸方向2.28×短軸方向0.5～0.6m。底面が比較的平坦である東辺と南辺の南東隅での段差が9～10cmとなる。南辺は

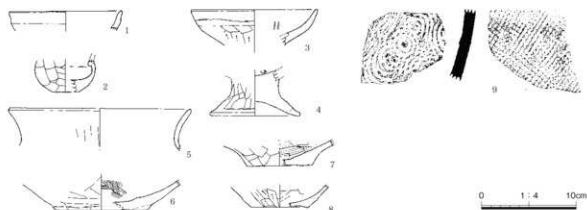


SX-28

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量、ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第2層 褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量、今市軽石粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒微量、今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒・今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第6層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い。)
- 第7層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム小ブロック・ローム粒・炭化物・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第8層 褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量、今市軽石粒・炭化物粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第9層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量、ローム小ブロック・今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第10層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒・今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第11層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量、今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第12層 褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック少量、今市軽石粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第13層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量、ローム小ブロック・今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第14層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第15層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック粒微量、今市軽石粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第16層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック粒微量、今市軽石小ブロック・白色粒・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第17層 黒褐色土 (ローム粒少量、ローム粒・白色粒・炭化物・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第18層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第19層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第20層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒微量、今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第21層 暗褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック・白色粒・今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第22層 褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第23層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第24層 暗褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック・白色粒・今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第25層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量、今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第26層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石小ブロック・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第27層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック粒微量、今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第28層 黒褐色土 (白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまり強い。)
- 第29層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒微量混入。しまりやや強い。)
- 第30層 黒褐色土 (今市軽石小ブロック・白色粒微量、ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石粒・炭化物粒微量混入。しまり強い。)
- 第31層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック粒微量、今市軽石小ブロック粒微量混入。しまりやや強い。)

L=86.1m

第65図 砂田姥沼遺跡1区 SX-28 実測図



第66図 砂田姥沼遺跡1区 S-X-28 出土遺物

南東隅から段々には深くなる。西辺内での段差は14 cmになる。

区画溝の全ての底面で痕跡が確認された。南辺は12 cm～46 cmの鋤状工具の痕跡が2列に並んでいる。痕跡の方向から掘削は西側から東側に行われていることが判明。

西辺は中央部の段差～南西隅にかけては、12 cm～18 cmの刃幅の狭い鋤状工具で掘削されている。そのため工具痕は3列に並んでいる。中央の段差～北西隅にかけては16 cm～18 cmの刃幅で2列に掘り込まれている。北方向からの掘削である。

北辺の中央部～北西隅にかけては16 cm～28 cmの刃幅で2列が基本である。中央部から北東隅にかけては12 cm～18 cmの刃幅の痕跡が不規則に並ぶ。掘削方向も中央部～北西隅にかけては西方向に、中央部～北東隅にかけては東方向に掘削している。

東辺は掘削方向が入り乱れる。南東隅から北方向に掘削している痕跡と、北東隅～南方向に掘削する痕跡が認められる。前者は、東辺に全体に刃幅12 cm～16 cmの鋤状工具痕が確認され、概ね2列の規則的な掘削が確認できる。後者は北東隅から中央付近まで確認されるが、間隔、並びなど不規則な掘削痕が確認される。

工具痕は北辺の中央付近から反時計回りで北東隅まで掘削しているのと、北壁中央付近から東辺の中央付近にかけて掘削する2つの掘方が判明した。東辺溝のみ、2つの掘方が交差している。交差の新旧は不明である。出土遺物 本遺構からは土師器片403点、須恵器片1点が出土。すべて一括で取り上げているため、区画溝内における出土位置等が不明である。出土した器種は、小壺・低脚高坏・甕・坏である。坏は模倣坏が5～6個体分ある。蓋模倣形は漆仕上げか(内面黒色処理?)。身模倣形は内外面黒色処理。内面赤色坏(比企系)や白色系胎土の坏も出土している。甕は6個体分の破片が確認されている。ハケメ甕は2個体分、ケズリ甕3個体分(金雲母含む破片もある)。須恵器は甕の胴部破片1点である。

遺物は模倣坏(No.1)の内罎口縁で、口径が12.1 cmと小振りである。短脚高坏は、坏部破片(No.3)と脚部片(No.4)が出土している。坏部は口径が13.4 cmと小振りである。また、脚部の裾部径が9.6 cmと小振りな径であることから立野編年の7～8段階が相当する。

甕の胴部下半～底部片(No.6)の内面は細かいハケメで調整されている。胴部下端～底部の破片(No.7)の内面は小口状工具によるハケメが放射状に調整されている。甕の胴部下半～底部の破片(No.8)の胴部外面は斜方向のヘラケズリ、内面はヘラナデで成形されている。底径は小振りで、器面も薄手である。

須恵器の甕胴部下半の破片(No.9)の外面は格子状のタタキ、内面は同心円状の当具痕が残る。7世紀第2四半期以降のものか。小形壺の胴部破片(No.2)は本遺構に伴うものではなく流入したものであろう。

本遺構の出土遺物は、一括取り上げて直接伴うものの判断は不明瞭であるが、遺物を精査した結果、小形

壺(2)、ハケメ調整の襷(6・7)は流入した可能性がある。本遺構に伴うと考えられるものは、模倣内環口縁(1)、短脚高環(3・4)、格子状叩きの須恵器胴部片(9)である。襷の口縁部片(Na 5)や底部片(8)は時期を限定し得ない。これらの遺物の時期は、古墳時代後～末期である6世紀後半から7世紀代か。

第21表 砂田姥遺跡1区 SX-28出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 部材	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	口[12.1] 高[2.1]	口縁部内外面ヨコナデ。 模倣内環口縁 口縁部内外面漆仕上げ	褐色 小砂粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部一部残存 覆土
2 土師器 小形壺	高[3.3]	胴部～底部外面ヘラズリ、胴部～底部内面ナ デ。 底部凹み。底部外面に黒色あり	にぶい黄褐色 小砂粒少量、石英・雲母片微量 焼成:良好	覆土 胴部の1/3残存、口縁部欠損 一括
3 土師器 高環	口[13.4] 高[3.8]	口縁部内外面ヨコナデ、外部外面斜方向のヘラ ズリ、内部内面ヘラミガキか。短脚高環 口縁部～外部外面及び内部内面に漆仕上げ。	(外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒微量 小砂粒・石英微量 焼成:良好	覆土 環部 1/4 残存、脚部欠損 覆土
4 土師器 高環	高[4.8] 底径 6.6	脚柱部～脚部外面斜方向のヘラズリ、全体底 部内面ヘラミガキ、底部内面ナデ、底部内外面 ヨコナデか。全体底面内面に漆仕上げ	にぶい黄褐色 小砂粒・石英微量 焼成:良好	覆土 環底部・脚柱部～脚部 1/4 残存、 環部欠損 覆土
5 土師器 襷	口[19.4] 高[3.3]	口縁部外面ヨコナデ後ヘラミガキか、口縁部内面 ヘラナデ	(外) にぶい褐色 (内) 褐色 小砂粒・白色粒微量 焼成:良好	覆土 口縁部～胴部 1/4 残存 覆土
6 土師器 襷	高[3.2] 底[10.0]	胴部下端面外ヘラズリ後光沢のあるヘラナデ、 底部外面不定方向のヘラナデ、胴部下半内面ハ ケメ。底部内面は割罫により調整不明	にぶい黄褐色 小砂粒少量、小砂粒微量 焼成:良好	覆土 胴部下端面～底部 1/4 欠損 方形周溝溝表土一括
7 土師器 襷	高[2.7] 底 7.0	胴部下端面外ヘラズリ、底部外面不定方向のヘ ラズリ、胴部～底部内面ハケメ	にぶい黄褐色 小砂粒・小砂粒微量 焼成:良好	覆土 胴部下端面～底部 1/4 欠損 覆土
8 土師器 襷	高[2.4] 底[6.0]	胴部下端面外斜方向のヘラズリ、底部外面不定 方向のヘラナデ、胴部下半～底部内面ヘラナデ。 底部外面に黒色	(外) にぶい褐色 (内) 灰黄色 小砂粒・小砂・石英・赤色粒微量 焼成:良好	覆土 胴部下端面～底部 1/4 欠損 方形周溝溝表土一括
9 須恵器 襷	高[7.6]	胴下半部外面格子叩き、胴部内面同心円状の当具 痕。内面は中央部の当具痕がより深い。	灰色 白色小砂粒微量 焼成:良好	覆土 胴下半部一部残存 一括

第2節 奈良・平安時代の遺構と遺物

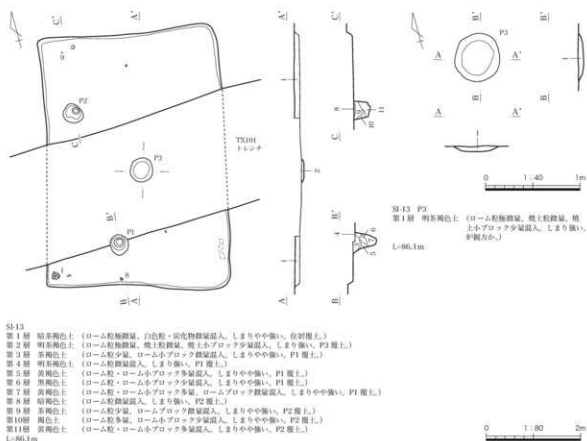
砂田遺跡1区における本節の時期の遺構については極端に少なくなる。遺物の出土状況から奈良時代に位置付けられた遺構は、竪穴建物跡SI-13の1棟のみである。

1. 竪穴建物跡

SI-13 (第67・68図、第22表、図版一七・六四)

概要 本遺構は1区の中央部のやや南、SX-28の東に位置する竪穴建物跡である。TX101トレンチによって建物の中央部の掘り方まで削平されている。遺構確認面からの掘り込みは浅い。位置 100・101-37グリッドに位置する。確認面標高は85.964m～85.929mである。平面形・規模 南北3.68m×東西5.20mの南北方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-15°-Eである。覆土 堆積状況は南北方向のセクションによると第1層のみの堆積である。壁 床面からの残存壁高は4.9cm～14.4cmで、床面より直線的に立ち上がる。床 床面は遺構確認面と同じか若干下がる程度である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第1層で充填されている。断面観察から掘り方は多少の凹凸があるが均一的な掘り込まれている。掘り方は地山のローム層まで及ばず漸移層内までの掘り込みである。

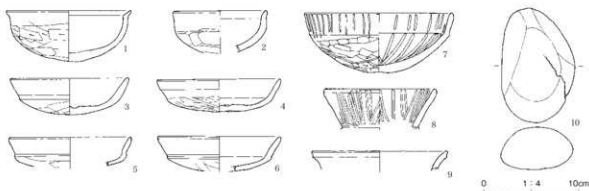
ピット P1～P3が確認されている。P1・P2は調査時点では建物に伴わないとされたが、遺構確認面にお



第 67 図 砂田姥沼遺跡1区 SI-13 実測図

けるプラン確認時にピットの掘り込みは確認できなかった。そのため伴うかどうか判断がつかないため、本項で取り扱うものとする。P1は建物の南壁寄りの中央に位置しているピットで長軸43×短軸37cmの楕円形をしている。床面からの掘り込みは47.4cmと深い。P2は建物の西壁寄りの中央やや北に位置しているピットで長軸47×短軸43cmの楕円形をしている。床面からの掘り込みは34.4cmを測る。P3はトレンチによって削平された建物の中央に位置している。削平面で確認された掘方の痕跡は長軸0.53×短軸0.47m、削平面からの深さ5.9cmになる。建物の掘方以下の削平面において掘方が確認されることから、柱穴の可能性が考えられる。出土遺物 本建物の遺物出土量は非常に少ない。取り上げ遺物としては7点。この他に覆土とトレンチ調査時に出土したものが併せて40点が出土している。

出土状況は建物跡の北西隅にみられるだけで、ほとんどが覆土からの出土である。これらの遺物のうち、



第 68 図 砂田姥沼遺跡1区 SI-13 出土遺物

床面から出土したものは、甕（No.9）である。その他は覆土ないしトレンチからの出土である。

埴形環の内斜口縁（No.1）の底部は丸底で、埴形環の内面調整はミガキがなくナデ調整のみである。No.2はトレンチ調査時に出土したものである。内面の斑状剥離が著しく器面調整が不明である。模倣環の4点はいずれも外反形（No.3～6）である。トレンチ調査の際に出土したものである。共に器高が低くなり体高部も扁平化している。No.3は丸底で口縁部が大きく外反することから東北地方南部に系統が考えられる。

鉢は蓋模倣埴形（No.7）と埴の口縁部片（No.8）は覆土から出土した。鉢の口縁部外面にタテ方向の粗めのヘラミガキが、内面は口縁部から体部にかけて粗めのヘラミガキが放射状に施されている。体部外面は細かいヘラケズリで整えられている。甕の口縁部片（No.9）は床面からの出土で、唯一建物に伴うものである。常総系のものであろうか。

本遺構の時期は、常総系甕（9）は7世紀中葉以降、主に8世紀に盛行するものである。覆土やトレンチ調査時の出土遺物については、流れ込みなどであり、主に古墳時代中期後葉から後期の段階である。これらの出土状況から8世紀代の時期の範疇か。

第22表 砂田姥遺跡1区 S1-13 出土遺物

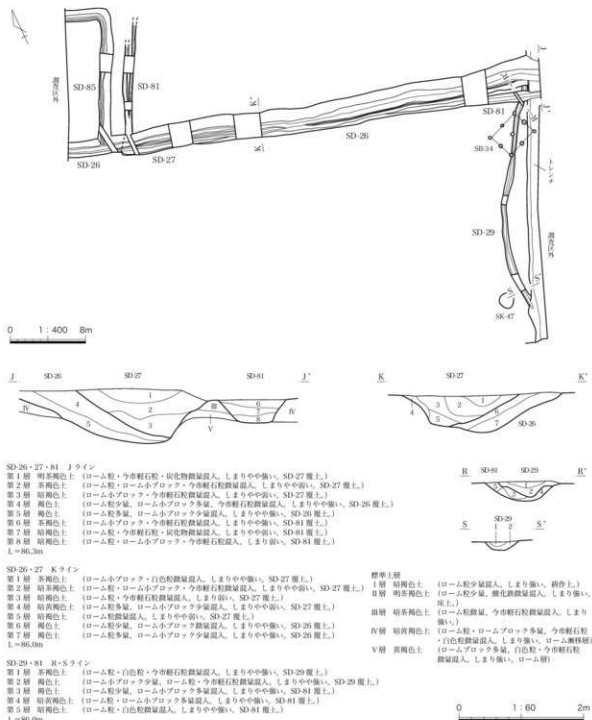
（ ）：推定値 []：残存値

番号 種類 部種	大きさ (m・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 埴（陶）	口 [13.2] 高 5.4	口縁部外面ヨコナデ、体部から底部外面ヘラケズリ、内面ナデ。埴形環内斜口縁	(外) に近い褐色 (内) 明赤褐色 小砂粒少量、小礫・石黄・赤色粒・黒雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部から体部 2/3、底部残存 No.4
2 土師器 埴（陶）	口 [10.0] 高 14.4	斑状剥離のため内面不明 口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ。埴形環内斜口縁 口縁部内外面のみ透仕上げ	に近い黄褐色 小砂粒・石黄・黒雲母片微量 焼成：良好	一括 口縁部から体部 1/4 残存 UT-TN SU TX 101 37
3 土師器 埴	口 12.7 高 3.8	斑状剥離が著しい。口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の外反形。口縁部～体上部外面・口縁部～体部内面にかけて透仕上げ	に近い褐色 小砂粒・石黄・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	一括 口縁部・体部とも 1/2 残存 UT-TN SU TX 101 37
4 土師器 埴	口 [13.2] 高 3.5	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の外反形。口縁部～体底部内面にかけて栗色彫理。	に近い黄褐色 小砂粒・石黄・黒雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	一括 口縁部から底部 1/4 残存 UT-TN SU TX 101 37
5 土師器 鉢	口 [13.0] 高 [3.1]	摩耗のため内外面ともに不明瞭 口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の外反形。口縁部内外面にかけて透仕上げ。口縁部内面磨滅。口縁部～体部内面に斑状剥離	に近い黄褐色 小砂粒・石黄・赤色粒微量 焼成：良好	一括 口縁部から体部 1/4 残存 UT-TN SU TX 101 37
6 土師器 埴	口 [13.2] 高 [3.7]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、内面ナデ。模倣環の外反形。口縁部と体部との境を明確にするために透理が施されている。	褐色 小砂粒・石黄・赤色粒微量 焼成：良好	一括 口縁部から体部 1/4 残存 UT-TN SU TX 101 37
7 土師器 鉢	口 15.8 高 6.3	口縁部内外面ヨコナデ後縦方向のミガキ。体部～底部外面ヨコ方向のヘラケズリ。内面ナデ後タテ方向のヘラミガキ。内面のミガキは放射状に施されている。	褐色 小砂粒・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部・体部とも 1/2 残存 甕土・表探 - 一括
8 土師器 埴	口 [12.0] 高 [4.3]	口縁部内外面ヨコナデ後タテ方向のヘラミガキ。頭部外面はヨコ方向のヘラミガキ	褐色 小砂粒・小砂粒・石黄・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部の 1/4 残存 No.2・表土
9 土師器 甕	口 [14.4] 高 [2.0]	口縁部内外面ヨコナデ。常総系甕	に近い褐色 小砂粒少量、白色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部の 1/4 残存 No.5
10 石製品 編物石	最大径 12.0 最大幅 7.7 最大厚 4.5 重量：567.61	扁平で断面楕円形の自然石 全面に縦横筋あり。磨光でやや多孔質気味な硬質安山岩	に近い黄褐色	覆土 完好 一括

第3節 近世以降の遺構と遺物

1. 溝状遺構

砂田遺跡1区では10条の溝状遺構が確認されている。これらの遺構は古墳時代などの竪穴建物跡を削平している。そのため、これらの覆土には古墳時代などの土師器片が多量に含まれている。これらの遺構の出土遺物には、近世の磁器・瓦質土器などが確認される遺構もある。これらの出土遺物や溝状遺構の掘り返しの



第69図 砂田姥沼遺跡1区 SD-26・27・29・81・85実測図(1)

痕跡から、近世以降に限定できる溝状遺構は4条（SD-26・27・81・85）が確認される。

SD-26（第69～72図、第23表、図版一七・六四）

概要 調査区を東西方向に横断する溝跡である。重複関係からSD-27よりも古く、SD-81よりも新しい溝跡

である。**位置** 99-34・35・36・37、100-35グリッドに位置する。確認面標高は85.911m～85.710mである。**断面形・規模** 調査区内で確認された長さは50mである。確認面での幅は1.22m～1.76mである。断面形はJ・K・L・M・Nラインで観察できる。Lライン以外の断面は概ね船底状をしている。Lラインは底面付近が狭まる葉研状の断面形になっている。上面から第5・6層が堆積しているが、掘り返しの可能性もある。確認面から底面までの深さは0.41～0.63m（底面標高85.299～85.278m）である。

出土遺物 本遺構からの出土遺物は、発掘調査時に重複するSD-27と出土遺物を区分せずに一括で取り上げているため、厳密に遺構ごとの区分ができない。後述するSD-27でまとめて報告する。

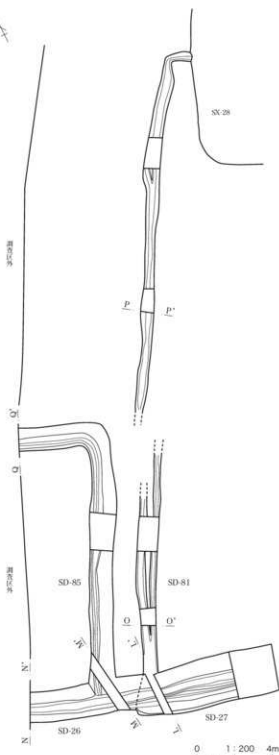
本遺構と重複するSD-27は本遺構の覆土を掘り返す様に同じラインで設定されていることから、本遺構とSD-27には同じ性格の溝跡であると言える。遺構自体の時期も連続するものと考えられる。後述するSD-27が18世紀～19世紀代に位置付けられることから、本遺構はそれよりも遡る時期である。

SD-27

（第69～72図、第23表、図版一七・一八・六四）

概要 調査区を東西方向に横断する溝跡である。重複関係からSD-26・SD-81よりも新しい溝跡である。

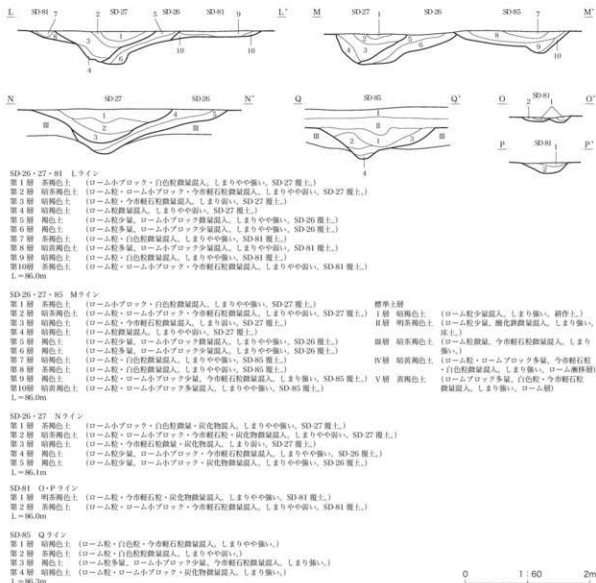
位置 99-34・35・36・37、100-35グリッドに位置する。確認面標高は85.839m～85.710mである。**断面形・規模** 調査区内で確認された長さはSD-26と同じく50mである。確認面での幅は1.05m～2.15mである。断面形はJ・K・L・M・Nラインで観察できる。Lライン以外の断面は概ね船底状をしている。Lラインは底面付近が狭まる葉研状の断面形になっている。各ラインの第1・2層はSD-27内の掘り返しであろう。確認面から底面までの深さは0.40～0.55m（底面標高85.306～



第70図 砂田姥沼遺跡1区

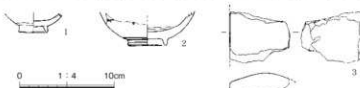
SD-26・27・81・85実測図（2）

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査



第71図 砂田姥沼遺跡1区 SD-26・27・81・85実測図(3)

85.268 m)である。出土遺物 本遺構からの出土遺物は、溝跡に明確に伴う遺物が1点あるが、大半は発掘調査時に重複するSD-26と出土遺物を区分せずに一括で取り上げているため、混在しており厳密に遺構ごとの区分ができない。ここではSD-26・27をまとめて報告する。SD-26・27としてまとめて取り上げられた遺物には、須恵器の環や甕、土師器の環・甕・甗・高環などが出土している。これらは古墳時代の遺物であり、調査区内で重複する遺構のものが流れ込んだものである。この他に本節に位置付けられるような棧瓦、陶器の小碗・小皿・甕、おろし皿などが出土している。本遺構に確実に伴う遺物としては、陶器の小碗(Na 1)が1点出土している。この他はSDの混在する遺物で、磁器小皿(Na 2)、棧瓦(Na 3)の棧部片がある。図示なかったが、常滑系の甕とおろし皿が出土していた。甕は電磁窯で焼成した



第72図 砂田姥沼遺跡1区 SD-26・27出土遺物

ようである。おろし皿は目を櫛状工具で起こしている。おろし面に鉄軸で施有している。裏面は布目が明瞭に残り型押しと考えられる。この2点は現代のものであると判断した。

陶器の小碗（№1）は美濃窯産であろうか。18世紀～19世紀のぐい呑み。磁器小皿（№2）は染付は体部外面及び高台部に見られる。体部下端には横細線が配されている。この線を基線として線や塗りの濃淡で模様が描かれている。また、体部と高台部の境には一重の淡い横線が、高台部には二重の横線が描かれている。施軸は均質に施される軸調。肥前波佐見系の磁器。18世紀～19世紀の染付碗か。

本遺構の出土遺物は確実に伴う陶器の小碗（№1）が江戸時代後期の18世紀～19世紀代に位置付けられ、現代常滑系の甕やおろし皿なども混在している。近世以降現代に至るまで繰り返し使用されてきたと言える。

第23表 砂田姥沼遺跡1区 SD-26・27 出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 陶器 小碗	高 [2.1] 高台径 3.0	体部下端の外面は回転ヘラズリ。高台は貼り付け。体部下端及び高台部を除く体部内外面に施軸されている。灰白色の発色。 美濃窯か。18世紀～19世紀のぐい呑みか。	灰白色 軸密 焼成：硬質	覆土 体部 1/4 残存。底部定存 SD-27 出土遺物
2 磁器 小皿	高 [3.5] 高台径 (4.1)	高台部は貼り付け。輪軸の掛け掛け後、見込みは輪軸を蛇の目に絞っている。肥前波佐見系の磁器。江戸後期 18世紀～19世紀の染付碗か。	灰白色 軸密 焼成：硬質	覆土 体部 1/2、高台部 1/2 残存。口縁部欠損 SD-26・27 出土遺物
3 瓦 椀瓦	高 [1.7]	椀部に面取り痕。 還元焼成によるいぼし	灰色 白色小礫微塵 焼成：良好	椀部一部残存

SD-81 (第69～71図、図版一八)

概要 調査区南部～中央部にかけて、L字状に配された溝跡である。重複関係からSD-26・27より古く、SX-28よりも新しい溝跡である。 **位置** 99-35・36・37、100・101-35・36グリッドに位置する。確認面標高は85.898m～85.714mである。 **断面形・規模** 調査区内で確認された長さは、東西方向に44.6m、南北方向に35mである。確認面での幅は0.42m～1.43mである。断面形はJ・L・Oラインで観察できる。Jラインでは逆台形状、L・Oラインでは浅い皿状をしている。確認面から底面までの深さは0.28m（底面標高85.801～85.615m）である。 **出土遺物** 本遺構からの出土遺物は確認されていない。

本遺構は重複する江戸後期以降の溝跡であるSD-26・27よりも古い溝跡である。本遺構と重複する位置にSD-26・27が配されていることから、意識的に連続するものと考えられる。本遺構も江戸後期以前に位置付けられる近世の溝跡である。なお、調査区中央部では東方向に延びており溝が方形に巡る可能性もあることを指摘しておく。

SD-85 (第69～71図)

概要 調査区中央部南寄りの西壁際で調査された溝跡である。西側の調査区外に溝は続いている。重複関係はSD-26も新しい溝跡である。SD-26・27の北側に連結して、西側にL字にクランクしている。 **位置** 99・100-35グリッドに位置する。確認面標高は85.813m～85.683mである。 **断面形・規模** 調査区内で確認された長さは、南北方向に13.8m、東西方向に4.7mである。確認面での幅は1.08m～1.46mである。断面形はM・Qラインで観察できる。共に不整形な舟底状の掘り込みであるが、Qラインでは底面が薬研状の掘り込みになっている。確認面から底面までの深さは0.26～0.43m（底面標高85.448～85.387m）

である。出土遺物 本遺構からの出土遺物は確認されていない。

本遺構は重複する江戸後期以降の溝跡であるSD-26よりも新しい溝跡である。本遺構はSD-27との重複は不明であるが、SD-26・27から直交するように本遺構が配されていることや、重複する周辺のセクションでは本遺構の痕跡を確認することができないことから、SD-27と同時期に存在して溝が繋がっていたと判断できる。本遺構は江戸後期以前に位置付けられる近世の溝跡である。SD-27と本遺構で方形の区画が形成できる可能性をあげておく。

第4節 時期不明の遺構

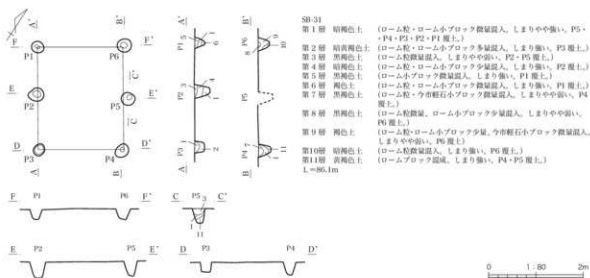
これまで砂田姥沼遺跡1区の遺構・遺物について時期毎に触れてきたが、本項では具体的に時期を確定しづらい遺構について扱うものとする。

本項で扱う遺構は殆どに遺物が伴わないため、該当する時期を決定し難いものである。掘立柱建物跡他に、土坑・小穴群が確認されている。

1. 掘立柱建物跡

SB-31 (第73図、図版一八)

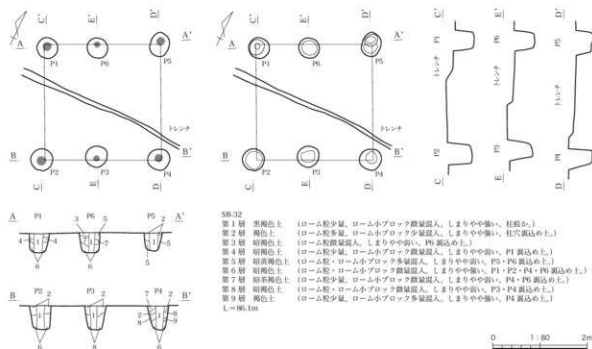
概要 桁行2間×梁行1間の側柱式の南北棟建物である。南北の方位はN-33°-Wである。位置 調査区北部の103-38グリッドに位置する。確認面標高は85.949m～85.921mである。規模・柱間 桁行総長は2.16mで、柱間寸法は西側柱列(P1-P3間)が南からP2-P3が1.19m。P1-P2が0.97mで、東側柱列(P4-P6間)が南からP4-P5が1.07m。P5-P6が1.09mである。梁行総長は1.79mである。面積は3.87㎡である。掘り方 平面形は短径0.23m～0.28m、長径0.25m～0.33mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは0.19m～0.32m(底面標高85.613m～85.732m)である。柱痕はなく、埋土にはロームブロックが混入している。出土遺物 出土遺物は全くない。周辺の竪穴建物跡(SI-1・2・4・5)との関連も不明である。



第73図 砂田姥沼遺跡1区 SB-31実測図

SB-32 (第74図、図版一八)

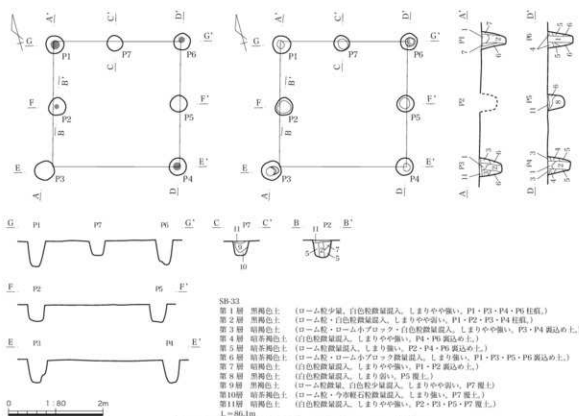
概要 桁行1間×梁行2間の側柱式の南北棟建物である。南北の方位はN-28°-Wである。位置調査区の北部、102・103-37グリッドに位置する。確認面標高は86.009m～85.855mである。規模・柱間 桁行総長は2.32m。梁行総長は2.36mで、柱間寸法は南妻柱列(P2-P4間)が西からP2-P3が1.02m。P3-P4が1.34mで、北妻柱列(P1-P5間)が西からP1-P6が1.14m。P5-P6が1.22mである。面積は5.47㎡である。掘り方 平面形は短径0.36m～0.45m、長径0.43m～0.52mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは0.39m～0.51m(底面標高85.509m～85.444m)である。なお、土層観察によるとすべての柱穴で第1層が柱痕である。出土遺物 遺物はない。周辺の竪穴建物跡(SI-4・7・8・9)との関連も不明である。



第74図 砂田姥沼遺跡1区 SB-32実測図

SB-33 (第75図、図版一八)

概要 桁行2間×梁行2間の側柱式の南北棟建物である。南北の方位はN-17°-Eである。位置調査区の中央部の南側、99-36グリッドに位置する。確認面標高は85.846m～85.826mである。規模・柱間 桁行総長は2.67mで、柱間寸法は北側柱列(P1-P6間)が西からP1-P7が1.30m。P6-P7が1.37mで、南側柱列(P3-P4間)が2.67mである。梁行総長は2.70mで、柱間寸法は西妻柱列(P1-P3間)が南からP2-P3が1.33m。P1-P2が1.37mで、東妻柱列(P4-P6間)が南からP4-P5が1.34m。P5-P6が1.23mである。面積は7.21㎡である。掘り方 平面形は短径0.32m～0.39m、長径0.33m～0.42mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは0.31m～0.54m(底面標高85.512m～85.270m)である。なお、土層観察によると柱穴P1・2・4・6の第1・2層が柱痕になる。時期と性格 遺物は縄文土器片のみである。南側柱列にはP7に対応する柱穴がみられないことから南側が出入口の可能性も考えられ、平入りの建物が想定できる。



第75図 砂田姥沼遺跡1区 SB-33 実測図

2. 井戸

砂田姥沼遺跡1区では1基の井戸が確認されている。覆土には古墳時代などの土師器片が5点含まれている。これらの出土遺物には接合関係が認められず、流入したものと判断した。

SE-40 (第76図、図版一八・一九)

概要 調査区の北部の南、台地が緩やかに南斜する平坦面に位置する井戸跡である。SD-22・23とに挟まれた範囲に配されている。位置 101-38グリッドに位置する。確認面標高は86.024m~85.979mである。平面形・規模 長軸1.71m×短軸1.31mの北西-南東方向に長い楕円形をしている。主軸の方位はN-29°-Wである。覆土 堆積状況は第1層から第9層であるが、第4~9層中にはロームと暗褐色土



第76図 砂田姥沼遺跡1区 SE-40 実測図

が交互に堆積しており埋め戻し土である。堆積の土しまりが弱い。第4層上面・第5層中には礫が含まれている。

断面形・底面 確認面からの深さは約1.4～1.5mである。底面は平坦である。壁の状況は底面から中位屈曲部までは、直線的に立ち上がる。屈曲部から確認面までは緩やかに内彎して立ち上がる。**出土遺物** 出土遺物は覆土中より遺物が5点確認されたが、甕の頸部片や胴部片など古墳時代後期のものであり、破片も接合関係にないことから流入したものと考えられる。

3. 溝状遺構

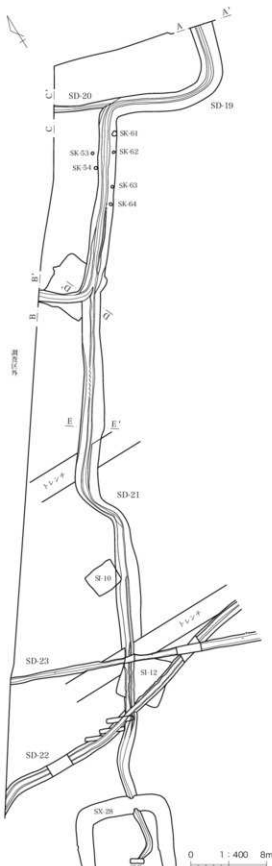
溝跡は10条が確認されている。このうち、時期が不明の溝跡は6条、SD-19・20・21・22・23・29がある。遺物の出土が少ないため、時期を決定付けるに至らない。

SD-19 (第77・78図、図版一九)

概要 調査区の北部に位置する溝跡である。重複関係からSD-20よりも古く、SD-21よりも新しい溝跡である。調査区の北部から西や南にクランクしており、再度西へクランクして調査区外に至る。本遺構からの出土遺物は古墳時代～古代にかけての土器が流れ込んでいる。常総系甕の口縁部片や胴部片、壺の頸部や坏の体部片など48点に及ぶが接合関係はない。**位置** 103・104-37、104-38グリッドに位置する。確認面標高は85.993m～85.900mである。**断面形・規模** 確認面での幅は0.96m～2.11mである。確認面から底面までの掘り込みは0.31～0.52m(底面標高85.586～85.467m)である。断面形は底面にやや凹凸があり壁は緩やかに立ち上がる舟底状をしている。覆土はA・Bラインで観察でき、ロームブロックが微量混入する自然堆積である。掘り返された可能性もある。

SD-20 (第77・78図、図版一九)

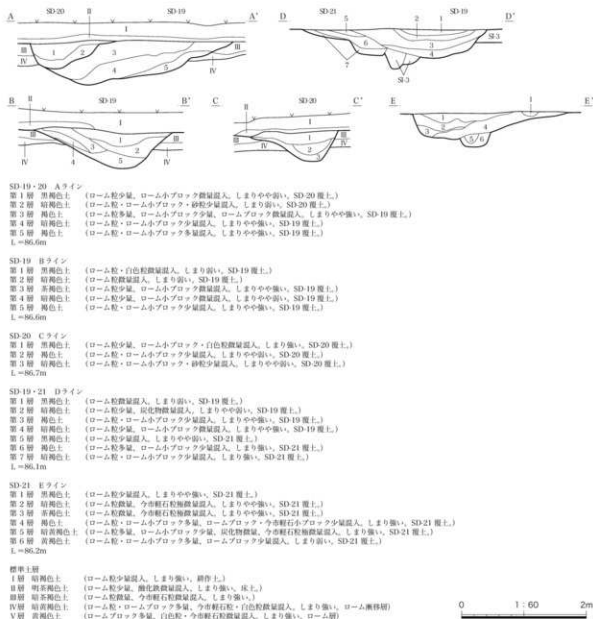
概要 調査区の北部に位置する溝跡である。重複関係からSD-19よりも新しい溝跡である。調査区の北部から西にクランクし、そのままに延びて調査区外に至る。砂田姥沼2区においてSD-9とした溝跡に繋がる。



第77図 砂田姥沼遺跡1区

SD-19～21実測図(1)

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査

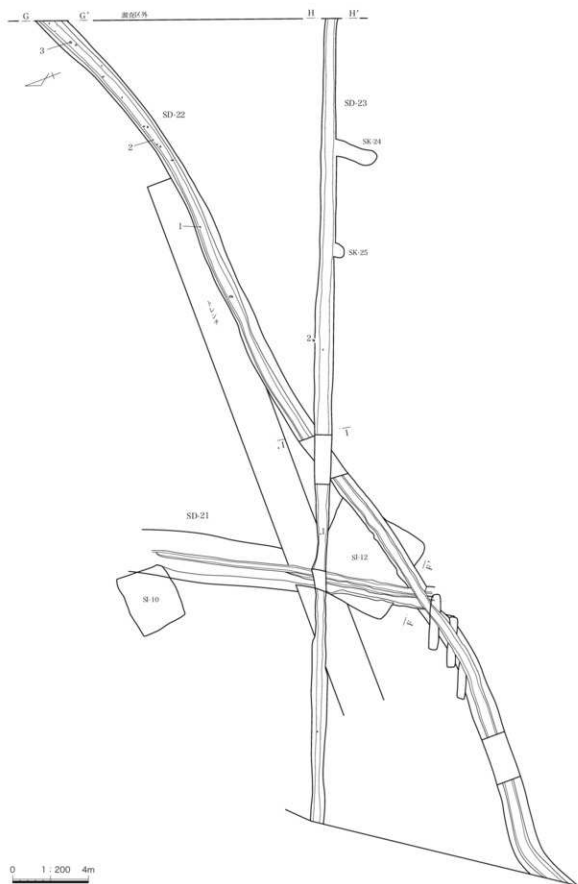


第78図 砂田姥沼遺跡1区 SD-19～21実測図(2)

本遺構からの出土遺物は認められない。位置 104～38グリッドに位置する。確認面標高は85.989m～85.970mである。断面形・規模 確認面での幅は0.48m～1.38mである。確認面から底面までの掘り込みは0.13～0.27m(底面標高85.842～85.722m)と浅い。断面形は底面にやや凹凸があり壁は緩やかに立ち上がる舟底状をしている。覆土はA・Cラインが該当する。ロームブロック・砂粒を微量混入する堆積である。

SD-21 (第77・78・79図、図版一九)

概要 調査区の北部～中央部に位置する溝跡である。重複関係からSD-19・23よりも古く、SD-22・SI-3・10・12より新しい溝跡である。調査区の北部から南へ延びて調査区の中央部で終息する。本遺構からの出土遺物は灰釉陶器や須恵器の高台付杯、土師器の甕の口辺部や胴部片など、環の口縁部や体部片、高环脚部片



第79図 砂田姥沼遺跡1区 SD-22・23実測図(1)

第V章 砂田姥沼遺跡1区の調査



第 80 図 砂田姥沼遺跡1区 SD-22・23実測図(2)

の208点が出土している。覆土中からであり接合関係がないことから混入したものと判断している。位置

101・102-36、103-37グリッドに位置する。確認面標高は86.095m～85.895mである。断面形・規模 確認面での幅は0.98m～2.52mである。確認面から底面までの掘り込みは0.12～0.60m(底面標高85.780～85.506m)である。断面形は底面にやや円凸があるが、壁は緩やかに立ち上がる舟底状をしている。覆土はD・Eラインが該当する。Eラインでの第5・6層はSD以前の掘り込みと考えられる。ロームブロック・今市軽石を混入する。

SD-22 (第79～81図、第24表、図版二〇)

概要 調査区の中央部に位置する溝跡である。重複関係からSD-21・23よりも古く、SI-12よりも新しい溝跡である。調査区の東西方向に延びている。本遺構からの出土遺物は多く、常総系の甕や模倣坏、埴形坏、壺等の破片120点が出土している。古墳時代中期～古代にかけて混在しており、遺構の時期を示すものではなかった。 **位置** 101-35・36・37、102-37・38グリッドに位置する。確認面標高は86.146m～85.798mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.80m～1.44mである。確認面から底面までの掘り込みは0.10～0.79m(底面標高85.712～85.360m)である。断面形は底面にやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる逆台形をしている。覆土はG・I・Fラインが該当する。Gラインでは調査区東壁の断面が観察でき、舟底状の断面がみられる。堆積状況から掘り返しもされたことが伺える。 **出土遺物** 遺物は覆土から破片120点が出土している。調査区内でSI-12と重複していることから、これらの遺物が流入している可能性がある。図示したものは、溝底面から出土した模倣坏(№1)、覆土から模倣坏(№2)・須恵器甕胴部片(№3)のみである。模倣坏(№1・2)は半球形である。№1の内面には黒色処理。№2の口径は14cm、扁平化しているため器高は低い。須恵器甕胴部片(№3)、外面は格子状の叩きがなされている。図示していないものも含めると遺物の時期は古墳時代中期～古代にわたる。本遺構に伴うものかどうかは不明である。



第81図 砂田姥沼遺跡1区 SD-22 出土遺物

第24表 砂田姥沼遺跡1区 SD-22 出土遺物

(): 推定値 (): 残存値

番号 種類 部材	大きさ (m・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土甕器 坏	口(13.3) 高6.2 底4.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、体部内面ヘラミガシ。模倣坏半球形、体部～底部外面に黒煎、口縁部～底部内面に黒色処理。	(外) 黄褐色 (内) 白く褐色 小砂粒・雲母片少量、白色粒 赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部一部、体部2/3、底部残存 №1
2 土甕器 坏	口(14.0) 高[3.5]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリ。模倣坏半球形、口縁部～体部内面に黒色処理。	(外) 黄褐色 (内) 黒色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部残存 №6
3 須恵器 甕	高16.11	胴下平部外面格子叩き、胴部内面同心円状の当具痕	灰色 白色細砂粒・小礫微量 焼成：良好	覆土 胴下平部一部残存 №13

SD-23 (第79・80・82図、第25表、図版二〇)

概要 調査区の中央部に位置する溝跡である。重複関係からSD-21・22、SI-12、SK-24・25よりも新しい溝跡である。調査区の東西方向に延びている。本遺構からの出土遺物は多く、甕や模倣坏、須恵器鉢・甕の破片108点が出土している。古墳時代中期～古代にかけて混在しており、遺構の時期を示すものではなかった。

位置 101-37・38、102-36・37グリッドに位置する。確認面標高は86.106m～85.812mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.46m～0.98mである。確認面から底面までの掘り込みは0.04～0.42m(底面標高85.856～85.688m)である。断面形は底面にやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる逆台形をしている。覆土はH・Iラインが該当する。Hラインでは調査区東壁の堆積状況から、掘り返しされたことが伺える。覆土にはロームブロック、今市軽石粒を混入する。 **出土遺物** 遺物は覆土から破片108点が出土している。

調査区内でSI-12と重複していることから、これらの遺物が流入している可能性がある。図示したものは、溝覆土から出土した須恵器の鉢(Na 1)、甕(Na 2)である。鉢(Na 1)は須恵器の握ね鉢の口縁部片。時



第82図 砂田姥沼遺跡1区 SD-23 出土遺物

期は古代9世紀代か。甕胴部片(Na 2)は球胴甕の胴部中位～底部片。底部は粘土紐を貼り付けて中央を凹ませている。胴部の形状も球胴であることから、図示していないものも含めると遺物の時期は古墳時代中期～古代にわたる。

第25表 砂田姥沼遺跡1区 SD-23 出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 鉢	口径16.0 高13.0	口縁部内外面口縁ナデ。 内面鉢か	灰色 白色砂粒・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部一部残存 №6
2 土師器 甕	高19.2 底径6.6	高胴部外面ヘラケズリ。胴部内面～底部内面ヘラケズリ。底部外面ナデ 備考：球胴形。底部は粘土紐を貼り付け中央が凹む。胴部下端部は被熱赤化及び保存者	外)にふいり色(内)にふいり色 小砂粒少量、小礫・白色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部中位1/4・底部残存 №5・SD-23北

SD-29 (第69図、図版二〇)

概要 調査区の南部に位置する溝跡である。重複関係からSD-81よりも新しい溝跡である。SD-26・27・81から南方方向に延び、調査区南東隅で東方方向に彎曲して調査区外に至る。本遺構からの出土遺物はない。

位置 98-36、99-37グリッドに位置する。確認面標高は85.853m～85.787mである。断面形・規模 確認面での幅は0.38m～0.77mである。確認面から底面までの掘り込みは0.05～0.18m(底面標高85.740～85.670m)である。断面形は底面にやや平坦で、壁は直線的に立ち上がる逆台形をしている。覆土はR・Sラインが該当する。覆土にはロームブロック、今市軽石粒を混入する。

4. 土坑

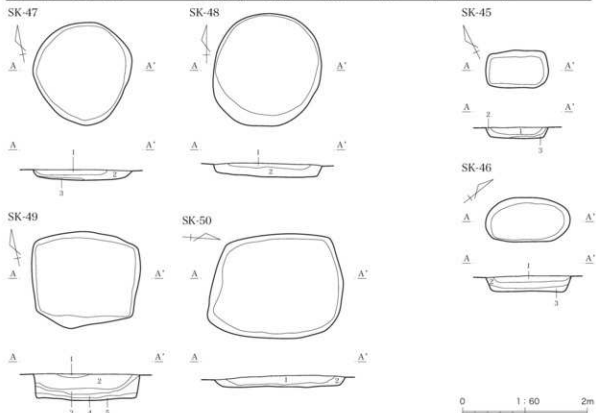
土坑は総計20基確認されている。実測図は第83～85図に掲載した。遺物の出土が少ないため、時期を決定付けるに至らない。各土坑の記述は避け計測値等を一覧表(第26表)に、実測図は第83～86図にまとめる。写真図版は二〇～二二に掲載している。

第26表 砂田姥沼遺跡1区 土坑一覧表

() : 推定値 [] : 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺物等
SK-24	101-37	SD-23	(隅丸長方形)	[2.26]	0.81	0.20	N-38°	-E 9 (甕・坪)
SK-25	101-37	SD-23	(楕円形)	[0.60]	0.72	0.06	N-22°	-E 有
SK-35	103-37		円形	0.88	0.87	0.24		18 (甕)
SK-36	103-37		不整形円形	0.82	0.81	0.29		2 (甕)
SK-37	102-36		円形	1.29	1.22	0.26		
SK-38	102-37		隅丸長方形	1.38	0.58	0.06	N-59°	-W 1 (甕)
SK-39	102-37		隅丸長方形	1.26	0.90	0.12	N-5°	-E 2 (甕)
SK-41	101-37		楕円形	0.83	0.56	0.15	N-59°	-E
SK-42	101-37		円形	0.76	0.68	0.73		1 (甕)
SK-43	101-37		楕円形	0.82	0.69	0.19	N-39°	-E

SK-44	100-37	円形	1.36	1.24	0.45	N-11°	-E 27 (環・坏・鉢)
SK-45	100-36	隅丸長方形	1.00	0.60	0.18	N-27°	-E
SK-46	100-36	楕円形	1.34	0.70	0.25	N-39°	-E
SK-47	98-36	円形	1.63	1.57	0.13		
SK-48	98-35	楕円形	1.88	1.69	0.22	N-15°	-E 2 (鉢)
SK-49	98-35	隅丸長方形	1.71	1.52	0.50	N-74°	-W 1 (鉢)
SK-50	98-35	隅丸長方形	2.10	1.64	0.17	N-4°	-W 3 (壺)
SK-51	98-35	(隅丸長方形)	1.86	1.28	0.33	N-75°	-W
SK-80	98-35	隅丸長方形	1.95	1.69	0.37	N-11°	-W 2 (坏)
SK-82	100-36	楕円形	1.34	0.79	0.12	N-4°	-E
SK-84	101-36	隅丸長方形	1.89	0.56	0.30	N-35°	-W



SK-45
第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・白色粒少量混入。しまりやや強い。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒少量・焼土粒・炭化物少量混入。しまりやや強い。)
第3層 褐色土 (ローム粒・焼土粒少量混入。しまりやや強い。)
L=86.1m

SK-46
第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土小ブロック・炭化物少量混入。白色粒少量混入。しまり強い。)
第2層 暗褐色土 (焼土粒・炭化物・白色粒少量・焼土小ブロック少量混入。しまり強い。)
第3層 赤褐色土 (ローム粒・白色粒少量混入。しまり強い。)
L=86.1m

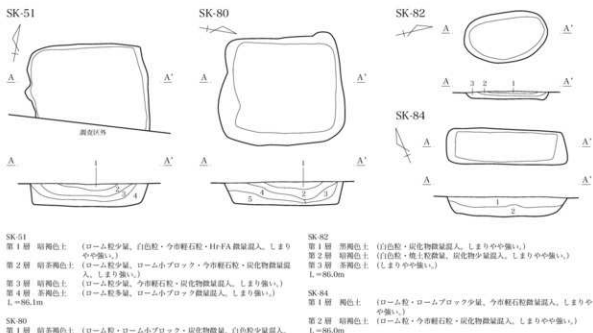
SK-47
第1層 暗褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック・今市軽石粒・白色粒少量混入。しまり強い。)
第2層 褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量・今市軽石・今市軽石小ブロック・白色粒・白色小ブロック少量混入。)
第3層 黄褐色土 (ローム小ブロック混成。しまり強い。)
L=86.1m

SK-48
第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒少量・ローム小ブロック・今市軽石粒少量混入。しまり強い。)
第2層 褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量・ローム小ブロック・今市軽石粒・白色粒少量混入。しまり強い。)
L=86.1m

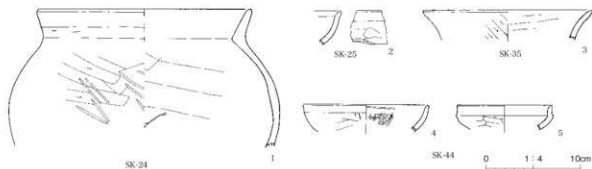
SK-49
第1層 暗褐色土 (ローム粒少量・白色粒少量混入。しまりやや強い。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒少量・白色粒少量・ローム小ブロック・炭化物・今市軽石粒少量混入。しまり強い。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒少量・ローム小ブロック・炭化物・焼土粒少量混入。しまり強い。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒少量・焼土粒少量・ローム小ブロック・炭化物・焼土粒少量混入。しまり強い。)
第5層 暗褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量・焼土粒少量混入。しまり強い。)
L=86.1m

SK-50
第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒少量・ローム小ブロック・今市軽石粒・炭化物少量混入。しまり強い。)
第2層 褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い。)
L=86.1m

第84図 砂田姥沼遺跡1区 SK-45・46・47～50実測図



第85図 砂田姥沼遺跡1区 SK-51・80・82・84 実測図



第86図 砂田姥沼遺跡1区 土坑内出土遺物

第27表 砂田姥沼遺跡1区 土坑内(SK-24・25・35・44) 出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (m・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 甕	口(22.8) 高(14.6)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヘラナデ後ヨコナデ、胴部外面ヘラクスリ後ヘラミガキ、胴部内面ヘラナデ、胴部外面に黒斑	(外) 明黄褐色 (内) 灰黄褐色 小砂粒・小礫・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～胴部上半1/4 残存 No.3・5
2 土師器 杯	高(3.5)	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラクスリ、体部内面ヘラナデ。横断面半球形	赤色粒多量、小砂粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部残存 一括
3 土師器 甕	口(18.0) 高(3.1)	口縁部内外面ヨコナデ後に、外面斜方向のヘラクスリ、内面はヨコ方向のヘラナデ	にぶい黄褐色 小砂粒・石膏・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部1/4 残存 一括
4 土師器 杯	口(13.4) 高(2.9)	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラクスリ、体部内面ヘラミガキ。 横断面半球形 体部外面に黒斑	(外) にぶい黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部残存 一括

5 土師器 坏	口10.0 高12.7	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体 部内面ナデ。絞帯坏身模範形	にんい黄褐色 小砂粒・赤色粒散在 構成：良好	甕土 口縁部～体部一部残存 一括
---------------	----------------	---	------------------------------	------------------------

5. 小穴

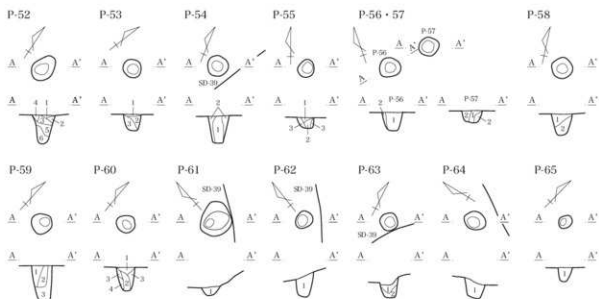
本調査区からは、小穴は総計28基が確認されている。柱痕の存在する小穴も確認されているが、明確に掘立柱建物跡や櫓列のような規則的な配置をとるものは確認できなかった。

小穴の集中するグリッドが2地点確認できた。いずれも調査区の北部、東側のSI-1周辺の103・104-38・39グリッド付近、北部西側のSD-19・20近辺の103・104-37・38グリッド付近で群生している。

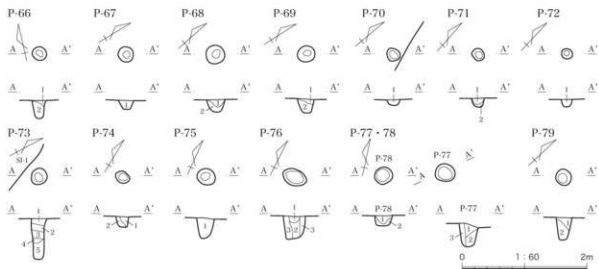
小穴から出土した遺物は少なく、殆どが古墳時代の土師器片であるため、遺構の時期を決定付けるに至らない。各小穴の記述は避け計測値等を一覧表(第28表)に、遺構実測図を第87・88図にまとめる。

第28表 砂田姥沼遺跡1区 小穴一覧表 (): 推定値 (): 残存

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-52	104-37		45.0	33.0	46.5
P-53	104-38		29.0	28.5	24.0
P-54	104-38		33.5	32.5	43.9
P-55	104-37		28.5	26.0	18.4
P-56	104-38		34.0	30.5	28.7
P-57	104-38		33.5	29.5	19.5
P-58	104-38		34.0	33.5	32.5
P-59	104-38		34.5	33.0	52.6
P-60	104-38		30.0	29.5	36.2
P-61	104-38	SD-21	51.5	42.0	38.3
P-62	104-38	SD-21	29.0	24.0	32.8
P-63	104-38	SD-21	29.0	29.0	35.9
P-64	104-38	SD-21	35.0	29.5	33.9
P-65	104-37		23.5	20.0	19.6
P-66	104-38		22.5	20.0	30.8
P-67	104-38		25.0	24.0	13.9
P-68	104-38		30.0	29.5	20.5
P-69	103-38		28.0	24.5	22.9
P-70	103-38		22.5	19.5	9.0
P-71	104-39		20.5	19.0	14.0
P-72	104-39		18.0	15.5	9.9
P-73	103-38		27.0	25.0	66.5
P-74	103-39		23.5	18.5	15.8
P-75	103-39		30.0	25.5	32.3
P-76	103-39		39.5	26.0	37.5
P-77	103-39		30.5	29.0	35.9
P-78	103-38		29.0	27.0	19.6
P-79	103-38		26.0	24.0	34.9



第87図 砂田姥沼遺跡1区 小穴実測図(1)



- P-52
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第4層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第5層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第6層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-53
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-54
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-55
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-56
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-57
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-58
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-59
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-60
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-61
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-62
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-63
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-64
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-65
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m

- P-66
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-67
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-68
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-69
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-70
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-71
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
L=86.1m
- P-72
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-73
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第5層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-74
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-75
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-76
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-77
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-78
第1層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m
- P-79
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック少量混入。しまりや強い。)
L=86.1m

第88図 砂田姥沼遺跡1区 小穴実測図(2)

第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査

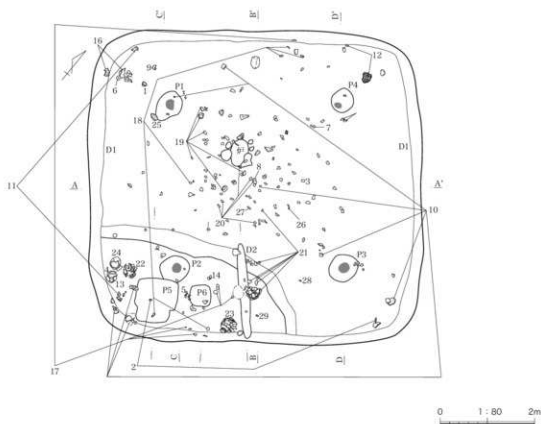
砂田姥沼遺跡2区は、宇都宮市砂田町字瀧 211・212・215・217・221・225、砂田町字滝 193・195 番地に所在している。東西方向に長い調査区が設定されている。調査区は1区を挟んで、西側が西区、東側を東区とする。発掘調査前の標高は西区 86.75 m、東区 86.63 mで、低地との比高は西区 1.1 m、東区 0.98 m程である。2区の範囲は南北 20.4 m×東西 118.6 m（西区：南北 13.9 m×東西 26.9 m、東区：南北 20.4 m×東西 55.2 m）。古墳時代の遺構の多くは東区に確認されている。比較的遺構が集中する中央部の位置は北緯 36 度 29 分 52 秒、東経 139 度 54 分 38 秒である（世界測地系）。

第1節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴建物跡

S1-1（第90～94図、第29表、図版二三・二四・六四・六五）

概要 本遺構は東区の中央で確認された竪穴建物跡である。位置 104-40 グリッドに位置する。確認標高は 86.250 m～86.193 mである。平面形・規模 南北 6.65 m×東西 6.92 mの東西方向にやや長い隅丸長方形の竪穴建物である。四隅は丸味を帯びており、やや胴張り状の平面形状をしている。南壁に直交する軸線はN-39°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで観察された。覆土はレンズ状の堆積をしており、第1～第9層の自然堆積である。調査時の観察によると第1～3層中の白色粒は浅間B軽石の、第4層は褐色粘質土で建物の中心に向かい粘質を増す。灰白色粘土ブロックはHr-FAの可能性もある。壁 床面からの壁高は31.7～46.5 cmで床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 第12～14・24層はS1-1の住居貼床を形成しており、床面は概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り方面には、緩やかな凹凸がみられ全体的にほぼ均一に掘り込まれている。第15～26層で充填されている。柱穴 4本の主柱穴（P1・P2・P3・P4）を確認した。P1・P2では第30層とした柱痕が確認されている。第27・28・31～38・41～43・45層は裏込め土である。P4の第44層は抜き取り痕か。P1は径68×50×深さ53.8 cm、P2は径61×55×深さ76.2 cm、P3は径62×56×深さ49.7 cm、P4は径53×46×深さ41.7 cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が3.52 m、P2-P3間が3.54 m、P3-P4間が3.48 m、P1-P4間が3.55 mを測る。4本の柱穴は東西方向に長い長方形に配されている。盛土遺構 南西隅で確認された盛土遺構は、成形時に第27～29層を周囲の床面から6 cm厚に硬く締めて構築されたもので上面は平坦である。盛土遺構内には貯蔵穴（P5）・入口ピット（P6）が伴う。盛土の規模は東西4.14×南北2.20 mの半弧状をしている。西壁際が2.00 mになる。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居南西隅に位置している。平面形は長軸94 cm×短軸87 cmの隅丸長方形で、床面から底面までが56 cm。掘り込まれた底面は平坦である。覆土は第46～50層で自然堆積をしている。入口関連施設 南壁寄りの西側、盛土遺構状に位置するP6としたピットは、長軸46 cm、短軸44、深さが44.1 cmの隅丸方形をし、覆土は第51～54層の堆積である。配置的に入口ピットと考えている。第55・56層はP6の掘方埋土と判断した。壁周溝 D1とした壁周溝は四方の壁際を全周している。規模は短軸16～38×深さ13.7 cmである。第10・11層が壁周溝（D1）の埋土である。間仕切溝 間仕切り溝はD2・D3の2条が確認されている。D2は南壁のが跡が位置する軸に対して壁周溝から北方向に掘り込まれている。規模は長軸202 cm×短軸19～21×深さ20 cmである。D2の西側には入口ピットがあることから入口関連施設を仕切る用途



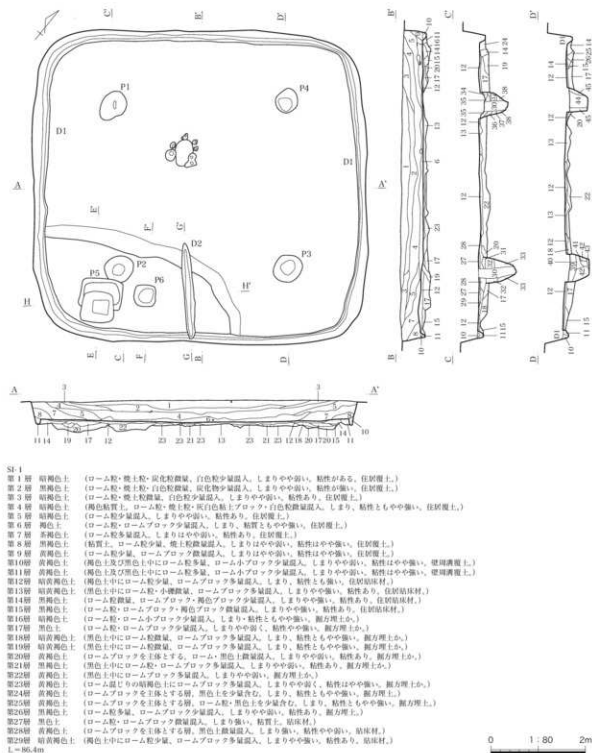
第90図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1実測図(1)

が想定される。D3は掘方面での確認である。規模は長軸162cm×短軸19～22×掘方面からの深さ22cmである。D3の配された位置はちょうど壁周溝から盛土遺構の北辺に沿っていることから、床面から掘り込まれていたものと推察する。1区のSI-6と同様に盛土遺構の北辺を面する間仕切りか。炉が跡は中央部の北寄りに位置しており、主柱穴の北辺の主軸よりも南側にある。長軸0.59×短軸0.38m、深さ2.1cmになる。火床面については、床材が被熱赤化した第3層が焼しまる。が跡の外周には18～50cmの楕円形の掘り込みが確認できた。床面からは3.8cmほど凹んでおり、炉の構築材の抜き取り痕と考えられる。出土遺物 遺物は713点出土している。本遺構の出土遺物は多く、取り上げ遺物だけでも186点に及ぶが、覆土に混入したものも多い。

これらのうち住居に伴うものが、埴(Na 1・2)、小形埴(Na 4・5・6)、S字状口縁甕(Na 10)、単口縁甕(Na 13)、有段口縁の壺(Na 21)、単口縁の壺(Na 16・23・24)、磨石(Na 25)・勾玉(Na 28)・砥石(Na 29)の14点が床面ないし床面直上で出土している。

平底の埴(Na 1)は西壁寄りの床面で出土しており、体部は底部からやや内彎気味に立ち上がる。口縁部はかなり歪んでいる。埴(Na 2)は南壁寄りの床面で出土しており、接合破片が東壁寄りの覆土から出土している。半球形の体部で、凹み底の底部である。小形埴(Na 4)は床面で出土した。口縁部～体部の破片である。

小形埴(Na 5)は床直出土したほぼ完形である。つぶれた状態で出土。頸部から口縁部にかけて直立気味に内彎して立ち上がる。胴部下半～底部にはヘラケズリ調整が成されており、底部は円形に調整され平底になる。やや口径が胴部径よりも大きくなる。小形埴(Na 6)は住居北西隅寄りの床面で出土しており、埴の口縁部は頸部からやや内彎気味に外傾している。体部は小形になり口径が体部径よりも大きくなる形状をしている。底部は平底になっている。古墳時代前期(4世紀中葉～後葉)に位置付けられる。

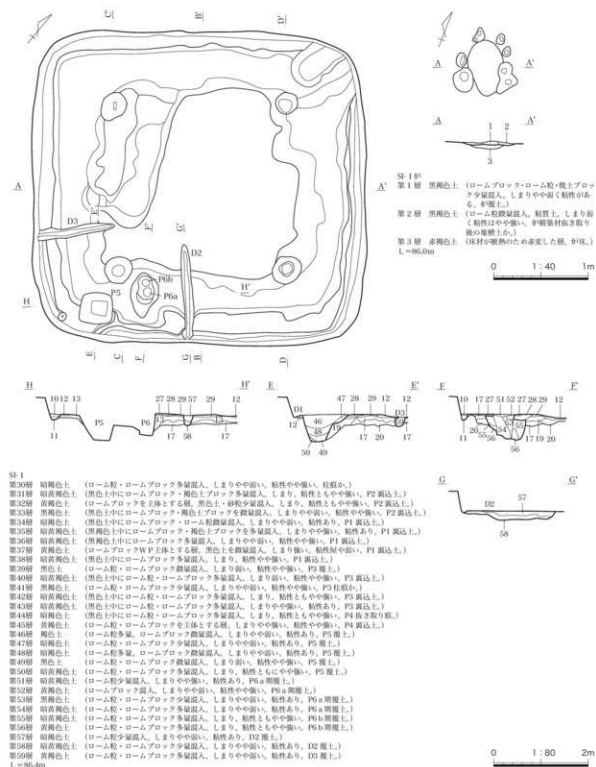


第91図 砂田姥沼遺跡2区 SI-1実測図(2)

高環の脚部片(No.8)も出土しており、中央部のほぼ床面直上で出土した。環部が欠損しており、最終堆積時の流入の可能性もある。

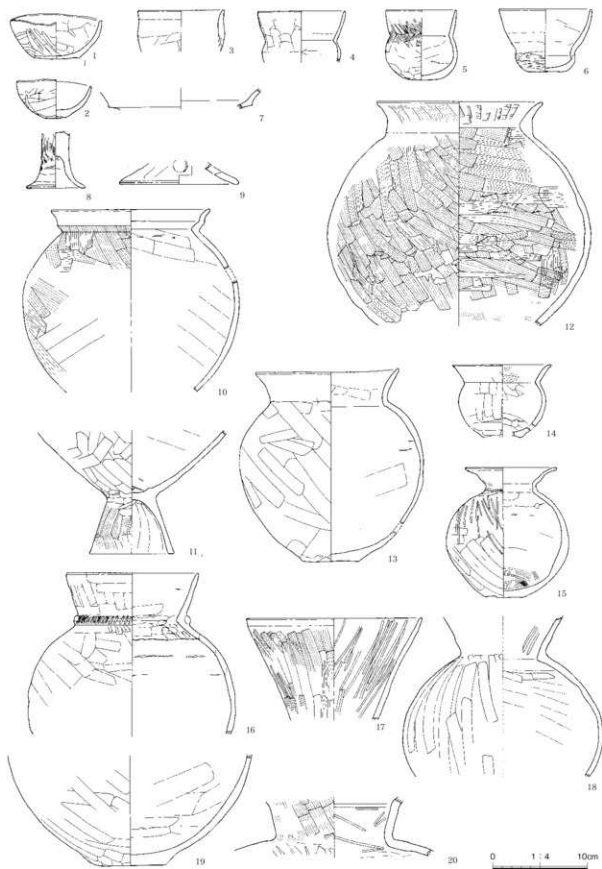
裏類は住居の四方に破片が散っているS字状口縁裏(No.10)の破片である。器厚が薄いことや調整・形状などからの台付裏(11)の破片と同一個体と考えられる。数点から床面から出土しているが、破片の大半は覆土からの出土であり、住居内に破片が散っていることなどから住居廃絶後に廃棄された裏である。裏の形状

第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査



第92図 砂田姥沼遺跡2区 S1-1実測図(3)

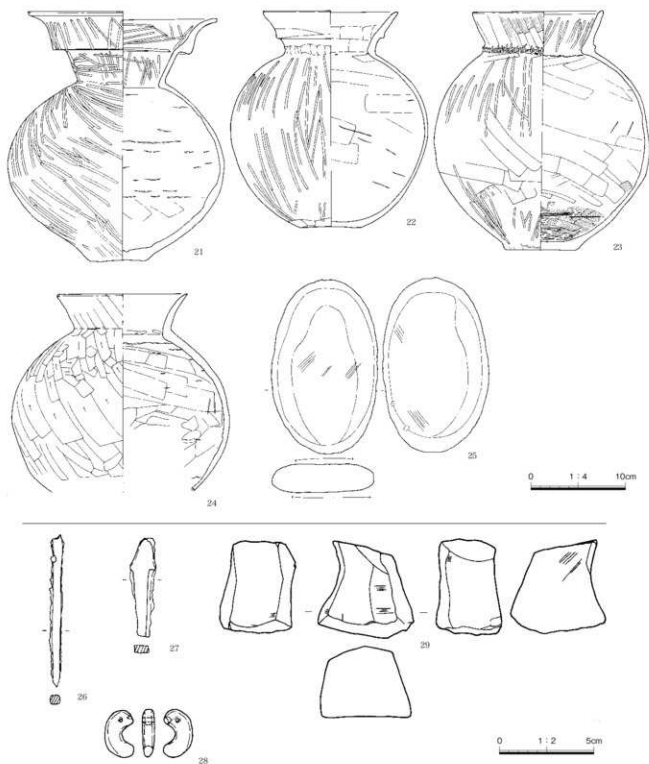
は口縁の屈曲も強く、受け口状の部分も明瞭で口唇部はつまみ上げている。台付裏(No.11)の胴下半部の破片は北西隅の覆土と、南西隅の床面から出土した破片が接合したものである。器厚は薄く胴部外面の調整はヘラケズリである。ハケメは脚台部の外面のみに施されている。その脚台部は「ハ」の字に開く形状で、下端の接地面はヘラナデで平坦に調整されている。なお、脚台部内面への折り返しは確認できない。球形の



第93図 砂田姥沼遺跡2区 SI-1出土遺物(1)

単口縁甕 (No 13) は西壁寄りの床面から出土しており、横位でほぼ形状を保って出土している。(No 4) と併せて本住居に伴う遺物と考えられる。

壺 (No 16) の口縁部～胴部上半の破片は北西隅の床面及び覆土で出土している。特徴的なのは頸部突帯である。突帯は頸部に撫でつけられており、突帯にはへら状工具によるキザミが施されている。キザミはほぼ



第94図 砂田姥沼遺跡2区 SI-1出土遺物(2)

等間隔に、突帯の上方から下方へ向けて工具を押し当てる。突帯上部の口縁部の表面と、下部の頸部表面には工具の接した痕跡が僅かに観察できた。有段口縁の壺(№21)は、出土状況は住居の南壁寄りの床面ないし覆土からまとまって出土している。口縁部端部は面取りがなされており、口辺部内面は有段で外反し、頸部は「く」字に屈曲する。胴部は球胴である。単口縁の壺(№23)は南西部の床面ないし覆土で出土している。口縁部内面に面取りが施されており、頸部外面に粘土突帯を貼り付けている。なお突帯は上下からキザミが交互に施されている。単口縁壺(№24)は南西部の床面直上で出土したもの。底部が欠損している。胴部の形状は丸腰、ケズリが主体的である。口縁部はつまみ上げ調整である。磨石(№25)は西壁寄りの床面直上から出土している。表裏に磨り痕が確認でき、磨り面は磨滅して滑らかである。

石製品は、南壁寄りの床面から出土した蛇紋岩質の滑石変成岩の勾玉(№28)である。表面は光沢があり、良く研磨されている。南壁際から出土した砥石(№29)は破片で、4面に砥面がある端部にあたる。粘板岩で比較的節理が明瞭である。

この他に覆土から出土したものは、壺(№18)の破片である。口縁端部が欠損しているが単口縁であろう。北壁寄りから南壁寄りにかけて広範囲に散っており、住居廃絶後に混入したものである。赤彩を施した壺(№20)の口辺部～胴部上半の破片で、住居中央部の床面から覆土にかけて破片が出土している。埋没過程での混入であろう。残存している口辺部端部の内外面が外側に屈曲しており、有段口縁の形状をするものと考えられる。棒状の鉄製品(№26)である。断面は扁平な四角形で図の下端部が尖っている形状である。鉄製の簀の先端部の可能性がある。5世紀後半の混入品。鑿筋式鉄簀(№27)で簀身と茎部の先端が欠損している。

本遺構の時期は、S字状口縁壺(№10)の頸部や胴部の形状、勾玉(№28)の形状が中期の形態に近いことなどから、器台が混入しなくなる段階の古墳時代前期(4世紀中葉～後葉)を想定している。

第29表 砂田姥遺跡2区 S1-1出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図柄	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土器 壺	口 9.7 高 4.8 底 4.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向の光沢のあるミガキ後、斜方向の光沢のあるミガキ、体部下端ヘラケズリ後光沢のあるヘラナデ、底面外面不定方向のヘラケズリ後、ヘラナデ、体部～底面内面ヘラナデ・ナデ。口縁部～底面内外面の一部に黒炭	灰青褐色 小砂粒多量、石英少量、小礫微量 焼成：良好	床面直上 口縁部の1/3欠損 №20
2 土器 壺	口 9.6 高 4.1 底 2.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、底面外面一定方向のヘラケズリ、体部～底面内面ヘラナデ・ナデ。口縁部～底面外面及び口縁部～体部内面に黒色処理	明黄褐色 小砂粒・雲母片少量、小礫・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部の1/4、体部一部欠損 №17・181
3 土器 鉢	口 10.0 高 14.4	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヘラナデ、胴部外面ヨコ方向のヘラケズリ、胴部内面ヘラナデ・ナデ。口縁部内面に磨付造	灰青褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～胴部の1/4 残存 №171
4 土器 皿	口 10.2 高 15.5	口縁部外面ヨコナデ後ミガキ、口縁部内面ヨコナデ、頸部外面タテ方向のヘラケズリ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリ、体部内面ヨコ方向のヘラケズリ、体部外面に黒炭	明黄褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部1/3 残存 №11・P5・野
5 土器 皿	口 7.6 高 7.5 底 2.1	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面明毛目調整、体部外面ナデ後、胴部下にヘラケズリ、体部内面ヘラナデ・ナデ。底面外面に黒炭	褐色 小砂粒・小礫少量、石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 ほぼ完形 №35
6 土器 皿	口 10.0 高 6.7 底 3.7	口縁部上下内外面ヨコナデ、口縁部下内外面ヨコ方向のヘラナデ、体部外面ヨコ方向のミガキ、体部下に光沢のあるヘラナデ。口縁部内面～底面赤彩、底面外面に黒炭、底面内面は黒炭剥離著しい	(外) 褐色 (内) 明赤褐色 小礫少量、小砂粒・石英微量 焼成：良好	床面 ほぼ完形 №23

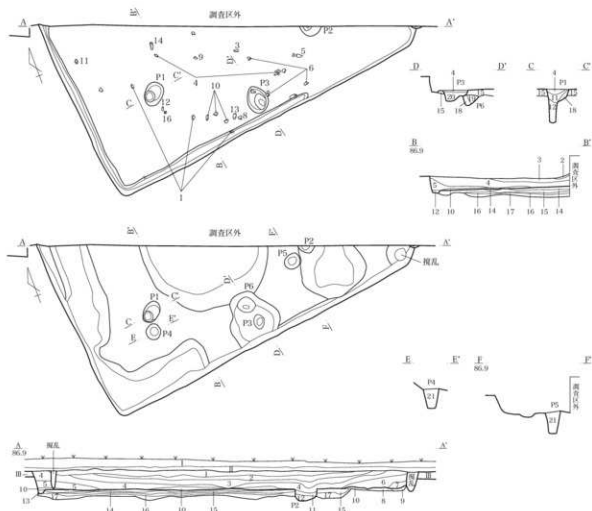
第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査

7 土師器 高坪	高 12.3 体底最大径 (15.3)	体底外面ヨコナデ、体底内面ナデ。 体底内面黒色処理か	(外) にぶい黄褐色 (内) 浅黄褐色 小砂粒少量、雲母片微量 焼成：良好	甌土 体底部一部残存 No 20
8 土師器 高坪	高 16.5 底径 8.4	内面外面刷毛目、下端ヨコ方向のヘラナデ、頸部 外面ヘラナデ・ナデ、頸部内面ヨコナデ	(外) 明赤褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・白色粒少量、小礫・石英微量 焼成：良好	床面 頸部一部残存 No 86
9 土師器 高坪	高 12.3 底径 (12.6)	頸部外面タテ方向のヘラナデ、内面ナデ、 頸部内面ヨコナデ 備考：頸孔 4 と も外面から内面へ穿孔。頸部外面は赤彩、裾部 内外面に黒炭	(外) 明褐色 (内) 棕色 小砂粒・雲母片少量、白色粒微量 焼成：良好	床面 頸部、裾部 1/4 残存、環部欠損 No 21・甌土・灰炭
10 土師器 甌 (5 字匚)	口 16.8 高 19.4 最大径 (22.8)	口縁部内外面ヨコナデ、頸部～頸部外面斜方向の ヘラナデ、内面ヘラナデないナデ、受け口 (S) 状口縁。口縁部～頸部外面に黒炭、口縁部外 面に付着。頸部外面の一部に焼熟赤土カ	明黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、雲母片少量、 小礫微量 焼成：良好	床面 口縁部・頸部 1/4 残存 No 26
11 土師器 甌 (台付匚)	高 13.1 底 8.8 最大径 (20.0)	頸部外面斜方向のヘラナデ、内面ヘラナデ・ナデ、 頸部外面斜方向のハケメ後、裾部外面に ヨコ方向のヘラナデ、裾部内面ヨコナデ、内面タ テ方向のヘラナデ、頸部底部面ナデ調整を施し 平坦にしている。 頸部と頸部外面の接合部分はヨコ方向のヘラナデ で調整されている。頸部外面に付着。	(外) 明黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、雲母片少量、 小礫微量 焼成：良好	甌土 頸部下半 1/4、頸部外残存 No 13・25・甌土
12 土師器 甌	口 17.8 高 23.6 最大径 (28.1)	口縁部外面タテ方向の刷毛目後ヨコナデ、口縁部 内面ヨコナデ後ヨコ方向の刷毛目、頸部外面ナ デ、頸部外面斜方向の刷毛目、頸部～頸部内面ヨ コ方向の刷毛目 備考：単口縁の刷毛目調整後、 口縁部内外面・頸部外面に付着。	(外) 黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、小礫 ・雲母片少量 焼成：良好	甌土 頸部下半 1/4、頸部外残存 No 28・31
13 土師器 甌	口 15.2 高 20.5 底 5.9 最大径 19.3	口縁部内外面ヨコナデ、頸部内面はヨコナデ後ヨ コ方向のヘラナデ。頸部外面斜方向のヘラナ デ、内面ヘラナデないナデ底部外面不定方向の ヘラナデ。口縁部～頸部外面に付着。	(外) 黒色 (内) 明褐色 小砂粒少量、赤色粒・白色粒少量、小礫 ・石英微量 焼成：良好	床面 口縁部 1/2・頸部一部欠損、底部 残存 No 11
14 土師器 甌	口 10.5 高 7.7 底 9.9 最大径 9.25	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外面ヘラナデ、 口辺部内面ハケメ、頸部外面タテ方向のヘラナ デ、下はヨコ方向のヘラナデ、頸部内面ヘラ ナデ、頸部下端面ヨコ方向のハケメ、底部外 面ナデか。器内外面に黒色処理か	(外) 黒色 (内) 黒褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、石英少量、 小礫微量 焼成：良好	甌土 ほぼ定形 No 147
15 土師器 小形蓋	口 9.7 高 13.8 底 4.1 最大径 13.0	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面タテ方向の刷毛 目、頸部外面上はヨコ方向のヘラナデ後タテ 方向のヘラミガキ。下は斜方向のヘラナデ、 内面ヘラナデ・ナデ、底部外面ヘラナデ、内面ハ ケメ。頸部外面に黒炭	(外) 明黄褐色 (内) 黒色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、石英少量、 小礫微量 焼成：良好	甌土 ほぼ定形 No 15
16 土師器 蓋	口 14.0 高 17.3	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面はタテ方向の ヘラナデ後、端部付近ヨコ方向のヘラナデ、頸部 は粘土組による断面平坦状の変形を認めてつけ後 ヘラナデ工具による斜方向のキザミ、突部との境 にタテ方向の刷毛目、頸部内面ヨコ方向のヘラ ナデ、頸部外面のヘラナデ、内面ヘラナデ・ナデ。 口縁部～頸部外面に黒炭、口縁部内面に黒炭 2 段、頸部内面に黒炭 5 段	(外) 明黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、小礫少量 雲母片微量 焼成：良好	床面 頸部上半～中位まで残存、頸部下 半～底部欠損 No 22・24
17 土師器 蓋	口 18.5 高 10.7	器面やや磨滅、口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外 面タテ方向の刷毛目、内面ヘラナデないナデ後 タテ方向のヘラミガキ。口辺部内面に黒炭。	浅黄褐色 小砂粒・石英・赤色粒・白色粒少量、小 礫微量 焼成：良好	甌土 口縁部～頸部 2/3 残存、頸部以下 欠損 No 38・113・149・150・151 ・154・156・157・158・甌土
18 土師器 蓋	高 16.7 最大径 (21.1)	頸部外面ヨコナデ、頸部内面ナデ後ヘラミガキ、 頸部外面タテ方向のヘラナデ、頸部内面ヘラナ デないナデ。頸部外面に黒炭。	(外) 明黄褐色 (内) 黒色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、石英少量、 小礫微量 焼成：良好	甌土 頸部～頸部中位 1/3 残存、口縁部 及び頸部下半欠損 No 37・67・109・111・115
19 土師器 蓋	高 10.6 底 7.6	器面磨耗のため調整不明瞭、頸部外面斜方向のヘ ラナデ、内面上ヘラナデ、下平ヘラナデ、 底部外面不定方向のヘラナデか、内面はヘラナデ ないナデ。頸部内外面に付着。	(外) 黄褐色 (内) 明黄褐色 小砂粒・雲母片・赤色粒・白色粒少量、 小礫少量 焼成：良好	甌土 頸部下半 1/4、底部残存 No 48・51・52・57・82・97 ・102・145・甌土
20 土師器 蓋	高 16.2 最大径 (21.0)	口辺部～頸部外面タテ方向の刷毛目、内面ヨコ方 向のヘラナデ後ヘラミガキ、頸部外面ヨコ方向の ヘラナデ後斜方向のミガキ、内面ヘラナデ。 有段口縁部。口辺部～頸部上半の外面に赤彩。	(外) 明赤褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量、 小礫・石英微量 焼成：良好	甌土 口辺部～頸部上半 1/4 残存 No 132・137・140・142・143

21 土師器 壺	口 20.0 高 26.3 底 5.7 最大径 22.8	口縁部断面取り、口縁部内外面ヨコナデ、口辺部内外面ヘラミガキ、頸部外面タテ方向のヘラナデ後、タテ方向のミガキを備えてヨコ方向のミガキ、頸部内面ヘラミガキ、胴部外面斜方向のヘラミガキ、胴部内面ナデ、底部外面不定方向のヘラナデ。有段口縁部。胴部外面に黒炭、胴部内面に輪沈み痕 9 段	褐色 小砂粒多量、小礫少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 ほぼ定形 No 8・80 下・133・138・159 ・162・183・184・覆土
22 土師器 壺	口 14.2 高 22.9 底 6.3 最大径 20.8	胴部下平～底部外面摩耗のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヨコ方向のヘラナデ、口辺部外面内面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面斜方向のヘラミガキ、胴部下端ヨコ方向のヘラナデ、胴部内面ヘラナデなしナデ。有段口縁。胴部外面に黒炭	浅黄褐色 小砂粒・小礫多量、雲母片・白色粒少量 赤色粒微量 焼成：良好	床面 ほぼ定形 No 9
23 土師器 壺	口 13.8 高 25.3 底 7.9 最大径 22.6	口縁部断面面取り、口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外面ハケメ、内面ヨコ方向のヘラナデ後ヘラミガキ、頸部外面に突帯を貼付。突帯の上下から交互にキザミ、胴部～胴部内面ヘラナデ、胴部下端内面ヨコ方向のハケメ、底部外面ヘラナデ後一定方向のミガキ。単口縁部。胴部に突帯貼付、胴部外面に黒炭、胴部内面に輪沈み痕 2 段	褐色 小砂粒多量、小礫・白色粒少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 ほぼ定形 No 7・9・18
24 土師器 壺	口 13.7 高 21.1 最大径 22.3	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部内外面ヘラナデ、胴部～胴部外面ヘラナデ、胴部内面ヘラナデなしナデ。単口縁。胴部外面に黒炭、胴部内面に輪沈み痕 6 段	(外) 浅黄褐色 (内) 浅黄褐色 小砂粒・白色粒多量、小礫少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部一部・胴部 1/4、胴部下端～底部欠損 No 10
25 石製品 磨石	最大長 18.5 最大幅 11.4 最大厚 3.0 重量：935.30	扁平で断面楕円形の自然石、表面が磨滅しており、中央部が凹む。石質は有色鉱物を含む多孔質安山岩	灰色	床面直上 完存 No 34
26 鉄製品 鉄鏝	全長 [8.95] 最大幅 0.55 最大厚 0.45 重量：6.83	鏝身不明。	暗褐色	覆土 鏝身と鏝柄上部欠損 No 167
27 鉄製品 鉄鏝	全長 [5.1] 鏝身 [1.6] 鏝柄長 [3.5] 重量：8.46	鋸歯式鉄鏝 鏝身は片欠内側。	暗褐色	覆土 鏝身と鏝柄上部残存 No 139
28 石製品 短玉	最大長 2.5 最大幅 1.5 最大厚 0.7 孔径 0.15 重量：3.08	縦紋石質の滑石変成岩。穿孔は右側面から穿孔。	灰オリーブ色	床面 定形 No 1
29 石製品 砥石	最大長 [5.0] 最大幅 4.9 最大厚 3.9 重量：88.40	残存する四面をともに使用。磨面はやや軟質、磨面の発達した粘板岩。裏面は平滑に減るが、左側面は強く湾曲する。砥面には縦い十字状の磨痕が見られる。砥面以外の全ての面に黒色の付着物が見られる。表面は磨付着が。	灰黄褐色	床面 長い砥石の末端部付近 No 3

S1-2 (第95・96図、第30表、図版二四・二五・六五)

概要 本遺構は東区の中央で確認された竪穴建物跡である。建物の北側約 1/2 が調査区外となる。位置 104-40 グリッドに位置する。確認面標高は 86.298 m～86.210 m である。平面形・規模 南北 [4.04] m×東西 7.18 m の竪穴建物である。南壁に直交する軸線は N-8°-W である。覆土 堆積状況は東西ラインで観察できる。覆土はレンズ状の堆積をしており、第 1～第 10 層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は 18.2 cm～37 cm とやや浅い。壁は床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。掘り方埋土は第 14・15 層で上面が床面となる。断面観察から掘り方は西壁際と中央部と南東隅の手前に多少の凹凸が掘り込まれている。これは拡張前の建物の痕跡と考えられ、第 16 層は古い建物の貼床材。第 17 層は掘り方埋土になる。東側にのみ拡張し、拡張部分には掘方を設けず掘削面が床レベルである。柱穴 2 本の主柱穴 (P1・P2) を確認した。平面形はいずれも円形で床面からの掘り込みは浅い。覆土は第 11・12 層が確認できた。柱痕



- S52
- 第1層 暗褐色土 (ローム小ブロック・焼土粒・炭化物微量、ローム粒・白色粒少量混入。しまり強い、粘性があり、住居覆上。)
- 第2層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまり強い、粘性があり、住居覆上。)
- 第3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量、白色粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒少量、焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第5層 褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量、焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第6層 黒褐色土 (焼土粒少量、ローム粒・ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第7層 黒褐色土 (焼土粒多量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第8層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒多量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第9層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒少量、白色粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第10層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック・焼土粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり、住居覆上。)
- 第11層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロック・焼土粒少量、炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、P1・P2覆上。)
- 第12層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性ややあり、P1・P2覆上。)
- 第13層 暗褐色土 (ローム粒多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P1覆上。)
- 第14層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、焼土粒・炭化物微量混入。しまり強い、粘性やや強い、基壇時の住居床材。)
- 第15層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、基壇時の住居敷層上。)
- 第16層 黄褐色土 (ローム主体、黒褐色土少量混入。しまり強い、粘性やや強い、居住床材か。)
- 第17層 黄褐色土 (ローム主体、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、居住敷層上。)
- 第18層 黄褐色土 (ローム小ブロック少量、ローム粒多量、黒褐色土少量混入。しまりやや強い、粘性強い、P2・P6覆上。)
- 第19層 黄褐色土 (ローム粒主体、黒褐色土少量混入。しまりやや強い、粘性強い、P6覆上。)
- 第20層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、P3覆上。)
- 第21層 黄褐色土 (ローム主体、黒褐色土少量混入。しまりやや強い、粘性強い、P4・P5覆上。)

土層厚 86.9m・86.4m

I層 暗褐色土 (ローム粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、耕作土上。)

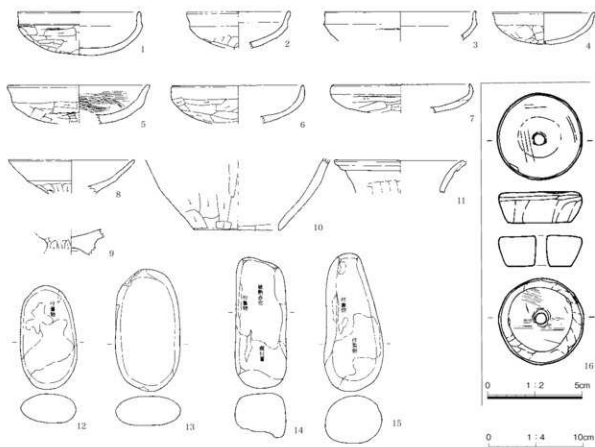
II層 暗褐色土 (炭化物微量多量混入。しまり強い、粘性あり、床土。)

III層 褐色土 (ローム粒微量、焼土粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)

0 1:80 2m

第95図 砂田姥沼遺跡2区 S1-2実測図

は確認されていない。P1は径52×37×深さ72.1cm、P2は径45×[19]×深さ23.2cm、柱間寸法はP1-P2間が3.64mである。入口関連施設 南壁際中央部にあるP3としたピットは、長軸57×短軸44×深さ21.7cmの楕円形で、覆土は第20層の堆積である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 D1と



第96図 砂田姥沼遺跡2区 S1-2出土遺物

した壁周溝は西壁際～南壁中央付近の壁際を巡っている。規模は短軸 11 ～ 27 × 深さ 7.4 cm である。第 12・13 層が壁周溝 (D1) の埋土である。ビット P4・P5・P6 は建物の掘方面で確認されたビットである。いずれも拡張前の掘方の内側で確認されており、P4・P5・P6 とも拡張後の P1・P2・P3 付近に配されていることから P4・P5 は旧竪穴の柱穴、P6 は入口ビットと考えられる。覆土は P4 ～ P6 ともローム主体の第 18・19・21 層でそれぞれ埋め戻されている。P4 は長軸 41 × 短軸 33 cm の楕円形をしている。掘方面からの掘り込みは 40.5 cm、P5 は長軸 35 × 短軸 30 cm の楕円形をしている。掘方面からの掘り込みは 46.7 cm、P6 は長軸 39 × 短軸 30 cm の楕円形をしている。掘方面からの掘り込みは 20 cm を測る。出土遺物 遺物は 167 点出土している。本遺構の出土遺物は比較的多いが、取り上げ遺物は 29 点になる。覆土に混入したものも多い。それらのうち、図示し得たのは 16 点である。模倣坏 (No. 1) は接合遺物で蓋模倣形になる。覆土中から床面にかけて、破片も西壁寄りから南壁寄りとはばらけており、本遺構に伴うものではない。器面外面の外縁が明瞭で、口縁部の立ち上がりも直線的であることから 6 世紀前葉～中葉に相当するか。模倣坏 (No. 2) は入口ビットの上面、床面と同じレベルで出土した蓋模倣形である。内面の調整はナデ調整のみで、口径も小型化している。6 世紀後葉か。模倣坏外反形 (No. 5) の破片は覆土中から出土した。器面内外面とも黒色処理、内面には細密なヘラミガキが施されている。口唇部の内外面は摩滅のため、にぶい黄橙色の地が確認できる。模倣坏 (No. 6) 半球形の破片の内面はナデ調整のみで、口径は 14 cm 前後、体高は 4 cm を超えている。(No. 4) も破片の接合遺物で、最終堆積時に混入したか。器面は内外面共に黒色処理、内面はナデ調整である。口径は歪みがあるが残存部分から 11 cm が推定される。体高は 3.75 cm と扁平化している。模倣坏 (No. 7) の半球形の破片は P1 内出土である。体高は扁平化し口径は 14.6 cm、内面にはナデ調整がされている。模倣坏蓋模

微形 (No. 3) の破片も覆土からの出土で、器面内面はナデ調整が施されており、調整の減少が進んでいる段階のものである。蓋模微形は6世紀後葉には消滅している。短脚高杯 (No. 8) の杯部片は口径が13.4 cmと小型化しており、古墳時代後期後葉を想定させる。短脚高杯 (No. 9) は体底部の破片である。(8) と同一個体の可能性もある。無底式の甗 (No. 10) の胴部破片は、同一個体が周辺に確認できるが、接合関係はない。やや胴部に丸味を持つことから、古墳時代後期中葉～後葉が想定できるか。壺の口縁部片 (No. 11) は口縁部を折り返している。端部には面取りがなされ、沈線が巡っている。後期末葉のものか。

石製品は灰色の滑石製の紡錘車 (No. 16) が出土している。上面及び下面は平坦に研磨されている。穿孔は上面から下面へと穿たれており、下面における穿孔時の剥離は0.95 cmに及ぶ。側面を成形し、最後に上端部をヨコ方向に研磨している。編物石 (No. 14) の図下半は全体に煤が付着しており、カマドの支脚になる可能性もある。

本竈穴は建物の大半が北側の調査区外になるため、カマドの有無も不明である。また、図示した遺物のほとんどが覆土から出土しており、直接的に遺構に伴うものではない。これらは古墳時代後期中葉～後葉がほとんどである。若干、後期前葉～中葉の遺物も覆土中に含まれている。本遺構の時期は古墳時代後期前葉段階に位置付けたい。

第30表 砂田姥沼遺跡2区 S1-2出土遺物

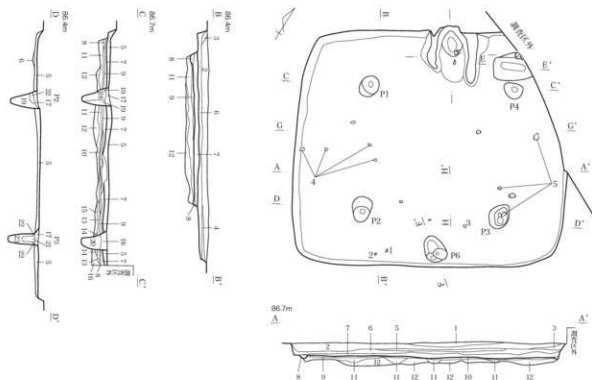
(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 [13.0] 高 4.6	口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラケズリ、体部～底部内面ナデ。模範環蓋模微形、口縁部内外面及び体部内面磨仕上げ。体部外面に接合痕1段	褐色 赤色粒少量、小砂粒、雲母片微量 構成：良好	覆土 口縁部～体部1/2、底部残存 No. 3・8・27・南東・東区
2 土師器 杯	口 [11.0] 高 3.9	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ後ヘラケズリ、体部内面ナデ。模範環蓋模微形。部内面黒色あり	褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・赤色粒微量 構成：良好	床面 口縁部～体部1/4、底部欠損 No. 18
3 土師器 杯	口 [16.0] 高 [3.2]	体部外面磨耗のため調整不可。口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。模範環蓋模微形	灰黄色色 小砂粒少量、赤色粒微量 構成：良好	覆土 口縁部～体部1/4、底部欠損 No. 16
4 土師器 杯	口 [11.0] 高 [3.75]	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。模範外反形、口縁部～体部内外面黒色処理	黒色 小砂粒少量、石英・白色粒微量 構成：良好	床面 口縁部～体部1/3、底部欠損 No. 5・23・南東
5 土師器 杯	口 [15.0] 高 [4.1]	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラミガキ。模範外反形、口縁部内外面及び体部内外面黒色処理。体部外面に接合痕1段	オリーブ黒色 小砂粒少量、石英・雲母片・白色粒微量 構成：良好	覆土 口縁部～体部1/3、底部欠損 No. 25・南東
6 土師器 杯	口 [14.0] 高 [4.0]	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコないし斜方向のヘラケズリ、体部内面ナデ。模範外平球形、口縁部内外面磨仕上げ	褐色 赤色粒少量、小砂粒、石英微量 構成：良好	覆土 口縁部～体部1/4、底部欠損 No. 17・19・21
7 土師器 杯	口 [14.0] 高 [3.0]	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。模範外平球形、口縁部内外面磨仕上げ	にぶい黄褐色 小砂粒・小礫微量 構成：良好	床面 口縁部～体部1/4、底部欠損 No. 26
8 土師器 杯	口 [13.4] 高 [3.6]	口縁部～杯部上平外面ヨコナデ、口縁部～杯部内面ナデ。杯部下平外面ナデ後ヘラケズリ。短脚高杯、杯部内面黒色処理	(外) 灰黄色 (内) 黒色 小砂粒・白色粒少量、石英・雲母片微量 構成：良好	覆土 口縁部～杯部1/4、体底部～脚部欠損 No. 9・南東
9 土師器 高杯	高 [2.7]	体底外面タテ方向のヘラケズリ。体底部内面ナデ。胴部内面ヘラナデ。短脚高杯、杯部内面黒色処理	(外) にぶい黄褐色 (内) 黒色 小砂粒少量、石英・白色粒微量 構成：良好	覆土 体底部1/4残存、杯部及び脚部欠損 No. 14・南東
10 土師器 甗	高 [7.4] 底 [9.0]	胴部外面タテ方向のヘラケズリ後光沢のあるヘラナデ。胴部内面ナデ、胴部下端内面ヨコ方向のヘラナデ。無底式	にぶい黄褐色 小砂粒・雲母片・雲母片微量 構成：良好	覆土 胴部下端1/1残存 No. 12・南東
11 土師器 壺	口 [14.0] 高 [3.5]	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面ナデ後ヨコ方向のヘラナデ。内面ナデ。面取りされた口縁部に沈線が巡る	にぶい黄褐色 小砂粒・雲母片・赤色粒少量 構成：良好	覆土 口縁部～頸部の1/4残存 No. 1

12	最大長 10.9 最大幅 5.9 最大厚 3.1 重量: 307.22	扁平で断面楕円形の自然石、全周的に黒色の付着物あり、2～3mmの石英製品が少量、硬質な安山岩	灰白色	竪床内 完存 No. 29
13	最大長 12.9 最大幅 6.9 最大厚 3.1 重量: 450.26	扁平で断面楕円形の自然石、2～3mmの石英製品と有色鉱物を少量含む、硬質な安山岩	灰白色	床面 完存 No. 10
14	最大長 13.9 最大幅 5.4 最大厚 4.7 重量: 611.34	棒状で断面四角形の自然石、全周的に焼熟赤化、周の下半は煤が付着している。有色鉱物を含む、硬質緻密な安山岩	(上平) 明褐色 (下平) 黄褐色	覆土 完存 No. 4
15	最大長 14.5 最大幅 6.1 最大厚 5.0 重量: 640.97	棒状で断面門形の自然石、全周的に焼熟赤化、表面に黒色の付着物あり、2～3mmの石英製品が多く有色鉱物を含む硬質緻密な安山岩	に濃い赤褐色	床面 完存 No. 20
16	上径 4.4 下径 3.3 厚 1.6 孔径 0.65 重量: 44.86	磨石製 断面台形		覆土 完存 No. 6

S1-3A (第97・98・100図、第31表、図版二五・二六)

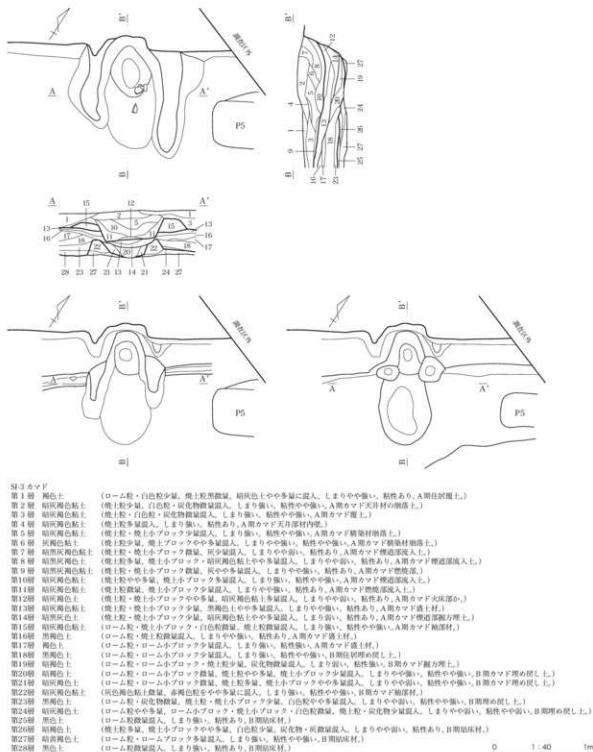
概要 本遺構は拡張住居であり、2時期の変遷が認められる。時期ごとに各遺構をA・Bとした。本期は新しい段階のA期となる。調査区の東区にあり北東隅が調査区外となる。平面形はカマドを起点とすると、東西幅はA・B期ともほぼ同じである。北壁側の拡張幅は小さいが南側への拡張は大きく、A期はB期を南北方向に拡張している。B期の床面を埋め戻しており、A期の床面の方が床面レベルが高い。それに伴いカマドもB期の袖材を残して盛土している。A期のカマドはB期とほぼ同位置に設けられている。位置 104-40グリッドに位置する。確認面標高は86.330m～86.250mである。平面形・規模 南北4.92m×東西5.80mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-32°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションではレンズ状の堆積をしており、第1～第6層までの自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は5.3cm～24cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。第7層で古い3B期を埋め戻している。第7層の上面が床面となる。南北ラインの断面観察では、南北に拡張し地山であるロームを削平してそのまま床面としていることが判る。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。床面からの掘り込み深い。明瞭な柱痕を確認することはできなかった。P1は径48×38×深さ60.4cm、P2は径53×36×深さ58.6cm、P3は径55×42×深さ63.3cm、P4は径42×32×深さ53.5cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.68m、P2-P3間が2.92m、P3-P4間が2.78m、P1-P4間が3.02mを測る。4本の柱穴は東西方向にやや長い長方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸73cm×短軸58cmの隅丸長方形で、床面から底面まで42.9cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。覆土は第24層～第27層であり自然堆積をしている。入口関連施設 南壁際中央部に位置するP6としたピットは、長軸56×短軸44×深さ37.5cmの楕円形で、覆土は第17・18・28層である。配置的に入口ピットと考えている。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは12cmと浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.20m×東西1.44mである。カマドも2時期あり、B期のカマドを埋め戻して構築している。カマドの構造はB期カマドの上面に盛土材である第16・17層を敷設した後に、カマドの掘方を形成し、第12・13層を充填している。火床面は第12層上面である。煙道部は火床面から緩やかに彎曲して立ち上がる。袖部は盛土の上面に第15層で構築している。出土遺物 本住居の遺物の出土



SI-3		
第1層 暗黄褐色土	(ローム主体、黒色土や多量混入。しりや強い、粘性やや強い、A期住居層上。)	
第2層 暗褐色土	(ローム粒・焼土粒散見。白色粒少量混入。しりや強い、粘性やや強い、A期住居層上。)	
第3層 褐色土	(ローム粒少量混入。しりややや強い、粘性あり、A期住居層上。)	
第4層 暗黄褐色土	(ローム主体、しりややや強い、粘性やや強い、A期住居層上。)	
第5層 褐色土	(ローム粒少量混入。ローム小ブロッコ少量混入。しりや強い、粘性やや強い、A期住居層上。)	
第6層 褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりや強い、粘性強い、A期住居層上。)	
第7層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりや強い、粘性やや強い、B期住居層の底上。)	
第8層 暗褐色土	(ローム粒や中量混入。ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第9層 黄褐色土	(ローム主体、しりややや強い、粘性強い、B期住居層上。)	
第10層 黒色土	(ローム粒散見混入。しりや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第11層 暗黄褐色土	(ローム主体、黒色土や多量混入。しりや強い、粘性やや強い、B期使用層上。)	
第12層 暗黄褐色土	(ローム主体、黒色土や多量混入。しりや強い、粘性やや強い、B期使用層上。)	
第13層 暗褐色土	(ローム粒少量混入。ローム小ブロッコやや多量混入。しりややや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第14層 暗褐色土	(ローム粒少量混入。ロームやや多量混入。しりややや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第15層 暗褐色土	(ローム主体、しりややや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第16層 暗黄褐色土	(ローム・ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、B期使用層上。)	
第17層 黒色土	(ローム、白色土・砂粒・焼土粒・灰色粘土粒・ローム小ブロッコ、砂粒混入。ややシロト質。しりややや強い、粘性あり、P1・P5覆土上。)	
第18層 黒褐色土	(ローム小ブロッコ・ローム粒少量混入。しりややや強い、粘性あり、P1・P4・P5覆土上。)	
第19層 暗褐色土	(ローム粒散見。ローム小ブロッコ少量混入。粘質土。しりややや強い、粘性あり、P1覆土上。)	
第20層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、P4覆土上。)	
第21層 黒褐色土	(ローム粒・灰色粘土・ローム小ブロッコ少量混入。砂粒・焼土粒散見混入。粘質土。しりややや強い、粘性やや強い、P3覆土上。)	
第22層 暗褐色土	(ブロッコ状に集中するローム小ブロッコ少量。灰色粘土小ブロッコ・砂粒散見混入。しりややや強い、粘性あり、P2・P3覆土上。)	
第23層 黄褐色土	(ローム小ブロッコ主体。褐色土中にロームブロッコ混入。しりややや強い、粘性あり、P3覆土上。)	
第24層 暗褐色土	(ローム粒・焼土粒散見。灰色粘土小ブロッコ混入。しりややや強い、粘性あり、P5覆土上。)	
第25層 暗褐色土	(ローム粒・灰色粘土・ローム小ブロッコ少量混入。砂粒・焼土粒散見混入。粘質土。しりややや強い、粘性あり、P5覆土上。)	
第26層 暗褐色土	(褐色土中に暗褐色土の混入層。ローム粒散見混入。しりややや強い、粘性あり、P5覆土上。)	
第27層 暗黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりや強い、粘質土。P5覆土上。)	
第28層 褐色土	(ローム粒散見。ローム大ブロッコ少量が褐色土中に混入。しりや強い、粘性あり、P6覆土上。)	
第29層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、P7覆土上。)	
第30層 暗褐色土	(ローム粒やや多量混入。しりややや強い、粘性あり、P7覆土上。)	
第31層 褐色土	(ローム粒やや多量混入。しりややや強い、粘性あり、P7覆土上。)	
第32層 暗褐色土	(ローム粒少量。ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、P8住居層上。)	
第33層 暗褐色土	(ローム粒やや多量。ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、P9覆土上。)	
第34層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性あり、P9覆土上。)	
第35層 暗褐色土	(ローム粒少量混入。しりややや強い、粘性やや強い、P9覆土上。)	
第36層 暗褐色土	(ローム粒やや多量。ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性やや強い、P9覆土上。)	
第37層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロッコ少量混入。しりややや強い、粘性やや強い、P9覆土上。)	
L=86.7m・86.4m		

第97図 砂田姥沼遺跡2区 SI-3A 実測図

状況は取り上げ遺物としては206点ある。このうち、取り上げた遺物は20点になる。この他、覆土中も模倣杯や甕の破片など多数出土している。床面直上から出土したものは模倣杯(Na 1)のみであった。蓋模倣形である。模倣杯(Na 2)の蓋模倣形の破片は口径が推定12.6cm、体高が3.4cmと4cm前後になる。模倣杯(Na 3)の蓋模倣形の破片である。口径、体高の推定から古墳時代後葉～末葉が相当するか。ハケメ調整甕(Na 4)も覆土からの出土で頸部～胴部上半の破片である。器厚が薄く、頸部が「く」字に屈曲することから古墳



第98図 砂田姥沼遺跡2区 SI-3A・3B実測図(1)

時代中期の甕である可能性がある。長胴甕 (Na 5) は床面ないし貯蔵穴・P 3 覆土からの出土の接合になる。本道構の廃棄時に近いと考えられる。口縁部に最大径を測るもので古墳時代後期後葉〜末葉になるか。

A 期の遺物は Na 1 ～ 5 であるが、ハケメ調整甕 (Na 4) は明らかに流れ込みである。模倣坏 (Na 1 ～ 3) の口径や長胴甕から古墳時代後期後葉に位置付けられる。

S1-3B (第99・100図、第30表、図版二六)

概要 本遺構は拡張住居のB(旧)期のものである。本期の床面からは2本の主柱穴と入口ピット、ピット2基を確認できた。位置

104-40グリッドに位置する。確認面標高は86.109m~86.056mである。平面形・

規模 南北3.28m×東西5.50mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に

直交する軸線はN-34°-Wである。覆土 B期はA期の拡張時にロームブロックを含む

第7層で埋め戻されている。柱穴 2本の主柱穴(P7・P8)を確認した。掘り方は小さく床面からの掘り込みは浅い。P8で第32

層とした柱痕が確認されている。P7は径30×27×深さ20.7cm、P8は径34×26×深さ21.9cm。柱間寸法は柱痕間隔でP7-P8

間が2.36mを測る。2本の柱穴はほぼ東西の中央軸に配されている。入口関連施設 南

壁際中央部に位置するP9としたピットは、長軸27×短軸26×深さ23.7cmの円形で、覆土

は第35~37層の堆積である。配置的に入口ピットと考えている。ピット P10は建物の

南西に位置しているピットで長軸24×短軸19cmの楕円形をしている。床面からの掘り込み

は10.9cmと主柱穴と比べると浅い。P11は建物の南側に位置しているピットで長軸29×

短軸27cmの円形をしている。床面からの掘り込みは14.1cmと主柱穴と比べると浅い。壁周

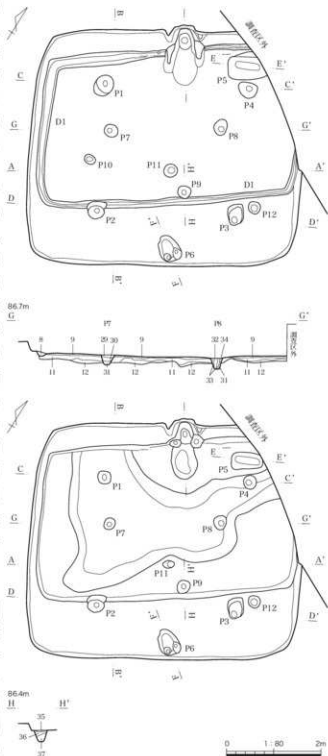
溝 D1とした壁周溝の幅は12~30cm、深さ8.9cmで北東隅が調査区外になるが全周するもの

と考える。壁周溝の覆土はA・B・Gラインの第8層が相当する。出土遺物 B期を

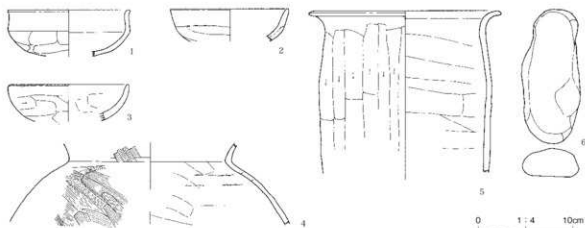
特定する遺物は見られないため時期は不明である。埋め戻し土(第7層)中に編物石(Na

6)が出土しただけである。本期は拡張していることから、古墳時代後期後葉としたA期より

も古い段階の6世紀中葉が想定される。



第99図 砂田姥沼遺跡2区 S1-3A・3B 実測図(2)



第100図 砂田姥沼遺跡2区 SI-3A・3B出土遺物

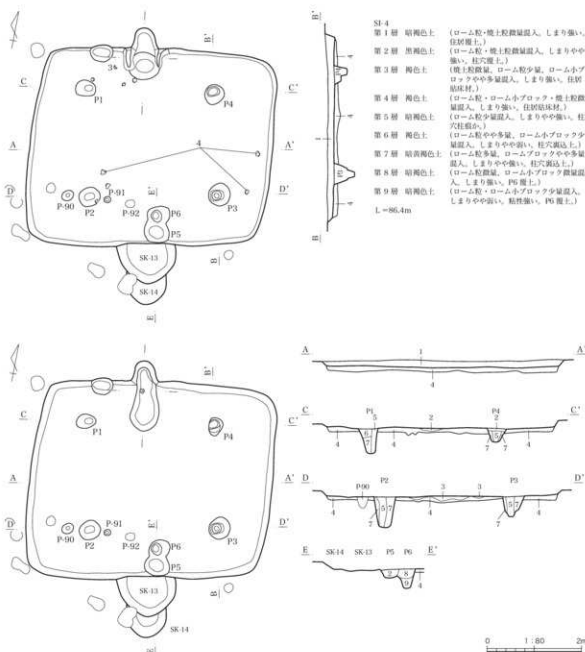
第31表 砂田姥沼遺跡2区 SI-3A・3B出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 部類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 新土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口(12.8 cm) 高[4.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリ、体部内面ナデ。縦横断面楕円形。口縁部外面及び口縁部～体部内面に塗仕上げ。	褐色 小砂粒・石英・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部の1/4 残存 % 9
2 土師器 杯	口(12.6) 高[3.4]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜め方向のヘラケズリか、体部内面ナデ。 縦横断面楕円形。口縁部内外面に塗仕上げ。	(外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・石英微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の一部残存 % 8
3 土師器 杯	口(13.0) 高[3.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラケズリか、体部内面ヘラナデ。縦横断面楕円形。	(外) 褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の一部残存 % 10
4 土師器 甕	高[8.5]	頸部内外面ヨコナデ、胴部外面斜方向のハケメ調紋、胴部内面ナデ後ヘラナデ。 胴部内面に後合痕2段	(外) 黒褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・赤色粒少量、石英・黒雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁～胴部上半一部 % 3・4・5・6・7・西部・北部・ベルト
5 土師器 甕	口(20.3) 高[17.1]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部～胴部外面ヨコナデ後タテ方向のヘラケズリ、胴部内面ヨコ方向のヘラナデ。胴部外面に保付着、口縁部～胴部の一部に施熱赤化あり	にぶい褐色 小砂粒・小礫多量、雲母片少量、赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部と胴部中央 1/3 残存 口縁・胴部 12・14・15・16・17・P4・1 層
6 石製品 編物石	最大長 14.2 最大幅 6.1 最大厚 3.0 重量：382.17	棒状で断面楕円形の自然石、2～3 mmの石英裏面と有色鉱物を多量に含む硬質緻密な安山岩	灰黄色	床面直上 完存 % 19

SI-4 (第101～103図、第32表、図版二七)

概要 本遺構は東区の西寄りで確認された竪穴建物跡である。南壁中央部でSK-13に重複されるが本建物跡の方が古い。北壁の西側はビットにより攪乱されている。位置 104～39グリッドに位置する。確認面標高は86.200～86.330 mである。平面形・規模 南北4.08 m×東西5.14 mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-11°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで第1層のみ確認された自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は10.2～15 cmと浅く、床面より直線的に外傾して立ち上がる。床 住居の掘り方は多少の凹凸がみられるが、均一的に掘り込まれている。掘り方は第4層で充填されている。この層の上面が床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。柱穴 4本の支柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。床面からの掘り込みは深い。全ての柱穴で第5層とした直径約10 cmの柱痕を確認した。P1は径44×32×深さ51.2 cm、P2は径45×39×深さ72.6 cm、P3は径48×46×深さ43.9 cm、P4は径44×40×深さ27.2 cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が2.26 m、P2-P3間が2.68 m、P3-P4間が2.18 m、P1-P4間が2.64 mを測る。



第101図 砂田姥沼遺跡2区 SI-4実測図(1)

4本の柱穴は東西方向にやや長い長方形に配されている。入口関連施設 南壁際中央部にあるP5・6としたピットが配されている。重複P5の方が新しい。柱穴や掘方などを観察しても時期差や拡張などの痕跡は認められず、この2基は同時期の入口ピットと判断している。P6が深く、P5が浅い皿状の掘り込みであり、P6が入口ピットの主要部分で、P5がそれに付随する施設である可能性もある。P5は長軸58×短軸[52]×深さ20.2cmの楕円形で、覆土は第2層である。P6は長軸47×短軸[37]×深さ39.1cmの楕円形で、覆土は第8・9層である。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは42cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.09m×東西0.84mである。カマドの構造は竪穴の掘方面に南北に長い楕円形の掘方を形成し、竪穴の掘方面の高さまで第11層で充填している。第11層の上位に竪穴の貼床である第10層を敷設している。袖材は第10層の上面(床面)に第9層で構築している。火床面は袖部内の床面が相当する。煙道部は火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。天井部

材などは第3・4・5・8層でカマド内に崩落している。出土遺物

覆土の遺物は246点に及ぶ。その大半が甕の胴部破片であり、次いで坏が混入している。取り上げ遺物は9点と少ない。覆土やカマド一括遺物には甕や坏の破片が多く含まれるが形を成すものはない。図

示できたものは4点のみである。鉢(Na2)は床面から出土しており、底部は平底で外面はヘラナデで調整している。甕(Na3)の口縁部の破片はカマド周辺部の床面

からの出土である。口縁部が大きく外反するもので長胴甕になる。口縁部の外反から古墳

時代後期末葉が想定できる。また、覆土から出土した小形壺(Na1)の有段口縁の破片は、頸部にはハケメが施されており口辺部内面には上下に連続しているミガキの痕跡が確認される。甕(Na4)の口辺部の破片は、形状から古墳時代後期の丸甕系であろう。本遺構は床面から出土した平底の鉢(2)や甕(3)の口縁部の形状から、古墳時代後期～末期(6世紀末葉～7世紀初頭)が想定できる。

第32表 砂田姥沼遺跡2区 S1-4出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 壺	口11.6 高3.0	口縁部～頸部外面ヨコナデ。頸部外面ヨコナデ後にハケメ。口縁部内面ヘラナデによる面取。口辺部内面ヘラナデ後ミガキ。頸部内面ヘラナデ。有段口縁の小形壺か	(外) 灰褐色(内) 灰褐色 小砂粒少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～頸部一部残存 カマド一括
2 土師器 鉢	口11.6 高5.9	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ヘラナデ。底部外面一定方向のヘラナデ後に光沢のあるヘラミガキ。口縁部～底部内面ナデ。底部外面に黒炭。口辺部外面に接合痕1段あり。	(外) 灰褐色(内) 灰褐色 小砂粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部の2/3、底部残存 No 8・9・南東区・北東区
3 土師器 甕	口18.9 高12.5	口縁部内外面ヨコナデ。口辺部外面ヨコ方向のヘラナデ後ヨコナデ。口辺部内面ヨコナデ	(外) 灰褐色(内) 灰褐色 小砂粒・雲母片・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～頸部の一部残存 No 1
4 土師器 甕	口14.1	口辺部外面ヨコナデ。口辺部内面ヨコ方向のヘラナデ後ヨコナデ。頸部外面ヨコ方向のヘラナデ。内面ナデ。胴部外面斜方向のヘラナデ。内面ナデ	(外) 灰褐色 小砂粒・石英・白色粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口辺部～胴部の一部残存 No 6

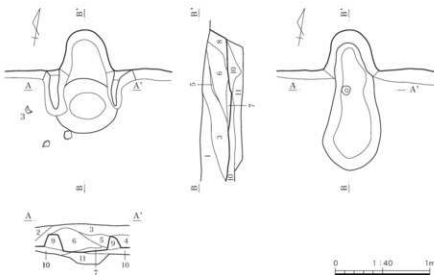
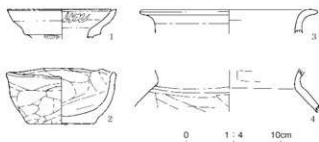


図 32 カマド

- 第1層 灰褐色土 (ローム粒・焼土粒少量混入。しまり強い。住居覆土。)
 第2層 灰褐色土 (ローム粒・焼土粒・粘土粒少量混入。しまり強い。住居覆土。)
 第3層 褐色土 (ローム粒・焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落土。)
 第4層 灰褐色土 (粘土粒・粘土小ブロックや砂多量。焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落土。)
 第5層 灰褐色土 (粘土粒・粘土小ブロック主体。焼土粒少量混入。しまり強い。カマド埋込部崩落土。)
 第6層 灰褐色土 (粘土粒少量。焼土粒少量混入。しまり強い。カマド埋込部崩落土。)
 第7層 灰褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド埋込部崩落土。)
 第8層 灰褐色土 (粘土粒少量。焼土粒や砂少量混入。しまりやや強い。カマド天井部崩落土。)
 第9層 灰褐色土 (粘土土層。しまり強い。カマド構築材。)
 第10層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒少量混入。しまり強い。住居基床土。)
 第11層 灰褐色土 (ローム粒少量。焼土粒や砂少量混入。しまりやや強い。カマド面覆土。)
 土層厚さ
1層=60cm

第102図 砂田姥沼遺跡2区 S1-4実測図(2)



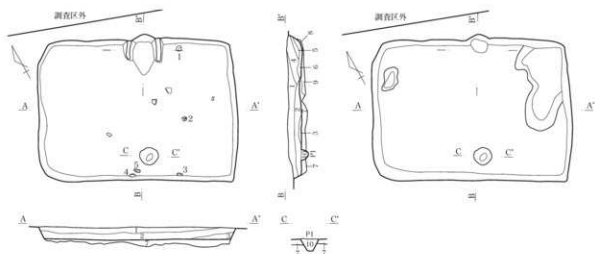
第103図 砂田姥沼遺跡2区 S1-4出土遺物

ら古墳時代後期の丸甕系であろう。本遺構は床面から出土した平底の鉢(2)や甕(3)の口縁部の形状から、古墳時代後期～末期(6世紀末葉～7世紀初頭)が想定できる。

第32表 砂田姥沼遺跡2区 S1-4出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

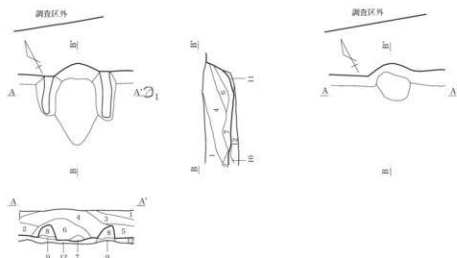
第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査



S1-5

- 第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘性。住居層上。)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック・焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘性。住居層上。)
 第3層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘性。住居層上。)
 第4層 灰褐色土 (焼土粒微量混入。しまりやや強い、カマド構築材崩落上。)
 第5層 灰褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い、カマド構築材崩落上。)
 第6層 黒褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い、カマド構築材崩落上。)
 第7層 暗褐色土 (ローム粒多量。ロームブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性強い。住居陥床材。)
 第8層 灰褐色土 (ローム粒微量。焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド側方層上。)
 第9層 黄褐色土 (ローム主体。粘性強い。住居陥床材。)
 第10層 暗褐色土 (ローム粒多量。ローム小ブロックやや多量。焼土粒微量混入。粘性強い、P1 覆土。)
 L=86.3m

0 1 80 2m



S1-5 カマヤ

- 第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘性。住居層上。)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量。焼土粒微量混入。しまりやや強い、やや粘性。住居層上。)
 第3層 灰褐色土 (ローム粒微量。焼土粒・焼土小ブロック少量混入。しまりやや強い、カマド構築材崩落上。)
 第4層 灰褐色土 (焼土粒微量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落上。)
 第5層 灰褐色土 (ローム粒少量。焼土粒微量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落上。)
 第6層 灰褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落上。)
 第7層 黒褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド構築材崩落上。)
 第8層 灰褐色土 (粘土主体。しまり強い。カマド構築材。)
 第9層 暗褐色土 (ローム粒多量。ロームブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性強い。住居陥床材。)
 第10層 暗褐色土 (ローム粒多量。ロームブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性強い。カマド構築材。)
 第11層 灰褐色土 (ローム粒微量。焼土粒少量混入。しまりやや強い。カマド側方層上。)
 第12層 黄褐色土 (ローム主体。粘性強い。住居陥床材。)
 L=86.3m

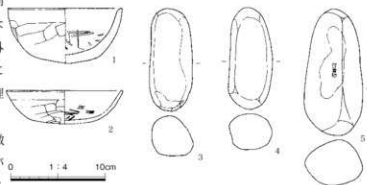
0 1 40 1m

第104図 砂田姥沼遺跡2区 S1-5実測図

S1-5 (第104・105図、第33表、図版二七・二八・六五)

概要 本遺構は西区の中央で確認された竪穴建物跡である。南壁際のみが確認されたため、本建物の範囲のみを拡張して調査にあたった。なお、本建物には柱穴・貯蔵穴は伴わない。位置 105-37グリッドに位置する。確認面標高は86.314～86.125 mである。平面形・規模 南北2.98 m×東西4.22 mの東西方向に長い隅丸長方形の竪穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-30°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで第1～3層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は9.9～35 cmと浅く、床面より直線的に外傾して立ち上がる。床 住居の掘り方は多少の凹凸がみられるが、均一的に掘り込まれている。掘り方は第7層で充填されている。この層の上面が床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。入口関連施設 南壁際中央部にあるP1としたピットが配されている。長軸37×短軸36×深さ23.8 cmの円形で、覆土は第10層である。他に付属施設が認められないが、配置から入口ピットと判断している。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは12 cmと浅く穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は0.85 m×東西0.85 mである。カマドの構造は竪穴の掘り込みで右側の袖部基底の第9層を配置してから、竪穴貼床材の第12層を敷設している。床面の上に左側の基底層である第9層を配置し、その上位に第8層を盛り付けることで左右の袖部を構築している。火床面は袖部内の床面が相当する。煙道部は第11層が裏込めされており、火床面から鋭角に外傾して立ち上がる。天井部材などは第3～5層がカマド内に崩落している。出土遺物 本建物の遺物は29点のみである。その大半が覆土からの出土である。取り上げ遺物は9点と少ない。そのうち図示できたものは5点のみである。出土遺物は、いずれも床面からの出土である。模倣杯の蓋模倣形・身模倣形が混入していない段階になる。杯(No.1)は半球形のやや深身の形態になる。内面のミガキは放射状ではなくヨコ方向のミガキ調整になっている。杯(No.2)は半球形の破片である。(1)と同様に内面のミガキ調整はヨコ方向になる。内面黒色処理であるが口縁部内外面及び体部～底部にかけて漆仕上りになっており、内外に異なる2つの処理が施されている。

本竪穴の時期は模倣杯の蓋・身模倣形が減少し、杯の内面のミガキ調整がヨコ方向に施される古墳時代末期(7世紀の中葉から後葉段階)の範疇に位置付けられる。



第105図 砂田姥沼遺跡2区 S1-5出土遺物

第33表 砂田姥沼遺跡2区 S1-5出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図号	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・構成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口(12.2) 高5.8	体部外面周状割離が著しく調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナデ後ヨコ方向のミガキ。半球形。	(外) に赤・黄褐色 (内) 棕色 小礫・雲母片・赤色粒微量 焼成: 良好	床面 口縁部～底部 1/4 残存 No.9
2 土師器 杯	口(12.4) 高3.5	口縁部内外面ヨコナデ。体部～底部外面ヘラケズリ。体部内面ナデ後ヨコ方向のミガキ。底部内面ナデ後一定方向のミガキ。半球形。体部内面黒色処理。口縁部内外面及び体部～底部外面は漆仕上り。	(外) に赤・黄褐色 (内) 黒褐色 小砂粒少量。石英・赤色粒微量 焼成: 良好	床面 口縁部～体部一部、底部残存 No.7・面

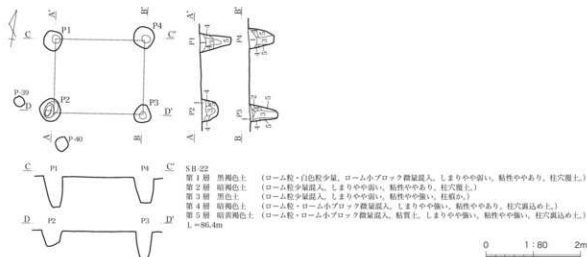
3	最大長 10.8 最大幅 4.5 最大厚 4.2 重量: 297.22	棒状で断面円形の自然石、石英珪石と有色鉱物を含む硬質緻密な安山岩	灰黄色	床面直上 実存 No. 1
4	最大長 10.75 最大幅 4.5 最大厚 3.8 重量: 309.89	棒状で断面不規則形の自然石、2～3mmの石英珪石と有色鉱物を含む硬質緻密な安山岩	灰色	床面 実存 No. 3
5	最大長 13.4 最大幅 6.23 最大厚 4.9 重量: 564.49	棒状で断面略円形の自然石、2～3mmの石英珪石と有色鉱物を含む硬質緻密な安山岩	灰黄色	床面 実存 No. 2

2. 掘立柱建物跡

砂田姥沼遺跡2区では2棟の掘立柱建物跡が確認されているが、遺物の出土状況から古墳時代に位置付けられた掘立柱建物跡は東区のSB-22のみが確認されている。

SB-22 (第106図、図版二八)

概要 桁行1間×梁行1間の側柱式の東西棟建物である。南を正面とすると建物裏側の方位はN-8°-Wである。位置 東区の西側、SI-3の南の104-40グリッドに位置する。確認面標高は86.233m～86.283mである。規模・柱間 桁行総長は1.88m(6.2尺)で、柱間寸法は南側柱列(P2-P3間)が1.88m(6.2尺)で、北側柱列(P1-P4間)が1.88m(6.2尺)である。梁行総長は1.54m(5.1尺)で、西妻柱列(P1-P2間)が1.54m(5.1尺)で、東妻柱列(P3-P4間)1.54m(5.1尺)である。面積は2.89㎡である。掘り方 平面形は短径0.38m～0.44m、長径0.37m～0.46mのほぼ円形である。遺構確認面での柱の直径は37.5cm～46cm、確認面からの深さは33.9cm～66.3cm(底面標高85.900m～85.620m)である。土層観察ではいずれの柱からも径15cm～20cm程の柱痕がみられる。第1・2層は柱の抜き取りの際の掘り込み痕と考えられる。第4・5層は硬くしまっており、ロームブロックを含んでいることから裏込め土と判断される。出土遺物 P1から環の口縁部破片2点、甕の胴部破片1点、P4から高環部破片が1点出土している。小片であるため図示し得なかった。また出土位置が不明のため、抜き取りの際に混入したのかどうか判断できない。環は内面漆仕上げを施されており、高環は内面にミガキがある環部である。古墳時代後期のものか。



第106図 砂田姥沼遺跡2区 SB-22実測図

判断できるものである。

中でも、調査区西区西端に位置するSD-12は、宇都宮市教育委員会が調査した砂田姥沼遺跡（C区）のA区及びB区に繋がる（2008 p24）旧河道跡で、その南側で調査された後述する3区SD-20として調査した河道跡に繋がるものである。それら各地区での報告や重複するSX-20から古墳時代末期の流路跡になる。

SD-12（第107・108図、第34表、図版二八・二九）

概要 調査区を南北方向に横断する溝跡である。重複関係からSX-19・20・21よりも古い大規模な溝状遺構である。位置 105-36グリッドに位置する。確認面標高は86.200 mである。重複関係 本調査区内で重複するSD-8が本遺構の埋没後に掘り込まれている。また、本遺構に降りてゆく通路状遺構のSX-19・20・21は河道跡の掘り返しに対応している。規模 西側調査区の北西隅に位置し、凡そ北東-南西方向に延びる河道で緩やかに西に湾曲する。遺構確認面では、河道の東縁が確認されるが、大半がSXとした通路状遺構と重複している。西側縁は調査区外となっているため詳細は不明である。

なお西区すぐ南側で調査したC区での河道の幅は4～5 mであるが、本調査区のもの北側で4.5 mを測れる。河道の底面幅は95 cm～110 cmになる。確認面からの深さは、88.1 cm～98.8 cm（底面標高85.319 m～85.212 m）である。覆土 元来は自然の谷であったとしても、埋没土を掘り返すなどの人手を加えた可能性が高い。新しい方からA期～H期まで確認できた。各時期の変遷はH期～C期は東側から西側へと流路の掘り返しが行われており、B期・A期は大きく流路を変えている。A期は第1層～第3層と第18層、B期は第4・5層、C期は第6・7層、D期は第8・9層、E期は第10・11層、F期は第12・13層、G期は第14～16層、H期は第17・19層が対応する。およそ最低でも8期、7回の掘り返しがセクションに観察できる。出土遺物 本遺構からの出土遺物は、出土遺物は甕（No.1・2）の口縁部破片のみで時期を特定したい。重複関係から本遺構と同時期と目される、SX-20の路面から轆轤挽きの皿（盤）や路盤に内面漆仕上げを施している杯の破片が出土している。また、SX-19・20は理化学分析の結果（第VII章第6節）によると波板状凹凸の埋土中に榛名ニッ岳渋谷川テフラ由来の軽石やガラス質が混在している。SX-20の出土遺物が7世紀の後葉～末葉と捉えられることから、本遺構もほぼ同時期の7世紀後葉～末葉が想定される。



第108図 砂田姥沼遺跡2区 SD-12 出土遺物

第34表 砂田姥沼遺跡2区 SD-12 出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 甕	口(22.0) 高[2.5]	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部内外面ナデ後光沢のあるミガキ。 口辺部内外面に黒斑	にぶい黄褐色 小砂粒少量、石英微量 焼成：良好	覆土 口縁部～口辺部一部残存 表土
2 土師器 甕	口(16.0) 高[3.2]	口縁部内外面ヨコナデ、口辺部外面ナデ後ヘラナデ、口辺部内面ヘラナデ。 口辺部外面に接合痕1段	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・小礫少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～口辺部一部残存 表土

4. 通路状遺構

砂田姥沼遺跡2区では3基の通路状遺構が確認されている。いずれも西区西端のSD-12と重複しており、同じ場所に軸を変えて造られている。重複関係から、SX-21→SX-20→SX-19と連続する変遷となる。なお、SX-20の出土遺物の検討により古墳時代末期の遺構である。

遺構の構造は路床の下に凹凸に伴うことから一種の道路遺構と見ることができるが、東谷・中島地区内の中島笹塚遺跡8区(内山2008)のSX-18・19で溝状遺構SD-17を横切る遺構を通路状遺構として報告されている。このことから本遺構も同様に通路状遺構として呼称とする。

この他に同様の砂田24区(津野他2007)、同37区(整理中)、同宇都宮市調査区(中山他2005)、立野2区(内山2005)、百目鬼遺跡(谷中他2001)で古墳時代後期～9世紀の例がある。

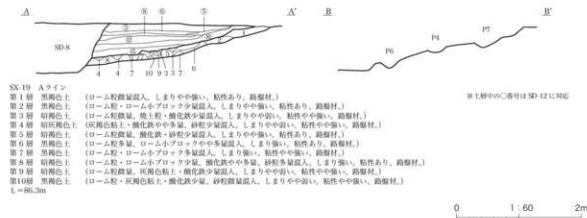
SX-19 (第109・110図、図版二九)

概要 本遺構は、SD-12とした旧河道跡(市教委調査C区及び姥沼3区のSD-20)の昇降施設である。路床の下からはビット状の凹凸面が検出され、降り口の起点から凹凸面が2方向に確認できる。南側がA期、北側がB期となり、南側のA期が新しい。遺構は降り口が東側であり、西方向にSD-12の深部に降っていくと考えられる。なお、西側はSD-8によって大きく削平され、SD-8以西では凹凸面の痕跡はない。位置 西区西端の105-36グリッドに位置する。確認面標高は86.120m～86.105mである。方位 降り口を起点として、A期の方位はN-93°-W、B期はN-72°-Wである。規模・平面形 平面形はA期・B期とも楕円状に開く平面形状をしている。A期の長軸[3.1]×短軸0.5m。B期は長軸[2.5]×短軸0.6mである。

覆土 本遺構の覆土は確認されない。本遺構の上面にはSD-12(③A期、⑥C期、⑧D期、⑩E期、⑫F期、⑮G期)の覆土が確認でき、堆積状況からSD-12のG期において、一気に埋没したと考えられる。

路面 路盤材(第1～5層)の上面と考えられる。路面は東側から階段状に形成されており、西側へ深く傾斜している。東側から緩やかな平坦面を形成し、そこから傾斜角が約10°下がる緩斜面が続き、段差を設けて再び緩やかな平坦面を形成して最深部へ至る。最深部へ向かう西側はSD-8に削平されている。第3・4層は路面からの掘り込みになる。第4層は砂質が強い土層である。路面の凹みに堆積した土層であろうか。

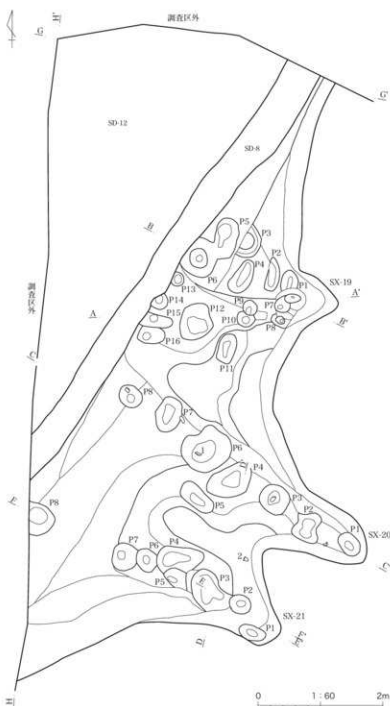
路盤 路盤の構造材として確認できるのはA期のみである。第1～10層が構造材である。各土層は硬くなり、その中でも第6～8層は比較的硬い層である。また砂粒が混入する層は第4・5・8層になる。最下層(第8層)はロームの塊及び酸化鉄を含む土層で、ビット状の凹凸面を中心として人為的に埋め戻した埋土である。路床 A期の路床はP8とP10付近で0.12mを測り、計測できる最大値はSD-8手前で1.11mの平面が楕円状になる。B期の路床はP1付近で0.42m、P3付近で1.23mの平面楕円状になる。路床の南北方向の断面形状は共にロームを浅い皿状に掘り込んでいる。凹凸面 遺構東側の頂点を基点として、路床の南端に沿っているのがA期。北端に沿って広がるのがB期と分かれる。A期・B期の重複関係は不明である。



第109図 砂田姥沼遺跡2区 SX-19実測図

A期のビット状の凹凸の構成は8基が確認されている。東からP7～P10、P12、P14～P16で2列構成が確認できる。いずれも平面円形ないし平面楕円形のビット状の掘り込みである。ビットは昇降口から降りる傾斜面にはP7（路床から16.7 cm。底面標高85.782 m）が掘られている。傾斜落ち際のP9（路床から8.8 cm。底面標高85.646 m）を測り、SD-12の底面付近の緩斜面上に掘り込まれたP12の掘り込みは（路床から8.8 cm。底面標高85.509 m）と浅く掘り込みになっている。ビット底面の標高はP8が85.259 mと最も深く、他は85.405 m～85.782 mと比較的浅い。最も大きいビットはP12で長軸0.62×短軸0.49 m、路床からの深さは8.8 cm（85.509 m）。小規模のP9は長軸0.245×短軸0.215 m、路床からの深さ8.8 cm（85.646 m）。全体的にビット状の凹凸面の路床からの掘り込みは浅いことから、ビット内の土層は明確でなく、路盤に連続して確認される。第8層はビット状の凹面の中だけでなく、路床内を埋める路盤構築材にまで連続していることから、道路修治時に掘り込まれたものではなく、路床掘削時に伴う凹面であることがわかる。なお、P7は第2層。P9には第6層。P12は第8層とそれぞれ人為的に埋め戻しているが、これらの層は路盤と同じ土層である。

B期のビット状の凹凸は6基が確認されている。P1～P6が相当するが、路床が広がるのと共にP3－P4、P5－P6は2列構成となる。いずれも平面円形ないし平面楕円形のビット状の掘り込みである。ビットは昇降口から降りる傾斜面にはP1・P2（路床から6.8 cm～7.1 cm。底面標高85.857 m～85.908 m）が掘られている。傾斜落ち際のP3・P4（路床から8.3 cm～12.8 cm。底面標高85.709 m～85.712 m）を測る。



第110図 砂田姥沼遺跡2区 SX-19・20・21実測図

SD-12の掘り込み面で確認されたP5・P6(路床から13.9cm～36.7cm。底面標高85.556m～85.259m)と深く掘り込みになっている。ビット底面の標高はP6が85.259mと最も深く、他は85.857m～85.556mと比較的浅い。最も大きいビットはP6で長軸0.605×短軸0.50m、路床からの深さは36.7cm(85.259m)。小規模のP1は長軸[0.295]×短軸0.27m、路床からの深さ7.1cm(85.908m)。全体的にビット状の凹凸面の路床からの掘り込みは浅い。遺物と時期 本遺構からの出土遺物はない。堆積状況及び理化学分析から時期の絞り込みを行う。本遺構のAラインの土層堆積状況から、本遺構はSD-12のG期の堆積土に路面が覆われているから、G期以前であることが判明している。また、AラインにはSD-12の最も古い段階のH期の堆積土が確認されていない。このことから本遺構はH期以降、G期以前の段階の遺構といえる。理化学分析では、路盤材の最下層に6世紀初頭に降下した榛名ニッ岳流川テフラ(Hr-FA)由来の軽石及びガラス質が混在していることが判明している。

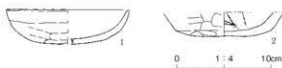
また、南側に隣接するSX-20の路面はSD-12の最も古いH期の堆積土に覆われていることが判明している。SX-20はH期よりも古い段階の遺構に位置付けられることから本遺構に先行するものと考えられる。これらのことを踏まえると南に隣接するSX-20よりも新しい、古墳時代後期以降の通路状遺構と考えられる。

SX-20(第110～112図、第35表、図版二九)

概要 本遺構は、SX-19同様SD-12とした旧河跡に降りるための昇降施設である。路床の下からはビット状の凹凸面が連なって検出される。堆積状況からSD-12のH期が堆積した以降は機能していないと考えられる。施設の降り口が東側であり西方向のSD-12の深部に降り、西側はSD-8によって大きく削平されている。

位置 西区西端の105～36グリッドに位置する。確認面標高は86.017m～86.008mである。方位 降り口を起点とする方位はN-34°-Wである。規模・平面形 平面形は長軸[5.0]×短軸1.2m。北西方向に撥状に開く平面形状をしている。覆土 第1層から第9層が遺構埋土であるが、本遺構の路面の上面にはSD-12(③A期・⑤G期・⑦H期)の堆積土が確認できる。第1層～第9層は基本、粘質土である。第5層はローム土が粘土化した明灰褐色粘土層でうねった模様を形成している。第5層は楕円形の範囲を確認することができたが広範囲ではない。硬化面の可能性も想定したが、形成面がフラットでなく下層の路面とした層よりもむしろ軟らかいことから堆積土であると判断した。第6層も粘土層である。これらの埋土は水成堆積したものと考えられる。路面 調査時の所見では、第12層・第15層・第16層・第19層～第24層の上面を考えている。路面は東側から延びており、段が緩やかな階段状の形状をしている。SD-12の深部へ向かって、深く傾斜している。なお、セクションライン以外、面的に路面の広がりを捉え切れていない。遺構確認面からの深さは1.7cm～56.7cmを測り、東側から4段の段差を形成しそこから緩やかに最深部へ続くものと想定される。SD-8に削平された西側では痕跡を確認することはできないことから、SD-8の掘削部付近がH期のSD-12の最深部になると想定される。路盤 路盤の構造材としては第10層～第21層が該当する。第16層～第21層は路床の上に形成された砂質土である。この上にやや粘質土の第10～12・15・16層が路面を形成する。最下層(第17～21層)はロームの小塊及び酸化鉄を含む土層でビット状の凹凸面を中心として人為的に埋め戻した土と考えられる。路床 路床は南西に撥状に開きローム土を浅い皿状の掘り込みでおり、幅は東側の昇降口付近で0.33m、計測できる最大幅はP6付近の1.31mまで広がる。遺構確認面からの深さは、0.49m～1.08mである。南北方向の掘り込みは浅い皿状をしている。凹凸面 ビット状の凹凸は8基が連なっている。東からP1～P8が該当し、P1～P3とP4・P6～P8の列構成が確認できる。いずれも平面円形ないし平面楕円形のビット状の掘り込みである。ビットは昇降口から降りる傾斜面に掘ら

れているP2～P4・P6が深く（路床から16.3cm～29.9cm。底面標高85.605m～85.690m）掘り込まれている。SD-12の底面付近の緩斜面上に掘り込まれたP7・P8の掘り込みは浅くなる（路床から3.8cm～8.5cm。底面標高85.551m～85.437m）。ピット底面の標高はP1が最も浅く、徐々に深くなり、P8が85.437mと最も深くなる。最も大きいピットはP6で長軸0.77m、短軸0.615m、路床からの深さは16.3cm(85.605m)。小規模のものはP1で長軸0.405m、短軸0.28m、路床からの深さ9.2cm(85.926m)。ピット内の土層は砂質が強い第17層がP4・P6の真下だけでなく、路床内を埋める路盤構築材にまで連続していることから、これらのピット列は道路修治時に掘り込まれたものではなく、路床掘削時に伴う凹面であることがわかる。P3は第15層。P1には第12層が見られるが、これらは路盤まで連続する土層である。P2はピット内を第13・14層で埋め戻したのちに上面を第12層が覆っている。遺物と時期 出土した遺物は極端に少ない。模倣環(№1)の半球形の破片は、P6とした路盤からの出土である。口径は小さく、環の内面はナデ調整である。体高はやや深身になることから、古墳時代末期(7世紀前葉～中葉)が相当する。鉢底部(№2)の破片は、路面上部の覆土から出土した破片である。その他、路面から轆轤成形の土師器皿や盤状の模様の底部破片も出土している。路盤には7世紀前葉～中葉の環が混入していた。路面から出土した轆轤成形の土師器皿(盤)は、古墳時代末期(7世紀後半～末葉)が相当する。



第111図 砂田姥沼遺跡2区 SX-20出土遺物

以上のことから本遺構の時期は古墳時代末期の7世紀後葉～末葉と捉えたい。

第35表 砂田姥沼遺跡2区 SX-20出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

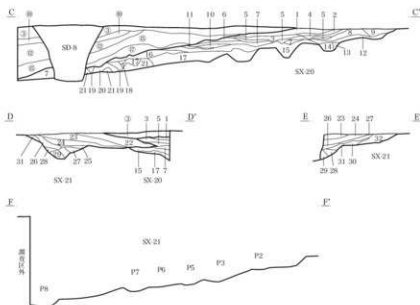
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	口13.0 高13.6	口縁部外面ヨコナデ。口縁部～体部内面ナデ。体部外面ヘラナデ。 模倣環半球形	褐色 小砂粒・赤色粒少量、雲母片微量 焼成：良好	路盤 口縁部～底部1/4残存 №6
2 土師器 鉢	高12.5 底10.0	体部外面ヘラケズリ。底部外面不定方向のヘラケズリ。体部～底部内面ヘラナデ	褐色 小砂粒少量、赤色粒微量 焼成：良好	覆土 体部～底部の1/4残存 №3

SX-21 (第110・112図、図版二九)

概要 本遺構のピット状の凹凸はSD-12の最深部の手前で調査区外になるため、最深部までの状況は不明である。SX-19・20と同様に大溝を横断するのではなくSD-12への昇降施設である可能性がある。地山を浅く掘り下げた路床の下にピット状の凹凸面を伴うことから一種の道路状遺構と見ることが出来る。本遺構に該当するセクションはD・Eラインである。SX-20に大きく重複されることから、設定したセクションから埋土及び路面を確認することができなかった。位置 西側調査区の西部、105-36グリッドに位置する。確認面標高は86.083m～86.055mである。方位 降り口を起点とする方位はN-63°-Wである。重複

SX-20と重複し、堆積状況から本遺構の方が古いことが判明している。規模・平面形 平面形は長軸[4.4]×短軸1.5m。北西方向に撥状に開く平面形状をしている。覆土 第1層から第9層が遺構埋土であるが、本遺構の路面の上面にはSD-12(③A期・⑤G期・⑦H期)の堆積土が確認できる。第1層～第9層は基本、粘質土である。第5層はローム土が粘土化した明灰褐色粘土層でうねった模様を形成している。第5層は楕円形の範囲を確認することができたが広範囲ではない。硬化面の可能性も想定したが、形成面がフラットでなく下層の路面とした層よりもしまりが軟らかいことから堆積土であると判断した。第6層も粘土層である。これらの埋土は水成堆積したものと考えられる。路面 調査時の所見では、第12層・第15層・第16層・第19層～第24層の上面を考えている。路面は東側から延びており、段が緩やかな階段状の形状をしてい

る。SD-12の深部へ向かって、深く傾斜している。なお、セクションライン以外、面的に路面の広がりをつまみきれていない。遺構確認面からの深さは1.7cm～56.7cmを測り、東側から4段の段差を形成しそこから緩やかに最深部へ続くものと想定される。SD-8に削平された西側では痕跡を確認することはできないことから、SD-8の掘削部付近がH期のSD-12の最深部になると想定される。路盤 路盤の構造材としては第25層から第32層が該当する。第27層・第28層は砂質が強い土層である。この上面が路面になる可能性もある。この砂質土の下層(第28・29層)は、ロームの小塊及び酸化鉄を含む砂質土層でP3を中心として人為的に埋め戻した土と考えられる。路床 路床は南西に撥状に開きローム土を浅い皿状の掘り込んでおり、幅は東側の昇降口付近で0.22m、計測できる最大幅はP6付近で0.76mまで広がる。遺構確認面からの深さは、0.58m～1.16mである。南北方向の掘り込みは概ね浅い皿状をしている。凹凸面 ビット状の凹凸は8



※上層中の○番号はSD-12に相当

SX-20・21 A・B・Cライン

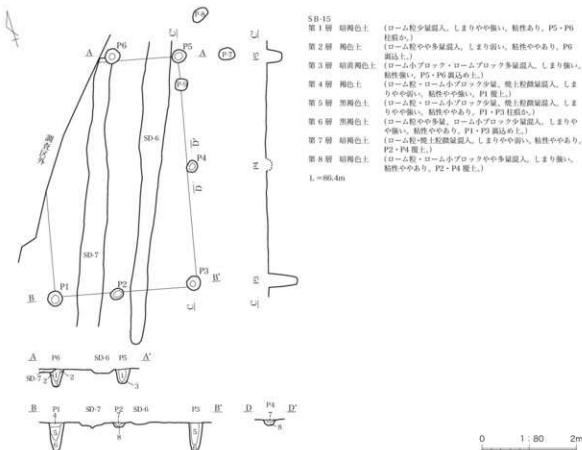
- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック散見。結核褐色粘土やや多量混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第2層 黒褐色土 (結核褐色粘土・焼土粒・白色粒散見混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第3層 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒散見。結核褐色粘土少量混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・結核褐色土・白色粒散見。焼土粒少量混入。しまり強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第5層 結核褐色粘土 (ロームが塊状に粘土化した層。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第6層 結核褐色粘土 (しまりやや強い。粘性やや強い。SX-20 覆土。)
- 第7層 結核褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック散見。結核褐色粘土多量混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第8層 結核褐色土 (ローム粒・白色粒散見。焼土粒少量混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-20 覆土。)
- 第9層 結核褐色土 (ローム粒・焼土粒・白色粒散見混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 覆土。)
- 第10層 黒褐色土 (ローム粒やや多量。結核褐色粘土少量混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第11層 結核褐色粘土 (しまりやや強い。粘性あり。SX-20 路盤材。)
- 第12層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・焼土粒・白色粒散見混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第13層 黒褐色土 (焼土粒少量混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第14層 黒褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック散見混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第15層 黒褐色土 (ローム粒・結核褐色粘土少量。焼土粒・白色粒散見混入。しまり強い。粘性あり。SX-20 路盤材。)
- 第16層 黒褐色土 (ローム粒多量。ローム小ブロックやや多量。砂粒少量。焼土粒散見混入。しまり強い。粘性あり。SX-20 路盤材。)
- 第17層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量。黒色土小ブロック・酸化鉄・白色粒・焼土粒少量混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第18層 結核褐色土 (ローム粒・砂粒少量。ローム小ブロック・酸化鉄散見混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-20 路盤材。)
- 第19層 結核褐色土 (ローム粒多量。結核褐色粘土少量。ローム小ブロック散見混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-20 路盤材。)
- 第20層 黒褐色土 (ローム粒・砂粒やや多量。ローム小ブロック多量。酸化鉄少量混入。しまり強い。粘性あり。SX-20 路盤材。)
- 第21層 結核褐色土 (白色粒多量。ローム粒少量。ローム小ブロック散見混入。しまり強い。粘性強い。SX-20 路盤材。)
- 第22層 結核褐色土 (ローム粒散見。結核褐色粘土やや多量混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-21 覆土。)
- 第23層 結核褐色粘土 (ローム粒散見混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-21 覆土。)
- 第24層 結核褐色土 (ローム粒散見混入。しまりやや強い。粘性やや強い。SX-21 覆土。)
- 第25層 黒褐色土 (砂粒・ローム粒・ローム小ブロック散見。酸化鉄少量混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-21 路盤材。)
- 第26層 黒褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック・酸化鉄・砂粒散見混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-21 路盤材。)
- 第27層 黒褐色土 (砂粒少量。酸化鉄やや多量。ローム粒少量混入。しまり強い。粘性強い。SX-21 路盤材。)
- 第28層 結核褐色土 (ローム粒多量。砂粒・ローム小ブロックやや多量。酸化鉄少量混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-21 路盤材。)
- 第29層 結核褐色土 (酸化鉄・砂粒やや多量。ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い。粘性やや強い。SX-21 路盤材。)
- 第30層 結核褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまり強い。粘性あり。SX-21 路盤材。)
- 第31層 黒褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまり強い。粘性あり。SX-21 路盤材。)
- 第32層 褐色土 (ローム粒少量混入。しまりやや強い。粘性あり。SX-21 路盤材。)

L=86.3m

0 1:60 2m

第112図 砂田姥沼遺跡2区 SX-20・21実測図

基が連なっている。東からP2～P8の列構成が確認できる。いずれも平面円形ないし平面楕円形のピット状の掘り込みである。ピットは昇降口から降りる傾斜面にはP3～P7が掘られている。落ち際のP3・P4が深く（路床から21.5cm～25.5cm。底面標高85.599m～85.684m）、P5～P7は浅く（路床から6.9cm～9.9cm。底面標高85.556m～85.597m）掘り込まれている。SD-12の底面付近の緩斜面に掘り込まれたP8の掘り込みは（路床から6cm。底面標高85.354m）と浅くなる。P7～P8間は1.12mと間隔が空いているがSD-12の最深部に向けて路床は傾斜している。ピット底面の標高はP3・P4が最も深く、他は85.354m～85.597mと浅い。最も大きいピットはP3で長軸0.77m、短軸0.445m、路床からの深さは25.5cm（85.684m）。小規模のものはP2で長軸0.335m、短軸0.295m、路床からの深さ5.7cm（85.859m）。ピット内の土層は砂質が強い第28層・第29層がP3の中だけで確認される。P3上面にはP2を覆う第31層が連続して確認されることから、これらのピット列は道路修治時に掘り込まれたものではなく、路床掘削時に伴う凹面であることがわかる。遺物と時期 図化できる遺物はない。堆積状況から北側のSX-20と重複関係にあり、本遺構の方が古い。SX-20は古墳時代末期の7世紀後葉～末葉、本遺構はそれ以前の時期が想定される。



第113図 砂田姥沼遺跡2区 SB-15実測図

第2節 時期不明の遺構

1. 掘立柱建物跡

SB-15 (第113図、図版二九)

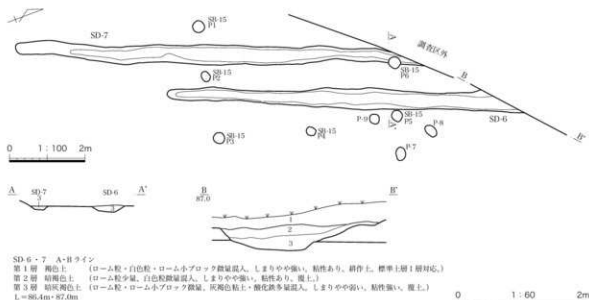
概要 桁行2間×梁行2間の側柱式の南北棟建物である。北東側柱列の傾きを求めると方位は $N-12^{\circ}$ —

Wである。位置 東側調査区の西部、104-39グリッドに位置する。西側柱列は南西角のP1を残すのみで、第2柱と南西隅柱は調査区外のため確認することができなかった。確認面標高は86.175 m～86.238 mである。重複関係 SD-6・7と重複するが、直接的な切り合いはSB-15のP6で、SD-7と重複しており、P6のほうがSD-7に切られている。なお、SD-6・7は水田の区画溝とされる溝なので、本遺構はSD-6・7より古い時期の建物と判断される。規模・柱間 桁行総長は4.82 m (15.9 尺) で、柱間寸法は東側柱列 (P3-P5間) が南からP3-P4が2.50 m (8.25 尺)。P4-P5が2.32 m (7.66 尺) である。梁行総長は3.01 m (9.9 尺) で、南側柱列 (P1-P3間) が西からP1-P2が1.32 m (4.35 尺)。P2-P3が1.69 m (5.57 尺) で、北側柱列 (P6-P5間) が1.41 m (4.65 尺) である。面積は14.5 m²である。掘り方 遺構確認面の柱の直径は27 cm～31 cm、確認面からの深さは9.9 cm～58.7 cm (底面標高86.076 m～85.590 m) である。土層観察では径15 cm～23 cm程の柱痕がみられる。柱痕中にロームブロックも含まれることから、柱抜き取り後に人為的に埋め戻しされたと考える。第3・6・8層は硬くしまっており、裏込め埋土と判断され、ロームブロックが多量に含まれていた。出土遺物 出土遺物は全くない。

2. 溝状遺構

SD-6 (第114図、図版三一)

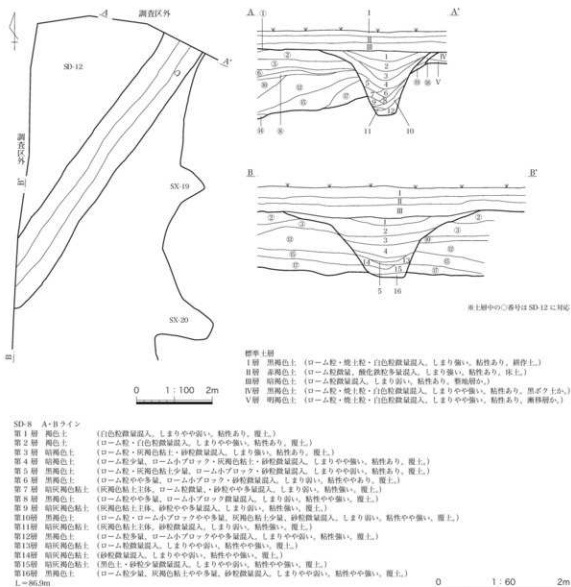
概要 北東-南西方向に延びる溝跡である。調査時の所見では、水田の区画溝としておりU字溝が併走していたとの記載がある。位置 東区の西端の104-39グリッドに位置する。遺構確認面からの掘り込みは9 cmと浅く痕跡は僅かである。確認面標高は86.220 m～86.160 mである。重複関係 直接的な重複関係はないが、SB-15と絡む。規模 断面形 東区の北西隅に位置し、凡そ北東-南西方向に延びている。遺構確認面では、長軸5.6 m、短軸幅は28～55 cm、底面幅は14～35 cmである。溝幅は一定でなく南西に至るほど幅が狭くなる。断面形は舟底状である。覆土 覆土は第2層～第3層で、第3層には酸化鉄が多量に含まれていることから滞水していたと考えられる。第1層は耕作土である。出土遺物 遺物は覆土中から編物石が1点出土しているが、本遺構に直接伴うものではない。



第114図 砂田姥沼遺跡2区 SD-6・7実測図

SD-7 (第114图、图版三一)

概要 SD-6と同じ北東-南西方向に延びる溝跡である。SD-6と同様に水田の区画溝である。位置 東区の西端の104-39グリッドに位置する。確認面からの掘り込みは9cmと浅く痕跡は僅かである。確認面標高は86.220m～86.160mである。重複関係 SB-15P6と重複するが本遺構が新しい。規模 東区の北西隅に位置し、北東-南西方向に延びている。確認面からの掘り込みは12.8cmと浅い。確認面での遺構の長軸は5.6m、短軸幅は37±5.3cm、底面幅は12～35cmである。溝幅は一定でない。南西に至るほど幅が広がる傾向がある。覆土 覆土は第3層のみ。出土遺物 出土遺物が少ないため時期を確定できない。



第115图 砂田姥沼遺跡2区 SD-8実測図

第36表 砂田姥沼遺跡2区 SD-8出土遺物

番号 種類 図様	大きさ (mm・g)	特徴	色調 釉土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 鏝	高 [2.2] 底 12.0	胴部下端～底部内面彫刻のため調整不明瞭、胴部下縁外面ハケズリ。底部外面不定方向のハケズリ。底部外縁部に磨り痕あり	(外) ぶい・褐色 (内) 浅黄褐色 小砂粒多量、小礫・赤色粒少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 胴部下端～底部残存 №1

SD-8 (第115・116図、第36表、図版三一)

概要 西区の西端で、北東-南西方向に延びる溝跡である。地形的には西側に台地が落ち込む地形の変化点にあたる。SD-12は台地際を南流する旧河川の可能性があり、本遺構は旧河川が埋没した後世に掘り込まれたものである。 **位置** 西区の西端の105-36グリッドに位置する。確認面標高は86.212m~86.112mである。

重複関係 SD-12とSX-19・20・21と重複するが本遺構が新しい。 **規模** 調査区内における残存長は5mである。確認面での遺構の幅は1.06m~1.22mで、底面の幅は0.32mである。壁の状況は、底面から直線的に外傾して立ち上がり、屈曲して浅い皿状に立ち上がる。底面はほぼ平坦に掘り込まれており、ローム層を掘削している。 **覆土** 覆土は第1層~第4層までのA期と第5層~第16層までのB期が確認できた。A期が掘り返しになり浅く広がる溝になる。B期は箱状に掘り込まれている。B期の堆積状況は交互に流れ込んでいく堆積をしている。それを切るようにA期が堆積している。 **出土遺物** B期の覆土中から出土した甕の底部片(Na1)である。底径12cmの大型になる。溝内にはこれと同一になる破片は見られず、流入したものである。時期は不明である。



第116図 砂田姥沼遺跡2区 SD-8出土遺物

SD-9 (第117・118図、図版三一)

概要 東西方向に延びる区画溝である。姥沼1区のSD-20に続く溝跡になる。

位置 西区の南辺の104・105-37、105-36グリッドに位置する。確認面標高は86.093m~86.006mである。 **規模** 調査区内での残存長は18.5mで、確認面での幅は61cm~72cm、底面幅は19cm~27cm。壁の状況は底面から直線的に外傾して立ち上がる。南壁は直線的に立ち上がり、途中で屈曲して平坦なテラスを形成し、再び直線的に外傾して立ち上がる。底面は図示し得なかったが工具痕が明確に残っている。 **覆土** 堆積状況は単層で土層のしまりは緩い。このことから堆積は現代のものと想定している。水田に関する区画溝の可能性もある。 **出土遺物** テラス状の平坦部は別の溝跡が重複していると想定。断面図では重複は確認し得ないが2時期の溝跡になる。遺物は甕の胴部破片が1点出土しているが、内外面の剥離が著しく調整が不明である。



図中上層

田村 褐色土

西側 明褐色土

V層 褐色土

(ローム状微細土、黄土、白色砂礫混入。しまりやや強い、粘性あり。)

(ローム状・黄土・白色砂礫混入。しまりやや強い、粘性あり。)

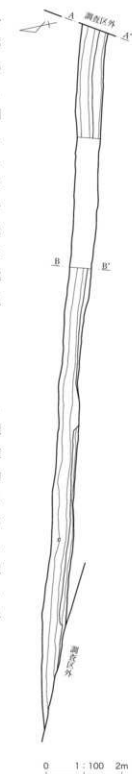
(砂礫・瓦礫を含む。生活道路跡。)

SD-9

第1層 明褐色土 (ローム状・ローム多量微細土、しまり強い、粘性中やあり。覆土。)

L=86.3m

第118図 砂田姥沼遺跡2区 SD-9実測図(2)



第117図 砂田姥沼遺跡2区 SD-9実測図(1)

3. 土坑

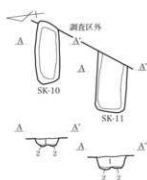
土坑は総計9基確認されている。遺物の出土が少ないため、時期を決定付けるに至らない。各土坑の記述は避け計測値等を一覧表(第37表)に、遺構図を第119・120図にまとめる。写真図版は三〇・三一に掲載している。

第37表 砂田姥沼遺跡2区 土坑一覧表

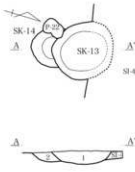
(): 推定値 [] : 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺物等
SK-10	105-37		隅丸長方形	1.29	0.51	0.15	N-84°-W	
SK-11	105-37		(隅丸長方形)	[1.13]	0.63	0.24	N-79°-W	
SK-13	104-39	SI-4・SK-14	楕円形	1.29	1.17	0.25	N-42°-W 11 (横・環)	
SK-14	104-39	SK-13	(円形)	0.84	[0.39]	0.15		
SK-16	104-39		楕円形	1.22	0.34	0.06	N-72°-W	
SK-17	104-39		隅丸長方形	1.23	0.45	0.20	N-77°-W	
SK-18	104-39		楕円形	0.6	0.54	0.18	N-16°-E	
SK-23	104-41	P-126	楕円形	[0.49]	0.28	0.17	N-74°-W	
SK-24	104-41		隅丸長方形	3.88	0.53	0.13	N-78°-W	
	104-42							

SK-10・11



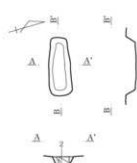
SK-13・14



SK-16



SK-17



SK-18



SK-10・11

第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い。覆土)
第2層 暗褐色土 (ローム粒微量。ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い。覆土。)

L=86.3m

SK-13・14

第1層 黒褐色土 (暗土粒微量混入。しまり極めて強い。SK-13覆土。)
第2層 黒褐色土 (暗土粒やや多量混入。しまりやや強い。覆土。)

L=86.4m

SK-16

第1層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い。覆土。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。しまりやや強い。覆土。)

L=86.4m

SK-17

第1層 黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い。覆土。)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い。覆土。)

L=86.4m

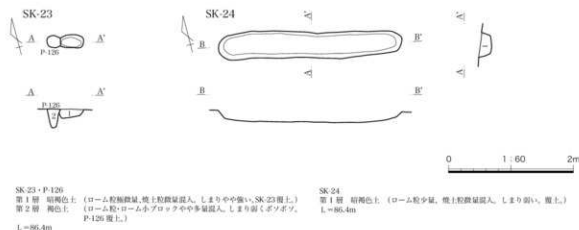
SK-18

第1層 褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い。覆土。)
第2層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。しまり強い。覆土。)
第3層 暗褐色土 (ローム主体。しまりやや強い。覆土。)

L=86.4m

0 1:60 2m

第119図 砂田姥沼遺跡2区 SK-10・11・13・14・16・17・18 実測図



第120図 砂田堀沼遺跡2区 SK-23・24 実測図

4. 小穴

本調査区の東区からは、小穴は総計 125 基が確認されている。いずれの小穴からも柱痕はされなかった。また、明確に掘立柱建物跡や櫓列のような規則的な配置をとるものは確認できなかった。

小穴の集中するグリッドが 2 地点確認できた。いずれも東区で、SI-1 周辺の 104-40・41 グリッド付近、SI-4 南側の 104-39 グリッド付近で群生している。

小穴から出土した遺物は少なく、殆どが古墳時代の土師器片であるため、遺構の時期を決定付けるに至らない。各小穴の記述は避け計測値等を一覧表(第38表)に、遺跡実測図を第121～125図にまとめる。

第38表 砂田堀沼遺跡2区 小穴一覧表

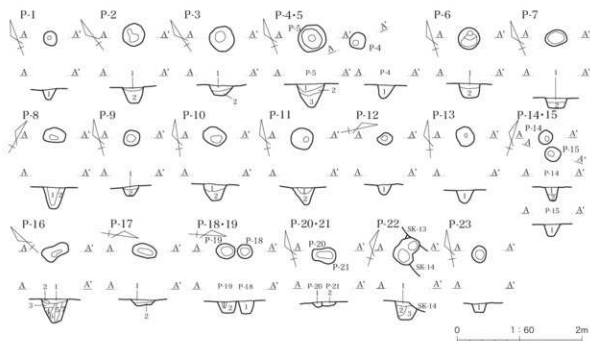
(): 推定値 [] : 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-1	104-39		23.5	21.5	15.5
P-2	104-39		34.5	34.5	28.0
P-3	104-40		39.0	39.0	14.2
P-4	104-39		26.0	24.5	21.5
P-5	104-39		46.0	43.5	35.3
P-6	104-39		34.0	29.0	31.0
P-7	104-39		34.5	25.0	16.0
P-8	104-39		34.5	23.5	33.7
P-9	104-39		28.0	25.0	15.3
P-10	104-39		35.5	27.5	26.3
P-11	104-39		35.5	33.0	28.2
P-12	104-40		24.0	17.5	16.3
P-13	104-39		32.0	27.5	53.8
P-14	104-39		23.0	21.5	23.7
P-15	104-39		25.0	22.0	19.0
P-16	104-39		41.0	17.5	37.4
P-17	104-39		39.0	21.0	16.8
P-18	103-39		23.5	21.0	19.4
P-19	103-39		30.5	28.0	17.8
P-20	104-39	P-21	116.0	19.0	8.0
P-21	104-39	P-20	122.5	25.0	6.5
P-22	104-39	SK-13・14	44.5	35.0	30.7
P-23	104-39		27.0	22.0	14.6
P-24	104-39		16.0	14.5	17.0
P-25	104-39		23.0	21.0	20.4
P-26	104-39		21.0	19.0	16.4
P-27	104-39		20.5	18.0	22.2
P-28	104-40		24.5	24.0	17.5
P-29	104-40		33.0	28.0	21.1
P-30	104-39	P-31	134.0	27.0	32.7
P-31	104-39	P-30	123.0	29.5	28.6

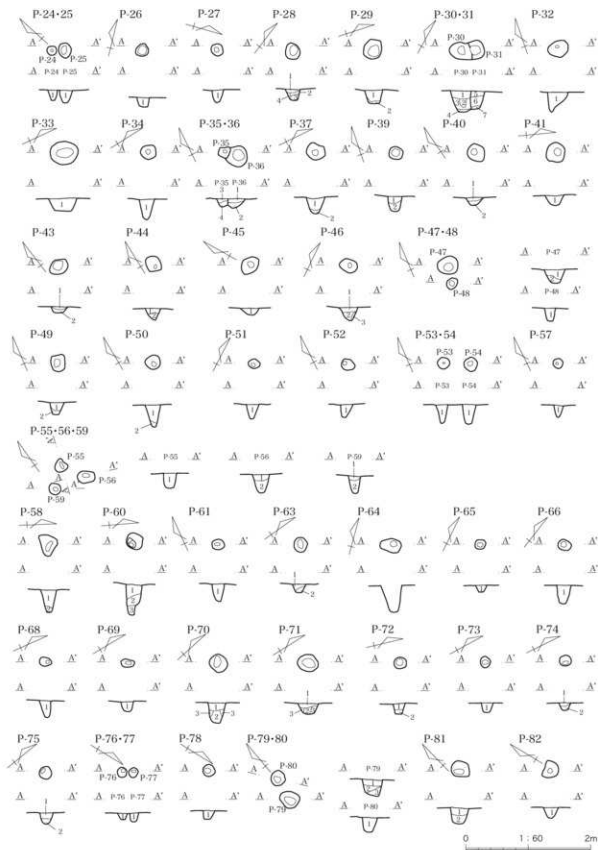
遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-32	104-39				
P-33	104-40		31.0	19.5	32.3
P-34	104-39		44.0	36.5	19.6
P-35	104-40	P-36	117.5	17.0	13.0
P-36	104-40	P-35	129.0	33.0	15.0
P-37	104-40		31.0	26.5	25.8
P-38	104-40		23.0	20.5	23.9
P-39	104-40		30.0	25.5	13.0
P-40	104-40		33.0	31.5	16.0
P-41	104-40		31.0	24.5	10.0
P-42	104-40		25.0	21.0	17.8
P-43	104-40		32.0	25.0	10.4
P-44	104-40		29.0	20.0	20.2
P-45	104-40		33.5	27.5	23.0
P-46	104-40		19.0	16.0	24.8
P-47	104-40		28.5	25.0	19.4
P-48	104-40		23.0	22.0	34.1
P-49	104-40		19.0	14.5	24.6
P-50	104-40		22.0	16.0	21.2
P-51	104-40		19.0	19.0	29.6
P-52	104-40		22.5	21.5	29.9
P-53	104-40		20.0	19.0	21.9
P-54	104-40		27.5	18.5	28.5
P-55	104-40		16.0	14.5	18.7
P-56	104-40		31.0	25.5	36.5
P-57	104-40		20.0	18.0	28.9
P-58	103-40		24.5	24.0	48.3
P-59	103-40		19.5	16.5	27.0
P-60	104-40		24.0	21.0	13.5

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-64	104-40		35.0	23.0	42.8
P-65	104-40		16.5	16.0	10.2
P-66	104-40		22.0	17.5	29.2
P-68	104-41		19.0	13.0	26.5
P-69	104-41		21.0	12.0	15.3
P-70	104-40		30.0	27.5	32.3
P-71	104-40		32.5	28.0	17.3
P-72	104-40		20.0	17.0	15.7
P-73	104-40		17.5	17.0	14.7
P-74	104-40		17.0	16.0	11.6
P-75	104-40		19.5	17.0	18.2
P-76	104-40		15.0	13.0	10.2
P-77	104-40		20.0	14.0	14.3
P-78	104-40		19.5	18.0	14.3
P-79	104-40		31.0	25.0	25.3
P-80	104-40		22.5	21.0	22.4
P-81	104-40		29.0	25.0	23.8
P-82	104-40		27.5	24.5	16.1
P-83	104-40		32.0	26.5	24.9
P-84	104-40	P85	10.5	8.5	6.5
P-85	104-40	P84	23.0	18.0	18.5
P-86	104-40		25.0	18.0	29.7
P-87	104-40		24.0	19.0	20.5
P-88	104-40		15.0	10.5	14.5
P-89	104-40		21.5	20.0	28.9
P-90	104-29		25.0	20.0	22.9
P-91	104-39		15.0	14.0	24.6
P-92	104-39		20.0	16.0	18.4
P-93	104-41		18.5	17.0	35.3
P-94	104-41		26.5	24.0	30.2
P-95	104-41		18.0	17.0	21.0
P-96	104-41		24.0	19.0	17.4
P-97	104-41		25.0	17.0	24.3
P-98	104-41		21.0	17.5	24.5

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-99	104-41		16.0	13.0	16.0
P-100	104-41		21.5	18.5	15.9
P-101	104-41		23.5	17.0	30.8
P-102	104-41		26.0	20.0	54.7
P-103	104-41		24.0	16.5	54.5
P-104	104-41		19.0	18.5	36.6
P-105	104-41		23.5	21.5	21.5
P-106	104-41		19.0	16.0	32.3
P-107	104-40 104-41		17.5	14.5	22.8
P-108	104-41		18.0	17.5	11.5
P-109	104-41		16.5	15.0	30.2
P-110	104-41		21.0	17.0	21.8
P-111	104-41	P112	15.0	16.0	8.8
P-112	104-41	P111	27.0	21.0	14.4
P-113	103-40 103-41		29.0	20.0	56.0
P-114	103-40		19.5	16.0	14.4
P-115	104-41		25.0	22.5	30.0
P-116	103-41 104-41		23.0	18.0	25.6
P-117	103-41		22.5	21.0	24.1
P-118	103-41		27.0	23.5	25.9
P-119	103-41		30.0	22.0	10.5
P-120	103-41		22.5	17.0	30.4
P-121	103-41		25.0	20.0	48.0
P-122	104-41		29.0	28.5	49.9
P-123	104-41		18.0	17.0	33.2
P-124	104-42		17.0	15.5	30.8
P-125	103-41		24.5	19.5	35.0
P-126	104-41	SK-23	28.0	27.0	39.2
P-127	103-41	P128	21.5	17.0	15.0
P-128	103-41	P127	18.0	13.0	14.3
P-129	103-41		30.0	24.5	21.0

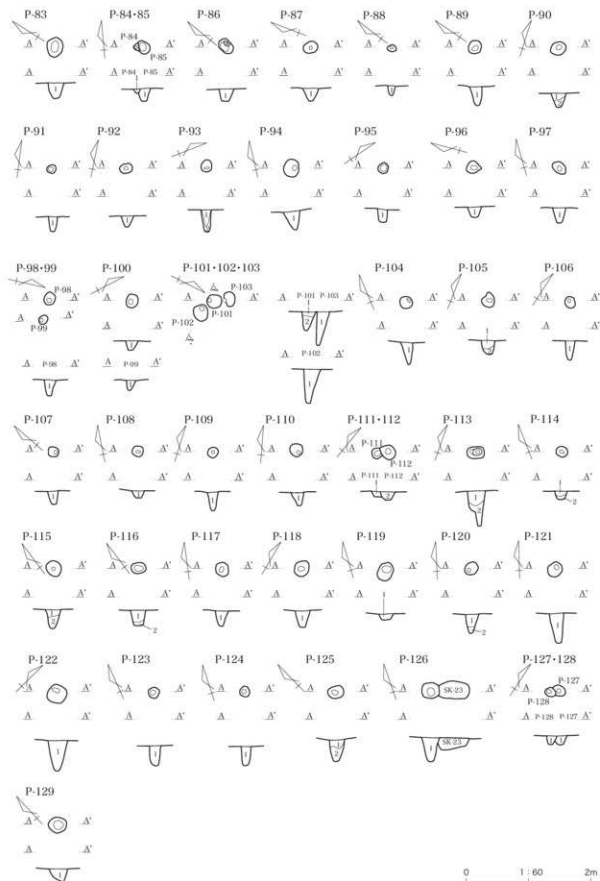


第121図 砂田姥沼遺跡2区 小穴実測図(1)



第122図 砂田姥沼遺跡2区 小穴実測図(2)

第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査



第123図 砂田姥沼遺跡2区 小穴実測図(3)

P-1 第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロックや多量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	P27 第1層 黒色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) L=86.4m
P-2・6・7・9・10・11 第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまり強い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロックや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P28 第1層 褐色土 (ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第3層 暗褐色土 (褐色土とロームの混土層、ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第4層 暗褐色土 粘 (ローム粒・白色粒・今市軽石少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P-3 第1層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・白色粒微量混入。しまり強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒・焼土粒・白色粒微量、ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P29 第1層 黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (褐色土と黒色土の混土層、ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m
P-4 第1層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) L=86.4m	P30・31 第1層 黒褐色土 (ローム粒微量、白色粒少量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) 第2層 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
P-5 第1層 褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 明褐色土 (ローム粒少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第3層 明褐色土 (ローム粒・ロームブロックや多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	第3層 暗褐色土 (ローム粒微量、粘質土。しまりやや弱い、粘性やや強い。) 第4層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第5層 黒色土 (ローム粒微量、白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第6層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
P-8 第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロックや多量、焼土粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	第7層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m
P12・13 第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	P32 第1層 黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P14 第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	P33 第1層 暗褐色土 (ロームと暗褐色土の混土層、ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P15 第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	P34 第1層 暗褐色土 (ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P16 第1層 黒白土 (白色粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第3層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第4層 黄褐色土 (ロームと褐色土の混土層、ローム粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第5層 黒色土 (ローム粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) 第6層 黄褐色土 (ロームブロックや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第7層 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P35・36 第1層 暗褐色土 (ロームと暗褐色土の混土層、ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性強い。) 第3層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第4層 褐色土 (ローム粒・ロームブロック・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P17 第1層 暗褐色土 (ローム・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P37 第1層 褐色土 (白色粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ロームブロック少量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m
P18・19 第1層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (褐色土と黒色土の混土層、ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P38 第1層 褐色土 (ローム粒・白色粒・焼土ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒少量、ロームブロック・白色粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
P20・21 第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 黒色土 (白色粒少量、ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	P41・82 第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m
P22 第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) 第3層 黄褐色土 (粘質土と褐色土とロームの混土層、ローム粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P43・44 第1層 褐色土 (白色粒・今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 褐色土 (ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P23 第1層 黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P45 第1層 暗褐色土 (ローム土と暗褐色土の混土層、ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m
P24・25 第1層 黒褐色土 (白色粒微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。) L=86.4m	P46 第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。) 第2層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性あり。) 第3層 暗褐色土 (ローム粒や多量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
P26・91・92 第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。) L=86.4m	

第VI章 砂田姥沼遺跡2区の調査

P-47	第1層 暗褐色土	(ローム土と暗褐色土の混生層、ローム粒・白色粒少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗黄褐色土	(ローム粒・暗褐色土ブロック少量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)	
L=86.4m		
P-48	第1層 暗黄褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入、しまり弱い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-49	第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 暗褐色土	(ロームブロック微量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)	
L=86.4m		
P-50	第1層 黒褐色土	(黒色土と褐色土の混生層、ローム粒・ロームブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		
P-51・52	第1層 黒色土	(ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-53・55・57	第1層 黒色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-54	第1層 黒褐色土	(黒色土と褐色土の混生層、ローム粒・ロームブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-56	第1層 黒色土	(ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		
P-58・80	第1層 黒色土	(ローム粒・褐色土ブロック・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗黄褐色土	(ローム土体構成、黒色土混入、しまり弱い、粘性やや強い。)	
L=86.4m		
P-59	第1層 黒色土	(ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		
P-60	第1層 黒色土	(ローム粒・褐色土ブロック・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
第3層 暗黄褐色土	(ローム土体構成、黒色土混入、しまり弱い、粘性やや強い。)	
L=86.4m		
P-61	第1層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-63	第1層 暗褐色土	(ローム粒・褐色土ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		
P-65・66	第1層 黒褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-68・69	第1層 暗褐色土	(ローム粒・褐色土ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m		
P-70・71・83	第1層 暗褐色土	(ローム粒・市街石粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)	
第3層 褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)	
L=86.4m		
P-72・73・74・75・76・77・78	第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまり弱い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・褐色土ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		
P-79	第1層 褐色土	(ローム粒・ロームブロック・白色粒微量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム土体構成、しまりやや強い、粘性やや強い。)	
第3層 褐色土	(ローム粒・ロームブロック混入、粘質土、しまりやや強い、粘性あり。)	
L=86.4m		

第1層 黒色土	(ローム粒・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入、粘質土、しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.4m	
P-84・88・89	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-85	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-86・87	
第1層 暗褐色土	(ローム小ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-90	
第1層 黒褐色土	(ローム粒・微土粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-93	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-94・95・96・97・98・99・100・104・106・107・108・109・110	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-101・102・103	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 黄褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-105	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック・小礫粒混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-111・112・127	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 黒褐色土	(ローム粒・白色粒・小礫粒混入、しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.4m	
P-113・121	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-114	
第1層 黒色土	(ローム粒・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-115・116・117・120・124・125	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-118	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・褐色土ブロック微量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-119	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-122	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入、しまり弱い、粘性やや強い。)
L=86.4m	
P-123	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック・小礫少量混入、しまり弱い、粘性あり。)
L=86.4m	
P-126	
第1層 褐色土	(ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入、しまり弱い、ボツボツ。)
L=86.4m	
P-128	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入、しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.4m	
P-129	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.4m	

第125図 砂田姥沼遺跡2区 小穴実測図(5)

第3節 砂田姥沼遺跡2区の自然科学分析

1. 砂田姥沼遺跡2区の樹種同定

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

砂田姥沼遺跡2区は、田川左岸の台地上に位置する。本遺跡では、発掘調査により4世紀末の竪穴住居跡等が検出されている。このうち、SI-5は焼失住居跡の可能性があり、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。本報告では、住居構築材の樹種利用に関する資料を得るため、SI-5から出土した炭化材について樹種同定を実施する。また、植利用状況等に関する資料を得るため、出土した種実遺体の同定を実施する。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、SI-5から出土した炭化材5点(炭-A～E)である。

(2) 分析方法

木口(横断面)・柃目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の断面図を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東(1982)およびWheeler他(1998)を参考にする。また、各樹種の木材組織の特徴については、林(1990)、伊東(1995,1996,1997,1998,1999)や独立行政法人森林総合研究所が公開している日本産木材識別データベースを参考にする。

(3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹で、2種類(コナラ属コナラ亜属コナラ節・クリ)に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

第39表 樹種同定結果

遺跡	試料名	樹種
SI-5	炭-A	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	炭-B	クリ
	炭-C	クリ
	炭-D	クリ
	炭-E	クリ

・コナラ属コナラ亜属コナラ節(*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) プナ科

環孔材で、孔圈部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) プナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

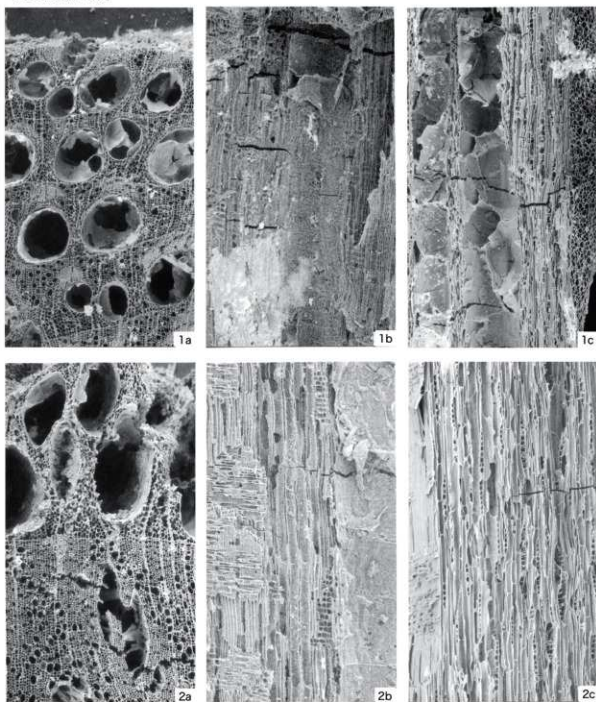
(4) 考察

SI-5では、住居北壁および南壁沿いの一部と住居中央部から炭化材が多数出土しており、状況から上屋根や垂木等に由来する可能性がある。炭化材のうち、炭-Aは住居中央部付近で軸方向がほぼ南北になる状態、炭-Bは炭-Aのやや北側で軸方向が東西になる状態、炭-Cは炭-Bの北東部で軸方向が東西になる状態で出土している。一方、炭-Dは北壁沿い、炭-Eは南壁沿いで共に軸方向が住居の壁と直交する方向で出土している。これらの炭化材は、炭-Aがコナラ節、他の4点はクリであった。コナラ節は、現在の関東地方にコナラ、ミズナラ、カシワ、ナラガシワの4種が分布しており、遺跡周辺の台地上ではコナラが二次林(雑木林)の構成種として最も一般的である。コナラ節とクリは、共に重硬で強度が高く、クリでは耐朽性も高い。この結果から、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。

本遺跡周辺では、4世紀代の住居構築材について樹種同定を実施した例は報告されていない。一方、古墳時代後期では、砂田A遺跡および砂田遺跡で樹種同定が実施されており、クスギ節が多い傾向が確認されて

いる。クヌギ節は、コナラ節と共に関東地方の二次林を構成する種類である。最も普通にみられるクヌギ節のクヌギとコナラ節のコナラを比較すると、クヌギの方がより湿った環境に生育する傾向がある(宮脇,1987)。

現時点では古墳時代後期と4世紀代の樹種選択の違いが時期的なものか、遺跡の立地環境による植生の違いなのかは不明である。これらを検証するために、今後古墳時代の住居構築材に関する資料をさらに蓄積することが望まれる。



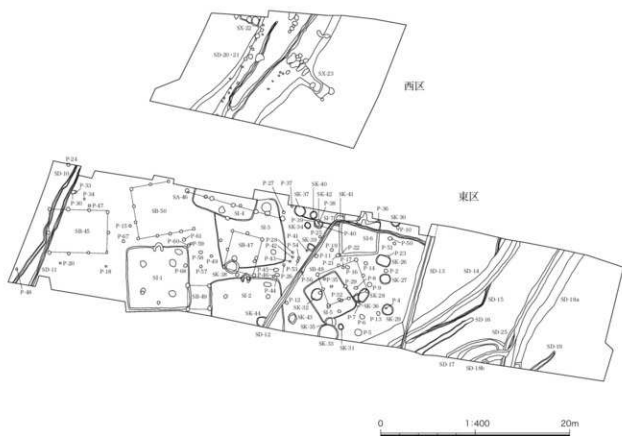
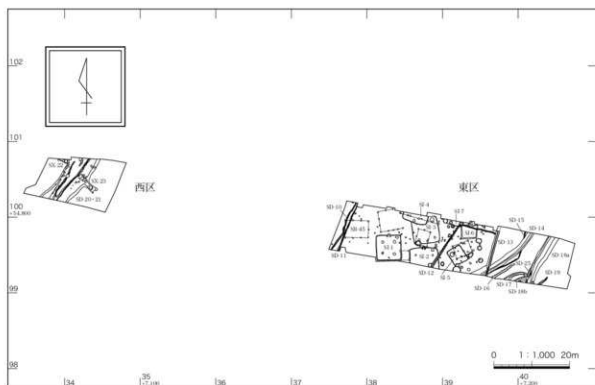
1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (SI-5; 炭-A)

2. クリ (SI-5; 炭-B)

a: 木口, b: 柾木, c: 板目

200 μ m : a
200 μ m : b, c

第126図 砂田姥沼遺跡2区 炭化材顕微鏡写真



第 127 図 砂田姥沼遺跡 3 区 全体図 (S=1/1,000・1/400)

第Ⅶ章 砂田姥沼遺跡3区の調査

砂田姥沼遺跡3区は、宇都宮市砂田町字姥沼 148・149・175～177 番地に所在している。2区と同様に東西方向に長い調査区が設定されている。調査区は1区を挟んで、東西に分かれており、西側を西区、東側を東区とする。発掘調査前の標高は西区 86.3 m、東区 86.47 mで、低地との比高は西区 0.95 m、東区 1.12 m程である。3区の範囲は南北 13.9 m×東西 142.5 m（西区：南北 12.5 m×東西 20.1 m、東区：南北 13.9 m×東西 61.5 m）。古墳時代の遺構の多くは東区に確認されている。比較的遺構が集中する中央部の位置は北緯 36 度 29 分 49 秒、東経 139 度 54 分 37 秒である（世界測地系）。

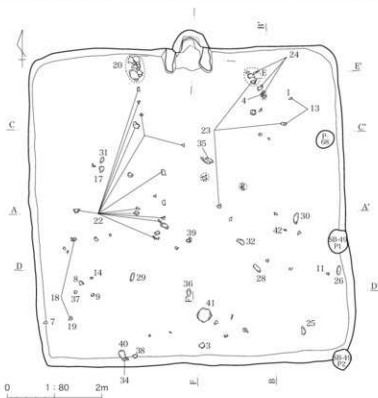
第1節 古墳時代の遺構と遺物

1. 竪穴建物跡

S1-1（第128～134図、図版三二・六五）

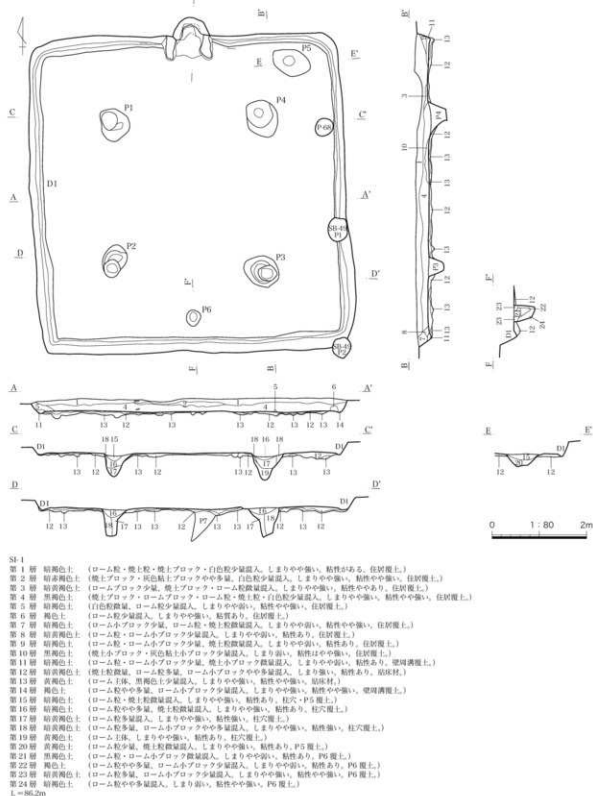
概要 本遺構は東区の中央寄りで確認された竪穴建物跡である。位置 99-38 グリッドに位置する。確認面標高は 86.104 m～85.735 mである。平面形・規模 南北 6.62 m×東西 6.68 mの東西方向にやや長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線は N-2°-W である。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで観察された。覆土はレンズ状の堆積をしており、第1～10層の自然堆積である。壁床面からの壁高は 7.2～35.8 cmで床面より直線的に大きく外傾して立ち上がる。床 第12・13層は S1-1の住居貼床を形成しており、これらの層の上面が床面となる。床面は概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り込みには、多少の凹凸がみられ全体的にほぼ均一に掘り込まれ、第13層で充填されている。柱穴

4本の主柱穴（P1・P2・P3・P4）を確認した。明瞭な柱痕・抜き取りの痕跡は確認されていない。P1は径 69×60×深さ 53.5 cm、P2は径 69×49×深さ 58.3 cm、P3は径 78×62×深さ 54.4 cm、P4は径 81×69×深さ 61.7 cm。柱間寸法は柱痕間隔で P1-P2間が 3.10 m、P2-P3間が 3.28 m、P3-P4間が 3.38 m、P1-P4間が 3.18 mを測る。4本の柱穴はほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としての P5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸 75 cm×短軸 56 cmの隅丸長方形で、床面から底面までが 24.9 cm。掘り込まれた底面はやや凹凸がある。覆土は第15・20層

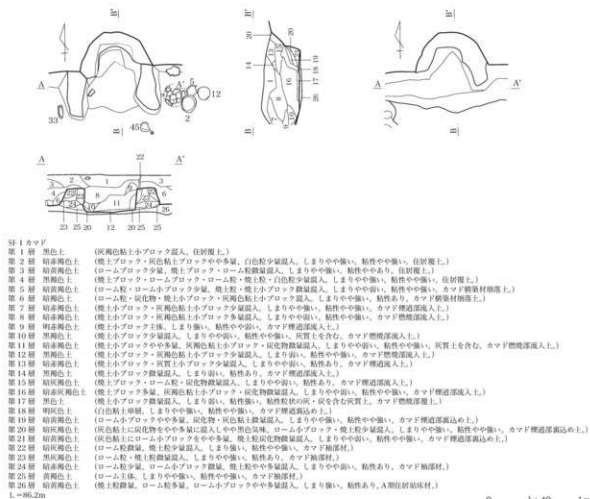


第128図 砂田姥沼遺跡3区 S1-1実測図（1）

が堆積している。入口関連施設 南壁中央部寄りに位置するP6としたピットは、長軸34cm、短軸31、深さが43.2cmの円形をし、覆土は第21～24層の堆積である。第21・22層は入口に伴う柱が埋設されていた痕跡か。配置的に入口ピットと考えている。第23・24層はP6の掘方埋土と判断した。壁周溝 D1と



第129図 砂田姥沼遺跡3区 SI-1実測図(2)



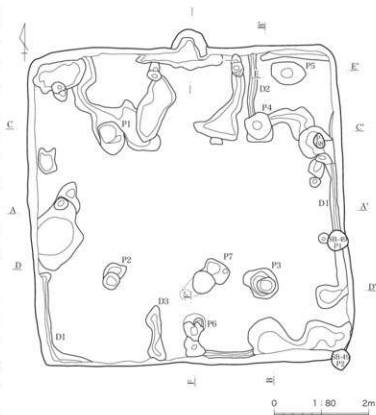
第130図 砂田姥沼遺跡3区 SI-1実測図(3)

した壁周溝は北壁のカマドを除き四方の壁際を全周している。規模は短軸21×深さ11.0cmである。第11・14層が壁周溝(D1)の埋土である。間仕切溝 間仕切り溝はD2・D3の2条が掘方面で確認されている。D2は北壁からP4に接続するもので、規模は長軸130cm×短軸17×掘方面からの深さ5.4cmである。D2の西側にはカマドが、東には貯蔵穴があることから、それらを仕切る用途が想定される。D3は南壁中央やや西寄りの壁際から南北方向に配されている。規模は長軸115cm×短軸19×掘方面からの深さ7.4cmである。D3の配された位置はP6の西側にあたる。P5・P6とも床面から掘り込まれていたものと推察する。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは38cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は0.91m×東西1.06mである。カマドの構造は竪穴の掘方面の壁際に東西方向に長い隅丸形状の掘方を形成し、竪穴の貼床である第28層を敷設している。袖材は第26層の上面(床面)に基底部になる第24層、その上に第22・23層で構築している。火床面は袖部内の床面が相当する。煙道部は第19～21層が掘方埋土になり、第19層の上面が立ち上がりになる。火床面から鋭角に立ち上がり、中位で外傾屈曲し緩やかに確認面に至る。煙道部～燃焼部の覆土には灰褐色粘土土を含む層が多く見られる。出土遺物 遺物は386点に確認している。本遺構の出土遺物は多く取り上げ遺物は101点に及ぶが、大半は覆土に混入したものである。図示し得た47点のうち、床面ないし床面直上から出土した遺物についてみると、模倣椀は蓋模倣形(No.2)と外反形(No.4)、半球形(No.7・11)が出土している。短脚高杯(No.12・

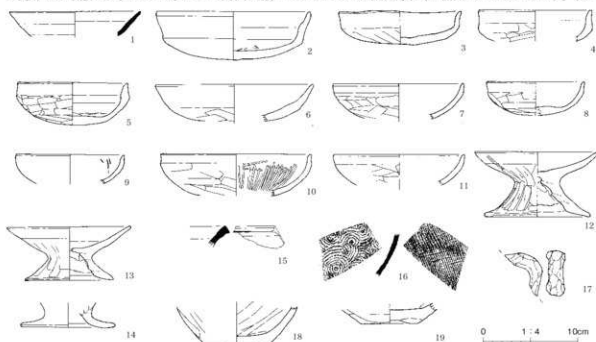
13) も出土しており、(12) は口径が 13.0 cm と小型化していることから、古墳時代後期後半。(13) は(12) よりも口径が小型化しており、さらに後出する古墳時代末期が相当か。堤版の把手部 (No 17) は床面から出土している。接合面に胸部のカキメが圧痕されている。古墳時代後期～終末期のものか。

長胴甕については、(No 22) の他に、甕底部 (No 18)・口縁部片 (No 21) が出土している。

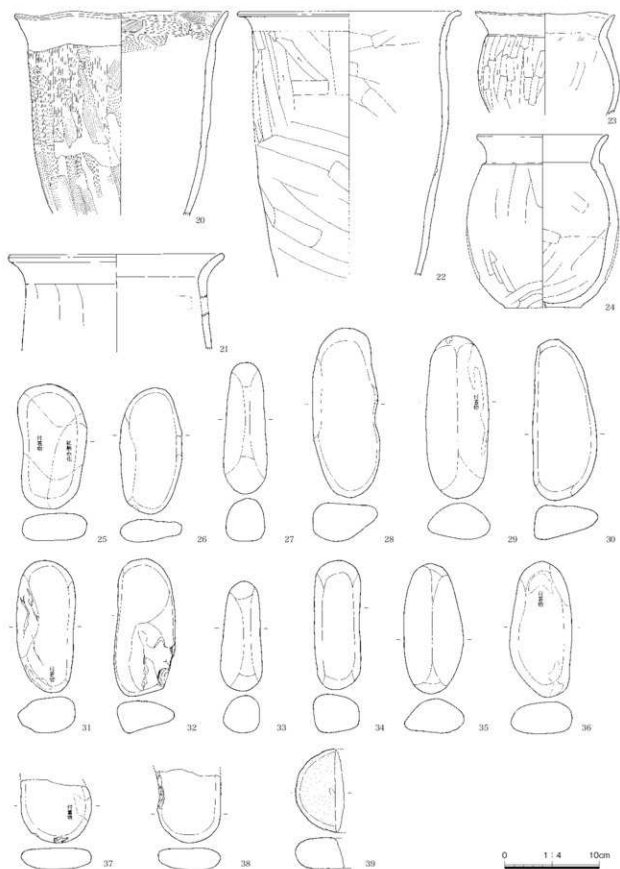
(22) はカマド前面・カマド西側、カマド煙道部や袖部、住居中央部～西壁寄りに破片が散っている。破片の出土状況は床面～覆土であり、破片はカマド周辺部に集中する。カマドに据えられていた甕が、住居の廃絶後に破砕されたものか。(21) はカマド前の床面から出土しており、胎土が粗い。同じ胎土の破片遺物は確認できなかった。ハケ甕 (No 20) は胸部下半～底部を欠損している。一次堆積後に混入したものか。小形甕については (No 23・24) がある。(23) は口縁部から胸部上半の接合遺物である。口縁部内面に磨滅痕ないし擦痕が認められることから置き台として使用した可能性も考えられる。ただし、破片は散っていることから住居廃棄時に混入したものであろう。(No



第131図 砂田姥沼遺跡3区 S1-1実測図(4)



第132図 砂田姥沼遺跡3区 S1-1出土遺物(1)

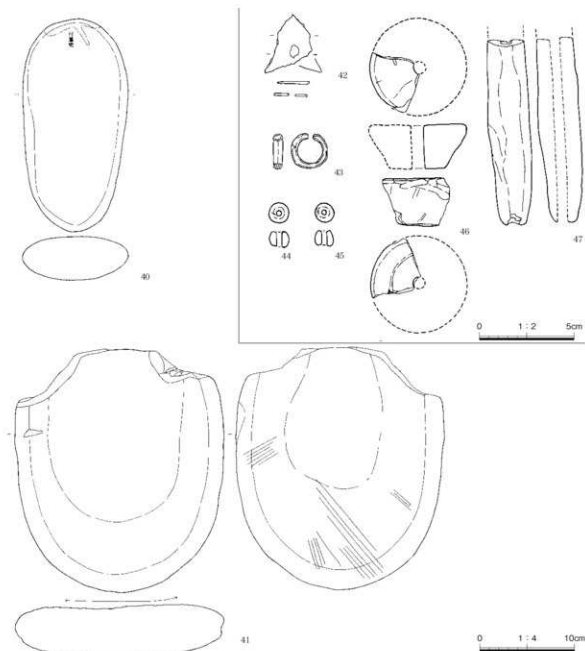


第133図 砂田姥沼遺跡3区 SI-1出土遺物(2)

24) は出土状況から住居に破棄されたものとする。編物石 (No 25・26・27・28・30・31・32・34・35・36・38) は 10 本が床面に伴う。表面には微少の黒色の付着物が認められる。台石 (No 41) は P6 の北側、床面直上で出土した。表裏面とも使用しており、表面には磨滅が認められ、中心部では凹んでいる。裏面は中心部に磨滅した範囲があり、その縁辺部では細いキズ状の痕跡が確認できた。

鉄製品では無茎長三角形鉄鏃 (No 42) が住居東壁寄りの床面から出土した。鏃身の中央に直径 0.4 cm の穿孔あり。残存する脇袂の刃部は直線的ではなくやや湾曲する。平造である。銅製品の耳環 (No 43) は P3 から出土している。

石製の玉 (No 44・45) はカマド前面の床面直上及び覆土から出土した。大きさはやや小型で 1.05 ～ 1.01 cm と同規格である。穿孔径は 0.27 ～ 0.29 cm と同じであった。玉の形状は概ね円形に磨き上げられている。



第134図 砂田姥沼遺跡3区 SI-1出土遺物(3)

両極の穿孔部は両側から穿孔している。両極面は(44)は平坦であるが、(45)は穿孔部は凹んでいる。これは小玉と接して磨滅したためと考える。石質は同じであるが、色の違いが認められる。

この他に覆土から無台環の須恵器環身(№1)の破片。須恵器裏(№15)の口縁部破片である。須恵器裏(№16)の胴部破片で外面は握棒字の叩き痕、内面は同心円状の当て具痕が施されている。土製の紡錘車(№46)・土錘(№47)は南西の覆土から出土しており、ともに欠損品である。

本遺構の時期は、短脚高環や模倣環の時期から古墳時代後期～終末期に位置付けられる。

第40表 砂田姥沼遺跡3区 S1-1出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

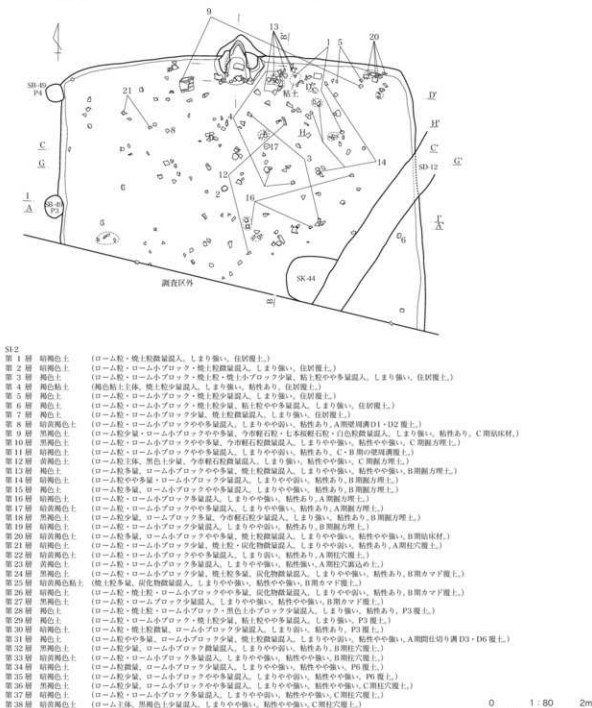
番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 環	口(14.0) 高[2.7]	断面厚縁、口縁部～体部内外面口クロナデ。細密、 坯身	(外) 灰白色 (内) 灰色 白色細砂粒・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/4残存 №101
2 土師器 環	口16.2 高5.2	断面厚縁のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナ デ、体部～底部内面ナデ・ヘラミガキ。 模倣環蓋縁微形、口縁部内外面及び体部から底部 内面に塗仕上げ	淡黄色 小砂粒微量 焼成：良好	床面 ほぼ完存、口縁部一部欠損 №12
3 土師器 環	口13.0 高3.55	断面厚縁のため調整が不明瞭、口縁部内外面ヨコ ナデ、体部～底部外面ヘラケズリか、体部～底部 内面ナデ。模倣環半球形か、口縁部内外面及び体 部～底部内面塗仕上げ、底部内面に割磨	(外) 浅黄褐色 (内) に近い黄褐色 白色細砂粒・石炭微量 焼成：良好	床面 口縁部～底部1/2残存 №36
4 土師器 環	口(12.0) 高[3.3]	断面厚縁のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナ デ、体部外面横方向のヘラケズリ、体部内面ナデ か。模倣環反形、口縁部内外面及び体部内面に 塗仕上げ	(外) 褐色 (内) に近い、 褐色 小砂粒・石炭微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部1/4残存 №97
5 土師器 環	口(11.0) 高[4.5]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケ ズリ、底部外面一定方向のヘラケズリ、体部～底 部内面ナデもしくはヘラナデ。模倣環身模倣、 口縁部内面に塗仕上げ	褐色 小砂粒・石炭微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4、底部残存 №13
6 土師器 環	口(16.6) 高[3.9]	断面厚縁のため調整不明瞭、内面、現状割磨が著 しく調整不明、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面 ヘラケズリか。模倣環半球形、口縁部内外面に 塗仕上げ	にに近い、 褐色 小砂粒・小礫・石英・赤色粒微量 焼成：良好	P1 覆土 口縁部～体部一部残存 P1
7 土師器 環	口(14.0) 高[3.7]	体部外面ヨコナデ、体部内面ナデ。 体部内面黒色処理	褐色 小砂粒・石英・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部1/4残存 №100・P1・南東一括
8 土師器 環	口(10.4) 高[3.6]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体 部内面ナデ。外面現状割磨あり。細密な胎土	(外) に近い黄褐色 (内) に近い、 褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4残存 №47
9 土師器 環	口(11.0) 高[3.1]	断面厚縁のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナ デ、体部内面ナデ	褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部残存 №46
10 土師器 環	口(16.0) 高[4.4]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面横方向のヘラケ ズリ、体部内面横方向のヘラミガキ。口縁部内面 塗仕上げ	(外) 褐色 (内) に近い、黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4残存 カマド表段
11 土師器 環	口(14.0) 高[3.3]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体 部内面ナデ。口縁部内外面に塗仕上げ	褐色 小砂粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部一部残存 №27
12 土師器 高環	口13.0 高6.9 胴部径10.2	口縁部内外面ヨコナデ、坯部～胴部外面横方向の ヘラケズリ、坯部内面ナデか。胴部内外面ヨコ ナデ、胴部内面ナデ。口縁部内外面に塗仕上げ。胴 部内面割磨状になる3段の接合痕	(外) 褐色 (内) に近い、褐色 小砂粒・雲母片少量、小礫微量 焼成：良好	床面直上 完形 №14
13 土師器 高環	口(11.2) 高5.6 胴部径9.4	口縁部内外面ヨコナデ、坯部～胴部外面横方向の ヘラケズリ、坯部内面ナデか。胴部内外面ヨコ ナデ、胴部内面ナデ。 口縁部外面塗仕上げ、坯部内面黒色処理、胴部内 面割磨状になる3段の接合痕	にに近い、褐色 小砂粒・雲母片少量、小礫・白色粒微量 焼成：良好	床面直上 坯部1/4、胴部残存 №91・101・P1・北東
14 土師器 高環	高12.0 胴部径(10.0)	断面厚縁のため調整不明瞭、体部外面ナデか。胴 部内面ナデ	褐色 小砂粒・小礫・白色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部1/4残存、坯部は欠損 №48

15	須倉器 費	高 [2.2]	口縁部外面ヨコナデ、口辺部内外面ナデ 備考 やや細密、器面に自然釉付着	(外) オリーブ黒色 (内) 灰色 白色細砂粒微量 焼成：良好	甕土 口縁部一部残存 北東
16	須倉器 費	高 [4.5]	胴部外面縦格子状の彫き、内面同心円状の当て具 痕、細密	(外) 褐色 (内) にぶい褐色 白色細砂粒微量 焼成：良好	甕土 胴部一部残存 № 17
17	須倉器 破損	高 [4.8]	電圧が子から剥離した破片、カキメを施した胴部側 面の圧痕が接合面に見る。 古墳時代後期～終末期の遺物。	黄灰色 白色細砂粒・小礫微量 焼成：良好	床面 把手部のみ残存 № 85
18	土師器 費	高 [4.0] 底 [7.0]	胴部下縁外面斜方向のヘラケズリ、底部外面一定 方向のヘラナデ。胴部下縁～底部内面ヘラナデ。 胴部外面剥離あり	(外) にぶい褐色 小砂粒・雲母片・白色粒少量、小礫微量 焼成：良好	甕土 胴部下縁～底部 1/4 残存 № 44・51
19	土師器 費	高 [2.1] 底 [6.0]	胴部外面厚瓦により調整不明瞭。胴部下縁外面斜 方向のヘラケズリか、底部外面一定方向のナデ。 胴部下縁～底部内面ヘラナデ・ナデ。底部粘土組 貼り付けによる輪付、胴部～底部外面剥離着	(外) 褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	甕土 胴部下縁～底部 1/3 残存 № 44
20	土師器 費	口 [22.0] 高 [21.8]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面タテ方向の刷毛 目調整、胴部内面ヘラナデ・ナデか。 ハヤ費、口縁部～胴部外面剥離、胴部内面にリン グ状の厚付着、甕土面か	(外) にぶい褐色 (内) 褐色 小砂粒・小礫少量、石莖・赤色粒・白色 粒微量 焼成：良好	甕土 口縁 2/3、胴部 3/4 残存、胴部下 縁～底部欠損 № 90・カマド・南西区
21	土師器 費	口 [23.0] 高 [10.1]	器面剥離のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナ デ、胴部外面タテ方向のヘラケズリ、胴部内面ヘ ラナデ・ナデか。粗い甕土	明褐色 小砂粒・小礫・黒色粒多量、雲母片少量 焼成：良好	床面 口縁～胴部上半 1/4 残存 № 15
22	土師器 費	口 [23.8] 高 [28.2]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面縦方向のヘラケ ズリ、胴部内面ヘラナデ・ナデ。 口縁部～胴部外面剥離あり	褐色 小砂粒・小礫・石莖微量 焼成：良好	床面 口縁 1/2、胴部 3/4 残存、胴部下 縁～底部欠損 № 6・7・8・20・21・23・24 ・52・56・57・59・67・78 ・79・81・86・87・88・80
23	土師器 費	口 [14.8] 高 [11.0]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラナデ工具によ るヨコ方向の沈線、胴部外面縦方向のヘラケズ リ、胴部内面ヘラナデ。口縁部～胴部外面剥離、 口縁部内面 3 箇所は厚付あり	(外) にぶい褐色 小砂粒・赤色粒・白色粒少量 焼成：良好	床面 口縁 1/2、胴部中位 3/4 残存、胴 部下半欠損 № 73・91・99・西区・表土
24	土師器 費	口 [14.0] 高 18.4 底 [8.0]	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヨコ方向のヘラ ナデ、胴部外面縦方向のヘラケズリ、胴部～底部 内面ナデ・ヘラナデ、底部外面不定方向のヘラケ ズリ、口縁部～胴部外面剥離、口縁部内面剥離着、 胴部外面剥離あり	(外) にぶい黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・赤色粒少量、雲母片・白色粒微 量 焼成：良好	甕土 口縁・底部一部、胴部 1/3 残存 94・95・96・98・99・北西区 ・北東
25	石製品 副葬石	最大長 13.1 最大幅 6.8 最大厚 2.9 重量：441.49	断面楕円形の自然石、1/3 被熱赤化、表面に帯状 に付着する黒色の痕跡あり。1～2 mm の石英異品 と有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 № 31
26	石製品 副葬石	最大長 13.2 最大幅 6.5 最大厚 2.4 重量：325.98	断面不整形円形の自然石、2～3 mm の石英異品と 有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 № 26
27	石製品 副葬石	最大長 13.9 最大幅 4.1 最大厚 4.5 重量：483.65	断面楕円形の自然石、表面に黒色の付着物あり。 2～3 mm の石英異品を含む。硬質緻密な安山岩。	明褐色	床面 完存 № 22
28	石製品 副葬石	最大長 17.8 最大幅 6.7 最大厚 4.1 重量：692.62	断面不整形円形の自然石、2～3 mm の石英異品と 有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	黄灰色	床面直上 完形 № 30
29	石製品 副葬石	最大長 17.1 最大幅 6.5 最大厚 3.9 重量：648.37	断面三角形の自然石、表面に黒色の付着物あり。 有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	甕土 完存 № 61
30	石製品 副葬石	最大長 16.9 最大幅 6.7 最大厚 3.65 重量：641.91	断面三角形の自然石、ホルンフェルス	灰色	床面直上 完存 № 69

第Ⅶ章 砂田姥沼遺跡3区の調査

31	最大長 13.9 石製品 最大幅 5.6 最大厚 3.8 重量: 508.63	断面楕円形の自然石。表面の下端縁部に黒色の付着物あり。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 No. 84
32	最大長 14.2 石製品 最大幅 6.0 最大厚 3.4 重量: 476.15	断面三角形の自然石。右下の縁部に2箇所割傷痕がある。縁部からの打撃であるが、刃部を形成するまでに至らない。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 No. 65
33	最大長 11.6 石製品 最大幅 3.9 最大厚 3.95 重量: 348.15	断面楕円形の自然石。2mmの石英英斑と有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	覆土 完存 No. 4
34	最大長 13.6 石製品 最大幅 4.8 最大厚 4.05 重量: 508.32	断面四角形の自然石。ホルンフェルスか。	灰色	覆土 完存 No. 42
35	最大長 13.7 石製品 最大幅 6.3 最大厚 3.6 重量: 460.21	断面三角形の自然石。有色鉱物は検出している。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面直上 完存 No. 76
36	最大長 14.2 石製品 最大幅 6.4 最大厚 3.3 重量: 525.6	断面楕円形の自然石。表面に黒色の付着物あり。2～3mmの石英英斑と有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 No. 38
37	最大長 10.3 石製品 最大幅 7.4 最大厚 2.2 重量: 188.67	断面楕円形の自然石。表面に黒色の付着物あり。2～3mmの石英英斑と有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	黄灰色	覆土 1/2 欠損 No. 45
38	最大長 17.5 石製品 最大幅 6.6 最大厚 2.4 重量: 210.94	断面楕円形の自然石。2～3mmの石英英斑と有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。内中左側の側縁に打痕あり	灰白色	床面 1/2 欠損 No. 41
39	最大長 18.7 石製品 最大幅 5.05 最大厚 3.3 重量: 139.31	平面楕円形・断面は楕円形と推察できる自然石。有色鉱物を含むが粗い。多孔質安山岩。	暗灰黄色	覆土 1/2 欠損 No. 63
40	最大長 22.6 石製品 最大幅 11.1 最大厚 4.6 重量: 1851.48	表裏面が平坦。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。表面に黒色の付着物あり	灰白色	床面直上 完存 No. 43
41	最大長 25.8 石製品 最大幅 22.2 最大厚 5.2 重量: 3778.02	表裏面が平坦。表面は全体的に磨滅しており、中心部は磨り痕が著しく凹んでいる。裏面には中心部に磨り痕があり、縁部では網いキズ状の痕跡が確認できる。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	床面直上 1/4 欠損 No. 37
42	全長 3.1 鉄製品 最大幅 3.1 最大厚 0.16 重量: 2.57	鉄身は平造。鉄身の中央部に有孔。無葉三角式鉄鏝	黒褐色	床面直上 鉄身の1/2 残存 No. 70
43	縦径 1.8 銅製品 横径 1.9 厚さ 0.52 内側径 1.3 端面幅 0.35 断面幅 0.3 重量: 4.67	磨りしないので真鍮ではない。表面に銅青があるが、部分的に鍍金した材で覆っていたとみられる。断面は楕円形である。端面には丸味はなく、結電材を折り込んで覆った態が明瞭。内側面や外側面にも結電材の態が確認できる。	緑灰色	P3 覆土 P3
44	直径 1.05 石製品 高 0.87 孔径 0.29 重量: 1.41	両側からの穿孔か。穿孔径丁寧な研磨。蛇紋岩系	灰白色	床面直上 完形 No. 11
45	直径 1.01 石製品 高 0.81 孔径 0.27 重量: 1.22	両側からの穿孔か。穿孔径丁寧な研磨。両極部は凹んでおり、片面には段差も見られたことから小玉と接して磨滅したと考えられる。蛇紋岩系	灰オリーブ色	覆土 完形 No. 10

46 土製品 紡織車	上径 (5.1) 下径 (2.9) 厚 2.3 孔径 0.65 重組: 14.72	上面及び下面は平坦に成形後ヘラナデ、側面はナ デ成形後に上端に横方向のヘラナデ、穿孔部は割 減、断面台形	褐色 小砂粒・石炭微塵 焼成: 良好	覆土 1/4 残存 南西
47 土製品 土罐	最大径 18.71 最大幅 2.2 最大厚 2.08 孔径 0.5 重組: 46.50	ナデ成形 備考: 断面円形、外面に黒色の付着物 有り、穿孔部は割減している。	浅黄褐色 小砂粒・石炭微塵 焼成: 良好	覆土 欠損部あり 南西区・表掘

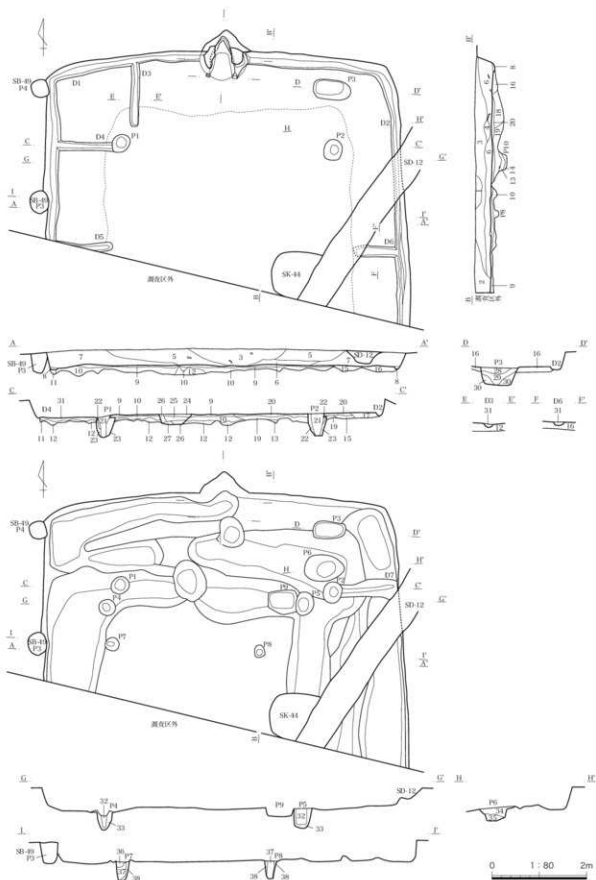


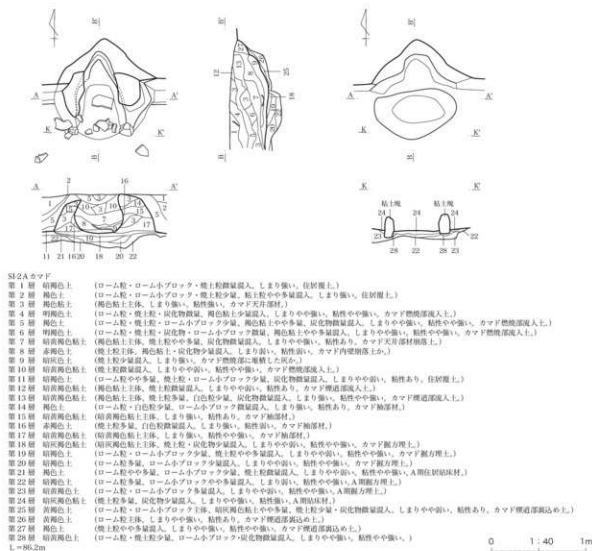
第 135 図 砂田姥沼遺跡 3 区 S1-2A 実測図 (1)

S1-2A (第135～138図、第41表、図版三三・三四・六五・六六)

概要 本道構は東区の中央の南側で確認され、建物の南側約1/2が調査区外となる。本建物跡は拡張住居であり、3時期の変遷が認められる。時期ごとに各遺構をA・B・Cとした。本期は新しい段階のA期となる。

位置 99-38グリッドに位置する。確認面標高は86.114m～86.056mである。平面形・規模 南北[5.35]m×東西7.42mの竪穴建物である。北壁に直交する軸線はN-2'-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北ラインで観察できる。覆土はレンズ状に第1～第7層の堆積からなる。壁 床面からの残存壁高は25cm～36.7cm。壁は床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。床はB・C期の床面を使用している。東側へ拡張した範囲に掘り方埋土である第16・17層を充填している。柱穴 2本の主柱穴(P1・P2)を確認した。平面形はいずれも楕円形で床面からの掘り込みはやや深い。覆土は第21～23層が確認できた。柱痕は確認されていない。P1は径43×33×深さ47.6cm、P2は径41×39×深さ47.4cm、柱間寸法はP1-P2間が4.50mである。貯蔵穴 貯蔵穴としたP3は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸79cm×短軸41cmの隅丸長方形で、床面から底面までが35.5cm。掘り込まれた底面は平坦である。覆土は第28～30層が堆積している。壁周溝 竪穴の南側が調査区外になるため壁周溝の全容は不明である。壁周溝をD1・D2便宜的に区分した。D1とした壁周溝は、北壁際～西壁際を巡っている。規模は短軸17×深さ38.5cmである。D2とした壁周溝は、北壁際～東壁際を巡っている。規模は短軸15×深さ30.8cmである。第8層が壁周溝(D1・D2)の埋土であることから、全周する壁周溝と推察される。間仕切溝 間仕切り溝は床面で4条(D3～D6)、掘り方でD7が、併せて5条が確認されている。D3は北壁から主柱穴(P1)に対して壁周溝から南方向に区切っている。規模は長軸134cm×短軸18×深さ9.3cmである。D4は壁周溝からP1に対して東方向に連結する。規模は長軸118cm×短軸16×深さ4.5cmである。D5は住居の中央部にあたる調査区で、壁周溝から東方向に区切る間仕切り溝である。規模は長軸120cm×短軸18×深さ9.9cmである。D6はD5の対になる。東壁周溝から西方向に区切る間仕切り溝である。先端部がSD-12に削平されているが、規模は長軸92cm×短軸21×深さ8.5cmである。掘り方で確認できたD7は東壁からP3に対して西方向に連結する掘り方である。規模は長軸117cm×短軸36×掘り方からの深さが8.0cmである。カマド カマドは北壁の中央に位置しており、煙道部の壁外への掘り込みは44cmと穿っている。本カマドの遺存状況は両袖部を残すのみである。平面規模は南北軸は1.04m×東西1.08mである。カマドの構造は竪穴の掘り方に東西方向に長い楕円形の掘方を形成した後に、貼床材(第21・22層)を敷設して埋め戻し、第18・19層で掘り方の上部を充填している。袖材は第18～20層の上面に基底部となる第17層を敷設後、第3・14・15層で構築している。両袖部前面には芯材が確認された。芯材は粘土塊で、掘り方埋土を掘り込んで据えられている。焚き口の補強材か。火床面は袖部内の第18～20層上面が相当する。煙道部は掘り方を形成する以前に第25・26層で煙道部の掘り方を充填しており、火床面から緩やかに立ち上がるが、上位で外傾屈曲し彎曲気味に確認面に至る。出土遺物 出土した遺物は砂田姥沼遺跡で最も多く1026点に及ぶ。取り上げ遺物も180点と多くなっている。これらの大半は覆土に混入したものである。図示し得たのは24点である。床面ないし床面直上から出土した遺物についてみると、北壁寄りの床面直上から出土した模倣杯蓋模倣形(№1)は推定口径が15.6cmと大型である。古墳時代後期～終末期に相当するか。同半球形(№4)は破片が北壁際・北壁寄り及び住居中央部の床面直上や覆土から出土している。口径が大きいことから古墳時代後期の範疇か。同外傾形(№7)はP7覆土出土である。長胴甕(№10)はやや胴部中に丸味を持つ形状から古墳時代後期の範疇か。カマドの火床から出土しており、住居の廃絶時期に近い遺物と考えられる。甕(№11)はカマドの燃焼部覆土から出土した、長



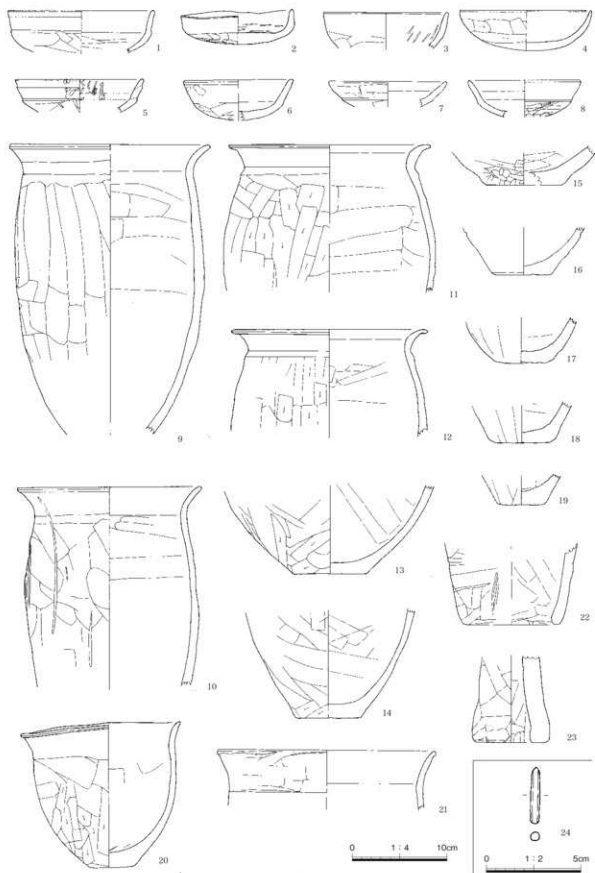


第137図 砂田姥沼遺跡3区 SI-2A実測図(3)

胴化のケズリ甕である。口径よりも胴部径の方がやや大きい形となる。甕(No.13)は丸甕系である。破片は北壁際〜カマドにかけて、住居の床直から覆土からと散在している接合遺物である。カマドから出土した破片は被熱赤化している。小形の甕(No.20)は住居の北東隅で出土した接合遺物である。口径部に最大径をもつ形状で、頭部の括れは見られないことから古墳時代後期後半に相当するか。床面とその付近の覆土から出土したものである。一次埋没土に混入した遺物であろうか。無底式の甕(No.22)は外面にミガキが残るや古相である。北壁際の床面から出土した胴部下半〜下端部片である。支脚(No.23)は貼床材から出土した。上部及び胴部の一部が破砕しており、完存でない。本住居は拡張住居であることから、B期段階のカマドの支脚として使用していたものが、貼床材に混入したのであろうか。

この他に覆土には、内面に横方向のミガキが施されている模倣形の蓋模倣形(No.4)がある。同外傾形(No.6)の外面には漆仕上げを内面には黒色処理と両方の処理を施している。同外傾形(No.8)には口径部と体部との境にへう状工具による沈線が巡る。棒状の土製品(No.24)の用途は不明である。

本遺構の時期は、遺構に伴う長胴甕や坏は古墳時代後期後半の様相を示しており、覆土の坏類が古墳時代の後期後半〜終末期の様相であることから、古墳時代後期後半期の遺構である。



第138図 砂田姥沼遺跡3区 S1-2出土遺物

第41表 砂田姥沼遺跡3区 SI-2出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 時期	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土環境 残存状態 注記
1 土師器 環	口(15.6) 高[4.5]	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面ヨコ方向のヘラナデ、内面ナデ、体部外面ヨコ方向のヘラナデ、内面ヘラナデ、横線付横線模、口縁部外面漆仕上げ、内面黒色処理、口縁部内面に炭状剥離	にぶい黄褐色 小砂粒・小砂粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部の1/3 残存 №111・172・覆土・北西・ 南北ベルト
2 土師器 環	口11.9 高3.6	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラナデ、体部内面ナデ後ヨコ方向のヘラミナギ、横線付横線模、口縁部外面及び口縁部～底部内面漆仕上げ	(外) 褐色 (内) 黒色 小砂粒・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部1/4欠損 №53
3 土師器 環	口(13.2) 高[3.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラナデ、体部内面ナデ後縦方向のヘラミナギ、横線付半球形、口縁部内外面漆仕上げ、体部内外面に炭状剥離	にぶい黄褐色 小砂粒・石英・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/3 残存 №30・73
4 土師器 環	口14.1 高4.3	断面摩擦のため調整不明瞭、口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヨコ方向のヘラナデ、横線付半球形、口縁部外面及び口縁部～底部内面漆仕上げ	(外) にぶい黄色 (内) 灰黄褐色 小砂粒・石英・黒色粒微量 焼成：良好	覆土 ほぼ完形 №13・58・60・82・86
5 土師器 環	口(13.6) 高[3.5]	口縁部内外面ヨコナデ、口縁部外面ヨコ方向のヘラナデ、体部内面ナデ、横線付外輪形、口縁部内外面黒色処理	褐色 小砂粒・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の一部残存 №93・102
6 土師器 環	口(11.6) 高[4.3]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、体部内面ヨコナデ・ナデ、横線付外輪形、口縁部～体部内面漆仕上げ、口縁部～体部内面黒色処理	(外) 灰黄色 (内) 灰色 小砂粒・白色粒少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部1/4 残存 №19
7 土師器 環	口(12.5) 高[4.3]	口縁部外面上ヨコナデ、口縁部外面下ヘラナデ、体部外面ヘラナデ、体部内面ヨコナデ・ナデ、横線付外輪形、口縁部と体部との境にヘラ状工具による沈線、口縁部外面及び口縁部～体部内面黒色処理	(外) にぶい黄褐色 (内) 黒色 小砂粒微量 焼成：良好	P7 覆土 口縁部～体部一部残存 P7
8 土師器 環	口(12.0) 高[3.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、体部内面ヨコナデ・ナデ、横線付外輪形、口縁部と体部との境にヘラ状工具による沈線、口縁部内外面漆仕上げ	にぶい黄褐色 小砂粒・小砂粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部残存 №134
9 土師器 甕	口21.2 高[30.9]	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヨコ方向のヘラナデ・ヨコ方向のナデ、頸部外面タテ方向のヘラナデ、胴部中位内面ヘラナデ、胴部下ナデ、胴部外面に横付着	(外) にぶい赤褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・小砂粒・石英・赤色粒・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁～胴部残存、底部欠損 №1・101・113
10 土師器 甕	口19.5 高[21.2]	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面タテ方向のヘラナデ後タテ方向のミナギナ、胴部中位内面ヘラナデ、胴部下ナデ、口縁部及び胴部外面に横付着、胴部下平部に焼熱赤化あり	浅黄色 小砂粒・小砂粒・石英・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	床面直上 口縁～胴部中位残存、胴部下平～ 底部欠損 №1・15・80・90・170
11 土師器 甕	口(21.4) 高[15.5]	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面ナデ後、タテ方向のヘラナデ、内面ナデ後ヨコ方向のヘラナデ、口縁部～胴部外面黒色	(外) 黒色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・石英多量、小砂・雲母片・白色粒・黒色粒少量 焼成：良好	覆土 口縁～胴部上平1/3のみ残存 №5・カマド・表土
12 土師器 甕	口(20.8) 高[11.4]	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面ヨコ方向のヘラナデ、胴部外面縦方向のヘラナデ、一部光沢のあるヘラナデ、内面ナデ後ヨコ方向のヘラナデ、口縁部～胴部外面黒色、口縁部内面に横付着	(外) 黒色 (内) 灰黄褐色 小砂粒・白色粒少量、小砂・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面 口縁～胴部上平一部のみ残存 №40・79・K・南西
13 土師器 甕	高19.4 底7.8	胴部下端外面斜方向のヘラナデ、底部外面不定方向のヘラナデ、胴部内面ヘラナデ、底部内面ナデ、胴部内面に横付着、一部破片に焼熱赤化あり	(外) 灰褐色 (内) 褐色 小砂粒・石英少量、小砂・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部下平1/4、底部残存 6・14・75・86・175・177
14 土師器 甕	高[11.5] 底6.8	胴部下端～底部の内面は摩擦のため不明瞭、胴部外面斜方向のヘラナデ、底部外面不定方向のヘラナデ、胴部内面ヘラナデ、胴部外面に横付着、一部焼熱赤化	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・小砂粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 胴部下平一部、底部1/2 残存 №27・67・89・91・95
15 土師器 甕	高[3.5] 底(7.8)	胴部下端外面斜方向のヘラナデ、内面ヘラナデ調整、底部外面一定方向のヘラナデ、胴部下端外面の一部に炭状剥離あり	(外) 褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・石英・雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部下端～底部一部残存 №135
16 土師器 甕	高[4.9] 底5.8	断面摩擦のため調整不明瞭、胴部外面に横付着	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂・石英少量、小砂粒微量 焼成：良好	覆土 底部残存 №23・32・49

17 土師器 費	高 15.9 底 5.4	器面摩耗のため調整不明瞭。胴部外面ヘラケズリか、胴部内面ナデか。 胴部下端に付着物	(外) 灰黄褐色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・小礫・石英微量 焼成：良好	覆土 底部残存 No 59
18 土師器 費	高 15.4 底 15.6	胴部下端外面タテ方向のヘラケズリ、内面ナデ調整。底部外面一定方向のヘラケズリ。 胴部下端外面に覆付着	(外) にぶい赤褐色 (内) 褐色 小砂粒・小礫少量、石英・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部下端一部、底部1/3残存 No 68
19 土師器 費	高 13.3 底 5.1	器面摩耗のため調整不明瞭。胴部下端外面タテ方向のヘラケズリ、内面ヘラナデ調整。胴部下端外面に覆付着	(外) にぶい赤褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒・小礫少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 胴部下端一部、底部残存 No 84
20 土師器 費	口 16.8 高 15.4	口縁部内外面ヨコナデ、胴部外面ヘラケズリ後ヘラナデか、底部外面不定方向のヘラケズリ、胴部中位内面ヘラナデ。胴部下平内面ナデ。底部内面ヘラナデ。口縁部及び胴部外面に覆付着。口縁部～胴部に焼熟赤化あり	(外) にぶい赤褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量・小礫・石英・白色粒微量 焼成：良好	床面 ほぼ完形 No 103・104・106・107・109
21 土師器 費	口 23.2 高 16.4	口縁部内外面ヨコナデ。口辺部外面ヨコ方向のヘラナデ後ヨコナデ。内面ヨコナデ・ナデ。口唇部及び胴部にヨコ方向のヘラナデ調整痕あり	にぶい黄褐色 小砂粒・石英・雲母片・赤色粒・黒色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁～胴部一部残存 No 130・132
22 土師器 飯	高 18.7 底 10.0	胴部下平外面タテ方向のヘラケズリ後斜方向のヘラナデ。一部タテ方向のミガキ。下端部内外面横方向のヘラケズリ。胴部内面斜方向のヘラナデ。無底式。内面覆付着	(外) にぶい褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量、小礫・雲母片・赤色粒・白色粒微量 焼成：良好	床面 胴部下平～下端1/4残存 No 117・覆土・南北ベルト・一括
23 土製品 支脚	全高 19.2 上径 16.1 下径 8.0	器面摩耗のため調整不明瞭。側外面斜方向のヘラナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ。側内面斜方向のナデ。底部内面ヨコ方向のナデ。底部外面不定方向のヘラケズリ	にぶい黄褐色 小礫少量、小砂粒・石英微量 焼成：良好	竈床内 支脚上部・胴部1/3・底部一部欠損 No 179
24 土製品 棒状土製品	最大長 29.4 高 0.49	器面ナデ調整か。 器面に黒色の付着物有り	にぶい黄褐色 細砂粒微量 焼成：良好	覆土 欠損箇所あり No 100

S1-2B (第136図)

概要 本遺構は拡張住居のB(旧)期のものである。本期の床面からは2本の主柱穴と貯蔵穴を確認できた。床面をA期と共有していたため覆土はない。壁高はA期と同じである。位置 99-38グリッドに位置する。平面形・規模 南北4.62m×東西6.92mの竪穴建物である。北壁に直交する軸線はN-6°-Wである。床 床面自体はC期の床をそのままに北・東側へ拡張している。床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。東側へ拡張した貼床はCラインで確認できた第20層になる。掘り方には第13～15・18層を充填している。柱穴 2本の主柱穴(P4・P5)を確認した。平面形はいずれも楕円形で床面からの掘り込みはやや深い。覆土はGラインで第32・33層を確認できた。柱痕は確認されていない。P4は径34×34×深さ38.3cm、P5は径51×38×深さ43.8cm、柱間寸法はP4-P5間が4.20mである。貯蔵穴 貯蔵穴としたP6は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸79cm×短軸56cmの隅丸長方形で、床面から底面までが27.2cm。掘り込まれた底面はやや凹んでいる。覆土はロームブロックを少量～多量に混入している第34・35層で埋め戻されている。壁周溝 B期の壁周溝は西壁際でのみA・Cラインで確認できた第11層が相当する。C期のものを利用している可能性もある。位置はA期の壁周溝D1の下層になる。同じ箇所に通っていたと推定されるが、調査時にはD1と共に掘り上げてしまっていたために平面配置は不明である。なお、拡張時に北・東壁際は掘削されたため、壁周溝を確認することができない。カマド カマドは北壁の中央部の掘り方に楕円形の痕跡が僅かに残る。南北軸66×東西60cmの掘り方である。覆土はCラインの第24～27層が相当し、焼土粒・ロームブロックを含んでいる。出土遺物・時期 B期に直接伴う遺物はない。A期よりも先行する古墳時代後期後半期の遺構である。

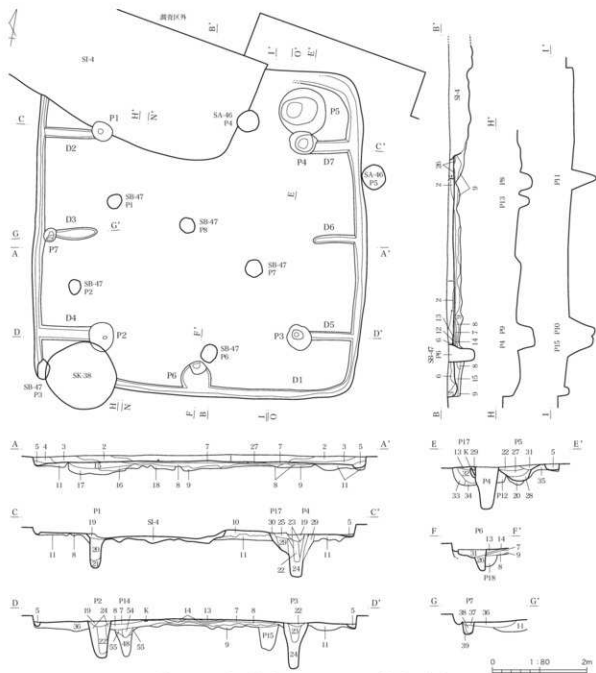
S1-2C (第136図)

概要 本遺構は拡張住居のC(旧)期のものである。3時期の内、最も古い竪穴建物になる。本期の床面か

らは2本の主柱穴と貯蔵穴を確認できた。床面をA・B期に共有されていたため覆土はない。壁高はA・B期と同じである。位置 99-38グリッドに位置する。平面形・規模 南北[3.20]m×東西6.08mの竪穴建物である。北壁に直交する軸線はN-1°-Eである。床 C期床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。掘り方には第10・12層を充填している。第9層上面が床面となる。柱穴 2本の主柱穴(P7・P8)を確認した。平面形はいずれも楕円形で床面からの掘り込みはやや深い。覆土は1ラインで第36～38層が確認できた。柱痕は確認されていない。P7は径29×27×深さ44.3cm、P8は径26×22×深さ37.5cm、柱間寸法はP7-P8間が3.16mである。貯蔵穴 貯蔵穴としたP9は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸[60]cm×短軸51cmの隅丸長方形で、床面から底面までが20.2cm。掘り込まれた底面は概ね平坦である。平面形の確認のみで覆土は不明である。壁周溝 C期の壁周溝は西壁際に配されており、B期が同じものを共有していた可能性もある。カマド カマドは北壁の中央部の掘り込み楕円形の痕跡が僅かに残る。南北軸88×東西68cmの掘り込みである。出土遺物・時期 C期に直接伴う遺物はない。B期よりも先行する古墳時代後期後半期の遺構である。

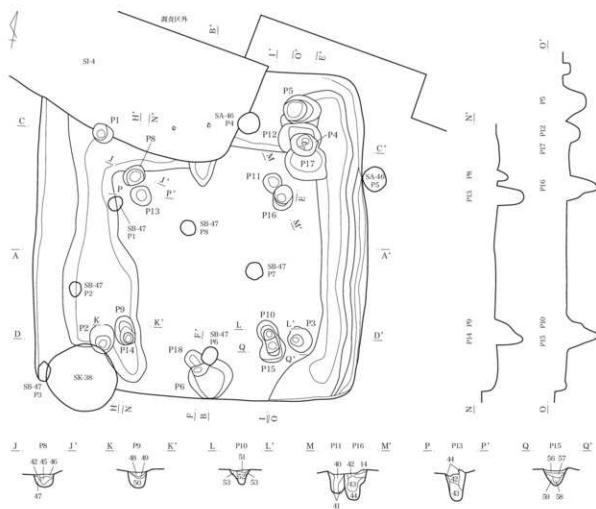
S1-3A (第139～142図、第42表、図版三四～三六・六六)

概要 東区中央に位置する建物跡である。北西隅～北壁がS1-4に重複されているため、カマドの有無は不明である。南西隅がSK-38に重複されている。また、拡張住居で3時期の変遷が認められる。時期ごとに各遺構をA・B・Cとした。本期は新しい段階のA期となる。位置 99-38グリッドに位置する。確認面標高は86.120m～85.987mである。平面形・規模 南北7.01m×東西6.96mの南北方向に長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-7°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションではレンズ状の堆積をしており、第1～4・6層の自然堆積である。壁 床面からの残存壁高は3.7cm～30cmで、床面より直線的にやや外傾して立ち上がる。床 床面は緩やかな凹凸があるものの平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。貼床材は第7・8・10・11・12～15層で上面が床面となる。掘り方は第9・16～18層で充填されている。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。床面からの掘り込み深い。明瞭な柱痕を確認することはできなかった。P1は径42×38×深さ69.2cm、P2は径61×49×深さ70.3cm、P3は径51×46×深さ97.0cm、P4は径59×50×深さ88.8cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が4.46m、P2-P3間が4.10m、P3-P4間が4.06m、P1-P4間が4.28mを測る。4本の柱穴はほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP5は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸99cm×短軸96cmの楕円形で、床面から底面まで43.2cmと掘り込まれている。その底面は平坦だが丸味を帯びている。覆土は第22・27・28層であり自然堆積をしている。入口関連施設 南壁際中央部に位置するP6としたピットは、長軸38×短軸28×深さ44.7cmの楕円形で、浅く平坦に掘り込み、北側にピット状に深く掘り込まれている。覆土は第26・31層である。配置的に入口ピットと考えている。壁周溝 D1とした壁周溝は、南西隅でSK-38に重複されるため分断されているが、同一のものである。北東隅～北壁では、調査区に沿ってサブトレンチを掘り込みで設定したため、北壁際は削平されている。D1の幅は幅は15cm、深さ21.7cmでやや深い。全周するものとする。壁周溝の覆土はA・C・Dラインの第5層が相当する。間仕切溝 間仕切り溝はD2～D7の6条が確認されている。D2は西壁からP1に接続するもので、規模は長軸101cm×短軸20×深さ2.9cmである。D3は西壁際の中央、P7から東西方向に配されている。規模は長軸86cm×短軸26×深さ11.8cmである。D4は西壁からP2に接続するもので、規模は長軸104cm×短軸28×深さ11.0cmである。D5は東壁からP3に接続するもので、規模は長軸109cm×短軸17×深さ9.7cmである。D6は東壁際の中央、東壁から東西方向に配されている。規模は長軸88cm×短



第 140 図 砂田姥沼遺跡3区 SI-3A 実測図(2)

床面や床面直上から出土したものは、模倣坏の身模倣形 (№1) は口径が 10.8 cm と小さくなることから古墳時代終末期の様相である。同身模倣形 (№3) も中央部の床面から覆土にかけての破片が散っていた接合遺物である。推定口径が 10.2 cm と小型化している。同身模倣形 (№4) は東壁寄りの床直・床面で出土した接合遺物である。推定口径 12.0 cm と小型化している。同半球形 (№5) は北東壁寄りの床面からの出土である。口縁部外面にヨコナデ後に沈線が巡る。模倣坏半球形 (№7) は柱穴 P4 から出土した破片である。口縁部外面に沈線が施されている。古墳時代終末期段階に相当か。出土状況から柱穴の抜き取り後に混入したと判断する。同外傾形 (№8) も床面から覆土にかけて散って出土しており、埋没中に混入したものである。口縁部外面にはヨコナデ後に沈線が巡る。形状から古墳時代末期段階であろうか。同外傾形 (№9) は南壁際の

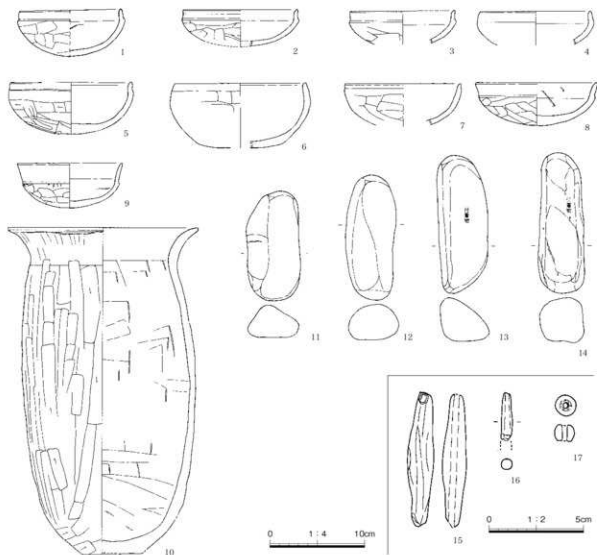


- 第34層 暗赤褐色土 (ローム主体、しまりやや強い、粘性強い、C層P12層上。)
- 第35層 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒混入。ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性強い、B層P17層上。)
- 第36層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、A層D1・D4層上。)
- 第37層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・焼土粒混入。しまりやや強い、粘性あり、A層P7層上。)
- 第38層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり、A層P7層上。)
- 第39層 暗赤褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、A層P7層上。)
- 第40層 暗赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。焼土粒混入。しまり強い、粘性やや強い、B層P11層上。)
- 第41層 黄褐色土 (ローム土塊、しまりやや強い、粘性やや強い、B層P11層上。)
- 第42層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり、C層P13・P16層上。)
- 第43層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、C層P13・P16層上。)
- 第44層 暗赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、C層P13・P16層上。)
- 第45層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、B層P9層上。)
- 第46層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり、B層P9層上。)
- 第47層 暗赤褐色土 (ローム土塊、黒褐色土少量混入。しまり強い、粘性あり、B層P8層上。)
- 第48層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B層P9層上。)
- 第49層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B層P9層上。)
- 第50層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、B層P9層上。)
- 第51層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、B層P10層上。)
- 第52層 黒色土 (ローム粒混入。しまりやや強い、粘性強い、B層P10層上。)
- 第53層 暗赤褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B層P10層上。)
- 第54層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性やや強い、C層P14層上。)
- 第55層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、C層P14層上。)
- 第56層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。焼土粒混入。しまり強い、粘性あり、C層P15層上。)
- 第57層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、C層P15層上。)
- 第58層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、C層P15層上。)
- 第59層 暗赤褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、C層P15層上。)

第141図 砂田姥沼遺跡3区 SI-3A・3B・3C実測図

床面から出土した。口径が11.1cmと小形化であることから、(№1)同様に古墳時代末期に位置付けられる。長胴甕(№10)は北壁寄りの覆土からほぼ完形で出土している。

覆土から4個体は編物石(№11～14)である。(№13・14)は表面に黒色の付着物が確認される。模倣半球形(№6)は南壁際の床面から覆土から出土しており、体部の内外面に斑状剥離が著しい。やや器高



第142図 砂田姥沼遺跡3区 S1-S3出土遺物

が深い。本道構には伴わない混入遺物である。なお、石製品の玉(Na 17)は貼床内からの出土である。

本道構の時期は、坯の口径が小形になってくるとや長胴甕の形態から、古墳時代末期段階に位置付けられる。

第42表 砂田姥沼遺跡3区 S1-S3出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 坯	口 10.8 高 5.1	体部内外面厚肉のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面へラケズリ。内面へラナデか。模範坯身模範形。口縁部内外面塗仕上げか。	褐色 小砂粒・小礫少量。赤色粒微量。 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の1/4 残存 No 15
2 土師器 坯	口 12.2 高 3.9	口縁部外面ヨコ方向のへラナデ後にヨコナデ。口縁部内面ヨコナデ。体部外面へラケズリ。体部内面ナデ。模範坯身模範形。口縁部内外面の一部に塗付着	褐色 小砂粒・赤色粒少量。石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部 3/4 残存 No 86・91・94・95・103
3 土師器 坯	口 10.2 高 [3.5]	体部内外面に斑状剥離あり。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面へラケズリ。内面ナデか。模範坯身模範形。口縁部～体部内外面塗仕上げ	(外) にぶい黄褐色 (内) 褐色 小砂粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部の一部残存 No 102・103・草濤
4 土師器 坯	口 12.0 高 [3.6]	体部内外面は斑状剥離が著しく調整不明。口縁部内外面ヨコナデ。模範坯身模範形	(外) にぶい黄褐色 (内) 褐色 小砂粒少量。小礫・石英・雲母片微量 焼成：良好	床面直上 口縁部～体部 1/2 残存 No 51・52・53・野沢

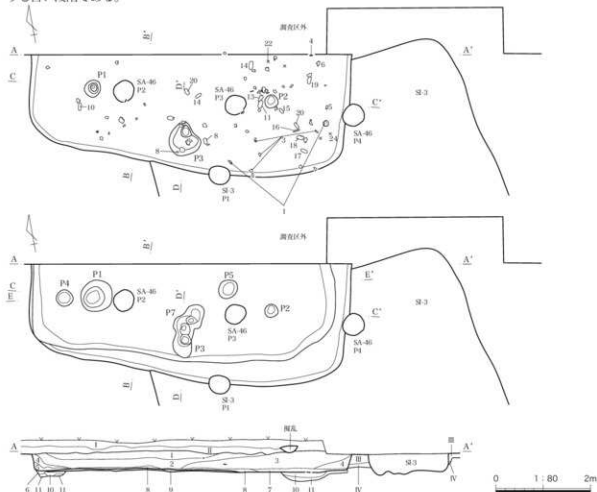
5	土師器 環	口13.0 高15.0	体部内外面形状剥離が著しいため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ後に外面にヘラ状工具による沈線が施す。体部外面ヨコ方向のヘラズリ。後斜方向のヘラズリ。体部内面ナデか。楕円環半球形。口縁部内外面漆仕上げ。口縁部内外面に黒色	棕色 小礫少量。石英・雲母片・赤色粒少量 焼成：良好	床面直上 口縁部一部欠損 №42
6	土師器 環	口(14.0) 高16.0	体部内外面形状剥離が著しく調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコ方向のヘラズリ。楕円環半球形。口縁部内外面に漆仕上げ	にんい・黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部一部欠損 №78・83・表土・南東覆土
7	土師器 環	口(12.4) 高14.5	体部外面は摩耗が著しく調整不明瞭。口縁部外面ヨコナデ後ヘラ状工具による沈線。口縁部内面ヨコナデ。体部外面ヘラズリ。体部内面ナデ。楕円環半球形。口縁部内面に漆仕上げ。口縁部外面に黒色	棕色 小礫少量。小砂粒・石英微量 焼成：良好	P1覆土 口縁部一部欠損 P1-1
8	土師器 環	口13.0 高4.7	口縁部内外面ヨコナデ後。外面にヘラ状工具による沈線が施す。体部外面斜方向のヘラズリ後。体部内面ナデ後ヘラナデか。楕円環外縁形	にんい・黄褐色 小砂粒・石英少量 焼成：良好	床面 口縁部一部3/4欠損 №2・3・10・貼床
9	土師器 環	口11.1 高4.8	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヘラズリ。内面ナデか。楕円環外縁形。口縁部内外面に漆仕上げ。底部外面に黒色。体部に定位のヒビ割れ	にんい・黄褐色 小砂粒少量。雲母片・赤色粒少量 焼成：良好	床面 口縁部一部欠損 №84
10	土師器 甕	口20.2 高34.8 底6.2	口縁部内外面ヨコナデ。頸部外面タテ方向のヘラズリ。胴部外面タテ方向のヘラズリ。内面ヨコ方向のヘラナデ。底部外面一定方向のヘラズリ。胴部外面に黒色。口縁部に縁台痕1段	にんい・黄褐色 小砂粒多量。小礫・石英・白色粒少量 焼成：良好	覆土 ほぼ完存。胴部一部欠損 №35・北東
11	石製品 編物石	最大長11.6 最大幅5.3 最大厚3.4 重量：323.21	断面三角形の自然石。有色鉱物を多く含む。縦質。縞縞な安山岩。	緑灰色	覆土 完存 №6
12	石製品 編物石	最大長13.25 最大幅5.3 最大厚3.7 重量：494.19	断面楕円形の自然石。表面に黒色の付着物あり。有色鉱物を含む。縦質縞縞な安山岩。	灰色	床面直上 完存 №85
13	石製品 編物石	最大長14.6 最大幅5.2 最大厚4.5 重量：425.17	断面三角形の自然石。表面に黒色の付着物あり。2mmの石英風品を含む。縦質縞縞な安山岩。	灰白色	覆土 完存 №65
14	石製品 編物石	最大長14.9 最大幅4.8 最大厚4.8 重量：574.13	断面四角形の自然石。表面に黒色の付着物あり。2～4mmの石英風品を含む。縦質縞縞な安山岩。	浅黄色	覆土 完存 №2
15	土製品 土罐	最大長7.0 最大幅1.6 最大厚1.25 口径0.4 重量：8.06	断面楕円形	黒褐色 焼成：良好	覆土 完存 表様
16	土製品 棒状土製品	最大長12.46 最大幅(0.55) 厚0.59 重量：0.67	断面円形	明黄褐色 細砂粒微量 焼成：良好	覆土 一部欠損 覆土
17	土製品 玉	直径1.1 高0.9 口径0.3 重量：1.60	両側からの穿孔孔。穿孔後丁寧な研磨。片状安山岩	黒色	胴内 完形 製造

S1-3B (第141図)

概要 本遺構は拡張住居のB(旧)期のものである。A期の掘り方面からは4本の主柱穴と貯蔵穴を確認できた。

位置 99-38グリッドに位置する。平面形・規模 A期の掘り方面に痕跡が残るのみ。建物の形態は不明である。柱穴 4本の主柱穴(P8・P9・P10・P11)を確認した。掘り方は小さく掘り方面からの掘り込みは浅い。柱痕は確認されていない。P8は径46×42×掘り方面からの深さ26.5cm、P9は径60×41×掘り方面からの深さ33.5cm、P10は径421×39×掘り方面からの深さ30.3cm、P11は径341×38×掘り方面からの深さ46.8cm。柱間寸法は柱痕間隔でP8-P9間が3.20m、P9-P10間が3.08m、P10-P11

間が3.24 m、P 8—P 11間が2.92 mを測る。4本の柱穴はほぼ南北方向に長い長方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP 12は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸88 cm×短軸60 cmの隅丸長方形で、掘方面から底面まで22.2 cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。出土遺物・時期 B期を特定する遺物は見られないため時期は不明である。本期は拡張していることから、古墳時代末期段階としたA期よりも古い段階である。



SI-4

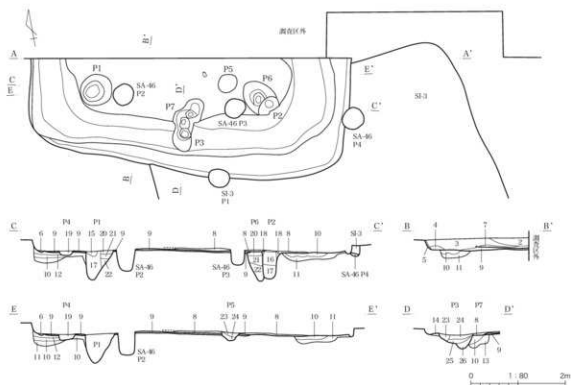
- 第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・白色粒・灰化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期居住層上。)
- 第2層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・焼土粒・白色粒・灰化物微量混入。しまり強い、粘性あり、A期居住層上。)
- 第3層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・焼土粒・白色粒・灰化物微量混入。しまり強い、粘性あり、A期居住層上。)
- 第4層 褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック・焼土粒・灰化物微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期居住層上。)
- 第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、焼土粒・灰化物微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期居住層上。)
- 第6層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期居住層上。)
- 第7層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・灰化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期居住層上。)
- 第8層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性やや強い、A期居住層上。)
- 第9層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまり強い、粘性やや強い、B期居住層上。)
- 第10層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B期居住層上。)
- 第11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量、焼土粒・暗褐色土粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B期居住層上。)
- 第12層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、B期居住層上。)
- 第13層 暗褐色土 (ローム土体、しまりやや強い、粘性強い、B期居住層上。)
- 第14層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期居住層上。)
- 第15層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期P1・P2層上。)
- 第16層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P1・P2層上。)
- 第17層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期P1・P2層上。)
- 第18層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P2層上。)
- 第19層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロックやや多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり、B期P4層上。)
- 第20層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P1・P2層上。)
- 第21層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量、焼土粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P1・P2層上。)
- 第22層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期P1・P2層上。)
- 第23層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり、A期P3・P5層上。)
- 第24層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P3・P5層上。)
- 第25層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P3層上。)
- 第26層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、A期P3層上。)

L=86.2m

第143図 砂田姥沼遺跡3区 SI-4A実測図

S1-3C (第141図)

概要 本遺構は拡張住居のC(旧)期のものである。A期の掘方面からは4本の主柱穴と貯蔵穴、入口ピットを確認できた。位置 99-38グリッドに位置する。平面形・規模 B期と同様に、A期の掘方面に痕跡が残るのみ。建物の形態は不明である。柱穴 4本の主柱穴(P13・P14・P15・P16)を確認した。掘り方は大きく掘方面からの掘り込みは深い。柱痕は確認されていない。P13は径43×40×掘方面からの深さ58.6cm、P14は径32×36×掘方面からの深さ38.1cm、P15は径60×54×掘方面からの深さ37.5cm、P16は径54×42×掘方面からの深さ64.2cm。柱間寸法は柱痕間隔でP13-P14間が3.04m、P14-P15間が3.06m、P15-P16間が3.18m、P13-P16間が2.96mを測る。4本の柱穴はほぼ方形に配されている。貯蔵穴 貯蔵穴としたP17は、住居北東隅に位置している。平面形は長軸86cm×短軸55cmの隅丸長方形で、掘方面から底面まで39.7cmと掘り込まれている。その底面は平坦である。入口関連施設 南壁際中央部に位置するP18としたピットは、長軸[38]×短軸35×掘方面からの深さ25.9cmの楕円形で、A期P6に重複されている。P6よりも古いピットであること、配置的に入口ピットと考えている。出土遺物・時期 C期を特定する遺物は見られないため時期は不明である。本期は拡張していることから、古墳時代末期段階としたA・B期よりも古い段階である。



第144図 砂田姥沼遺跡3区 S1-4A・4B実測図

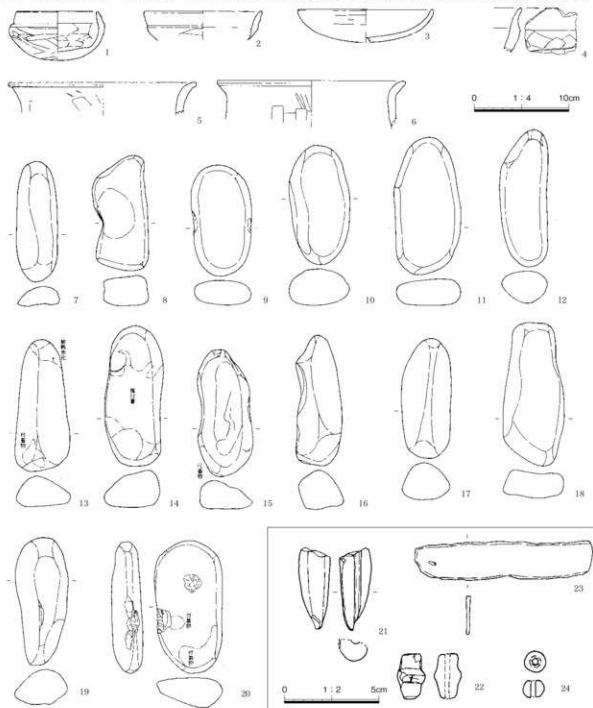
S1-4A (第143～145図、第43表、図版三六・六六・六七)

概要 東区中央に位置する建物跡である。建物の北側約2/3が調査区外になる。南東隅がS1-3を重複している。また、拡張住居で2時期の変遷が認められる。時期ごとに各遺構をA・Bした。本期は新しい段階のA期となる。位置 99・100-38グリッドに位置する。確認目標高は86.009～85.868mである。

平面形・規模 南北[2.58]m×東西6.73mの堅穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-14°-Eである。

覆土 堆積状況は東西方向のセクションで第1～5・7層の自然堆積である。壁・床面からの残存壁高

は1.8～26.4 cmと浅く、床面より直線的に外傾して立ち上がる。床 住居の掘り方は多少の凹凸がみられる。壁際は帯状に一段深く掘り込まれている。掘り方は第7・8層で充填されている。この第8層の上面が床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。柱穴 2本の主柱穴(P1・P2)を確認した。平面形は概ね楕円形である。床面からの掘り込みはやや深い。柱痕は確認されなかった。P1は径35×34×深さ58.1 cm、P2は径28×28×深さ54.7 cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が3.80 mを測る。入口関連施設 南壁際中央部にあるP3としたピットが配されている。長軸72×短軸45×深さ28.2 cmの楕円形で、覆土は第24～26層である。出土遺物 本住居の遺物の出土状況は取り上げ遺物としては379点ある。このうち、



第145図 砂田姥沼遺跡3区 S1-4出土遺物

取り上げた遺物は74点になる。取り上げた遺物を含めて、大半が覆土からの出土であった。

床面や床面直上から出土したものは、横微環身模倣形(№1)は古墳時代末期の形態をしている。床面と覆土から出土している。同外傾形(№2)の口縁部の破片のみで、床面からの出土である。廃棄後に混入したか。皿(№3)は南壁際～東壁寄りの覆土で出土している。口径が14.5cmと大型化、器高も3.5cmと扁平化している。古墳時代末期の後半が相当か。甕(№5・6)は口径の復元値や胎土が類似することから同一個体の可能性もある。共に混入品である。編物石(№15)は東壁寄りの覆土から。下端部に黒色の付着物有り。上端部に剥離痕あり。同(№20)は片側に剥離痕が認められる。表面に黒色の付着物有り。

石製品の玉(№24)は東壁寄りの床面から5cmで出土した。大きさはSI-3の№17と同規格で穿孔径も0.4cmと同じであった。玉の形状は概ね円形に磨き上げられている。両極の穿孔部は両側から穿孔しており、平坦に磨かれている。小玉による磨滅により僅かに凹んでいる。玉鐲(№21)の破損品も覆土から出土した。SI-3の№15と同形であろうか。同(№22)は住居中央部の覆土から出土した。中央部分が凸状になる形状である。両極に穿たれている口径は上端が0.25cm、下端が0.3cmと下端がやや大きく、下端から上端へ穿孔したのであろう。

本遺構はSI-3より新しい建物であるが、SI-3が古墳時代末期に相当する。本建物の遺物の皿(№3)は古墳時代末期後半の様相を示すのものもある。古墳時代末期～古代以前の範疇で捉えたい。

第43表 砂田姥沼遺跡3区 SI-4出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 8.7 高 5.3	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ後光沢のあるナデか、内面ヘラナデか。横微環身模倣形、口縁部内外面磨仕上げ、底部外面に黒斑	褐色 小砂粒少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部の1/4欠損 №26・64・南東
2 土師器 杯	口 12.4 高 13.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、内面ナデか。横微環身模倣形、口縁部内外面磨仕上げ	(外) 褐色 (内) に近い黄褐色 小砂粒少量、小礫・赤色粒微量 焼成：良好	床面 口縁部～体部の1/4残存 №28・南東
3 土師器 皿	口 14.4 高 13.5	器底は摩耗のため調整不明瞭。口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、口縁部～体部内面ナデか	褐色 小砂粒・赤色粒多量、石英・雲母片少量 焼成：良好	覆土 口縁部～底部の一部残存 №24・30・63・南東
4 土師器 鉢	高 14.7	口縁部内外面ヨコナデ、器部外面ナデ後ヘラケズリ、器部内面ナデ	(外) に近い黄褐色 (内) 灰黄褐色 小砂粒多量、小礫・赤色粒少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部の一部残存 №72
5 土師器 甕	口 20.0 高 13.2	口縁部内外面ヨコナデ、器部外面タテ方向のヘラケズリ	に近い黄褐色 小礫多量、小砂粒少量、石英・赤色粒・白色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部の一部残存 №67
6 土師器 甕	口 20.0 高 15.1	口縁部内外面ヨコナデ、器部外面タテ方向のヘラケズリ	オリーブ黒色 小砂粒・小礫多量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部の一部残存 №71
7 石製品 編物石	最大長 12.7 最大幅 4.4 最大厚 2.2 重量：165.37	平面梯状・断面小整三角形の自然石。有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	黄灰色	床面 完存 №54
8 石製品 編物石	最大長 12.2 最大幅 4.8 最大厚 3.2 重量：347.38	平面梯状・断面四角形の自然石。	明オリーブ灰色	床面直上 完存 №22
9 石製品 編物石	最大長 11.7 最大幅 6.1 最大厚 2.6 重量：241.39	平面楕円形・断面楕円形の自然石。2mmの石英混品及び有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	灰白色	覆土 完存 №24
10 石製品 編物石	最大長 13.7 最大幅 6.4 最大厚 3.9 重量：417.06	平面梯状・断面楕円形の自然石。2mmの石英混品及び有色鉱物を含む。硬質緻密な安山岩。	に近い黄褐色	覆土 完存 №3

第Ⅶ章 砂田姥沼遺跡3区の調査

11	最大長 14.5 最大幅 6.8 最大厚 2.8 重量：479.87	平面楕円形・断面隅丸長方形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	オリーブ黄色	床面 完存 % 35
12	最大長 15.0 最大幅 4.8 最大厚 3.4 重量：354.10	平面梯状・断面三角形の自然石。上端部の表面に黒色の付着物あり。2～4 mmの石英珪石を含む。破質緻密な安山岩。	浅黄色	覆土 完存 % 16
13	最大長 13.8 最大幅 5.8 最大厚 3.2 重量：328.02	平面梯状・断面三角形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	灰黄色	覆土 完存 % 36
14	最大長 14.8 最大幅 5.9 最大厚 3.9 重量：524.96	平面梯状・断面三角形の自然石。1～2 mmの石英珪石及び有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	灰オリーブ色	床面 完存 % 44
15	最大長 13.4 最大幅 5.6 最大厚 5.0 重量：320.02	平面梯状・断面三角形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	浅黄色	覆土 完存 % 53
16	最大長 13.8 最大幅 4.8 最大厚 4.2 重量：357.09	平面梯状・断面不整形四角形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	灰オリーブ色	床面 完存 % 55
17	最大長 12.7 最大幅 5.2 最大厚 3.9 重量：385.70	平面梯状・断面不整形三角形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	灰白色	床面 完存 % 58
18	最大長 15.2 最大幅 6.5 最大厚 3.0 重量：472.74	平面梯状・断面不整形四角形の自然石。全体的に被熱され保っている。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	にぶい黄褐色	床面直上 完存 % 56
19	最大長 13.5 最大幅 5.7 最大厚 3.7 重量：302.60	平面梯状・断面不整形三角形の自然石。有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	浅黄色	覆土 完存 % 69
20	最大長 14.0 最大幅 7.0 最大厚 3.15 重量：455.13	平面扁平状・断面やや三角形の自然石。表面の2箇所に黒色の付着物あり。2～4 mmの有色鉱物を含む。破質緻密な安山岩。	オリーブ黄色	覆土 完存 % 15
21	残存長 14.3 最大幅 11.4 残存厚 11.2 孔径 0.4 重量：8.06		にぶい黄褐色 焼成：良好	覆土 欠損品 南西
22	最大長 2.4 最大幅 1.9 上端幅 0.7 孔径 0.3 下端幅 0.8 孔径 0.25		灰黄褐色 焼成：良好	覆土 一部欠損 % 47
23	全長 19.3 幅 2.0 厚 0.23 重量：16.82	断面は端が鋭角。横断面はほぼ直線的。		床面 基部側を欠く % 49
24	直径 1.1 高 1.09 孔径 0.28 重量：1.74	内側からの穿孔か。穿孔面は一定方向の1本の硝子。柱状質岩	青黒色	床面 完形 % 62

S1-4B (第144図)

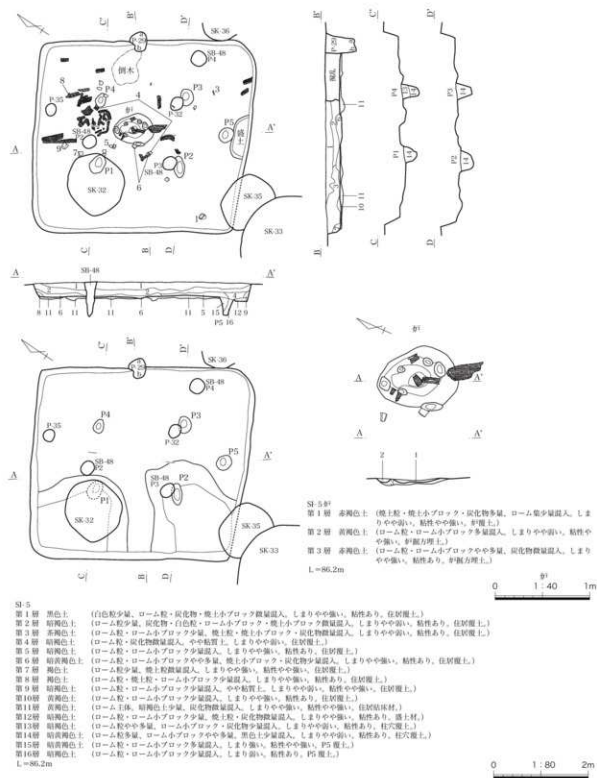
概要 本遺構は拡張住居のB(旧)期のものである。A期の掘方面からは2本の主柱穴と入口ピットを確認できた。位置 99・100～38グリッドに位置する。平面形・規模 A期の掘方面に痕跡が残るのみ。建物の形態は不明である。柱穴 2本の主柱穴(P4・P5)を確認した。掘り方はP4は小さく掘方面か

らの掘り込みは浅い。柱痕は確認されていない。P4は径36×35×掘方面からの深さ14.8cm、P5は径42×37×掘方面からの深さ18.0cm。柱間寸法は柱痕間隔でP4-P5間が3.50mを測る。入口関連施設 南壁際中央部にあるP7としたピットが配されている。長軸78×短軸48×掘方面からの深さ30.0cmの不整な楕円形で、覆土は第10・13層である。ピット P6は建物の南東隅で確認されたピットである。A期のP2に重複されている。長軸70×短軸69cmの楕円形をしている。掘方面からの掘り込みは60.4cm。覆土は第20～22層が堆積しているが上面をA期の貼床材の第8層が覆っている。柱穴状の掘り込みであり、覆土も柱穴と同様である。P6が主柱穴になりP2が抜き取り痕の可能性も指摘できるか。出土遺物・時期 B期を特定する遺物は見られないため時期は不明である。本期は拡張していることから、古墳時代末期段階に位置付けたい。

S1-5 (第146・147図、第44表、図版三七・六七)

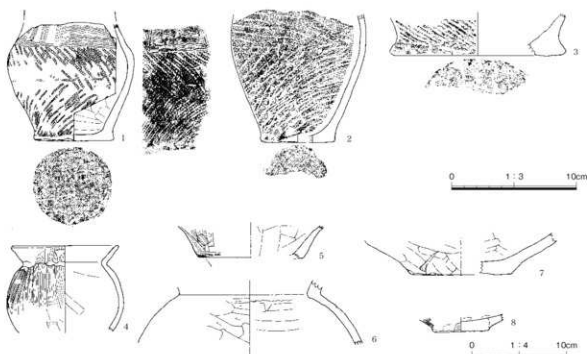
概要 本遺構は東区中央で確認された竪穴建物跡である。SK-32・35、SB-48に重複されているが本遺構の方が古い。本建物には炭化材が多く確認された。遺物も少なかったことから遺棄後に焼失させた可能性がある。位置 99-39グリッドに位置する。確認面標高は86.080～86.038mである。平面形・規模 南北4.57m×東西4.04mの南北方向に長い隅丸長方形の竪穴建物跡である。南壁に直交する軸線はN-33°-Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで第1～10層の自然堆積である。なお、本住居の覆土の各層にに含まれる火山灰の自然科学分析を実施した(本章第4節)。その結果、サンプルの全てから古墳時代前期以降の降灰した浅間C軽石由来のガラス質が検出されている。壁 床面からの残存壁高は22.7～31.0cmとやや浅い。壁は床面より直線的に外傾して立ち上がる。床 住居の掘り方は多少の凹凸がみられるが、均一的に掘り込まれている。南東隅・南西隅がそれぞれ楕円形状に一段深く掘り込まれている。掘り方は第11層で充填されている。この層の上面が床面となるが、硬化範囲は明瞭ではない。柱穴 4本の主柱穴(P1・P2・P3・P4)を確認した。平面形は概ね楕円形である。床面からの掘り込みはやや浅い。明瞭な柱痕を確認することはできなかった。P1は径41×27×深さ32.8cm、P2は径44×22×深さ29.6cm、P3は径35×27×深さ31.8cm、P4は径29×21×深さ35.6cm。柱間寸法は柱痕間隔でP1-P2間が1.70m、P2-P3間が1.46m、P3-P4間が1.80m、P1-P4間が1.34mを測る。4本の柱穴は建物の主軸方向に長い長方形に配されている。入口関連施設 南壁際中央部にあるP5としたピットが配されている。長軸31×短軸30×深さ38.0cmの円形で、覆土は第15・16層である。配置から入口ピットと判断している。盛土遺構 南東壁際で確認された盛土遺構の規模は長軸92×短軸29cmの隅丸長方形をしている。成形時に第12層を周囲の床面から9.3cm厚に硬く締めて構築されたもので上面は平坦である。入口ピット(P5)を伴って入口関連の施設になる。炉 灰跡は建物のほぼ中央部に位置している。長軸0.86×短軸0.64m、深さ4.4cmになる。掘り方は建物の貼床を楕円形の浅い皿状に掘り込んで、第2・3層を充填、その上面を火床面としている。なお、焼しまりは弱い。出土遺物 本建物の遺物は77点であるが、その大半が覆土からの出土である。取り上げ遺物は19点と少ない。そのうち図示できたものは8点のみである。

床面ないし床面直上の遺物は少ない。広口の壺(Na1・2)、大形壺の底部(Na3)の3点が出土している。広口の壺(Na1)は住居の床面直上から出土した。頸部が大きく欠損しているが、残存する頸部の縦断面充填縹波状文は、いずれも5本櫛歯によるものである。縄文施文より上位には、横位の縹波状文が施された後に頸部に縦断面(3条と2条)のスリットが施されている。そのスリットの間を2段の横位の縹波状文で充填している。底部は布目痕が残る。縄文施文は羽状縄文で、上半は2本のLの縄を附加した附加条1種の原体を横位に回転して施文しているもので、胴部最大径を測る中位では1段Rの縄面側の押圧痕が観察



第146図 砂田姥沼遺跡3区 SI-5実測図

できる。羽状縄文の下半は2本のRの縄を附加した附加条1種の原体を横方向に回転して施文している。軸縄は上半がRL、下半がLRの附加条1種であることから二軒屋式が想定される。広口の壺(Na2)は胴部の文様は横位に回転して羽状縄文を施文している。上半の附加した縄はLであるが輪縄不明、下半の附加した縄はR、羽状縄文の下部に附加Rの附加条2種が重複している。底部には布目が残る。附加条2種である



第147図 砂田姥沼遺跡3区 S1-5出土遺物

ことから十王台式が想定される。壺（No 3）は胴部下端～底部の破片である。施文は下端部に確認でき、Rの縄を2本附加した附加条1種の原体を横方向に回転して施文している。底部は砂底である。附加条1種であることから二軒屋式が想定される。

なお、覆土からであるが、古墳時代前期の土器が見受けられている。土師器の小型甕（No 4）は接合資料である。破片は覆土中に散っていることから本住居に伴わない混入品である。刷毛目調整のがなされており、頸部の屈曲が強い。（No 5）は中央部の覆土から出土した二重口縁壺の口縁部片である。同壺（No 6）の頸部～胴肩部の破片である。頸部の屈曲が明瞭。同壺（No 7）の胴底の底部片である。壺（No 5～7）は未接合ではあるが同一個体と考えられる。

本遺構の時期は、弥生土器の広口壺（No 1）は床面直上、同（No 2・3）や刷毛目調整の小型甕、二重口縁壺の破片などの古式土師器も覆土から出土している。また、堅穴の最下層まで古墳時代前期（4世紀初頭）に降灰した浅間C軽石層が検出されている。以上のことから、本堅穴は古墳時代前期の浅間C軽石の降灰（4世紀初頭）以前に位置付けられる。二軒屋・十王台式土器の弥生土器と土師器が共伴する事例であろう。

第44表 砂田姥沼遺跡3区 S1-5出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 弥生土器 壺	高10.31 底径6.0	器面の調整は、胴部に羽状縄文が施された後に、 増厚に傾位の波状文が施されている。胴部～胴部 中位にかけては横溝による間隔画のストリットが、 その後にはストリット間を横方向の2段の波状文の 順に施文されている。縄文施文は羽状縄文で、上 半は2本のLの縄を附加した附加条1種の原体 を縦位に回転して施文している。胴部中位には1 段Rを押し広げ、羽状縄文の下半は2本のRの縄 を附加した附加条1種の原体を横方向に回転し て施文している。軸間には上平L・下平LR。底部 に布目痕。附加条1種。二軒屋式	(外) 灰黄褐色 (内) 褐灰色 散土・焼成 白色細砂粒少量、透明細砂粒・小礫・雲 母片微量 焼成：良好	床面直上 頸部一部・胴部1/2・底部残存、 口縁部欠損 No 1

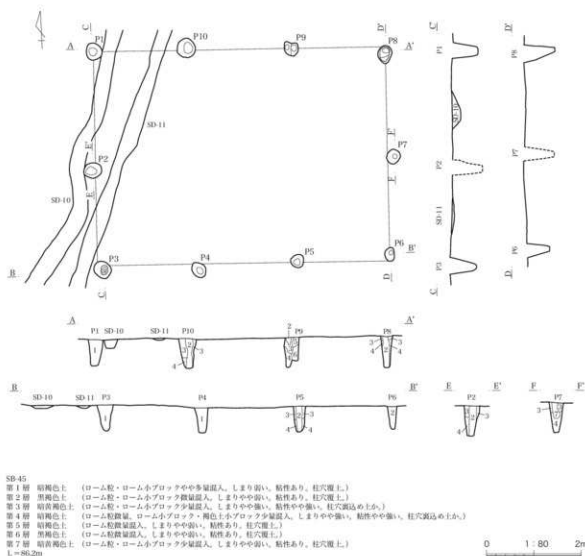
2 弥生土器 遺	高 19.5] 底径 15.3]	横位に回転して羽状織文を施文する。上半の附加した織は1であるが軸織不明、下半の附加した織はR。羽状織文の下部に附加Rの附加条2條が重複する。附加条2條 十王行式。	(外) 暗灰黄色 (内) 灰黄褐色 白細砂粒多量、黒色細・透明の細砂粒少量、雲母片微量 焼成：良好	覆土 製部中位～底部 1/2 残存 % 9
3 弥生土器 遺	高 13.3] 底径 13.6]	製部下半に横方向に回転して施文。附加されたのは2本のR。軸織は不明。底部は砂底。 附加条1條	(外) 浅褐色 (内) にふい黄褐色 細黒砂粒・小砂少量、白・透明細砂粒微量 焼成：良好	覆土 製部下端～底部一部残存 % 19
4 土師器 遺	口 11.3 高 19.2] 製部最大径 12.3]	口縁部外面ヨコナデ後刷毛目調整、内面ヨコナデ、製部外面刷毛目、内面ヘラナデ。	(外) にふい黄褐色 (内) 明黄褐色 小砂粒・小砂少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部及び製部 2/3 残存、総武下半～底部欠損 % 3・12・北東・北西
5 土師器 遺	高 13.2]	口縁部外面タテ方向の刷毛目、突出部ヨコ方向の2条の洗線、突出部下端ヘラケズリ、口縁部内面ヘラナデ、二重口縁部	にふい黄褐色 白色粒少量、小砂粒・石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 口縁部の一部残存 % 6
6 土師器 遺	頸部径 15.1] 高 16.6]	頸部内外面ナデ、製部外面ヘラケズリ、内面ヘラナデ	にふい黄褐色 小砂粒・赤色粒少量、小砂・雲母片微量 焼成：良好	覆土 頸部～製部上部の一部残存 % 3・4
7 土師器 遺	高 14.4] 底径 10.6]	製部下端外面ヘラナデ、底部外面外縁部はヘラナデ、中心部は一定方向のヘラケズリ、製部内面ヘラナデ・ナデ、凹底	(外) にふい黄褐色 (内) 黄灰色 小砂粒・小砂少量、石英・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	覆土 製部下端～底部の一部残存 % 8
8 土師器 遺	高 11.7] 底径 15.8]	製部下端外面ナデ後タテ方向の刷毛目、底部外面一定方向のヘラケズリ、製部内面ヘラナデ・ナデ、凹底	(外) にふい黄褐色 (内) にふい黄褐色 小砂粒・白色粒少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 製部下端～底部の一部残存 % 11

2. 掘立柱建物跡

砂田姥沼遺跡 3 区では東区で 5 棟の掘立柱建物跡が確認されているが、遺物の出土状況から古墳時代に位置付けられた掘立柱建物跡は SB-45・48・50 の 3 棟と SA-46 が確認されている。

SB-45 (第 148 図、図版三八)

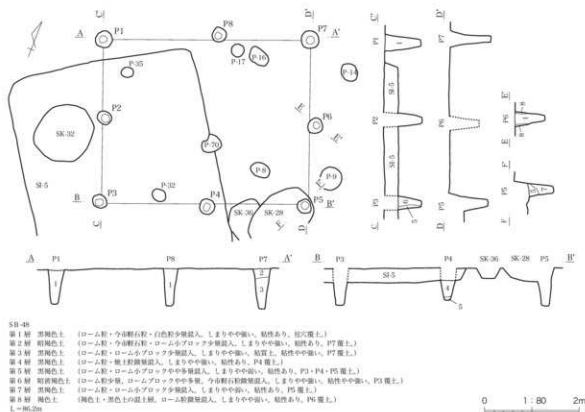
概要 桁行 3 間×梁行 2 間の側柱式の東西棟建物である。南を正面とすると建物妻側の方位は N-2°-E である。SD-10・11 と重複するが本遺構の方が古い。 **位置** 調査区の東区西側、SI-1 の北西の 99-37・38 グリッドに位置する。確認面標高は 85.944 m～85.850 m である。 **規模・柱間** 桁行総長は 6.17 m (20.3 尺) で、柱間寸法は南側柱列 (P 3-P 6 間) が西から P 3-P 4 間が 2.16 m (7.1 尺)。P 4-P 5 間が 2.06 m (6.8 尺)。P 5-P 6 間が 1.96 m (6.5 尺)。北側柱列 (P 1-P 8 間) が西から P 1-P 10 間が 1.96 m (6.5 尺)。P 9-P 10 間が 2.20 m (7.3 尺)。P 8-P 10 間が 2.02 m (6.7 尺)。である。梁行総長は 4.46 m (14.7 尺) で、西妻柱列 (P 1-P 3 間) が南から P 2-P 3 間が 1.94 m (6.4 尺)。P 1-P 2 間が 2.46 m (8.1 尺)。東妻柱列 (P 6-P 8 間) が南から P 6-P 7 間が 2.20 m (7.3 尺)。P 7-P 8 間が 2.28 m (7.5 尺) である。面積は 27.52 m² である。 **掘り方** 平面形は短径 0.21 m～0.39 m、長径 0.28 m～0.40 m の円形ないし楕円形である。確認面からの深さは 48.2 cm～65 cm (底面標高 85.410 m～85.261 m) である。土層観察ではいずれの柱穴からも柱痕は確認されなかった。覆土は第 3・4 層はしまりが強く、裏込め土である。 **出土遺物** 小片であるため図示し得なかったが、P1 から裏の口縁部破片 4 点、P4 から土師器の蓋片が 1 点が出土している。一括遺物として取り上げられているため出土位置は不明である。柱の抜き取りの際に混入した遺物の可能性もあるが、遺物自体は古墳時代後期のものであることから、本建物を古墳時代後期に位置付けておく。



第148図 砂田姥沼遺跡3区 SB-45実測図

SB-48 (第149図、図版三八)

概要 桁行2間×梁行2間の側柱式の東西棟建物である。南東辺を正面とすると建物裏側の方位はN-20°-Wである。重複するSI-5より新しく、SK-28よりは古い。位置 東区の東側、SI-3の北東の99-39グリッドに位置する。確認面標高は86.088m～85.777mである。規模・柱間 桁行総長は4.37m(14.4尺)で、柱間寸法は南側柱列(P3-P5間)が西からP3-P4間が2.20m(7.3尺)。P4-P5間が2.18m(7.2尺)。北側柱列(P1-P7間)が西からP1-P8間が2.40m(7.9尺)。P7-P8間が1.96m(6.5尺)である。梁行総長は3.42m(11.3尺)で、西妻柱列(P1-P3間)が南からP2-P3間が1.76m(5.8尺)。P1-P2間が1.64m(5.4尺)。東妻柱列(P5-P7間)が南からP5-P6間が1.64m(5.4尺)。P6-P7間が1.78m(5.9尺)である。面積は14.9㎡である。掘り方 平面形は短径0.26m～0.38m、長径0.31m～0.38mの円形ないし楕円形である。確認面からの深さは62.3cm～85cm(底面標高85.465m～85.220m)である。土層観察ではいずれの柱からも柱痕は確認されなかった。出土遺物 小片であるため図示し得なかったが、P8からは甕の胴部片2点、環の体部片1点が出土している。一括遺物として取り上げているため出土位置が不明である。柱の抜き取りの際に混入した可能性がある。建物は古墳時代後期のものか。



第149図 砂田姥沼遺跡3区 SB-48実測図

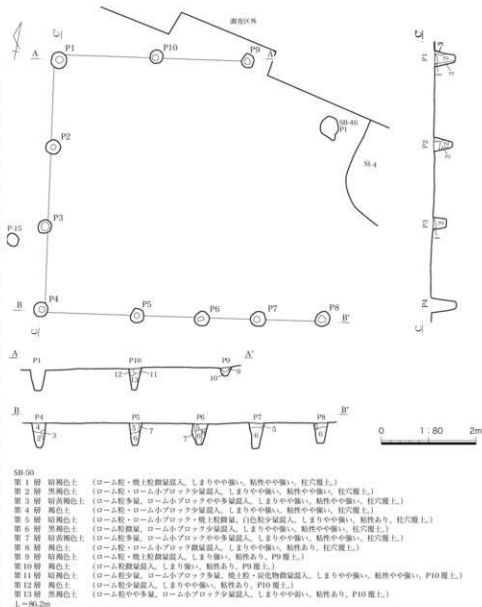
SB-50 (第150図、第45表、図版三八)

概要 桁行4間×梁行3間の側柱式の東西棟建物である。東辺についてはピットが確認されなかった。P8以東でもピットは確認できなかったことから、P8が隅柱になるものと判断した。南東辺を正面とすると建物表側の方位はN-10°-Wである。 **位置** 東区の中央部、SI-1の北の99・100-38グリッドに位置する。確認面標高は86.026m～85.946mである。 **規模・柱間** 桁行総長は5.72m (18.9尺)で、柱間寸法は南側柱列(P4-P8間)が西からP4-P5間が1.74m (5.7尺)。P5-P6間が1.34m (4.4尺)。P6-P7間が1.20m (3.9尺)。P7-P8間が1.36m (4.5尺)。北側柱列(P1-P9間)が西からP1-P10間が2.14m (7.1尺)。P9-P10間が1.94m (6.4尺)である。梁行総長は5.37m (17.7尺)で、西表柱列(P1-P4間)が南からP3-P4間が1.80m (5.9尺)。P2-P3間が1.64m (5.4尺)。P1-P2間が1.92m (6.3尺)である。面積は30.7㎡である。 **掘り方** 平面形は短径0.26m～0.323m、長径0.28m～0.35mの円形ないし楕円形である。確認面からの深さは18cm～53.4cm (底面標高85.726m～85.492m)である。土層観察ではいずれの柱からも柱痕は確認されなかった。 **出土遺物** P5から環(Na1)の口縁部破片2点、休部破片3点が1点出土している。一括遺物として取り上げているため出土位置が不明である。柱の抜き取りの際に混入した可能性もある。建物は古墳時代後期のものか。

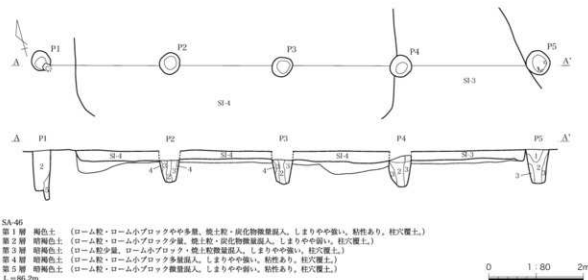
SA-46 (第151図、第45表、図版三八)

概要 桁行4間×梁行3間の側柱式の東西棟建物である。東辺についてはピットが確認されなかった。P8以東でもピットは確認できなかったことから、P8が隅柱になるものと判断した。南東辺を正面とすると建物表側の方位はN-10°-Wである。 **位置** 東区の中央部、SI-1の北の99・100-38グリッドに位置する。確認面標高は86.026m～85.946mである。 **規模・柱間** 桁行総長は5.72m (18.9尺)で、柱間寸

法は南側柱列（P 4－P 8間）が西から P 4－P 5間が 1.74 m（5.7 尺）。P 5－P 6間が 1.34 m（4.4 尺）。P 6－P 7間が 1.20 m（3.9 尺）。P 7－P 8間が 1.36 m（4.5 尺）。北側柱列（P 1－P 9間）が西から P 1－P 10間が 2.14 m（7.1 尺）。P 9－P 10間が 1.94 m（6.4 尺）である。梁行総長は 5.37 m（17.7 尺）で、西妻柱列（P 1－P 4間）が南から P 3－P 4間が 1.80 m（5.9 尺）。P 2－P 3間が 1.64 m（5.4 尺）。P 1

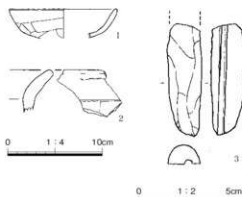


第150図 砂田姥沼遺跡3区 SB-50実測図



第151図 砂田姥沼遺跡3区 SA-46実測図

—P2間が1.92 m (6.3 尺)である。面積は30.7 m²である。掘り方 平面形は短径0.26 m～0.323 m、長径0.28 m～0.35 mの円形ないし楕円形である。確認面からの深さは18 cm～53.4 cm (底面標高85.726 m～85.492 m)である。土層観察ではいずれの柱からも柱痕は確認されなかった。出土遺物 P5からP1の口縁部破片2点、体部破片3点が1点出土している。一括遺物として取り上げているため出土位置が不明である。柱の抜き取りの際に混入した可能性もある。建物自体は古墳時代後期のものか。



第152図 砂田姥沼遺跡3区 SB-50・SA-46出土遺物

第45表 砂田姥沼遺跡3区 SB-50・SA-46出土遺物

(): 推定値 (): 残存値

番号 種類 部類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 杯	口径14.4 高13.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラズリ。 模刻杯平縁形 口縁部内外面部上げ	にんい・黄褐色 小砂粒・小砂少量、石英・赤色粒微量 焼成：良好	SB-50 P5 口縁部～体部一部残存 P65一括
2 土師器 壺	高14.5	口縁部内外面ヨコナデ、面外面ヘラズリか。 長頸腹	(外) 褐色 (内) にんい・黄褐色 小砂粒少量、石英・雲母片微量 焼成：良好	SA-46 P5 口縁部の一部残存 P53 (P24、3)
3 土製品 土師	最大径15.7 最大幅11.7 口径φ2.5		灰白色 焼成：良好	SA-46 P1 一部欠損 P68

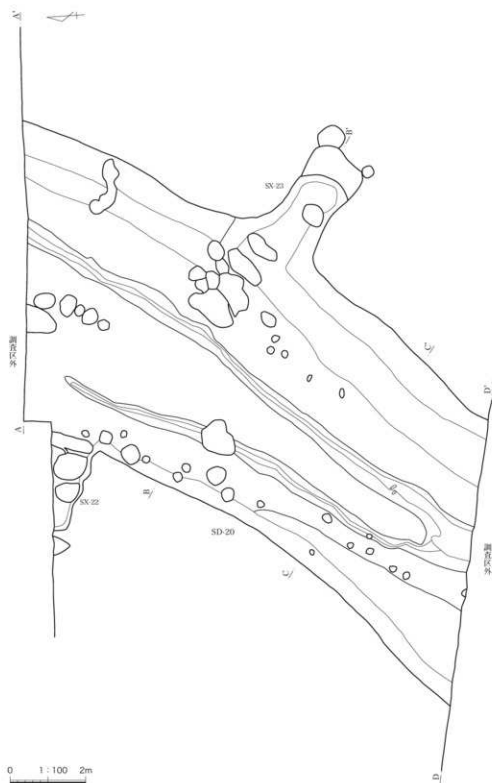
3. 溝状遺構

砂田姥沼遺跡3区では12条の溝状遺構が確認されている。溝跡は調査区内ではほぼ他の遺構との重複はないが、これらの覆土には古墳時代～古代の土器片が含まれているが、破片のみで出土状況も混入したものと判断できるものである。

その中でも、西調査区西端に位置するSD-20は、姥沼2区SD-12として報告した河道跡に繋がるものである。宇都宮市教育委員会が調査した砂田姥沼遺跡(C区)のA区及びB区に繋がる(2008 p24)旧河道跡である。それら各地区での報告や重複するSX-23から古墳時代末期の流路跡になる。

SD-20 (第153～155図、第46表、図版三八・三九)

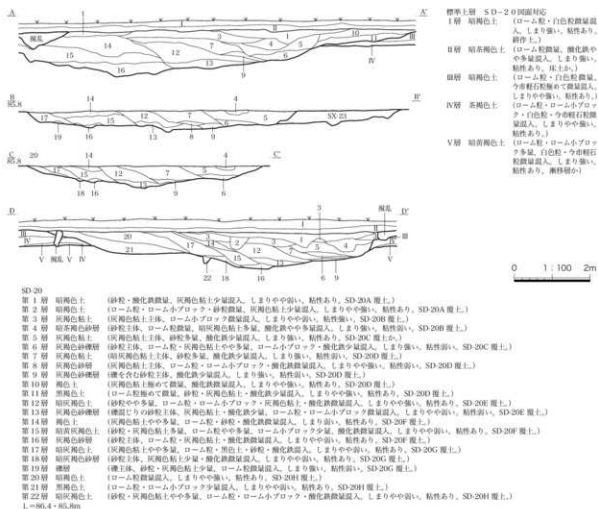
概要 調査区を南北方向に横断する溝跡である。重複関係からSX-22・23よりも古い大規模な溝状遺構である。位置 100～33・34グリッドに位置する。確認面標高は85.575 m～85.496 mである。重複関係 本遺構に降りてゆく通路状遺構のSX-22・23は河道跡の掘り返しに対応している。規模 西側調査区の中央部に位置し、北東～南西方向に延びる河道で緩やかに西に湾曲する。遺構確認面では河道の東縁が確認されるが中央部でSX-23とした通路状遺構と重複している。西側縁は調査区北際でSX-22と重複している。遺構確認面で確認した河道の幅は5.86～6.80 mを測る。姥沼2区や宇都宮市調査と比べても最も幅が広くなる。河道の底面幅は55 cm～138 cmになる。確認面からの深さは、47.1 cm～62.2 cm (底面標高85.025 m～84.953 m)である。覆土 2区同様に元来は自然の谷であったとしても、埋没土を掘り返すなどの人手を加えた可能性が高い。新しい方からA期～H期まで確認できた。各時期の変遷はH期～C期にかけては東側から西側へと流路の掘り返しが行われている。B期・A期についてD～G期の埋没した上位に浅く幅広



第153図 砂田姥沼遺跡3区 SD-20実測図(1)

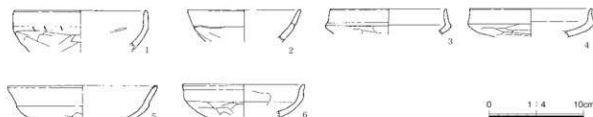
く掘り込まれている。A期は第1・2層で浅い皿状の掘り込み、B期は舟底状の掘り込みで第3・4層、C～G期は逆台形状の掘り込みで、C期は第5・6層、D期は第7～11層、E期は第12～13層、F期は第14～16層、G期は第17～19層が、H期は舟底状の掘り込みで第20～22層が対応する。中でもB期(第

第VII章 砂田姥沼遺跡3区の調査



第154図 砂田姥沼遺跡3区 SD-20実測図(2)

4層)、C期(第6層)、D期(第8・9層)、E期(第13層)、F期(第16層)、G期(第18・19層)は、各期の底面付近の最下層の堆積で砂層や礫層になる。砂層や礫層の切り合いにより、8期、7回の掘り返しが観察できた。出土遺物 本遺構からの出土遺物は、坏の口縁部30点、体部片が29点、甕の口縁部片が2点、胴部片が96点、底部片が4点、高坏脚柱部片は1点の併せて162点が出土している。図示し得たものは、出土遺物は模倣坏(No.1～6)の口縁部破片のみ6点である。図示した模倣坏内面はナデ調整のみであり、身模倣形(No.3・4)は体部が扁平化している。蓋模倣形(No.6)も混入していることから、6世紀末～7世紀代と考えたい。また、2区のSD-12が7世紀の後葉～末葉と捉えられることも併せると、本遺構は古墳時代末期が想定される。

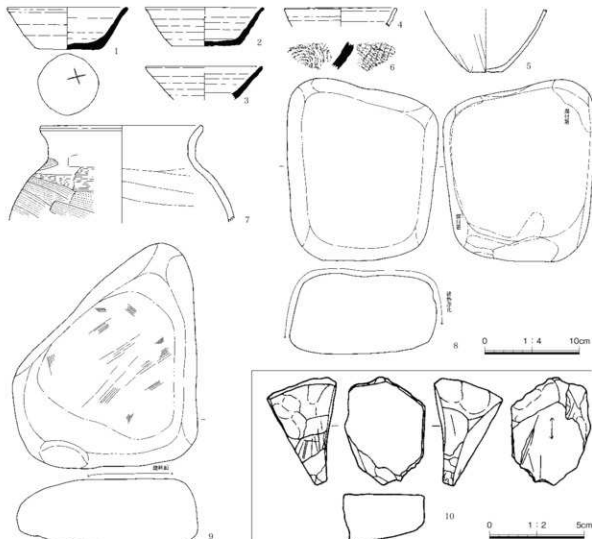


第155図 砂田姥沼遺跡3区 SD-20出土遺物

第46表 砂田姥沼遺跡3区 SD-20出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 部類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 散土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 杯	口 [14.0] 高 [4.4]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ後横方向のミガキ。模散杯半球形	にぶい黄褐色 小砂粒・白色粒少量、石英微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部1/3 残存 A区一括
2 土師器 杯	口 [12.0] 高 [3.4]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面調整不明瞭（ヘラケズリか）、体部内面ヨコナデ、模散杯半球形	(外) 浅黄色 (内) 黒褐色 小砂粒・石英・白色粒微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部一部残存 A区一括
3 土師器 杯	口 [12.9] 高 [2.7]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヨコナデ。模散杯身模散形	にぶい黄褐色 小砂粒・小砂少量、石英微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部一部残存 A区一括
4 土師器 杯	口 [13.0] 高 [3.0]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ナデ。模散杯身模散形	(外) にぶい黄褐色 (内) にぶい褐色 小砂粒少量、石英・雲母片・白色粒微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部一部残存 A区一括
5 土師器 杯	口 [15.8] 高 [4.1]	断面厚尺のため調整不明瞭、内面現状剥離が著しく調整不明。口縁部外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリか。模散杯外形反形	にぶい黄褐色 小砂粒・小砂少量、石英微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部一部残存 A区一括
6 土師器 杯	口 [13.0] 高 [3.6]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラケズリ、体部内面ヨコナデ、ナデ。模散杯通脱散形	にぶい黄褐色 小砂粒・石英微量 焼成：良好	A区覆土 口縁部～体部一部残存 A区一括



第156図 砂田姥沼遺跡3区 S1-6出土遺物

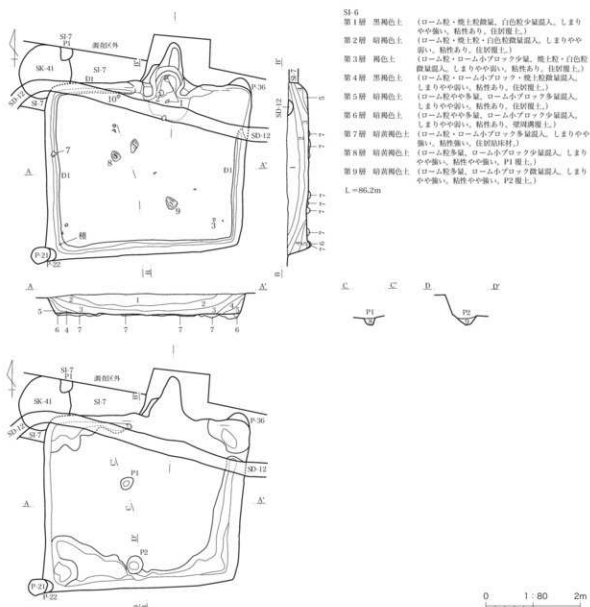
第1節 奈良・平安時代の遺構と遺物

1. 竪穴建物跡

SI-6 (第156～158図、第47表、図版三九・六七)

概要 本遺構は東区の中央部北寄りで確認された竪穴建物跡である。本建物の北西隅が、SI-7の南東隅を重複しており本遺構の方が新しい。本建物には貯蔵穴が確認されなかった。位置 99-39グリッドに位置する。確認面標高は86.117m～85.876mである。平面形・規模 南北3.61m×東西4.18mの東西方向にやや長い隅丸長方形の竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-1*～Wである。覆土 堆積状況は東西・南北方向のセクションで観察された。覆土はレンズ状の堆積をしており、第1～5層の自然堆積である。

壁 床面からの壁高は17.3～45.8cmで床面より直線的に大きく外傾して立ち上がる。床 貼床材である



第157図 砂田姥沼遺跡3区 SI-6実測図(1)

図示した10点のうち、床面ないし床面直上から出土した遺物についてみると、益子窯跡の滝ノ入段階である9世紀前葉に位置付けられる須恵器坏身(№1)で、カマドの燃焼部で出土している。体部内外面には煤の付着が観察できる。須恵器坏身(№2)も(№1)と同様に滝ノ入段階である。カマドの煙道部内から出土。煙道からの混入と考えられる。(№1)よりもロクロ目が強い。(№8)は床面直上で出土した石である。表裏面ともに平坦であるが、出土した面を表とする面は被熱赤化、裏面は自然面であるが縁辺部には煤が付着していることから、一方から被熱したことが伺える。住居中央部の床面方出土した磨石(№9)で平坦面を上位にして出土。磨り面はこの平坦面の1面のみ。磨り面は磨滅しているが、僅かに擦痕が観察できる。磨り面の軸方向の擦痕が顕著である。

この他に混入物として、須恵器坏身(№1・2)と同じ段階とみられる須恵器坏身(№3)の体部破片や須恵器甕(№6)の胴部破片が出土している。須恵器甕(№6)の外表面は格子状叩き、内面は同心円状の当て具痕が観察できる。また甕(№7)の口縁部破片は、口縁部が肥大化しており、胴部外面には刷毛目調整が施されている。ハケ甕系であるが、時期不明。石製品は砥石(№10)の末端部である。砥石の四面を砥面として使用。左右の側面は平滑である。側面と裏面には細いキズ状の擦痕が見られる。破面以外の全面に黒色の付着物が見られる。被熱痕か。ロクロ成形された土師器坏(№4)、武蔵型甕(№5)の胴部～底部の破片が出土している。

本住居の時期は、カマドの規模が大型化していることやカマド廃棄時に混入した須恵器坏身(№1)の時期が9世紀前葉であること、覆土に混入した遺物を観察した結果、8世紀後葉の谷津入・東城寺・広表窯以降、古ヶ原入窯(8世紀末葉)～滝ノ入窯(9世紀前葉段階)に位置付けられる。

第47表 砂田姥沼遺跡3区 S1-6出土遺物

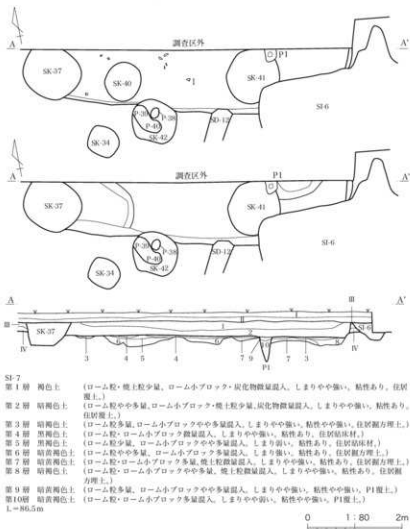
(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 面割	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 須恵器 坏	口12.6 高4.6 底7.0	体部外面ロクロナデ。体部～底部内面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後ヘラナデ。坏身、底部外面に「+」ヘラ記号 体部外面の中心・体部内面に煤付着	灰色 小礫微量 焼成：良好	床面直上 体部1/4欠損 K1・K3・K
2 須恵器 坏	口(12.6) 高4.1 底7.1	体部外面ロクロナデ。体部～底部内面ロクロナデ。底部外面回転ヘラ切り後ヘラナデ。坏身。底部が焼成不良	灰色 白色細砂粒・小礫微量 焼成：やや不良	覆土 体部1/2残存 K2・K・北東
3 須恵器 坏	口(12.4) 高[3.5]	口縁部～体部内外面ロクロナデ。坏身	灰白色 白色細砂粒微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部 №9
4 土師器 坏	口(11.8) 高[2.0]	口縁部～体部内外面ロクロナデ	(外)にぶい黄褐色(内)にぶい褐色 白色細砂粒・小礫微量 焼成：良好	覆土 口縁部～体部一部 南西
5 土師器 甕	高[6.7] 底[3.6]	胴部外面タテ方向のヘラケズリ。底部外面一定方向のヘラケズリ。胴部内面調整不明瞭(ナデか)。武蔵型甕	(外)灰黄褐色(内)にぶい褐色 小砂粒少量。石英・雲母片微量 焼成：良好	覆土 胴部下半部。底部1/2残存 北東
6 須恵器 甕	高[2.9]	胴下半部外面格子叩き。胴部内面同心円状の当て具痕	灰色 白色小礫微量 焼成：良好	覆土 胴下半部残存 南東
7 土師器 甕	口(17.0) 高[12.0]	口縁部内外面ヨコナデ。胴部外面刷毛目調整。胴部内面ヨコ方向のヘラナデ	(外)灰黄褐色(内)にぶい褐色 小砂粒・小礫少量。石英・雲母片・白色 微量 焼成：良好	覆土 口縁部～胴部上平の一部残存 №7
8 石製品 台石	最大長18.7 最大幅15.7 最大厚8.6 重量：4660.0	表裏面とも平坦。出土した面が被熱赤化。有色鉱物を含む。縦横断線が安山岩。	灰白色	覆土 完存 №15

9 石製品 台石	最大長 24.0 最大幅 19.2 最大厚 7.3 重量: 6060.0	表面が平滑。裏面は自然面の凹凸。表面は全体的に自然磨減しているが、出土した面に磨痕がある。有色鉱物を含む。硬質剛密な安山岩。	灰色	床面 完存 No. 12
10 石製品 砥石	最大長 15.0 最大幅 4.2 最大厚 12.6 重量: 72.86	残存する四面をともに使用。断面でやや軟質、節理の発達した粘板岩。側面は平滑に磨けるが、左右とも細かいキズ状の磨痕が見られる。断面以外の全ての面に黒色の付着物が見られる。	灰黄褐色	床面 長い砥石の末端部付近 No. 16

S1-7 (第159・160図、第48表、図版三九・四〇)

概要 本遺構は東区の中央部北寄りで確認された竪穴建物跡である。本建物の南東隅が、SI-6の北西隅に重複されており本遺構の方が古い。この他にSK-37・40・41・42、SD-12にも重複されているが本遺構の方が古い。なお、本建物にはP1以外の付属施設は確認されなかった。位置 99-39グリッドに位置する。確認面標高は86.031m～85.879mである。平面形・規模 南北残存1.26m×東西残存6.10mの竪穴建物である。南壁に直交する軸線はN-15°-Eである。覆土 堆積状況は東西方向の調査区北面のセクションで観察された。覆土はレンズ状の堆積をしており、第1・2層の自然堆積である。壁 床面からの壁高は15.2cmで床面より直線的に大きく外傾して立ち上がる。床 貼床材である第4・5層が敷設されており、この層の上面が床面となる。床面は概ね平坦である。床面の明瞭な硬化範囲は確認できなかった。断面観察から掘り方には僅かな凹凸がみられるが、全体的にほぼ均一に掘り込まれている。掘方埋土は第3・6～8層が相当する。柱穴 1本の主柱穴(P1)は調査区の裏面のセクション面で確認した。平面形は楕円形である。床面からの掘り込み深い。覆土は第9・10層である。P1は径26×24×深さ53.8cmを測る。対応する柱穴は未確認であるが、4本柱の南東隅柱を想定している。出土遺物 遺物は76点出土している。本遺構の取り上げ遺物は8点、大半は覆土に混入したものである。本遺構はSI-6と重複しており、本建物の方が新しい。また、本建物の大半が調査区外になるため、出土遺物は僅かであり図示したものは少なく、2点のみで



第159図 砂田姥沼遺跡3区 S1-7実測図

ある。

図示した2点のうち、床面直上から出土した遺物は、住居南壁寄りの床面直上から出土したハケ糞(Na 1)の1点のみである。ハケ糞(Na 1)の胴部破片で内面は斑状剥離が著しい。



第160図 砂田姥沼遺跡3区 S1-7出土遺物

この他は覆土からの遺物で住居の南西部の覆

土からの出土した台付裏脚部(Na 2)の破片である。武蔵型甕の影響を受けた在地の甕の可能性はある。

本遺構の時期は、出土した遺物から当該期であることは明らかであるが、詳細な時期を決め得る遺物が少ない。そのため、遺構の重複関係からSI-6よりも後出する段階の9世紀前葉以降の堅穴建物と位置付けたい。

第48表 砂田姥沼遺跡3区 S1-7出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 部類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器	高10[1]	胴部外面刷毛目調整後下平ヘラナデ。内面は斑状剥離が著しく調整不明。胴部外面に黒斑。	にじみ黄褐色 小砂粒少量、石灰微量 焼成：良好	床面直上 胴部一部残存 No. 8
2 土師器 台付甕	高14[2] 脚台部径(7.4)	脚台部は厚肉のため調整不明瞭。外面タテ方向のヘラケズリ。内面ナデか。	(外) 褐色 (内) にじみ黄褐色 やや粗い。小砂粒少量。小礫少量、石灰・白色石灰微量 焼成：良好	覆土 脚台部一部残存 南西部覆土一括

2. 通路状遺構

砂田姥沼遺跡3区では2基の通路状遺構が確認されている。いずれも西区西端のSD-20と重複しており、SD-20の東西縁に造られている。SD-20との重複関係から、SX-22→SX-23という変遷が想定される。なお、SX-22・23の出土遺物の検討により奈良時代の遺構である。

SX-22(第161～163図、第49表、図版四〇)

概要 本遺構は、SD-20とした旧河道跡に降りるための昇降施設である。遺構の北側が調査区外となるため全容は不明である。路床の下からはピット状の凹凸面が連なって検出される。堆積状況からSD-20の第③層F期以降に機能していたと考えられる。施設の降り口が西側であり、東方向へSD-20 G期の深部に降りている。位置 西区西端の100-34・35グリッドに位置する。確認面標高は85.501 mである。方位 降り口を起点とする方位はN-75°-Eである。規模・平面形 平面形は長軸3.49×短軸残存0.35 m。南東方向に撥状に開く平面形状をしている。覆土 第1層・第2層が遺構埋土である。本遺構の路面の上面にはSD-20の堆積土が確認されず、路盤下にはSD-20 F期の堆積土が観察できる。路面 調査時の所見では、第3層の上面を考えている。路面は西側から延びており、段が緩やかな階段状の形状をしている。遺構確認面からの深さは1.2 cm～66 cmを測り、西側から2段の段差を形成し、そこから緩やかに最深部へ続くものと想定される。路盤 路盤の構造材としては第3層～第5層が該当し、路床の上に形成されている。この上にやや砂質土の第3層が路面を形成する。第4・5層はロームの小塊や酸化鉄を含む土層でピット状の凹凸面を中心として人為的に埋め戻した土と考えられる。路床 路床は南東に撥状に開くものと推定される。ローム土を皿状に掘り込んでおり、幅は西側の昇降口付近では残存幅0.34 m、東側の計測できる残存最大幅はP4付近の1.37 mまで広がる。遺構確認面からの深さは、0.13 m～0.92 mである。凹凸面 ピット状の凹凸は6基が連なっている。西からP1～P6が該当する一列構成である。いずれも平面円形ないし楕円形

のビット状の掘り込みである。凹凸のビットは昇降口から降りた底面に掘られている。ビット底面の標高はP1が最も浅く、徐々に深くなり、P5が85.031 mと最も深くなる。最も大きいビットはP4で長軸残存1.12 m、短軸0.34 m、路床からの深さは39.1 cm (84.900 m)。小規模のものはP5で長軸0.19 m、短軸0.15 m、路床からの深さ17.3 cm (85.031 m)。ビット内の土層はロームブロックを含むしまりが強い第4・5層が対応する。路床内を埋める路盤構築材は第3層で、遺構全面を覆っている。このことから、ビット列は路床掘削時に伴う凹面であることがわかる。遺物と時期 出土した遺物は極端に少ない。図示したのは、環(Na1)の口縁部片である。一括遺物として扱われていることから、出土位置や覆土・路盤なのか不明である。環は模倣環の内彎口縁形と推定され、口径の小型化や器高が深身であることなどから7世紀後半～8世紀後半が推定される。およそ奈良時代の範疇であろうか。この他に環の口縁部片7点、体部片6点、裏の胴部片3点が出土している。

本遺構はセクションA・Bラインからは、SD-20のF期を掘り込んでいることから、F～H期以前の掘り込みである。また、AラインではSD-20の覆土(A～D期)までの覆土が観察されないことが併せて読み取れる。Aラインでは、東側の状況が観察できないため、E期に伴うか、他の時期のSD-20(A～D期)に伴うかは不明である。このことから本遺構はF期以降A～E期のいずれかに伴う、出土遺物から7世紀後半～8世紀後半の道路状遺構である。

SX-23 (第161～163図、第49表、図版四〇)

概要 本遺構は、SX-22と同様にSD-20とした旧河道跡に降りるための昇降施設である。SX-22とは、凹凸面の連続性がないことや道路の主軸が異なること、堆積の観察で一連性が捉えられないことから、本報告では別の遺構として捉えている。同一の遺構であるならば、溝を横切って蛇行する道路遺構となる。

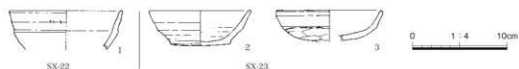
路床の下からはビット状の凹凸面が連なって検出される。堆積状況からSD-20の第④・⑤・⑥層B・C期が堆積した以降は機能していないと考えられる。施設の降り口が西側であり、東方向へSD-20 G期の深部に降りている。位置 西区西端の100-34グリッドに位置する。確認面標高は85.596 m～85.584 mである。

方位 降り口を起点とする方位はN-43°-Wである。規模・平面形 平面形は長軸6.11×短軸1.79 m。北西方向に撥状に開く平面形状をしている。覆土 第6～8層が遺構埋土である。本遺構の路面の上面にはSD-20第④・⑤・⑥層(C・D期)の堆積土によって重複しているのが確認できる。路面 調査時の所見では、第9層の上面を考えている。路面は東側から延びており、段が緩やかな階段状の形状をしている。遺構確認面からの深さは7 cm～33 cmを測り、東側から2段の段差を形成し、そこから緩やかに最深部へ続くものと想定される。路盤 路盤の構造材としては第9層が該当し、路床の上に形成されている。この上に砂粒が多い第9層が路面を形成する。第7・8層は砂粒を含む土層でビット状の凹凸面を人為的に埋め戻した土と考えられる。路床 路床は北西に撥状に開くものと推定される。ローム土を皿状に掘り込んでおり、幅は東側の昇降口付近では幅1.47 m、西側の計測できる最大幅はP7・8付近の1.78 mまで広がる。遺構確認面からの深さは、0.17 m～0.65 mである。凹凸面 ビット状の凹凸は10基が連なっている。東からP1～P5は一列構成である。いずれも平面楕円形ないし隅丸長方形のビット状の掘り込みである。P6～P10はP4・P5に連なるビットになる。凹凸のビットは昇降口から降りた底面に掘られている。ビット底面の標高はP2が最も浅く、徐々に深くなり、P7が84.841 mと最も深くなる。最も大きいビットはP5で長軸1.285 m、短軸0.32 m、路床からの深さは18.7 cm (84.891 m)。小規模のものはP5で長軸0.46 m、短軸0.32 m、路床からの深さ19.9 cm (84.841 m)。ビット内の土層は砂粒を多量に含む灰褐色粘土が主体

のしまりが強い第9層が対応する。路床内を埋める路盤構築材も第9層で、遺構全面を覆っている。このことから、ピット列は路床掘削時に伴う凹面であることがわかる。遺物と時期 出土した遺物は極端に少ない。図示したのは、ともに一括遺物であり、出土位置はSX-22 同様に明確でない。内罎口縁の環(№1)の口縁部から底部にかけての破片である。底部はやや平底化しており、口縁部外面及び口縁部内面～底部の内面に掛けて漆が塗られている。底面全体的に斑状剥離が著しく磨痕も見られる。口縁部内面は磨滅しており、特に口唇部の磨滅が顕著である。半球形の環(№3)の破片は、口縁部及び内面には漆仕上げがなされ、口径が小型に、器高が低くなる形状である。内罎口縁環(№2)の底部がやや平底化する段階は8世紀中葉のものと考えられる。半球形の環(№3)の破片は7世紀代か。

本遺構はセクションDラインからは、SD-20のC期をがSX-23の覆土を掘り込んでいることから、D期以前(E～H期)の遺構であることがわかる。また、DラインのSD-20の第⑫・⑬層(E期)が最も深く、地山のロームを掘り込んでおり、E期の中央には南北に流水による浸食が溝状に確認されている。凹凸ピットP5は浸食痕の東側で確認されており、浸食痕の西側には凹凸ピットは認められない。このことから本遺構はこのE期の最深部へ降りるための通路状遺構と考えられる。

本遺構の時期はSD-20のD期に伴う通路状遺構で、出土遺物から概ね7世紀末～8世紀中葉の範疇に機能したと考えられる。



第163図 砂田姥沼遺跡3区 SX-22・23出土遺物

第49表 砂田姥沼遺跡3区 SX-22・23出土遺物

() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 距離	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 計数
1 土師器 環	口 [12.0] 高 [4.2]	模倣内罎口縁形。口縁部内外面及び体部内面 漆仕上げ。	にぶい褐色 小砂粒少量、石英・赤色粘粒量 焼成：良好	SX-22 覆土 口縁部～体部一部残存 一括
2 土師器 環	口 [10.6] 高 [3.8]	口縁部内面磨滅のため調整不明瞭。口縁部内外面 ロクロナデ、体部下端ヘラケズリか、底部外面磨 痕のため調整不明。 底部平底、口縁部内面漆仕上げ	にぶい黄褐色 小砂粒少量、石英・赤色粒・白色粘粒微量 焼成：良好	SX-23 覆土 口縁部一部残存 一括
3 土師器 環	口 [11.4] 高 [3.2]	断面磨耗のため調整不明瞭。口縁部内外面コナ デ、体部外面ヘラケズリか、内面コナデ。模倣 半球形。口縁部内外面及び体部内面漆仕上げ	(外) にぶい黄褐色 (内) 黒褐色 小砂粒少量、石英・雲母片・白色粘粒微量 焼成：良好	SX-23 覆土 口縁部～体部一部残存 一括

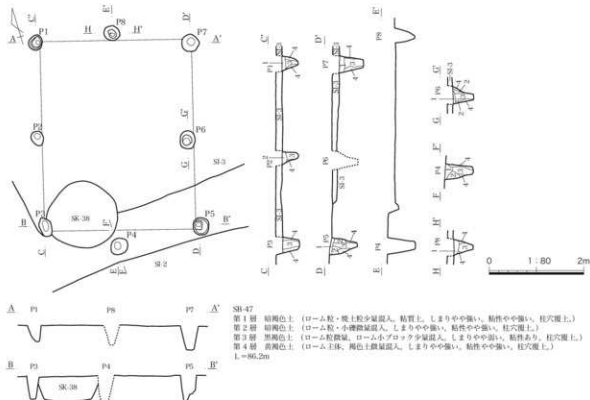
第3節 時期不明の遺構

1. 掘立柱建物跡

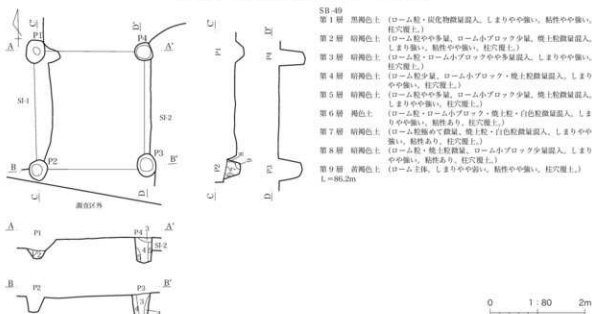
SB-47 (第164図、図版四〇)

概要 桁行2間×梁行2間の側柱式の南北棟建物である。東側柱列の傾きを求めると方位はN-15°-Eである。位置 東側調査区の中央部、99-38グリッドに位置する。確認面標高は86.117m～85.890mである。重複関係 SI-3、SK-38と重複するが本遺構の方が新しい。規模・柱間 桁行総長は3.96m(13.1尺)で、柱間寸法は西側柱列(P1-P3間)が南からP2-P3が1.98m(6.5尺)。P1-P2が1.99m(6.6尺)である。東側柱列(P5-P7間)が南からP5-P6が1.83m(6.1尺)。P6-P7が2.13m(7.0尺)である。梁行総長は3.19m(10.5尺)で、南妻柱列(P3-P5間)が西からP3-P4が1.52m(5.0尺)。P4

—P5が1.68 m (5.5 尺)で、北妻柱列(P1—P7間)が西からP1—P8が1.52 m (5.0 尺)。P7—P8が1.68 m (5.5 尺)である。面積は12.6 m²である。掘り方 平面形は短径0.25 m～0.34 m、長径0.31 m～0.41 mの円形若しくは楕円形である。確認面からの深さは0.58 m (底面標高 85.540 m)である。なお、土層観察によると柱痕は確認されていない。時期と性格 出土遺物は全くない。P4・P8は妻列の柱筋から外側にずれている。棟持柱の可能性もある。その場合、平入りの建物が想定できるか。



第164図 砂田姥沼遺跡3区 SB-47実測図



第165図 砂田姥沼遺跡3区 SB-49実測図

SB-49 (第165図、図版四〇)

概要 桁行1間×梁行1間の側柱式の南北棟建物である。東側柱列の傾きを求めると方位はN-1°-Eである。
位置 東側調査区の中央部西寄りのSI-1とSI-2の間、99-38グリッドに位置する。確認面標高は86.066m～85.775mである。
重複関係 SI-1、SI-2と重複するが本遺構の方が新しい。
規模・柱間 桁行総長は2.45m(8.1尺)である。梁行総長は2.26m(7.5尺)である。面積は5.5㎡である。
掘り方 平面形は短径0.36m～0.46m、長径0.40m～0.48mの楕円形である。確認面からの深さは0.17m～0.55m(底面標高85.675m～85.510m)である。なお、土層観察によると柱痕は確認されていない。
時期と性格 出土遺物は全くない。

2. 溝状遺構

SD-10 (第166図、図版四一)

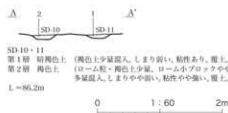
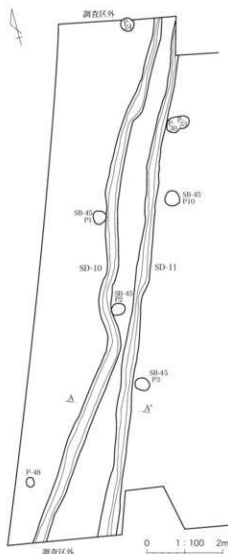
概要 北東-南西方向に延びる溝跡である。底面の高さは南側が高く中央部が低い。
位置 東区の西端の99・100-37グリッドに位置する。遺構確認面からの掘り込みは9cmと浅く痕跡は僅かである。確認面標高は85.917m～85.873mである。
規模・断面形 遺構確認面では、長軸85m、上幅は99～128cm、底面幅は60～98cmである。溝幅は一定でなく蛇行している。断面形は逆台形状である。
覆土 覆土は第2層である。痕跡は僅かである。
出土遺物 出土遺物がないため時期を確定できない。

SD-11 (第166・170図、第50表、図版四一)

概要 SD-10と同じ北東-南西方向に延びる溝跡である。底面の高さは北側が高く南が低い。
位置 東区の西端の99・100-37グリッドに位置する。確認面からの掘り込みは8.5cmと浅く痕跡は僅かである。確認面標高は85.935m～85.870mである。
規模・断面形 東区の北西隅に位置し、北東-南西方向に延びている。確認面での遺構は長軸82m、上幅は20～48cm、底面幅は4～10cmである。溝幅は一定でなく、南西に至るほど幅が狭くなる傾向がある。
覆土 覆土は第1層のみ。
出土遺物 覆土から出土したはの口縁部片1点と体部片3点の4点のみである。流れ込みの遺物で、遺構の時期は時期は不明である。

SD-12 (第167・170図、第50表、図版四三)

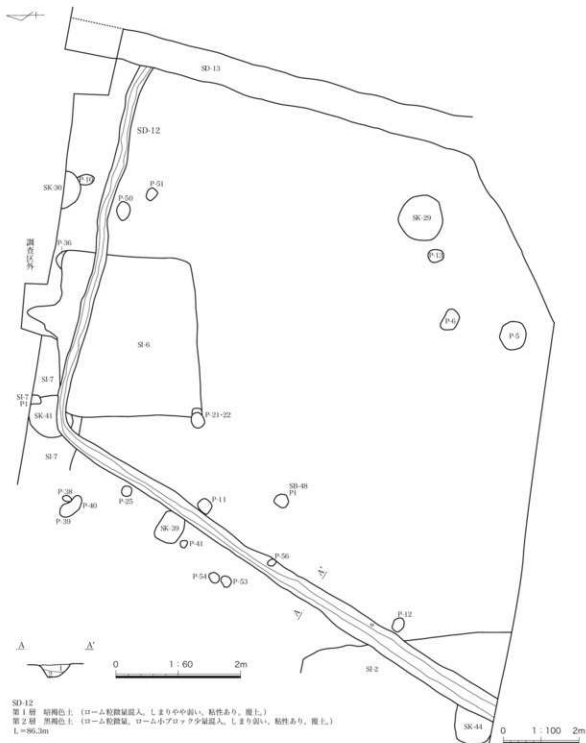
概要 東区の中央やや東寄り、東西方向に延び、南西方向にクランクしている溝跡である。
位置 東区の99-38・39グリッドに位置する。確認面標高は86.146m～86.024mである。
重複関係 本遺構はSI-2・SI-6・SK-44を重複し、これらよりも新しい溝跡である。SD-13とP-56よりは古い。
規模 確認面



第166図 砂田姥沼遺跡3区

SD-10・11実測図

での遺構の幅は0.26 m～0.68 mで、底面の幅は0.08～0.24 mである。壁の状況は底面から直線的に外傾して立ち上がり逆台形をしている。底面は南ほど低くなる。 覆土 覆土は第1・2層である。 出土遺物 取り上げたものは坏の口縁部1点と甕の胴部破片1点である。この他に甕の胴部片18点、口縁部片2点、坏の口縁部片1点、体部片11点、鉢の口縁部片1点、磁器碗の体部片1点の36点が出土している。いずれも覆土からで、遺構の時期を示すものではない。



第167図 砂田姥沼遺跡3区 SD-12実測図

SD-13 (第168～170図、第50表、図版四一)

概要 南北方向に延びる溝である。近代以降の土管が埋設してあった暗渠である。底面は若干の凹凸があるものの、断面的には平坦である。SD-12・14・15よりも新しい。 **位置** 東区の中央部東寄りの99-39グリッドに位置する。確認面標高は86.074 m～85.819 mである。 **規模** 調査区内での残存長は13.8 mで、確認面での幅は76 cm～101 cm、底面幅は12 cm～20 cm。壁の状況は底面からほぼ直線的に立ち上がった後に緩やかに外傾して確認面に至る。壁面には凹凸がある。 **覆土** 堆積状況は第1～3層で土層のしまりは緩く埋め戻し土である。このことから堆積は現代のものと想定している。 **出土遺物** 覆土から環の口縁部2点、体部片が18点、甕の口縁部片が2点、頸部片が2点、胴部片が38点の62点が出土している。

SD-14 (第168～170図、第50表、図版四二)

概要 東北東-西南西方向に延びる溝である。SD-13・15よりも古い溝跡になる。 **位置** 東区東部の99-39・40グリッドに位置する。確認面標高は85.820 m～85.717 mである。 **規模** 調査区内での残存長は17.5 mで、確認面での幅は144 cm～172 cm、底面幅は28 cm～44 cm。壁の状況は東側の立ち上がりに比べると西側は緩やかで、外反若しくは直線的に立ち上がる。東側は内彎気味の立ち上がりである。底面には図示し得なかったが筋状の工具痕が残っている。 **覆土** セクションはB・C・D・Eラインで確認できる。堆積状況は第5～9層で土層のしまりは緩い。 **出土遺物** 覆土から甕の口縁部片が6点、頸部片が2点、胴部片が57点、底部片が2点、環の口縁部片が7点、体部片が14点、瓦片1点、磁器碗体部片1点の90点が出土している。

SD-15 (第168・169図、図版四二)

概要 北東-南西方向に延び、「く」字に屈曲する溝跡である。両端は調査区外へ続く。SD-14よりも新しい溝跡になる。底面は南へ向かって傾斜している。 **位置** 東区東部の99-39・40グリッドに位置する。確認面標高は85.761 m～85.758 mである。 **規模** 調査区内での残存長は、北から7.5 mで屈曲し、10.4 mで調査区外になる。確認面での幅は14 cm～28 cm、底面幅は4 cm～12 cm。壁の状況は底面から内彎気味に立ち上がる。 **覆土** 堆積状況はセクションDラインで観察できる。第4層で土層のしまりは緩い。 **出土遺物** 環の口縁部片1点、体部片3点の併せて4点が覆土から出土している。

SD-16 (第168・169図、図版四二)

概要 主軸が北東-南西方向に延びる溝跡である。北東端部は浅くなり調査区内で立ち上がる。南西部は調査区外へ続く。底面は南へ向かって傾斜している。確認面標高は85.730 m～85.705 mである。 **規模** 調査区内での残存長は6.9 mで、確認面での幅は36 cm～62 cm、底面幅は32 cm～44 cm。壁の状況は底面から直線的に外傾して立ち上がる。底面は平坦である。 **覆土** 堆積状況はセクションDラインで観察できる第10層で土層が対応している。 **出土遺物** 甕の口縁部片1点、胴部片3点、環の口縁部片1点の5点が覆土から出土している。

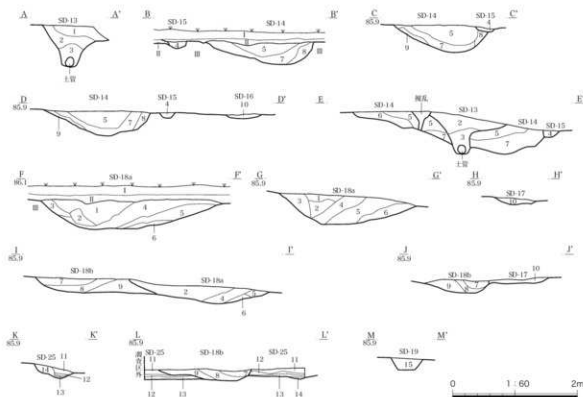
SD-17 (第168・169図、図版四二)

概要 弧状に延びる溝跡である。北東端部はSD-18B・SD-25に重複されており、本遺構の方が古い。南西部は調査区外へ続く。底面傾斜は北東部へ向かって緩やかに下がる。 **位置** 東区東部の99-39・40グリッドに位置する。確認面標高は85.719 m～85.510 mである。 **規模** 確認面での幅は58 cm～116 cm、底面幅は30 cm～68 cm。壁の状況は底面から鋭角的に立ち上がる。底面は凹凸が著しく、断面形状が一定しない。



第168図 砂田姥沼遺跡3区 SD-13～19・25実測図(1)

覆土 堆積状況はセクションH・Jラインで観察できる。第10層が相当し、土層のしまりは緩い。不揃いのロームブロックが混入していることから人為的な埋土であると判断している。出土遺物 鉢の口縁部片1点、甕底部片1点、甕の胴部片7点、環の体部片4点、粘土塊1点の14点が覆土から出土している。



SD-13・14・15・16

A～Eライン

- 第1層 褐色土 (ローム粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-13覆土)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-13覆土)
 第3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-13覆土)
 第4層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・酸化鉄少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-15覆土)
 第5層 褐色土 (ローム粒・炭化物微量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性あり、SD-14覆土)
 第6層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-14覆土)
 第7層 暗褐色土 (ローム粒・ウ市粒粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性強い、SD-14覆土)
 第8層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-14覆土)
 第9層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-14覆土)
 第10層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-16覆土)
 第11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-16覆土)

L=86.2m・85.9m

SD-17・18a・18b・19・25 F～Mライン

- 第1層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・ウ市粒粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-18a覆土)
 第2層 暗褐色土 (粘質土。しまりやや強い、粘性強い、SD-18a覆土)
 第3層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-18a覆土)
 第4層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-18a覆土)
 第5層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性あり、SD-18a覆土)
 第6層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性あり、SD-18a覆土)
 第7層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-18a覆土)
 第8層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-18a覆土)
 第9層 暗褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック少量混入。砂質土。しまりやや強い、粘性あり、SD-18b覆土)
 第10層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、SD-17覆土)
 第11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-25覆土)
 第12層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。砂質土。しまりやや強い、粘性あり、SD-25覆土)
 第13層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-25覆土)
 第14層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-25覆土)
 第15層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。砂質土と粘質土が交互に堆積。しまりやや強い、粘性やや強い、SD-19覆土)

L=86.1m・85.9m

標準土層

- 1層 暗褐色土 (ローム粒・炭化物微量混入。植根類に酸化鉄付着。しまりやや強い、粘性やや強い、床土か)
 2層 暗褐色土 (ローム粒・炭化物微量混入。植根類に酸化鉄少量付着。しまりやや強い、粘性やや強い、床土か)
 3層 暗褐色土 (ローム土床、ソフトローム層)

第169図 砂田姥沼遺跡3区 SD-13～19・25 実測図(2)

SD-18A (第168・169図、図版四二・四三)

概要 北東-南西方向に延びる溝跡である。両端は調査区外へ続く。SD-18 B・SD-25 よりも新しい溝跡になる。底面は南へ向かって傾斜している。確認面標高は85.760 m～85.344 mである。規模 調査区内での残存長は13.8 mで、確認面での幅は222 cm～297 cm、底面幅は32 cm～102 cm。壁の状況は、西壁は底面から内彎気味もしくは外反気味に立ち上がる。東壁は直線的に外傾して立ち上がる。断面形は丸底ないし逆台形状である。底面には水流の浸食痕が、幾重もの筋状に遺っていた。覆土 堆積状況はセクションE・F・G・Iラインで観察できる。覆土はSD-14 同様に砂質土・粘質土が薄く交互に堆積する。水成堆積と判断できる。出土遺物 甕の胴部片28点、口縁部片が1点、環の口縁部片が3点、体部片が1点、瓦片1点、磁器碗の体部片1点の35点が覆土から出土している。

SD-18B (第168・169図、図版四三)

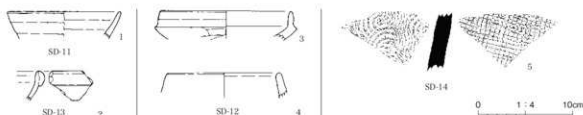
概要 SD-18Aの西側、彎曲の緩やかな平面U字状をしている。調査区の南壁からSD-18Aに連結している。堆積状況からSD-18Aより古く、SD-25より新しい溝跡である。位置 東区東部の99-39・40グリッドに位置する。確認面標高は85.570 m～85.426 mである。規模 確認面での幅は100 cm、底面幅は28 cm～36 cm。壁の状況は北壁は底面から内彎気味に立ち上がり、南壁は直線的に緩やかに外傾して立ち上がる。断面形は緩やかな丸味を帯び、皿状ないし丸底状の掘り込みで、部分的には舟底状を呈する。底面ないし壁面には水流による筋状の浸食痕が遺る。覆土 堆積状況はI・J・Lラインの第7～9層で観察できる。覆土はSD-18A 同様に砂質土・粘質土が薄く交互に堆積することから水成堆積と判断できる。出土遺物 SD-18Aと併せて取り上げている。遺構に伴う遺物はない。

SD-19 (第168・169図、図版四三)

概要 主軸を北東-南西方向に延びる溝跡である。遺構があるエリアは東側の谷部へ緩やかに傾斜をしている地形の変換点になる。本遺構より東には遺構は見られない。底面は北東へ傾斜している。位置 東区東部の99-40グリッドに位置する。確認面標高は85.215 m～85.203 mである。規模 調査区内での残存長は3.1 mで、確認面での幅は38 cm～60 cm、底面幅は14 cm～30 cm。壁の状況は底面から直線的に外傾して立ち上がる。覆土 堆積状況はMラインの第15層で観察できる。覆土はSD-18 同様に砂質土・粘質土が薄く交互に堆積することから水成堆積と判断できる。出土遺物 出土遺物は全くない。

SD-25 (第168・169図、図版四三)

概要 北東-南西方向に延びる溝跡である。両端は調査区外へ続く。SD-18 A・SD-18 Bよりも古い溝跡になる。底面は南へ向かって傾斜している。位置 東区東部の99-40グリッドに位置する。確認面標高は85.535 m～85.368 mである。規模 調査区内での残存長は4.0 mで、確認面での幅は62 cm～92 cm、底面幅は26 cm～38 cm。SD-18 によって重複されているため不明な部分が多いが、残存状況が良い箇所では



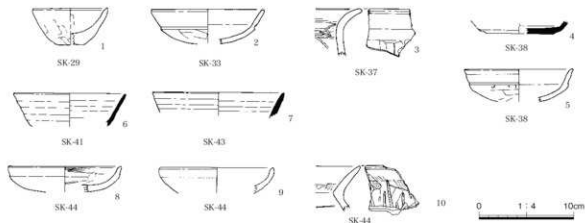
第170図 砂田姥沼遺跡3区 SD-11・12・13・14 出土遺物

壁の状況は底面から直線的に外傾して立ち上がる。底面は凹凸がある。 覆土 堆積状況はセクションK・Lラインで観察できる。第11～14層で、掘り返しが認められる。 出土遺物 環の口縁部片1点、甕の胴部片2点が覆土からの出土である。

第50表 砂田姥沼遺跡3区 SD-11・12・13・14 出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図番	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 環	口径12.0 高12.9	口縁部内外面口ケリナデ。 口ケリ成形。口縁部～体部外面に黒色彫理	(外) 黒色 (内) 灰・黄褐色 小砂粒少量、石英微量 焼成：良好	SD-11 覆土 口縁部一部 甕土一括
2 土師器 甕	高13.1	尖帯は取り付け。胎軸は均質に施される輪調。浅 黄色の発色	胎土：黄褐色 胎土：良好	SD-13 甕土 口縁部一部残存 A区一括
3 土師器 環	口径14.0 高13.1	口縁部内外面口ケリナデ。体部外面ヘラケズリ。体 部内面ナデ。横帯環身模倣形 口縁部外面に塗仕上げ	(外) 灰・黄褐色 (内) 褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	SD-12 甕土 口縁部～体部一部残存 B区一括
4 土師器 鉢	口径12.0 高12.6	口縁部内外面口ケリナデ	(外) 灰・黄褐色 (内) 黄褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	SD-12 甕土 口縁部一部残存 甕土一括
5 土師器 甕	高16.2	胴下半部外面格子叩き。胴部内面同心円状の当具 痕。内面は中央部の当具痕がより深い。	(外) 黄褐色 (内) 灰色 白色小礫微量 焼成：良好	SD-14 甕土 胴下半部一部残存 B区一括



第171図 砂田姥沼遺跡3区 SK-29・33・37・38・41・43・44 出土遺物

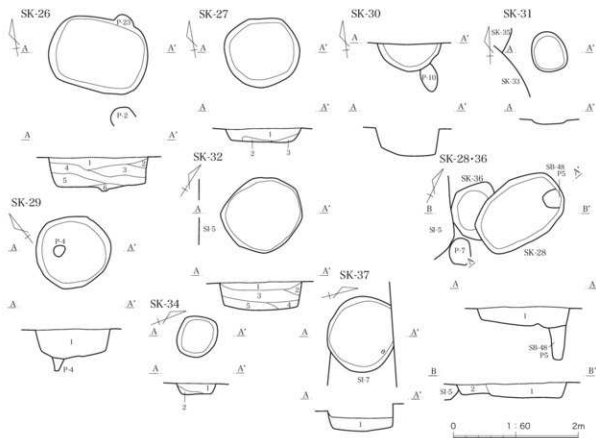
3. 土坑

土坑は総計19基確認されている。遺物の出土が少ないため、時期を決定付けるに至らない。各土坑の記述は避け計測値等を一覧表(第51表)に、遺構実測図を第172・173図にまとめる。写真図版は四三～四五に掲載している。

第51表 砂田姥沼遺跡3区 土坑一覧表

(): 推定値 [] : 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	出土遺物等
SK- 26	99-39	P-23	隅丸長方形	1.58	1.15	0.45	N-20°	E 37 (甕・環)
SK- 27	99-39		円形	1.20	1.08	0.20		20 (甕・環)
SK- 28	99-39	SK-36 SB-48	楕円形	1.49	0.99	0.27	N-26°	E 22 (甕・環)
SK- 29	99-39	P-4	円形	1.20	1.12	0.37		46 (甕・環)



SK-26
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第2層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第3層 黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量、今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、覆土。)
第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第6層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり、覆土。)
L=86.4m

SK-27
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第2層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、覆土。)
第3層 黄褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
L=86.4m

SK-28・36
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SK-28 覆土。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、SK-36 覆土。)
L=86.4m

SK-29
第1層 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
L=86.4m

SK-32
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまり強い、粘性あり、覆土。)
第3層 褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量、焼土粒・白色粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第4層 褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量、焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、覆土。)
L=86.2m

SK-34
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
L=86.2m

SK-37
第1層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量、焼土粒・今市軽石微量混入。しまりやや強い、粘性あり、覆土。)
L=86.2m

第172図 砂田姥沼遺跡3区 SK-26・27・28・29・32・34・36・37実測図(1)

SK-30	99-39	P-10	(円形)	1.02	[0.44]	0.39		8 (糞・灰)
SK-31	99-39		楕円形	0.64	0.55	0.06	N-7°	-W 4 (糞・灰)
SK-32	99-39		不整円形	1.30	1.19	0.39		32 (糞・灰)
SK-33	99-39	SK-35	(円形)	2.15	[1.42]	0.45		6 (糞・灰)
SK-34	99-39			0.66	0.60	0.18	N=49°	-W 3 (糞・灰)
SK-35	99-39	SI-5 SK-33	(不整円形)	1.17	[0.74]	0.07		1 (糞)

SK- 36	99 - 39	SK-28 SB-48	(楕円形)	0.91	[0.47]	0.22	2 (糞)
SK- 37	99 - 39	SI-7	(円形)	1.21	1.07	0.27	13 (糞・灰)
SK- 38	99 - 38	SI-3	不整形	1.51	1.41	0.55	5 (糞・灰)
SK- 39	99 - 39	SD-12	(隅丸長方形)	[0.79]	0.67	0.09	N - 66° - W
SK- 40	99 - 39	SI-7	円形	0.80	0.77	0.09	
SK- 41	99 - 39	SI-6・7	円形	1.11	1.11	0.36	9 (糞・灰)
SK- 42	99 - 39	SI-7・P.38 P.39・P.40	隅丸長方形	0.94	0.86	0.11	N - 70° - W
SK- 43	99 - 38		楕円形	1.17	0.87	0.31	N - 3° - W 13 (糞・灰)
SK- 44	99 - 38		(隅丸長方形)	1.42	[1.00]	0.24	N - 78° - W 23 (糞・灰)

第52表 砂田姥沼遺跡3区 SK-29・33・37・38・41・43・44 出土遺物 () : 推定値 [] : 残存値

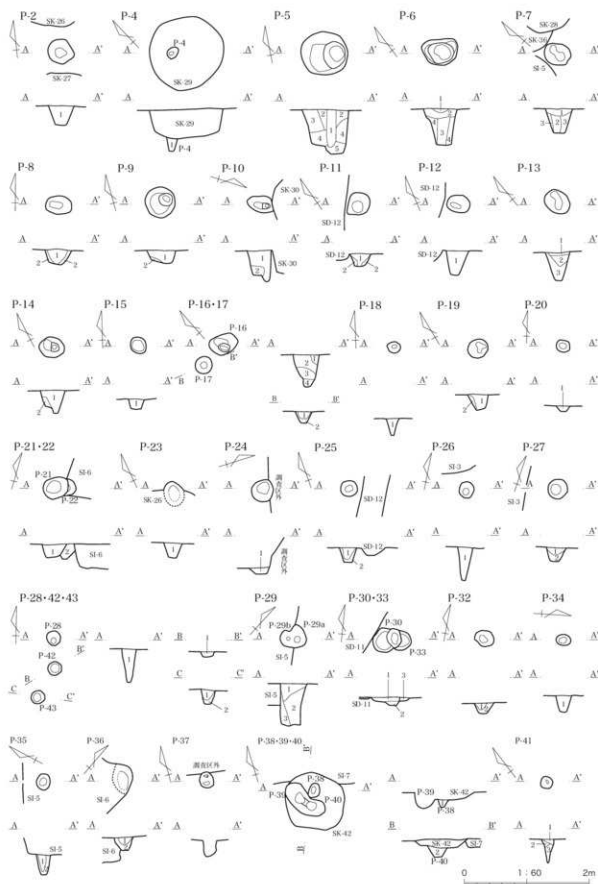
番号 種類 図柄	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 土師器 灰	口 [8.0] 高 [3.9]	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面ヘラナデ、底部外面一定方向のヘラケズリ。 平底 底部外面にヘラ記号「/」	にんい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英・雲母片微量 焼成：良好	SK-29 覆土 口縁部～底部 1/4 残存 覆土
2 土師器 灰	口 [12.0] 高 [3.7]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面斜方向のヘラケズリ、体部内面ナデ、模造杯外反形 口縁部～体部の内外面ともに漆仕上げ	にんい黄褐色 小砂粒少量、小礫・石英・雲母片微量 焼成：良好	SK-33 覆土 口縁部～体部一部残存 覆土
3 土師器 灰	高 [5.0]	口縁部内外面ヨコナデ、頸部外面タテ方向のヘラケズリ、内面はヨコ方向のヘラミガキ、反側模	にんい黄褐色 小砂粒・赤色粒微量 焼成：良好	SK-37 覆土 口縁部一部残存 灰 1
4 須恵器 灰	底 [7.0] 高 [1.45]	体部内外面ロクロナデ、底部外面回転ヘラ切り、灯明皿 体部内面に灯芯の輪跡、体部～底部外面全体に油煙	(外) 褐色 (内) 灰黄色 白色細砂粒・小礫少量、雲母片微量 焼成：良好	SK-38 覆土 体部～底部 1/4 残存 灰 2
5 土師器 灰	口 [11.6] 高 [3.4]	口縁部外面ヨコナデ後沈着、体部外面斜方向のヘラケズリ、口縁部～体部内面ヨコナデ・ナデ、模造杯内面口縁形	(外) 褐色 (内) にんい黄褐色 小砂粒・赤色粒少量 焼成：良好	SK-38 覆土 口縁部～体部一部残存 灰 1
6 須恵器 灰	口 [11.8] 高 [3.5]	口縁部～体部内外面ロクロナデ	灰色 白色細砂粒少量、小礫・長石微量 焼成：良好	SK-41 覆土 口縁部～体部一部残存 覆土
7 須恵器 灰	口 [14.0] 高 [2.7]	口縁部～体部内外面ロクロナデ	灰色 白色細砂粒少量、小礫・長石微量 焼成：良好	SK-43 覆土 口縁部～体部一部残存 覆土
8 土師器 灰	口 [12.0] 高 [2.6]	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面状況不明のため調整不明瞭 (ヘラケズリ)、体部内面ヘラナデ後ヨコ方向のヘラミガキ。 模造杯半球形 口縁部外面に漆仕上げ	(外) 褐色 (内) にんい黄褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	SK-44 覆土 口縁部～体部一部残存 覆土
9 土師器 灰	口 [12.0] 高 [2.8]	口縁部内外面ヨコナデ、体部内外面磨耗のため調整不明瞭。 模造杯半球形 口縁部～体部内面に漆仕上げ	(外) 褐色 (内) にんい黄褐色 小砂粒少量、雲母片・赤色粒微量 焼成：良好	SK-44 覆土 口縁部～体部一部残存 覆土
10 土師器 灰	高 [6.7]	口縁部外面ヨコナデ後磨毛目調整、頸部～体部外面ヘラケズリ後ミガキ、口縁部ヨコナデ、頸部内面磨毛目調整、頸部内面ヘラナデ	にんい黄褐色 小砂粒・雲母片微量 焼成：良好	SK-44 覆土 口縁部～頸部一部残存 覆土

4. 小穴

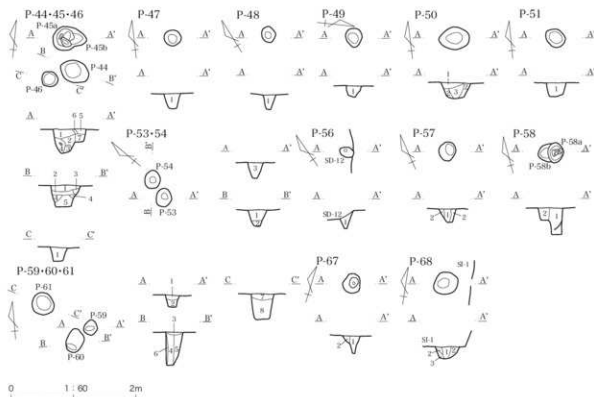
本調査区の東区からは、小穴は総計 60 基が確認されている。いずれの小穴からも柱痕は確認されなかった。また、明確に掘立柱建物跡や櫓列のような規則的な配置をとるものも確認できなかった。

小穴が集中するグリッドが 1 地点確認できた。東区の SI-5 周辺の 99 - 38・39 グリッド付近で群生している。

小穴から出土した遺物は少なく、殆どが古墳時代の土師器片であるため、遺構の時期を決定付けるに至らない。各小穴の記述は避け計測値等を一覧表 (第 53 表)、実測図を第 174 - 177 図、出土遺物を第 178 図、遺物観察表を第 53 表にまとめる。



第 174 図 砂田姥沼遺跡3区 小穴実測図 (1)



P-2
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量、今市軽石粒・白色粒微量混入、粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-4
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや弱い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-5
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量、今市軽石粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第4層 暗褐色土 (第3層に近訳、砂粒微量混入。しまりやや弱い、粘性やや強い。)
第5層 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや弱い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-6
第1層 褐色土 (ローム粒・ロームブロック・今市軽石粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (第1層に近訳、粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒少量、ロームブロック微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック混入。しまりやや弱い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-7
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック・今市軽石粒少量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第2層 黒褐色土 (第1層に近訳、粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
L=86.2m

P-8
第1層 暗褐色土 (ローム粒・今市軽石粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土 (黒色土混じりのローム主体。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-9
第1層 暗褐色土 (ローム粒・今市軽石粒・白色粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土 (褐色土と黒色土の混土層。しまりやや弱い、粘性あり。)
L=86.2m

P-10
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量、機土粒微量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック・機土粒やや多量混入。しまりやや弱い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-11
第1層 黒褐色土 (ローム粒・今市軽石粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土 (黒色土混じりのローム主体。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-12
第1層 暗褐色土 (ローム粒・白色粒・今市軽石粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-13
第1層 褐色土 (ローム粒・今市軽石小ブロック少量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (黒色土混じりのローム主体。しまりやや弱い、粘性あり。)
L=86.2m

P-14
第1層 暗褐色土 (ローム・今市軽石粒・ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック少量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m

P-15
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや弱い、粘性あり。)
L=86.2m

第175図 砂田姥遺跡3区 小穴実測図(2)

第Ⅶ章 砂田姥遺跡3区の調査

P-16	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量、今市軽石粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量、今市軽石粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第3層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第4層 黄褐色土	(褐色土、混じりのローム土床。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m	
P-17	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒・今市軽石粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 褐色土	(ローム粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-18	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-19	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・今市軽石粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 黄褐色土	(ローム粒・ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-20	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ロームブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-21・22	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・砂粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-23	
第1層 黄褐色土	(ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-24	
第1層 褐色土	(ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-25・27	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土	(ローム粒・焼土粒、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い。)
L=86.2m	
P-26・28	
第1層 暗褐色土	(ローム粒少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-29a・29b	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック・焼土小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-29a)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック・焼土小ブロック・七本板軽石小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-29b)
第3層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-29b)
L=86.2m	
P-30・33	
第1層 褐色土	(ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-30)
第2層 暗褐色土	(ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり。P-30)
第3層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-33)
L=86.2m	
P-32	
第1層 黄褐色土	(ローム粒少量混入。しまり強い、粘性あり。)
第2層 黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	

P-34	
第1層 褐色土	(ローム粒少量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-35	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。結實土。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-36	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-38・40	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量、焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-38)
第2層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-40)
L=86.4m	
P-41	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土	(ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第3層 暗褐色土	(ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-42	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m	
P-43	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・白色粒少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 暗褐色土	(ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-44	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・白色粒・焼土粒微量混入。しまり強い、粘性やや強い。)
第2層 黄褐色土	(ローム粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第3層 暗褐色土	(ローム小ブロック微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第4層 暗褐色土	(ローム粒・ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第5層 黄褐色土	(ローム粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m	
P-45a・45b	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・白色粒・ローム小ブロック・今市軽石小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-45a)
第2層 黄褐色土	(ローム粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。P-45a)
第3層 黄褐色土	(ローム土床、褐色土少量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。P-45a)
第4層 暗褐色土	(ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。P-45a)
第5層 暗褐色土	(ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-45b)
第6層 黄褐色土	(ローム小ブロック混入。しまりやや強い、粘性あり。P-45b)
第7層 褐色土	(焼土粒・炭化物微量混入。しまりやや強い、粘性あり。P-45b)
L=86.2m	
P-46	
第1層 黄褐色土	(ローム粒・白色粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m	
P-47	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-48	
第1層 暗褐色土	(ローム粒微量混入。しまり強い、粘性あり。)
L=86.2m	
P-49	
第1層 暗褐色土	(ローム粒・焼土粒微量混入。結實土。しまりやや強い、粘性やや強い。)
L=86.2m	

第176図 砂田姥遺跡3区 小穴実測図(3)

P-50
第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・褐色土ブロック微量混入。しまり強い、粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒少量、ロームブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-51
第1層 暗褐色土 (ローム粒少量・ローム小ブロック・焼土粒微量混入。しまりやや強い。)
L=86.2m

P-53・54
第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-53。)
第2層 暗褐色土 (ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-53。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。粘質土。しまりやや強い、粘性やや強い、P-54。)
L=86.2m

P-56
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-57
第1層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 褐色土 (しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-58
第1層 黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-59・60・61
第1層 褐色土 (ローム粒少量混入。しまりやや強い、粘性あり、P-59。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-59。)
第3層 褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、P-60。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりやや強い、粘性あり、P-60。)
第5層 褐色土 (ローム粒やや多量、ロームブロック少量混入。しまりやや強い、粘性あり、P-60。)
第6層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-60。)
第7層 暗褐色土 (ローム粒少量、焼土粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-61。)
第8層 黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-61。)
L=86.2m

P-67
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまり強い、粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック多量混入。しまり強い、粘性あり。)
L=86.2m

P-68
第1層 黒褐色土 (ローム粒・炭化物粒微量混入。しまりやや強い、粘性やや強い。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量、焼土粒微量混入。しまり強い、粘性やや強い。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒多量、ローム小ブロックやや多量混入。しまりやや強い、粘性やや強い、P-54。)
L=86.2m

第177図 砂田姥沼遺跡3区 小穴実測図(4)

第53表 砂田姥沼遺跡3区 小穴一覧表

() : 推定値 [] : 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-2	99-39		42.5	39.0	30.7
P-4	99-39	SK 29	19.5	16.0	22.6
P-5	99-39		76.0	68.0	71.2
P-6	99-39		54.0	41.0	56.4
P-7	99-39		43.0	37.5	38.2
P-8	99-39		42.0	28.0	25.3
P-9	99-39		48.0	47.0	36.5
P-11	99-39		42.0	33.0	22.4
P-12	99-38		36.0	26.0	38.2
P-13	99-39		43.0	33.0	45.8
P-14	99-39		41.5	32.0	35.0
P-15	99-38		28.0	25.0	17.0
P-16	99-39		47.0	31.5	51.0
P-17	99-39		27.5	26.0	20.7
P-18	99-38		22.0	18.0	26.9
P-19	99-39		34.0	29.0	24.0
P-20	99-37		24.0	19.0	9.7
P-21	99-39	P.22	41.0	32.5	20.0
P-22	99-39	P.21・SI-6	25.0	[12.5]	23.0
P-23	99-39	SK 26	[40.0]	32.0	23.5
P-24	99-37		36.5	34.0	11.5
P-25	99-39		27.0	25.0	23.8
P-26	99-38		26.0	22.5	53.7
P-27	99-38		31.0	29.5	22.8
P-28	99-38 99-39		22.0	20.0	51.9
P-29	99-39	SI-5	41.0	36.0	65.9
P-30	100-37	P.33	46.0	38.5	13.3
P-31	99-39		31.5	28.0	37.0
P-32	99-39		29.5	26.5	16.1
P-33	100-37	P.30	30.0	[15.5]	5.7

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P-34	100-37		23.0	17.0	25.1
P-35	99-39		25.0	21.0	31.8
P-36	99-39	SI-6	49.0	[34.0]	22.4
P-37	99-38 99-39		23.0	20.0	25.0
P-38	99-39	SK-42	23.0	16.5	13.1
P-39	99-39	SK-42	40.0	29.0	27.4
P-40	99-39	SK-42	34.0	26.0	18.0
P-41	99-39		20.0	19.0	39.6
P-42	99-38 99-39		22.5	21.0	9.5
P-43	99-39		21.5	20.0	23.0
P-44	99-38		47.5	34.0	34.9
P-45	99-38		37.5	35.0	41.7
P-46	99-38		26.0	24.0	24.3
P-47	99-37		26.5	26.0	24.2
P-48	99-37		25.0	22.0	23.8
P-49	99-38		29.5	26.0	18.0
P-50	99-39		49.0	35.0	26.1
P-51	99-39		32.5	25.5	22.4
P-53	99-39		30.0	29.0	23.7
P-54	99-39		29.5	25.5	25.7
P-56	99-39	SD-12	22.0	16.0	29.4
P-57	99-38		30.0	27.0	22.3
P-58a	99-38		32.0	24.5	41.8
P-58b	99-38		25.0	[16.0]	20.2
P-59	99-38		24.5	22.0	18.6
P-60	99-38		37.0	22.5	51.9
P-61	99-38		35.0	33.0	40.1
P-67	99-38		30.0	26.5	27.2
P-69	99-38		25.0	[22.0]	21.0
P-70	99-38		25.0	16.0	55.0



第178図 砂田姥沼遺跡3区 P-10・13・34・58出土遺物

第54表 砂田姥沼遺跡3区 P-10・13・34・58出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状況 残存状態 注記
1 土師器 片	口 [13.8] 高 [2.8]	断面摩耗のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面へラケズリか。模範杯身模範形	にぶい黄褐色 小砂粒少量。雲母片微量 焼成：良好	P-10 甕土 口縁部～体部の一部残存 P-78
2 土師器 杯	口 [15.8] 高 [2.5]	断面摩耗のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面へラケズリか。模範杯半球形 体部外面黒色処理	(外) 黒色 (内) 灰黄色 小砂粒少量。小礫・雲母片微量 焼成：良好	P-13 甕土 口縁部～体部の一部残存 P-13
3 土師器 杯	口 [12.9] 高 [3.0]	断面摩耗のため調整不明瞭。口縁部内外面ヨコナデ後沈没。体部外面へラケズリか。内面へラナデ。模範杯半球形	(外) 黄灰色 (内) にぶい黄褐色 小砂粒・小礫少量。石英・雲母片微量 焼成：良好	P-34 甕土 口縁部～体部の一部残存 P-95
4 須恵器 甕	高 [15.9]	胴下半部外面格子目叩き。胴部内面同心円の当貝痕。甕：外面に自然釉 向きがあっているならば、上方から当て具をヨコ方向に押し当てて、胴に下方へ押し当てている	(外) 暗灰色 (内) 黄灰色 白色細砂粒少量。黒色粒・白色粒微量 焼成：良好	P-58 甕土 胴下半部一部残存 P-58

第4節 砂田姥沼遺跡2区・3区の自然科学分析

1. 砂田姥沼遺跡2区・3区の火山灰分析

株式会社古環境研究所

1. はじめに

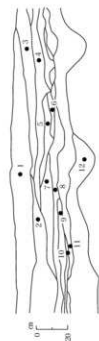
栃木県宇都宮市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、日光火山群のほか、赤城山、榛名山、浅間山など関東地方とその周辺をはじめ、中部地方や中国地方さらには九州地方などに位置する火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになる。

そこで、東谷・中島地区砂田姥沼遺跡においても、地質調査を行って土層の観察を行い、テフラを含めた土層層序の記載を行った。そして採取された試料さらに発掘調査担当者により採取された試料を対象として、テフラ検出分析と屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位および年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、2区SX-19A-A'セクション（第179図）、2区SX-19B-B'セクション（第180図）、2区SI001サンプリングA（第181図）、2区SI001サンプリングB（第182図）、3区西（第183図）、3区E-E'セクション（第184図）、3区SI005（第185図）の7地点である。



第179図 2区 SX-19 A-A'セクションにおける

試料の層位 (●)

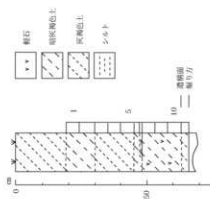


第180図 2区 SX-19 B-B'セクションにおける試料の層位 (●)



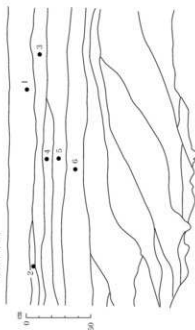
第181図 2区 SI-1サンプリングAにおける試料の

層位 (●)

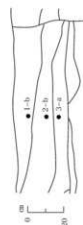


第183図 3区西における土層

柱状図 数字はテラ分析の試料番号



第184図 3区 E-E'セクションにおける試料の層位 (●)



第185図 3区 SI-5における

試料の層位 (●)

2. 土層の層序

土層の観察記載を行った3区(西)では、遺構の遺構構成土層の可能性が考えられている灰褐色土(層厚3cm)の上位に、下位より白色軽石混じり暗灰褐色土(層厚15cm、軽石の最大径3mm)、灰色シルト層(層厚2cm)、暗灰褐色土(層厚2cm)、灰褐色土(層厚15cm)、灰色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土(層厚11cm)、灰褐色表土(層厚19cm)が認められる(第183図)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法 2区SX-19A-A'セクション、2区SX-19B-B'セクション、2区SI001サンプリングA、2区SI001サンプリングB、3区西、3区E-E'セクション、3区SI005において採取された試料のうち56点の試料を対象に、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を把握。

第55表 テフラ検出分析結果(1)

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
2区SX-19A-A'セクション	1	-	-	-	+	pm	灰白
	2	-	-	-	+	pm	灰白
	3	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	4	-	-	-	+	pm	灰白
	5	-	-	-	+	pm	白, 灰白
	6	-	-	-	+	pm	灰白
	7	-	-	-	+	pm	白, 灰白
	8	-	-	-	+	pm	透明
	9	+	白	2.1	++	pm	白, 灰白
	10	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	11	-	-	-	++	pm	白, 灰白, 黄白
	12	+	白	2.0	++	pm	白, 灰白
	13	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	13'	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	14	+	白	2.0	++	pm	白, 灰白
2区SX-19B-B'セクション	1	-	-	-	+	pm	淡褐, 灰白
	2	-	-	-	-	-	-
	3	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	4	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	5	-	-	-	+	pm	白, 灰白
	6	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	7	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	8	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	9	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	10	-	-	-	++	pm	白, 灰白
	11	+	白	3.8	++	pm	白, 灰白
	12	+	白	2.3	++	pm	白, 灰白
2区SI001サンプリングA	3-b	-	-	-	++	pm	灰白, 白
	4-a	-	-	-	++	pm	灰白 > 白
	コア1	+	白	2.3	++	pm	白 > 灰白
	5-a	-	-	-	++	pm	灰白 > 白
	7-a	-	-	-	++	pm	灰白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない。最大径の単位は, mm。
bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型。

第56表 テフラ検出分析結果(2)

地点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス	
		量	色調	最大径	量	形態 色調
2区 SI001 サブリグ B	1-a	-	-	-	++	pm 灰白, 白
	2-a	+	白	2.1	++	pm 白, 灰白
	コア2	-	-	-	++	pm 灰白, 白
	コア4	-	-	-	++	pm 白, 灰白
	4-c	++	白	2.3	+++	pm 白 > 灰白
	コア3	-	-	-	++	pm 白, 灰白
	4-e	-	-	-	++	pm 灰白, 白
3区西(仮) D地区	6-b	-	-	-	+	pm 灰白
	1	-	-	-	++	pm 淡褐 > 灰白
	3	-	-	-	+	pm 灰白
	5	-	-	-	+	pm 白, 灰白
	6	-	-	-	+	pm 白, 灰白
	7	-	-	-	+	pm 白 > 灰白
	9	+	白	2.1	+	pm 白 > 灰白
3区 E-E' セショツ	11	-	-	-	+	pm 黄白
	1	-	-	-	++	pm 淡褐, 白, 灰白
	2	-	-	-	++	pm 淡褐, 白, 灰白
	3	+	白	2.9	+++	pm 灰白, 白
	4	-	-	-	+++	pm 灰白 > 白
	5	-	-	-	++	pm 灰白
	6	-	-	-	-	-
3区 SI005	1-b	-	-	-	+++	pm 灰白, 白
	2-b	-	-	-	++	pm 灰白
	3-a	-	-	-	+	pm 灰白

++++: とくに多い, +++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型.

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第55・56表に示す。2区 SX-19A-A' セクションでは、試料14、試料12、試料9で、白色の軽石(最大径2.1mm)を少量ずつ認めることができる。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料8、試料6、試料4、試料2～1を除くいずれの試料からも検出される。また、ほかに試料8を除くいずれの試料にも灰白色の軽石型ガラスが含まれている。これらの火山ガラスは下位の試料でより多く含まれる傾向にある。

2区 SX-19B-B' セクションでは、試料12と試料11で、白色の軽石(最大径3.8mm)を少量ずつ認めることができる。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料1を除くいずれの試料からも検出される。また、これらの試料さらに試料1には、灰白色の軽石型ガラスが含まれている。試料1には、ほかに淡褐色の軽石型ガラスも認められる。

2区 SI001 サンプルングAでは、コア1に白色の軽石(最大径2.9mm)を少量認めることができる。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料7aを除くいずれの試料からも検出される。また、いずれの試料にも灰白色の軽石型ガラスが含まれている。

2区 SI001 サンプルングBでは、試料4-cおよび試料2-aに白色の軽石(最大径2.3mm)を少量ずつ認めることができる。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料6-bを除くいずれの試料からも検出される。これら白色の軽石や軽石型ガラスは、試料4-cにより多く含まれている。また、いずれの試料にも

第57表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス (n)
2区 SX-19A-A' セショツ	14	1.501-1.503
2区 SX-19B-B' セショツ	12	1.500-1.502
3区 E-E' セショツ	5	1.516-1.520

屈折率測定は、温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)による。

灰白色の軽石型ガラスが含まれている。

3区西では、試料9に白色の軽石（最大径2.1mm）が少量含まれている。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料11、試料3、試料1を除くいずれの試料からも検出される。また、試料11を除くいずれの試料にも灰白色の軽石型ガラスが含まれている。試料1では、ほかに淡褐色の軽石型ガラスが比較的多く認められる。

3区E-E'セクションでは、試料3に白色軽石の軽石（最大径2.9mm）が少量含まれている。この軽石の細粒物である白色の軽石型ガラスは、試料4より上位のいずれの試料からも検出される。またいずれの試料にも灰白色の軽石型ガラスが含まれている。試料2や試料1には、ほかに淡褐色の軽石型ガラスが認められる。

3区SI005では、いずれの試料にも灰白色の軽石型ガラスが含まれている。また1-b層には、白色の軽石型ガラスも含まれている。

4. 屈折率測定

（1）測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象試料のうち、2区SX-19A-A'セクションの試料14、2区SX-19B-B'セクションの試料12、3区E-E'セクションの試料5の3点について、火山ガラスの屈折率（ n ）の測定を行った。測定には、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質製、MAIOT）を利用した。

（2）測定結果

テフラ検出分析の結果を第56表に示す。3試料に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、2区SX-19A-A'セクションの試料14で1.501-1.503、2区SX-19B-B'セクションの試料12で1.500-1.502、そして3区E-E'セクションの試料5で1.516-1.520である。

5. 考察

テフラ検出分析で検出された軽石や火山ガラスのうち、灰白色の軽石型ガラスについては、3区E-E'セクションの試料5の屈折率を考慮すると、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C、荒牧、1968、新井、1979、友廣、1988、若狭、2000）に由来すると考えられる。また、白色軽石やその細粒物である白色の軽石型ガラスについては、2区SX-19A-A'セクションの試料14や、2区SX-19B-B'セクションの試料12の火山ガラスの屈折率などから、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳浅川テフラ（Hr-FA、新井、1979、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）または6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ（Hr-FP、新井、1962、坂口、1986、早田、1989、町田・新井、1992）に由来すると考えられる。とくに従来の周辺での分析結果を考慮すると、前者の可能性がより高いと考えられる。さらに淡褐色の軽石型ガラスについては、その岩相から、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B、荒牧、1968、新井、1979）に由来すると考えられる。

2区SX-19A-A'セクションでは、最下位の土層から採取された試料14にAs-CやHr-FAに由来すると考えられる軽石や火山ガラスが検出された。したがって、「波板状遺構」の覆土にもこれらのテフラ粒子が混在していることになり、遺構の層位は少なくともHr-FAより上位にあると考えられる。

2区SX-19B-B'セクションにおいても、最下位の土層から採取された試料12にAs-CやHr-FAに由来すると考えられる軽石や火山ガラスが検出された。なお、試料1にはAs-Bに由来すると考えられる火山ガラスがごく少量含まれている。

2区SI001サンプリングAでは、試料7-aより上位でAs-C、試料5-aより上位でHr-FAに由来すると考え

られるテフラ粒子が認められる。とくにコア1（4層）付近に、Hr-FAに由来するテフラ粒子が多いようにみえる。このことから、この地点でSI001については、As-Cより上位で、Hr-FAより下位にある可能性が考えられる。また、2区SI001 サンプリングBでも、試料6-aより上位でAs-C、試料4-eより上位でHr-FAに由来すると考えられるテフラ粒子が認められる。とくに試料4-c（4層）付近に、Hr-FAに由来するテフラ粒子が多いようにみえる。このことから、この地点でも、SI001についてはAs-Cより上位で、Hr-FAより下位にある可能性が考えられる。

3区西では、試料9より上位の遺構覆土のほとんどから、As-CやHr-FAに由来すると考えられるテフラ粒子が認められた。遺構の構成層からこれらのテフラ粒子は検出されなかったものの、その覆土中にこれらで特徴づけられるテフラ粒子の降灰層準も認められない。したがって覆土の除去などが行われていない限り、この遺構に関しては、Hr-FAより上位にある可能性も十分考えられよう。なお、試料1には、As-Bに由来すると考えられる淡褐色の火山ガラスが比較的多く認められる。したがって、この遺構に関しては、As-Bより下位にあると考えられる。

3区E-E' セクションでは、試料5にAs-C、試料4や試料3にAs-CやHr-FAに由来すると考えられるテフラ粒子が比較的多く含まれている。また試料2や試料1には、ほかにAs-Bに由来すると考えられる火山ガラスも含まれている。このことから、溝状遺構については、Hr-FAより上位にあると推定される。

3区SI005では、いずれの試料にもAs-Cに由来すると考えられる軽石型ガラスが含まれている。また1-b層には、Hr-FA起源のテフラ粒子も混在しているようである。

6. まとめ

砂田姥沼遺跡3区において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、浅間C軽石（As-C、4世紀初頭）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B、1108年）などの指標テフラに由来する軽石や火山ガラスを検出することができた。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部の第四紀編年，群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79.
- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層，考古学ジャーナル，no.157，p.41-52.
- 荒牧重雄（1968）浅間火山の地質，地団研専報，no.45，65p.
- 町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス，東京大学出版会，276p.
- 坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器，群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119.
- 早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害，第四紀研究，27，p.297-312.
- 友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石，群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336.
- 若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき，かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動くー古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43.

2. 砂田姥沼遺跡 3 区の種実同定報告

パリオ・サーヴェイ株式会社

1. 試料

試料は、砂田姥沼遺跡 (UT-SN-3) の住居跡内 (SI-6 南西角) より出土した種実遺体 1 点 (サンプル 1) である。

2. 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川 (1994)、中山ほか (2000) 等との対照から、種実遺体の種類と部位を同定する。

3. 結果

栽培種のモモの核に同定された。以下に形態的特徴を記す。

・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核 (内果皮) は炭化しており黒色、長さ 23.61mm、幅 15.78mm、厚さ 11.09mm のやや偏平な広楕円体。頂部は尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1 本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦降条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

4. 考察

モモは、古くから栽培のために中国から持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や核の中にある種子 (仁) などが食用、薬用、祭祀等に広く利用されることから、弥生～古墳時代以降の遺跡出土事例が多数報告されている (南木, 1991; 粉川, 1988 など)。砂田姥沼遺跡においても、住居跡内より炭化したモモの核が出土したことから、当該期におけるモモの利用や、火を受け炭化残存したことが推定される。砂田遺跡 6 区 SE-193 の 12 層からも、モモの核がアサの果実や炭化したマメ類の種子とともに確認されている。



1. モモ 核 (3a-4南西角)

第 186 図 砂田姥沼遺跡 3 区 種実同定顕微鏡写真

引用文献

- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑, 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
粉川昭平, 1988, 穀物以外の植物食, 弥生文化の研究 2 生業, 金岡 恕・佐原 真編, 雄山閣, 112-115.
南木睦彦, 1991, 栽培植物, 古墳時代の研究 4 生産と流通 I, 石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編, 雄山閣, 165-174.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑, 東北大学出版会, 642p.

第Ⅷ章 砂田瀧遺跡各地区の縄文・弥生時代の遺物

第1節 縄文時代の遺物出土状況

【砂田瀧遺跡2区】 縄文時代の遺物は土器片4点である。調査区一括や時期不明の溝跡から出土している。前期中葉の羽状縄文系の黒浜式が3点出土している。117.5-24 グリッド(SK-22)、117-20.5 グリッド(SD-59・SK-63 重複地点)、SD-59、調査区一括として竹管文系の諸磯a式が1点出土している。

【砂田瀧遺跡3区】 縄文時代の遺物は土器片2点である。調査区一括やトレンチ内からの出土である。遺物は前期の竹管文系の諸磯a式のもので、調査区一括で1点、南側西トレンチ焼土から1点が出土している。

第2節 砂田瀧遺跡各地の縄文土器

本節では、遺構以外から出土した縄文時代の遺物は、地区ごとに区分せずまとめて分類し、本節で報告する。

【第1群 前期の羽状縄文系土器】(第187図1～3、写真図版五九)

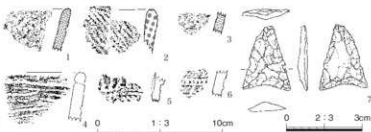
1類 黒浜式土器(1～3)

1・2は深緑の平緑の口縁部破片。1は縄文は2段LRの横回転。口縁には横位の刺突が並んでいる。2は2段RLの横回転。3は胴部破片だが、縄文は不明瞭。胎土には繊維が含まれている。1～3とも胎土には繊維を含み、1は白・半透明の砂粒、白細砂。2・3は白砂粒。色調は1がにぶい赤褐、2・3がにぶい橙。焼成は1・3が比較的硬質であるが、2はやや脆い。1は2区SK-22、2・3は2区SD-59から出土。

【第2群 前期の竹管文系土器】(第187図4～6)

1類 諸磯a式土器(4～6)

4は平緑の口縁部破片で半截竹管状工具による押し引きの平行沈線が3段。内面は丁寧なナデ。5は2列の爪形文の下に多截竹管による横位の沈線が押し引かれる。横位沈線の下(破片の下縁)には爪形文の痕跡。6は半截竹管による爪形文で文様構成は不明。破片下縁には半截竹管による斜方向の



第187図 砂田瀧遺跡 遺構外出土の縄文土器・石器

平行沈線の施文。胎土は白の砂粒が主体。黒や半透明・透明の砂粒が混入する。焼成は比較的硬質であるが、5はやや脆い。色調は、4はにぶい橙(7.5YR6/4)、5はにぶい黄褐(10YR5/6)、6はにぶい黄橙(10YR6/4)。4は3区表面採集、5は3区南側西トレンチ焼土、6は2区表面採集での出土。

第3節 砂田瀧遺跡各地区縄文時代石器

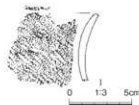
砂田瀧遺跡の遺構外から出土した石器は、トレンチ調査時に121-25.5で出土した石鏃(7)のみである。石鏃は最大長2.6cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cm、重量1.35gの凹基無茎鏃である。石質はチャート。表裏面の成形や側縁部も直線的な調整がなされておらず、先端部が節理面で欠損したため、破棄した未製品の可能性が指摘できる。

第4節 弥生時代の遺物出土状況

砂田瀧遺跡の弥生時代の遺構は確認されていない。出土した遺物は砂田瀧遺跡3区B地区のトレンチ調査において表土中で確認された1点のみである。

第5節 砂田瀧遺跡各地の弥生土器

1は3区のB地区から出土した壺口縁部の破片である。破片下縁には斜方向の刷毛目調整、その後に2段LRの横回転。口唇部には縄文を施文。なお、器面には輪積み痕がない。破片のみの観察であるが弥生時代後期のものであろう。

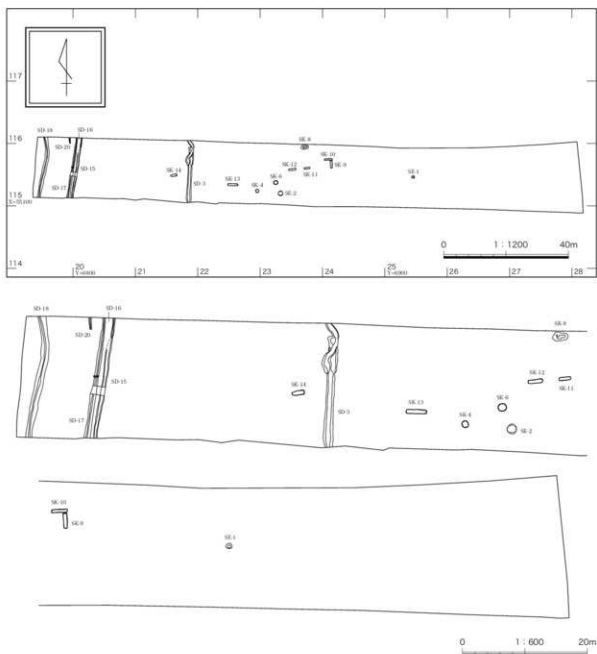


第188図 砂田瀧遺跡 遺構外出土の弥生土器

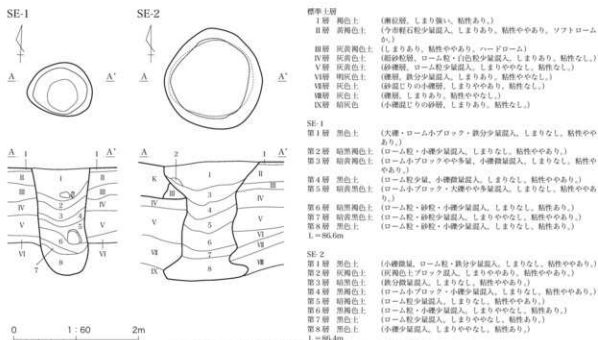
第Ⅸ章 砂田瀧遺跡 1 区の調査

砂田瀧遺跡 1 区は、宇都宮市砂田町字瀧 225、砂田町字瀧 192・193 番地に所在している。本遺跡は田川東岸の低台地を開析する「中島谷田」に残る低地に囲まれた台地上に位置する。調査区は遺跡の西側に流れる小河川に隣接する。砂田遺跡は谷を隔てた北西側に位置する。1 区は遺跡の南端にあたる。確認調査によると西側への傾斜の度合いが強く、西端では表土直下に粘土層が露出している。

発掘調査前の標高は 86.96 m で、低地との比高は 1.06 m 程である。1 区の範囲は南北 20 m × 東西 175.1 m。遺構の多くは調査区の中央部で確認されている。遺構が集中する中央部の位置は北緯 36 度 29 分 59 秒、東経 139 度 54 分 24 秒である（世界測地系）。



第 189 図 砂田瀧遺跡 1 区 全体図 (S = 1/1,200・1/600)



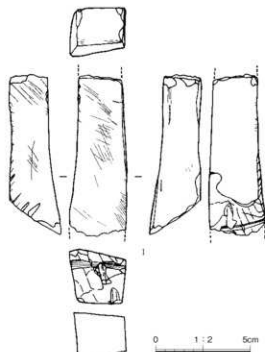
第1節 中世以降の遺構と遺物

1. 井戸

砂田瀧遺跡1区では2基の井戸が確認されている。SE-1からは中世期と推定される砥石片が出土している。

SE-1 (第190・191図、第58表、図版四六・六七)

概要 調査区中央の東寄り、台地が緩やかに西斜する平坦面に位置する井戸跡である。遺構が集中する中央部からやや離れており、周辺に他の遺構は見られない。位置 115-25グリッドに位置する。確認面標高は86.415m～86.409mである。平面形・規模 長軸1.03m×短軸0.84mの東西方向に長い楕円形をしている。主軸の方位はN-87°-Eである。覆土 堆積状況は第1層から第8層であるが、第1～5層中には大礫・小礫が混入している。第5層中には大礫が多量に含まれている。第6～8層には砂粒・小礫が含まれる。堆積の土しまりは弱く埋め戻し土である。断面形・底面 確認面からの深さは約1.61～1.75mである。底面は丸味を帯びている。壁の状況は底面から確認面まで、概ね直線的にやや外傾して立ち上がる。底面には、鉄分が多量の砂礫少量が混入している。しまりがあり、粘性がややある赤褐色土である。出土遺物・時期 第191図 砂田瀧遺跡1区 SE-1出土遺物



出土遺物は覆土より砥石 (No. 1) が出土している。砥石は残存する四面をとにも使用している。出土状況から入したもので、中世期のものである。

第58表 砂田瀧遺跡1区 SE-1出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 図類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 石製品 砥石	最大長 18.2 最大幅 2.9 最大厚 12.5 重量: 84.65	残存する四面をともに使用。細密でやや軟質。磨 面の発達した粘板質。正面には織いキス状の磨面 が見られる。側面は平滑に磨面が、左側面の上部 と中央部に斜方向の磨面が見られる。砥石の上 端部には一方向の磨面。砥石下部の割れ口部分 は破面を再利用して3方向の磨面が見られる。 全ての面に膜が付着している。	暗黄褐色	覆土 長い砥石の未端部 第1層

SE-2 (第190図、図版四六)

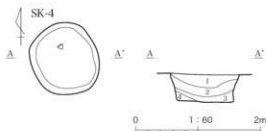
概要 調査区の中央、台地が緩やかに西斜する平坦面に位置する井戸跡である。位置 115-23 グリッドに位置する。確認面標高は 86.320 m ~ 86.252 m である。平面形・規模 長軸 1.63 m × 短軸 1.55 m のほぼ円形をしている。覆土 堆積状況は第1層から第8層であるが、ロームと小礫を混入しており、堆積土のしまりが弱いことから埋め戻し土である。断面形・底面 確認面からの深さは約 1.82 ~ 1.92 m である。底面は平坦である。壁の状況は、底面付近は地山の礫層 (Ⅷ層)、砂層 (Ⅸ層) が崩落したためか、中位屈曲部よりも外側に傾いている。屈曲部から確認面までは緩やかに内傾して立ち上がる。湧水点は不明である。

出土遺物・時期 出土した遺物は全く見られない。周辺には中世期と特定される遺構は SK-4 のみ確認されている。本遺構も中世以降の範疇の井戸跡になると推定される。

2. 土坑

SK-4 (第192・193図、第59表、図版四六・六七)

概要 調査区の中央、台地が緩やかに西斜する平坦面に位置する土坑である。位置 115-22 グリッドに位置する。確認面標高は 86.354 m ~ 86.330 m である。平面形・規模 長軸 1.17 m × 短軸 1.15 m のほぼ円形をしている。覆土 堆積状況は第1層から第4層で、堆積土のしまりがあることから自然堆積である。断面形・底面 確認面からの深さは約 0.36 ~ 0.46 m である。底面は平坦で、掘削面は固い。断面形は逆台形である。壁の状況は底面からほぼ直線的に外傾して立ち上がる。出土遺物・時期 出土した遺物は常滑の甕胴部下端~底面片 (No.1) の1点のみである。胴部下端の割れ口を研磨しているのが確認できた。破損後に胴部下端を浅鉢として転用したとも考えられる。この常滑甕片は第2層中から出土している。



SK-4
第1層 暗褐色土 (ローム粒少量、小礫微量混入、しまりややあり、粘性ややあり)
第2層 黒褐色土 (ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり)
第3層 黒色土 (ローム小ブロック少量、今市軽石粒混入、しまりややあり、粘性あり)
第4層 黒褐色土 (ローム小ブロック少量混入、しまりややあり、粘性あり、)
L=96.6mm

第192図 砂田瀧遺跡1区 SK-4実測図



第193図 砂田瀧遺跡1区 SK-4出土遺物

第59表 砂田瀧遺跡1区 SK-4出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

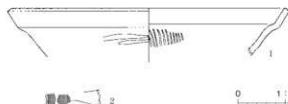
番号 種類 図類	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 常滑陶器 甕	高 14.0 底 10.0	底部外面ヘラケスリ痕ヘラナデ。内面ナデ。外面には淡灰白色の膜がある軸調。暗赤褐色の発色。常滑型製品	(外) にふい赤褐色 (内) 和灰色 若干きめが粗い。白色粉の混入物少量 焼成: 良好	覆土 胴部下端~底面 1/4 残存 SE-4.1

3. 溝状遺構

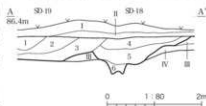
溝跡は7条が確認されている。このうち、出土遺物から中世以降のものと推定できるものが、SD-18の1条のみである。

SD-18 (第194～196図、第60表、図版四七・六七)

概要 調査区の西端部に位置する溝跡である。重複関係からSD-19よりも古い溝跡である。調査区の南北方向に延びている。本遺構からの出土遺物は24点と少なく、碗や播り鉢、甕や模倣杯等の破片が出土している。遺物は混在しているが、碗や播り鉢から当該期の遺構と判断している。 **位置** 115・116-19グリッドに位置する。確認面標高は85.540m～85.480mである。 **断面形・規模** 確認面で幅は0.96m～1.34mである。確認面から底面までの掘り込みは0.33～0.54m（底面標高85.190～85.180m）である。断面形は底面が凸凹している。壁は緩やかに立ち上がる逆台形をしている。覆土は調査区北壁の断面が観察でき、舟底状の断面とその下部に逆台形状の掘り込みが見られる。堆積状況から逆台形の掘方を舟底状の掘り込みが掘り返したことが伺える。 **出土遺物・時期** 出土遺物は取り上げ遺物は、播り鉢の口縁部片（No.1）と碗の底部片（No.2）の2点。この他に一括遺物として、古墳時代～古代の杯の口縁部片3点。同体部片6点。甕の口縁部片2点。胴部片11点の総数24点が覆土から出土している。播り鉢（No.1）は、残存する内面に11条を1単位とする摺り目が確認される。摺り目は疎らに施している。碗（No.2）は天目碗の底部片で、高台部は削りだし。一部外面に鉄軸が溜まる。瀬戸美濃大窯期のものか。これらの遺物の時期から中世の遺構と判断した。



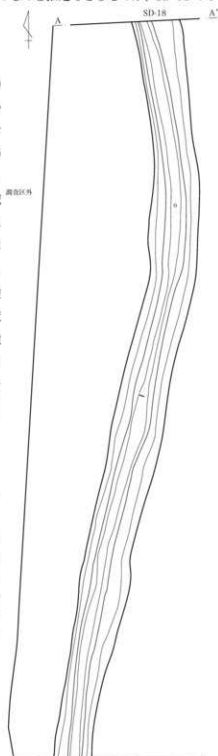
第196図 砂田瀧遺跡1区 SD-18出土遺物



SD-18・19
第1層 黄褐色土 (ロームブロック多量混入。しまりややあり、粘性ややあり。SD-19覆土上。)
第2層 褐色土 (ロームブロックやや多量混入。しまりややなし、粘性ややあり。SD-19覆土上。)
第3層 暗褐色土 (ロームブロック少量混入。しまりややなし、粘性ややあり。SD-19覆土上。)
第4層 褐色土 (ロームブロック少量混入。しまりややなし、粘性ややあり。SD-18覆土上。)
第5層 暗褐色土 (ローム粘土少量混入。しまりややなし、粘性あり。SD-18覆土上。)
第6層 黒褐色土 (ローム粘土少量混入。しまりなし、粘性あり。SD-18覆土上。)

第195図 砂田瀧遺跡1区

SD-18実測図(2)



第194図 砂田瀧遺跡1区

SD-18実測図(1)

第60表 砂田瀧遺跡1区 SD-18出土遺物

(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 瓦質土器 すり鉢	口径30.0 高15.0	口縁部内外面ヨコナデ、底部外面ナデ、 内面11条を1単位とするすり目を縦に施す。	灰褐色 細密 焼成：硬質	覆土 口縁部1/4残存 No.2
2 陶器 大皿	高11.0 底5.8	高台部はすりだし、内面に鉄軸が施されており鉄 軸は内面が厚い軸調、黒褐色の強い変色。高台部 は外面も含めて施軸しないが、一部外面に鉄軸が 施まる。瀬戸・美濃大窯陶。	(外)にぶい黄褐色(内)黒色 細密 焼成：硬質	覆土 高台部のみ残存 No.1

第2節 時期不明の遺構

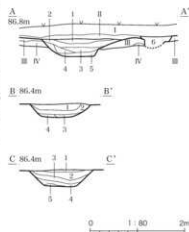
これまで砂田瀧遺跡1区の遺構・遺物について述べてきたが、本項では、ほとんど遺物が伴わないため具
体的な時期を確定しがたい遺構について扱うものとする。溝跡の他に、土坑が確認されている。

1. 溝跡状遺構

溝跡は7条が確認されている。このうち、時期が不明の溝跡は6条、SD-3・15・16・17・19・20がある。
遺物の出土がないため、時期を決定付けるに至らない。

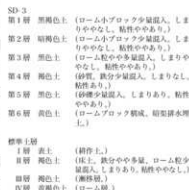
SD-3 (第197・198図、図版四七)

概要 調査区の西部に位置する溝跡である。調査区の南北に延びており、北は砂田瀧遺跡2区のSD-52とし
て続いている。南側は調査区外へと続く。地区内における残存長は20m
である。本遺構からの出土遺物はないが、2区SD-52からは大正期のク
ロム青磁が出土している。位置 115・116-21グリッドに位置する。
確認面標高は86.332m～86.070mである。断面形・規模 確認面
での幅は1.18m～2.71mである。確認面から底面までの掘り込みは0.08
～0.41m(底面標高85.992～85.922m)である。断面形は底面は平
坦で、壁は緩やかに外傾して立ち上がる逆台形をしている。覆土はA・
B・Cラインで観察でき、第3層にはロームブロックが多量に混入、第4・
5層は砂質土である。



SD-15 (第199・200図、図版四七)

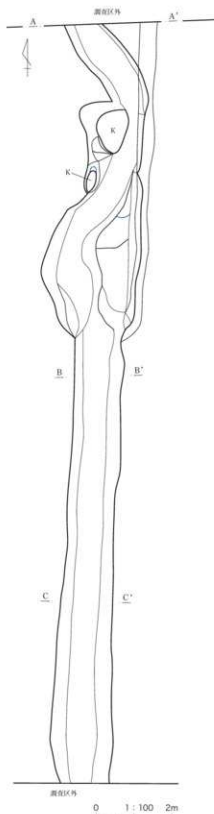
概要 調査区の西部に位置する溝跡である。SD-16と重複関係にあり、
SD-16よりも古い。本遺構の埋没後に掘り込まれている。調査区の南北に
延びており、北は砂田瀧遺跡2区のSD-58として続いている。南側は調
査区外へと続く。地区内における残存長は19.65mである。本遺構から
の出土遺物はない。第199図中「×」印は調査時に確認された木杭の痕
跡である。溝の範囲内に打ち込まれている。位置 115・116-19グリ
ッドに位置する。確認面標高は85.700m～85.580mである。断面形・
規模 確認面での幅は0.23m～0.72mである。確認面から底面までの掘
り込みは0.05～0.17m(底面標高85.640～85.420m)である。断面
形では、底面は丸味を帯びておりやや凹凸がある。壁は緩やかに立ち上
がる舟底状をしている。覆土はAラインの第7～9層、B・Cラインの第



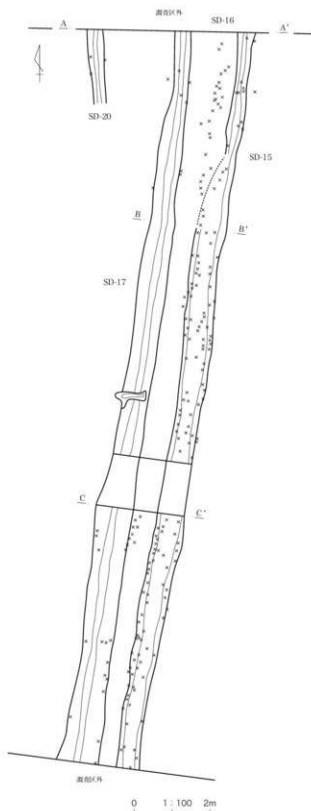
第197図 砂田瀧遺跡1区

SD-3実測図(1)

2・3層で観察でき、底面付近の第9層、第3層にロームブロックが多く混入する。



第198図 砂田瀬遺跡1区
SD-3実測図(2)



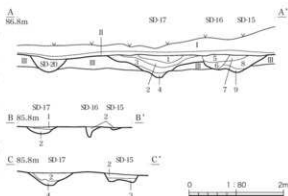
第199図 砂田瀬遺跡1区
SD-15・16・17・20実測図(1)

SD-16 (第199・200図、図版四七)

概要 調査区の西部に位置する溝跡である。SD-15と重複関係にあり、SD-15よりも新しい。本遺構はSD-15が埋没した後に掘り込んでいる。溝跡は調査区の南北に延びており、北は砂田灌漑跡2区のSD-58として続いている。南側はセクションBラインで僅かに痕跡が確認できたが、これ以南では確認できない。本遺構からの出土遺物はない。第199図中「×」印はSD-15と同様に調査時に確認された木杭の痕跡である。

遺構確認面の北側では溝の痕跡が削平のため確認できなかったが、木杭の痕跡から溝の範囲内を推定することができた。位置 115・116-19グリッドに位置する。確認面標高は85.720mである。断面形・規模

確認面での幅は0.32mである。確認面から底面までの掘り込みは0.21m(底面標高85.500m)である。断面形では、底面は丸味を帯びている。壁は底面から直線的にやや外傾して立ち上がるU字状をしている。覆土はAラインの第5・6層、Bラインの第2層が対応する。堆積状況から自然堆積である。



SD-15・16・17・20	Aライン	(ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-17覆土上。)
第1層	黒褐色土	(ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-17覆土上。)
第2層	暗褐色土	(ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-17覆土上。)
第3層	褐色土	(ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-17覆土上。)
第4層	暗黄褐色土	(ローム小ブロック少量混入、しまりややあり、粘性あり、SD-17覆土上。)
第5層	暗黄褐色土	(ローム小ブロック少量混入、しまりややあり、粘性ややなし、SD-16覆土上。)
第6層	暗褐色土	(ローム粒少量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-16覆土上。)
第7層	暗褐色土	(しまりややあり、粘性ややあり、SD-15覆土上。)
第8層	暗黄褐色土	(ローム粒やや多量混入、しまりややあり、粘性ややあり、SD-15覆土上。)
第9層	黄褐色土	(ロームブロック少量混入、しまりややあり、粘性あり、SD-15覆土上。)
SD-15・16・17・20	B・Cライン	(ローム粒少量混入、しまりあり、粘性あり、SD-17覆土上。)
第1層	暗褐色土	(ローム粒少量混入、しまりあり、粘性あり、SD-15・16・17覆土上。)
第2層	暗褐色土	(ローム大ブロックやや多量混入、しまりなし、粘性なし、SD-15覆土上。)
第3層	黒褐色土	(ローム大ブロックやや多量混入、しまりなし、粘性なし、SD-15覆土上。)
第4層	黒褐色土	(ロームブロックやや多量混入、しまりなし、粘性なし、SD-17覆土上。)

SD-17 (第199・200図、図版四七)

概要 調査区の西部に位置する溝跡である。SD-15の西側に並行している。溝跡は調査区の南北に延びて

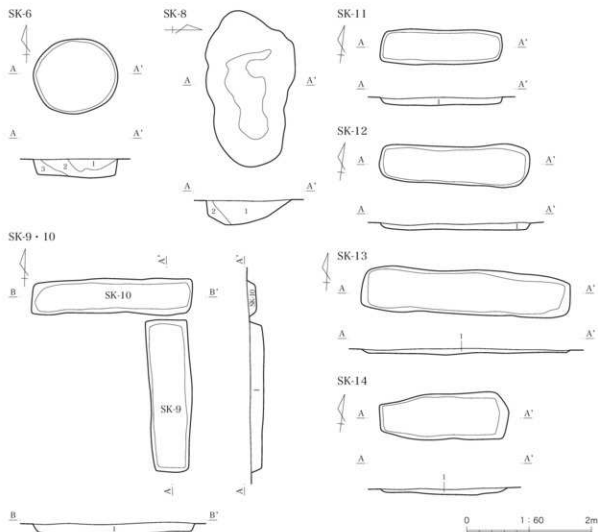
SD-15・16・17・20実測図(2)

おり、北は砂田灌漑跡2区のSD-59として続いている。南側は調査区外へと続いている。地区内における残存長は19.45mである。本遺構からの出土遺物はない。本遺構の北側と南側の一部に、SD-15・16と同様に調査時に確認された木杭の痕跡が確認できる。木杭の痕跡が遺っていることから、これらの溝跡は比較的新しい時期であろう。位置 115・116-19グリッドに位置する。確認面標高は85.700m～85.620mである。

断面形・規模 確認面での幅は0.37m～1.08mである。確認面から底面までの掘り込みは0.14～0.26m(底面標高85.560～85.360m)である。断面形では、底面は丸味を帯びている舟底状である。壁は底面から直線的にやや外傾して立ち上がる。覆土はAラインの第1～4層、B・Cラインの第1～4層が対応する。堆積状況から自然堆積である。

SD-20 (第199・200図)

概要 調査区の西部に位置する溝跡である。SD-17の西側に並行している。溝跡は調査区の南北に延びているが、北側の砂田灌漑跡2区では痕跡を確認できなかった。南側へは北側調査区壁から南へ2mで途切れている。本遺構からの出土遺物はない。位置 116-20グリッドに位置する。確認面標高は86.700mである。**断面形・規模** 確認面での幅は0.32m～0.44mである。確認面から底面までの掘り込みは0.06m(底面標高86.640m)である。断面形では底面は丸底状である。壁は底面から直線的に外傾して立ち上がる。



SK-6
第1層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。しまりあり。粘性ややあり。)
第2層 黒色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック少量混入。しまりややなし。粘性ややあり。)
第3層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまりややあり。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-8
第1層 黒褐色土 (市街石粒やや多量。ローム粒・小礫少量混入。しまりあり。粘性ややあり。)
第2層 暗褐色土 (ロームブロック少量混入。しまりあり。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-9・10
第1層 暗褐色土 (ロームブロックやや多量混入。しまりなし。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-11
第1層 暗褐色土 (ロームブロックやや多量混入。しまりなし。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-12
第1層 暗褐色土 (ロームブロックやや多量混入。しまりなし。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-13
第1層 黒褐色土 (ローム大ブロック少量。ローム小ブロック少量混入。しまりなし。粘性ややあり。)
L=86.6m

SK-14
第1層 黒色土 (炭化物やや多量。ローム粒・焼土粒少量混入。しまりややなし。粘性ややあり。)
L=86.6m

第201図 砂田瀬遺跡1区 SK-6・8・9・10・11・12・13・14実測図

2. 土坑

土坑は総計8基確認されている。遺物の出土がないため時期を決定付けるに至らない。各土坑の記述は避け計測値等を一覧表(第61表)に、遺構実測図を第201図にまとめる。

第61表 砂田瀬遺跡1区 土坑一覧表

遺構番号	グリッド	重複関係	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	主軸方向	(): 推定値 [] : 残存値	出土遺物等
SK-6	115-23		楕円形	1.34	1.21	0.27	N-88°	→W	
SK-8	115-23		不整楕円形	2.47	1.45	0.44	N-82°	→E	
SK-9	115-24		長方形	2.42	0.66	0.25	N-4°	→W	

SK-10	115-24	隅丸長方形	2.55	0.53	0.19	N-89°-E
SK-11	115-23	隅丸長方形	1.93	0.54	0.12	N-83°-E
SK-12	115-23	隅丸長方形	2.37	0.59	0.11	N-85°-E
SK-13	115-22	隅丸長方形	3.35	0.70	0.70	N-90°-E
SK-14	115-21	隅丸長方形	2.02	0.72	0.09	N-82°-E



第 202 図 砂田瀧遺跡2区 全体図 (S=1/1,000)

第X章 砂田瀧遺跡2区の調査

砂田瀧遺跡2区は、宇都宮市砂田町字瀧 211・212・215・217・221・225、砂田町字瀧 193・195 番地に所在している。本遺跡は田川東岸の低台地を開析する「中島谷田」に残る低地に囲まれた台地上に位置する。調査区は遺跡の西側を流れる小河川に隣接しており、砂田遺跡7区はこの小河川を隔てた西側に位置する。本調査区は遺跡の中央～北部にあたる。

発掘調査前の標高は 87.1 m で、低地との比高は 1.2 m 程である。2 区の範囲は南北 92.3 m × 東西 119.6 m。遺構の多くは調査区西側の中央部で確認されている。遺構が集中する中央部の位置は北緯 36 度 30 分 1 秒、東経 139 度 54 分 25 秒である（世界測地系）。

第1節 時期不明の遺構

砂田瀧遺跡2区の遺構は、ほとんど遺物が伴わないため具体的な時期を確定しがたい。井戸の他に、溝跡や土坑、小穴群が確認されている。

1. 井戸

SE-26 (第203図、図版四九)

概要 調査区中央の東寄りの平坦面に位置する井戸跡である。SD-34 と SD-35・52 とに囲まれた方形の範囲内に位置する。 **位置** 116～24 グリッドに位置する。確認面標高は 86.494 m～86.444 m である。 **平面形・規模** 長軸 1.29 m × 短軸 1.20 m の円形をしている。 **覆土** 堆積状況は第1層から第5層であるが、第2・4層にはロームブロックが層状になっている水成堆積である。堆積土はしまりがあり自然堆積である。

断面形・底面 確認面からの深さは約 1.26～1.33 m である。底面は地山の礫層を掘り下げており、礫が底面に露出している。壁の状況は、礫層を掘り抜いたため、底面から中位の屈曲部までは壁が内彎気味に挟られている。中位の屈曲部から確認面まで直線的に外傾して立ち上がる。 **出土遺物・時期** 出土遺物は覆土より須恵器の甕胴部の小破片が出土している。また図示し得ていないが木片も出土している。木片に加工痕は確認されなかった。

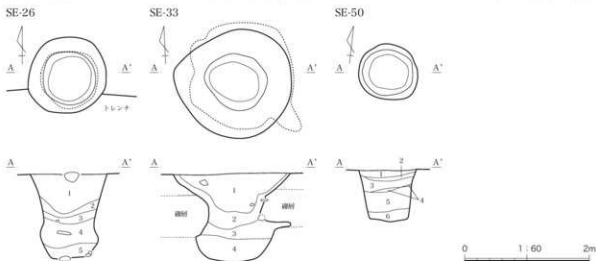
SE-33 (第203図、図版四九)

概要 調査区中央の平坦面に位置する井戸跡である。SD-34 と SD-35・52 とに囲まれた方形の範囲内に位置する。 **位置** 117～23 グリッドに位置する。確認面標高は 86.314 m～86.286 m である。 **平面形・規模** 長軸 1.87 m × 短軸 1.76 m の不整楕円形をしている。 **覆土** 堆積状況は第1層から第4層であるが、第2・4層にはロームブロックと黒色土が層状になっている水成堆積である。堆積土はしまりがあり自然堆積である。 **断面形・底面** 確認面からの深さは約 1.36～1.45 m である。底面は地山の礫層を掘り抜き砂礫層に到達している。壁の状況は、礫層を掘り抜いたため、底面から中位の屈曲部までは壁面内彎気味に挟られている。一部湧水のため深く挟れている。中位の屈曲部から確認面まで直線的に大きく外傾して立ち上がる。

出土遺物・時期 出土遺物は図示し得ていないが木片がある。木片に加工痕は全く見られなかった。

SE-50 (第203図、図版四九)

概要 調査区中央の平坦面に位置する井戸跡である。SD-52とSD-58・59とに囲まれた方形の範囲内に位置する。位置 116-21グリッドに位置する。確認面標高は86.575 m～86.547 mである。平面形・規模

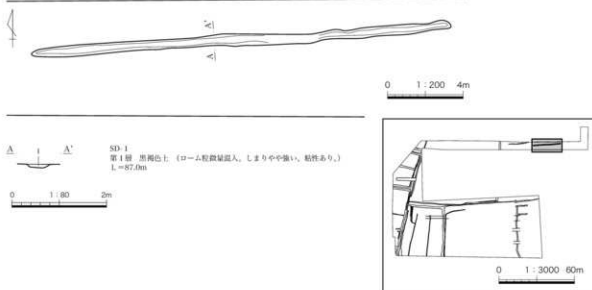


SE-26
第1層 明黒褐色土 (ローム粒・焼土粒微量。炭化物粒微量。小礫若干混入。しまりあり。粘性やや強い。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。ローム小ブロック層状に堆積。しまりあり。粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。層状に堆積。しまりあり。粘性あり。)
第5層 暗褐色土 (ローム粒微量。小礫多量混入。しまりややあり。粘性あり。)
L=86.6m

SE-33
第1層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒・小礫微量。焼土粒微量混入。しまりあり。粘性あり。)
第2層 暗褐色土 (ローム粒少量。小礫微量混入。ローム小ブロック・黒色土が層状に堆積。しまりあり。粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量混入。層状に堆積。しまりややあり。粘性あり。)
L=86.4m

SE-50
第1層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第2層 明黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第3層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第5層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまりややあり。粘性あり。)
第6層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量混入。しまりややあり。粘性あり。)
L=86.5m

第203図 砂田灌遺跡2区 SE-26・33・50実測図



第204図 砂田灌遺跡2区 SD-1実測図

長軸0.96 m×短軸0.91 mの円形をしている。覆土 堆積状況は第1層から第6層である。第6層は水分を含んでおりベタつく。各層ともしまりがあり自然堆積である。断面形・底面 確認面からの深さは約0.77～0.83 mである。底面はやや凹凸がある。壁の状況は、底面から確認面まで直線的に外傾して立ち上がる。出土遺物・時期 出土遺物は全く見られない。

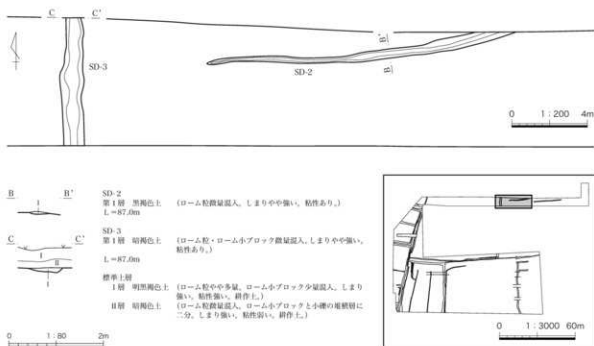
2. 溝跡状遺構

溝跡はSD-1・2・3・5・34・35・36・51・52・54・55・56・57・58・59・60・61・65・66・68・69・70・71・73・74・75の26条がある。遺物の出土が僅かであるため、時期を決定付けるに至らない。SD-1 (第204図、図版五四)

概要 調査区の北部に位置する溝跡である。調査区内において東北東-西南西方向に延びている。地区内における残存長は22.4 mである。本遺構からの出土遺物はない。位置 120-25・26グリッドに位置する。確認面標高は86.802 m～86.728 mである。断面形・規模 確認面での幅は0.39 m～0.62 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.04～0.12 m (底面標高86.763～86.686 m)である。断面形は底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる逆台形をしている。覆土はAライン第1層の単層のみである。底面は北東北方向に低く傾斜している。

SD-2 (第205図、図版五四)

概要 調査区の北部のSD-1の西側に位置する溝跡である。調査区内において東北東-西南西方向に延びている。北東北は調査区外へと続いている。地区内における残存長は15 mである。本遺構からの出土遺物はない。位置 120-24・25グリッドに位置する。確認面標高は86.726 m～86.636 mである。断面形・規模 確認面での幅は0.12 m～0.50 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.03～0.24 m (底面標高86.665～86.486 m)である。断面形は底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる逆台形をしている。覆土はBライン第1層の単層のみである。底面は西南西方向に低く傾斜している。

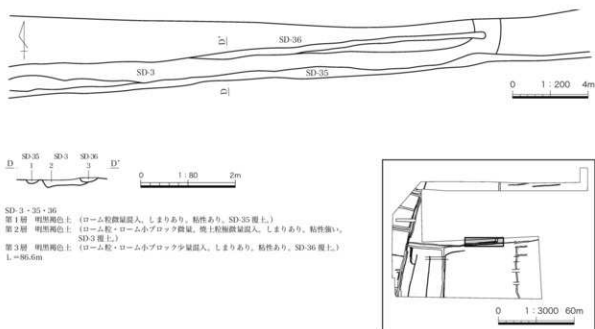


第205図 砂田瀧遺跡2区 SD-2・3実測図

SD-3 (第205・206・208・209・211図、図版五四)

概要 調査区の北部のSD-2の西側と、調査区の中央部に位置する溝跡である。調査区内において南北方向に延びており、SD-35と重複する地点で西方向にクランクし、SD-58と接するまで西方向に延びている。北側は調査区外へと続いている。北側の調査区と南側の調査区と跨いでいるが、調査区間は後述する砂田瀧遺跡3区のB区SD-3が通っている。地区内における残存長は調査区北からSD-38と重複する地点までが48m、西側へクランクしてからSD-58に接するまでの長さが71.4mである。本遺構からの出土遺物はない。位置 120-24、118-20・21・22・23・24グリッドに位置する。確認面標高は86.633m～85.910mである。

断面形・規模 確認面での幅は0.34m～1.24mである。確認面から底面までの掘り込みは0.05～0.16m(底面標高86.400～85.900m)である。断面形は底面には凹凸があり、壁は直線的に外傾して立ち上がる逆台形をしている。覆土はD・Eラインで観察でき、Dラインが第2層、Eラインの第3層が堆積土になる。底面は西方向に低く傾斜している。



第206図 砂田瀧遺跡2区 SD-3・35・36実測図

SD-35 (第206・208・209・216図、第62表、図版五四・五五)

概要 調査区の東部から西方向へ延びる溝跡である。調査区内のSD-52がクランクしている北東角に接している。SD-3・52と重複し、SD-3よりは新しくSD-52より古い溝跡になる。地区内における残存長は調査区北からSD-52と重複するまでが78mである。位置 117-21、118-21・22・23・24・25グリッドに位置する。確認面標高は86.640m～86.280mである。
断面形・規模 確認面での幅は0.18m～0.72mである。



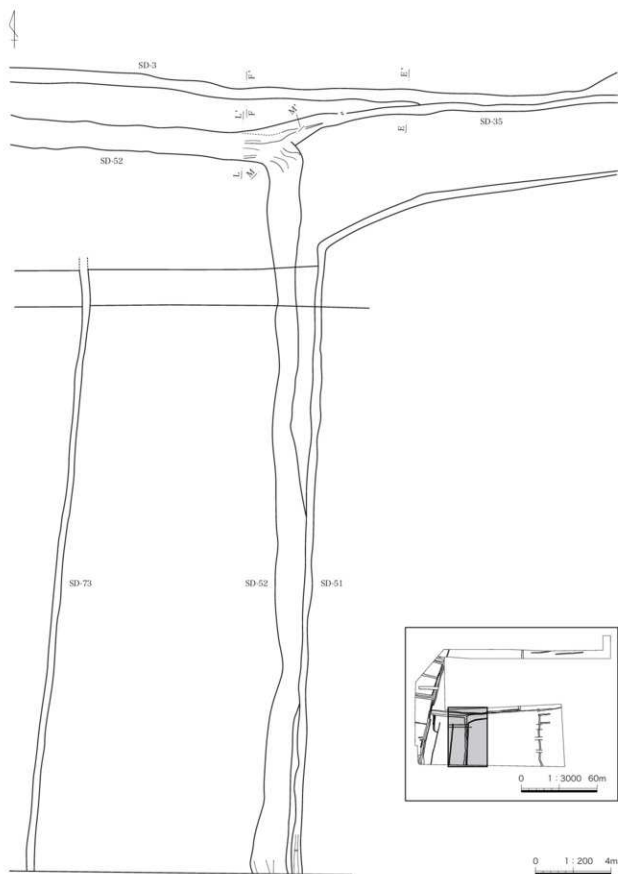
第207図 砂田瀧遺跡2区

SD-35出土遺物

第62表 砂田瀧遺跡2区 SD-35出土遺物

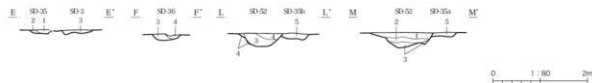
() : 推定値 [] : 残存値

番号 種類 部材	大きさ (cm・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
I 細器 碗	口径4.9 高4.9 高台径2.7	胎付は体部外面に見られる。胎柄は龍か。胎の部分が青系。胴体の部分が黒色の鉄胎で覆かれている。また口縁部～高台部外面、高台部裏面には黄釉が均質に塗られている。胎調、大正期の染付調、蓋が窯製品か。	(胎) 淡黄色 (素地) 灰白色 胎成・硬質	覆土 口縁部～体部1/2、高台部一部残存 C・C付送



第208図 砂田瀧遺跡2区 SD-3・35・36・51・52・75実測図

第X章 砂田瀧遺跡2区の調査



SD-3・35・36 E・Fライン

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-35 覆土。)
- 第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-35 覆土。)
- 第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりあり、粘性強い、SD-36・SD-3 覆土。)
- 第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-36 覆土。)

L=86.4m

SD-35a・35b・52 M・Lライン

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒状物、炭化物粒少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。炭化物粒少量混入。砂が混じる。しまり強い、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第3層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。ローム小ブロック少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第4層 黒褐色土 (ローム粒少量混入。しまり強い、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第5層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。炭化物粒少量混入。しまりあり、粘性あり、SD-35 覆土。)

L=86.4m

第209図 砂田瀧遺跡2区 SD-3・35・36・51・52 実測図

確認面から底面までの掘り込みは0.70～0.95m(底面標高86.040～86.280m)である。断面形は底面はやや丸味を帯びており、壁は直線的に外傾して立ち上がる丸底形をしている。覆土はD・E・M・Lラインで観察できる。MラインでSD-35とSD-52の重複が確認できる。底面は西方向に低く傾斜している。出土遺物は磁器の碗の口縁部から底部の1/2欠損である。1900年代大正年間に生産された瀬戸系の碗が。

SD-36 (第206・208・209図)

概要 調査区中央において東西方向に延びている溝跡である。SD-3が西側にクランクしている南東角と重複している。SD-3よりは新しい溝跡になる。地区内における残存長は15.8mである。位置 118-22・23-24グリッドに位置する。確認面標高は86.600m～86.342mである。断面形・規模 確認面での幅は0.20m～0.36mである。確認面から底面までの掘り込みは0.06～0.08m(底面標高86.320～86.300m)である。断面形は底面はやや丸味を帯びており、壁は直線的に外傾して立ち上がる丸底形をしている。覆土はDラインで観察でき、第3層が堆積土である。底面は西南西方向に低く傾斜している。

SD-51 (第209図)

概要 調査区中央、SD-52の東側に位置する溝跡である。調査区南壁から北方向に延び、北東北方向にクランクしている。SD-52と重複し本道構が新しい。地区内における残存長は南壁から屈曲部までが33.4mで、屈曲部から北東北方向に延びる端部まで16.4mである。本道構はプランのみの確認である。本道構は南壁外へと続いているが、1区のSD-3のセクションで暗渠としたものと同一であると考えられる。位置 116-21、117-21・22グリッドに位置する。確認面標高は86.206m～85.944mである。断面形・規模 確認面での幅は0.20m～0.51mである。確認面から底面までの掘り込みは0.50～0.78m(底面標高85.500～86.100m)である。底面は北東北方向に傾斜している。

SD-52 (第209・211～212図、第63表、図版五四・五五・六七)

概要 調査区中央、SD-51の東に隣接する溝跡である。南壁から北方向に延び、SD-35と重複する屈曲部から西側へ延びる。西端部ではSD-58・59と重複するが本道構が新しい。本道構は南壁外へ延びており、1区のSD-3へと続く。地区内における残存長は南壁から屈曲部までが39.5mで、屈曲部から西端部までが30.8mである。位置 117・118・119-21、117・118-20グリッドに位置する。確認面標高は86.172m～85.748mである。断面形・規模 確認面での幅は0.88m～1.80mである。確認面から底面までの掘り



第210図 砂田瀬遺跡2区 SD-52出土遺物

第63表 砂田瀬遺跡2区 SD-52 出土遺物

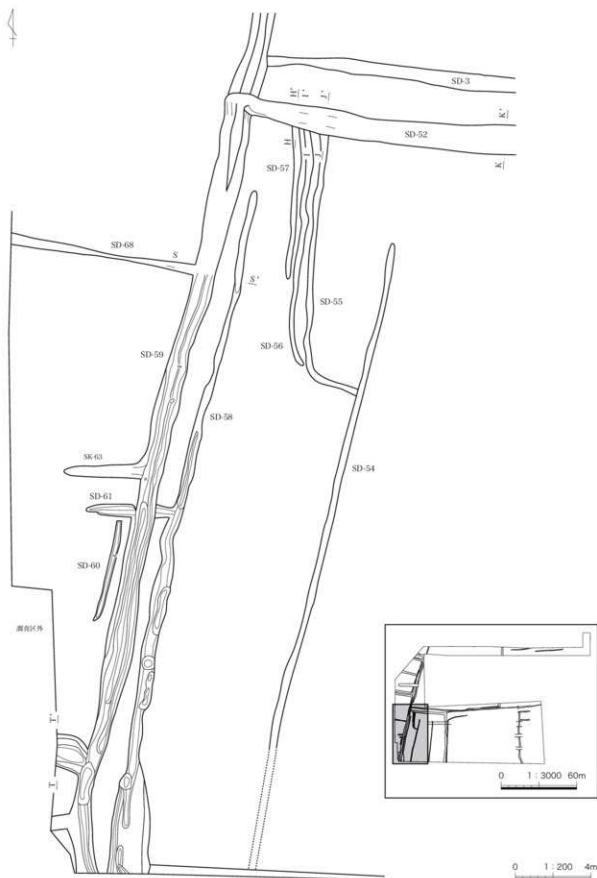
(): 推定値 [] : 残存値

番号 種類 器種	大きさ (m・g)	特徴	色調 胎土・焼成 (または素材)	出土状態 残存状態 注記
1 磁器 碗	口6.3 高4.2 高台径2.7	胎付は体部外面に見られ胎輪は胎輪か。草葉部は 濃緑。胎輪の花の部分には円形状の胎付を施し、 クロム青磁軸をかけ素地のままだまを生かして いる。口縁部～高台部外面にかけて明緑灰色調 のクロム青磁軸が均質に施されている胎調。大正 期の胎付調。瀬戸窯製品か。	(胎) 明緑灰色 (素地) 灰白色 胎土・焼成 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 ほぼ完形 No.1
2 磁器 碗	高3.6 高台径2.7	胎付は体部外面に僅かにみられる。体部～高台部 外面にかけて明オリーブ灰色調のクロム青磁軸が 均質に施されている胎調。大正期の胎付調、瀬戸 窯製品か。	(胎) 明オリーブ灰色 (素地) 灰白色 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 体部～高台部1/3残存、口縁部欠 損 B-F付近
3 磁器 碗	口12.0 高12.1	胎付は体部内外面にみられる。口縁部外面草花 文、内面は幾何学文。印取手(型紙型)。器面 の胎輪は均質に施される胎調。瀬戸窯製品か。	(胎付) 鮮藍色 (素地) 灰白色 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 口縁部～体部一部残存 B-F付近
4 磁器 碗	高12.0	胎付は体部内外面にみられる。口縁部外面草花 文、内面は幾何学文。印取手(型紙型)。器面 の胎輪は均質に施される胎調。瀬戸窯製品か。	(胎付) 鮮藍色 (素地) 灰白色 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 口縁部～体部一部残存 B-F付近
5 磁器 碗	高11.6	外面は印取手による幾何学文を施す。器面の胎輪は 均質に施される胎調。肥前窯の製品か。	灰白色 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 体部一部残存 B-F付近
6 磁器 碗	高12.5	外面は印取手による浅緑。胴部下下に2条の横方 向の紋線。内面は無文。器面の胎輪は外面に均質 に、内面に厚く施される胎調。産地不明。	(外) に近い黄褐色 (素地) オリーブ調 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 体部一部残存 B-F付近
7 磁器 碗	高12.7	胎付は体部外面にみられる。口縁部外面草花文 か、内面は無文。器面の胎輪は均質に施される胎 調。産地不明。	(胎付) 藍色・オリーブ調 (素地) 灰白 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 口縁部～体部一部残存 B-F付近
8 常滑陶器 甕	高17.6	胴部外面へラケズリ、内面ナデか、外面の胎輪は薄 い胎調。内面は横方向に施した胎調が見られる。 灰白色の登色。常滑窯製品。	(胎) 灰白色 (素地) に近い赤褐色 胎土・焼成 胎土・焼成	覆土 胴下部か B-F付近
9 瓦	高11.8	上面に木口工具によるナデ(ハケメ状)。残部には 面取り痕。還元焼成によるいぼし	灰土 白色小礫微積 焼成：良好	残部一部残存 No.2

込みは0.23～0.33m(底面標高85.460～85.360m)である。断面形は底面はやや丸味を帯びているが、平坦な箇所もある。壁は直線的に外傾して立ち上がる丸底形ないし舟底状をしている。覆土はM・L・K・Hラインで観察できる。底面は南一西方向へ傾斜している。出土遺物・時期 取り上げ遺物には碗の完形品(No.1)がある。この碗はクロム青磁で大正年間に生産されたものである。瀬戸系か。No.9は瓦片である。棧瓦が推定できる。この他に磁器の鉢の胴部2点や碗の口縁部片3点、体部片2点が出土している。

SD-75(第208図)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。調査区南壁から北一南軸方向に延びている。南に隣接する1区には続かない。北側はトレンチで確認されているがトレンチ北側は未確認である。調査区内における残存長は32.1mである。本遺構からの出土遺物は見られない。位置 116・117-21グリッドに位置す



る。確認面標高は 85.907 m～85.796 mである。断面形・規模 確認面での幅は 0.26 m～0.46 mである。遺構プランのみの確認であるため、深さ及び堆積土については不明である。

SD-54 (第211・212図)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。本遺構の西縁でSD-55と接している。調査時の所見では本遺構の方が古い。位置 116・117-20グリッドに位置する。確認面標高は 85.834 m～85.706 mである。

断面形・規模 確認面での幅は 0.22 m～0.46 mである。遺構プランのみの確認であるため、深さ及び堆積土については不明である。

SD-55 (第211・212図、図版五四)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。南側はSD-54の西縁に、北側はSD-52の南縁に接している。これらよりも古い溝跡になる。位置 117・118-20グリッドに位置する。確認面標高は 85.950 m～85.824 mである。断面形・規模 確認面での幅は 0.18 m～0.45 mである。確認面から底面までの掘り込みは 0.05～0.08 m (底面標高 85.820～85.840 m) である。断面形はSD-52との重複部分のみ調査しているため不明。覆土はJラインの第7・8層が堆積土になる。底面は南東方向へ傾斜している。

SD-56 (第211・212図、図版五四)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。SD-55の西側に並び、北側はSD-52の南縁に接している。SD-52よりは古い溝跡になる。位置 117・118-20グリッドに位置する。確認面標高は 85.932 m～85.736 mである。断面形・規模 確認面での幅は 0.19 m～0.40 mである。確認面から底面までの掘り込みは 0.07～0.10 m (底面標高 85.780～85.800 m) である。断面形はSD-52との重複部分のみ調査しているため不明。覆土はIラインの第6層が堆積土になる。底面は南方向へ傾斜している。

SD-57 (第211・212図、図版五四・五五)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。SD-56の西側に並び、北側はSD-52の南縁に接している。SD-52よりは古い溝跡になる。位置 117・118-20グリッドに位置する。確認面標高は 85.904 m～85.765 mである。断面形・規模 確認面での幅は 0.21 m～0.29 mである。確認面から底面までの掘り込みは 0.04 m (底面標高 85.800～85.810 m) である。断面形はSD-52との重複部分のみ調査しているため不明。覆土はHラインの第10層が堆積土になる。底面は南方向へ傾斜している。



SD-35・52・55～57 H-Kライン

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・白色粒砂質、炭化物微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、炭化物微量混入、砂が混ざる、しまり強い、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第3層 黒褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第4層 明黒褐色土 (ローム粒少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-52 覆土。)
- 第5層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、炭化物微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-35 覆土。)
- 第6層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性強い、SD-56 覆土。)
- 第7層 明黒褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-55 覆土。)
- 第8層 黄褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック少量混入、SD-55 覆土。)
- 第9層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性強い。)
- 第10層 明黒褐色土 (ローム粒微量、ローム小ブロック少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-57 覆土。)

第212図 砂田灌漑跡2区 SD-35・52・55～57 実測図

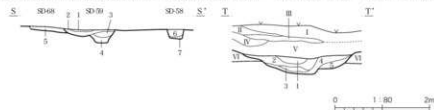
SD-58 (第211・213図、図版五五・五六)

概要 調査区の南ブロックに所在する溝跡である。SD-59の東側に並び、調査区内において南北方向に延びている。北側はSD-52の手前で端部が確認されており、調査区内で立ち上がる。重複する遺構は東西方向に延びるSK-61で、本遺構の方が古い。調査区内における残存長は37.4mである。本遺構からの出土遺物は一括遺物として環の体部片2点、鏝の体部片1点が出土している。位置 116・117-20グリッドに位置する。確認面標高は85.795m～85.632mである。断面形・規模 確認面での幅は0.18m～0.22mである。確認面から底面までの掘り込みは0.18～0.20m(底面標高85.500～85.540m)である。断面形は逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はSラインの第6・7層が堆積土になる。底面は南方へ傾斜している。

SD-59 (第211・213～215図、図版五五・五六)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区の北西隅から東へ延びており、さらに南へ向けて屈曲している。屈曲した溝跡は北東-南西方向に延びており、南に隣接する砂田瀧1区のSD-17へと続いている。本遺構は118-20グリッドで二股に分かれている。分かれた溝跡は119-20グリッドで西側に屈曲している。重複する遺構は、SD-3・52・61・65・66・68・69・70・74とSK-63で、SD-65・70・74、SK-63よりは古く、SD-66・68・69よりは新しい。SD-3・52と接するが新旧関係は不明である。調査区内における残存長は調査区西壁から南に屈曲するまでが7.7mで、屈曲部から南壁までが84.7mである。本遺構からの出土遺物はほとんど見られない。位置 116・118-19、116・117・118・119・120-20、120-21グリッドに位置する。確認面標高は86.015m～85.632mである。断面形・規模 確認面での幅は0.76m～1.55mである。

確認面から底面までの掘り込みは0.12～0.51m(底面標高85.600～85.434m)である。断面形は概ね逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はセクションN・O・Q・R・Tラインが堆積土になる。堆積状況からO・Q・Sラインで掘り返しの痕跡が確認できる。Sラインでは第3・4層の逆台形状の掘方を第1・2層の丸底状の掘方が掘り返している。底面は北から南方へ傾斜している。



SD-58・59・68 Sライン

- 第1層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。やや砂質。しまり強い。粘性強い。SD-59 覆土上)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量。焼土粒微量混入。しまり強い。粘性強い。SD-59 覆土上)
 第3層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。しまり強い。粘性強い。SD-59 覆土上)
 第4層 暗褐色土 (ローム粒少量混入。ローム小ブロックと黒色土が層状に堆積する。しまりあり。粘性強い。SD-59 覆土上)
 第5層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量。白色粒微量混入。しまり強い。粘性あり。SD-68 覆土上)
 第6層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量。赤色粒微量混入。しまりあり。粘性強い。SD-58 覆土上)
 第7層 明黒褐色土 (ローム粒微量。ローム小ブロックやや多量混入。しまりあり。粘性強い。SD-58 覆土上)
 L=86.0m

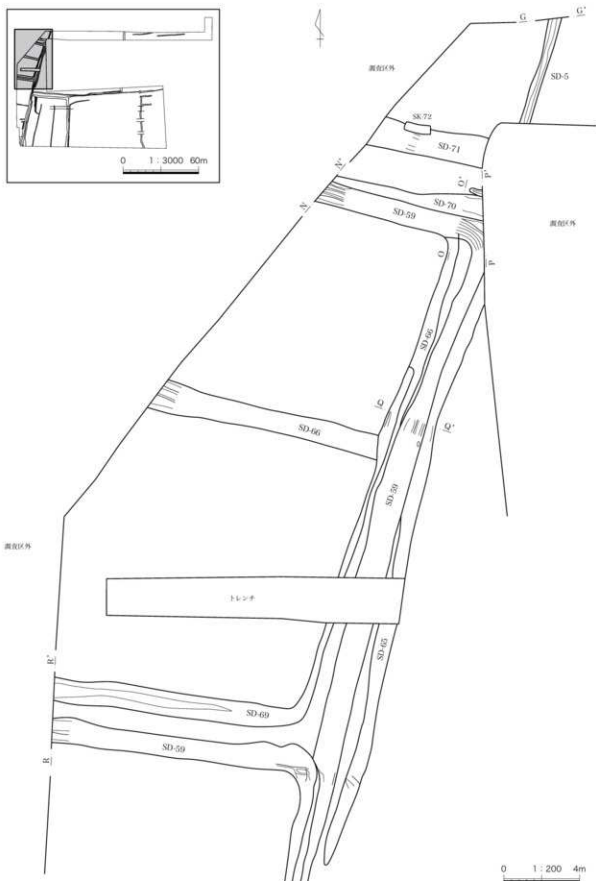
SD-59 Tライン

- 第1層 明黒褐色土 (ローム粒微量。砂粒少量混入。しまり強い。粘性あり。SD-59 覆土上)
 第2層 暗褐色土 (ローム粒・粘土粒・砂粒微量混入。しまり強い。粘性あり。SD-59 覆土上)
 第3層 明黒褐色土 (ローム粒微量。粘土粒・砂粒少量混入。しまりあり。粘性あり。SD-59 覆土上)
 第4層 暗褐色土 (ローム粒微量。黄褐色粘土粒少量混入。しまり強い。粘性強い。SD-59 覆土上)
 第5層 暗褐色土 (ローム粒・砂粒微量混入。しまり強い。粘性あり。SD-59 覆土上)
 L=86.6m

標準土層

- 1層 明黒褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまり強い。粘性強い。耕作土)
 2層 暗褐色土 (ローム粒微量混入。ローム小ブロックと小礫の堆積層に二分。しまり強い。粘性強い。耕作土)
 3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量。白色粒微量混入。しまり強い。粘性あり)
 4層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。赤色粒・白色粒微量混入。しまり強い。粘性あり)
 5層 明黒褐色土 (ローム粒微量。ローム小ブロック・白色粒・赤色粒微量混入。しまり強い。粘性あり)
 6層 暗褐色土 (ローム粒・砂粒微量混入。しまり強い。粘性あり。溝縁部)

第213図 砂田瀧遺跡2区 SD-58・59・68実測図



第214図 砂田瀬遺跡2区 SD-5・59・65・66・69・70・71 実測図

SD-60 (第211 図)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。北東-南西軸に延びており、SD-59の西側に沿うように配されている。調査区内における残存長は5.6mである。本遺構からの出土遺物は裏の底部片が1点出土している。 **位置** 116-20グリッドに位置する。確認面標高は85.788m～85.725mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.24m～0.30mである。確認面から底面までの掘り込みは0.06～0.11m（底面標高85.682～85.674m）である。断面形は逆台形をしている。底面がほぼ平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。底面は北東から南西方向へ傾斜しているようである。

SD-61 (第211 図)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。東-西軸に延びており、SD-58・59に直交するように配されている。調査区内における残存長は5.2mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 117-20グリッドに位置する。確認面標高は85.784m～85.676mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.20m～0.68mである。確認面から底面までの掘り込みは0.01～0.22m（底面標高85.668～85.567m）である。断面形は逆台形をしている。底面にはやや凹凸があるがほぼ平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。

SD-68 (第211・213 図、図版五六)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁から東へ延びており、東端部はSD-59の西縁に接している。重複する遺構は、SD-59で、本遺構の方が古い。調査区内における残存長は調査区西壁からSD-59まで10mである。本遺構からの出土遺物はほとんど見られない。 **位置** 117-19・20グリッドに位置する。確認面標高は85.836m～85.798mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.15m～0.57mである。確認面から底面までの掘り込みは0.06～1.00m（底面標高85.720～85.640m）である。断面形はSD-59との重複部分のみ調査しているため不明。覆土はセクションSラインが堆積土になる。底面は西から東方向へ傾斜している。

SD-5 (第214・215 図、図版五五)

概要 調査区西ブロックの北西隅に所在する溝跡である。北東-南西方向へ延びている。溝跡の南北端部は調査区外に続く。南側は再度、調査区にSD-65として連続するものと推定される。調査区内における残存長は5.8mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 120-21グリッドに位置する。確認面標高は86.154m～85.987mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.38m～0.66mである。確認面から底面までの掘り込みは0.10～0.17m（底面標高86.034～85.987m）である。断面形は舟底状をしている。底面はやや丸味を帯び、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾しており、屈曲部を経て大きく外傾している。覆土はGラインの第1・2層が堆積土になる。第1層は掘り返しになる。底面はほぼ平坦であるが、若干北東方向に傾斜している。

SD-65 (第214・215 図、図版五五)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区内に北東-南西軸に延びており、SD-59と重複している。本遺構は調査区の北西隅で確認されたSD-5と同一の遺構と考えられる。重複するSD-59よりも新しい溝跡である。調査区内における残存長は32.6mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 118・119-20グリッドに位置する。確認面標高は86.098m～85.930mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.25m～0.96mである。確認面から底面までの掘り込みは0.08～0.13m（底面標高85.900～

85.860 m)である。断面形は舟底状をしている。底面がやや丸味を帯び、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はQラインの第5層が堆積土になる。底面は北東から南西方向へ傾斜している。

SD-66 (第214・215図、図版五五)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁から東へ延びており、SD-69・59と重複する部分で、北に屈曲している。溝跡の北端はSD-59の南縁に接している。重複するSD-69・59よりも古い溝跡である。調査区内における残存長は西壁から屈曲部までが12.6 mで、屈曲部からSD-59と接するまでが12.7 mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 119-20グリッドに位置する。確認面標高は86.011 m～85.850 mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.56 m～1.77 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.26～0.28 m (底面標高85.720～85.700 m)である。断面形は逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はOラインの第7・8層が堆積土になる。底面は西方向へ傾斜している。

SD-69 (第214・215図、図版五五・五六)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁から東へ延びており、SD-59に沿うように北に屈曲して延びている。SD-66と重複しており、北端部はSD-66の覆土中で立ち上がる。重複するSD-66よりも新しい溝跡である。調査区内における残存長は西壁から屈曲部までが15.5 mで、屈曲部から北側端部までが19.8 mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 119-20グリッドに位置する。確認面標高は86.000 m～85.901 mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.15 m～1.33 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.50～0.55 m (底面標高85.640～85.600 m)である。断面形は逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はQ・Rラインで観察でき、Rラインでは第6～8層が堆積土になる。底面は屈曲部が最も深くなるが、西方向へ傾斜しているようである。

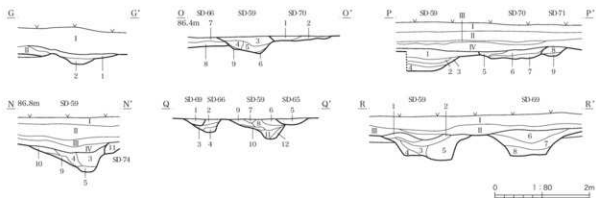
SD-70 (第214・215図、図版五五)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁から東へ延びている。SD-59と重複しており、本遺構の方が新しい。調査区内における残存長は西壁から7.8 mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 120-20・21グリッドに位置する。確認面標高は86.004 m～85.905 mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は1.28 m～1.76 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.05～0.11 m (底面標高85.960～85.900 m)である。断面形は逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はO・Pラインで観察でき、Oラインでは第1・2層が、Pラインでは第5～7層が堆積土になる。底面は西方向へ傾斜しているようである。

SD-71 (第214・215図、図版五五・五六)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁から東へ延びている。SD-59と重複しており、本遺構の方が新しい。調査区内における残存長は西壁から7.8 mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 120-20・21グリッドに位置する。確認面標高は86.004 m～85.905 mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は1.28 m～1.76 mである。確認面から底面までの掘り込みは0.05～0.11 m (底面標高85.960～85.900 m)である。断面形は逆台形をしている。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はPラインで観察でき、第8・9層が堆積土になる。底面は西方向へ傾斜している。

第X章 砂田灌漑跡2区の調査



SD-5・Gライン
第1層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり)
第2層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり)
L=87.0m

SD-59・66・70・N・Oライン
第1層 黒褐色土 (ローム粒微量混入、砂粒少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-70 覆土)
第2層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・小礫微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-70 覆土)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、砂粒少量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第4層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第5層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりややあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第6層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第7層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性強い、SD-66 覆土)
第8層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりあり、粘性強い、SD-66 覆土)
第9層 黒褐色土 (ローム粒微量混入、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第10層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、砂粒混入、しまり強い、粘性あり、SD-69 覆土)
第11層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-74 覆土)

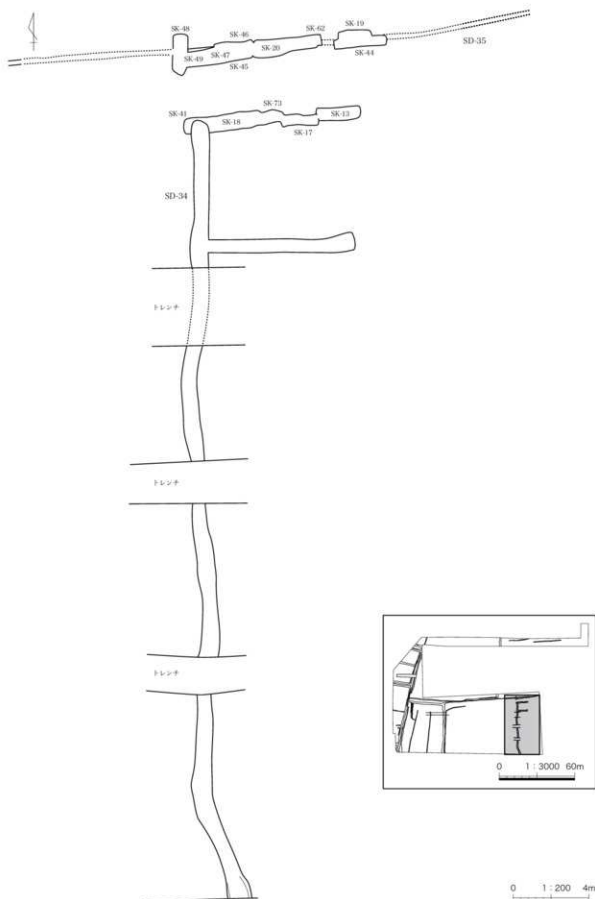
SD-59・70・71・Pライン
第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、砂粒少量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第2層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、ローム小ブロック微量混入、砂粒少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第3層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりややあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第4層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック・砂粒微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-70 覆土)
第6層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、ローム小ブロック少量、白色粒無微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-70 覆土)
第7層 暗褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・小礫微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-70 覆土)
第8層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、白色粒・堆土粒微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-71 覆土)
第9層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、白色粒・堆土粒微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-71 覆土)
L=86.8m

SD-59・65・66・69・Qライン
第1層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入、しまりあり、粘性あり、SD-69 覆土)
第2層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-66 覆土)
第3層 明黒褐色土 (ローム粒少量混入、腐状に堆積、しまりあり、粘性あり、SD-66 覆土)
第4層 明黒褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入、しまりややあり、粘性あり、SD-66 覆土)
第5層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、SD-65 覆土)
第6層 黒褐色土 (ローム粒微量混入、しまりあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第7層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、砂粒やや多量混入、しまりあり、粘性あり、SD-59 覆土)
第8層 黒褐色土 (ローム粒・砂粒少量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第9層 明黒褐色土 (ローム粒・砂粒少量、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性あり、SD-59 覆土)
第10層 明黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第11層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、しまりややあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第12層 暗褐色土 (ローム粒やや多量混入、ローム小ブロック腐状に堆積、しまりややあり、粘性強い、SD-59 覆土)
L=86.2m

SD-59・69・Rライン
第1層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、白色粒無微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第2層 黒褐色土 (ローム粒微量混入、しまりややあり、粘性強い、SD-59 覆土)
第3層 明黒褐色土 (ローム粒微量混入、砂粒やや多量混入、腐状に堆積、しまりあり、粘性あり、SD-59 覆土)
第4層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、しまり強い、粘性あり、SD-59 覆土)
第5層 黒褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック・砂粒微量混入、SD-59 覆土)
第6層 明黒褐色土 (ローム粒・白色粒微量混入、黄褐色・細河川色粘土ブロックやや多量、白色粒・堆土粒微量混入、しまり強い、粘性強い、SD-69 覆土)
第7層 黒褐色土 (ローム粒少量、ローム小ブロック微量混入、しまりあり、粘性強い、SD-69 覆土)
第8層 明黒褐色土 (ローム粒・黄褐色・細河川色粘土ブロックやや多量、砂粒少量混入、しまり強い、粘性強い、SD-69 覆土)
L=86.6

標準上層
I層 明黒褐色土 (ローム粒やや多量、ローム小ブロック少量混入、しまり強い、粘性強い、腐状に堆積)
II層 暗褐色土 (ローム粒微量混入、ローム小ブロックと小礫の堆積層に二分、しまり強い、粘性強い、腐状に堆積)
III層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入、白色粒無微量混入、しまり強い、粘性あり)
IV層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量、赤色粒・白色粒微量混入、しまり強い、粘性あり)

第215図 砂田灌漑跡2区 SD-5・59・65・66・69・70・71・74実測図



第216図 砂田瀬遺跡2区 SD-34・35実測図

SD-74 (第215図)

概要 調査区の西ブロックに所在する溝跡である。調査区西壁のNラインでのみ確認された溝跡である。SD-59と重複しており、本遺構の方が古い。 **位置** 120-20グリッドに位置する。確認面標高は86.104mである。 **断面形・規模** 確認面から底面までの掘り込みは0.23m(底面標高85.840m)である。断面形は逆台形である。底面が平坦で、壁の立ち上がりは底面から直線的に外傾している。覆土はNラインで観察でき、第11層が堆積土になる。

SD-34 (第216図)

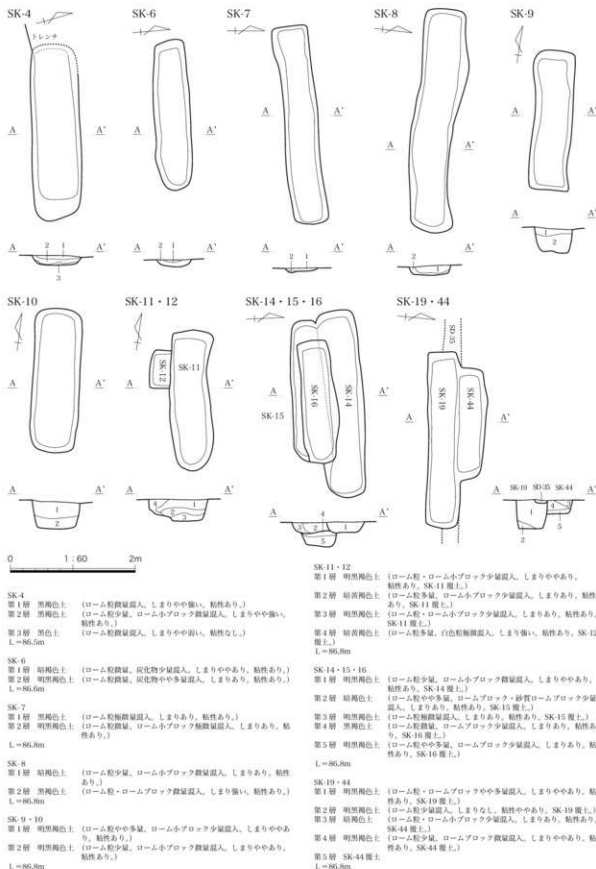
概要 調査区の南ブロックの東寄りに所在する溝跡である。調査区南壁から北へ延びている。北端部はSK-41と重複しているが、本遺構の方が新しい。また、北端部より約7mの地点では、分かれて東側に延びる同一の溝が確認されている。調査区内における残存長は南壁から北端部までが41.5mで、東へ分かれる溝は東端部まで7.4mである。本遺構からの出土遺物は見られない。 **位置** 116・117・118-24、116-25グリッドに位置する。確認面標高は86.605m～86.457mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.64m～1.26mである。確認面から底面までの掘り込みは0.03～0.20m(底面標高86.429～86.404m)である。断面形と掘方はSK-41との重複部分のみ調査しているため不明。覆土はSK-41セクションで確認できる。

3. 土坑

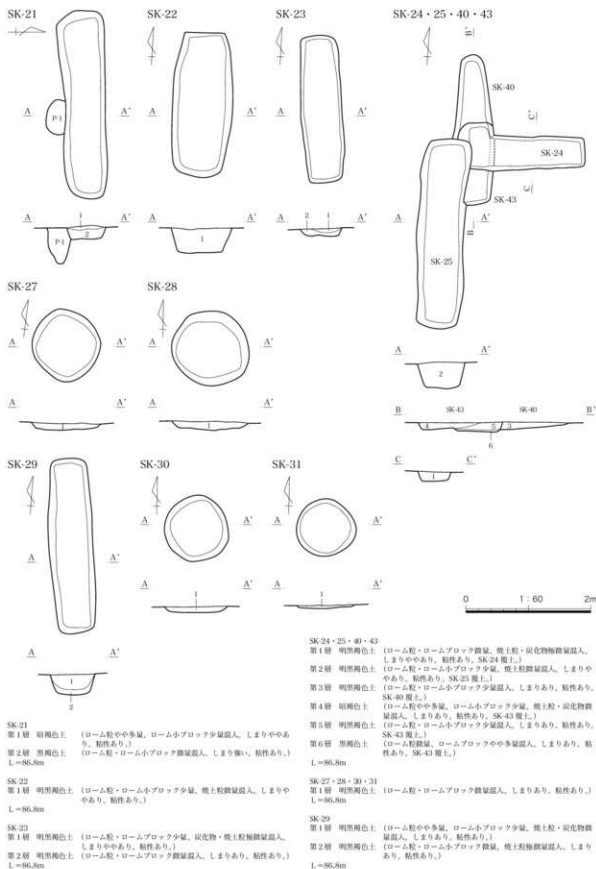
土坑は総計46基確認されている。実測図は第217～220図に掲載した。遺物の出土がないため時期を決定付けるに至らない。各土坑の記述は避け計測値等を一覧表(第64表)にまとめる。写真図版は図版四八～図版五三に掲載する。

第64表 砂田瀧遺跡2区 土坑一覧表

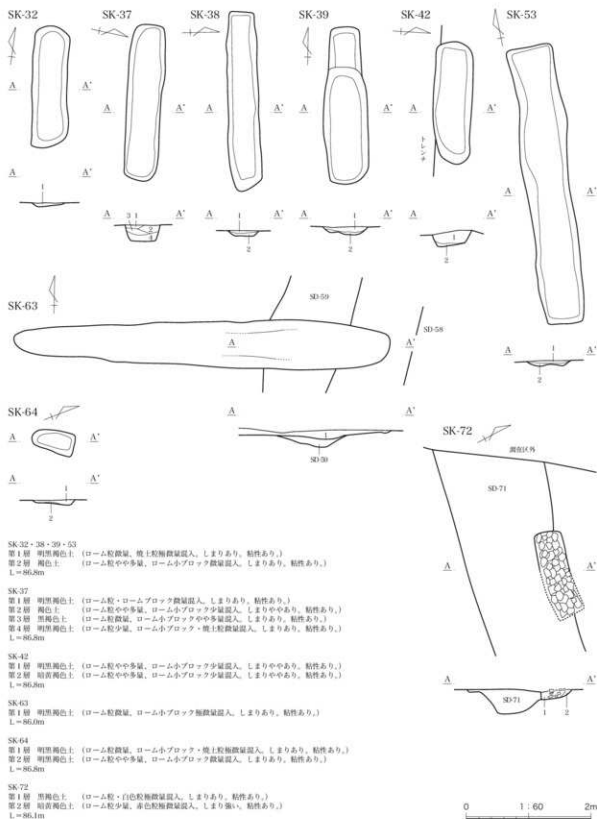
遺構番号	グリッド	重複関係	平面形状	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	(): 推定値 []: 残存値	主軸方向	出土遺物等
SK-4	120-23		(隅丸長方形)	[2.79]	0.78	0.13	N- 76°	-W	
SK-6	116-25		隅丸長方形	2.39	0.58	0.10	N- 87°	-W	
SK-7	118-25		隅丸長方形	2.37	0.41	0.08	N- 82°	-E	
SK-8	118-25		隅丸長方形	3.54	0.66	0.13	N- 88°	-E	
SK-9	117-25		隅丸長方形	2.23	0.59	0.43	N- 7°	-W	
SK-10	117-25		隅丸長方形	2.31	0.74	0.46	N- 5°	-W	
SK-11	117-24	SK-12	隅丸長方形	2.26	0.63	0.41	N- 9°	-W	
SK-12	117-25	SK-11	(隅丸長方形)	0.62	[0.39]	0.29	N- 8°	-W	
SK-13	118-25	SK-17	隅丸長方形	2.38	0.69	0.24	N- 88°	-E	
SK-14	118-24	SK-15・16	隅丸長方形	2.96	0.60	0.18	N- 88°	-E	
SK-15	118-24	SK-14・16	隅丸長方形	2.25	[0.54]	0.15	N- 87°	-E	
SK-16	118-24	SK-14・15	隅丸長方形	0.97	0.47	[0.26]	N- 87°	-E	
SK-17	118-25	SK-13・73	隅丸長方形	1.97	0.54	0.35	N- 88°	-E	
SK-18	118-24	SK-41・73	隅丸長方形	3.90	0.86	0.37	N- 84°	-E	
SK-19	118-25	SD-34 SK-44 SD-35	隅丸長方形	2.80	0.48	0.47	N- 85°	-E	
SK-20	118-25	SK-45・46・62、SD-35	隅丸長方形	3.49	0.81	0.46	N- 83°	-E	
SK-21	117-24 117-25	P-1	隅丸長方形	2.97	0.62	0.20	N- 88°	-E	
SK-22	117-24 118-24		隅丸長方形	2.33	0.96	0.61	N- 90°		
SK-23	117-24 118-24		隅丸長方形	1.18	0.36	0.14	N- 7°	-W	
SK-24	117-24	SK-25・40・43	隅丸長方形	[1.77]	0.52	0.17	N- 85°	-E	



第217図 砂田瀧遺跡2区 SK-4・6・7・8・9・10・11・12・14・15・16・19・44実測図



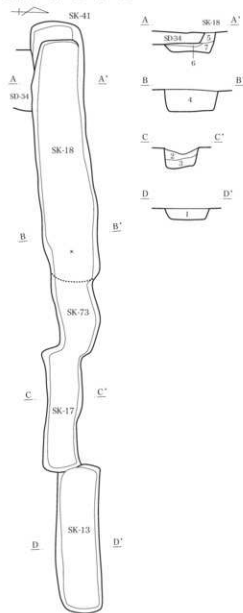
第218図 砂田瀧遺跡2区 SK-21・22・23・24・25・27・28・29・30・31・40・43 実測図



第219図 砂田瀧遺跡2区 SK-32・37・38・39・42・53・63・64・72実測図

第X章 砂田瀧遺跡2区の調査

SK-13・17・18・41・73



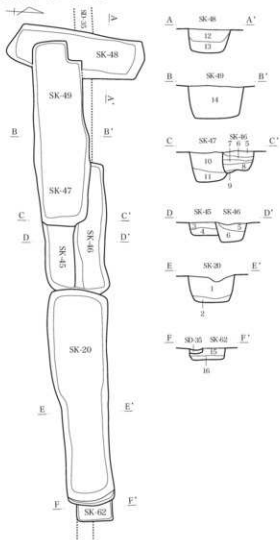
SK-13・17・18・41・73

- 第1層 黒褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い。粘性あり。SK-13 覆土。)
- 第2層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-17 覆土。)
- 第3層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまり強い。粘性あり。SK-17 覆土。)
- 第4層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量。炭化物微量混入。しまりあり。粘性あり。SK-18 覆土。)
- 第5層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりあり。粘性あり。SK-41 覆土。)
- 第6層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりあり。粘性あり。SK-41 覆土。)
- 第7層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-41 覆土。)

L=86.8m

0 1:60 2m

SK-20・45~49・62



SK-20・45~49・62

- 第1層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量。炭土粒・炭化物微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-20 覆土。)
- 第2層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-20 覆土。)
- 第3層 暗褐色土 (ローム粒微量。ローム小ブロック少量混入。しまりあり。粘性あり。SK-45 覆土。)
- 第4層 暗褐色土 (ローム粒微量。ローム小ブロック少量混入。しまりあり。粘性あり。SK-45 覆土。)
- 第5層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-46 覆土。)
- 第6層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-46 覆土。)
- 第7層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-46 覆土。)
- 第8層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-46 覆土。)
- 第9層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-46 覆土。)
- 第10層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-47 覆土。)
- 第11層 暗褐色土 (ローム粒・ローム小ブロック少量。炭化物微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-47 覆土。)
- 第12層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-48 覆土。)
- 第13層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-48 覆土。)
- 第14層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量。炭土粒・炭化物微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-48 覆土。)
- 第15層 暗褐色土 (ローム粒やや多量。ローム小ブロック少量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-49 覆土。)
- 第16層 暗褐色土 (ローム粒少量。ローム小ブロック微量混入。しまりややあり。粘性あり。SK-62 覆土。)

L=86.8m

第220図 砂田瀧遺跡2区 SK-13・17・18・41・73・20・45~49・62 実測図

SK- 25	117-24	SK-24・40・43	隅丸長方形	3.05	0.74	0.44	N- 90°	
SK- 27	116-24		隅丸方形	1.08	1.06	0.11	N- 56°	- W
SK- 28	116-24		不整形	1.25	1.18	0.65	N-	
SK- 29	116-24		隅丸長方形	2.82	0.70	0.32	N- 7°	- W
SK- 30	116-24		円形	1.07	1.03	0.11	N-	
SK- 31	116-23		円形	0.94	0.93	0.07	N-	
SK- 32	118-23		隅丸長方形	1.95	0.56	0.07	N- 7°	- W
SK- 37	117-23		隅丸長方形	2.47	0.54	0.28	N- 83°	- E
	118-24							
SK- 38	117-23		隅丸長方形	2.82	0.49	0.14	N- 89°	- E
SK- 39	117-23		隅丸長方形	2.53	0.70	0.13	N- 3°	- W
	117-24							
SK- 40	118-24	SK-24・25・43	隅丸長方形	[1.32]	0.63	0.12	N- 7°	- W
	118-24							
SK- 41	118-24	SK-18	(隅丸長方形)	[0.74]	0.80	0.24	N- 87°	- E
	118-25	SD-34						
SK- 42	117-24		隅丸長方形	1.93	0.66	0.27	N- 83°	- E
SK- 43	117-24		隅丸長方形	1.30	0.58	0.65	N- 7°	- W
	118-25	SK-19						
SK- 44	118-25	SD-35	隅丸長方形	1.77	[0.41]	0.26	N- 85°	- E
	118-24	SK-20・46・						
SK- 45	118-25	47, SD-35	(隅丸長方形)	[1.02]	[0.46]	0.21	N- 84°	- E
	118-24	SK-20・45・						
SK- 46	118-25	47, SD-35	(隅丸長方形)	2.11	0.49	0.31	N- 84°	- E
	118-24	SK-45・46・						
SK- 47	118-24	49, SD-35	(隅丸長方形)		[0.74]	0.46	N- 83°	- E
	118-24	SK-48・49						
SK- 48	118-24	SD-35	(隅丸長方形)	2.12	[0.47]	0.39	N- 6°	- E
	118-24	SK-47・48						
SK- 49	118-24	SD-35	隅丸長方形	2.97	0.85	0.49	N- 83°	- E
SK- 53	117-22		隅丸長方形	4.48	0.68	0.94	N- 3°	- E
	118-25	SK-20、						
SK- 62	118-25	SD-35	(隅丸長方形)	[0.24]	0.57		N- 82°	- E
SK- 63	117-20	SD-59	楕円形	(5.95)	0.69	0.13	N- 90°	
SK- 64	116-24		隅丸長方形	0.69	0.34	0.08	N- 33°	- E
SK- 72	120-20		(隅丸長方形)	[1.39]	0.46	0.14	N- 79°	- W
SK- 73	118-25	SK-17・18	(隅丸長方形)	[1.12]	0.68	0.23	N- 88°	- E

4. 小穴

本調査区からは、小穴は総計 12 基が確認されている。柱痕は確認されておらず、明確に掘立柱建物跡や櫓列のような規則的な配置をとるものは確認できなかった。

小穴の集中するグリッドは調査区の南ブロックの東、117-24 グリッド付近で群在している。

小穴から出土した遺物は少なく、殆どが古墳時代の土師器片であるため、遺構の時期を決定付けるに至らない。各小穴の記述は避け、遺構実測図を第 221 図に、計測値等を一覧表(第 65 表)にまとめる。

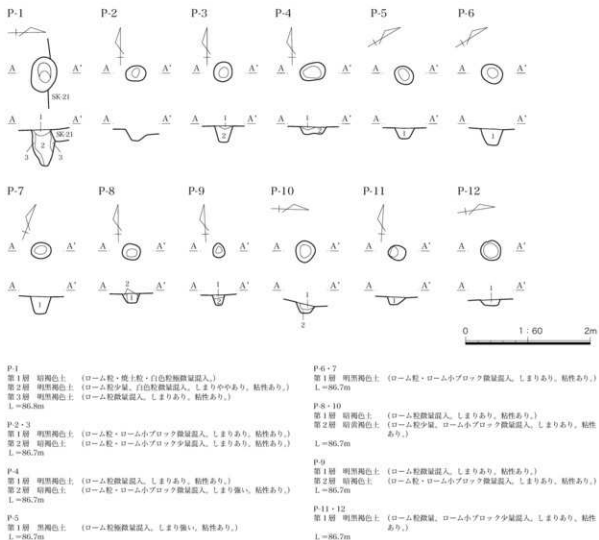
第 65 表 砂田姥沼遺跡 2 区 小穴一覧表

(): 定値 []: 残存値

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P- 1	118-24		54.5	41.0	58.5
P- 2	117-24		32.0	24.0	19.9
P- 3	117-24		32.5	29.0	25.9
P- 4	117-24		40.5	27.5	12.4
P- 5	117-24		31.5	27.5	15.8
P- 6	117-24		35.0	29.5	25.7

遺構番号	グリッド	重複関係	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
P- 7	117-24		31.5	25.0	27.2
P- 8	117-24		28.0	27.0	14.0
P- 9	117-24		23.0	18.0	16.0
P- 10	117-24		34.0	30.5	21.1
P- 11	117-23		27.5	21.0	13.3
P- 12	116-24		33.0	32.5	7.5

第X章 砂田瀧遺跡2区の調査

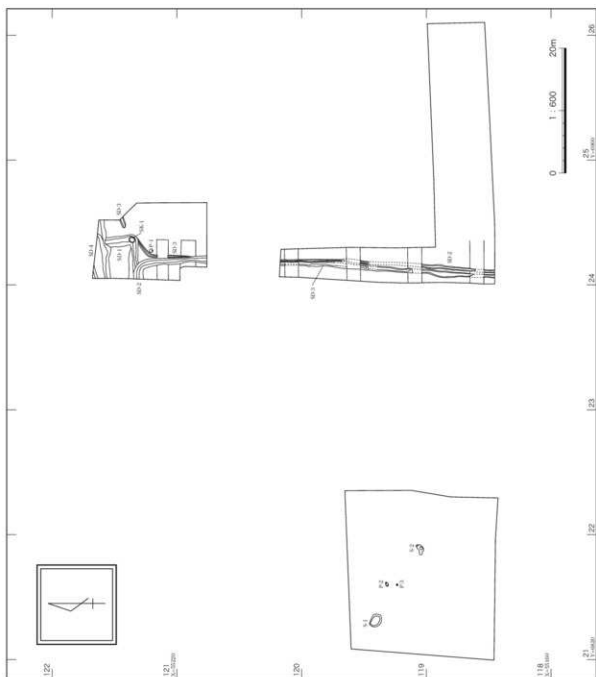


第221図 砂田瀧遺跡2区 P-1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12実測図

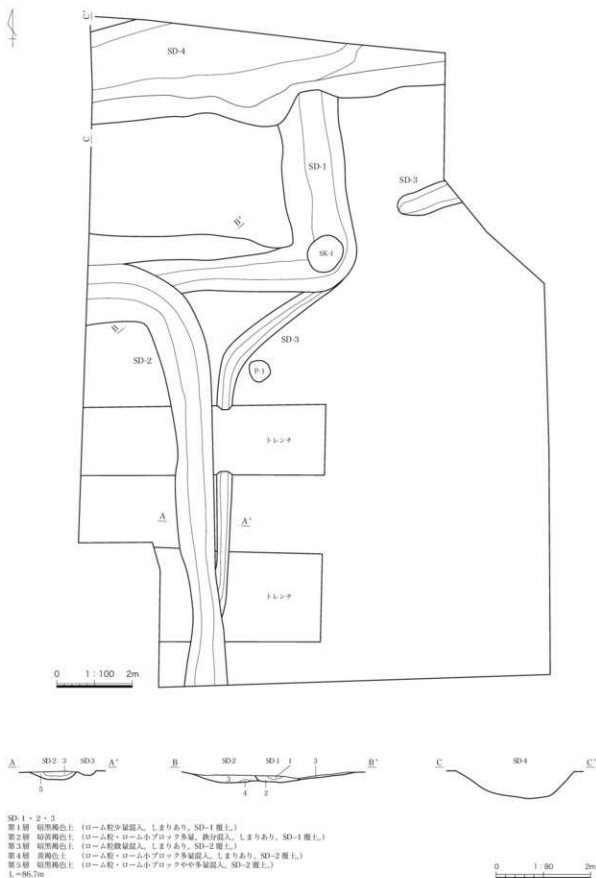
第XI章 砂田瀧遺跡3区の調査

砂田瀧遺跡3区は、宇都宮市砂田町字瀧 211・212・215、砂田町字瀧 193・195 番地に所在している。本遺跡は田川東岸の低台地を開析する「中島谷田」に残る低地に囲まれた台地上に位置する。調査区は隣接する砂田瀧遺跡2区に北・西・南側の3面を囲まれた範囲に、A区・B区・C区と個別に設定をしている。

発掘調査前の標高は 86.85 mで、低地との比高は 0.35 m程である。A区の範囲は南北 18 m×東西 12 m。B区の範囲は南北 34.6 m×東西 41.8 m。C区の範囲は南北 23 m×東西 27 m。遺構が集中しているA区の位置は北緯 36 度 30 分 4 秒、東経 139 度 54 分 25 秒である（世界測地系）。



第 222 図 砂田瀧遺跡 3 区 全体図 (S = 1/600)



第223図 砂田瀧遺跡3区 SD-1・2・3・4 実測図

第1節 A区の時期不明の遺構

A区の遺構は、4条の溝跡の他に、土坑や小穴が確認されている。ほとんど遺物が伴わないため具体的な時期を確定しがたい。

1. 溝状遺構

SD-1 (第223図、図版五七)

概要 A区の北西部に位置する溝跡である。西壁から東方向に延び北へ屈曲している。北端部はSD-4と接している。区内における残存長は西壁から屈曲部までが7.1mで、屈曲部からSD-4までが5.4mである。本遺構からの出土遺物はない。本遺構はSD-2・3・4とSK-1と重複関係にある。本遺構はSD-2よりは新しく、SD-3・SK-1よりは古い。 **位置** 121-24グリッドに位置する。確認面標高は86.625m～86.450mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は1.18m～1.64mである。確認面から底面までの掘り込みは0.02～0.36m(底面標高86.434～86.270m)である。断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は直線的に外傾している。覆土はBラインで第1・2層が堆積土である。底面は北方向に傾斜している。

SD-2 (第223図、図版五七)

概要 A区の南西ブロックに位置する溝跡である。西壁から東方向に延びて南へ緩やかに屈曲している。南端部は調査区外へと続き、砂田灌漑跡2区のSD-3、本調査区C区のSD-3と連なる。区内における残存長は西壁から屈曲部までが2.5mで、屈曲部から南壁までが10.7mである。本遺構からの出土遺物はない。本遺構は、SD-1・3と重複関係にある。本遺構はSD-1よりは古く、SD-3よりは新しい。 **位置** 120・121-24グリッドに位置する。確認面標高は86.598m～86.563mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.70m～1.56mである。確認面から底面までの掘り込みは0.05～0.31m(底面標高86.515～86.288m)である。断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる。覆土はA・Bラインで第3～5層が堆積土である。底面は北西方向に傾斜している。

SD-3 (第223図)

概要 A区の南東ブロックに位置する溝跡である。東壁から西南西方向に延びて緩やかに南へ屈曲している。SD-2と重複している。本遺構からの出土遺物はない。本遺構は、SD-1・2と重複関係にある。SD-1・2より新しい溝跡である。 **位置** 120・121-24グリッドに位置する。確認面標高は86.624m～86.550mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は0.28m～0.68mである。確認面から底面までの掘り込みは0.01～0.13m(底面標高86.555～86.490m)である。断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は直線的に外傾している。底面は北東方向に傾斜している。

SD-4 (第223図)

概要 A区の北ブロックに位置する溝跡である。西壁から北東北方向に延びて調査区外に至る。本遺構からの出土遺物はない。本遺構は、SD-1と重複関係にあるが新旧関係は不明である。 **位置** 121-24グリッドに位置する。確認面標高は86.610m～86.550mである。 **断面形・規模** 確認面での幅は2.24m～2.66mである。確認面から底面までの掘り込みは0.42～0.63m(底面標高86.130～85.980m)である。断面形は舟底状をしている。底面はやや丸味を帯び、壁は直線的に外傾する。底面は北東北方向に傾斜している。

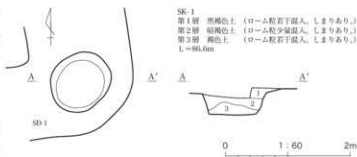
2. 土坑

SK-1 (第224図、図版五七)

概要 A区中央に位置する。本遺構がSD-1が北側に屈曲している南東隅に重複している。SD-1の覆土を掘り込んでいることから溝跡よりは新しい土坑になる。**位置** 121-24グリッドに位置する。確認面標高は86.415m～86.370mである。**平面形・規模** 長軸1.02m×短軸0.88mの北東-南西方向にやや長い楕円形をしている。主軸の方位はN-37°-Eである。

覆土 堆積状況は第1～3層である。

断面形・底面 確認面からの深さは約0.31～0.36mである。底面は平坦である。壁の状況は底面から直線的に外傾する。**出土遺物** 出土遺物は全くない。



第224図 砂田瀧遺跡3区 A区SK-1実測図

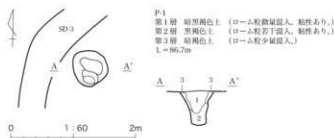
3. 小穴

P-1 (第225図)

概要 A区中央のSD-2の東に位置する。

位置 121-24グリッドに位置する。

平面形・規模 長軸58.0cm×短軸56.5cmのほぼ円形をしている。**覆土** 堆積状況は第1～3層である。**断面形・底面** 確認面からの深さは56.6cmである。底面は平坦である。壁の状況は底面から直線的にやや外傾しながら立ち上がる。



第225図 砂田瀧遺跡3区 A区P-1実測図

第2節 B区の時期不明の遺構

B区の遺構は2基の焼土遺構の他に小穴が確認されている。遺物が伴わず具体的な時期を確定しがたい。

1. 焼土遺構

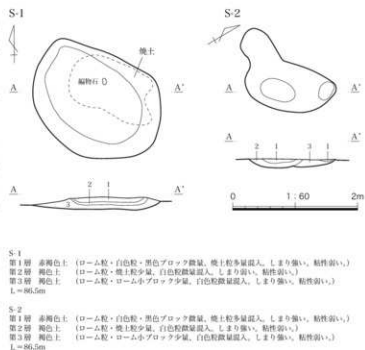
S-1 (第226図、図版五八)

概要 B区北西に位置する。**位置** 119-21グリッドに位置する。確認面標高は86.405m～86.310mである。**平面形・規模** 長軸2.25m×短軸1.62mの北西-南東方向に長い楕円形をしている。主軸の方位はN-40°-Wである。**覆土** 堆積状況は第1～3層である。第1・2層は焼土粒を含んでいるが、被熱赤化したものではない。被熱範囲も確認できていない。**断面形・底面** 確認面からの深さは約0.01～0.16mである。浅い掘り込みで、第3層下の底面は平坦である。浅い皿状をしており、壁の状況は底面からなだらかに直線的に立ち上がる。**出土遺物** 図示していないが、被熱された編物石が出土している。

S-2 (第226図、図版五八)

概要 B区南東に位置する。位置 119-21グリッドに位置する。確認面標高は86.232m～86.232mである。

平面形・規模 長軸1.46m×短軸1.43mの不整形をしている。主軸の方位はN-30°-Eである。覆土 堆積状況は第1～3層である。第1・2層は焼土粒を含んでいるが、被熱赤化したものではない。被熱範囲も確認されていない。第3層を掘り返している堆積をしているが、掘方では確認されていない。断面形・底面 確認面からの深さは約0.01～0.13mである。浅い掘り込みで、第3層下の底面は平坦である。浅い皿状をしており、壁の状況は底面からならだかに直線的に立ち上がる。



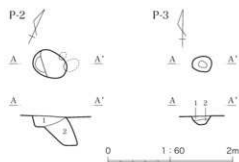
第226図 砂田灌漑跡3区 B区S-1・2実測図

2. 小穴

P-2 (第227図)

概要 B区中央北に位置する。位置 119-21グリッドに位置する。平面形・規模 長軸72.0cm×短軸45.0cmのほぼ円形をしている。覆土 堆積状況は第1・2層である。

断面形・底面 確認面からの深さは46.8cmである。底面は北東方向に傾いている。確認した底面は平坦である。



第227図 砂田灌漑跡3区 B区P-2・3実測図

P-3 (第227図)

概要 B区中央北に位置する。位置 119-21グリッドに位置する。平面形・規模 長軸32.5cm×短軸24.0cmの楕円形をしている。覆土 堆積状況は第1・2層である。

断面形・底面 確認面からの深さは12.3cmである。断面形は逆台形で確認した底面は平坦である。壁の状況は底面から直線的にやや外傾しながら立ち上がる。

第3節 C区の時期不明の遺構

1. 溝状遺構

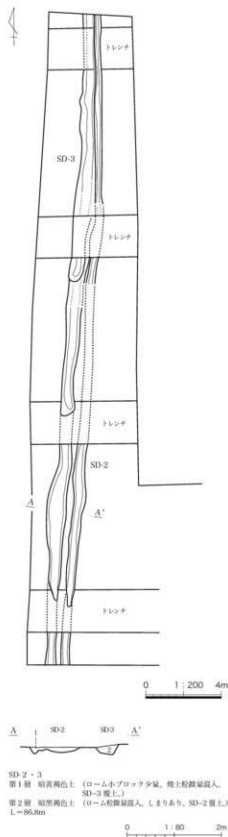
SD-2 (第228図、図版五八)

概要 調査区西ブロックに位置する溝跡である。南北方向に延び、北側は砂田瀧遺跡2区SD-3へ、南側は同2区のSD-3へと続く。A区のSD-3と同一の溝跡の可能性がある。地区内における残存長は34.6mである。位置 118・119・120-24グリッドに位置する。確認面標高は86.576m～86.394mである。

断面形・規模 確認面での幅は0.27m～0.68mである。確認面から底面までの掘り込みは0.09～0.26m(底面標高86.487～86.321m)である。断面形は逆台形をしている。底面は平坦で、壁は直線的に外傾して立ち上がる。覆土はAラインの第2層である。底面は北方向へ傾斜している。

SD-3 (第228図、図版五八)

概要 調査区西ブロックに位置する溝跡である。SD-2と並んで南北方向に延び、北側は砂田瀧遺跡2区SD-3へ、南側は同2区のSD-3へと続く。A区のSD-2と同一の溝跡の可能性がある。地区内における残存長は34.6mである。位置 118・119・120-24グリッドに位置する。確認面標高は86.621m～86.468mである。断面形・規模 確認面での幅は0.43m～1.05mである。確認面から底面までの掘り込みは0.01～0.27m(底面標高86.525～86.365m)である。断面形は舟底状をしている。底面には凹凸があり、壁は緩やかに外傾する。覆土はAラインの第1層である。底面は北方向へ傾斜している。



第228図 砂田瀧遺跡3区
C区SD-2・3実測図

第Ⅱ章 まとめ

第1節 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の縄文・弥生時代の遺物

1 縄文時代

砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡とも縄文時代と推定される遺構は確認されず、砂田姥沼遺跡では早期・前期・中期の遺物が、砂田瀧遺跡では前期の遺物が、後世の遺構に混入して出土した。なお、宇都宮市教育委員会が調査した砂田姥沼遺跡（A区～E区）のうち、C区（2008 白崎・岩崎）において縄文時代草創期とされる頁岩製の有舌尖頭器が1点出土している。

早期 早期の遺物には燃糸文土器（井草式・大丸式）が砂田姥沼遺跡1区のほぼ中央部で40片と多く出土している。他に砂田姥沼遺跡1区で1片みられる（第10図）。胴部文様は縄文がほとんどで燃糸の割合は少量である。

前期 羽状縄文土器では、黒浜式土器が砂田姥沼遺跡1区に12片、3区には3片、砂田瀧遺跡2区から3片みられる。砂田姥沼遺跡1区での破片の出土地点は、調査区のほぼ全体で散在的に確認されている。竹筭文土器では、諸磯式土器に相当する破片が、砂田姥沼遺跡1区から1片出土しており、肋付文を施している（第10図32）。また、砂田瀧遺跡2区と3区の表探で3片がみられる。砂田瀧遺跡は隣接する砂田遺跡（2002 藤田・田代、2007 津野・篠原）においても早期～前期の遺構外の遺物が少量報告されている。

中期 遺物は阿玉台式のものがほとんどである。砂田姥沼遺跡1区では18片、3区では5片がみられる。隆帯や口縁に沿って施されている角押文（第10図33～35）は単列であることから阿玉台1式の範疇であろう。区画する隆帯の幅が広いもの（第10図38～40）とした破片は阿玉台3式の可能性がある。

石器 砂田姥沼1区・3区、砂田瀧遺跡の遺構外から出土した石器はほとんどが縄文時代のものでみられる。大半は砂田姥沼遺跡1区からの出土で、早期の遺物が多いことも関連して礫器が4点と目立つ。打製石斧、磨製石斧、石皿も1区からの出土である。3区でみられる石鐮（第11図1）は早期のものであろう。

2 弥生時代

弥生時代の遺構も確認されなかった。宇都宮市南部の田川東岸台地では弥生時代の遺構は希薄である。砂田姥沼遺跡の南側に浅い低地を挟んで位置する中島塚古墳群・中島塚遺跡（1～8区）では、中期～後期の遺物が出土している。砂田姥沼・中島塚遺跡周辺に小規模な集落が存在したのであろう。

後期の遺物は砂田姥沼遺跡3区の東調査区でその大半が確認された。調査した古墳時代の竪穴建物の覆土に混入しており、SI-2、SI-3から7点ずつ（第13図）、SI-5からは3点、他は1点ずつ確認されている。確認した破片は附加条縄文1種が大半であるが、SI-5からは附加条縄文2種が施文された櫛歯の下向き連弧文が施された破片が2点出土している。

このSI-5は古墳時代前期に位置付けられる竪穴建物であるが、土師器と共に弥生土器3点が覆土や床面から出土している。これらの弥生土器はいずれも広口壺と想定され、附加条縄文1種の羽状縄文が施された壺（第147図1・3）と附加条縄文2種の羽状縄文が施された壺（第147図2）であり、前者は二軒屋式、後者は十王台式土器が想定される。後者の十王台式土器（第147図2）には櫛歯文が確認できないため、覆土から出土している下向きの連弧文が施された破片と同一個体であるかどうか不明である。もう一方の下向きの連弧文が施された破片（第13図25）だけは、胎土に金色雲母片を含んでいることから、茨城県久慈川流域以北の十王台式土器である可能性が指摘できる。二軒屋式土器とした附加条縄文1種の羽状縄文が施された広口の壺（第147図1）は口縁部から頸部にかけて欠損している。今回の調査では接合資料を確認すること

ができなかった。壺の頸部以下を擬口縁とし、底部を含む以下を再利用する事例も報告されていることから、本遺構出土の壺も再利用されてきた可能性もある。

また、砂田姥沼遺跡3区のB区で弥生時代後期の遺物が1点ある。頸部には輪積痕が認められないが、破片形状や頸部や口唇部の縄文施文から、吉ヶ谷式が想定される。

第2節 砂田姥沼遺跡の古墳時代～古代の遺構と遺物

1 土器の変遷について

砂田姥沼遺跡で調査した古墳時代～古代にかけて継続する集落は調査件数は少ないものの、古墳時代前期・中期・後期・末期、古代にかけて存続する比較的安定した集落跡である。

土器については、砂田姥沼遺跡の南側、浅い低地を挟んで位置する中島笹塚遺跡（内山 2008）の土師器区分に基軸を対応させるが、中島笹塚土師器1段階以前に先行する1つの段階を、同土師器12段階以降に後続して1つの段階をそれぞれ追加した。区分を整理することで、新たに1段階～14段階を設定した。（第229・230図）。

各段階は1段階は古墳時代前期（4世紀代）、2段階古厩は古墳時代前期末または中期初め（4世紀末）、2段階新相～5段階は古墳時代中期（5世紀初頭～6世紀初頭）、6～8段階は古墳時代後期（6世紀前葉～7世紀初頭）、9・10段階は古墳時代末期（7世紀前葉～後葉）、11～14段階は古代（7世紀末～9世紀中葉）に相当する。As-C（浅間C軽石）テフラの降下時期は1段階直前の4世紀初頭（3世紀末か）、Hr-FA（群馬県榛名山ニッ岳沢川）テフラの降下時期は、5段階末～6段階初頭（6世紀初頭）に位置付けられる。

第66表 砂田姥沼遺跡における古墳時代～古代遺構の時期

時 期	区 分	須恵器区分	中島笹塚区分	姥沼1区	姥沼2区	姥沼3区
古墳前期	1段階				SI-1	SI-5
古墳中期	2段階		1段階	SI-7・SI-12		
	3段階	TK73・216	2段階	SI-4		
	4段階	TK208	3段階	SI-5		
	5段階	TK23・47	4段階	SI-6・SI-8・SI-10		
古墳後期	6段階	MT15・TK10	5段階	SI-14	SI-2	
	7段階	TK46	6段階	SI-18	SI-3	
	8段階	TK209	7段階		SI-4	SI-2・SI-3
古墳末期	9段階	飛鳥Ⅰ・Ⅱ	8段階	SI-1・SI-2・SI-3 ・SI-9・SI-11	SI-5	SI-1・SI-4
	10段階	飛鳥Ⅲ・Ⅳ	9段階	SI-15・SI-16	SD-12・ SX-19・20・21	
奈良時代	11段階	原東4号窯	10段階			SX-23
	12段階	原東1・3・2号窯	11段階	SI-13		
	13段階	谷津入・東城寺・広 表窯	12段階			
平安時代	14段階	古ヶ谷原入・瀬ノ入・ 倉見沢窯				SI-6

各段階の遺物を出土した遺構と古墳時代中期・後期の須恵器の田辺編年（田辺 1966・1981）、終末期の飛鳥編年（奈良国立文化財研究所 1978）、益子窯跡群編年（田熊・梁木 1991、津野 1993、池田他 1995）との対応とおおよその年代観を第 66 表に示す。

2 集落の時期区分（第 231 図・第 232 図）

砂田姥沼遺跡 1 区～3 区の古墳時代～古代の竪穴建物跡等、集落遺構の時期を、先に挙げた土器の変遷区分に基づいて時期区分した。以下に各段階の遺構群の様相をまとめる。

調査した竪穴建物跡の分布状況は砂田姥沼遺跡 1 区では調査期の北部と南部に若干のまとまりがあり、中央部分では希薄になる。それに比べて砂田姥沼 2 区・3 区はそれぞれ東側の調査区に竪穴建物跡の分布が集中している。砂田姥沼 3 区の東側調査区の東端部には溝跡が幾つも確認していることからこれが集落の東限と考えられる。

また、砂田姥沼 2 区・3 区の東側調査区の間には宇都宮市教育委員会調査分（A 区・B 区・D 区・E 区）があり、特に D 区・E 区に竪穴建物跡の分布が集中している。宇都宮市教育委員会調査分も踏まえると、竪穴建物跡は地形の東側、低地に面した台地の緑辺部に集中して分布している。

1. 古墳時代前期の集落

1 段階は、東谷・中島地区遺跡群において、これまで未確認の段階である。砂田姥沼 2 区 SI-1、3 区 SI-5 の 2 軒が比定される。本段階は古相と新相とに区分できる。古相とした姥沼 3 区 SI-5 には、弥生土器（胴部に附加条縄文 1 種・附加条縄文 2 種の羽状縄文をそれぞれ施した）壺と、甕・壺等の土師器とが共存する段階。As-C（浅間 C 軽石）は、SI-5 の全ての堆積土中で確認されていることから、降灰時期は本段階以前である。新相は、姥沼 2 区 SI-1 は器台が伴わないことや、出土した S 字口縁甕の形態や中期の形態に近い勾玉が出土しており、4 世紀中葉～後葉の段階である。周辺遺跡では、本遺跡の北東に位置する砂田東遺跡に 4 世紀前半期とされる竪穴建物が 2 軒、西刑部西原遺跡では 4 世紀末葉の竪穴建物が 3 軒、溝 1 条が確認されており、本遺跡の北東部では当該期の集落が形成されている。

2. 古墳時代中期の集落

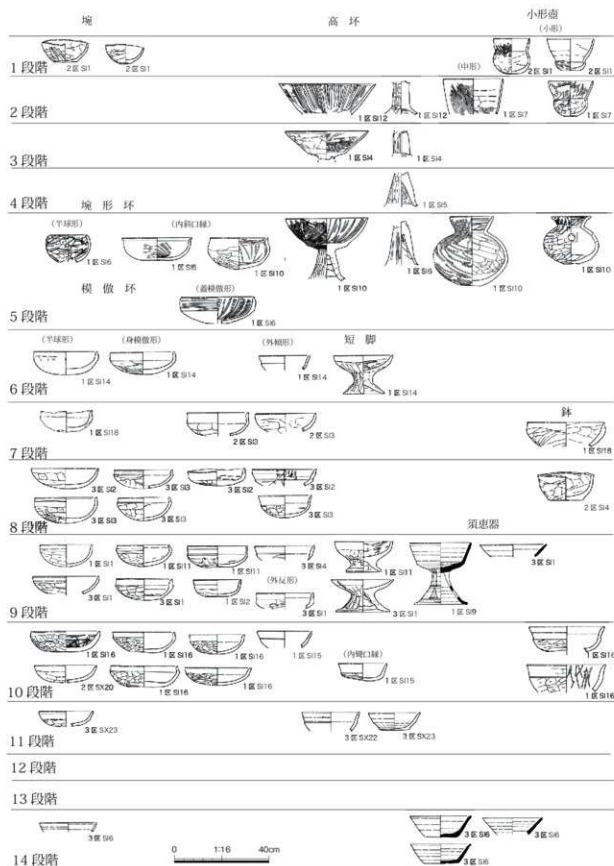
中期とした段階は 2～5 段階が相当し、各段階とも 1 区の中央部付近で 1～3 軒規模で展開している。中期に位置付けられる竪穴建物跡は 7 軒（1 区：SI-4・5・6・7・8・10・12）。宇都宮市教育委員会調査分（D 区）の SI-10 は古墳時代中期に位置付けられている（2008 水野・白崎）。

2 段階は前期末の様相が残る、高坏の坏部下端に外量を持つ坏部や棒状脚が中実であることなど、比較的前代の古い様相もみられる。4 段階になると 1 区の SI-5 にカマドが初現する。5 段階では埴形坏と模倣坏が共存してくる段階である。

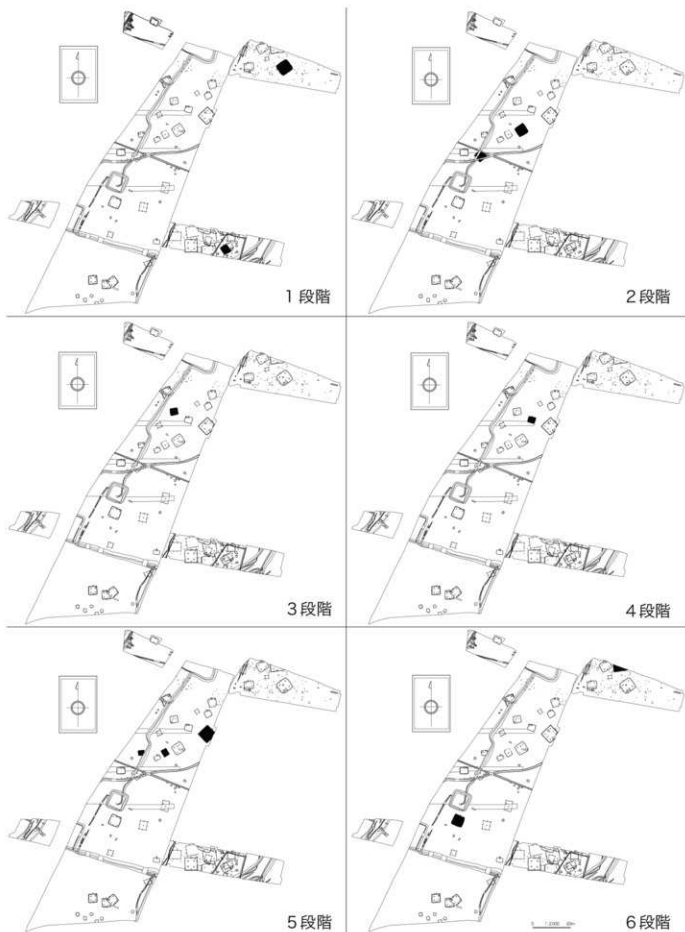
3. 古墳時代後期の集落

6 段階～8 段階が相当する。竪穴建物の分布は散在的で、1 区（SI-14・18）や 2 区（SI-2・3・4）3 区（SI-2・3）で比定される。また、6 棟の掘立柱建物跡（1 区 SB-34・83、2 区 SB-22、3 区 SB-45・48・50）も後期になって出現してくる。

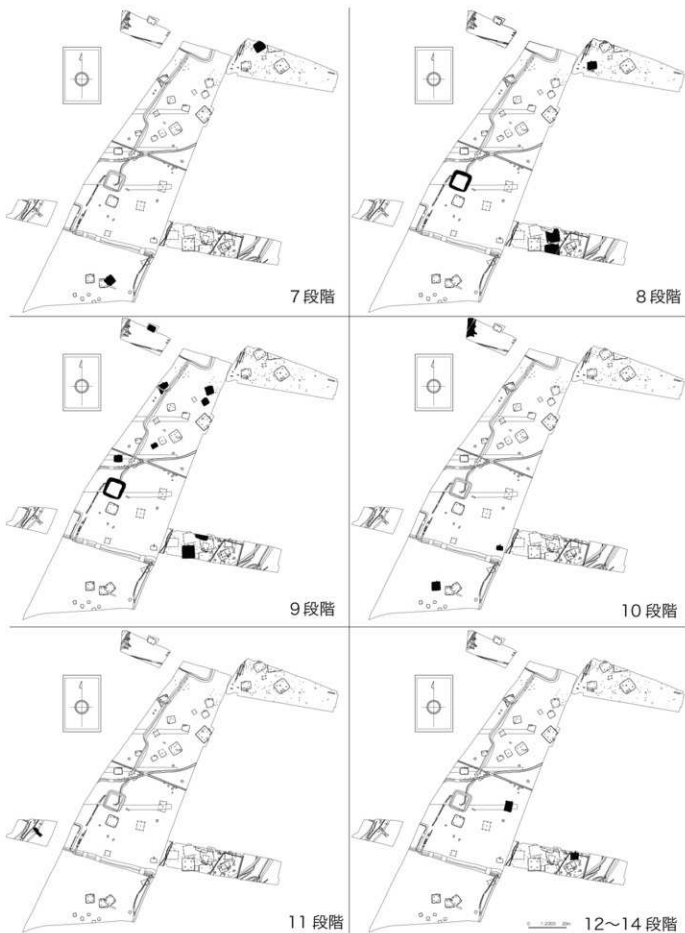
第 8・9 段階に出現する SX-28 は東谷・中島地区遺跡群内においても同様な遺構が調査されている。立野遺跡 5 区の SX-40（内山 2005）、は、古墳時代終末期の小方墳として報告している。周辺遺跡の西赤堀遺跡では 11 基の区画墓群（第 37 号・第 72 号・第 87 号・第 103 号・第 110 号・第 129 号・第 144 号・第 167 号・第 183 号・第 186 号・第 192 号方形周溝遺構）が形成されている。第 144 号方形周溝遺構は南北



第229図 砂田姥沼遺跡出土土器の変遷(1)



第 231 図 砂田姥沼遺跡における集落変遷 (1)



第 232 図 砂田姥沼遺跡における集落変遷 (2)

周溝外側で 11.9 m、東西周溝外側で 12 m と規模の大きなものもある。古墳時代終末期の 7 世紀中頃～8 世紀前半で区画内に墓域が認められるものがある。本遺構も区画内に墓域などは検出できなかったが、同様な性格付けを与えることができよう。砂田姥沼遺跡の古墳時代後期の集落は、上記の他に宇都宮市教育委員会調査分（C 区）では後期の竪穴建物跡が 3 軒調査されているが、遺跡全体をみても古墳時代前期・中期と比較すると軒数は微増である。集落が緩やかに増加していく傾向にある。

4. 古墳時代末期～古代の集落

古墳時代末期は 9・10 段階が相当し、1 区 SI-1・2・3・9・11・15・16、2 区 SI-5、3 区 SI-1・4 の 10 軒が比定され、これに併せて宇都宮市教育委員会調査分（D 区）の後期後葉～終末期にかけての竪穴建物跡 9 軒が加わり、時期区分を通して最も規模が大きくなる。この時期には 2 区の水路（SD-12）、通路状遺構 3 期（SX-19・20・21）に終末期の遺物を伴う。集落が拡大する 9・10 段階に水路及び水路に伴う通路状遺構が機能した可能性がある。続く 11 段階には 3 区の通路状遺構（SX-23）が比定される。通路状遺構は、古墳時代末期～奈良時代前半の期間に機能したと考えられる。12 段階以降は 1 区 SI-13 と 14 段階に 3 区 SI-6 があるのみで集落としては急速に減少している。13 段階は、段階設定を行ったが該当する遺構はなかった。

なお、14 段階に比定した 3 区 SI-6 は、3 区 SI-7 と重複関係にある。SI-6 の埋没後に SI-7 が建てられているが、段階を設定し得る遺物が出土していない。そのため今回は 14 段階に続く段階が存在し得る可能性を指摘するに留めておく。

第 3 節 砂田姥沼遺跡・砂田瀧遺跡の中・近世の遺構と遺物

中世 集落に係わる遺構は砂田瀧遺跡 1 区で井戸（SE-1・2）の 2 基、土坑（SK-4）1 基、溝跡（SD-18）1 条が明確に中世の遺物が伴う遺構である。SE-1 からは砥石が、SK-4 からは常滑の底部片、SD-18 では 15 世紀後半～16 世紀後半の瀬戸美濃大窯間に位置付けられる播磨鉢の出土している。

近世以降 砂田姥沼遺跡 1 区に近世の溝が 4 条（SD-26・27・81・85）。遺物は SD-27 から 18 世紀～19 世紀代的美濃窯産の小碗、肥前佐佐見系の染付碗がある。

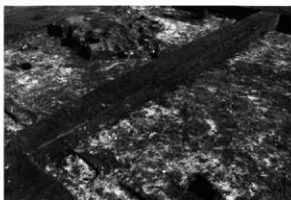
【主要参考文献】

- 茂野明樹・服部実音 1995 「関東」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真岡社
- 安藤保徳他 1996 「西赤瀬遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第 178 集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 池田敏宏他 2010 「下陸遺跡Ⅱ」栃木県埋蔵文化財調査報告第 330 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 茨城県考古学協会 1999 「茨城県における弥生時代研究の到達点」十王台式土器制定 60 周年記念シンポジウム、茨城県考古学協会・十王町教育委員会
- 楠木茂雄 2010 「西羽部西原遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第 329 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 1997 「律令制成立期の須恵器の系譜」『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 内山敏行 2005 「東谷・中島地区遺跡群 5 立野遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第 290 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 内山敏行 2008 「東谷・中島地区遺跡群 9 中島塚古墳・中島塚塚内遺跡（1～8 区）」栃木県埋蔵文化財調査報告第 311 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 今平利幸 1997 「栃木県における古墳時代前期の塚域—土器を中心として—」『前方後方墳の世界Ⅱ—都賀に古墳が造られたころ—』栃木県立土器出土の丘資料館 第 5 回企画展 栃木県教育委員会
- 今平利幸 2000 「下野における古墳時代前期末系土器の波及と定着」『栃木県考古学会誌』第 21 集 栃木県考古学会
- 鎌倉窯跡研究会 1995 「益子町鎌倉窯跡集の須恵器と瓦について」『栃木県考古学会誌』第 17 集 栃木県考古学会
- 藤原浩一 1997 「栃木県古墳時代前期終葉—祭祀関係遺物の出土から—」『研究紀要』第 5 号 （財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 田辺昭三 1966 「陶器古蹟群」Ⅰ 平安園考古学クラブ
- 塚原孝一 1999 「東谷・中島地区遺跡群 1 磯間遺跡（1 区）」栃木県埋蔵文化財調査報告第 229 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 津野 仁 1995 「栃木県における 6・7 世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』第 4 号 東国土器研究会
- 津野 仁 1997 「栃木県の須恵器編年」『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- 中山 晋 1996 「砂田東遺跡・上橋田 A 遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第 176 集 栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団
- 梁木誠・田熊清彦 1989 「古代下野の土器探掘（1）」『栃木県考古学会誌』第 11 集 栃木県考古学会
- 梁木誠・田熊清彦 1989 「栃木県の彩色土器について」『東国土器研究』第 2 号 東国土器研究会
- 谷中 隆 他 2000 「権理山・古日鬼遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告第 257 集 栃木県教育委員会・（財）とちぎ生涯学習文化財団
- 山口耕一 1997 「律令制成立期の須恵器の系譜」『東国の須恵器—関東地方における歴史時代須恵器の系譜—』古代生産史研究会
- （財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター 2007 「研究紀要」第 15 号 （財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター

写真図版



S1-1 完掘状況（南から）



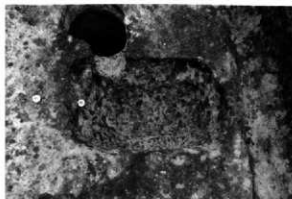
S1-1 土層堆積状況（南西から）



S1-1 カマド完掘状況（南から）



S1-1 カマド土層堆積状況（東から）



S1-1 P5完掘状況（南から）



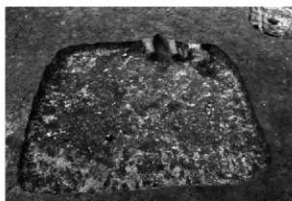
S1-1 P5土層堆積状況（南から）



S1-1 遺物出土状況（南から）



S1-1 遺物出土状況（南から）



S1-2 完掘状況（南から）



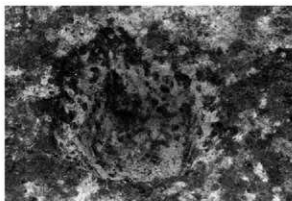
S1-2 土層堆積状況（南西から）



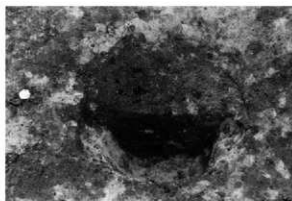
S1-2 カマド完掘状況（南から）



S1-2 カマド土層堆積状況（東から）



S1-2 P1完掘状況（東から）



S1-2 P1土層堆積状況（東から）



S1-3 完掘状況（南から）



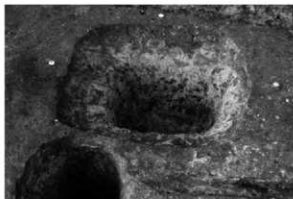
S1-3 土層堆積状況（南東から）



S I-3 カマド完掘状況（南から）



S I-3 カマド土層堆積状況（東から）



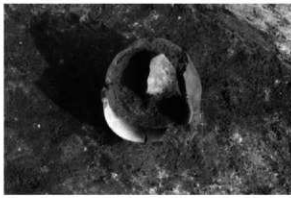
S I-3 P5完掘状況（南から）



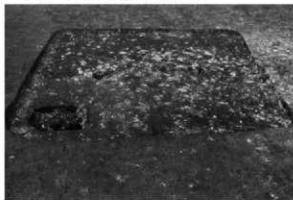
S I-3 P5土層堆積状況（南から）



S I-3 遺物出土状況（北東から）



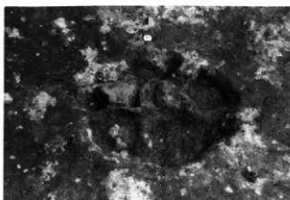
S I-3 遺物出土状況近景（西から）



S I-4 完掘状況（南から）



S I-4 土層堆積状況（東から）



S1-4 炉完掘状況（西から）



S1-4 炉土層堆積状況（東から）



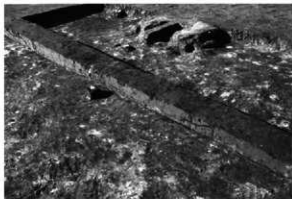
S1-4 P3遺物出土状況（北から）



S1-4 P3完掘状況（北から）



S1-5 完掘状況（南から）



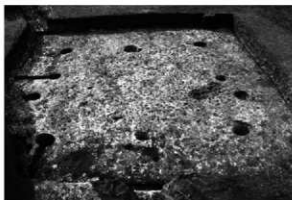
S1-5 土層堆積状況（南東から）



S1-5 カマド完掘状況（南から）



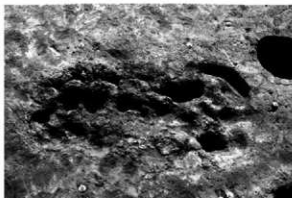
S1-5 カマド土層堆積状況（東から）



S1-6 完掘状況（北東から）



S1-6 土層堆積状況（南東から）



S1-6 炉完掘状況（東から）



S1-6 炉土層堆積状況（北から）



S1-6 遺物出土状況（西から）



S1-6 遺物出土状況近景（北東から）



S1-7 完掘状況（南から）



S1-7 土層堆積状況（南西から）



S1-7 炉完掘状況（南から）



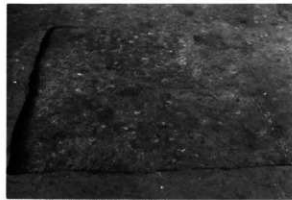
S1-7 炉土層堆積状況（東から）



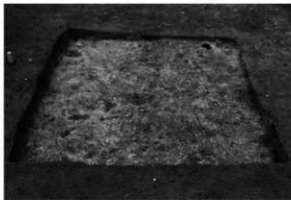
S1-7 遺物出土状況近景（南から）



S1-7 遺物出土状況近景（南から）



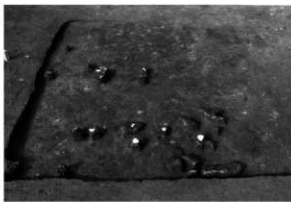
S1-8 完掘状況（南から）



S1-8 掘方状況（南から）



S1-8 貼床土層堆積状況（北東から）



S1-8 遺物出土状況（南から）



S1-9 完掘状況（南東から）



S1-9 土層堆積状況（南西から）



S1-9 カマド完掘状況（南から）



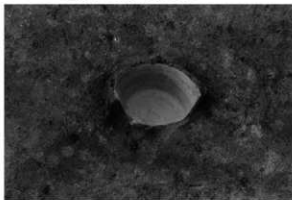
S1-9 カマド土層堆積状況（南から）



S1-9 遺物出土状況（南西から）



S1-9 P3完掘状況（南から）



S1-9 遺物出土状況（南から）



S1-9 遺物出土状況（南から）



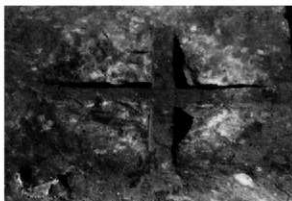
S I - 10 完掘状況（南から）



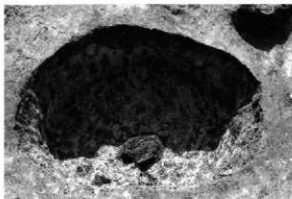
S I - 10 土層堆積状況（南から）



S I - 10 炉完掘状況（東から）



S I - 10 炉土層堆積状況（南から）



S I - 10 P 1完掘状況（北から）



S I - 10 P 1完掘状況（東から）



S I - 10 遺物出土状況（南から）



S I - 10 遺物出土状況近景（東から）



S I-11 遺物出土及び完掘状況（南から）



S I-11 土層堆積状況（南から）



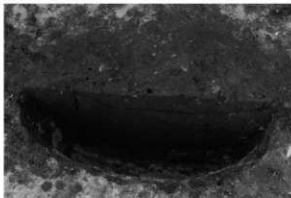
S I-11 カマド完掘状況（南から）



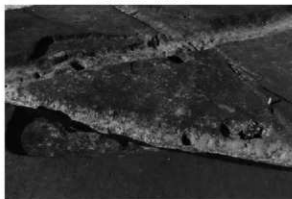
S I-11 カマド土層堆積状況（東から）



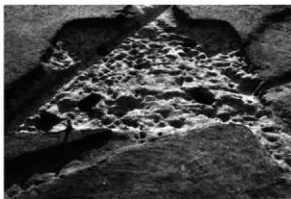
S I-11 P1完掘状況（南から）



S I-11 P1土層堆積状況（南から）



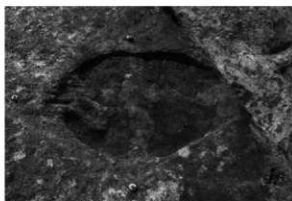
S I-12 完掘状況（南から）



S I-12 掘方状況（東から）



S I - 12 土層堆積状況（東から）



S I - 12 炉完掘状況（東から）



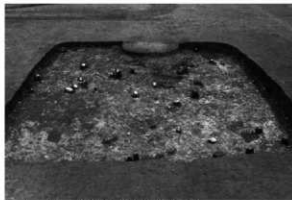
S I - 12 遺物出土状況近景（南から）



S I - 12 遺物出土状況近景（南から）



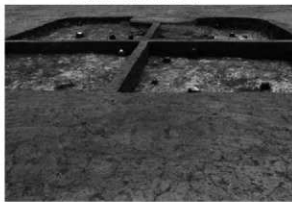
S I - 14 完掘状況（南から）



S I - 14 遺物出土状況（南から）



S I - 14 土層堆積状況（東から）



S I - 14 土層堆積状況（南から）



S1-14 カマド完掘状況 (南から)



S1-14 カマド土層堆積状況 (東から)



S1-14 P5完掘状況 (南から)



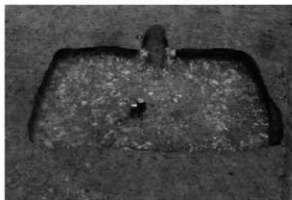
S1-14 P5土層堆積状況 (南から)



S1-14 遺物出土状況近景 (北西から)



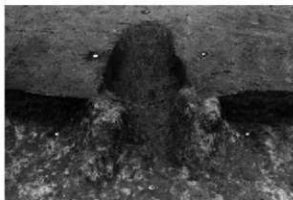
S1-14 遺物出土状況近景 (南から)



S1-15 完掘状況 (南から)



S1-15 土層堆積状況 (南西から)



S1-15 カマド完掘状況（南から）



S1-15 カマド土層堆積状況（南から）



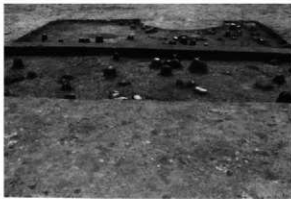
S1-15 カマド土層堆積状況（東から）



S1-15 遺物出土状況近景（南から）



S1-16 完掘状況（南から）



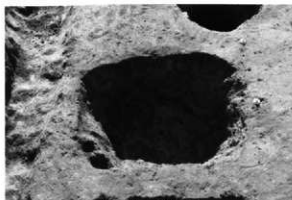
S1-16 土層堆積状況（南から）



S1-16 カマド完掘状況（南から）



S1-16 カマド土層堆積状況（東から）



S1-16 P5完掘状況(北から)



S1-16 P5土層堆積状況(南から)



S1-16 P5遺物出土状況(南から)



S1-16 遺物出土状況(北東から)



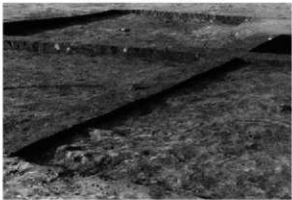
S1-16 遺物出土状況(東から)



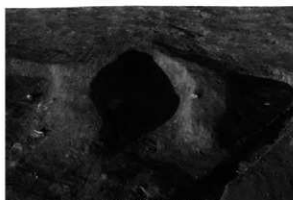
S1-16 遺物出土状況近景(南から)



S1-17 完掘状況(南から)



S1-17 土層堆積状況(南東から)



S I-17 カマド完掘状況 (南から)



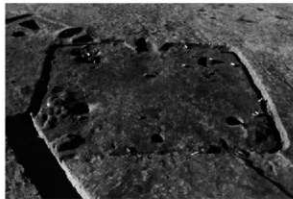
S I-17 カマド土層堆積状況 (東から)



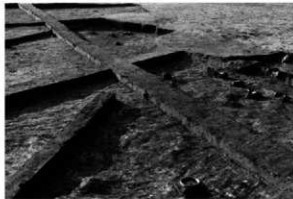
S I-17 P5完掘状況 (北から)



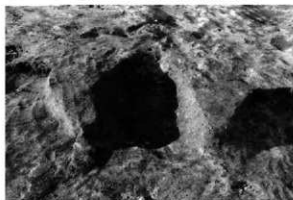
S I-17 P5土層堆積状況 (南から)



S I-18 遺物出土及び完掘状況 (南東から)



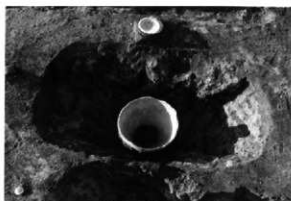
S I-18 土層堆積状況 (南東から)



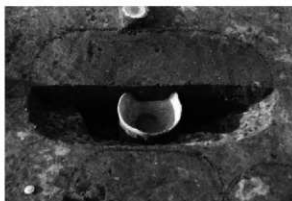
S I-18 カマド完掘状況 (南から)



S I-18 カマド土層堆積状況 (東から)



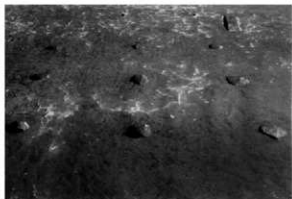
SI-18 P5遺物出土状況（南から）



SI-18 P5土層堆積状況（南から）



SB-34 柱痕確認状況（西から）



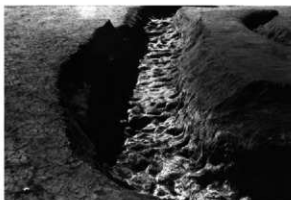
SB-83 完掘状況（東から）



SX-28 完掘状況（南から）



SX-28 北辺溝完掘状況（西から）



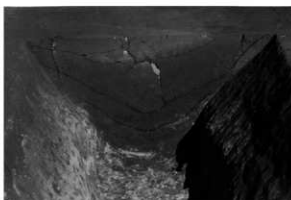
SX-28 東辺溝完掘状況（北から）



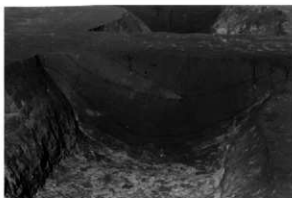
SX-28 南辺溝完掘状況（東から）



SX-28 西辺溝完掘状況（北から）



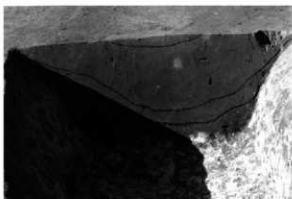
SX-28 Aライン土層堆積状況（南から）



SX-28 Aライン東 土層堆積状況（南から）



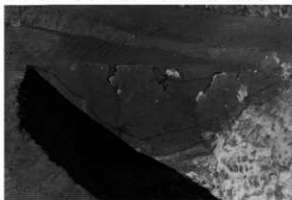
SX-28 Bライン北 土層堆積状況（東から）



SX-28 Bライン南 土層堆積状況（東から）



SX-28 Cライン 土層堆積状況（東から）



SX-28 Dライン 土層堆積状況（東から）



SX-28 Fライン 土層堆積状況（南から）



SX-28 北辺溝底面完掘状況 (北から)



SX-28 東辺溝底面完掘状況 (北から)



SI-13 完掘状況 (南から)



SI-13 P2土層堆積状況 (東から)



SI-13 P1土層状況 (東から)



SI-13 貼床土層堆積状況 (南東から)



SD-26・27 完掘状況 (東から)



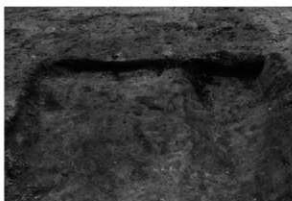
SD-26 Jライン土層堆積状況 (西から)



SD-27 完掘状況 (南から)



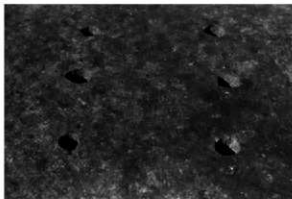
SD-27 土層堆積状況 (南から)



SD-81 オライン土層堆積状況 (南から)



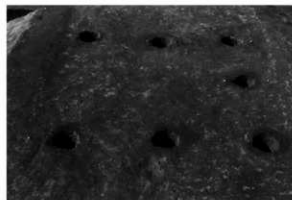
SD-83 完掘状況 (南から)



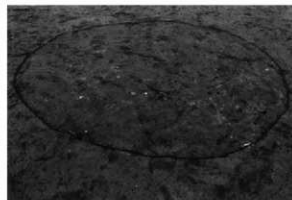
SB-31 完掘状況 (南東から)



SB-32 柱痕確認状況 (東から)



SB-33 完掘状況 (東から)



SE-40 遺構プラン確認状況 (北西から)



SE-40 土層堆積状況（南から）



SD-19・20・21 完掘状況（西から）



SD-19・20 Aライン土層堆積状況（南から）



SD-19・20 クランク手前土層堆積状況（東から）



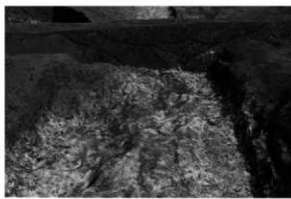
SD-19 Bライン土層堆積状況（東から）



SD-21 完掘状況（北西から）



SD-21 Eライン 土層堆積状況（南から）



SD-21 SI-10南 土層堆積状況（南から）



SD-22 完掘状況(東から)



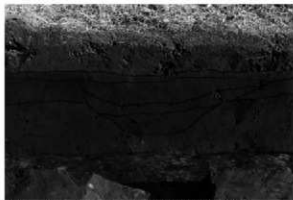
SD-22 土層堆積状況(東から)



SD-22 土層堆積状況(東から)



SD-23 完掘状況(東から)



SD-23 Hライン土層堆積状況(西から)



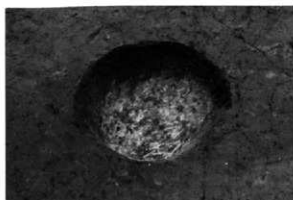
SD-29 完掘状況(北東から)



SD-29 Jライン土層堆積状況近景(西から)



SK-24 完掘状況(東から)



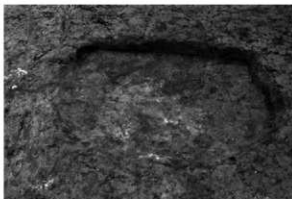
SK-36 完掘状況（南から）



SK-37 完掘状況（南から）



SK-38 完掘状況（南東から）



SK-39 完掘状況（東から）



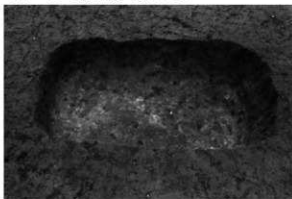
SK-42 完掘状況（南東から）



SK-43 完掘状況（南東から）



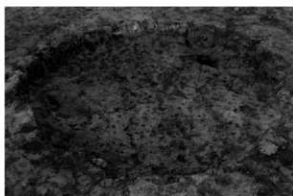
SK-44 完掘状況（東から）



SK-45 完掘状況（南から）



SK-46 完掘状況 (東から)



SK-47 完掘状況 (南から)



SK-48 完掘状況 (南から)



SK-49 完掘状況 (南から)



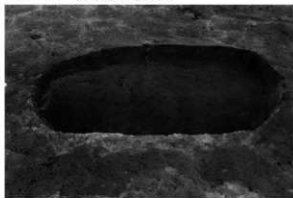
SK-50 完掘状況 (東から)



SK-51 完掘状況 (北から)



SK-80 完掘状況 (東から)



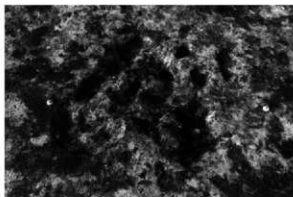
SK-82 完掘状況 (東から)



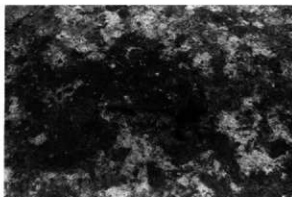
S1-1 完掘状況 (南西から)



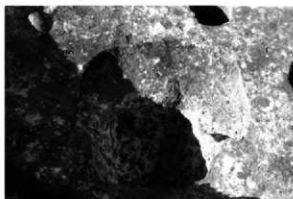
S1-1 土層堆積状況 (南東から)



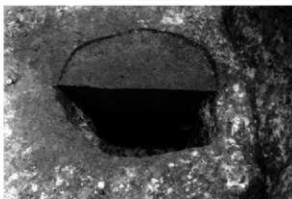
S1-1 炉完掘状況 (南西から)



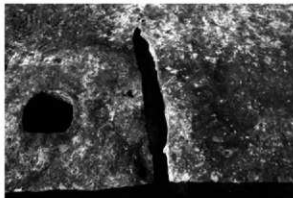
S1-1 炉土層堆積状況 (南東から)



S1-1 P5完掘状況 (南東から)



S1-1 P5土層堆積状況 (南西から)



S1-1 D2完掘状況 (南東から)



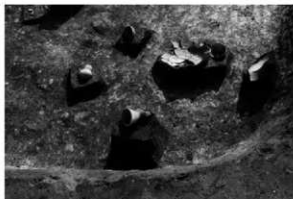
S1-1 D2土層堆積状況 (南東から)



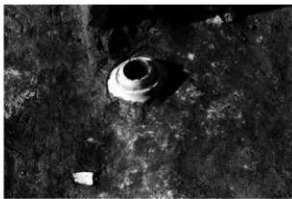
S1-1 遺物出土状況 (南から)



S1-1 遺物出土状況近景 (北から)



S1-1 遺物出土状況近景 (北から)



S1-1 遺物出土状況近景 (東から)



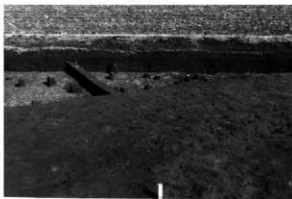
S1-1 勾玉出土状況近景 (西より)



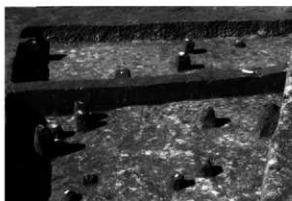
S1-1 掘方状況 (南西より)



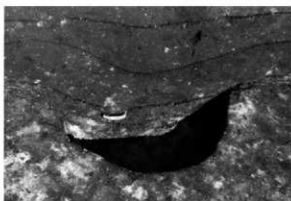
S1-2 完掘状況 (東から)



S1-2 土層堆積状況 (南から)



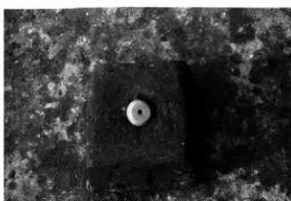
S1-2 土層堆積状況 (東から)



S1-2 P2土層堆積状況 (南から)



S1-2 遺物出土状況 (東から)



S1-2 紡錘車出土状況近景 (東から)



S1-3A 完掘状況 (南東から)



S1-3A 土層堆積状況 (南から)



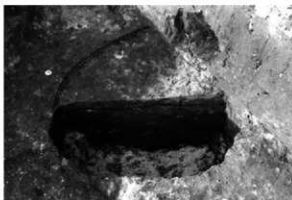
S1-3A カマド完掘状況 (南東から)



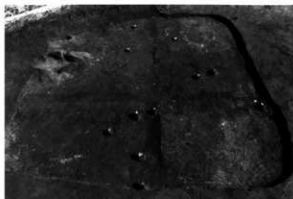
S1-3A カマド土層堆積状況 (東から)



SI-3A P5完掘状況 (南東から)



SI-3A P5土層堆積状況 (南東から)



SI-3A 遺物出土状況 (南西から)



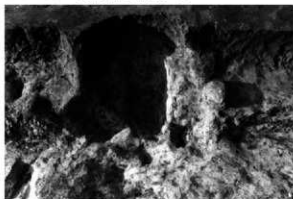
SI-3A 遺物出土状況近景 (東から)



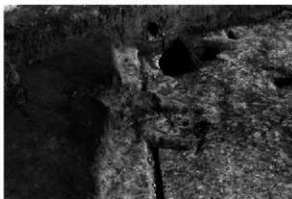
SI-3B 完掘状況 (南東から)



SI-3B 掘方完掘状態 (南東から)



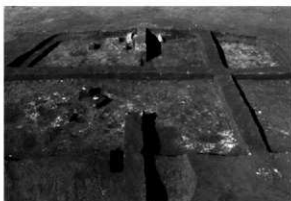
SI-3B カマド完掘状況 (南東から)



SI-3B カマド完掘状況 (南西から)



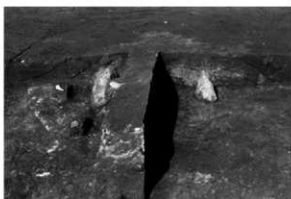
S1-4 完掘状況（南から）



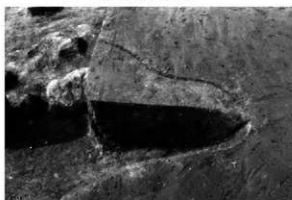
S1-4 土層堆積状況（南から）



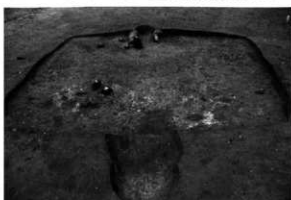
S1-4 カマド完掘状況（南から）



S1-4 カマドAライン土層堆積状況（南から）



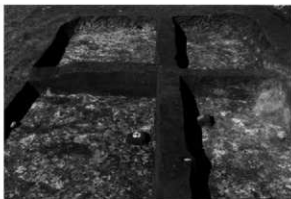
S1-4 カマドBライン土層堆積状況（東から）



S1-4 遺物出土状況（南から）



S1-5 完掘状況（南から）



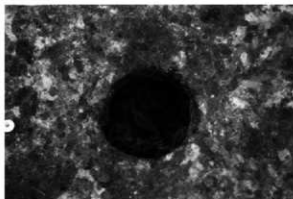
S1-5 土層堆積状況（東から）



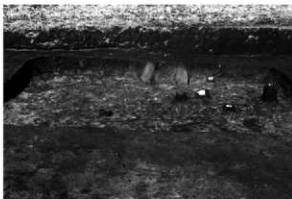
S I-5 カマド完掘状況 (南から)



S I-5 カマド土層堆積状況 (南から)



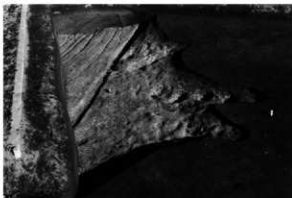
S I-5 P1完掘状況 (南から)



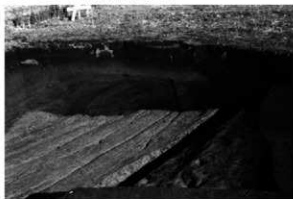
S I-5 遺物出土状況 (南から)



S B-22 完掘状況 (西から)



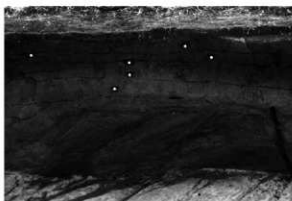
S D-12, S X-19・20・21 完掘状況 (南から)



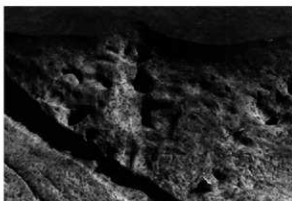
S D-12 Gライン土層堆積状況 (南から)



S D-12 Hライン土層堆積状況 (東から)



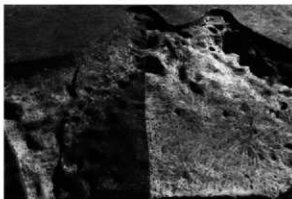
SD-12 Gライン土層堆積状況近景 (南から)



SX-19 完掘状況 (西から)



SX-19 Aライン土層堆積状況 (南東から)



SX-20 完掘状況 (西から)



SX-20 Cライン土層堆積状況 (南から)



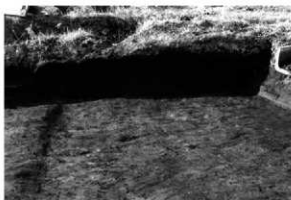
SX-20 Cライン土層堆積状況近景 (南から)



SX-21 Eライン土層堆積状況 (南から)



SB-15 完掘状況 (南東から)



SD-6 土層堆積状況（東から）



SD-7 土層堆積状況（南から）



SD-8 土層堆積状況（北東から）



SD-9 完掘状況（東から）



SD-9 土層堆積状況（西から）



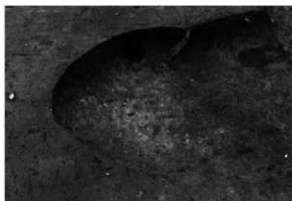
SK-10 完掘状況（南西から）



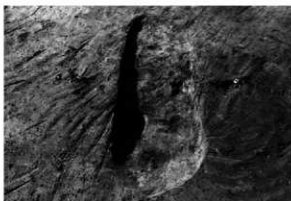
SK-11 完掘状況（南西から）



SK-13 完掘状況（東から）



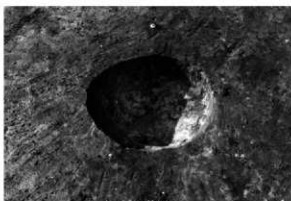
SK-14 完掘状況（東から）



SK-16 完掘状況（東から）



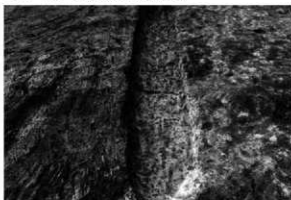
SK-17 完掘状況（東から）



SK-18 完掘状況（南東から）



SK-23・P-126 完掘状況（南から）



SK-24 完掘状況（東から）



東区 ビット群全景（西から）



東区 ビット群全景（東から）



SI-1 完掘状況(東から)



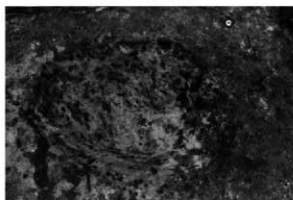
SI-1 土層堆積状況(南から)



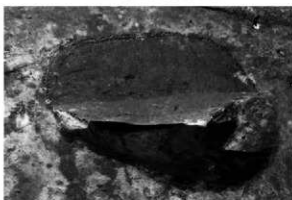
SI-1 カマド完掘状況(南から)



SI-1 カマド土層堆積状況(東から)



SI-1 P5完掘状況(南から)



SI-1 P5土層堆積状況(南から)



SI-1 遺物出土状況(南から)



SI-1 遺物出土状況近景(南から)



S1-2 完掘状況（南から）



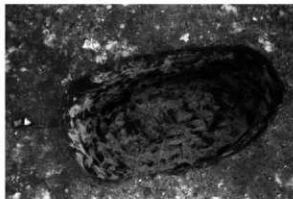
S1-2 土層堆積状況（東から）



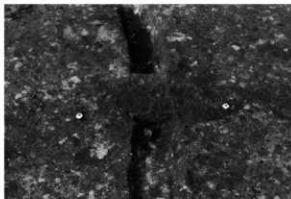
S1-2 カマド完掘状況（南から）



S1-2 カマド土層堆積状況（東から）



S1-2 P3完掘状況（南から）



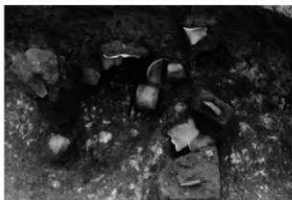
S1-2 D3土層堆積状況（南から）



S1-2 D4完掘状況（西から）



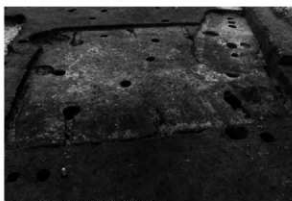
S1-2 遺物出土状況（南から）



S1-2 遺物出土状況近景（南から）



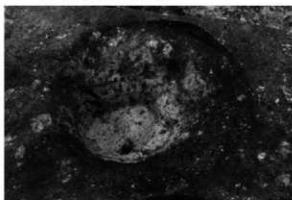
S1-2 遺物出土状況近景（南から）



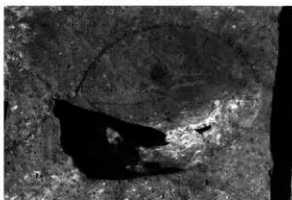
S1-3 完掘状況（東から）



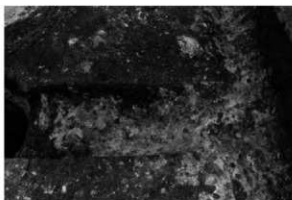
S1-3 土層堆積状況（南から）



S1-3 P5完掘状況（南から）



S1-3 P5土層堆積状況（東から）



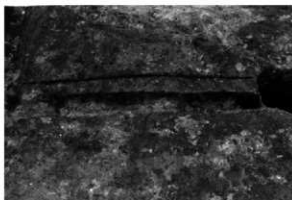
S1-3 D7完掘状況（南から）



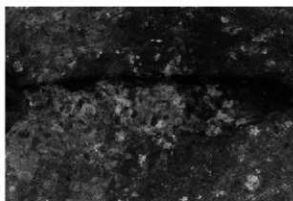
S1-3 D7土層堆積状況（南から）



S1-3 D2完掘状況（南から）



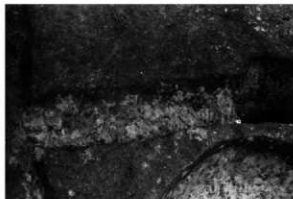
S1-3 D2土層堆積状況（南から）



S1-3 D3完掘状況（南から）



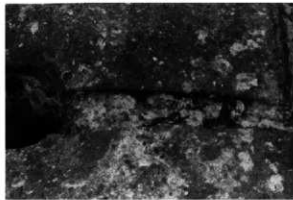
S1-3 D3土層堆積状況（南から）



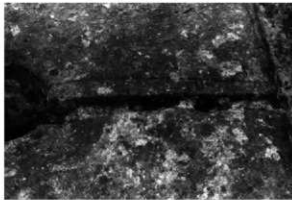
S1-3 D4完掘状況（南から）



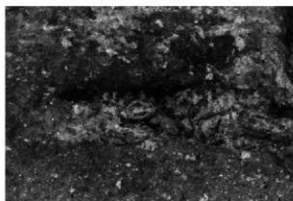
S1-3 D4土層堆積状況（南から）



S1-3 D5完掘状況（南から）



S1-3 D5土層堆積状況（南から）



S1-3 D6完掘状況（南から）



S1-3 D6土層堆積状況（南から）



S1-3 遺物出土状況（東から）



S1-3 遺物出土状況近景（南から）



S1-4 完掘状況（南から）



S1-4 土層堆積状況（東から）



S1-4 遺物出土状況（西から）



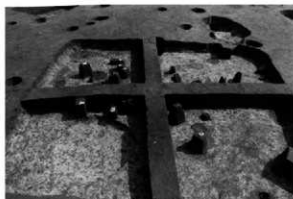
S1-4 石製模造品玉出土状況（東から）



S1-5 完掘状況（南西から）



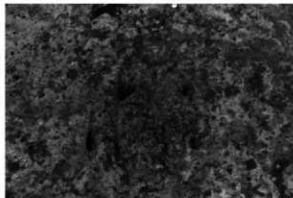
S1-5 土層堆積状況（南東から）



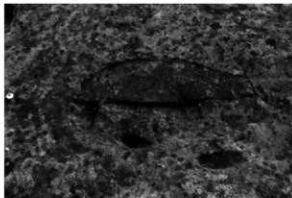
S1-5 土層堆積状況（南西から）



S1-5 土層堆積状況近景（南西から）



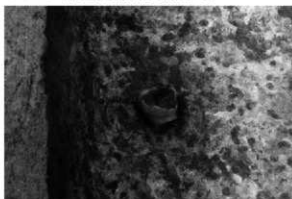
S1-5 炉完掘状況（東から）



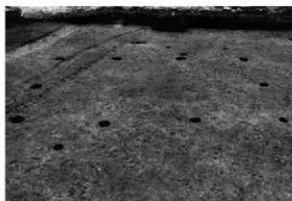
S1-5 炉土層堆積状況（南西から）



S1-5 遺物出土状況（南西から）



S1-5 太頭壺遺物出土状況近景（南東から）



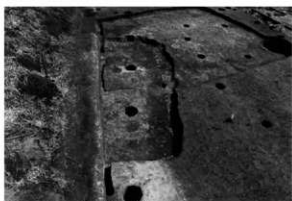
SB-45 完掘状況 (南から)



SB-48 完掘状況 (南西から)



SB-50 完掘状況 (東から)



SA-46 完掘状況 (西から)



SD-20 完掘状況 (南から)



SD-20 Aライン土層堆積状況 (南から)



SD-20 Bライン土層堆積状況 (南から)



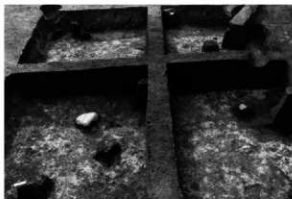
SD-20 Cライン土層堆積状況 (南から)



S D-20 Dライン土層堆積状況(北から)



S 1-6 完掘状況(南から)



S 1-6 土層堆積状況(東から)



S 1-6 カマド完掘状況(南から)



S 1-6 カマド土層堆積状況(東から)



S 1-6 遺物出土状況(南から)



S 1-6 遺物出土状況(北から)



S 1-7 掘方状況(西から)



S I-7 土層堆積状況 (南から)



S X-22 完掘状況 (東から)



S X-22 Aライン土層堆積状況 (南から)



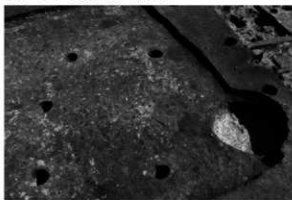
S X-22 Bライン土層堆積状況 (東から)



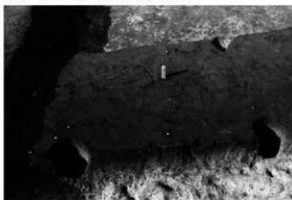
S X-23 完掘状況 (東から)



S X-23 土層堆積状況 (南から)



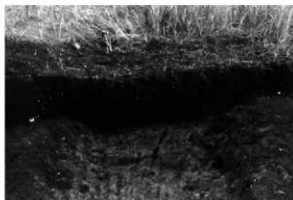
S B-47 完掘状況 (西から)



S B-49 完掘状況 (東から)



SD-9 完掘状況（南から）



SD-9 土層堆積状況（北から）



SD-10・11 完掘状況（南から）



SD-12 完掘状況（南から）



SD-12 完掘状況（西から）



SD-12 土層堆積状況（北から）



SD-13 完掘状況（南から）



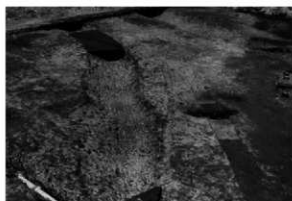
SD-13 土層堆積状況（南から）



SD-14 完掘状況 (南西から)



SD-14 Bライン土層堆積状況 (南から)



SD-15 完掘状況 (南西から)



SD-16 完掘状況 (南西から)



SD-17 完掘状況 (南西から)



SD-17 H・SD-18A Jライン土層堆積状況 (東から)



SD-18A 完掘状況 (南から)



SD-18A Fライン土層堆積状況 (南西から)



SD-18A Gライン土層堆積状況（南西から）



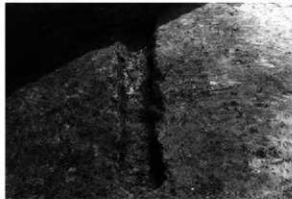
SD-18B 完掘状況（北東から）



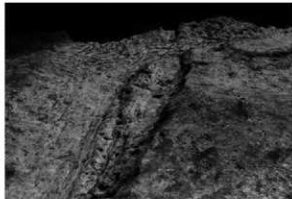
SD-18A・B Iライン土層堆積状況（北から）



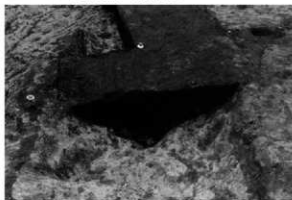
SD-18A・B 土層堆積状況（北から）



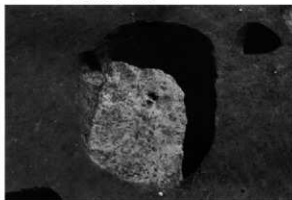
SD-19 完掘状況（北東から）



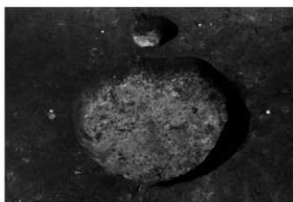
SD-25 完掘状況（北から）



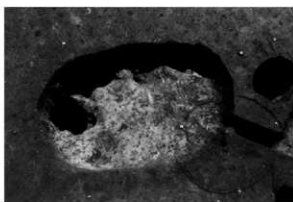
SD-25 Kライン土層堆積状況（北から）



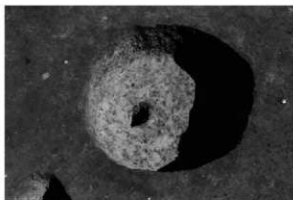
SK-26 完掘状況（西から）



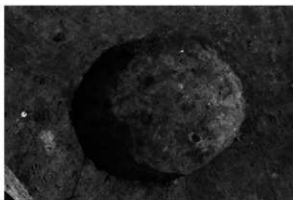
SK-27 完掘状況 (南から)



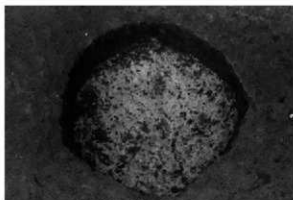
SK-28・SB-48 P5 完掘状況 (北から)



SK-29 完掘状況 (南から)



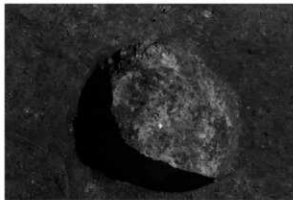
SK-31 完掘状況 (南から)



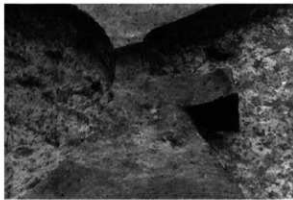
SK-32 完掘状況 (南から)



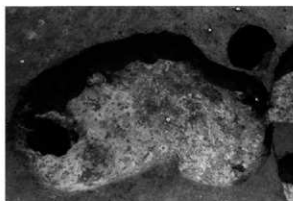
SK-33 完掘状況 (東から)



SK-34 完掘状況 (南から)



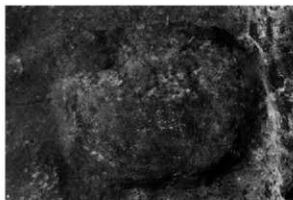
SK-35 完掘状況 (東から)



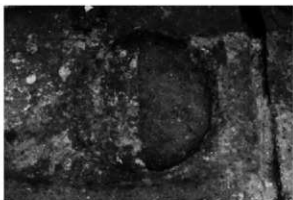
SK-28・36 完掘状況(北西から)



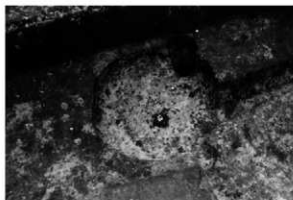
SK-38 完掘状況(東から)



SK-39 完掘状況(南から)



SK-40 完掘状況(南から)



SK-41 完掘状況(南から)



SK-42、P-39・30 完掘状況(南から)



SK-44 完掘状況(南から)



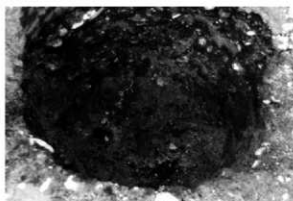
東区 ビット群全景(西から)



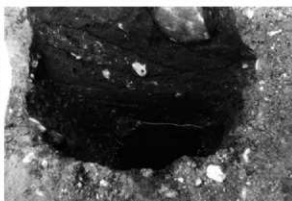
SE-1 完掘状況 (南から)



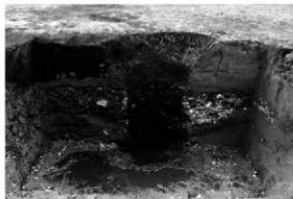
SE-1 土層堆積状況 (南から)



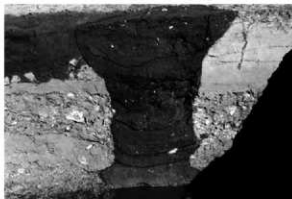
SE-1 底部完掘状況 (南から)



SE-1 土層堆積状況下部 (南から)



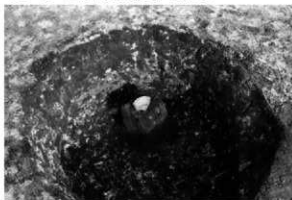
SE-2 完掘状況 (南から)



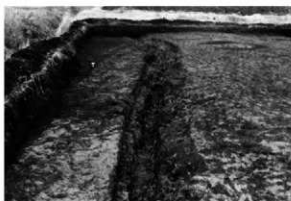
SE-2 土層堆積状況近景 (南から)



SK-4 完掘状況 (南から)



SK-4 遺物出土状況 (南から)



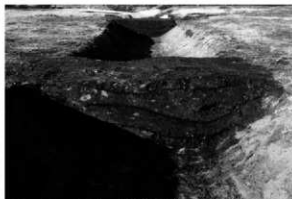
SD-18 完掘状況 (南から)



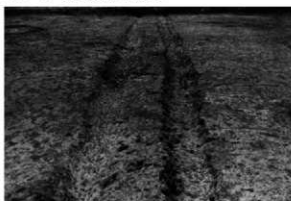
SD-18 Aライン土層堆積状況 (南から)



SD-3 完掘状況 (南から)



SD-3 Cライン土層堆積状況 (南から)



SD-15・16・17 完掘状況 (南から)



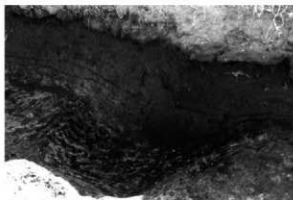
SD-15・16・17 Aライン土層堆積状況 (南から)



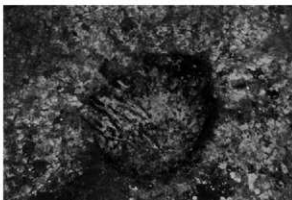
SD-15 杭検出状況 (南から)



SD-16 土層堆積状況 (南から)



SK-5 完掘状況（北から）



SK-6 完掘状況（南から）



SK-8 完掘状況（南から）



SK-9・10 完掘状況（南西から）



SK-11 完掘状況（南西から）



SK-12 完掘状況（南西から）



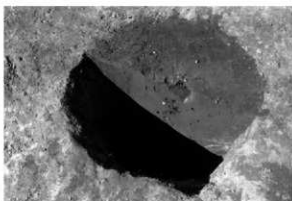
SK-13 完掘状況（南西から）



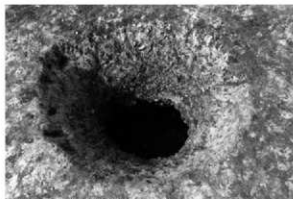
SK-14 完掘状況（南西から）



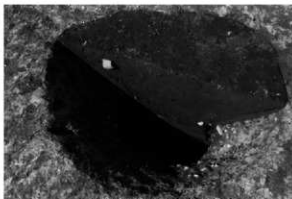
SE-26 完掘状況（南東から）



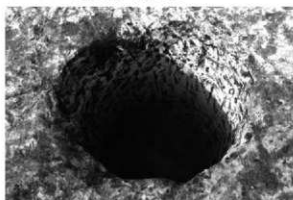
SE-26 土層堆積状況（南から）



SE-33 完掘状況（南東から）



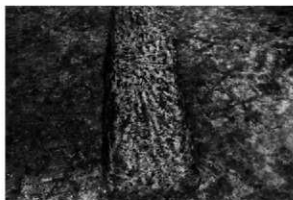
SE-33 土層堆積状況（南から）



SE-50 完掘状況（南から）



SE-50 土層堆積状況（南から）



SK-4 完掘状況（東から）



SK-6 完掘状況（東から）



SK-7 完掘状況（東から）



SK-8 完掘状況（東から）



SK-9 完掘状況（南から）



SK-10 完掘状況（東から）



SK-11・12 完掘状況（東から）



SK-13 完掘状況（東から）



SK-14・15・16 完掘状況（東から）



SK-17 完掘状況（東から）



SK-18 完掘状況（東から）



SK-19・44 完掘状況（東から）



SK-20 完掘状況（東から）



SK-21 完掘状況（東から）



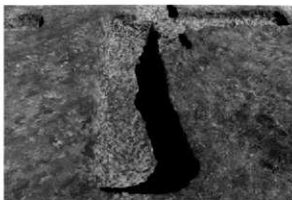
SK-22 完掘状況（南から）



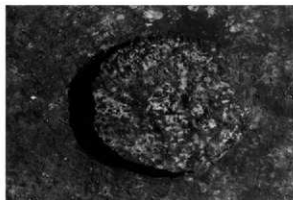
SK-23 完掘状況（南から）



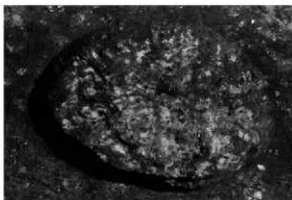
SK-24 完掘状況（東から）



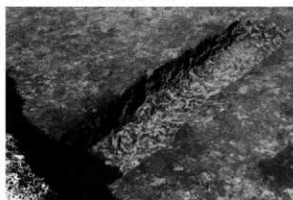
SK-25 完掘状況（南から）



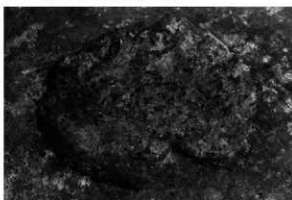
SK-27 完掘状況（南から）



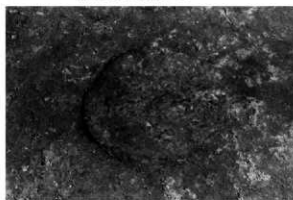
SK-28 完掘状況（南から）



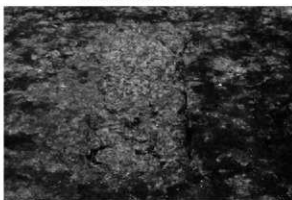
SK-29 完掘状況（南東から）



SK-30 完掘状況（南から）



SK-31 完掘状況（南から）



SK-32 完掘状況（南から）



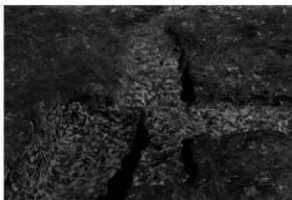
SK-37 完掘状況（東から）



SK-38 完掘状況（東から）



SK-39 完掘状況（南から）



SK-40 完掘状況（南から）



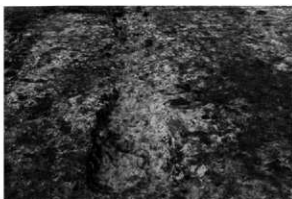
SK-41 完掘状況（東から）



SK-42 完掘状況（東から）



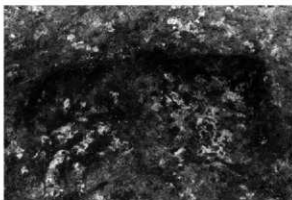
SK-48 完掘状況（南から）



SK-53 完掘状況（南から）



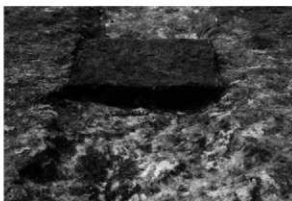
SK-62 完掘状況（東から）



SK-64 完掘状況（南東から）



SD-1 完掘状況（西から）



SD-1 土層堆積状況（東から）



SD-2 完掘状況（西から）



SD-2 土層堆積状況（東から）



SD-3・52・55～57 完掘状況（北西から）



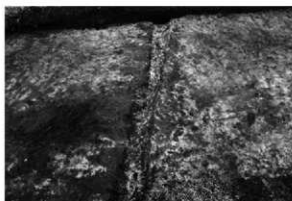
SD-3 完掘（南から）



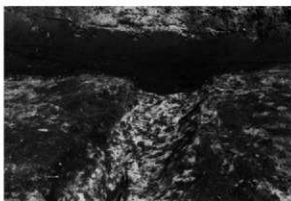
SD-3 土層堆積状況（南から）



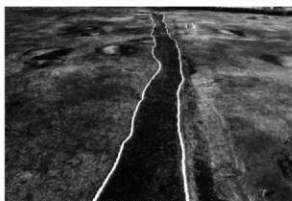
SD-3・35 Eライン土層堆積状況（東から）



SD-5 完掘状況（南から）



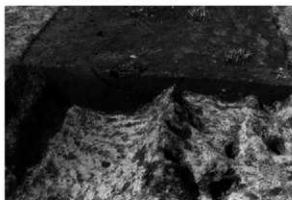
SD-5 土層堆積状況（南から）



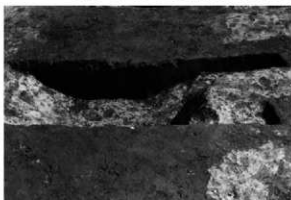
SD-52 完掘状況（南から）



SD-52 調査区南壁面 土層堆積状況（北から）



SD-35B・52 Lライン土層堆積状況（東から）



SD-52・57 Hライン土層堆積状況（西から）



SD-58・59・65・66・69~71完掘状況（南西から）



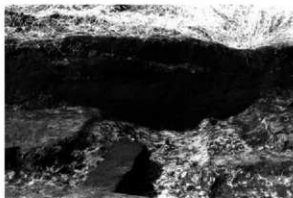
SD-58・59 完掘状況（南から）



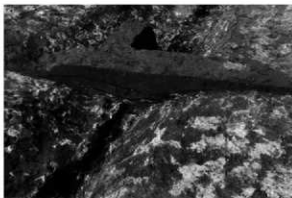
SD-59・SE-50 完掘状況（南東から）



SD-58・59 完掘状況（南から）



SD-59 Tライン土層堆積状況（東から）



SD-59・SK-63 土層堆積状況（南から）



SD-58・59 土層堆積状況（南から）



SD-69 Rライン土層堆積状況（東から）



SD-68 調査区西壁面 土層堆積状況（東から）



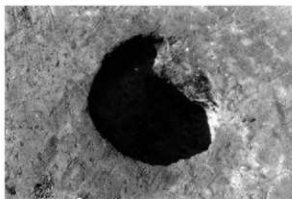
SD-71・SK-72 土層堆積状況（西から）



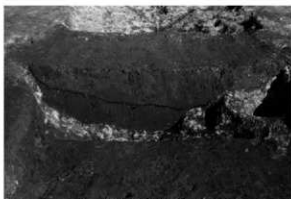
A区 全景（北から）



A区 全景（北から）



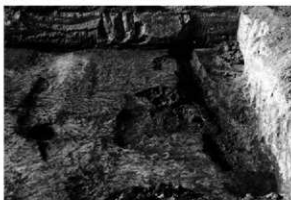
A区 P-1 完掘状況（東から）



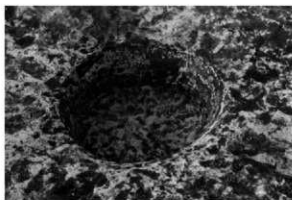
A区 SD-1 土層堆積状況（西から）



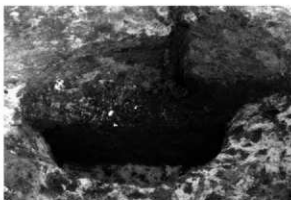
A区 SD-1・2 Bライン土層堆積状況（南から）



A区 北側拡張状況（東から）



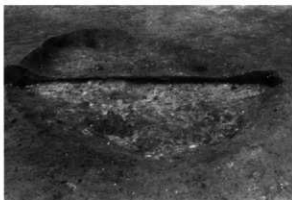
A区 北側拡張SK-1 完掘状況（南東から）



A区 SK-1 土層堆積状況（南から）



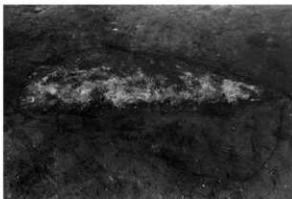
B区 全景（南西から）



B区 S-1 焼土遺構 完掘状況（南から）



B区 S-1 焼土遺構 土層堆積状況（南西から）



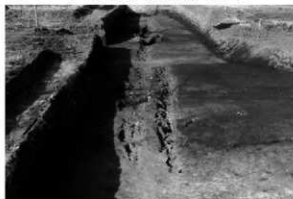
B区 S-1 焼土遺構 土層堆積状況（南から）



B区 S-2 焼土遺構 完掘状況（南から）



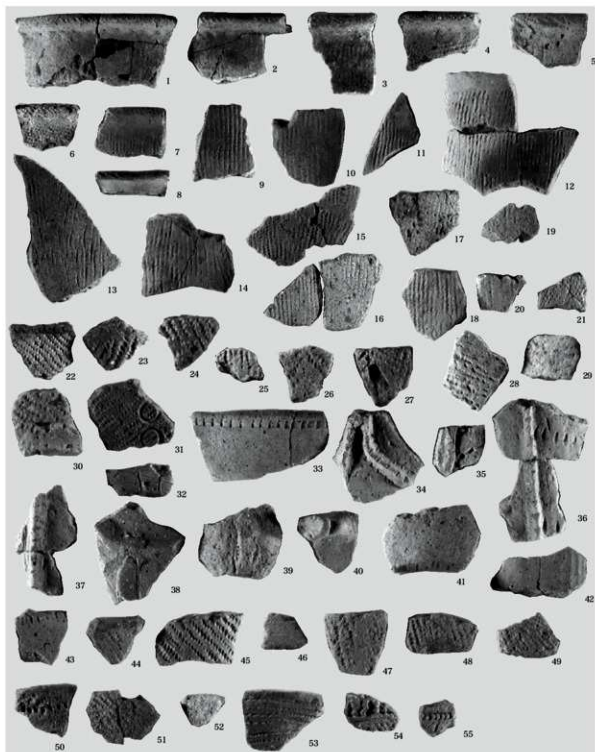
B区 S-2 焼土遺構 土層堆積状況（南東から）



C区 S D-2・3 完掘状況（南から）



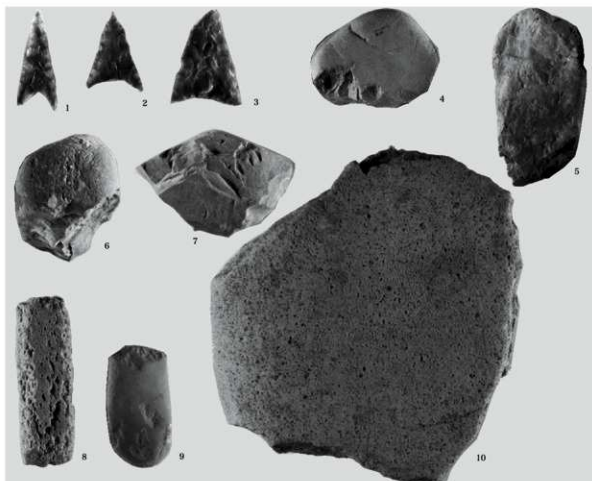
C区 S D-2・3 Aライン土層堆積状況（南から）



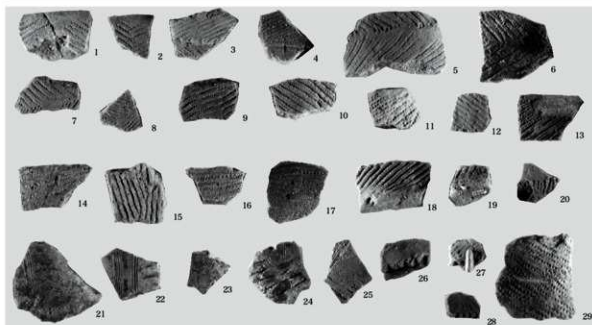
砂田姥沼 1～20：第1群 器系文系土器 22～32 第2群 前期の羽状縄文系土器 33～49：第3群 中期の土器

砂田瀧 50～52：第1群 前期の羽状縄文系土器 53～55：第2群 前期の竹管文系土器

1・3・6・9・12・13・15・19・36・39・41・43：姥沼1区表面採集 2・14：姥沼1区SX-28 4：姥沼3区SI-2貼床 5：姥沼1区SD-27 10・32・40：姥沼1区SI-10 11：姥沼3区SI-2 20：姥沼3区SI-5 21・23・24・49：姥沼1区SI-18 22：姥沼1区SI-15 25：姥沼3区SI-1 26：姥沼3区SD-14 27：姥沼1区SD-26・27 28・29：姥沼1区SK-49 30：姥沼1区SI-15床下 31：姥沼3区SI-13A 33・34：姥沼1区101.37.5グリッド 35：姥沼3区SI-3 37・42：姥沼1区101.5.37.5グリッド 38：姥沼3区SD-13付近表採 44・48：姥沼1区SI-5 45：姥沼1区SB-83P9 46：姥沼3区SK-26 47：姥沼1区SI-5床下 50：瀧2区SK-22 51・52：瀧2区SD-59 53：瀧3区表面採集 54：瀧3区南側西トレンチ焼土 55：瀧2区表面採集



1～3: 石鏃 4～7: 礫器 8: 打製石斧 9: 磨製石斧 10: 石皿
1: 姥沼3区SK-27 2: 姥沼3区SI-4 西風側木痕
3: 溝121-25.5グリッド 4～6・8・10: 姥沼1区調査区一括 7: 姥沼3区調査区一括 9: 姥沼1区98-34.5グリッド



砂田姥沼 1～28: 第1群 弥生時代後期の土器 砂田瀧 29: 弥生時代後期の土器
1・5・7・12・15～17・21・28: 姥沼3区SI-2 2～4・8: 姥沼3区SI-3 6: 姥沼1区SK-50 11: 姥沼3区SK-26 13: 姥沼3区SK-33 14: 姥沼3区SI-4 19: 姥沼3区SI-1 20・22・24・25: 姥沼3区SI-5 23: 姥沼1区SI-17 26: 姥沼3区SK-26 29: 121-25.5グリッド





1-SI-9-3



1-SI-9-1



1-SI-10-3



1-SI-10-5



1-SI-10-6



1-SI-10-7



1-SI-10-8



1-SI-10-6



1-SI-10-9



1-SI-10-10



1-SI-10-11



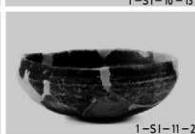
1-SI-10-13



1-SI-10-14



1-SI-11-1



1-SI-11-2

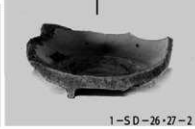
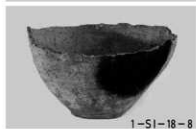


1-SI-11-4



1-SI-12-4







2-SI-1-21



2-SI-1-22



2-SI-1-23



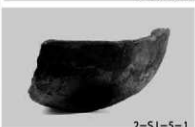
2-SI-1-24



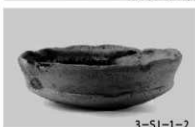
2-SI-2-1



2-SI-2-16



2-SI-5-1



3-SI-1-2



53-SI-1-5



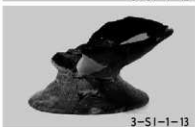
3-SI-1-12



3-SI-1-20



3-SI-1-22



3-SI-1-13



3-SI-1-23



3-SI-2-2



3-SI-2-4



3-SI-2-20



3-SI-2-9



3-SI-2-10



3-SI-2-23



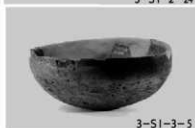
3-SI-2-24



3-SI-3-1



3-SI-3-2



3-SI-3-5



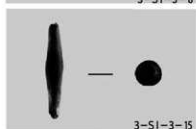
3-SI-3-8



3-SI-3-9



3-SI-3-10



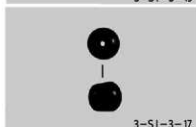
3-SI-3-15



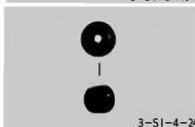
3-SI-3-16



3-SI-3-10



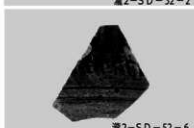
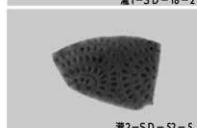
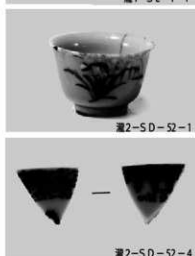
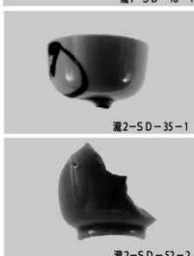
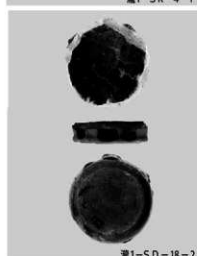
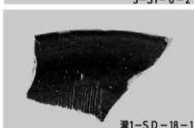
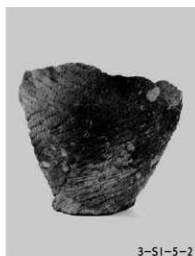
3-SI-3-17

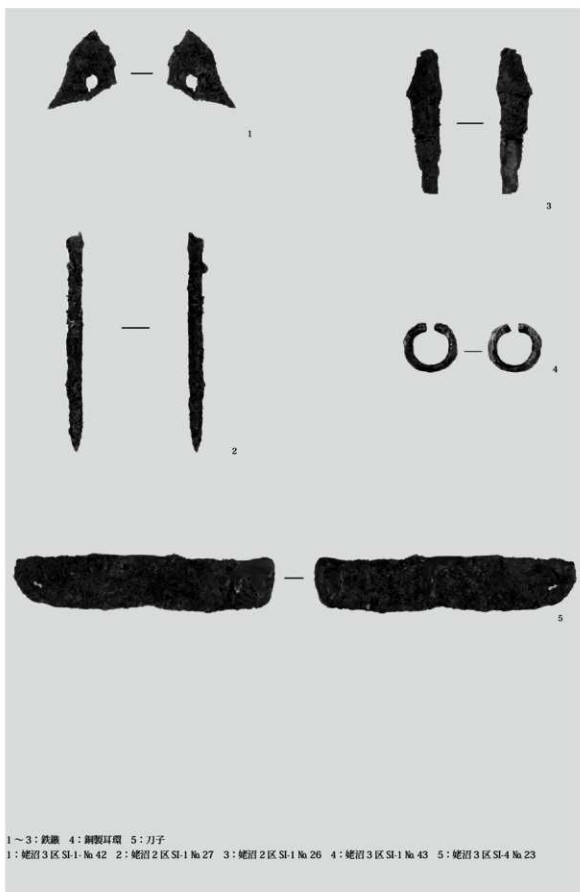


3-SI-4-24

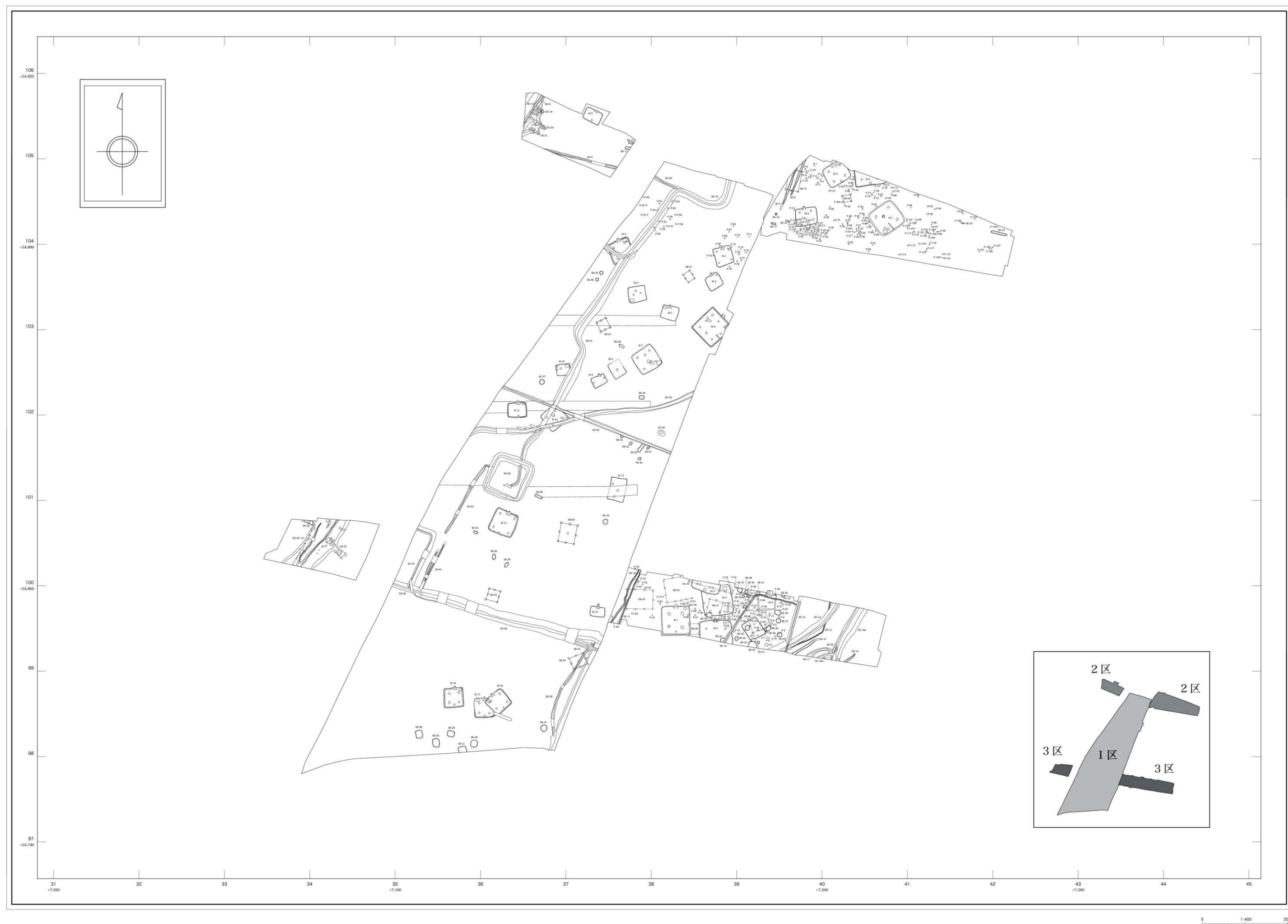


3-SI-4-1





付図 砂田姥沼遺跡 1・2・3区 遺構配置図



報告書抄録

ふりがな	とうや・なかじまちくいせきぐん 11 すなたうばめまいせき・すなたたきいせき
書名	東谷・中島地区遺跡群 11 砂田姥沼遺跡（1区～3区）・砂田瀧遺跡（1区～3区）
副書名	都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	11
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第337集
編著者名	藤田直也
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL 0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発行年月日	西暦 2011年3月30日（平成23年3月30日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
すなたうばめまいせき 砂田姥沼	うつのみやし 宇都宮市 すなだちやうばめまいせき 砂田町字 姥沼	09201	4356	36° 29' 51"	139° 54' 36"	1区 19980803 ～19990210 2区 20051006 ～20051207 3区 20050601 ～20051215	7,000 1,200 400	東谷・中島 土地区画整 理事業に伴 う事前調査
すなだちやうばめまいせき 砂田瀧	うつのみやし 宇都宮市 すなだちやうばめまいせき 砂田町字瀧	09201		36° 30' 1"	139° 54' 23"	1区 20001211 ～20010215 2区 20050221 ～20050322 3区 20071015 ～20051219	3,000 11,086 7,271	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
砂田姥沼	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代	竪穴建物跡 27軒 方形周溝遺構 1基 竪穴柱建物 6棟 溝跡 1列	縄文土器 弥生土器 須恵系・土師系、刀子、砥石・碧玉・ 紡錘車・鉄鏝	古墳～平安時代の 集落
		古墳時代末期 奈良時代 奈良・平安時代 近世以降 時期不明	旧河道路跡 2条 道路状遺構 5基 竪穴建物跡 3軒 溝跡 4条 竪穴柱建物 6棟 溝跡 22条 土坑 48基 小穴 213基	須恵系・土師系、刀子、砥石 近世陶器	
砂田瀧	集落	縄文時代 中・近世以降 時期不明	井戸 土坑 2基 1基 竪穴遺構 2基 井戸 3基 土坑 50基 溝跡 33条 小穴 14基	縄文土器 陶磁器	近世の集落か

要約	砂田姥沼遺跡は、田川の東岸で、「中島谷田」と「無名瀬川」の狭い谷に面する低台地上に立地する。縄文土器は井草式が多い、弥生後期が遺構外で出土。集落は東谷・中島地区で最も古い古墳時代前期の竪穴建物跡が2軒ある。このうち、1軒からは土師器と二軒屋式土器の共存が確認されている。古墳時代中～後期にかけて竪穴建物跡が27軒ある。1区では一辺約10m四方の方形周溝遺構を調査。 奈良・平安時代では3軒の竪穴建物跡を調査。2区・3区では古墳時代終末期～奈良時代にかけての流路に伴う通路状遺構を5基調査。
----	--

東谷・中島地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査報告書一覧

1「磯岡遺跡（1区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第229集	1999（平成11）年3月
2「砂田遺跡（1区・2区・3区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第265集	2002（平成14）年3月
3「推定東山道関連地区（権現山遺跡SG1区・杉村遺跡SG1区・磯岡北遺跡SG3区・SG4区・SG6区・SG7区・SG8区・SG11区・SG12区・SG13区・SG14区・西刑部西原遺跡2区・6区・7区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第274集	2003（平成15）年3月
4「琴平塚古墳群（西刑部西原遺跡1・2・6区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第283集	2004（平成16）年3月
5「立野遺跡」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第290集	2005（平成17）年3月
6「磯岡遺跡（2区～7区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第292集	2005（平成17）年6月
7「磯岡北古墳群（磯岡北遺跡SG12区・SG16～18区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第299集	2006（平成18）年3月
8「砂田遺跡（4～6・18・19・23・24区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第305集	2007（平成19）年3月
9「中島笹塚古墳群・中島笹塚遺跡遺跡（1～8区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第311集	2008（平成20）年3月
10「権現山遺跡北部（2～4区・SG1区）・杉村遺跡（GN1区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第331集	2010（平成22）年3月
11「砂田姥沼遺跡（1～3区）・砂田瀧遺跡（1～3区）」	栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第337集	2011（平成23）年3月

栃木県埋蔵文化財調査報告第337集

東谷・中島地区遺跡群 11
砂田姥沼遺跡（1～3区）・砂田瀧遺跡（1～3区）

—都市再生機構による東谷・中島土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

発行 栃 木 県 教 育 委 員 会

宇都宮市塩田1-1-20

T E L 028 (623) 3425

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町1-8

T E L 028 (643) 1011

平成23年3月30日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫 474 番地

T E L 0285 (44) 8441

印刷 下野印刷株式会社
